

銀色の水平線～舞鶴鎮
守府の少年たち～

パツ矢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

舞鶴鎮守府へ着任することとなった少年・島田。クラクストンからの熱いアタックから始まり、動揺しながらも、彼には成し遂げなければならない目的があった。これは、クラクストンや仲間たちに支えられながら、自分の目的のために突き進む彼の物語である。

※実在の人物・団体・組織などには一切関係ありません。

pixiv版↓ <https://www.pixiv.net/novel/series/1381026>

目次

000	：思い描いていた通りのあなた！	1
001	：島田、着任。	7
002	：目的	18
003	：横須賀鎮守府	29
004	：初出撃	40
005	：アルベルト・デイ・ジュツサーノ	52
006	：ジェルジンスキー	64
007	：大原少年と島田	76
008	：赤毛の少年と應瑞	88
009	：逃げ出しましょう！	99

010	：パスワードは僕の大切なもの	111
011	：目指せ、舞鶴！	123
012	：地下鉄	135
013	：傭兵と騎士	147
014	：敵艦隊発見！	161
015	：合流	173
016	：一発、殴らせろ！	185
017	：魚雷は二発	198
018	：本音が出るのは恥ずかしい	210
019	：帰還、舞鶴	222
020	：誓約への道のりは遠く	234

0 2 1	：岸尾とスミス	246
0 2 2	：誓約の意味	258
0 2 3	：乗り越える	270
0 2 4	：まさかの首領編成	282
0 2 5	：想定外と想定外	295
0 2 6	：十三号巡洋戦艦	307
0 2 7	：「好き」に対する強い思い	
319		
0 2 8	：変わり始まる気持ち	331
0 2 9	：全ては母親のために	343
0 3 0	：求めて欲しい	355
0 3 1	：呉からの来訪者	367
0 3 2	：ゼヴィンと吉川	380

0 3 3	：嵐前の静けさ	392
0 3 4	：裏切りのアンダンテ	404
0 3 5	：ただでは引かない	416
0 3 6	：声も出ず求める助け	427
0 3 7	：too late	439
0 3 8	：悲しい忘却へ	451
0 3 9	：ゆめの世界	463
0 4 0	：お姫様と王子様	475
0 4 1	：ひとりの女の子として	487
0 4 2	：掘り起こされた記憶	499
0 4 3	：話せなかったこと	511
0 4 4	：Not Late!	524
0 4 5	：邪悪に一矢を	536

0 4 6	：初めて生まれる後悔	—	548
0 4 7	：敵陣へ：かと思いきや	—	560
0 4 8	：理不尽な八つ当たり	—	572
0 4 9	：待ち焦がれていた再会と		
584			
0 5 0	：生きてる世界が違う！	—	596
0 5 1	：全てはこちらの差し金	—	608
0 5 2	：7年越しの誓約	—	620
0 5 3	：イタリアからの協力者	—	632
0 5 4	：迎えた決戦の火蓋	—	644
0 5 5	：深海より産まれし戦艦	—	656
0 5 6	：絶対に戻ってくる！	—	668
0 5 7	：あなたはあなただけ	—	681
0 5 8	：そして、託される	—	693
0 5 9	：地獄の時間へ	—	705
0 6 0	：四面楚歌	—	717
0 6 1	：砲撃は大きく響く	—	729
0 6 2	：仲間とならば	—	741
0 6 3	：囀作戦	—	753
0 6 4	：魚雷に全てを託して	—	765
0 6 5	：終焉の日差し	—	778
0 6 6	：僕たちのこれから	—	790
0 6 7	：雲となり、雨となる	—	801
0 6 8	：何度でも、立ち上がる	—	813

000：思い描いていた通りのあなた！

—— 未来の私の司令官様。大きくなったら、あなたの「奥さん」になりたいです！

—— そんなどこかで聞いたような聞いたことがないような、可愛らしい少女の言葉がぼんやりと、この冴えない少年の脳裏で響いていた。

少年は黒縁のボストン型の眼鏡をかけ、垂れ目気味ながらも、猫目で、目つきが悪い琥珀色の瞳を誤魔化していた。純粋な黒髪は少し癖があるけれども、気にするほどではないものだ。

そんな冴えない少年は大体12歳前後ぐらいか。青年というには程遠い体格であるが、幼いと言うにしてもどうしても体格は大きい。大方、小学校高学年から中学生と推測するのが妥当であろう。

さて、今現在、そんな少年がいる場所といえば、京都府にある東舞鶴駅だ。彼は大きな赤いスツケースをガラガラと引き、駅の外へと出る。

彼の赤いスツケースの取手には、赤さとは対照的な深い青色のガラスのアクセサリーが飾られている。そのアクセサリーは一見すると普通のように見えるが、よく見ると、その球体の中に気泡が混じっており、色のほうも薄かったり、濃かったり、まだらである。こ

これらの特徴を併せ持つガラスといえば、琉球ガラス——つまり、沖縄で有名なガラスしかないであろう。

そう、彼は本州からの客ではなく、日本の南にある沖縄から、舞鶴にやってきたのだ。そして、春らしい温かな陽気に包まれながらも、彼は舞鶴のとある場所へと向かわなければならぬ。

スマートフォンを右片手で操作し、周辺の地図を画面上に表示した。

(迎えは来るとは言われてるけど、一体誰が来るんさー。大方、鎮守府所属の提督ではあるだろうけど……)

そう、一応目的の場所から派遣されて迎えが来るのだけは分かっていた。しかし、その迎えにやってくる人物が一切不明であり、少年としては不安であった。もし悪い人だったりしたらどうしようとか、もし話の通じない人だったらどうしようとか、挙げ句の果てに人ではない何かが来たらどうしようとか、そんな余計なことばかり、少年の頭の中を駆け巡った。

しかし——そんな彼の予想を斜め上に大きく上回るのが、この世界である。

少年は駅前にある自販機で何か水を飲むと、ICカードを手にして、そちらへと向かった。水自体は伊丹空港に着いた時点で500mLのペットボトル二本は確保していたものの、そのどちらでもモノレールやら電車やら乗っている間になくなってしまっ

た。

そうして彼が自販機の前に立ち、飲み物を吟味している間に、それは起こる。

彼は自販機でどれにしようか眺めている間、神妙な顔付きで考え事をしていた。

（僕が面接で啖呵なんか切らなければ、本当は呉か横須賀に配属されていたはずだけど……よく分からない出来たての泊地とかに飛ばされなかつたのが幸いかな。影響力を考えると呉や横須賀の方が良いんだろうが、舞鶴ほどの鎮守府に所属できれば、こちらの立ち回りもより楽になる。それに――）

彼の脳裏に浮かんだものは、こちらを冷徹な目で見てくる面接官の姿であった。

自分の担当をした面接官は、こちらが年端もいかない少年であることを良いことに、通常では考えられない圧迫面接をしてきた。少年で試験を受けること自体本来は避けるべき案件だが、彼の兵学校での成績「だけ」は、その試験を受けるに値するものであると評価され、教師たちの推薦で受けたようなものだ。

――しかし。

（ガキンちよつてだけで、あそこまで言われるなんてなあ。やっぱり、「あの噂」は本当だったみたいだ）

少年がため息を吐きながら、麦茶のペットボトルを選ぼうとした瞬間だった。

「司令官様、麦茶ならすでに用意してありますよ」

「ああ、ありがとう。丁度飲もうとして——えっ？」

少年は自然にそれを受け取ろうと手を差し出したが、その瞬間、「彼女」の存在に気がついて、麦茶を受け取ると同時に、そちらへと顔を向けた。

そこにいたのは――。

(ひ、ヒイ……美少女……)

そう、自分なんか横に立つには恐縮にもほどがある、銀髪の美少女だった。

美少女は背丈や見た目の年齢は、大体こちらと同じぐらい。

セーラー服型のワンピースを着用し、尻の下まで伸びた銀髪を、髪の毛の真ん中付近で軽く結んでいた。青くてくりっとした可愛らしい瞳もまた、彼女の可愛らしさに拍車を掛けていた。頭の上には垂れた猫耳のアクセサリーが装着され、スカートの後ろからも、猫の尻尾らしきものが伸びていた。

そして、なによりも、

(……おっぱいでっか！)

そう、自分とそう背丈が変わらない少女なのにも関わらず、体の発育具合は非常に良かった。服の上からでも分かるぐらい大きいのに、胸の下をベルトだかりボンだかで引き締めているため、余計に目立つ。

(こ、こんな二次元的美少女が、僕に麦茶をくれるなんて……しかも、僕を司令官様って

……ん？ あれ？

「司令官、様……？」

少年は浮かれ気味だったが、すぐに冷静を取り戻して、彼女へと目を向ける。

少女は嬉しそうに少年の姿をジッと見ながら、言った。

「はいっ。今日から私はあなたのものですよ、司令官様っ！」

「ぼ、僕のもの!? いくらなんでも飛ばしすぎでしょ！」

「……え？ あ、自己紹介！」

少女は失敗失敗、と、仕切り直して、その場で右手を上げて敬礼した。

「私は『リトル・ビーバーズ』中隊所属のDD-571——クラクストンと申します！」

あなたをお迎えに上がるために、舞鶴鎮守府よりやってまいりました！ それにしても

……司令官様、やはりあなたは私が思い描いていた通りの人……すごく凛々しく成長し

ましたね！」

しかし、敬礼という様式美も、言葉の後半になった途端すぐに崩れ、美少女・クラク

ストンは少年へと抱き付いた。

少年は突然の展開に、クラクストンを引き剥がそうにも引き剥がすことができず、動

揺するばかりであった。とはいえ、この状況、女に縁がなかった少年にとつて、非常に

天国であった。女子特有の甘い良い匂いに、自分の胸元に伝わる、相手の豊満なバスト

の感触。それだけでも、ここに来た甲斐があつたというものだ、

少年は涎を垂らしながら、ニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「こ、こんな子が僕を出迎えてくれたなんて……おっぱいの感触も最高だし、こんなこと言われたらゴールインするしかないよなあ……あー、舞鶴来て良かった！」

しかし、その一方で、少年は我に返ると同時に、クラクストンの言葉が気になつて、声を出した。

「せ、成長したつて……なんか、僕のこと、昔から知つてる……みたい、な……」

「……覚えてませんか？」

クラクストンはきよとんと首を傾げながら、少年から離れた。

「私と司令官様は、とても昔に知り合つてるんですよ？　もしかして……覚えていらつしやらない？」

「う……ごめんなさい。昔のことは結構記憶から抜け落ちてるみたいで」

「いいえ、良いんですよ。こうして私の隣にいただけでも、幸せです」

そう言っている彼女の表情はどこか寂しそうであつた。

少年は、クラクストンのそんな表情に胸を痛めながら、その名前の響きに懐かしさを覚えていた。

（クラクストン……どこかで聞いたことあるけど、思い出せないんだよな）

001：島田、着任。

「島田、ただいま舞鶴鎮守府へと着任しました。よろしくお願ひします」

少年改め島田は、目の前にいる黒髪の青年に向けて敬礼した。

島田がクラクストンに案内されてやってきたのは、舞鶴鎮守府——かつて、大日本帝国海軍が使用していた京都府の港に存在する機関のひとつであった。舞鶴鎮守府は何かと他の鎮守府よりも優先順位が低いことが多く、ワシントン条約の時には、要港部へと格下げされていた。しかし、条約が切れた際には鎮守府として復活し、その後は第二次世界大戦終結まで、鎮守府としての役割を全うした。

そして、島田は、若干12歳という年齢でありながら——この舞鶴鎮守府の提督へと任命されたのである。

提督と言っても、いきなりひとりで鎮守府を経営するわけでもなく、ちゃんと成人している提督と一緒に経営し、勉強するというのが目的にある。ひとりの提督としての自立はもう少し先になりそうであるものの、こうして着任できるのは島田にとっては大きくプラスに動くに違いないであろう。

島田は執務室の中で敬礼しながら、相手の青年提督について分析していた。

（見た目はとにかく好青年。メールでやりとりする限りでは信用に値する人物だと思うけど、賢明すぎて少し心配になる人なんだよな。頑張りすぎて倒れなければいいけど）と、島田が思っている間にも、青年提督はこちらに話しかける。

「ようこそ、島田くん。俺は舞鶴鎮守府所属の倉竹。手は楽にしていいよ」
「はい、ありがとうございます」

島田は相手から言われた通り、手を下げる。

青年・倉竹は、島田に向けて笑みを浮かべながら言う。

「島田くん、沖繩から遙々……うん、よくここまで来てくれたね。ここは君の城と言うわけには行かないけど、実家みたいに思ってくれていいよ。学校では学べなかつたことも、ここで学ぶと良い。俺にそういうことが出来るかどうかは、分からないけどね」
「いえ、その気遣いだけでも充分ありがたいです」

倉竹は、「うん」と小さく頷くと、また言葉を続けた。

「君の部屋についてはクラクストンが連れて行きたい、と言っていたから、それでも構わないかな？　こちらもちよつと忙しくてね。詳しいことは明日以降になりそうだね」

「大丈夫です。じゃあ、簡素な挨拶ながら、僕はここで失礼させていただきます」

「うん。改めて、今後ともよろしくね」

島田はペコリと一度会釈して、執務室の外へと出た。

そして、扉の傍で待つていたのは、彼をここまで案内してくれたクラクストンの姿であった。クラクストンは島田の姿を見るなり、満面の笑みを浮かべ、こちらへと歩み寄った。

「司令官様ツ、お疲れ様です。お話は終わりましたか？」

「う、うん……」

（ヒイ……やっぱり可愛いなあ。なんで僕がここまで好かれてるのは分からないけど！）

理由は不明であれど、島田にとつては悪いことではない。

島田は見た目通り、と言うには、少し横暴過ぎるかもしれないが、これまで女性と縁がない世界で育ってきており、本人も女性慣れはしていない。事務的にやりとりするのであれば、コミュニケーションは困難ではないが、私用となれば言葉は詰まりがちになる。それは、クラクストン相手でも例外ではない。

ゆえに、こうして自分に好意を持って話しかけてくれる女子に対し、調子に乗つてしまふのが島田なのである。

そして、

（「味方」は多ければ多いほど良い。彼女のことは詳しくは知らないが、互いに信頼に値するのであれば、彼女の望み通り関係を持ちたい。けど……その前に、ちゃんと話さな

きや)

島田がそうして顔を上げた途端、クラクストンが島田の右腕を掴み、歩き出した。

「では、これから私と司令官様の愛の巣に案内いたしますね！」

「あ、愛の巣……?」

「はい！」

クラクストンは満面の笑みで頷き、さりとて言う。

「私の大好きな司令官様と共に、ゆーつくり過ごせる場所です！ 司令官様も私と一緒に

が良いですよね？」

「え……あ……えつと」

（さすがに年頃の男女が一緒に部屋はまずい……けど、まあ、ベッドが分けられていれば良いかな）

これも彼女と親睦を深めるには必要なことであると、島田が話を合わせようと口を開いた時だった。

「うふふ、実はこっそり発注してダブルベッドにしてもらったんですよ！ 司令官様だって男の人なんだから、私もそういうことに答えられる位置にいた方が都合がいいでしょう?」

「ダウトオ——ッ！」

島田は、クラクストンの言葉を聞いた瞬間、すぐに彼女が絡み付いている腕を力づくで剥がし、後ろへと退いた。

「君は何を企んでるんだ！ 色仕掛けで僕を腑抜けにするつもりか！」

「あら」

クラクストンは島田に何言われても動じないと言わんばかりに、微笑んだ。

「企んでるも何も、私たちの愛は行動で示さなきゃいけないんですから、このぐらい当然でしょう？ それとも、司令官様は私と一緒にいるのが嫌ですか？」

「嫌とかそういう問題じゃなくて！」

島田は続ける。

「その……出会い頭でいきなりそういうことをするのは、いろいろ良くない！ もし僕が下衆でひどい男だったら、どうするつもりだったんだ！ その手の男、この界限にたくさんいるんだぞ！」

「司令官様、言いましたよね？ 私と司令官様は昔、一度会ってるんですよ？」

と、クラクストンは続け、

「その時からずっと司令官様に全てを捧げるつもりでいますよ？ だって、司令官様は私の思い描いていた人なんですもの、ひどい人だなんてことは絶対ありません」

「……」

(なんて真っ直ぐな目だ……)

島田はそのクラクストンの真っ直ぐな瞳から、つい、目線を逸らしたくなった。

(……本当に昔、出会っていたとすれば、僕はなんでこんな可愛いと子との思い出を忘れて
いるんだろう。ここまで印象深い子なら、思い出せないはずなのに)

クラクストンの言っていることは、多分本当だろう。実際、クラクストンという名前の響きは、昔どこかで聞いたことがあり、耳障りは非常に良い。彼女の声もどこかで聞いたことがあるような気がする。しかし、それでも島田は思い出すことができな
いのだ。もう少しのところでは何か邪魔して、こちらの記憶を掘り返すのを邪魔するのである。

島田は、体の横でギュツと手を握り締めて、言う。

「クラクストン。君の気持ちはよくわかった。でも、僕はその時のことをどうしても思
い出せないし、君の思っているようなことは……」

「大丈夫ですよ、司令官様！」

クラクストンにはこやかに言う。

「その気になつたらいつでも言ってくださいね！ 私、その日を待っていますから！」

「あ……う、うん……」

(それで良いけど、そうじゃないんだよ……！)

島田は、心の中で頭を抱え、額に脂汗を流した。

彼女は完全に自分と両思いのつもりで接しており、こちらの深い事情は考えていないようだ。

(……まあ)

彼女のためにも、「その日」はきつと来ると——少しは信じてみたかった。

島田の部屋は鎮守府の隅の方に配置されていた。扉を開くと、執務室っぽく机と椅子が置かれており、ベッドは部屋の横の方へと置かれていた。もちろん、クラクストンが発注した通り、それはダブルベッドであった。

島田は荷物を適当な場所へと置き、部屋の中にある箆笥やクローゼットの中身にも目を通した。中身は空っぽであり、倉竹が着任してからも一切使われていないであろうことが見て取れる。

クラクストンは部屋の中を観察する島田に対し、言う。

「お風呂などは隣にありますので、そこを使ってください。食事は食堂があるので、後で案内致しますね」

「ああ、ありがとう……」

(こうして見ると、普通の世話焼きの女の子なんだけどなあ……)

クラクストーンはとびきりに可愛らしい女子であり、その見解は変わらない。しかし、彼女は非常に押しが強い。

(喜ぶのは良いけど、少し警戒すべきだな……敵とか味方云々じゃなくて、純粹に貞操が危ない)

島田としてはクラクストーンがこちらへ好意を寄せているのは問題ではない。クラクストーンがこちらに対する好意を、一切隠してないどころか、壁を乗り越えてきそうなのが問題なのである。自分もその辺ノリが良ければ、さして問題は——まあ、それもそれで問題はあろう。

さて、それはそれとして。

(……いやあ、本当に耐えられる気がしないなあ。こんな男にくつつきたがるなんて、ちよつと無防備でもあるよなあ)

島田はひっそりと、クラクストーンに見えない位置からニヤニヤと笑みを浮かべていた。

貞操こそ奪われるのは抵抗があるものの、それはクラクストーンが一方的に奪うことに対してであり、ちゃんとムードを作つて肌を重ねるのであれば、島田はそれで良いのである。同時に、島田もクラクストーンからの熱いアタックにいつまで耐えられるか、我ながら見ものである。

(クラクストン……いや、クラたん。こんな男に引つ付きまくつてるのを後で後悔するが良い。なんたつて、僕も溜まるからね！)

——まあ、島田にそんな度胸があるかどうかはこの際置いておくべきなのだろう。

しかし、彼女とそういう関係になる前に、クラクストンには自分のことを把握してもらわねばならない。

(……言うのは抵抗はあるけれど、言わなきゃ)

島田は改めてクラクストンへと顔を向け、言う。

「クラクストン。もし、君が僕の秘書艦をやるつもりなら……僕は君に言わなきゃいけないことがある」

「はい、なんででしょうか?」

クラクストンはキョトンと首を傾げながら、島田を見た。

島田は頷いて、続ける。

「……僕は、確かに提督を目指しにここに来た。家柄なんて関係なく、自分の意思で、だ。ただ、提督になつたのは何も将来の夢物語の為だけじゃない」

島田は部屋の窓をギィツ、と開いて、そこから来る風を受けた。島田の髪の毛がその風に靡き揺れ、その琥珀色の瞳は、眼鏡越しにクラクストンのことを真つ直ぐに見つめていた。

島田は窓のサッシに自分の両肘を置き、寄り掛かった。

「この世界は、少年の歳で提督になることを受け付けているだろうか？ 実際、僕が提督になつてゐるわけだけど」

と、

「ただ……一方で、少年提督に対する排斥運動が高まつているのも知つてるかい？」

「あ……少し聞いたことがあります。元々は大人の職業だから、子供が奪うなど」

「そうだ」

島田はクラクストンの解説通りだと、首を縦に振つた。

さて、この世界は——いろんな国に存在していた艦船たちが、少女の姿となつて現れている。それは近代現代、時代問わず。除籍済みか、現存かどうかとも問わない。そこに魂さえあれば、記憶を持ったまま少女になれるのである。

その少女たちを、島田たち提督は「戦艦少女」と呼んでいる。

そして、その姿は成人済みから小学生ほどの女子の姿など、年齢すらも問わない。

そこで生まれたのが——少年提督という需要である。

戦艦や正規空母など、大型艦種はある程度の妙齡の女性として生まれてくる一方で、幼い姿や小中学生の女兒として生まれやすいのが、駆逐艦や砲艦、潜水艦と言つた小型艦種である。意識としてはちゃんと艦歴通りなのであるが、その意識は少女らしくなつ

ている者が大半であり、接しやすさの度合いでいえば、若年の男児たちの需要が非常に高いのである。この需要により、大本営は提督になれる最低年齢を12歳程度まで一気に引き下げ、同時に、兵学校に入れる年齢も6歳という引き下げも行われている。

しかし、界限のその体制に対し、反感を抱く提督たちも少なくはなく、その提督たちの邪魔により、制度の方も少年提督に対して不利なままとなっている。

島田は続ける。

「僕は、その排斥運動に対して対抗手段を得るために、提督になったんだ。兵学校でも上の人たちから好かれなくて、舞鶴に来るのだからやつとだつたんだ」

「司令官様……」

「それに、目的はそれだけじゃない」

島田はそう言うと、シャツの胸ポケットから一枚の写真を取り出した。

そこに写し出されているのは、島田と同じぐらいの少年。しかし、見た目の方は地味な彼とは正反対だ。肌の色はこれでもかと白く、銀色の綺麗な髪の毛を持ち、紫色の目を持った、容姿端麗な少年。こんな少年が近くにいたら、誰もが振り返るであろう。

島田はその写真をクラクストンに見せつけながら、告げた。

「そして……いつが——その排斥運動で煽りを入れて、とんでもないことをしている馬鹿だ」

002 : 目的

島田が兵学校でどれだけ冷遇されていたか——というところ、少年であることよりも、本人の人間性と学校の方向性の相違の方がまずは大きいであろう。

島田の通っていた学校は東日本にあり、沖繩に実家を構えている彼は寮通いであった。

彼は見た目通り至って真面目であるものの、真面目だからこそ物事ははつきりと発言し、物事をはつきり発言するからこそ、自分の考えを強く主張した。その島田の態度は、他の提督志望である少年たちの心を強く惹きつけ、島田は彼らにとつての唯一の希望となっていた（彼のこの性質は、対女性には適用されないようだが）。

しかし、島田の学校の方向性はこうである。「少年には強い意思は必要ない、必要なのは忠誠心のみ」と——この信条に則り、少年たちを冷遇してきた彼らにとつて、島田は厄介な存在であつたのだ。そして、島田は成績自体は相当良好な方で、本来ならば彼が首席に登り詰めていたはずだつた。

——そう、お察しの通り、彼は兵学校で疎まれていたがゆえに、首席を乗り逃していたのである。

少年の候補生に必要なものをすべて取り揃えていた島田は、あまりにも都合が悪かった。そして、兵学校では島田を気に入らない教師により、試験の点数操作か幾度となく行われた。

誤字で点数を減らす、文字が読めなくて採点ができない、なんてものはいい。模範解答通りの記述式の解答に対し、文字の大きさにいちいち難癖を付けたり、数学では十の文字が汚いなど——とにかく、一般的な学校から見ても圧倒的におかしい点数の操作が行われた。

島田も、その難癖を全て潰そうとしたが、それもまたいたちごっこでしかなく、結局、最後までその点数操作は改善されなかった。

難癖を付けられないように、そして、誰から見ても完璧であろうとしたがために、島田の心はすっかり疲弊し切っていた。本来なら提督試験も受けるべきではない精神状態であったが、それでもなお、意地悪く立ち上がったのは、これらを指示していると言われている少年の存在であった。

彼は島田と同級生であったが、別のクラスであった。故に、深い関わりない。しかし、調べてみれば、彼は少年提督の排斥運動にかなり強い煽りを入れていた。そして、島田の人柄を知っている彼は、島田を排除しようと試みたのだ。つまり、彼にとつて、島田はかなり都合が悪い存在だったのである。

彼も少年なのに何故、こんなことをしているのか、そしてこの排斥運動を煽っているか定かではないが、島田はこれ以上屈するわけには行かないと再び立ち上がり、なんとか舞鶴鎮守府への着任の切符を手にしたのであった。

一切電気をつけてない部屋の中で、差し込んでくるのは窓から入ってくる太陽の光だ。島田はそれを背に、逆光に晒されながら、クラクストンに見せつけていた写真を下ろした。

薄暗い昼間の部屋の中で、島田は続ける。

「僕が何も知らなければ、コイツはただの同級生に過ぎない奴だ。でも、僕はコイツの正体を知っている。だから、僕は血反吐を吐いても提督になった」

島田はサッシから離れて、クラクストンに歩み寄る。

「クラクストン……申し訳ないけど、君のことは利用させてもらうつもりでいる。戦艦少女たちは提督の好意の度合いによって能力が変わるのは知ってるだろう？ なら、こちらの目的のためには、それを利用しない手はないのさ」

「……」

「……君は僕のことを、『思い描いていた通りの人』って言っていたけど、僕は君が思い描いてるような奴じゃない。そして、僕は互いに信頼に足ると思わなければ、君と例の

契約はできない。まあ、その日が来ないのは僕だつて望まないことじゃないけど……今すぐには無理だ」

「司令官様」

クラクストンのその声に反応して、島田は顔を上げた。クラクストンはニコリと優しく笑みを浮かべて、言う。

「司令官様は、私の思い描いていた通りの人です。あなたはあの時から……なんら変わってません」

彼女は、はつきりと、言い放った。

島田は目を丸くしてクラクストンを見つめていたが、すぐに我を取り戻して、言葉を返した。

「……いや、昔から変わったと思ってるよ、僕自身は。少なくとも、昔はこんな考えじゃなかった」

と、

「でも、君がそう言うなら……僕は昔から変わってないのかもしれないね」

「ええ、そうですよ！」

クラクストンは頷く。

「予め私を利用すると言った時点で、あなたは冷酷な人ではないんです。本当に根つか

らその考えならば、そもそも伝えることすらしませんもの。こういうのって、言動の端々から出るんですよ?」

「……!」

「だから、あなたが何と言おうとも、私はあなたを信じています。だって、私が思い描いていた通りの方なんですもの、何があっても悪い人ではないはずなんです」

「……」

(こりや参った、彼女に一本取られたようだ)

島田はわしやわしやと自分の頭を掻きながら、相手がこちらを強く信頼していることに対して、照れと恥ずかしさを覚えた。島田としては、これでクラクストンが離れても文句言えないものだと思っていたが、実際は離れる気はない相手に、感心を覚えてしまっただけだった。

島田はコホン、と一回咳払いして、目の前の彼女に言った。

「そこまで言うなら、僕の背中には預けるよ。今の僕には、そこまで言ってくれる人が必要だろうからね。信頼は時間を掛けて築き上げるもんだと思ってるけど、君に関しては……」

「昔一度出会ってるんですから、築き上げるも何もありません。私は昔からずーとあなたのことを信頼してます。何があっても、私は司令官様の味方です」

「……………！ ああ……………ありがとう」

島田はクラクストンのその言葉に目を丸くしてから、再び、いつも通りの調子で言い放った。

「じゃあ、クラクストーン。改めて、これからよろしく頼むよ。こんな男で良ければ仲良くしてやってくれ」

「はいっ、司令官様」

お互い微笑んでいる中で、島田の心中は大変騒がしかった。

（い、いやあ……………とんでもなく上から目線で言っちゃったけど、クラたんがそこまで言うてくれるんだし、僕も頑張るしかないよね〜！ いや〜、こんなギャルゲーみたいな展開が僕に訪れるなんて全然思わなかったよ！ ウヒョー！）

——そろそろ島田の本来の姿を隠し切るのも厳しくなってきたので、はつきり言っておこう。

この島田、努力家かつ優秀なのも彼の本来の姿のひとつなのだが、さらにその中には「オタク」という姿が、表に出されることなく、ずっと奥深くに隠れている。

特に島田はネットの匿名掲示板などに融通している方のオタクであり、ある意味でどうしようもないクラスにまで達しつつある。彼が匿名掲示板に出会ったきっかけは、数年前に一度学校の評価を下げるために、スレッドに事実を書き連ねてやろうという口ク

でもない動機であった。しかし、島田はそこから匿名掲示板の面白さや、恐ろしさに目覚めつつ、情報収集にも使うようになっていった。

今回、排除運動の煽りについても匿名掲示板で探りを入れており、ある意味、匿名掲示板が無ければ、自分を奮い立たせることは出来なかつたであろう。

島田は表面上ではクールに振る舞いつつ、内面ではかなり生き生きと彼女の好意を受け入れてるわけである。

（クラたんまじ天使！ もつとデレデレしたいけど、ある程度ツンツンに振る舞ってる方が落ち着くんだ、ごめんねクラたん！ ……しかし）

と、唐突に冷静になるのも島田の特徴である。

島田はダブルベッドを見て、額に青筋を浮かべた。

（彼女の想いを受け入れる方向性であつたとしても、初っ端からこの展開は僕には厳しいぞ。童貞だのなんだの置いといても、男女一緒の寝床なんて、いくらなんでも想定範囲外だ。どう誤魔化し、これから乗り切るべきか——ちゃんと考えなきゃ）

しかし、島田のそんな考えとは裏腹に、クラクストンは笑顔で近付いてくる。

「あら、司令官様。もしかして……前向きに検討なさつてくれるのですか？」

「前向きに……って、何言つてるんだ、君は！ さっきも言つただろ、今すぐできることじゃないって！」

「ふふ、顔が真っ赤ですわよ？ 司令官様」

「う……」

島田はクラクストンに指摘されて、熱を帯びた頬へと片手を置いて、触れた。

自分の何が彼女をそうさせるのか——は、彼女に聞いても無駄であろうし、あえて聞くことはないものの、少なくとも一定以上の距離を取って欲しいのは、今の島田の一番の願いであった。好意を抱くのは良いし、自分も受け入れるが、それであっても、この距離感を受け入れ難い。

クラクストンは腕を組み、その胸元に島田の腕を当てた。

「ねえ、司令官様？ 私、ひとりで寝るの少し怖いんですよ？ でも、司令官様がいたら、怖くないと思うんです。だから……一緒に寝ることぐらい許してくださいね？」

「あ……う……」

島田はもはや何も言えなくなった。

一緒に寝るぐらいなら——とは思うものの、島田の理性がそれを邪魔して、素直に頷くことができない。気持ち悪い自分が「求められてんだ、やつちまえ！」と脳内で煽ってくるが、島田はそれを首を横に振り、とにかく、無視。

（あのチビ助がここにいたのなら、やれつて言つてくるだろうが……生憎様、そんな度胸、僕には無いんだよなあ）

兵学校時代、自分と仲良くしてくれた友人のひとりのことを思い出しながら、心の中で苦笑する。

(本来なら女の子相手でも、事務的に乗り切れるはずなのになあ……)

彼はクラクストン相手になると、そういうことができなくなってしまう。これも彼女が言っている、「自分と島田は昔、出会っている」ということが起因しているのだろう。島田の記憶には残ってはいないと思われるものの、その閉ざされた根っこの記憶には刻まれており、それが島田を事務的な接し方にさせてくれないのである。

島田は、こちらを掴んでくる彼女の腕をなんとか振り切り、言う。

「あつ……司令官様」

「クラクストン。……何度でも言うけど、そういうのは良くない。いや、君は良くても、僕は良くない。頼んだものは仕方ないから使うべきではあるけど、今日のうちに別のベッドをもう一つ手配させてもらうよ。一緒にいるってだけなら、同じ部屋で寝ればいいだけの話だ。君もそう思うだろう？ クラクストン」

「……司令官様は、乙女心を分かってくれないのですね」

クラクストンはぶく、と頬を膨らませて、上目遣いで島田を見る。

「分かりました。司令官様がそんなに言うのなら従います。でも」と、

「今日の夜は一緒のベッドでお願いしますね？ 司令官様の寝るところ、無いんですから」

「……ああ、それは不承不承了解するよ。できれば僕だけ別の場所に行くとかの方がいいけど、それは君が許してくれなさそうだしな」

「当たり前ですつ」

と、クラクストンは今日は一緒のベッドと聞くなり、顔色をパツと変えて、言葉を続ける。

「私と司令官様はこれからずーっと一緒にいなきやいけないんですから、別の部屋でなんて嫌ですよ。あつ、でも」

クラクストンはふと気付いたことがあったようで、それを口にした。

「リトル・ビーバースのみんなと集まったりすることがあるので、それは許してください」

「ああ、それは構わないよ。艦隊の士気に関わることなんだし、たまにはお互いの時間を過ごした方がいい」

クラクストンが言うリトル・ビーバースとは——アメリカ海軍第23駆逐隊の愛称である。

メンバーとしては、ここにいるクラクストンを始めとして、ダイソン、コンバース、

サツチャー、チャールズ・オースバーン——現時点では、この5人が戦艦少女として存在できているのは確認できている。他にも、フートやスペインス、オーリックの3人がいるが、こちらは戦艦少女としての確認は出来ていないままであり、いつ発見されるかが期待されている。

島田の言葉に、クラクストンはホツとして笑みを浮かべる。

「ありがとうございます、司令官様。でも、寂しくなったらいつでも連絡下さいね。駆け付けますから」

「ああ……うん、どうも」

（少しオーバーな気はするけど……それも彼女の個性か）

あくまでも、クラクストンは司令官である島田が第一、といった感じだろう。

島田からすれば、そんなクラクストンはある意味頼もしくもあり、こちらへの愛情が少し重く感じる。ただ、そんな彼女をどう受け止めるかは、島田次第といったところだろう。

（何がともあれ……彼女が一緒のうちは僕も大丈夫なのかもしれないな）

クラクストンさえ一緒ならば、自分はなんとか保てるのかもしれない——島田は心の奥底からそう思えた。

003：横須賀鎮守府

神奈川県、横須賀鎮守府。

この世界においては、ほぼトップクラスの鎮守府であり、戦艦少女たちの大半や、一部の提督たちもここから派遣されていることがしばしばある。また、大本営との繋がりも恐ろしいほどに強く、横須賀鎮守府で何かをやらかしてしまえば、提督としての人生も最期、と言われるぐらいの地位の高さを持つ。

そんなトップクラスの鎮守府なのだから、そこにいる提督たちもさぞかしお偉いさんばかり——というわけでもなく、普通に壮年の男性から少年まで、幅広い年代の提督が着任している。

しかし、そんな幅広い年代の提督が所属している中で、突飛して優秀な少年が、今年、着任してきたのである。

だが、彼は純粋な日本人ではなく、ロシア人の父親の血が色濃く出た、混血児であった。髪の毛は綺麗な銀色で、昔から「あいの子」だのなんだの言われ、周りからはずっと舐められてきた。しかし、兵学校に入ってから、それらをすべて跳ね返す成績で、トップクラスにまで上り詰め、この世界でも地位が高い横須賀鎮守府へと着任すること

ができた。

——そう、彼こそが、島田を蹴落とし、兵学校の首席に上り詰めた少年であった。

そんな彼の執務室の中で、とある軽巡洋艦の戦艦少女の声が響く。

「私を雇うぐらいだから、どんな人なのかと思つたら……こんなに可愛い男の子なんてね」

彼女はグラマーな体を持っているのに反して、その可愛らしい口でクスクスと面白そうに、子供のような笑みを浮かべてみせた。

彼女は普通の金髪よりも色素が落ち着いているブロンドの髪の毛を、後頭部で二つに分けて結い、その頭頂部には緑色のカチューシャをつけている。胸の下を締め付けるような黒い軍服を着ているが、下半身は野ざらしにしていると言わんばかりに極めて露出度が高く、ショートパンツの丈は股間に近い位置で、サイズが少し小さいのか食い込み気味である。目の色と同じ朱色のマントを右肩にまといつているのも、なかなか特徴的であらう。

そんな彼女は改めて、目の前の少年に敬礼した。

「私の名前は、アルベルト・ディ・ジュッサーノ。ジュッサーノでいいよ。今日から貴方が私のアンミラーリオってことでもいい？」

「ああ、ボクが今日から君のアンミラーリオだよ、ジュッサーノ」

少年は、ジュッサーノの言葉に頷く。

「ボクはこの界限じゃ、ゼヴィンって名乗ってるから、その認識でお願いするね」

「うん、分かったよ」

ジュッサーノは頷き、

「ところで、あなた、まだ着任したばかりなんだって？ そんな中で私を雇うなんて、面

白い人ね。何が決定的な要素でもあった？」

「まあね」

ゼヴィンはニツと妖しく笑みを浮かべた。

「君なら……ボクのすることに面白い、って乗っかってくれそうな本性をしているのが

分かるからさ」

「ほ、本性？ なんのこと？」

「遠慮しなくていいよ。ボクと同じで、猫かぶるの得意なんですよ？ ……ジュッサー

ノ『お姉さん』？」

ゼヴィンは彼女の全てを何もかも見透かしたような瞳で、ジュッサーノの姿を見た。

ジュッサーノは、言葉を詰まらせて、ゼヴィンを見る。

「……あなたには、何もかもお見通しってこと？ アンミラーリオ。まさに類は友を呼

ぶってわけ？」

「ま、そういうことだね。ボクは横須賀鎮守府に媚び売って、兵学校で周りを蹴落としか来たようなもんだからさ」

「アンミラーリオ……あなた、想像以上に腹黒いじゃないの」

これには、さすがのジュツサーノも困惑して、引きつった笑みを浮かべる。

ジュツサーノは猫を被りつつ、他人をからかうのが好きという、周りからすれば少し困った性格をしている。ジュツサーノもそのことは多少なりとも自覚はしているように、ここまで意地が悪い戦艦少女は他にはいないと思っていた。

しかし——今度は提督側から、明らかに自分を上回ってそんな人材が来てしまった。

ただ、一方で、ジュツサーノは、ゼヴィンからは他の提督にはない、何かを感じた。

「……でも、そこまでするような人に雇われるってことは、私も捨てたもんじゃない」

ジュツサーノは笑みを浮かべる。

「そこまでするからには、その頭の中に面白い計画があるのでしょうか、アンミラーリオ？」

報酬次第でなんでもやるわよ」

「ああ……ボクの秘書艦になるなら、そうこなくっちゃあね」

ゼヴィンは、自分の目には狂いはなかったと言わんばかりにジュツサーノに笑みを返し、そのまま話を続ける。

「ジュツサーノなら、少年提督排斥運動については知ってるかな？」

「もちろん。ここには一年ぐらいいるからね」

「なら、話は早い。……ボクはね、運動に関しては、立場的には表面上では反対派ってことにしてる。でも、根っこでは賛成派に回ろうと思うんだ。だって、その方が面白いだろう？ 反対派を騙ってわざと賛成派を煽って、反対派を潰す。古き良き、海の戦場を維持するためには、その方が手っ取り早いと思わないかい？」

「へえ……なかなか面白そうだね。でも、私にできることはないんじゃない？ そういうのって、アンミラーリオがやるべきことなんですよ？」

「いや」

そんなことはない、と、ゼヴィンは首を横に振る。

「ボクにとつては非常に憎い男が、舞鶴鎮守府に着任するようでき。そいつはね、ボクがどう頑張つて蹴落としても、絶対に屈することなく、首席ギリギリにまで上り詰めてきたんだよ」

ゼヴィンは目の前のノートパソコンのスリープを切ると、そのままカタカタとキーボードを鳴らして、データを探し始めた。ジュッサーノはその画面を覗き込むために、ゼヴィンの後ろから、回り込んだ。

パソコンの画面に、とうとうその男の画像——島田の顔が映し出され、ジュッサーノはじっとそれを見つめた。

「……ふーん。貴方が敵視するぐらいだから、どんな子かと思ったら、見るからに冴えなさそうな男の子だね」

「見た目はね。でも……性格の方は相当諦めが悪くて、少し殴った程度じゃ倒れることすらないんだよ」

と、

「最初はみんな順調に士気を落として、このままボクがトップを独占するつもりだった。でも、コイツだけは違った。コイツのせいで、みんなの士気は再び戻ったし、少年間での平均も群を抜いて高くなった。それでも、ボクはなんとか蹴落としたけど……コイツは、こっちに迫ってきた」

ゼヴィンはジユツサーノへと目を向ける。

「ジユツサーノ。君には、これからコイツを再び蹴落とすために力を貸して欲しいんだ。他の子はいいい子すぎて、巻き込むのに抵抗があるから」

「それ、私が悪い人だっけ？ 私は優しい……なんて、あなたに言っても仕方ないよね」

ジユツサーノは自分に対して呆れるように笑みを浮かべて、ゼヴィンへと向き直る。

「いいよ、乗ってあげる。あつ、報酬はちゃんと弾んでよね。じゃないと、裏切っちゃうよ」

「分かつてるよ。君とはそういう契約つてことでいいんでしょ？　ボクが雇い主である以上、これからの命令には従つてもらうからね」

「当然。私はあなたと契約してるからね。他の仕事はちやーンと断るよ」

——そして、ジュツサーノとゼヴィンのコンビが出来上がった。

ジュツサーノの中では、からかうことが大好きな自分にゼヴィンが振り回される構図が出来上がっていた。けれども、現実はそのとは真逆で、自分がゼヴィンに振り回されそうだった。

——そして、そんなふたりの会話を扉越しに聞いていた少年の姿がひとつ。

少年はその手には蔵書を数冊抱えており、それらを持ち帰るついでに、この扉から聞こえてくる会話を聞いてしまったのだろう。

そして、その少年は、寝不足のごとく目つきが悪い。隈が薄らと目の下に浮き上がっており、普段から夜更かしをしているであろうことが側から見ても分かりやすい。黒い髪の毛伸びっぱなしで、前髪の一部に癖毛が出来ている。

そんな彼だが、周りの同年代よりも一足早くこの鎮守府に着任しており、そういう意味ではゼヴィンの先輩になるであろうといった感じであった。

そして、ジュツサーノとゼヴィンの会話を聞いて、額に青筋を浮かべた。

(え……もしかして……オレ、とんでもないこと聞いちゃった?)

彼はジュツサーノとゼヴィンの会話が、他愛無い日常会話へと移ると、そつとその場から離れた。そうしてしばらく歩いてから、その足を早める。

(オレは別の兵学校から来たから、向こうの事情は分からないけど……とにかくまずいことが起きようとしてるよね……ど、どうしよう)

ひとりで抱えるには、あまりにも重すぎる。かといって、鎮守府の中では自分と仲良くしてくれるような提督はおるか、戦艦少女すらいないし、どうしたものかと少年は悩んでいた。

(というか、排斥運動自体結構限定的な主張だし、いちいち煽りを入れる必要あるのかな……もしかして、事を大きくするのが目的?)

少年がぐるぐると頭の中を掻き回すように考えていると、周りの光景が見えていなかったようで、そのまま誰かと肩がぶつかってしまった。

「あっ」

「きやつ」

ぶつかつた、といつても、どちらかが転倒するほどのものではなく、本当に軽くぶつかっただけである。

しかし、他人との関わりに長けていない少年は、肩にぶつかつただけでもあわあわと困惑して、ぶつかつてしまった相手へと謝罪の言葉を投げた。

「す、すすす、すみません……あの……その」

「いえ、こちらこそそつて……あら？　もしかして、先日入ってきた司令官ですか？」

「うえつ？」

少年の耳の中に飛び込んできたのは、優しそうな、可愛らしい少女の声。思いもがけない展開に、少年はびっくりして思わず顔を上げた。

「あ……」

彼女は足の下の方まで伸びている紫がかった銀髪の長い髪の毛を、右耳の後ろ近辺にまとめ、左耳の後ろにも短めのテールを作っている。前髪は短く切られており、表情が非常に分かりやすかった。

彼女のおっとりとしている、穏やかな緑色の瞳に吸い込まれるように、少年は少女の姿をじっと見つめていた。

少女は少年に見つめられるなり、クスツと笑みを浮かべて、言う。

「名乗るのが遅れて申し訳ありません。私はタフィ3所属、フレッチャー級駆逐艦のホーエルです。あなたは？」

「えつ……あ……お、オレは……先日ここに着任した……吉川です。偽名ですけど……」

「そうですか。よろしくお願ひします」

と、ホーエルは優しく笑みを浮かべながら、

「その様子だと、秘書艦を任命していらつしやらないようですね。女の子は苦手とか?」
「う……まあ、そんな感じ、です……」

（そう、なんだよなあ……船に乗れると思つてたら、女の子だらけでびつくりしちゃったんだよね……）

この吉川少年は、純粋に船乗りに憧れてこの鎮守府にやってきたのだが、その周りを取り巻く環境があまりにも特殊すぎて驚愕した人物のひとりであった。今はそれなりに慣れてはいるが、自身が女子との関わりを持つのが苦手であるがゆえに、未だに秘書艦を任命できずにいる。

ホーエルは、「んー……」と吉川のことを吟味するようにまじまじとその姿を見つめ、それから再びニコツと笑みを浮かべて言った。

「だったら、私があなたの秘書艦になりましょうか。男の子ひとりでは大変なことが多いでしょうし、それに私がいれば後々楽になることもあると思いますよ」

「え……あ……いい、いいの? オレ……別に特別カッコいいとか……そんなんじゃないのに」

「そんなこと気にしたつて仕方ないですよ、司令官。それに、私、司令官みたいな人を放つておけないんです。相性が悪ければ解任してもらつてもいいですけど、そうじゃなかったら、あなたの下で働かせてください」

ホーエルはペコと軽くお辞儀をして、吉川へとそう言った。

(ど、どうしよう……)

吉川は、まさかこんなことを言われる日がくるとは思っておらず、内心非常に困惑していた。

しかし、吉川は駆逐艦の同年代ぐらいの彼女であれば、といった感情があった。戦艦や巡洋艦のお姉さんたちでも構わないところのだが、どうしても遠慮してしまつて、話づらいと勝手に思つていた。

ただ、ホーエルと一回言葉を交わしてみても、自分にしては珍しく、その遠慮を感じることはないかもしれない、と思つた。自分にしては言葉がすんなりと出てくるし、もしかすると彼女とならば――。

吉川は、言葉を一回詰まらせてから、言う。

「つ……あ……よ、よろしくお願いします。オレなんかで良かったら、秘書艦……頼みます」

「………ありがとうございます、司令官！」

ホーエルは顔を上げて、そのまま吉川に満面の笑みを浮かべた。

吉川はホーエルのその笑みを見て、トクン、と胸に打つものを感じつつも、そのまま彼女と共に自分の執務室へと足を向けた。

004：初出撃

翌朝、島田は顔から生気が抜けたような表情をしながら、室内にある洗面所で歯をガシヤガシヤと磨いていた。顔は全体的にポーツとしており、元からそこまでよくない目つきが、寝不足で出来たのであろう隈によつて、余計に強化されていた。島田はコップに貯めた水を口に含んで、ペツと水道へと吐き、口の中で泡立った歯磨き粉を流した。

歯磨きで使った道具を一通り洗い終えて、元あつた場所に戻すと、ふわあ、と、口元に手を当てながら欠伸をし、そのまま部屋の中へと戻つていった。

(やつべえ……全然眠れなかった……)

と、島田は額に青筋を浮かべながら、意気揚々と朝ご飯を用意しているクラクストンへと目を向けた。実はこの部屋、どうやら生活に困らない程度の設備はある程度揃つているようで、料理に使えるガスコンロや水道も設置されている。さすがに夕食などは食堂の方が安定してたくさん食べられるが、朝食や昼食などはこの部屋でも十分であった。

島田はベッドへと向かいながら、頭を抱える。

(隣に女の子が寝てるってだけでも、緊張して寝付けないものなんだな……またひとつ、

賢くなったよ……)

そう、島田は昨日、宣言通り、クラクストンと例のダブルベッドで一緒に寝たのである。

どうせ、お互い振り向いて眠らなきやいい——なんて思っていたが、思春期入りかけの島田にとっては、その状況がかなり刺激的であった。自分ひとりで寝るときには全く感じないふんわりとした包み込むような甘い匂いや、女の子の可愛らしい吐息、そして——少しでも動けば、触れてしまいそうな距離感。

島田はそんなクラクストンを意識しないことが精一杯であり、睡眠どころではなかった。

(この程度で緊張するつてなると、彼女の望み通り行為したら確実に死に至るぞ、……。異性に対する耐性の無さも、ここまで来たらさすがに改善しないとなあ)

と、島田は寝巻きに使用していた黒いTシャツを脱ぎ、ベッドへと放り投げた。そして、大本営から支給されている白を基調とした提督へと着替えて、黒いネクタイでしっかりと首元を整える。

そして、スマートフォンを手にして、スリープを解除。通知を確認すると、倉竹から今日の予定について、チャットツールを用いて送信されていた。

(えーつと……鎮守府の見回りに、演習見学に、クラクストンと母港付近水域のパトロー

ル……あー、出撃か。はいはい、了解しましたー、と)

島田は予定を一通り眺めてから、倉竹のチャットへと返信した。

(まあ、最初の一ヶ月ぐらいは研修だし、大体こんなもんなあ。鎮守府に人がいれば、他の人の付き添いとかで遠くに出撃できそうだけど)

舞鶴鎮守府は他の鎮守府に比べて定員自体もかなり少なめであり、試験もなかなか厳しいという話ではあるが、それにしたって、自分と倉竹以外の提督がないというのは少し寂しいものだ。

横須賀や呉、佐世保といった鎮守府はもつと人がいるのだろうなあ、と、島田が思っている、クラクストンが笑みを浮かべながらパタパタと小走りで、こちらへと向かってきた。

「司令官様、朝食の用意ができましたよ。今すぐお食べになりますか？」

「ああ……ありがとう、クラクストン。食べるよ」

島田はクラクストンに案内されて、室内のテーブルへと向かい、そのまま朝食へとありつけた。

朝食を食べ終えた後は、倉竹やクラクストンと共に、鎮守府内の見回りへと向かった。舞鶴鎮守府には結構な数の戦艦少女がいるようで、鎮守府内を歩けば歩くほど、いろんな戦艦少女たちとすれ違っていた。その中にはクラクストンと姉妹艦であるフレッ

チャー級の戦艦少女たちもいるようなのだが、元々の数が多いだけに話したことはあつたりなかったりするようで、姉妹としての挨拶だけで済ませていた。

島田はこつちにくつついてこようとするクラクストンをなんとか避けながら、倉竹になんとなく疑問をぶつめた。

「倉竹さん。あなたの秘書艦って誰なんですか？ 昨日から姿を見せていないような」

「ああ、俺の秘書艦かい？ 普段は特に任命してないよ」

「あれ……そうなんですか」

島田は意外そうにパチクリと瞳を動かした。

「任命はしないんですか？ あなたみたいな提督なら、秘書艦志望多そうですけど」

「いやあ、誰かひとりだけに任せるってのが性に合わなくてさ」

と、

「やるなら数人とかに任せて、仕事とつとと終わらせたいなあつて思うんだよね。島田くんもそう思わないかい？」

「え、ええ……言われてみれば」

(こ、効率厨)

島田は倉竹が思ったより効率重視っぽい言葉を言い放つたため、思わず苦い笑みを浮かべてしまった。あの倉竹のことだから、仕事もじっくり丁寧かと思っていたが、本人

は一切そうでもないようだ。

「それに、みんな一生懸命に頑張ってくれてるし、特定の誰かだけってのも抵抗があるんだ。誰かに固定しなきゃいけないってわけでもないんだけどさ」

「へえ……」

（あー、そうか。確かに、この世界だと秘書艦＝提督のお気に入りって図式が出来上がってるもんな）

そう考えれば、特定の誰かを秘書艦にすることに抵抗があるのは、ある意味倉竹らしいと思う。

（僕みたいなのは特定の誰かでも抵抗はないけど……まあ、実際そんなもんだよな。あの意味、生々しい図式ではあるし）

島田はクラクストンをチラツツと見てから、再び倉竹へと目を向ける。

ここや知り合いではそんなことは起きないだろうと思ってるものの、特定の戦艦少女に入れ込んでいるかと思いきや、他の戦艦少女を秘書艦にして、気付いたらそちらと誓約している、なんてこともあるらしく、提督の気持ちの乗り換えがかなり容易に見えるてしまうことある。元からハーレム志望や、複数艦との制約に抵抗がないのならばともかくとしても、ひとりの戦艦少女に入れ込むタイプの提督でこのようなことが起こると、島田もなかなか複雑ではある。

そして、食堂の見学も兼ねてそこで昼飯を食べ終えると、次は演習見学。

演習の一戦一戦の時間は決められているようで、そこまで時間は取らなかつた。

しかし、演習とはいえ、戦艦などの大型艦同士の撃ち合いはいつ見ても、こちらの想像を凌駕する。これで演習補正がなければ、確実にどちらかが轟沈しているのであろう。いずれにせよ、これに類似した戦場へとクラクストンを駆り出さねばならないことに、島田は抵抗を覚えた。大破すれば引き返せば良いだけの話だが、自分と同一年、下手したら年下でもある女性を戦場に送り込むのは、我ながら非情だとも思えた。

演習見学を終えて、島田とクラクストンは母港の海へと足を運んだ。最初はふたりで船に乗って海上を走ることになるが、クラクストンは途中で海上へと乗り込んで、船から離脱。島田だけでは船は運転できないので、当然のように倉竹も付き添いに出る。

倉竹が出港の準備している間、クラクストンと島田は船内の椅子に腰掛けて、船が動くのを待っていた。クラクストンは島田に笑顔で話しかける。

「司令官様。初めての出撃で緊張していると思いますが、力を抜いてくださいね」

「あ、ああ……：僕はいいけど」

島田は心配そうに彼女を見た。

「クラクストン、君の方こそ緊張してるんじゃないかい。僕は指揮するだけだけど、敵と真正面からタイマンするのは君だろう？」

「ふふ、司令官様は相変わらずお優しい」

クラクストンは笑みを浮かべ、

「確かに、ちよつと緊張しますけど……これから司令官様と一緒にいなければならぬのですから、甘えてもらえません」

と、言い放った。

島田は、そのクラクストンの笑みが眩しくて、思わず目を逸らしそうになった。

（『そういう存在』として生まれてきた以上、引き返すなんて選択肢はないんだろうな。彼女は駆逐艦としての誇りを持って生まれてきた。……少し、羨ましくもあるな）

自分にはないけれど、彼女にあるものはたくさんある。けれども、特に、彼女のフレツチャー級のひとりとして、そして、リトル・ビーバーズとしての誇りは、自分が真似できないものであると思った。

自分は何も特別なことはなく、普通の少年として生まれ、そこから遊びや趣味にも使えたはずの時間を犠牲にしても勉強を続け、舞鶴へと着任した。そこに誇りはなく、ただ、自分の目的を持って意地でここまで来ているに過ぎなかった。

（そんな僕は、本当に彼女の理想通りの「僕」なのか……？ 彼女の隣に立つのは、結構鳥澁がましいことなんじゃないか？）

島田がそこまで思ったところで、船内がグラリと揺れた。

「!」

どうやら、船が出港し始めたらしい。

「きやつ!」

「っ、危ないっ!」

クラクストンの体が船の動き始めと同時に、島田へと向かわれると、島田は反射的にクラクストンの方を掴み支え、船内の動きが安定するまで、彼女を離すことはなかった。船内での揺れが収まり、動きが安定してきたところで、島田はクラクストンの体から自分の手を離した。ふう、と息を吐いてから、クラクストンへと目を向ける。

「クラクストン、大丈夫かい? 倉竹さんのところに行つて、話を——つて、ん?」

島田はクラクストンがやけに大人しいことに気が付いて、彼女の顔を覗き込むように見た。

「……」

クラクストンは顔を真っ赤にして、目線を下に落としていた。

島田は、今の一連の流れのどこにクラクストンがこんな風になる要素があるのか一切分からないようで、島田は再び彼女へと繰り返し返した。

「クラクストン? 話聞いている? これから倉竹さんのところに行こうって話なんだけど」

「あ……は、ははは、はい！　そう、ですわ……」

クラクストンは今の島田の声を聞いて、やっと現実世界へと帰ってこれたらしく、反応した。クラクストンは赤みが取れない頬をそのままにして、倉竹がいるであろう操舵室へと足を向けた。

島田はそんなクラクストンの様子を、「？」と頭の上にクエスチョンマークを浮かべながら見つめ、そのまま彼女と共に倉竹の元へと向かった。

操舵室はクラクストンと島田がいた部屋から繋がっており、そのまま入ることができた。

島田は操舵室の扉を開いて、クラクストンと一緒に操縦している倉竹の元へと向かった。

「倉竹さん」

「ああ、島田くん、クラクストンか」

倉竹は笑みを浮かべ、

「いろいろと話してみたんだけど、初出撃、準備はいいかい？　パトロールだし、そんな難しいことはないから、大丈夫だと思うけど」

「はい、大丈夫です」

「私も大丈夫です！」

「ならよし。この周辺なら、深海軍も弱いだろうし、駆逐艦ひとりでも問題はなはずだ
よ」

深海群、とは、戦艦少女たちや島田たち提督が敵対している陣営のひとつである。

向こうの目的に関してはいまいち分かっていないものの、結構前から海を闊歩しており、下手をしたら海などの生態系に影響が出るということで、戦闘能力を持っている戦艦少女たちが、その深海軍の処理に当たっているのである。

倉竹は、レーダーが映っている画面を見ながら、言う。

「おっと、まさかの初っ端から軽巡洋艦か……まあ、この周辺だろうし問題はな——」
途端、なにかを確認したらしく、倉竹の口がパツタリと止まった。倉竹は顔に冷や汗を流し、動揺しているように見えた。

島田とクラクストンは、彼のその様子に、お互い違和感を覚え、島田が率先して倉竹へと声を放った。

「倉竹さん、どうかしましたか？」

「……島田くん」

倉竹は、こちらへと話しかけてきた島田に言う。

「もしかしたら、この反応……深海軍のものじゃないかもしれない」

「えっ……？」

「『戦艦少女』の軽巡洋艦の反応なんだよ。もし、深海軍側に寝返っていたとしても、ありえない探知の仕方なんだ」

「……………」

島田はクラクストンと顔を見合わせて、その動揺を共有した。

倉竹は続ける。

「とりあえず、パトロールに関しては一旦中止で、ここで引き上げよう。クラクストンひとりじゃ、荷が重いかもしれな——」

「……………いえ、行きます」

倉竹の言葉を断ち切るように、クラクストンは、そう、はつきりと言い放った。その瞳は、まっすぐ前を見据え、自分は逃げないと言っているようなものだった。

「クラクストン、お前……………」

「ここから引き返すよりも、囮になって向こうの様子を見た方が良いかもしれません……………よね、司令官様？」

「……………ああ、その方がいい」

クラクストンに問われた島田は頷く。

「それに、敵かどうかはまだ分かりません。一旦探りを入れるべきです」

「……………分かった」

倉竹は頷き、

「島田くん、クラクストンの指揮は頼む。俺は鎮守府にいる娘たちに援軍を頼もうと思
う」

「はい、分かりました」

そうして、島田とクラクストンの初めての出撃は、意外な展開から幕を上げること
になった。

005：アルベルト・デイ・ジュッサーノ

クラクストーンは装備を確認し、靴を水上用のものへと履き替えると船から海へと足を下ろし、そのままレーダーが反応を示した方向へと向かっていた。海の匂いがクラクストンの鼻腔を強くくすぐった。

島田たちが船越しとはいえ、こちらの後ろから様子を見てくれているものの、クラクストンの心臓は緊張からドキドキと強く波打っていた。初めての出撃はどんな形であれ、島田と共に——なんて思っていたが、敵が深海軍じゃない可能性があるなんて、普通に想定範囲外である。

しかし、クラクストンの心の支えは、インカムから聞こえて来る島田の声だった。

『クラクストーン、どう？』

「ええ。まだ、向こうの姿は見えません」

『そうか。もう少し先に進んでみてくれ』

「はい」

（司令官様……）

クラクストーンはインカムの耳当て部分を抑えて、そこから聞こえて来る彼の声に心を

寄せた。

（今の私にとって、貴方の声だけが頼りです……司令官様）

クラクストンは、島田の声を胸に詰め込むように、自分の胸元で拳を握り締めながら、前へ前へと進む。

（そして……司令官様が昨日おっしゃったことが本当なら、今回のつてもしかして）

と、クラクストンはここで、昨日、島田がこちらに教えてくれた、少年提督排除運動についての内訳について思い出していた。もしかすると、今回もその件に関わっている可能性があるのではないかと——クラクストンはそう読み取った。

もし、島田が舞鶴鎮守府に着任して、その情報が向こうまで行っていたとして、早速こちらに攻め込んでくるのは有り得ない話ではない。向こうは島田を潰すために学校でも徹底的にやってきた相手だ、このぐらゐ朝飯前であろう。

（司令官様を守るためにも、ここはなんとか乗り切らなきゃ！）

クラクストンがそうして前を向いた瞬間、

「あれれー、まさかの駆逐艦がお迎え？ 私の趣味を把握してるのかな？」

「……！」

そこに立っていたのは——倉竹が言っていただろう、軽巡洋艦の女性だった。

彼女は黒をに基調とした軍服を着用していた。一方でスタイルも良くグラスマスで、

戦艦少女らしく、可愛らしい女性でもあった。クラクストンが軽巡洋艦と判断したのは、艦装に搭載されている主砲や機銃を見てのことだった。

クラクストンはその姿を見るなり、すぐにインカムを通して島田に連絡を入れた。

「司令官様、軽巡洋艦発見しました。倉竹さんの読み通り、私と同じ戦艦少女のようです」

『分かった。そのまま距離を保つてくれ』

「はい」

クラクストンはコクン、と頷き、顔を上げて、目の前にいる彼女を見た。

彼女は落ち着いた色をしているブロンドの髪の毛を掻き上げて、朱色の瞳でクラクストンを見つめた。

「まあ、いいや。それよりも、あなた、あの冴えない男の子のところの駆逐艦?」

「冴えない男の子って……誰のことですか?」

「え? あの眼鏡で黒髪の男の子のことだよ。舞鶴にいるんでしょ?」

「あら……」

クラクストンは笑みを浮かべて、静かに言い放つ。

「司令官様のことを冴えない男性なんて……私としてはそれこそが司令官様の愚骨頂だと思ってますし、それを否定的に言うのは感心しませんね」

「なになに、洗脳でもされちゃってるの?」

「私はあの人に出会った時から、ずっとあの人じゃなきゃ嫌だと思ってるだけです」

クラクストンは、右手の主砲の銃口を、目の前の彼女に向ける。

「私はフレッチャー級、DD-571のクラクストンです。あなたは?」

「ふーん、やる気なんだ。いいね」

と、

「私はジュツサーノ。アルベルト・デイ・ジュツサーノだよ。地中海では名前を聞くだけで恐れられる駆逐艦ハンターとは、私のこと」

「駆逐艦ハンター……? 私は一切聞いたことがありませんが、自分から名乗るということは、相当な自信があるんですね」

クラクストンが警戒を強めていると、インカムから島田の声が飛び込んできた。

『クラクストン。向こうはやる気なのか』

「……ええ、司令官様。ジュツサーノさんは確実にやるつもりです」

クラクストンは目を細め、ジュツサーノを見た。

ジュツサーノから感じるオーラは明らかにこちらの味方のものではない。こちらを獲物だと認識し狙っているような視線が、そのオーラをさらに強化させる。

クラクストンは、主砲の取手を強く握り締め、島田に言う。

「司令官様。こちらの様子は見れますか？」

『ああ、ここからならなんとか』

「分かりました……なら、こちらへ指示をお願いします」

『良いのか？ 演習すら一回もやってないのに』

『はい。司令官様が良いんです』

『……了解した。ただ、大破したらすぐに撤退してもらおう』

「ええ、分かっています」

クラクストンはクスツと小さく笑みを浮かべてから、再びジュッサーノへと目を向ける。

ジュッサーノは髪の毛を右手の人差し指と親指で弄っていた。どうやら、クラクストンと島田の会話が終わるのを待っていたようだ。ジュッサーノはふたりの会話が終わるなり、自分に装着されている艦装の主砲をクラクストンへと向ける。

「戦艦少女でやり合うなんて、私の趣味じゃないけど……あなたを潰せば報酬が出るから、やるしかないのよね！」

ジュッサーノの主砲の銃口がキラリと光ったと思えば、そこから弾丸がクラクストンに向かって発射された。

「ッー！」

その弾丸は一気に海へと落ちていき、次々と爆発していく。

『クラクストン!』

「大丈夫です……この程度の攻撃、フレッチャー級の相手にすらなりません」

一方で、クラクストンは無傷だった。

フレッチャー級に限らず、駆逐艦は艦艇の中でもトップクラスの機動力と俊敏性を誇る。この多少攻撃を受けた程度では簡単に当たりはしない。

「っはー!」

そして、煙が晴れない中で、とうとうクラクストンの主砲から弾丸が放たれた。

弾丸が放たれた部分だけ煙が吹き飛ばされ、そこから一気に煙が晴れていく。

「!」

ジュツサーノは、こちらへと弾丸へと向けられるなり、すぐに海の上を駆け出し、その弾丸から避けた。ジュツサーノに当たらなかった弾丸は、ぼしやん、と海の中へと沈んでいった。

ジュツサーノはそれを見るなり、ニヤリと笑みを浮かべた。

「やっぱり、駆逐艦の攻撃なんてこんなもんか。クラクストンだっけ? 私と戦うにはちよつと早かったかもねー」

「……!」

「ほら、追いかけておいで！」

ジュッサーノは楽しそうに笑みを浮かべながら、水上を滑りながら走り始めた。

『クラクストン！』

「ええ、分かっています！」

(駆逐艦の速力なら、軽巡洋艦には負けない！)

クラクストンは島田のその呼びかけに応えて、ジュッサーノを追いかけて始めた。

駆逐艦の速力は、小型であるがゆえに、他のどの艦種にも負けない高い数値を誇る。一部の特例を除いたとしても、古い艦でもその速力を活かして、活躍ができる範囲。そして、駆逐艦であるクラクストンの速力は37.0 kt。駆逐艦としては平均的な速力であるが、少なくとも普通の軽巡洋艦の速力では到底追いつけない速力だ。

しかし、「普通」ならば、の話である。

クラクストンは早くジュッサーノに追いついて、さつさと彼女を捕まえてしまおうと思っていたのだが——クラクストンが彼女に追いつくどころか、だんだんと差が広まっていく。この現象にクラクストンは額に脂汗を流しながら、ひどく動揺した。

「し、司令官様！ 追いつけません！」

『くっ……やはりか！』

島田は舌打ちし、そのまま説明に移った。

『アルベルト・デイ・ジュツサーノ……確かに彼女は軽巡洋艦だ。しかも、それなりに古い艦。クラクストン、彼女は史実で君が進水する前に轟沈してる』

と、

『全体的な性能だつて、平均的な軽巡洋艦よりも低い。けど……彼女にはそれを跳ね返せるほどの特性がある』

「特性……?」

『WW2が勃発する前のイタリア海軍では、大型駆逐艦に対抗できる高速防御型の軽巡が建造されている。それが、「コンドツテイエリ型軽巡洋艦」。彼女もそのうちのひとりなんだ』

そして、

『そして、その軽巡洋艦たちは普通の軽巡洋艦よりも性能が低い代わりに、駆逐艦並み……いや、下手したらそれ以上の速力を持っている。調べたところ、アルベルト・デイ・ジュツサーノは40・0ktの速力を誇るそうだ』

「40・0kt!?! その速力つて、本当にごく一部の駆逐艦しかなし得てないものなの?」

『旧日本海軍が建造した駆逐艦・島風と同等の速力だ。逆に言えば、その島風でやっと追いつけるのさ。少なくとも、君の最大速力では彼女には追いつけない』

「私はどうすれば……」

『これ以上差が広まったら、君の射程範囲外になる。それだけは避けるしかない!』
「分かりました、現状維持ですね!」

クラクストンは島田の指示を聞いて、これ以上自分が不利に立たない位置を維持しようとして、水上を駆け抜ける速さをさらに強くした。しかし、島田の言う通り、ジュッサーノとこちらの距離は縮まるどころか、広まる一方で、どんなにクラクストンが速力を強めたところで、距離をなんとか維持するだけでも精一杯だった。

ある程度距離が広まったところで、ジュッサーノはニヤリと笑みを浮かべて、とうとうクラクストンの方へと振り向いた。

「ここまですれば、私の射程範囲内だけど、君は射程範囲外!」

「なっ——」

「おとなしく死んでくれると、嬉しいな!」

ジュッサーノの艀装につけられている主砲はすべてクラクストンへと向けられ、その弾丸はすべて彼女へと駆け抜けていった。距離があるのならば、クラクストンがすぐに避けられたいだけの話であったが——クラクストンが避けようにも、四方八方に放たれており、逃げ場がなかった。

『クラクストン!』

「ツ、司令官様……!」

彼のためにも、ここは耐え抜かなければ——クラクストンはそう思つて、なんとかそこから抜け出そうとするのも束の間。

「ツ、あ!」

クラクストンの隙を突いたらしきジュツサーノが、彼女の背中を狙つて、その艤装へと弾丸をぶつけた。

クラクストンは思わず彼女の方を向いた。

その途端——

「——つああ!」

——続けてやってきた弾丸が、クラクストンに直撃。

彼女の体は耐久を一気に失い、大破までに追い込まれた。

「つう……」

(まったく、一瞬も気が抜けない……)

服はボロボロ、二つに分けていた髪の毛も片方が解けてしまった。艤装も壊れている以上、このまま戦闘続行するのは不可能であろう。

クラクストンが連絡を入れようとしたところで、島田のこれまでに動揺が耳の中へと入った。

『——クラクストン！ クラクストン！ 返事してくれ、クラクストン！』

「司令官、様……？」

『島田くん、落ち着いて！ 別に死んでるわけじゃない！』

『で、でも、クラクストンが！』

(……声、震えてる)

クールに冷静に振る舞っている彼のこの取り乱し具合に、クラクストンの方が動揺してしまった。学生時代を犠牲にして勉強に打ち込んだ彼に、年相応の少年らしい感情が残っていることに安心してしまうのは、ある種不謹慎なのかもしれない。

(でも、撤退しようとしたところで、ジュッサーノさんから逃げられるわけではない。私はどうしたら——)

ジュッサーノはここに来ていなくてもなお、クラクストンをどうにかしようと、こちらを見つめてきていた。ゆっくりと水上を歩き、水紋を作つて、クラクストンへと近付いてくる。クラクストンは撤退を試みようとするも、まずはボロボロになつて水面に浮かんでいゝる魚雷を取らねばならない。その間にもジュッサーノは銃口をこちらに向け、次の攻撃を試みている。

クラクストンはジリジリと後退しながら、向こうの出方を伺っている瞬間だった。

「私の歩む道はただひとつ——それは勝利への道——」

女性の声が凜々しく、辺り一面に響いた。

その途端、ジュツサーノに向けて砲撃された。

「きやつ！——な、なに?！」

ジュツサーノは間一髪でそれを避けきり、水上を滑って後ろへと後退した。

ジュツサーノとクラクストーンが呆然としている中で、その声は続く。

「レーダーの反応がおかしいと思つたら……戦艦少女同士がやり合つてるなんて。しかも、駆逐艦虐めてるとか、同じ軽巡洋艦として感心しないわよ。アルベルト・デイ・ジュツサーノ」

白と青のロシア帽を被った、金髪碧眼の女性。青と白基調としたワンピースが特徴的で、首元には赤い星のバッジが付けられている。また、なんととっても、胸元が開き顕になっている豊満なバストは、男性女性共々目線がいつてしまうだろう。

女性は輝かしいまでのロングヘアーの金髪を靡かせながら、言う。

「冷静な頭脳と燃える心、鋼鉄のジェルジンスキーよ。私の敵はどっちなのかしら?！」

006 : ジェルジンスキー

「ジェルジンスキー……!? 舞鶴にはいないぞ!」

船内から戦闘の様子を眺めていた倉竹は、ジェルジンスキーの姿を見るなり、ひどく動揺した。

そんな倉竹の言葉を聞いた島田も、ジェルジンスキーの登場で気持ちがつかり切り替わっており、倉竹に質問した。

「えっ……あの人、倉竹さんが呼んだんじやないんですか!？」

「俺が呼んだのは空母艦隊だよ。どちらにせよ、軽巡洋艦は呼んでないはずだ」

「じゃあ……」

(だとしたら、これって他の鎮守府からの……?)

倉竹がそう言っている以上、それ以外は考えられないだろう。しかし、クラクストンとジュツサーノの戦闘に堂々と割り込もうとするなど、一体どこの誰が経営している鎮守府なのだろうか。もし、倉竹の知り合いならば、どこかのタイミングで連絡が行きそうだが――。

島田が困惑している間にも、尻ポケットに突っ込んでいたスマートフォンがバイブ音

を鳴らし、新規に通知が来たことをこちらに知らせてくれた。

「なんだあ、こんな時に。一体誰から……。……！」

島田はスマートフォンを取り出して、その通知を確認すると、そこに並べられていた言葉に、思わず目を丸くした。

ジェルジンスキー——史実では、WW2以降に建造されたソビエト連邦軍の軽巡洋艦・686иc型の2番艦である。686иc型はソビエト最後の砲撃型巡洋艦であり、その性能も他の軽巡洋艦よりも優っていた。故に、未改造艦であるにも関わらず、全体的に高水準なステータスで、戦闘にも出しやすいと提督からの評判からも高い。

そんな彼女がなぜ、自分たちの中に割って入っているのか定かではない。

ただ、ひとつ言えるのは——彼女もまた、この戦艦少女同士の戦いの理由に、心当たりがあるということだ。

ジェルジンスキーはジュツサーノを横切り、クラクストンの元まで向かうと、その前に立った。そして、インカムへと言葉を向ける。

「同志。多分、この駆逐艦があなたの……ええ、分かったわ、了解。あなたも早く来てね、同志」

ジェルジンスキーは、そちらの提督らしき人物との会話を終えるなり、クラクストン

の方へと顔を向けた。

「ねえ、あなた、名前は？」

「ク……クラクストンです」

「クラクストン、もう大丈夫よ。私が来たからには、これ以上あなたに傷を付けさせないわ」

ジェルジンスキーはにこやかに笑みを浮かべてクラクストンにそう言った途端、再びジュツサーノへと目を向けた。ジェルジンスキーの装備されている主砲は無意識のうちにはジュツサーノへと向けられていた。

「アルベルト・デイ・ジュツサーノ。これ以上この子を虐めるってなら、私も容赦しないわ。今度が私が相手になってあげるわよ」

「ジェルジンスキー……どうして、あなたがその子を守るの？ その子はあなたと同郷でもなんでもないんでしょ？」

ジェルジンスキーは彼女のその言葉を聞くなり、呆れたように言った。

「言っておくけどね、私は弱いもの虐めが嫌いな。普通の戦闘なら私もスルーしてたけど、あなたは一方的に虐めてるようにしか見えない。大破した彼女にさらに詰め寄ろうとするなんて、傭兵として恥と思わないのかしら？」

「私は駆逐艦ハンターだよ。そこに恥なんてものはない。それに、その子の首を取った

ら報酬がもらえるんだよ。その子を徹底的に潰すのが、私の仕事。それ以上の理由なんてないよ」

「どうやら、私とあなたは分かり合えないようね」

ジェルジンスキーは、これ以上彼女と話す価値はないと言わんばかりに、クラクストンの手を取って、そのまま島田たちがいる船へと向かおうと足を運び始めた。

「行きましょう、クラクストン」

「えっ、あ……あ……あの」

クラクストンは困惑しながら、ジェルジンスキーへとついていく。

そして、ジュツサーノは、そんなジェルジンスキーを呼び止めた。

「ま、待ちなさいよ！ 逃げるつもり!？」

「あら」

ジェルジンスキーは、クス、と小さく笑みを浮かべて、ジュツサーノへと振り返った。

「私にとって、あなたとやり合う価値はない。わざわざ言わせないでくれる?」

「ッ……」

ジェルジンスキーのその笑みに、ジュツサーノは思わず歯をぐつと噛み締めた。

ジュツサーノは、ここから去っていくジェルジンスキーとクラクストンの後ろ姿を見ながら、いつそのことその後ろ姿を追っていかうと足を踏み出した。

途端、

『ジュツサーノ。単身で乗り込むのは感心しないよ。引き上げて』

「! アンミラーリオ!」

ジュツサーノのインカムから、ゼヴィンの声が響いた。ゼヴィンは続ける。

『ジェルジンスキーはWW2の後に作られた最新鋭の砲撃型軽巡洋艦。君よりも性能は
ずっと良いし、今の状況で舞鶴に乗り込むのは自殺行為。まともにやり合つて勝てる相
手じゃない』

「……分かった。アンミラーリオがそう言うなら」

ジュツサーノは悔しそうに眉と眉の間を近づけつつ、自分の提督であるゼヴィンの言
うことには逆らえないと、渋々了承した。ジュツサーノは残念そうに呟く。

「報酬、これじゃあもらえないよね……」

『駆逐艦一匹を大破に追い込んだんだ。相応の報酬は払うよ』

「……ありがとう、アンミラーリオ」

ジュツサーノは彼なりの気遣いに、クスツと笑み浮かべて、海の水平線の中へと消え
ていった。

そして、島田たちが乗っている船へと辿り着いたクラクストンとジェルジンスキー

は、そのまま船内へと乗り込んで、中にいた島田たちと合流。

クラクストンは島田から上着をもらって、それを上から羽織った。

「すみません、司令官様。私がつっかりしてなかったばかりにこんなこと……」

「別にクラクストンのせいじゃないさ。待ち伏せて襲ってきた向こうが悪い」

「そうよ。周辺なんていう序盤も序盤で、こんなことになるなんて想像できるわけない」

島田とジェルジンスキーが、気落ちしているクラクストンをフォローした。

さすがにクラクストンの経験不足は仕方ないところはあれど、今回の件で悪質なのは確実に向こうの方だ。待ち伏せて襲おうなんてこと、普通の戦艦少女はしないであろうし、そもそも計画すらしないであろう。今回はジュツサーノだけであつたが——そのうち、ジュツサーノ以外の向こうの人員が出てくるのも予想できる。そうなる前にも、島田とクラクストンは経験を積んで、強くなるなくてはならない。

ふと、ジェルジンスキーは島田の顔を見て、今度はそちらへと話題を移した。

「あなた、私の同志の友達なんですって？」

「ああ、こんな形で出会うとは思わなかったけどな」

そう——ジェルジンスキーは、島田の兵学校時代の友人の戦艦少女のひとりであつた。

ジェルジンスキーの提督も、島田と同じような年齢で大阪警備府へと着任した人物

だった。兵学校時代、彼は島田と共に行動することが多かった。周りから見ても親友同士と言われる程度には一緒にいた。お互い離れてしまった今でも、それなりに連絡することが多い仲だ。

そして、先程島田のスマートフォンに入ってきた連絡が、彼からのメッセージだった。彼は、「アレ、お前んところの戦艦少女だろ。ジェルジンスキー出すから、はよ撤退しろ」——といった文面で、こちらに助け舟であるジェルジンスキーを送り込んでくれたのである。曰く、昨日の夜の時点でこの周辺に何か怪しげな動きがあり、なんとなく行ってみたところ案の定——ということらしい。

ジェルジンスキーは、「ふーん」と喉を鳴らして、続けた。

「話には聞いていたけど、見た目は冴えない男の子つてのは事実なのね」

「それ、さつき、ジュツサーノにも言われたぞ。クラクストンのインカム越しにしっかりと聞こえたんだ」

島田は溜息を吐き、未だに自分の耳元につけていたインカムを指差して言った。見た目が冴えない男なのは自負しているものの、さすがに一日の中で2回も言われるのは想定はしていないかった。

ジェルジンスキーは、自分の口元に手を当てた。

「あら、ごめんなさい。でもね、純粹に驚いてるのよ」

ジェルジンスキーは苦い笑みを浮かべつつ、そのまま言葉が続けた。

「むしろ、こんな子を特別扱いしてぶっ叩こうなんて真似、上がするとは思えなくって。冴えない見た目ってことは、目立たないってことだもの。まあ、それだけあなたの言動は、とてもはつきりしてるってことなんでしょうけど」

「……まあ、そうなるかなあ」

島田はポリポリと頭を掻いた。

「ジェルジンスキー。アイツから他に聞いていることはないか。余計なこと言ったら後でとつちめてやる」

「ふふ。同志のことだから、友人のことは悪く言わないはずよ。それよりも私、同志について聞きたいことがあるんだけど」

「アイツについて聞きたいこと？　まあ、良いけど。言ってみろ」

「じゃあ、遠慮なく」

ジェルジンスキーはコホン、と、わざとらしく咳をすると、キョロキョロと辺りを見渡してから、小声で島田に言った。

「その……同志って、私みたいな女は好みではないのかしら？」

「おっ……」

と、これには島田に寄りかかっていたクラクストンも反応した。

ジェルジンスキーは続ける。

「同志って良くも悪くも年相応の男の子でしょ？ 思春期入ってくる頃だろうし、私も何かアピールしなきゃやって思うんだけど……でも、なーんか意識してもらえないのよね」

「ああ……」

島田は何か察したらしく、続ける。

「アイツ、今は恋色や性欲よりも別の……そうだな、わりと馬鹿なことに集中したいだろうしなあ。まあ、なんだ。あと1〜2年ぐらいたら、ジェルジンスキーの魅力にも気付いてもらえるさ」

「そうですね。ジェルジンスキーさん、カッコよくて綺麗な人ですし、きっとそのうち振り向いてもらえると思います」

「ううん、それじゃ遅いのよー」

ジェルジンスキーは立ち上がり、

「だって、この世界には可愛くて魅力的な女の子たくさんいるじゃない！ 同志だって、そのうち……そのうち……」

——この時のジェルジンスキーの顔は、カッコよくて綺麗とは程遠いものだった。

島田とクラクストンはお互いに顔を見合わせて、「どうしたもんかねえ」と視線で会話

していた。正直なところ、島田は他人の恋路に割り込む趣味は持ち合わせていない上に、よりにもよって相手が相手すぎて、割り込む気すら起きない。

(アイツ、他人の恋路には首突っ込むくせに、自分の恋路には一切興味ないからなあ……)

「……まあ、適度に距離を取りつつ、一緒にいればそのうち振り向いてくれるんじゃないか。僕にはアドバイスしようがない。以上」

「島田ア！ 確かに正論だけど、もう少し取り合ってくれてもいいでしょ!」

「じ、ジェルジンズスキーさん、落ち着いて!」

ジェルジンズスキーは島田の肩を掴み、そのまま島田をガンガンと揺らした。クラクションは、そんなジェルジンズスキーを宥めながら、島田からその手を離れた。

島田はクラクラする頭を抑えながら、クラクストンに泣きつくジェルジンズスキーを見た。

(アイツ……とんでもない女を連れてきたな)

そのまましばらくすると、やっと舞鶴鎮守府へと戻ることができた。

海に出た時には青を見せていた空は、鎮守府に辿り着く頃にはすっかりオレンジ色に染まり上がり、ここから夜に染まっていくことを示していた。

島田は先にジェルジンスキーと倉竹を船の中から下ろし、その後、クラクストンの肩を支えながら、地上へと足を着けた。彼はクラクストンの顔を覗き込み、その顔色を伺った。

「クラクストン、大丈夫かい？」

「はい……ありがとうございます、司令官様」

と、ふたりが鎮守府の近くまで進んだところで、少年の声がかかる。

「ふーん、お前にしては上々な女の子捕まえたんじゃないの」

「！」

ふたりはそちらへと顔を向けた。ついでにジェルジンスキーも、瞳を輝かせてそちらを見ていた。

「俺らの中で一番彼女できるの誰だろうなーって言うて、赤毛が一番早いと思ってたら……まさかお前とは思わねえよ、島田ア」

「お前は……！」

島田たちの目線の先にいたのは——褐色の美少年だった。

前髪は長め黒髪で、茶眼の吊り目。その凛とした顔立ちで、島田と同じように真面目な雰囲気か漂ってくるものの、その真面目さは島田とは違うべくトルなのも同時に伝わってくる。

少年は島田の方まで歩み寄り、呑気に言う。

「俺、お前に提督名教えてたつけ、島田。お前のは学生時代からこれだけど、こっちからは教えてねーんだよなあ」

「チビ助！ 自分の恋愛には鈍感なチビ助じゃないか！」

「おい、なんかすげー罵倒が聞こえてんだけど!?!」

——この人物こそ、島田と兵学校時代を共にした少年提督であった。

007 : 大原少年と島田

舞鶴鎮守府、浴場。

先の戦闘で傷付いたクラクストンは、傷を癒すために、この浴槽へと浸かっていた。この世界にある鎮守府の浴場は、戦艦少女たちが傷を癒すために作られている入渠施設であり、さまざまな装飾を施すことよって入居時間を短縮したり、修復にかかる資材を軽減したりなどの研究が、常日頃行われている。また、入渠における時間は、戦艦少女の練度と耐久が関係しており、練度が高ければ高いほど入渠時間は伸び、耐久が少なければ少ないほど、時間は短くなる。

クラクストンは練度も低く小型の駆逐艦なため、入渠時間に関しては非常に短く、3分前から修復が完了するという計算が出来上がっていた。

島田はそんなに短いならばと、入渠時間短縮のための背中流しを行ったあと、浴場内でクラクストンの入浴の様子を見守っていた。島田は、不思議と劣情を抱くようなことはなく、むしろ、さっさとクラクストンの入渠が終わって欲しいと思えるぐらいだった。クラクストンはそんな自分の司令官に見守られながら、口を開いた。

「司令官様は一緒に入らないのですか？」

「ん？ ああ、風呂の中に入ってさっぱりしたいのは山々だけど、ここは入渠施設だからなあ。後で自分で入るよ」

「そうですか……」

クラクストンは残念そうに口元を綻ばせた。

そして、しばらく沈黙が流れた後、クラクストンは再び口を開いた。

「その……ジュツサーノさんのことなのですが」

クラクストンは顔を上げ、島田を見た。

「話を聞く限りでは、司令官様が言っていた例の……」

「だと思う」

島田は彼女の推測に、コク、と首を縦に振って頷いた。

「インカム越しに君と彼女の会話を聞いていたけど、新人潰しのためだけに報酬なんて、そうそう有り得たもんじゃない。そもそも、新人潰し自体提督同士で行われることだし、物理的にこちらに突つかかってくるなんて、君の推測通りだと思う」

と、

「クラクストンへの強襲ってことは、こちらの戦意を削ぐのが第一の目的なはず。これから僕の支えになるであろう戦艦少女を潰せば、それが達成されるはずだからね。ジェールジンスキーが助けに来てくれたのは有難いことだったと思う」

島田はそう言うと、照れ臭さから自分の目線を彼女から逸らして、小声気味に言い放った。

「その、つまり、君が徹底的に潰されることがなくて良かったって言うか……言い方は悪いけど、持ち堪えてくれたのは嬉しかったよ、うん」

「司令官様……」

クラクストンは島田の言葉とその態度に、思わずクスツと小さく笑みを漏らした。

「ありがとうございます、司令官様。私、もつと強くなるから、見守っててくださいね」

「……ああ」

島田は改めて浴槽の中にいる彼女の方へと目を向けて、頷いた。

そろそろクラクストンの入渠時間も終わったようで、クラクストンはタオルを体に巻き付けたまま、ザパツと水音を立てながら、そこから腰を上げた。

彼女は浴槽から出て、島田もそれに合わせて立ち上がる。クラクストンは島田にこれからの予定に対して、問いを投げる。

「司令官様。私は風呂から上がったら、食堂に行けば良いのでしょうか？」

「ああ、チビ助たちと一緒に夕食の予定さ。一緒に行こうか」

「……はいっ」

クラクストンは笑みを浮かべて、頷いた。

しかし、島田とクラクストンが食堂に着き、夕食を手にしてジェルジンスキーたちのところへと辿り着いた途端、島田たちは思わず苦い笑みを浮かべてしまった。

「同志、はい、あ〜ん！」

「い、いいって！ ガキじゃあるまいし、自分で食うってばー！」

「あ〜。こうした方が美味しくなるって知らないの？」

「こんなことしなくても美味しいもんは美味しいの。ただでさえ他所の鎮守府なんだから、ちったあ自重しろ」

「んもう、つれないわね！ ……あら、島田とクラクストンじゃない」

ジェルジンスキーは、自分のノリになかなか乗ってこない提督に対してプンスカと頬を膨らませていると、こちらの近くに島田たちが歩み寄っていることが分かり、コロリと表情を変えて手を挙げた。

「そこに突っ立ってないで、早く座って。一緒に食べる約束なんだから！」

「あ、ああ……」

「あ、ありがとうございます……」

（あのふたり、いつもこんな調子なのかな……）

と、思わざるを得ないぐらいの会話内容であった。

クラクストンと島田はそれぞれ隣り合い、ジェルジンスキーとその提督の向かいの席へと腰掛けた。島田たちは胸の前で手を合わせ、「いただきます」と口にする、それだけの食事を口へと運び始めた。

島田は唐揚げを一口分飲み込めば、少年へと話しかけた。

「チビ助……今日は本当に助かったよ。僕たちだけじゃどうしようもなかった」

「うん、まあ、礼はいいけど……俺のことチビ助チビ助言うのやめろや。さつきも言ったけど、俺にや『大原』って提督名があるんだからさ」

少年、もとい、大原は自分の親指で指しながらそう言った。

先ほどから、島田はこの大原を「チビ助」と呼んでいるが、彼は本当に身長が低いのである。12歳なのに150cm半ばはある島田が高すぎるだけな気もするが。島田が大体155cm前後だとして、大原は少なくとも150cm未満。島田よりもちよつと低いぐらいのクラクストンと並ぶと、そこから5cmぐらゐは差が開いてるのは分かるので——この時点で大方の目安はつく。つまり、大原は平均よりちよつと低いのである。

島田は、「んー」と喉を鳴らしながら、サラダを咀嚼した。

「僕の中じやチビ助で固定されてるし、今更呼び方変えるなんて無理だよ。それともジェルジンスキーの前だからカッコつけたいとか？」

「カツコつきたいってよりは、部下の前で呼ばれると示しがつかないってやつだな。島田だって、部下の前で『クソメガネ』やらなんやら呼ばれたら示しつかねえだろ」

「ああ、まあな。でも、今すぐ呼び方を変えるのは無理だぞ。兵学校からそう呼んでたのに、変えろっていう方が酷だ」

「……まあ、それならそれでいいけどよ。そのうちちゃんと大原って呼んでくれよ。俺がいつまでチビなのかも分からねえしな」

「分かっている分かってる。んで、本題だけど」

島田は水を飲んだ。

「チビ助。お前の方にも、今回みたく戦艦少女が襲ったりしてないのか？ 兵学校で僕とつるんでた以上、可能性には否めないとは思っているんだけど」

「あー、俺のところにはや来てねえな。そもそも大阪警備府って舞鶴よか人がいる上に、都市部だからパトロールもめちやくちや強化されてるし、向こうが襲ってきたらすぐにとっちめられるべ」

「ああ、そうか……大阪市内にあるなら、かなり嚴重だろうな」

島田は大阪警備府の場所を思い出し、納得したように頷いた。

大原が所属している大阪警備府は、史実だと元々は阪神海軍部という名前で設立されており、そこから紆余曲折があつて大阪警備府へと格上げがなされている。戦力として

はどちらかという少数であり、戦艦少女たちや提督たちの活動拠点になった今でも、それは変わっていない。しかし、資源や物資などの要となっており、今では舞鶴や呉といった本州の西日本にある鎮守府への物の流れは、ここが経由地なのである。それであるがゆえに、ここに配属される提督は各鎮守府にいる提督よりも、ある意味洗練された人物が揃っており、大原もそのひとりだった。

そんな場所に戦艦少女が単身で襲ってこようとすれば、それこそ襲ってきた戦艦少女の方が危ないし、舞鶴鎮守府を優先するのも当たり前であろう。

大原は、「ああ、そうだ」と、思い出したように口にした。

「そういうえば、言い忘れてたけど……俺、しばらく舞鶴の方に世話になると思う」

「えっ?」

島田は目を丸くして、大原を見た。

大原は続ける。

「いやねえ。こつち来る時に向こうの先輩たちに、『マジで舞鶴に何かあったら、しばらくは用心棒として向こうにいますわ』って高らかに宣言しちゃってさー。マジで何かあったし、ここにいなきゃならねえわ俺」

「……お前なあ、そういうことはもう少し考えてから発言しろ」

と、島田は呆れ気味に、

「つていうか、そういうことは本当に早めに言ってくれ。んで、来るなら来るで、それも先に言つといてくれよ。舞鶴の提督室はいくらでも空いてるけど、寝床の整理とかしなきゃいけないんだから。ジェルジンスキーは最悪宿舎で過ごせるけど、提督に関してはそういうわけにもいかないんだぞ、お前」

「あー、うん、今度から注意するさ。つてかき、お前、昨日ここに来たばかりだろ？ 部屋ん中まだ広々使えるんじゃないの？ 布団敷くぐらいのスペースはあんだらうよ」

「……」

(……そういうえば、発注したベッドもすでに届いてるはずなんだよな)

もう少し時間がかかるかと思えば、すでに鎮守府内にお届け済みという通知が、つい先ほど届き、倉竹経由でこの職員たちに用意してもらっているところだ。

で、クラクストンが先に頼んだダブルベッドも部屋にはあるわけで——つまるどころは、

「……司令官様。丁度よろしいんじゃないでしょうか」

「だよなあ」

——そういうことである。

自分用に頼んでいたはずなのだが、自分で使う前に他人に使わせるといふ事実、島田は頭を抱えなくなった。

クラクストンのにこやかな表情と、島田の額を抱えて悩ましげにしている様子。そんな両者の様子が噛み合わないように見えたのか、大原とジェルジンスキーは顔を見合わせて、「？」と頭の上にクエスチョンマークを浮かべていた。

島田は笑われるのを覚悟で、大原に打ち明けた。

「チビ助……今、僕の部屋にはダブルベッドひとつと、さつき届いたらしいシングルベッドひとつが存在してな。さすがに男ふたりでダブルベッドはアレなので、お前にはシングルベッドで寝てもらおう」

「え？ ダブルベッドは？」

「……」

島田は顔を真っ赤にしながら、自分を指さしてから、クラクストンにも指をさし、ふたりで使うことを何も言わずに伝えた。

大原は島田のジェスチャーが伝わったようで、ふんふん、と頷いてから、その意味を吟味して、思わず笑い出した。

「ぶふっ……えっ？ 本気？ つていうか、シングルは今日届いたって……昨日はこちらのフレッチャー級のお嬢さんと寝てたってのか？ マジで!？」

「……だつたら何だよ」

「ぶっはあ！ 嘘だろお前！ んで、どつちから手を出したんだよ！ さすがに何もな

「いつてことはなかつたらー！」

「あのなあ！ 昨日出会った娘と、いきなりそういうことに及べるわけないだろ！ いくら女性経験がない僕でも、ムードぐらいは作るわ！」

「少しぐらい強気に出なきや、一生童貞から抜け出せねえぞ、島田ア！」

「あびたんやあ！ もう許さないぞお前！」

大笑いしながら島田をからかって遊んでる大原と、顔を真っ赤にして激昂している島田。こちらは地元の方言が出ているあたり、結構本気なようだ。

ジェルジンスキーは、そんな男ふたりの様子を呆れ気味に見ながら、クラクストンへと話を振る。

「クラクストン。本当に彼とは何もなかったの？」

「はい。私としては何かあっても良かったんですけど、司令官様はその辺しつかりなさってるみたいです」

「はは……なるほどね」

ジェルジンスキーはクラクストンにそう言われて、島田を見ると、非常に納得した様子で頷いた。

「でも、彼とは実質両想的な立場なんでしょう？ ちょっと羨ましいわね」

「いえ……結構もどかしいですよ、そういう関係も」

と、クラクストンは視線を落として、コンソメスープの水面に浮かぶ自分の顔を見つめた。

ジェルジンスキーはそんな彼女に声をかけようにも、何もかも浅はかに聞こえる気がして、思わず口を結んでしまった。昨日出会ったばかりだからこそ、安易に望むことから許されないことがある——ジェルジンスキーは思ったより大変そうだと、クラクストンを見て思った。

一方で、口喧嘩が終わった島田と大原は、お互い息を切らしつつ、殺伐な空気は保つたまま残っている夕食を口にしながら始めた。

そんな中で大原は、島田に質問する。

「そういえば、赤毛のやつから連絡来てつか？ こっちから連絡しても、既読つかないし、電波も届かないばっかだし」

「僕も連絡来てないな。まあ、僕たちよりも早く着任してるし、大変なことが多いんだろうけど……」

と、島田は自分のスマートフォンを取り出して、アプリを開き、その人物のメッセージを見た。最後にメッセージが来たのは彼が着任する前日であり、それ以降はこちらから連絡しても、既読がつかなかった。

島田はギュッとスマートフォンを握り締めながら、その画面を見つめた。

(…大丈夫なのか、アイツ)

008：赤毛の少年と應瑞

ある日の横須賀鎮守府。今の時期は、4月に入ってきた新人の提督たちもそろそろ慣れて、それぞれの仕事に着手できるようになっている頃であった。

そして、鎮守府の中の、とある提督の執務室にて、髪の毛が金色に染まっている青年提督が、赤毛の少年提督に対して強く注意していた。赤毛の少年は、その注意に対して青い瞳に潤みを持たせながら、ペコペコと何度も何度もお辞儀を繰り返して、謝罪していた。

「すみません、すみませんっ……！ ボク、全然知らなくて……！」

「知らないで済むなら憲兵は要らないんだよ。その年齢かつ留学生でここに来たからって胡座かいてるんじゃないぞ！」

「そ、そんなつもりじゃ……！」

少年がしでかしたことは、他の鎮守府ならちよつとしたミスで済まされる程度のことであるが、この横須賀鎮守府内にいる一部の提督たちからすれば、それだけでは済まさない風潮が出来上がっているようだ。

特に——この少年のような若輩の提督に関しては、風当たりが厳しい。

少年は、とうとう3日ほどの謹慎を言い渡されて、その提督の執務室を追い出されてしまった。「バタン！」という扉を乱暴に締める大きな音と共に、少年は廊下へと足を着け、その扉へと振り返る。

そばかすが乗っている鼻に手の甲を乗せ、その辛さから涙と同時に出てきそうな鼻水を抑えていた。

「うう……」

(ボクはこんなことになるために、ここに来たわけじゃないのに……)

少年はそのまま自分の部屋へと戻るために、ゆっくりと歩みを進めた。

少年の提督としての名前は「シャーリー」。自分と同じように赤毛とそばかすが特徴的な、とある小説の主人公の苗字から取って、彼は自らそう名乗っている。

シャーリーは、元々オランダに住んでいた外国人であり、日本に来たのはここ2、3年ぐらい前からのことだった。数年前にオランダ出身の戦艦少女が見つかり、日本の後を追いかけるように同じく兵学校の入学年齢を引き下げが行われ、シャーリーは6歳になると同時に入学。そして、向こうの兵学校で提督という存在に憧れて勉強していた。

また、シャーリーは周りの青年たちよりも優秀な成績を残しており、日本への留学を持ちかけられ、こちらの学校へとやってきたのである。

しかし、シャーリーにとって、それは地獄の始まりだった。

少年にしてはそれなりに伸びている身長と、日本人ではない珍しい髪の毛の色や青い瞳、そして最初は日本語が分からなかったため、数多くの青年生徒たちから舐められていた。特にシャーリーは、この見た目で内面は大人しく、どちらかというところ強気な性格ではないため、やり返すことは愚か、何も言い返すことすらできず、悶々とした日々を過ごしていた。

その矢先に、自分に話しかけてきてくれたのが——島田であった。

島田は、理不尽に周りからかわれられている自分から、心無い青年生徒たちを追っ払い、自分に日本語やその他日本の文化を教えてくれた。もし、島田と出会うことがなければ、日本語もろくに話せないまま、留学を終えていたに違いない。

シャーリーは歩きながら、ジャケットの内ポケットに入れていたスマートフォンを取り出し、メッセンジャーアプリを開いた。

(……今のボクじゃ、島田くんや大原くんと話せないや)

友人からのメッセージの通知は来ているし、しっかりと確認している。けれども、シャーリーは個別チャットを開くことができず、いつもどおり、返信することなくアプリを閉じてしまった。

——島田は、自分がこの国で提督になろうと思わせてくれたきっかけの人物だった。

この国での少年の提督は、一部からの反感が非常に強く、界限での風当たりも相応に

強いと聞く。実際、この鎮守府でも自分に対し、理不尽に厳しい青年提督や職員たちも数多くいた。

気弱なシャーリーは、留学が終わったらオランダの鎮守府でのんびり提督手伝いでもしていようと、留学後の予定を立てていたし、島田にもそのことは伝えたり、なんとか誘ったりもした。島田の成績ならばオランダへの留学もスムーズに進むだろうし、彼のことを考えるとこちらの方が現実的だと思ったのだ。

けれども、島田はそれを断った。

島田はその時、「僕のやりたいことはすべて日本でやらなきゃいけないこと。海外に行くのはそれらが全部終わった後だ。僕は自分の信念を持ってして、この国で提督になる。そう決めてる」——と、シャーリーに返したのだ。

シャーリーは断られた時はかなりショックであったが、島田の「信念」に基づくものがこの国にあるのなら、それを見てみたいとも思い始め、横須賀鎮守府への着任に至ったのである。

シャーリーは留学生枠で周りよりも早めに着任にし、それから2、3ヶ月経とうとしているが、信念どころか、それ以外の何かを見つけないことすらできていない。

少年留学生というだけで、理不尽に他人から罵られ邪険に扱われ、シャーリーの精神はかなりすり減っていた。それでも一時期の島田に比べたら、と思うと、もつと耐えな

ければならない、と思つてしまう。そのぐらい兵学校時代の彼の冷遇具合が普通ではないだけなのだが、この鎮守府での冷遇を耐えなければ見えないものはないと——そう思い込んでしまつていた。

ただ、島田は島田で精神力がタフを通り越している何かだ。当然、シャーリーにもシャーリーの精神力の基準があり、それを超過しようとしているのは言うまでもなかった。

シャーリーはここで自分の部屋に戻ると、そのまま謹慎処分が開始されてしまうとと思うと、耐え切れなくなつてきたのか、唐突に自分の部屋とは違う方向へと足を向け、なんとなく、そちらへと進み始めた。

謹慎処分は三日程度であるものの、その前に少し外の空気を吸つていこう——なんて考えが片隅にあつた。

そして、その考え通り、シャーリーは外に出て、そのまま鎮守府の敷地内の中でも特に人目が少ない場所へと向かつた。

その場所が、鎮守府内にある畑であつた。

ここに立ち入る提督や戦艦少女は滅多におらず、シャーリーがひとりになりたいと思つた時は、ここに足を運んでいる。

そうして、シャーリーがいつも通り、畑の隅っこに座つて少し気持ちを落ち着かよう

とした時だった。

「あら〜……そこに座っているのは誰ですか？」

「うえっ!!」

シャーリーは聞き慣れない女の子の声に驚いて、思わず立ち上がり、そちらへと顔を向けた。

「んー……男の子？　ここの国の方ではないようですね」

こちらの姿や顔を見るなり、きよとんと目を丸くして首を傾げてくる少女。

黒髪に近い焦げ茶色の髪の毛を、頭の下の方でふたつの団子にして結び、前髪の方は切りそろえられている、いわゆるパツツンだった。顔立ちは非常に可愛らしく、くりくりとした黒目がちの瞳が印象に残りやすい。

また、なんといっても特徴的なのは、青を基調とした清朝時代を模した服装だった。濃い目のブルーのケープのような下には、現代の中華服と類似している、浅黄色のゆつたりとした上着を羽織っていた。ただ、プリーツ付きの黒いミニスカートに、白のニーハイと、ボトムスより下に閉しては現代的なファッションも取り入れているようだ。

少女は、おどおどしているシャーリーに近付いて、その服装を見て、「ああ」と納得したように笑みを浮かべた。

「もしかして、ここの提督さんですか？　最近若い方も採用していると聞きましたが、

国外の方も採用なさってるのですね」

「あ……えっと、君は？」

「ああ、申し遅れました」

と、

「私、應瑞つて言います。ここでは軽巡洋艦です。あなたは？」

「ぼ、ボクはシャーリーつて名前です。提督させてもらってるよ」

シャーリーは應瑞に対して自己紹介を終えると、彼女へと質問を向けた。

「君は……その、何をしに来たんだい？」

「ああ、この畑、應瑞もいろいろ育ててるんです」

應瑞は笑みを浮かべて、頷いた。

「私、ここに来て半年ぐらいしか経ってないんですけど、トマトとかナスとか結構収穫できるし、ここに来るのが楽しいんです。シャーリーさんはどうしてここに？」

「う……ちよつと、ひとりになりたくて」

應瑞の素朴な疑問に、シャーリーは少し気まずげに答えた。さすがに初対面の彼女に、全てを詳細に話すわけにはいかない。

應瑞は、ふむ、とシャーリーを見た。

「そうですか……だったら、應瑞はお邪魔でしょうか？」

「いや……ここは君の領地でもあるんだろう？　だとしたら、邪魔なのはボクだし、去るのはこつちだよ」

「……」

應瑞はシャーリーのその言葉を聞いて、何か考えた後、提案した。

「だったら、シャーリーさんも収穫手伝ってくれませんか？　ジツとしているよりも、少しは体を動かした方が、気持ちも楽になるかもしれません」

「えっ……でも、ボク、そういうのやったことないし」

「良いんですよ、何事も経験です。分からないことがあったら、私が教えますよ」

「だ、だったら……」

と、シャーリーは應瑞のその誘いに乗った。

シャーリーは應瑞に教わりながら、畑で育ちきった野菜や果物を次々と収穫していった。シャーリーは成績が良いだけあって、應瑞から教わったこともすぐに覚え、飲み込みも非常に良く、應瑞もそれに驚いていたほどであった。

シャーリーは應瑞に言われるがままに、出来上がっているトマトやナス、それからりんごやオレンジなどを次々と手に取って収穫していった。

途中で、どんなものかとそれらの匂いを嗅いでみると、みずみずしく新鮮な野菜や果物の匂いが、シャーリーの鼻腔をくすぐった。この匂いだけでも、これらがスーパースーパーに

並んでいるものよりも、しっかりと育てられているのがはつきりと分かる。

シャーリーはそれに感動して、思わず声を上げた。

「すごい……ここまで良いものを、この鎮守府で作れるなんて」

「うふふ、大袈裟ですよ。私はいつも通り、育ててるだけですから」

應瑞はシャーリーのそのリアクションに、クスクスと笑みを浮かべた。

「ところで、シャーリーさん。今日の夕食のご予定はありますか？」

「ない、けど……」

「じゃあ、應瑞が作りに行きましようか？ 提督のお部屋って備え付けのキッチンがあ

るんですよ？」

「……… 君が作ってくれるの!？」

シャーリーは目を丸くして、應瑞に聞き返した。

應瑞はニコニコと笑みを浮かべて、「はい」と、その質問に頷いた。

「私の育てた野菜をそんなに褒めてくれるし、そこまで言ってくれるのなら、是非とも食事と一緒にしたいな、と思ひまして……ダメですか？」

「いい、いい、けど……その」

シャーリーは、自分が今置かれている状況を、ポロツと口から漏らした。

「ボク……他の提督たちからの評価、そんなに良くないよ。今日だってちよつとやらか

して、3日ぐらいの謹慎処分とかだし……」

「まあ」

應瑞は目を丸くしつつ、シャーリーの「ひとりになりたい」という言葉に納得した。

シャーリーは控えめに続ける。

「應瑞ちゃんだつて、ボクなんかと一緒にいたら何か言われると思うよ。今は周りに人がいないから良いけどさ」

「そうですか……でも、シャーリーさんはそんな余計な心配なくて、良いんですよ？」と、

「シャーリーさんみたいな方が、致命的で大層なやらかしをしたとは思えませんし……それに、そんなに不安なら、誰かが隣にいてくれた方が良いんじゃないかって、私は思うんです。少なくとも、私ならあなたの側にいられますよ」

「應瑞ちゃん……」

「思うんですよね。今のあなたに必要なのは、支えてくれる人や、安心して休める場所なんじゃないかって。シャーリーさんはここにいて、安心できると思つたこと……ありますか？」

「……いや」

（ない、な……）

シャーリーは應瑞のその質問に対して、首を横に振った。彼にとって、この鎮守府は安心できる場所とは程遠い存在であった。下手をしたら兵学校の時よりも窮屈で、とてもじゃないがくつろげるような場所ではない。

應瑞は「やっぱり」と、呆れ気味に息を吐きつつも、再び笑みを浮かべた。

「ちよつとの間だけでもいいので、應瑞にその場所を提供させてもらえませんか？ このままあなたを放置しておく、どこかで爆発して、大変なことになりそうな気がするんです」

「……うん、いいよ」

シャーリーは應瑞のその言葉に、コクン、と静かに頷いた。

「運ぶの手伝うから……」一緒に帰ってもらってもいいかな？」

「……はい、是非」

應瑞は笑みを浮かべたまま、彼の申し出を快く引き受けた。

——これが、シャーリーと應瑞の馴れ初め話である。

009：逃げ出しましょう！

その日の夜、シャーリーの部屋。

部屋のほぼ真ん中にあるテーブルの上には、先ほど應瑞とシャーリーが収穫した野菜や果物を使った料理が並べられ、室内ではこれまでにない夕食の良い匂いが充満していた。湯気が大量に出て熱々で、全体的な赤みを見るからに辛そうな麻婆茄子、トマトとモツツアレラチーズを交互に挟み、特製のソースがかけられているカプレーゼ。果物はオレンジとリンゴを一口分のサイズに切り、その上からヨーグルトがかけられ、フルーツヨーグルトとして出来上がっていた。

そして、最後に、真っ白くきめ細やかに炊かれた白米が麻婆茄子と一緒に食べてほしいと言わんばかりに、應瑞の手からテーブルの上へと置かれる。

シャーリーはしばらく目にするのがなかったしつかりした晩飯に、瞳を輝かせた。「これ全部應瑞ちゃんが用意したの？」

「はい。本当は栄養のことも考えて、魚料理も用意したのですが、時間がなくて」「ううん、大丈夫だよ。むしろこんな風に用意してくれるなんて、すごく嬉しい！ ありがとう！」

「ふふ……なら良かったです。冷めないうちに、召し上がって」

「うんー」

シャーリーは、いただきませうを言うと、すぐに箸に手をつけて用意された夕食を食べ始めた。

久々の美味しい飯の匂いのおかげか、お腹がすっかり減っていたようで、かなり早い段階で麻婆茄子が入っていた皿は空っぽになり、その次にカプレーゼを平らげ、白米を一粒も残さずお腹に入れると、デザートフルーツヨーグルトへとありつけた。

スプーンを手にして、まずはリングをヨーグルトと共にすくい取り、それを口に含んだ。シャーリつとした食感の良い音が、シャーリーの口の中で響いた。

「うん、やっぱり美味しい！ まさに匂い通りつて感じの味だー」

「あなたのお口に合うようで何よりです」

と、應瑞は笑みを浮かべる。

「ところで、シャーリーさんは普段どんな食事をなさってるのですか？ 食堂は利用されてないんですよね？」

「うん……周り目が怖くてね」

と、シャーリーは苦い笑みを浮かべた。

「普段は購買部でパンやカップ麺買って凌いでるんだ。できれば自炊もしたかったけ

ど、不器用すぎて失敗ばつかでき。だから、まともな食事にありつけたの、本当に久々なんだよね」

「そうでしたか」

應瑞はシャーリーと向かい合う形で、もう一つの椅子へと腰かけた。

「……應瑞、ここに来てから思ってたんです。ここの鎮守府の雰囲気、ちよつと異常なんじゃないかって」

「異常？」

「はい」

應瑞は頷いた。

「ただ、最近はそれが輪にかけてひどくなつたような気がします。内部で何が起きてるのか、シャーリーさんは知ってますか？」

「……ああ」

シャーリーは頷き、話始める。

「あんまり口外していいのか、分からないんだけど」

と、

「ここの鎮守府や連携先の兵学校では、少年提督に対する差別がとりわけ酷いんだよね。僕は留学生っていうのもあって、その辺でいろいろ言われたりしたことあったけど、先

生から嫌われたりとかはなかった」

続けて、

「でも……僕の友人は、先生からも嫌われてたんだ。良くも悪くも物事をハッキリと言
う性格で、大人しく従順な少年を望んでいた上の人たちが、極端な冷遇をしていた」

「冷遇……?」

「うん。その子は勉強はできるし、普通なら首席に上り詰められるレベルなんだけど、上
から嫌われてるせいで、イチヤモンレベルの減点をされて、首席に辿り着くことができ
なかった。提督試験もそれで落とされる可能性があつたけど、彼の赴任先である舞鶴鎮
守府の人がなんとかしてくれたいので、なんとか着任できたらしいんだよね。僕は留
学生枠ってことで、ここに着任したけど……本来なら、ここに居るのは彼だったはずな
んだ」

シャーリーは手に持っていたスプーンを、ギュツと強く握り締めた。

應瑞は悔しさに満ちたシャーリーを見て、何か決意したようで、スツと立ち上がった。
シャーリーはそんな彼女を見て、びっくりしていた。

「應瑞ちゃん……?」

「あの……私、シャーリーさんはここに居るべきじゃないと思ってるんです」
と、

「謹慎期間中に、ここから逃げ出して——舞鶴にいきましよう」

——應瑞ははつきりと、シャーリーに向けて言い放った。

シャーリーはパチクリとしながら彼女を数秒ほど見つめたのち、変な声を出した。

「うええあああッ!? お、應瑞ちゃん!」

シャーリーは思わず立ち上がった。

「自分が何言ってるのか、分かってるの!? そんなことしたら、本格的にボクの首飛んじやうって!」

「でも……これ以上あなたが苦しむ必要もないですよ」

應瑞は目の前で困惑している彼をじっと見据え、シャーリーの手に、自分の手を置いた。

「私、あなたの助けになりたいって思ってます。放っておけないのもそうですけど、あなたのような人がここにいたら、確実に潰されてしまうのも事実だと思っんです」

「で、でも……逃げるたって、金とかはどうすれば」

「ここから舞鶴までの新幹線代ぐらいなら、應瑞が出します。半年しかいませんが、畑仕事などで報酬は結構貰ってますから」

と、

「シャーリーさん。應瑞が勝手に言っているだけなのはそうなんですけど、もし、あなた

があなたのままで提督になりたいと思うのなら、應瑞は手伝います」

「應瑞ちゃん……」

シャーリーと應瑞はそのまま見つめ合い、シャーリーがどうしたものかと考えたところで、コンコン、と、扉を叩く音が聞こえてきた。

「！」

(まずい、今の聞かれた!?)

シャーリーと應瑞は咄嗟にお互い手を離れた。シャーリーは、應瑞に向かってそこにいろと手でジェスチャー。應瑞はそれに従って、そこから動くことなく、黙って席に座った。

シャーリーは扉の方へと向かうと、そのままドアノブに自分の手を置いて、こちらへと引いた。途端、目線の先に見えたのは、自分と同一年ぐらいの少年の姿であった。

「あ……」

黒髪で、目が隠れそうで隠れないぐらいの長さな前髪。隈があつて、眠そうな半目の瞳。前髪は少し癖っ毛はあるものの、そう目立つものではなかった。

少年はシャーリーの姿を見るなり、ビクツと体を震わせると、視線をあちらこちらへと動かし、言う。

「あ……その……えつと。シャーリーさんの部屋って……ここで、合ってます……か

……う？」

「うん。シャーリーはボクだけど……何か用？」

「っあ……その」

少年は、手に持っていた小包みをシャーリーに差し出した。

「お、オレ、吉川って言います。これ……なんかオレの部屋に間違つて届いちゃつて

……。他の人に部屋の場所聞いて、届けに来ました」

「え……小包み？」

（ボク、宅配なんも頼んでないはずだけどなあ）

シャーリーは身に覚えのない小包みに、キョトン、と首を傾げながら、吉川からそれを受け取った。小包みには差し出し人の名前や場所は書かれておらず、匿名配送のようだ。

吉川はシャーリーに物を届け終わると、そのまま扉を閉めようとした。

「じゃあ……オレはこの辺で」

「……待って」

シャーリーは閉まろうとした扉を手でガツチリと押さえて、閉じるのを阻止した。吉川はあまりのシャーリーの腕つ節の強さに、「ヒッ」と小さく声を上げて、彼の顔を見た。

「し、シャーリーさん……な、何か……」

「爆発物とかだつたら困るから、君には生贄になつてもらおう。部屋の中に入つてもらつていいかな?」

「い、生贄!? あ、いや、まあ……はい、持つてきたのはオレだし」

「シャーリーさん……」

應瑞はシャーリーのその強引な切り出し方に、傍目から見て思わず苦笑してしまつた。シャーリーはパツと見る限りでは、大人しそうな少年という印象を受けたものの、その根っこは案外年相応にふざけたい男子のひとりなのかもしれない。

(ここから抜け出すことができれば、シャーリーさんも本来の自分を出せるかも)

そんな年相応の彼を、あんな風に沈めさせてしまつたのは、きつとこの鎮守府の環境が一番の要因であるに違いない、と、應瑞は苦笑すると同時に確信していた。

シャーリーは吉川を部屋の中へと迎え入れ、扉を閉めると、問題の小包みをテーブルの上へと置いた。テーブルの上にはまだ片付けていない食器が、隅の方で重なつており、吉川が訪ねてきたタイムミングがよく分かる部分でもあつた。

シャーリーは應瑞と吉川を一度見てから、小包みの包装へと手をかけた。

包装紙は一般的な両便クラフト紙であり、特に目立つような特徴はない。だからこそ、送り主の見当が付かず、少し怖いということがあるが。

ガサガサと音を立てながら、包装紙をバリバリと剥がしていくと、今度は中から小さ

なダンボール箱が現れた。表面はガムテープでしっかりと固定されており、特にこれといった問題は見られない。至って普通のダンボール箱だ。

「……」

(うーん、本当に中身はなんなんだろう……)

緊張感が部屋の中に走る中、シャーリーはとうとうダンボール箱を閉じているガムテープを剥がし始めた。ベリベリとテープを剥がす音が部屋一体に響き渡り、吉川と應瑞は何が飛び出てくるのかと、ゴクリと唾を飲み込んだ。

シャーリーがドキドキと心臓を高鳴らせながら、ダンボールの蓋を開くと——そこにあったのは、気泡緩衝剤に包まれている黒いUSBであった。

「え……う？」

(これって……PCに挿すアレ?)

PCにはそこまで詳しくないシャーリーは、USBの具体名を脳裏に浮かべることができず、その認識のまま、USBを手にして取り出した。ダンボール箱の中身には、このUSB以外は何も入っておらず、シャーリーは首を傾げながら、「?、?」とひたすら頭の上でクエスチョンマークを作っていた。

吉川は部屋の中をキョロキョロと見渡して、何かを見つけると、戸惑っているシャーリーへとそれを指差した。

「あの……USBなら、パソコンでデータ確認した方がいいかも……。送り主分かって思うし」

「あ、ああ、そうだね」

吉川が指差したのは、ベッドの横のサイドテーブルの上に置かれている閉ざされたノートパソコンであった。

シャーリーは吉川の言われた通り、ノートパソコンを手にして、テーブルまで持ってきた。ノートパソコンの横にUSBを挿して、パソコンの電源を入れた途端、USBのランプが点灯した。どうやら、しっかりと挿さっているようだ。

そうして、デスクトップページへと向かうためのパスワードを入力し、USBのウィンドウを開いた。

「えつと……『student-date』……? なんだろう、これ」

シャーリーはなんの生徒のデータだと顎に手を当てながら、その項目をクリックした。途端、そこに広がったのは——シャーリーや島田と同期である生徒たちの卒業時のデータであった。

「……!」

(ど、どういうこと!?)

マウスのホイールでスクロールすればするほど、個人情報の宝だった。当然、そこに

は島田や大原、それにシャーリーのデータもすっかりと残されており、ただの卒業生のデータではないのは確かだった。

シャーリーがそのデータに驚いていると、今度は横須賀鎮守府の中でも有望株である少年提督・ゼヴィンのページが表示された。

(そういえば……この子、兵学校時代に島田くんのことチラチラ睨んでたつけ)

そんなことを薄らと思い出しながら、ゼヴィンのページを眺めた。

途端、

「……」

(えっ……いや、ハーフなのは知ってるけど……このデータはなんなの!?)

シャーリーの目に映し出されたものは、なんとも信じ難いものであった。彼がロシアの父と日本人の母のハーフであることはよく知っていたし、周知の事実だった。しかし、もうひとつ、ゼヴィンを語る上で欠かせないものがあつた。

ゼヴィンは——母親が行方不明なのである。

ゆえに、ゼヴィンも母親の顔を知らないということになるが——もし、このデータが事実ならば、兵学校で冷遇されていた島田にこれを伝えねばならない。

しかし、メツセンジャーで伝えようにも、それは記録に残りすぎるし、ここの回線を使うのもあまりに危険だった。どういった形でここのネット回線が管理されているの

か、シャーリーには分からない。

だとすれば、彼の答えはひとつだ。

(……ここまできたら、首が切られるのも覚悟だ!)

シャーリーは應瑞へと顔を向けた。應瑞はコク、と笑みを浮かべながら頷き、シャーリーもそれに合わせて首を縦に振った。

(シャーリーさん……行くしかないです)

(ボクが行くしかない)

シャーリーはウィンドウを閉じて、パソコンからUSBを抜いた。

(舞鶴へ!)

010：パルスワードは僕の大切なもの

島田が舞鶴鎮守府に来てから、1ヶ月近く経とうとしていた。

度重なる演習や出撃によって、クラクストンの練度も最初の出撃の時よりも上がっていた。また、島田とクラクストン以外の他の艦船たちとの交流も少しずつではあるものの、深まりつつある。とはいえ、彼女たちはこの鎮守府の主である倉竹に首ったけな者が多く、島田はその勢いに思わず苦い笑みを浮かべてしまうぐらいだった。

島田が午前の演習を終えて自室へと戻り、クラクストンと待機しようとしたところへ、大原はやってきた。大原はニヤニヤと笑みを浮かべながら、島田の部屋へと入り込んだ。

「うつす、島田ア。演習じゃ嫁さんが大活躍だったなあ?」

「チビ助。クラクストンを嫁扱いするのはやめろ、恥ずかしいだろ」

相変わらず調子が良いことを言ってくる大原に対し、島田は呆れながらそう言った。そんな島田の横でクラクストンは頬を朱に染めていたが、満更でもない様子で、ニコニコと笑みを浮かべていた。

そして、島田はテーブルの上でスリープしてあったノートパソコンの画面を点灯さ

せ、新しいメールが来ていないか確認した。大原はそんな島田の姿を、横から見つめていた。

「島田ア、やつぱ赤毛のやつから連絡は来ねーか」

「ああ。メッセンジャーじゃなくても、横須賀名義でこつちに来る可能性もあると思っただけど、反応は皆無だ」

はあ、と島田は溜息を吐いた。

島田は大原が来てから、その赤毛の友人に1く2回ぐらいメッセンジャーでメッセージを送り、ついでに横須賀鎮守府で彼が使っているアドレスにも、軽く連絡を入れてみた。しかし、彼からの反応が来る気配は一切なく、島田たちは不安を募らせるだけだった。

大原は島田からその様子を聞くと、「うーん」と唸りながら言った。

「やつぱり、向こうに直接突撃しても良いんじゃないかね？ 友人訊ねるぐらいなら、向こうだつて警戒せんぞ」

「……いや、横須賀鎮守府には『アイツ』がいるからな」

島田は彼のその提案に対して、首を横に振って反対した。

「僕が向こうに行ったら、アイツがこつちに何してくるか分からないぞ。ただでさえ、向こうはこつちに戦艦少女をよこして潰そうとしたんだ、安易な突撃は避けるべきだぞ」

「まあ、ここから向こうに行く間に襲撃されないって保証はどこにもないからな。いつそのことお前じゃなくて、俺が行くんでも良いってんなら、行くけど」

「そうだな。やるとしたら、そっちの方が安全だとは思う。大阪警備府に提督としての席置いてますって言うっておけば、向こうも手を出そうと思わんだろうしな」

「かなあ。もう少し経って、何もなけりや行くか」

大原はうんうんと島田の意見に頷いて賛成した。向こうの顔だけ見るだけならば、大原が横須賀鎮守府に行つて、最悪写真を撮つておくだけで十分だろうし、島田が動く必要もないであろう。

彼の件はこれで一旦意見を合わせておいて、細かいことはそれを実行する時に——と、島田がメールの到着マークに気付いて、受信箱を開いた時だった。

「……ん、なんだこれ」

差出人不明のメールが、そこにあった。

鎮守府のメールアドレスは、鎮守府間でのやりとりにはしか使わないため、差出人名にはそれぞれの提督名が使われ、紐付けがなされており、それは島田のアドレスも例外ではなかった。メールの内容は、大体演習相手からのお礼のメールや、兵学校時代の友人からのメールが大多数なのが。

そんな受信箱の中に、ポツンと置いてあった、差出人不明のメールは非常によく目

立った。

クラクストンと大原は島田の困惑している様子が気になって、つい、パソコンの画面を覗き込んだ。クラクストンは首を傾げながら、その目立つメールを見る。

「なんでしようか……これ。迷惑メール?」

「だとしたら、どこからか情報漏れてるってことだから、とんでもないことになるぞ」
(よく分からないメールが来たら、とりあえず迷惑メール扱いするクラたんは可愛い)

——そんな島田の邪な考えはともかくとしてだ。

島田としては、送ってきたのはこちらのアドレスを知っている提督だと思っ
て、クラクストンのその意見に対して首を横に振った。島田はこのアドレスで、い
んなサイトに登録はしたことはないため、迷惑メールの線はどう考えても薄い。

島田はそのアドレスが某大手メール会社なのを確認して、そのメールを開いてみた。
「本文は真っ白……んで、添付されてるのはtextのテキストファイルウ!? なんで
メール本文に書かないんだ!」

島田はあまりの内容に、口元を引きつらせた。

とりあえず、zipファイルやexeファイルでのウイルスでないことは安心したが
——まだ、このテキストファイルがどんな内容なのかは不明だ。

まずは内容だけでも確認しようと、島田はそのテキストファイルをクリックして、表

示しようとした。しかし、そのファイルには鍵がかかっており、パスワードの入力画面が表示された。

「おいおい……嚴重だなあ。こんだけ鍵かけるならメール送つて来なきや良いのに」

「そんだけヤバイやつが、このファイルつてあるつてことかあ?」

「や、やはりウイルスが仕込まれてるのでは……?」

島田は呆れ返り、大原は興味津々に画面を覗き、クラクストンはいらぬ心配をしていた。

しかし、島田はただのテキストファイルにパスワードを付けるということは、このテキストファイルには重要なことが書かれているのでは、とも感じ取っていた。

(逆に言えば、ここまでして僕に伝えたいことがある……つて意味にもなるか。パスワードのヒントはつと)

島田が確認したパスワードのヒントは——「君の一番近くにあるもの」。

「僕が一番、近くに……ある、もの?」

島田はそれを見た途端、非常に困惑した。

自分の一番近くにあるものと言えば、眼鏡や衣服、目の前のパソコンだと思うが——この設問は、そういうことを問っている訳ではないことは、薄らと感じ取れた。

クラクストンと大原も、そのヒントを確認したようで、いろいろ提案してきた。

「司令官様の一番近くにあるものと言えば……やはり眼鏡ですかね？」

「案外意外なもんかもしれないぞ。例えば提督手帳とか！」

「いやあ……そんな簡単なものなら、いちいちパスワードにしないとと思うんだよなあ。

まあ、入れてみるだけ入れてみるけど」

と、島田はそのまま思いつく範囲で自分の身近にあるものをパスワード欄に入力し始めた。まずは、物理的に自分の一番近くにある眼鏡、それがダメなら使っている携帯の機種などを手当たり次第に入力してみたが——どれもこれも違うらしく、島田は頭を抱えた。

（うーん、なんなんだあ？ これ以外ヒントがないなら、僕はどうしようもないぞ）

あまりにもアバウトすぎるヒントに、島田はそろそろ心が折れそうになっていた。これこれ数十分程度、大原とクラクストンに手伝ってもらったものの、あれもこれも全部当てはまることなく、頭が締め付けられる思いだ。

そんな思い詰めた島田に、クラクストンは紅茶が入ったティーカップを、テーブルの上に置いて差し出した。

「司令官様。そろそろ休憩になられては？ 大原さんも頭使いすぎたってベッドでダウンしてますし」

「ああ……そうだね。ありがとう、クラクストン」

島田はコク、と首を縦に振って頷き、クラクストンの言葉に甘えることにした。そして、ティーカップの取手を手にして、そのまま中身を口の中へと入れた。疲れている島田の体に、紅茶特有の香ばしい味が染み渡った。

島田は数口分ゴクゴクと紅茶を飲むと、プハツと体内に空気を送り込んだ。それから、その場で頬杖をついて、パスワード画面をぼーっと眺め始めた。

(僕の一番近くにあるものねえ。物理的なものでなければ、気持ち的なもの……なのか?)

島田は手元がちょっと寂しくなつて、なんとなくtabキーを押してみた。途端、パスワードのヒントの文章が切り替わった。

「えっ……?」

島田は突然の出来事に目を丸くして、それを見ていた。

そこに書かれていたのは、

(『君にとってはなくてはならないもの。これからの人生において、きつと必要になるもの。有り体に言えば、"君の大切な人"』——!)

——最初からそう言え!

島田は最初のおんまりなヒントに苛立ちを覚えつつも、これだけ確実に答えはひとつだけであると確信できた。島田はキーボードへと指を当てる。

(あの時、僕を迎えにきてくれたのは)

「C」と「L」、

(少し強引なところはあるけど、それで良いんだ)

「A」と「X」、

(君が最初の戦闘で大破した時、ちよつと泣いたのは内緒だよ)

「T」と「O」、

(……こんな僕でも好きと言ってくれるのなら、絶対に応える！)

最後に、「N」のキーを押して、パスワードは完成した。

あとはエンターキーを押して、送信。島田はドキドキと胸を高鳴らせて緊張しながら、そのパスワードが通ることを祈った。これがダメならば——きつともう他にいい答えは見つからない。

そして数秒すると——認証は成功した。

「……いやったあー！」

島田は感極まって、思わずその場で立ち上がった。

この島田の言動に、ベッドで休んでいた大原も、思わず起き上がり、自分の分の紅茶を入れていたクラクストンは、目を丸くして彼の方を見ていた。

島田はふたりの視線に気付いて、自分があまりにもオーバリアクションをしていた

ことを振り返って、顔を真っ赤にしながら再び席へと着いた。その間にも、大原とクラクストンは島田の方へと歩み寄った。

「司令官様……とうとうパスワードが分かったんですか!？」

「う、うん……」

「島田ア、やったじゃねーか！ 答えはなんだったんだよ？」

「う……お、お前には関係ないだろ！」

島田はクラクストンの手前、パスワードの答えを言うのが非常に恥ずかしく、思わず語気を荒げてしまった。

それでもパスワードの答えを教えろとせがんでくる大原のことは、とりあえず無視して、島田は肝心なテキストファイルの中身へと目を通し始めた。

——このメールが届いた次の日、君の元へと向かう姿があるはずだ。

——彼は重要なものを持ち、君の前に現れる。

——それは君にとつてもプラスになるものだ。

——君が警戒している「運動」へのカウンターにもなるであろう。

——そして、この「運動」は君にしか終わらせることができないはずだ。

——他の提督では、その騒動の主へと逆らう気力さえ持たないからだ。

——しかし、君ならば。勇敢で、立ち上がることができる君ならば、きつとできる。

——陰ながら、君の活躍を応援させてもらおう。

——以上が、テキストファイルの内容だった。

たったこれだけのために、島田たちは悪戦苦闘しながらパスワードを考えていたのかと思うと、少し拍子抜けしてしまった。逆に、このぐらいの内容ならば普通にメールで送って欲しかったと思える程度に、彼らは疲弊している。

大原はガクツツと肩を下ろして、期待外れだと言わんばかりに言葉を放った。

「あーあ……もつと大層なものが書かれてるかと思ったら、全然そうじゃねえのかよ……面白くねえな」

「……」

（いや待て。どこから送られてきてるんだ、これは）

島田は、この内容を見るからに、送信者は明らかに提督のひとりであることは確信していた。

このメールが指す「運動」というのは、少年提督排斥運動のことであろう。そして、この、「彼」が持つてくるものは、そのカウンターになるわけだから——大方、黒幕に近い存在のゼヴィンに対する何かが詰まっているということ。

（呉や佐世保からこのメールが送られてきたとは考えにくい。あの運動が強いのは横須賀だけだ。他の鎮守府や泊地、警備府は反対はいれど、多数派ではない）

と、なれば、このメールが送られてきたのは横須賀鎮守府からと考えるのが妥当であろう。

このメールの送信者が横須賀鎮守府にいれば、ゼヴィンが排斥運動に対して手を貸しているのはどこかで小耳にする話であろうし、となれば、ある程度事情も把握して、こんなことをしてくるのも想定できる。

しかし——それで自分の存在も知っているとすれば、かなり限られた人物になるであろう。

あそこで自分の存在を知っているのは、一部の提督と、赤毛の少年——つまり、シャーリーだけだ。

ただ、あの素直なシャーリーがこんなことをしてくるとは到底思えないため、そのシャーリーの身の回りの人物か、ゼヴィンをよく知る人物か——絞られるのはその二点のみだ。

(……これを見る限り、横須賀は検閲も厳しいのだろうか。こんなメール、直接送つたらお縄だろうし)

文面を改めて見ると、こちらへ来る人物は横須賀から逃亡して、舞鶴へとやってくるという風読み取れなくもない。このパスワードも、それを横須賀サイドへと悟られなかったためのものだと考えると合点が行く。

(何にせよ、明日か。……必要以上に悪いことが起きなければいいけど)

011：目指せ、舞鶴！

——午前4時。まだ明るさは見えていない中で、シャーリーは貴重品や最低限の荷物をリュックにまとめていた。その服装も、Tシャツにジャケット、ジーンズなどといった私服に着替え、自分なりに動きやすい格好で横須賀脱出を試みようとしていた。

そんなシャーリーの傍らで、應瑞は彼の準備が終わるのを待っていた。應瑞はシャーリーへと質問する。

「シャーリーさん、例のUSBもちちゃんも入れましたか？」

「うん」

と、シャーリーは頷くと、リュックサックの横のポケット部分をポン、と、軽く叩いた。そこにUSBが入っているという、シャーリーなりの伝え方であった。

(これだけは、絶対に舞鶴へ——島田くんへと届けなきや)

ゼヴィンのことは風の噂で聞いたことぐらしか知らないシャーリーですら、驚愕の資料が入ったこのUSB——島田に届けることができれば、彼の目的へと一歩近付けることは確定している。

シャーリーがそうして改めて決意を固めていると、シャーリーの部屋の中の残った荷

物をまとめている吉川が、声を出した。

「シャーリーさん。これ、大切なものに分けますか?」

「うん、お願い」

吉川が手にしていたのは、シャーリーが机の中にしまっていた、兵学校時代の写真だった。そこには島田、大原、シャーリーといった、いつもの面々が映されていた。大原がシャーリーと島田の肩を両腕で抱き寄せ、島田は迷惑そうに、シャーリーは困惑している上に、抱き寄せられた勢いで、転びそうになっている場面であった。この写真を撮った頃は、学ランがしっくりきていた時期だった。ここに来てからは、こんな写真は二度と撮れないだろうと、すっかり思っていた。

吉川は3人の写真をジツと見るなり、立ち上がって、シャーリーの方へと近寄り、写真を差し出した。

「シャーリーさん。その……これは、あなた自身が持つていくべきだと思います」

「えっ……で、でも」

「こういう写真は、他のどんな貴重品よりも非常に大切なものだど、オレは思います。オレの名前で、宅急便に任せるのはちよつと違うかも……」

「……分かった。ありがとう」

シャーリーは吉川からその写真を受け取り、リュックサックの中へと仕舞った。

それから10分ぐらいして、3人は最後の確認を行った。これ以上、部屋に残すべきではないものが無いことを断定すると、シャーリーと應瑞はそれぞれの荷物を背負い、吉川へと顔を向けた。

「吉川さん、ありがとうございます。應瑞たちの脱走劇に付き合わせてもらって」

「いや……大丈夫です、うん」

「せっかく仲良くなれたのに……ごめんね、吉川くん。落ち着いたら連絡するから」

「シャーリーさん……ありがとうございます。健闘をお祈ります」

「うん。行ってくるね！」

「行ってきます」

シャーリーと應瑞は吉川にそう言うと、そのまま部屋の扉から廊下へと出て行った。

吉川はふたりが外に出た途端、ポケットからスマートフォンを颯爽と取り出し、すぐに電話番号を入力。スマートフォンのスピーカーへと耳を当て、連絡を繋げた。

「ホーエル。ふたりとも……部屋を出て行ったよ」

『司令官、早朝からお疲れ様です。そうですか、出ていきましたか』

と、

『この一ヶ月、司令官と一緒に鎮守府の様相を見てきましたが、誰かが逃げ出しても当然の雰囲気ですし、こうなるのも必然……ですよね。でも、あのふたりの前に逃げ出した提

督は』

「今のところ全員捕まってる……なんだったかな」

吉川は自分の知る限りの脳内データを思い返しながら、そう言葉を告げた。

「オレがいる情報系の部署はそうでもないけど、海域に向かう部署は少年提督への迫害が凄まじいらしいし、逃げ出して捕まったら言葉通り、首を飛ばされる可能性がある。協力者としてオレが槍玉に挙げられてしまえば……多分……」

『……それでも、シャーリー提督にしかできないことをやらせた……ということですね、司令官』

「うん」

と、吉川は頷いた。

「ゼヴィン提督が異様に敵視している島田提督を調べたんだけど、確かに横須賀鎮守府にいたら、一からすべてを改革させてしまうような逸材だったよ。今はまだ、オレみたく新人だから、その頭角は出ていないけど……近いうちに、彼を中心に何か起きてもおかしくない」

『そして、その彼に発破をかけるために、シャーリー提督に例のUSBを持たせて、舞鶴へ逃亡させると……司令官も大胆な作戦を立てますよね』

ホーエルは電話越しにクスツと小さく笑みを浮かべた。

『ところで、そろそろ私もそちらへと行きましようか。荷物を運ぶの、いくら男の子でもひとりでは無理でしょう?』

「うん、ありがとう。そうしてくれると嬉しい」

吉川はホーエルのその気遣いに頷いて、挨拶を交わした後、電話を切った。

(島田提督には暈しながらも、昨日にメールは送つてある。あとはシャリー提督が逃げ切れれば……!)

——そう、すべては吉川の思惑通りだった。

吉川はゼヴィンとジュツサーノのあの会話を聞き、ホーエルと出会った後、ゼヴィンのことについて徹底的に調べ上げたのである。そして、吉川は情報部特有の技術を使って、ゼヴィンたちの母校からデータを抜き取った。鎮守府から直接データを抜き取ること、それこそ戦艦少女たちのデータや他にも余計な提督たちのデータも抜き取ることに、自分のやりたいことがシャリーたちに伝わらなかつた。そのため、比較的まともかつつも、情報量が豊かな兵学校のデータをUSBへと入れた。

無論、提督たちのデータだけでも送るのも良かったが、今はまだその時ではないと、吉川たちの判断でUSBには保存しなかつた。提督たちのデータを向こうにばら撒くのは、本当の本当に最終手段だ。今はゼヴィンのことに集中してもらい、この鎮守府についてはその後だ。

(一応、ひとりだけ協力してくれる戦艦少女はいるけど……大丈夫なのかな……)

シャーリーと應瑞は暗がりな中、音を立てないように歩き続け、鎮守府の正門まで辿り着いた。まだ消灯時間内のためか、まだ門は閉ざされており、シャーリーが少し触ってもビクともしなかった。

シャーリーは正門に関しては何定の範囲内であり、正門から抜けられる場所はないかと、少し観察し始めた。しかし、どこもかしこも抜け道対策が為されおり、頑丈に閉ざされている。

「シャーリーさん……裏門は？」

「裏門は今パトロールの人がいるから、先にこつちって思ったんだけど……少し待つか」
シャーリーはうーんと悩み、應瑞と共に裏門の方面へと向かい始めた。

途端、

「待って。他にもいい抜け道があること、私が知ってる」

「！」

——聞こえてきた、少女の声。

少女はザツザツと地面を次々と踏みしめながら、こちらへと歩み寄りながら、言った。ふたりはもう見つけたかと、最初は警戒したが、少女の声から出てきたのは、それと

は真逆のことだった。

「私は吉川司令から直々頼まれて、あなたたちを助けにきたの」

少女は金髪のロングヘアを靡かせ、凛々しく釣り上がった赤い瞳で、應瑞とシャーリーを見つめた。露出度の高い白と青のタイトな軍服の腰には、剣が帯刀されていた。

「クリーブブランド級所属、CL—58、デンバー。あなたたちがシャーリー司令と應瑞ね。舞鶴まで一緒に行きましょう」

——デンバーははつきりと、そう、言い放った。

シャーリーと應瑞がぼかんとして彼女の姿を見ていると、ハツとなって、デンバーへと質問した。

「えっ……ちよ、吉川司令って……吉川くんのところの戦艦少女なの？」

「半分正解で、半分外れ。正確には出撃時以外、私は情報部署で仕事してる人が多いの」

と、デンバーはシャーリーたちに背を向けて、振り返る。

「ここで話しても仕方ない。抜け道まで案内するわ」

そうして、デンバーたちは周りの様子を見ながら、人がいないことを確認したり、パトロールがあることが分かると、適当な場所でやり過ごした。

ある程度道を進めたところで、デンバーは話を続けた。

「本来なら、私は出撃が多い部署に配属される予定だったけど……提督たちの空気が異様だったから、知り合いの上司に頼んで、情報部署に配属してもらった。あなたを見る限り私の勤は当たっていたようだな、シャーリー司令」

「……うん、こっちは君の想像以上だよ、デンバー」

シャーリーは頷いた。

「少年提督に対する風当たりが異常に強いのもあるけど、上司と青年部下の間でも関係は良くない。戦艦少女たちに対しては決まり事があるし、君が配属しても矛先は向けられないと思うけど——」

「そうか。状況は思ったより良くないのね」

と、

「逆に、私たちに矛先が向けられないことで、提督間の関係が悪化してるという風には考えられないか? 決まり事ができるぐらいには、戦艦少女に対してひどいことする輩もいたのでしょうか?」

「うん……僕もそう思ってる。ただ、今でも水面下で、戦艦少女たちにひどいことしてる奴もいるんじゃないかなって」

シャーリーは顔を上げた。

「もし、そういう奴らがその延長で少年提督排斥運動を起こしてるとしたら……僕たちは」

「……その運動は、本当に様々な要因が重なってる」

デンバーは頷いた。

「舞鶴にいるあなたの友人は、それに気付いてる上で動いてると思うんだけど、吉川司令曰く、ピンポイントで事を大きくさせているのは、ひとりしかないと聞いてるわ」

「そう。それいつも、そのひとりを追いかけて、なんとか舞鶴に着任した」

シャーリーは頷いた。

「今回はそいつに関しての重要な情報を手に入れることができた。それを届けるのが、ボクたちの今回の目的……って感じ」

「なるほど。だったら、私は間違っていないようね」

デンバーは少し嬉しそうに微笑んだ。

「私が今やっていることは、騎士の名に恥じない行い。吉川司令が私に頼んできたのは、間違いではなかった」

デンバーがそう言うのと、とうとう抜け道へと辿り着いたらしく、デンバーはそちらを指差した。彼女が差した方には、蔦に覆われた柵だ。その先に広がる道にも、人気はほとんどなく、確かに抜け道にはうってつけであった。

「ほら、あそこ。越えるわよ」

島田とクラクストンはシャーリー・應瑞とデンバーが遭遇したほぼ同時刻に起きたように、部屋の中の掃除を行ったり、寝間着からいつもの制服へと着替えていた。

島田はクラクストンとベッドを別れて寝るようになってからは、すっかり睡眠が取れるようになったため、勤務当初に起こっていた不眠症状はほとんどない。クラクストンはダブルベッドでないことに不服を感じているようだが、島田の意向には逆らえない状況であった。

そして、大体午前を5時を回ると、島田とクラクストンは外に出た。まだ太陽が登りきってない時間の間に、少し散歩でもして、体にスイッチを入れるという島田なりに頑張ろうとしている日課だった。クラクストンもそれに釣られて、当然のように外に出ている。

島田は外に出るついでに、港へと足を向けてみた。すると、そこに見えるひとりの人影があった。ボブの金髪ヘアート、豊満でグラマーな出で立ちの女性といえは――

「ヨークタウンさん、おはようございますー」

そう、アメリカの航空母艦ヨークタウン級のネームシップ・ヨークタウン（CV-5）の姿であった。

ヨークタウンはクラクストンのその挨拶に気付くと、笑顔でそちらへと手を振った。

「クラクストン、島田司令官、おはようございます！ 散歩ですか？」

「おはようございます、ヨークタウンさん。まあ、そんなところですよ。そちらは何をなされてるんですか」

と、島田が聞くと、ヨークタウンは返した。

「早朝の周りの素敵？ っていうか、パトロール……かな？ 倉竹司令官に暇があつたらつてお願いされてるんですよ。この間のように、想定外の敵が来るかもしれないからって」

「なるほど。そりやそうか」

ジュッサーノの件で警戒を強めるのは致し方ない、と、島田は納得した。

そうしている間にも、ヨークタウンの飛ばした偵察機の一機がこちらへと戻ってきて、飛行甲板へと着陸した。ヨークタウンは偵察機内にいる小さい何かへと、何やらこそこそと話しかけていた。

「うん？ うん……そう、ありがとう」

ヨークタウンは話を聞けば聞くほど神秘的な顔つきになって、再び、その偵察機を飛ばした。島田はヨークタウンのその様子が気になって、思わず聞く。

「あの、ヨークタウンさん。何かありましたか？」

「うーん……この周辺ではないみたいなんですけど」

と、

「東の方で、深海軍の動きがちよつと変? みたいな連絡を受けまして……確か、今日はこつちに誰か来るんですよね? それに関係してなきや良いんですけど」

「……」

島田はヨークタウンのその言葉を聞いた途端、クラクストンへと目を向けた。クラクストンも同じことを考えているようで、コク、と小さく首を縦に振って頷き、島田に言う。

「司令官様。今日は……」

「ああ、何かあった時のために待機だ」

島田はそう言うのと、ヨークタウンが飛ばした艦載機を見送った。

(……何かしか起こらない気がするぞ、今日は)

012：地下鉄

シャーリーと應瑞はデンバーに助けられながら柵を越え、地面に足を着けた。何かから解放されたように、伸び伸びと腕を天へと伸ばし、日差しが入り始め、ほんのりと明るさが混じってきた空の下で、シャーリーは應瑞へと言う。

「これで第一関門突破だね。次は駅だっけ」

「はい。この時間帯なら、外に出てる関係者はいないと思うんですけど……」

應瑞がシャーリーの言葉に頷くと、デンバーが、そこへと割って入った。

「駅まで行かなくても大丈夫よ。何のために私がいると思ってるんだ？」

「えっ？」

「え……？」

デンバーのその言葉に、應瑞とシャーリーは目を丸くして、キョトンとした。

少なくとも、ここから舞鶴まで向かうには、何かしらの電車や新幹線を伝って向かわなければならぬのだが——デンバーはそれしなくてもいい、と言っているのである。一体全体どういふことなのだ、と、シャーリーと應瑞が問う前に、デンバーはふたりを手招きした。

「ごつちよ、ついてきて」

「は、はい」

そうして、デンバーのその言葉のままに誘われ、シャーリーたちがやってきたのは、鎮守府から歩いて大体5分。道路のど真ん中であつた。

この時間帯なこともあり、車などは殆ど通つておらず、人影もない。

デンバーは腰に携えている剣で、コンコンとコンクリートで出来た道路を叩いて、その音を確認していた。そのまま音が違う場所を発見すると、「ここか」と、小声で呟き、そこへと手を置いた。デンバーが手の平で、その部分をグツと押ししてみると、その部分から正方形に沈み込む。それがある程度沈んだところで、デンバーは地面から手を離し、10秒ぐらい待機した。

途端、

「!?!」

「へ!?!」

應瑞とシャーリーは、自分たちの目の中に飛び込んできた光景に、ビクツと肩を跳ね上げた。

デンバーの手で地面が正方形に沈み込んだかと思えば——その部分が真つ二つに分かれ、地下へと通じる階段が現れたのである。

デンバーは驚いているふたりに向かって、言う。

「ほら、降りて。ここから行けば、舞鶴にはほぼ確実に行ける」

「え、あ………はい………」

と、デンバーはふたりを引き連れて、その階段を降りたのである。

そうして階段を降りた先にはあつたのは——地下鉄であつた。

しかし、普通の地下鉄と違つて改札は無く、ここ始発の電車らしき車両も、1両しかなかった。列車の色は昔の電車を引き取つて再利用しているのだろう、今では見なくなつたものの、どこか覚えのある型の電車だつた。

そして、かなり特徴的なのは——線路の周りが水だつた。

線路の部分はコンクリートでしっかり盛り上げているのだが、その周りが水で埋まつていたのである。そして、この地下鉄は非常に塩の匂いが強く、線路周りの水が海から引つ張つてきているということが分かる。

デンバーはふたりと共に列車の中へと乗り込み、運転室の扉を開きながら、説明した。

「この地下鉄は、日本国内すべてにある鎮守府、警備府、泊地に繋がつてゐる。すべて直通な上に、ここは情報系と鎮守府のトップしか知らない上に、本来は緊急時にしか解放できない場所だ」

「え………じゃあ、僕たちもここに來たらいけないんじゃない」

「そう。でも、私は吉川司令から、君たちを舞鶴へと送り届けるという任務が与えられている。リスクを考えるとこっちの方が良いでしょう?」

「ま、まあ……」

（なるほど……でも、ここを使わせてくれるってことは、デンバーも緊急性が高いと判断してくれてるんだよな。自分の所属してる鎮守府の今後に関わってやることだし）

シャーリーは運転室の中へと入っていくデンバーを見守りながら、應瑞と共に車内の座席へと腰掛けた。

途端、開いていた列車の扉が閉まり、タイヤが回り始めた。ガタンゴトン、と、車内に音が響き渡る。

シャーリーは、ふと、扉の上にある電光掲示板見てみた。そこに映し出された文字は、「次は舞鶴鎮守府」というものだった。

（……本当に、行くんだ。舞鶴鎮守府）

「えっ……地下鉄、ですか?」

島田はクラクストンと共に朝の散歩を終えた後、今日の予定ついて倉竹に話をしに行った。そして、倉竹から言われたのが——鎮守府、泊地、警備府の各地繋ぐ地下鉄の存在だった。

倉竹は、島田の驚きの声を聞くと、頷いた。

「ああ。俺含めた鎮守府の各トップしか知らない存在なんだけど、島田くんも何れその立場になるだろうし……それに、隠れ道にも使えるから教えておこうかと思つて」

と、倉竹は全国版の電車の路線図を取り出し、それを机の上に広げた。島田とクラクストンはそれを覗き込むように見て、倉竹は話に合わせて指を動かす。

「通常、各鎮守府へと向かうには、新幹線や電車、その他必要な路線を利用するだろう？ただ、一般人に紛れて活動するにも限界があるんだ」

と、

「例えば、特に急ぎじゃない機密事項を届ける時は、本州周辺の海をぐるっと回るけど、急ぎの時はそれだと時間がかかる。しかし、そのブツが普通に運ぶにはキツイ時には、一般の電車も厳しい」

「と、なれば……使うのが、倉竹さんの言っている地下鉄なんですな」
「そうだ」

と、

「俺たちも緊急時以外に使うことはないんだ。普段は横須賀の情報部署が管理してるから、使うにはその許可を取る必要がある。よつほどのことがなければ、許可は降りると思うけど、余計なことをしたら降りなくなるから、そこは注意して欲しいかな」

「な、なるほど……」

(余計なこと、ねえ……)

その「余計なこと」という判断をするのは、横須賀鎮守府の情報部署。少年提督が冷遇されてる鎮守府では、自分が何かしでかしたら、確実に許可が下りなくなると島田は確信していた。少なくとも、この地下鉄には極力触らず、すべて倉竹に任せる方向で行こうと、内心決心していた。

一方で、クラクストンはとんでもないことを言い放った。

「許可が下りれば使えるのなら、私と司令官様のふたりきりでの旅行もできるといこうとですか?」

「まあ、有り体に言うともうなるね」

「クラクストン! 倉竹さんも答えなくていいから!」

(そうだった、そういう子だったよ!)

島田は乗り気のクラクストンへと静止をかけ、それに真面目に答える倉竹にも釘を刺した。

クラクストンは島田に言う。

「でも、司令官様。地下鉄でふたり旅って結構ロマンありませんか? 私は興味ありますよ?」

「いやあ……地下鉄じゃ景色が変わらないし、貸し切りで普通の電車乗った方がいいんじゃないかな」

「真面目に代替案を提案する島田くんも島田くんだと思っけどなあ……」

倉竹は苦い笑みを浮かべ、続ける。

「まあ、そういうことだよ。せっかくだから、場所を教えておこうか。使用はダメだけど、列車動かさなきゃいいからね」

「本当ですか。じゃあ、お願いします」

（普段は使われてない地下鉄か……好奇心を擦られるなあ！）

島田はどこことなくうずうずしていた。

少年心としては、そういった類の施設は「怖い」よりも「面白そう」といった感情が優先され、島田も例外ではなかった。

そんな島田の隣にいたクラクストンにも、島田のその気持ちは伝わっていたようで、小さく笑みを漏らしながら、その様子を見ていた。

（司令官様……楽しそう）

それから、島田はせっかくなので大原とジェルジンスキーにも教えておきたいと倉竹に許可をもらってから、丁度朝準備を迎えていた彼らも連れてきた。というのも、しば

らくはここにいる予定なのに、彼らだけ存在を知らないというのも、島田にとっては少々、心が痛むことなのである。兵学校時代からの友人を、そこまでぞんざいに扱うことはできないのだ。

で、待ち合わせの場所にやってきた大原・ジェルジンスキーコンビなわけだが、ジェルジンスキーが爽やかに笑みを浮かべているのに対して、大原は未だに欠伸をして眠たそうな顔をしている。

晴天が見えてきた空の下、倉竹は4人を引き連れながら、目的地へと歩き出した。

大原は欠伸をしながら、島田へと言う。

「ふぁーあ……地下鉄の話はどつかで小耳に挟んだことはあつけど、正直都市伝説だと思ってるぜ」

「ああ、そっちでは噂にはなってたのか？」

「ちよびつとな」

大原は右手の人差し指と親指で、数ミリの隙間を表現する。

「ただよお、俺は信じてなかったぜ。各鎮守府や警備府に繋がる地下鉄が日本の地下にあるなんて、信じられないからな」

「その考え方、浪漫の欠片もないなあ」

大原は変なところで現実主義だなあ、と島田は苦い笑みを浮かべる。

矢先、ジェルジンスキーが言った。

「うふふ、私は噂の時点で面白いと思っただけだね。逆に男の子なんだし、もう少し妄想膨らませてもいいんじゃないの、同志。例えば、地面がパッカーンって割れて、そこから電車が飛び出してくるとか」

「どこのロボットアニメなんだ……」

島田はジェルジンスキーのその言葉に、思わず苦い笑みを浮かべた。ジェルジンスキーは、「あら」と、続ける。

「そういう艦対空ミサイル、今の時代なら実在してるわよ。博識な島田なら知っていると
思ってたけど、そうでもなかったかしら？」

「ああ、そういえばアレってアンタの国の話だったな。この間、どこかのSNSでチラッと見たぞ」

「そう。元・ソビエト連邦、現・ロシアのミサイル艦艇ね。私もミサイルと縁はあるけど、あそこまでカッコよくはならなかったわねえ」

と、ジェルジンスキーは苦笑する。

「最近ではミサイル搭載できる娘どんどん増えてるし、私も改造が来たら、ミサイル巡洋艦として動けるようになるのかしら」

「ミサイルを飛ばしてるジェルジンスキーさん、とても絵になると思いますよ。私は見

てみたいです」

「ふふ、ありがとう、クラクストン。そんな日が来るといいんだけどね」

と、一同が談笑しているところで、倉竹から声がかかった。

「みんな、こつちだよ」

倉竹が指差したのは、ガレージの中だった。シャッターが開かれており、島田たちはその中へと向かう。

倉竹は4人がこちらへやってきたのを確認すると、コンクリートで作られたガレージの奥の壁へと手をついて、そこをぐつと押した。途端、ガレージが細長い形で押し込まれ、しばらくすると、シャッターのように上へとそれが開かれていった。

4人がその光景にあんぐりとしている中、倉竹は案内を続けた。

その開かれた先にあるのは地下へと通じる階段であり、それを降りると、しつかりと地下鉄が存在しているのが確認できた。

島田たちは階段を降りて、海水らしきものが広がっている線路や、一両しか存在していない電車を、まじまじと観察した。

「へえ……地下鉄ってこんな感じなんですね。水が敷かれてるのも何か理由が？」

「戦艦少女たちが輸送するときにも使えたら、つてことで常に水が張れるようにしてあるんだよ。今は列車優先だけど、戦艦少女たちが使うときは、線路が隠れるぐらいには

水を増やすと思う」

「へえ、なるほど」

(結構いろんなことを想定して作られてるんだなあ)

島田は感心しながら、線路を見た。鎮守府特設の地下鉄だからこそ、為せる技であろう。普通の鉄道会社がやってしまったら、安全性がどうだので、確実に大炎上だ。

そうして、島田たちがあれやこれやと眺めていると、倉竹の胸ポケットに入れていた携帯から、電話の着信音が鳴り渡り始めた。倉竹は携帯を取り出して、プラットフォームに鳴り響く着信音を停止。そして耳元へと当て、話し始める。

「お疲れ様です、倉竹です……ああ、横須賀の情報部署の子かい？ うん、はい……はい……え？ 地下鉄内で深海軍の反応？」

「！」

4人は思わず視線を倉竹へと向けた。倉竹は続ける。

「分かった、今こつちも地下鉄にいるから、すぐ動けると思う。うん、了解です。はい」
倉竹は向こうと話が終わったらしく、電話を切って携帯を再び胸ポケットへとしまった。倉竹は言う。

「島田くん、大原くん。申し訳ないが、早速仕事だ。横須賀からこちらにかけて、深海群が地下鉄内を練り歩いてるらしい。ここで戦艦を使うと、地下鉄崩壊の恐れがあるが、

魚雷搭載済みの駆逐艦や巡洋艦なら問題ないはずだ。やってくれるね？」

「はい！」

「もちろん！」

ふたりは頷く。案内された矢先にこんなことになるとは思いませんでしたが、これも経験のうちだ。

ふと、島田はキョロキョロと周りを見渡した。

「でも、電車の運転は誰がやるんですか？ 無人つてわけにいかないでしょう？ 倉竹

さんは別に仕事がありますし」

「それなら、私が運転するわ」

と、ジェルジンスキーが名乗り出た。

「この運転って、基本的に提督か巡洋艦のみって聞いたことがあるから、丁度いいと思うのよ。島田たちに任せるのは本人たちにも荷が重いけど、私なら問題ない。いいわよね、倉竹」

「ああ、この子たちを頼むよ、ジェルジンスキー」

「分かったわ。行きましよう、みんな！」

「はい！」

そうして、島田たちはジェルジンスキーの引率により、現場へ向かう次第となった。

013：傭兵と騎士

この列車に乗りこんでから、大体1時間ぐらい経っただろうか。

地下鉄特有のくぐもった列車の走る爽快の音が、早起きであったシャーリーと應瑞の睡眠欲を掻き立てた。こんな調子なので、今ならなんでも子守唄に聞こえてしまうのである。地下鉄ゆえに外の景色も薄暗い場所一択なもの、彼らの睡眠欲を掻き立てる上で非常に大きい理由だった。景色が変わらない上にそれが暗いと来るのだから、視覚的にも眠りを誘うのも自然のことであろう。

デンバーは運転室と乗客室を遮るガラス窓から、そんなふたりのことを見つめ、少しだけ口元を綻ばせていた。

(あんなに早起きだったんだ、寝てもバチは当たらない)

と思うと同時に、こんな少年少女が脱走を試みなければならぬ鎮守府の状況に、デンバーは悔しさと怒りを覚えた。

(こういうのつてブラック企業……いや、ブラック鎮守府と云えばいいのか。シャーリー司令の部署の状況は想像以上に良くないのは確実。でも、本当にどうしてここまで……)

デンバーは探知機が読み取っている映像を、ハンドルの横にある小さなモニターへと映し出した。

（まあ、なんにせよ、若い芽がここで潰れるのが良くないのは私も思う。それを防止するために、シャーリー司令たちには頑張ってもらわなきゃ）

と、デンバーがモニターを操作し始めたところで、何かに気付いた。

（……この反応）

デンバーはモニターに映し出された周囲の反応を見て、ひどく動揺した。ここは鎮守府の管轄であるがために、部外者が入ってくる隙はない。そう、ましてや深海軍などと言った敵勢力が入ってくることは、まずないはずなのだ。

ないはずなのに——

（……深海軍!?!）

そう、ないはずのものが、反応を示していたのである。

デンバーはその色合いと大きさから見て、敵の編成を推測し始めた。

（旗艦は重巡。随伴に軽巡一体、駆逐艦二体……四体編成。大型艦がないのが救いだけれど……）

デンバーは乗客席でうとうとしているシャーリーと應瑞を見て、ギョツとハンドルを強く握り締めた。

(……私がやるしかない！)

デンバーは前を向き、目の前の光景を見る。

横須賀鎮守府と舞鶴鎮守府間は、途中で大阪鎮守府に寄らない限り一本道。敵の深海軍もそれを分かっているような陣形だった。モニターを見る限り、斜めに並び、こちらの行く末を邪魔している。

——梯形陣。

突撃型の陣形であり、こちらから向こうに対する急所への被弾率も高くなり、防御を捨て去った陣形だ。しかし、こちらへの攻撃力も上昇し、万が一に被弾したら尋常でないダメージをくらう確率は非常に高い。要するに、やられる前にやれ、を、地で行く陣形である。

(私だけで行けば、自動的に単縦陣形扱い。攻撃が当たらなければ勝算自体はあるか……?)

電車内には臨時の主砲、副砲がそれぞれ携帯されており、デンバーならそれらを装備できる。弾薬も装填するだけの量はあるため、早く切り抜けることができれば、彼らはどうにか駆除することはできるはずだ。

(そうと決まれば、ここで列車を停めて——)

デンバーが列車の停止ボタンを押そうとした瞬間、

「ッ!？」

電車が突然ぐらつき、激しく揺れ始めた。

「じ、地震!？」

(シャーリー司令と應瑞は!?)

デンバーは反射的に運転室の扉を開き、乗客室へと足を運んだ。

「シャーリー司令! 應瑞!」

「! デンバー!」

デンバーに名前を呼ばれると、シャーリーは應瑞を抱き締めながら、こちらを振り向いてきた。ふたりは揺れの衝撃で席から離れてしまったらしく、電車の床へと座り込み、揺れが収まるのを待っていた。

デンバーはふたりの視線を合わせるように膝を曲げ、話しかけた。

「ふたりとも、大丈夫?」

「な、なんとか……」

「で、デンバーさん……これは……」

「実は……」

デンバーが質問に答えようと言いかけた途端、鼻腔から焦げ臭い匂いを察知した。

「ふたりとも! 話はあとだ、逃げるぞ!」

途端、デンバーはふたりを両腕で持ち上げ、その足で出入り口まで駆け抜けたかと思えば、足で扉を勢いよく吹き飛ばした。

シャーリーと應瑞は、何が起こっているのか分からないと言わんばかりに、目を回していた。

「で、デンバーさん!?!」

「な、なにを?!」

「——っは!」

デンバーはそのまま外にある水面へと飛び、そこへと足を着けた。そこから舞鶴鎮守府方面へと走り抜け、30秒ほど経ったところで、それは起こった。

「っ!」

「きゃっ!」

「っ、ぐ!」

——列車が、爆発した。

濁った灰色の色の煙が湧き上がったかと思えば、勢いよく炎が噴射して、地下鉄の中で激しい音を立ててきた。

デンバーは、パチパチと鳴らしながら激しく燃え上がる列車を見つめ、緊張から少し呼吸を切らせていた。

「な、なんとか、間に合ったか……」

デンバーは困惑しているシャーリーと應瑞の肩を抱え、前を見た。

「……！」

瞬間、デンバーは赤い目を丸くした。

デンバーの目線の先には、自分と同じ艦種で働いているはずの、戦艦少女の姿があった。

彼女は、線路の上を歩き、こちらへと近づく。

「なーんだ、間一髪で逃げ切ったのかあ。あなたさえいなければ、そのふたりを潰すことができたのにね——デンバー」

そこにいたのは——イタリア軽巡洋艦、アルベルト・デイ・ジュツサーノの姿だった。デンバーはジュツサーノの姿を見た瞬間、應瑞とシャーリーを離して、ふたりの前に出た。

「アルベルト・デイ・ジュツサーノ……!? どうしてあなたが……！」

「アンミラーリオの命令に決まってるじゃん。私がこんなチンケなところに自ら赴くと
思う?」

「……！」

ジュツサーノがニヤリと笑みを浮かべると、デンバーは体の横で拳を握り締めた。

(なんとなく合わないとは思ってたけど……私の勘は当たってたようね)

彼女については、なんとなく風の噂で聞いていた。一部の駆逐艦たちに悪戯を仕掛けたり、表面上では人が良さそうに見えて、裏では相当地の悪いことをしている人物である——デンバーはそう耳にしている。鎮守府内ですれ違って挨拶する時に覚える違和感も、彼女の腹黒さから来ているものだと思えば非常に納得だ。

下手に身内に疑り深くなりたくはなかったデンバーだが——これで確信を得た。このアルベルト・デイ・ジュツサーノは、自分の敵だ。

デンバーはジュツサーノと対峙すると、自分の後ろで燃え上がる列車へと目を向けてから、言う。

「もしかして、この爆発は……」

「うん、私が向こうから魚雷飛ばしてドカーンとね。まあ、あなたたちを処理できなかったのは悔しいけど……デンバー、そっちはこれで深海軍側に対抗し得る手段、無くしたんじゃない?」

「……………」

(手法も弾薬も……すべて爆発の中か)

そう——これで臨時用に車内に設置されていた主砲などの装備類を、デンバーが使うことができなくなってしまった。

デンバーは主砲がなくても戦えるように訓練こそはされているが、剣や素手では彼らにダメージを与えることはできない。対深海群用に開発された弾薬がなければ、戦艦少女と言えど無力なのである。

デンバーがどうしたものかと悩んでいると、應瑞から声がかかる。

「あ、あの……デンバーさん。状況はうまく飲み込めないですけど、應瑞、主砲ならばバックの中にあります」

「……！」

「それに……深海軍の人たち、この先にいるんですよ？ だったら、應瑞たちに行かせてくれませんか？」

「應瑞……」

デンバーは目を伏せる。

「……良いのか。君たちに任せてしまったら、私の任務は」

「良いんですよ。應瑞は古い船ですけど、それ以前に戦闘能力も持つてる戦艦少女のひとりです。それに」

と、應瑞は隣にいたシャーリーの手を握り締めた。

「私には『提督』がいます。この人が側にいてくれるのなら、いつも以上に力を出せそうな気がするんです」

「應瑞ちゃん……!」

シャーリーは思わず目を丸くして、彼女を見た。應瑞は笑みを浮かべて頷く。

「行きましょう、提督。まずは目の前の敵をどうにかしないと」

「……そうだね、行こう!」

と、シャーリーは應瑞の言うことに首を縦に振ってから、改めてデンバーへ目を向けた。

「デンバー、ここまでありがとう。舞鶴に辿り着いたら、君のことを迎えに行くから」

「……分かった。私はジュツサーノをなんとかする」

デンバーは小さく笑みを浮かべて、とうとう剣の鞘を抜いた。

ジュツサーノはそんな3人を見て、嘲笑う。

「ふーん……なるほど。舞鶴の男の子の友達だって聞いてたけど……まずはここでダメージを受けてから行つて——!?!」

ジュツサーノは主砲を應瑞たちへと向けた——が、その前にジュツサーノの首の横にデンバーの剣があてがわれる方が早かった。

デンバーは赤い瞳で彼女を睨み付け、剣と首の数ミリ間を徐ろに動かした。

「……あなたの相手は私よ、アルベルト・デイ・ジュツサーノ。彼らに傷ひとつ付けさせはしない」

「……ッ！」

そうしている間にも、應瑞とシャーリーは舞鶴方面へと足を運び、駆け出した。

デンバーは自分たちを横切っていくふたりを横目で見つめて、向こうへと行つたのを確認してから、ジュツサーノの首から剣を離した。

ジュツサーノはフツと小さく笑みを浮かべる。

「デンバー、あなたがその気なら、戦つてあげてもいいよ。傭兵と騎士、どちらが強いかな勝負しよう」

「望むところよ。ただ……深海軍と手を組んでいるあなたには負ける気はしない」

「へえ……煽つてくれるじゃん！」

途端、ジュツサーノの主砲はデンバーの方へと向けられ、砲弾が次々と放たれた。

「この程度ッ……！」

デンバーはその砲撃の動きに合わせて走り、ジュツサーノの弾丸は次々と海水へと落ちていく。

ジュツサーノはデンバーの動きを見て、「ふーん」と妖しく笑みを浮かべながら、何か企んでいるような仕草を見せた。

「……だったら」

ジュツサーノは太ももに装着していた魚雷を一本取り出して、海水に向かって投げ

た。

「これどうかな、つと！」

途端——魚雷は猛スピードでデンバーに向かって駆け出した。海水の中を次々と掻い潜り、何もかもを吹き飛ばす勢いがあつた。

ジュツサーノの攻撃を避けるために、海水の方へと足を置いていたデンバーだったが、すぐに線路へと昇ろうとした。

「ツ！——魚雷なら、いくらでも避け——ツ！」

——が、動けなかった。

デンバーは一体何事かと自分の足元を見ると——海藻がこちらの足へと絡んできていたのだ。

「なっ……………！」

「足元にもちやんと気を遣わないとね、騎士さん？」

「……………！」

（こうなつたら……………！）

デンバーは唐突に海水の中へと膝をつけ、その場で跪いたかと思えば、自分が手に持っていた剣の先を、自分の体の前に突き立てた。

（剣を盾にしても——！）

そして、魚雷がデンバーの元へと辿り着いた途端、爆発した。

爆風は周りの空間を包み、爆発で散ったのであろうデンバーの剣の銀色の破片が、辺り一面へと散っていった。

ジュツサーノはこちらへとやってくる爆風に、勝利を確信していた。ここまで爆発していれば、デンバーは普通の姿ではいられないと——そう思っていた。

しかし、煙が晴れて、その実態が見えてきたところで、ジュツサーノは目を丸くして驚愕した。

「なっ……」

「……あなたみたいな紙装甲ではないのよ」

——デンバーは、なんとか耐え切った。

服と体自体は煤汚れてボロボロではあったが、耐久としては中破一步手前でなんとか止まることができた、といったところか。しかし、それと引き換えに、デンバーの剣はすっかり折れてしまい、少なくとも戦闘には使えなくなつた。

デンバーは立ち上がると、ジュツサーノへと質問を投げる。

「アルベルト・ディ・ジュツサーノ。さつき、あなたは私が深海軍側と手を組んでると聞いて、否定しなかつたな。そして、あなたのところの司令の命令でここに来てる……となれば、この先にいる深海軍も……」

「そうだよ。アンミラーリオのツテ」

と、ジュツサーノは髪の毛を片手でいじくり回す。

「ただ、アンミラーリオにそんなツテがあるのかはよく分かってないし、それには答えられないよ。ここに派遣したのは、奴らが重要な資料を持つてるからって言うてたけど」

「……」

(つまり、シャーリー司令が持つていこうとしているのは、彼女の司令の資料……?)

——と、なれば、ジュツサーノの提督こそが事を大きくしようとしている張本人ということだ。

デンバーは海藻が足に絡んでいないことを確認すると、彼女へと一本近付いた。

「……あなた、とんでもない人に従ってるのね。傭兵だからって、もう少し司令の人選は考えた方がいい」

「そうかな?」

ジュツサーノはデンバーに言われるとキョトン、と首を傾げてから、目を伏せた。

「……彼の指示は、私じゃなきゃ従えないものばつかだと思うよ」

そうして、ジュツサーノは再び顔を上げ、ありつたけの主砲の銃口を一斉にデンバーへと向けた。

(さてと——あとは、ここで騎士さんに一発当てればいいわけね)

「ここで死んで、騎士さん」

014：敵艦隊発見！

島田たちが横須賀行きの地下鉄列車へと乗り込んでから、結構な時間が経った。島田は胸ポケットに入れてあるスマートフォンを片手で取り出し、現在の時刻を確認する。すると、この列車に乗ってから1時間経とうとしていた頃だったようだ。島田はそれだけ確認すると、スマートフォンを元のポケットへと入れ、自分の座っている座席の背もたれへと、自分の背中を預けた。

景色が地下鉄特有の薄暗いコンクリートから変わらない中、時間の経過をどう感じて良いのか分からなかった。地下鉄自体は何度か乗ったことはあるものの、こうして景色が変わらないことが苦痛に思うなんて、想像以上のことだ。

——そんな中でも、変わらないのがクラクストンだった。

クラクストンは、自分の右横に座っている島田の右腕に自分の両腕を絡め、その身を島田へと寄せていた。島田はクラクストンのくつつき具合に困惑しつつ、彼女へと声をかけた。

「その……クラクストン。車内の広さはあるんだし、もっとこう、自由に座ってくれないかな」

「はい、だから自由に座つてますよ?」

「僕が言いたいのはそのじゃなくて……」

(これから戦地に赴くつてのに、なんだこれは)

島田は相変わらずなクラクストンに困惑していた。島田としては、これからの戦闘にそれぞれ思いに耽ることがあるだろうからと、お互い意識を集中して離れて座つてる場面を想像していたのだが——これではそれとは真逆である。

(さすがにこんな状況で、「クラたんフヒヒ」とか言える僕でもないんだよなあ。できれば戦いに集中したいし、こういうことやめてほしいんだけど……)

と、島田が頭を悩ませていると、クラクストンが言葉を続けた。

「……司令官様は、私とくつつくのが嫌ですか?」

「えっ……あー……嫌というか……その、場所を弁えてほしいというか」

島田はしどろもどろに視線をあちらこちらへと泳がせながら、続ける。

「これから戦地に行くわけだし、こんなことやつてたら、肝心な時に切り替えも難しくなるんじゃないか? それに、ほら、今日はチビ助とジェルジンスキーもいるし」

と、島田は運転室で列車を操縦しているジェルジンスキーと、それを横から眺めている大原へと視線を移した。ふたりは目の前に敵がいるか確認しながら、この列車を進めているようだ。

クラクストンは「あら」と、笑みを浮かべた。

「あのおふたりなら、目の前のことに集中してますし、大丈夫ですよ。司令官様が気にすることでもなんでもありません」

「だ、だからって……」

「それに、長い時間くつつくなどという方が嫌です。司令官様と私は行動によつて、お互いの気持ちを示さなきゃいけないんです。だから、私は時間があるのなら、司令官様とくつつきたい意思を見せてるんですよ？」

「それって、このタイミングで出すべき意思なのか？」

「んもう、司令官様ったら……そうやって、恥ずかしがらないでください」

クラクストンは一層島田の腕を強く抱き締めた。そして、なんとなく、彼へと聞いてみた。

「ねえ、司令官様。もし、事が解決したら、司令官様はどうするのですか？ 普通の男の子に戻ってしまうのですか？」

「……さあ、よく分からない」

島田は、自分の向こう側にある窓へと視線を送った。

(……そもそも、なんでこの世界を目標そうと思っただんだけ、僕)

島田は——すっかり昔の純粋な憧れを遠い過去のものにしてしまったなあ、と、天井

へと目を見やった。

最初はそれこそ海への強い憧れと、それに携わる職に対する羨望があったような気がする。兵学校に入つて、勉強して、ゼヴィンや教師たちからその夢を邪魔されているうちに、そんな憧れと羨望といった気持ちを失つていつてしまったのだろう。

——けれども、島田はどうしても引つかかる。

(絶対になる、というきつかけに何か……強いものが関わってるはずなのに、思い出すことができない)

そして、クラクストンと島田の会話はジェルジンスキーと大原にも伝わっていたようで、ジェルジンスキーはハンドルを操作しながら、呆れ気味に呟いた。

「まったく、イチヤイチャするだけなら場所を弁えて欲しいわね。ここは全鎮守府管轄の地下鉄なのよ?」

「良いじゃねえか。お堅い島田にやあ、ああいった刺激も必要なのさ」

と、大原は苦い笑みを浮かべて言う。

「にしても、アイツがフレツチャー級のお嬢さんと仲良しなのは、本当にびっくりしたよ。普段は女の子に冷たいのにさ」

「冷たい? 女性嫌いなの?」

「いや、単純にアイツが女子耐性がなさ過ぎるだけ。……だとは、俺も出会った時は思ってたんだがなあ」

大原は眉と眉の間を近付ける。

「あのお嬢さんと一緒に行動するようになってから、なんか態度が軟化してんだよな。事務的な対応は変わってないけど、ちよつとは笑ってくれるようになったかな」

「本当にちよつとした変化ね。あの子のお陰で慣れたんじゃない？」

「んー……なんだろうなあ」

大原はガラスに写っている自分たちの姿を見ながら、続ける。

「どっちかというと、自分の認める女以外近付けないみたいな……そんな拒否の仕方だったんだよな。本人は女子慣れしてないだけって笑いながら言ってたけど、それが本当なのかどうか、俺はちよつと疑うね」

「だとしたら、クラクストンと話してるのも奇跡ってこと？」

「いんや、奇跡つてもんじゃないやねえ。マグニチュード1.3の地震が来て、地球が崩壊確定しても良いレベルだぜ」

と、大原は首を横に振った。

「しかもあのお嬢さん、島田にベタベタくっついてんだろ？ 前のアイツなら、そんなことされたら拒絶すると思うんだけど……やっぱ、あのお嬢さんに何かあるとしか思え

ん」

「普通なら考えすぎだと思うけど、同志がそう言うのなら、きっとそうなんでしょうね」
ジェルジンスキーは少し口元を綻ばせた。

「でも、他人の恋沙汰に口を出す前に、自分の恋沙汰も意識して良いんじゃない？」
「こういうのは自分の気にしたって面白くねえだろ。他人の見てるからいいんだよ」
「……同志のバカッ」

ジェルジンスキーは相変わらずな大原の態度に、ぶくつと頬を膨らませて、ハンドル近辺のモニターへと目を移した。探知機が読み取っている反応がここに映し出されるわけだが——ジェルジンスキーはそれを見て、ハツとなり、大原に言った。

「同志。島田とクラクストンに戦闘の準備を促して」

「……来たか」

「ええ」

ジェルジンスキーは大原の言葉に、コクン、と首を縦に振った。

この列車からそれほど離れていない場所に、敵艦隊の姿がある——モニターはそれをジェルジンスキーに教えていた。

應瑞とシャーリーは線路の上をひたすら走り続けていた。年相応・体格相応の体力し

かないふたりは、途中から息切れ気味になっていたものの、デンバーが作ってくれた逃げ道を途切らせるつもりはなかった。

應瑞は走る中で、深海軍たちがこちらへと近付きあることを、その体をもって感じていた。

（駆逐艦程度の索敵能力しかないけど、なんとなく、こつちに近付いてるのは分かる……！）

應瑞はギュツと拳を握り締めた。

戦艦少女には電探や偵察機を乗せる以外に、艦船本人の索敵値というものが設定されている。應瑞は古い艦なためか軽巡洋艦としての索敵値は低く、駆逐艦程度のものでしかないが、それでも近付けば近付くほど、相手の動きがなんとなく分かるのである。

そうしてシャーリーと應瑞が辿り着いたのは、舞鶴直通の線路と、大阪警備府経由の線路の分かれ道。ふたりは当然、舞鶴鎮守府方面へと向かうため、そちらへと足を運んだ。

途端、

「ッー」

「きゃっー」

ふたりの間を横切るように、光った物体が空気の中を駆け抜けた。物体はふたりの後

ろまで向かうと、途中で壁に当たったのか、強い爆発音と共に煙の匂いがこちらまで漂ってきた。

シャーリーは近くの壁を手をつき、びっくりしてその場でしゃがみ込んでいた應瑞に声をかけた。

「應瑞ちゃん、怪我は？」

「は、はい……應瑞は大丈夫ですけど、提督は？」

「うん、ボクも大丈夫。でも、これって……」

そうしてシャーリーが、自分たちの道へと目を向けた瞬間だった。

「！」

紫色のオーラをまとい、見るからにこの世のものではない造形が、シャーリーの青い目の中へと飛び込んできた。驚くほど真っ白い肌に、真っ白い髪の毛。しかし、その艦装や服装は、黒く、その中にはオーラと同じように紫色のラインが引かれていた。

——とうとう深海軍の、お出ましだった。

向こうの詳しい編成としては、重巡Ⅰ級Ⅱ型が一体、軽巡Ⅴ級Ⅰ型が一体、駆逐Ⅰ級ⅠⅠが二体。計四隻編成だった。

（深海軍……！）

シャーリーはその姿を見て、思わず動揺を覚える。船から遠目で見たことはあつた

が、こうして対面すると、一般人で足が竦む迫力がある。

(應瑞ちゃんたちは、いつもこんな奴らと戦っているのか。ボクたちを守るために、努力してくれている)

シャーリーはふと、應瑞へと視線を向けた。

應瑞は何か決意を固めたようにシャーリーへと視線を送っている。

「應瑞ちゃん……」

「應瑞はいつでも大丈夫です」

「……うん」

そうしてシャーリーが前を向いた瞬間、

「ッ！ また!？」

應瑞が主砲を準備する暇もなく、今度は駆逐艦二体から一斉射撃。それぞれシャーリーと應瑞を狙っているらしく、砲弾も各々へと向けられている。

「提督ッ！」

應瑞は自分がシャーリーを助けられれば、自分に向けられている砲弾は向こうになると考え、真つ先にシャーリーへと足を向け、その身を投げ出すように、自分の体で彼の体を強く押した。

「ッ！」

そのおかげか、ふたりに向けられた砲撃はなんとかこちらへと当たることなく、壁に穴を開けるだけの結果になった。應瑞とシャーリーは海水の中に膝や尻をつけ、向こうの攻撃が壁へと当たる光景を眺めていた。

應瑞はシャーリーの肩をギュツと握り締め、言う。

「まさか、戦闘能力がない提督への砲撃なんて……」

「それほど向こうも本気つてことなのかな」

（普通の深海軍がこんなところに乗り込んでくるなんてそうそうない……だとしたら、やっぱり）

シャーリーの推測でしかないか、先ほどこちらに仕掛けてきたジュツサーノの発言といい、提督にまで攻撃を仕掛けてくるこの深海軍たちの性質といい、そうとしか考えられない。そもそもジュツサーノは、「彼」の秘書艦だ、なんらおかしくない話である。

（舞鶴に向かうための障害物としては十分すぎる。あのルー！）

少なくとも應瑞には聞かせられない母国の罵倒文句を、心の中で唱えながら、シャーリーは彼女と一緒に立ち上がった。

途端、今度は、深海軍4体はその銃口を一斉にこちらへと向けた。

「！ 本格的に一斉射撃をするつもりか！」

「2人でダメなら、全員で……提督、この場合は……」

「とりあえず、どこか避けられる場所を——」

(ここで提督のボクまで大破したら、何も残らないぞ！)

シャーリーはそう思つて辺りをキョロキョロしたが、この地下鉄内で防壁になりそうなものはどこにもなく、ならば先ほど来た道は、と思つたが、そちらも四体に囲まれている現状、使うことはなかつた。

4体の銃口に次々とパワーが集まり、その時は刻々と迫つていた。

シャーリーは次第に緊張を高めていき、動揺を強くさせていた。

(せっかくならまで来たのに、何もできないまま終わるのかな……)

さつきは應瑞が体を張つてくれたおかげで、お互い無事でいられた。けれども、それは應瑞に戦艦少女という特性があるからこそ出来たことだ。例え應瑞が盾になつてダメージをくらつても、治癒はできる。けれども、普通の人間であるシャーリーにはその能力はない。

(でも、ボクが彼女のためにできることは……)

——死なば諸共だ。

シャーリーは應瑞を自分の後ろへとやった。應瑞は目を丸くして彼の姿を見る。

「て、提督!」

「君だけでも、乗り切つて」

「そ、そんな……ダメです！ 提督！」

應瑞の声が震え、シャーリーの服を掴んだ。もう時間はない、こうするしか應瑞を守る方法はないと——シャーリーが覚悟を決めた時だった。

「敵艦隊発見！ 一気に攻め込みましょー！」

その軽やかな少女の声と共に、駆逐艦が一体、爆発音と共にダメージを受けた。真っ黒な魚の口の中に少女が入っているような不気味な物体は、一気に大破まで追い込まれていた。

「！」

應瑞とシャーリーは顔を上げて、そちらへと目を向けた。残りの深海軍たちもふたりと同様のリアクションを取った。

「司令官様、深海軍と同時に、ふたりほど発見しました。片方は女の子……多分戦艦少女。もう片方は赤毛とそばかすの男の子です」

銀髪の少女が、銃口から煙が上がっている主砲を片手にしながら、インカムを通して自分の提督へと声を通した。

少女はシャーリーと應瑞の姿を見るなり、優しく笑みを浮かべた。

「フレッチャー級リトル・ビーバーズのクラクストンです。あなたたちを助けに来ました」

015：合流

「クラクストン……?」

シャーリーと應瑞はぼかんとしながら、目の前に立っている少女——クラクストンを見つめた。クラクストンはクスツと小さく笑みを浮かべると、大破して倒れている駆逐艦を横切り、こちらへと歩み寄った。

クラクストンはそのままふたりのことをじつと見ると、うん、と小さく頷いた。左耳に装着しているインカムから音声が届くように耳を押さえた。

「司令官様。このふたりはそのままこちらへ連れて行った方が良いですか? ……はい、分かりました。お待ちくださいね」

クラクストンはコクコクと首を縦に振って頷き、一旦インカムの音声を切ると、再びシャーリーたちへと体を向けた。と、右手を彼らに伸ばして、言う。

「じゃあ、行きましょうか、ふたりとも。司令官様も待つてます」

「あ、えつと……應瑞ちゃん、行く?」

「……はい、行きましょう。でも」

シャーリーが困惑しながら質問すると、應瑞は笑みを浮かべて頷いた。しかし、その

一方で気がかりなのが——と、應瑞の目線はクラクストンの後ろで睨み付けてくる深海軍の存在であった。

應瑞は背負っていたリュックサックを下ろすと、自分の主砲を取り出した。中国150mm火砲——火力としては心許ない小型主砲ではあるが、應瑞が使うとなるとこれが一番しつくりくる装備だ。應瑞は主砲の様子を確認しながら、クラクストンへと言葉を続ける。

「クラクストンさんでしたっけ。敵に関しては、どうしますか？」

「司令官様には、『どう考えても邪魔だから潰せ』って言われてます」

「分かりました。……しつかり『おもてなし』しなきゃ」

應瑞はクラクストンから許可が下りると、普段の彼女からは考えられない、不気味な笑みが浮かんだ。目元も暗く、瞳もどこを見ているのか分からないぐらいに、光が入っていない。

シャーリーは今まで見たことがない、そんな彼女の様子にビクツと肩を跳ね上がらせるものの、應瑞がやる気ならば任せるしかない、自分に言い聞かせた。

應瑞はシャーリーへと言う。

「私、動きはクラクストンさんの方に合わせるので、提督は先に向こうへお願いします」
「應瑞ちゃん」

「クラクストンさん、いるんですよね？ この先に」

「はい。この先に舞鶴から出発して、停車してる列車があります。そう遠くはない場所のほずです」

クラクストンは應瑞から質問を投げられると、コク、と首を縦に振って頷いた。

應瑞は、「分かりました」とだけ言うと、シャーリーに再び言葉を投げた。

「提督。後のことはお願いしますね」

「……それはこつちの言葉」

と、シャーリーは顔を上げて、

「また、後でね。お互い無事を祈って」

「はい、ありがとうございます」

ふたりは互いに頷き合った。

シャーリーは應瑞のその言葉を聞くと、そこから駆け足で舞鶴方面へ去ろうとしたが、すぐに敵重巡が前に出てきて、彼の行く手を阻んだ。シャーリーは思わず足が止まりそうになるが、敵重巡にはすぐに應瑞から魚雷のプレゼントが贈られた。

「守り抜きますッ！」

魚雷は敵重巡の足元にすぐに辿り着き、彼女へと強いダメージを与え、爆発した。しかし、大破までには至らなかつたようで、傷は付いても倒れることはなかつた。

シャーリーはその情景が気になったものの、自分の目先のことを考えて、そちらの方を一切振り返ることはなかった。

魚雷爆発と共にシャーリーはその場を離れ、この先にあると思われる列車に向かい、ひたすら駆け抜けていく。

シャーリーはしばらく海水の中で走った後、線路の方へと上り、その上を走り始めた。後ろの方から激しい砲撃音が聞こえ、クラクストンと應瑞がひたすら処理しているのが嫌でも分かる。

(そういえば、クラクストンさんに島田くんのこと聞けば良かったかなあ。彼女が舞鶴にいるなら、顔も頻繁に合わせてるだろうし)

シャーリーは走りながら、そんなことを考えていた。

自分が勝手に連絡しづらいからとメッセセンサーアプリでメッセージを送ることがなかったゆえに、間接的にでも彼の様子は知るべきであつたであろう。

それと、懸念材料として、

(未読スルーしてるくせに、一丁前にこつちに逃げ込むなって思われそうだなあ。島田くん、怒りそう……)

——そんな光景が、シャーリーの脳裏へと浮かんだ。

彼が知っている島田は、筋を通し、とにかく正論で相手の形勢を崩れさせるといふ、徹

底的な「馬鹿には厳しい」姿勢を取っている。それが大人相手でも発動するので、兵学校時代の教師たちも、脅威だと感じ取っていたに違いない。それは友人でも指摘という形で有効であるし、遠慮ない姿勢は誰相手でも変わらない。

(でも……島田くんに届けるべきものがある。それだけはなんとか彼に渡す！)

まずはそれを渡して、彼に怒られるのはその後である——シャーリーは薄暗い線路の上を走り続けた。列車を照らす光の姿は、こちらの目の中へと入ってきている。

シャーリーが向こうへと辿り着くのは、そう遠い未来ではなかった。

島田がインカムでクラクストンの様子を聞く限り、敵艦隊への攻撃は順調そうであった。駆逐艦1人に、小型に近い軽巡洋艦1人と、編成としては心許ない部分はあるけど、ふたりの練度がそのデメリットを跳ね返してくれるのなら、それに越したことはないだろう。

島田はインカムを一旦切ると、外で待機している大原とジェルジンスキーの方へと、扉から顔を覗かせた。そして島田はジェルジンスキーへと頼む。

「ジェルジンスキー、そろそろ彼女たちのお迎えを頼まれてくれ。戦いの方は快調ではあるけど、他に何かがあるか分からないから」

「ええ、分かったわ。そういえばクラクストンと軽巡洋艦の彼女の他に、もうひとり、男

の子がいるって聞いたけど」

「ああ、それは僕たちの友人だと思う。クラクストンから特徴聞いたけど、まんま赤毛……だよな、チビ助」

「だな。本人の確証はないけど、俺らと同年代なら確率は高えな」

大原は島田の意見に頷き、ジェルジンスキーの背中をぽんと叩いた。

「んまあ、そんなわけだ。ジェルジンスキー、頼むぜ。フレッチャー級の嬢さんは丁重に扱わなきゃ島田が怒るから、そこだけ注意な」

「な、何言ってるんだよ、お前は。コイツの言うこと気にしなくて良いからな」

「はいはい、分かっているわよ。行ってくるわね。」

ジェルジンスキーはクスクスと笑みを浮かべつつ、手を振って、クラクストンの元へと向かおうとした、その時だった。

「あらっ？」

ジェルジンスキーはこちらにやってくる人影に気が付いて、足が止まった。大原はそんな彼女に対して、質問する。

「どうした、ジェルジンスキー。敵艦隊がこっちにも来たか？」

「……いえ、敵艦隊ではないみたいね」

ジェルジンスキーはクスツと小さく笑いながら、島田と大原にそちらを見るようにと

指差した。

大原と島田は互いに顔を見合わせながら、「？」と首を傾げて、ジェルジンスキーの誘導のままに、そちらへと視線を向けた。

少年たちの目に飛び込んだのは——こちらと同じ年代の少年の姿だった。

こちらへと駆け寄ってきて、近づいてくるたび、赤毛の髪の毛や、青い瞳、そして鼻周辺のそばかす——少年たちは彼のその姿をよく見知っている。

——シャーリーのお出ました。

彼がこちらへと来ると、外にいた大原が先に彼の元へと駆け寄った。

「んだよ、元氣じゃねえか、お前よお！」

「お、大原くん!? なんでここに!?!」

シャーリーは大原の姿を見るなり、心の底からびつくりして目を丸くして彼の姿を見た。

大原はシャーリーの近くまで来ると、すぐにその腕を掴み列車側へと引っ張った。

「ち、ちよつ、大原くん!?!」

「おめえには聞きたいことたくさんあんだよ。おらつ、あれが我らがリーダー、島田だぞ」

「あ……」

大原に引つ張られ、背中を押されて、辿り着いた先には——列車の入り口ですつと待機していた島田の姿があった。

島田はこちららへとやつて来たシャーリーの姿を、ジイツと見据え、何も責め立てることもなく、かと言って労りの言葉をかけるわけでもなく、ただ、ひたすら彼の姿を見ていた。

シャーリーは黙つたままの島田にビクビクとしながら、視線を逸らしたりなんざりして、彼の目線から逃げようとした。

彼に何をどう言われるのだろうか——シャーリーは緊張したまま、胸元でギュツと拳を握り締めた。状況が状況だ、自分から話しかけることなんぞ到底できない。シャーリーは額に青筋を浮かべながら、彼の言葉を待った。

そして、島田はシャーリーの姿を1分ぐらい見つめてから、彼の目線に合わせるように中腰になり、右手を差し出した。

「ほら、掴まれ。そんなところで突っ立っていられると、落ち着かないから」
「う、うん……」

シャーリーが島田が差し伸ばした手に掴むと、そのまま車内へと引つ張り上げられた。

大原は、そんなふたりの様子を列車の開いているドアから眺めていた。

ジェルジンスキーはシャーリーが車内へと入るなり、クスツと小さく笑みを浮かべ、インカムを左耳に装着しながらクラクストンたちを迎えに行つた。ここから先は自分が入る幕はないと、ジェルジンスキーなりに察したのであろう。

シャーリーが車内へと立ち、島田と向き合う。すると、先に島田が口を開いた。

「まあ……まずは言いたいことはたくさんあるけど、元気そうで何よりだ。連絡ないのは本当に心配してたけど」

「う、うん……そこについてはボクも申し訳ないと思つてる」
と、

「ただ、横須賀の現状は本当に厳しいよ。所属してる提督間の関係も良いとは言い難いぐらいに」

「……連絡してこなかったのも、それでストレス溜まつてたのか？」

「近いかな」

シャーリーは頷く。

「もし、君がいてくれたらつて思う場面は何度もあった。あの鎮守府に君が着任してたら、根本から壊して、何かやってくれそうで」

「だからこそ、僕は横須賀には着任できなかつたんだよ」

と、島田はポリポリと頭を掻いた。

「あそこにいる少年提督たちは、良くも悪くもお前みたいな従順で、言いなりになってくれそうな奴らばっかだ。僕みたいな生意気な奴は、向こうとしても取りたくはなかったんだろう」

島田は近くの座席へと腰掛ける。

「……でも、そんなお前がここに来たってことは、誰かが逃げようとしてけしかけたんだろ？」

「うん……應瑞ちゃんが提案してくれたんだ。ボクは横須賀にいくべきじゃないって」

シャーリーは頷いて彼女の名前を出した。

「ただ、それだけで逃げてくれるようなタマでもないよ。目的は別にあるから」

シャーリーはそう言うのと、背負っていたバッグからUSBメモリーを手にし、それを島田に差し出した。

「ボクは君にこれを届けるために、ここまでやって来た」

「……これは」

島田は座席から立ち上がり、彼から差し出されたUSBメモリーをその手で受け取った。シャーリーは続ける。

「誰かがボクのために……いや、ボクにこれを君に届けさせるために、送って来たものらしい」

と、

「このUSBには、ゼヴィン提督について重要な情報が書き出されてるんだ」

「……アイツの!?!」

途端、USBを見る島田の目の色が変わった。

シャーリーは続ける。

「詳しいことはここじゃ話せないけど、君にとっては有益になると思う」

「そうか………だったら、ここに長居するのも危険だな。横須賀の管轄に長居したら、いろいろ危ないし。クラクストンたちもそろそろ殲滅が終わった頃だろうし、撤退させるよ」

と、島田がインカムの電源を入れようとしたところで、車内放送で少年の声が鳴り響いた。

『憎い……憎いなあ。友情ごっこができる呑気さがあるなんて、本当に憎いよ、島田くん』

「ッ!?!」

島田たちは動揺して、顔を上げ、車内の上の方を見た。

『にしてもシャーリーくんは本当にひどいよね………せつかく、ボクの愛しのジュッサーノと深海軍の人たちが潰そうとしたのに、のうのうと生き残るなんて。死んだ方が後の

ためにも良かったんじゃないかい？ なーんて』

少年はケラケラと愉快そうに笑いながら、そう言った。

島田はこの声の主を嫌というほど知っている。卒業式で首席になれなかった自分を煽るようなことを呟いて来たし、なんなら、その邪魔をしてきたのは自分だと——遠回しに答え合わせもして来た。

島田は思い出していた数々の苛立つエピソードに耐えきれず、啖呵を切るように声を上げた。

「この挑発するような物言い……お前——ゼヴィンだな！」

『ご名答。まあ、君にこんなことするような男なんて、このゼヴィン以外にはいないよ』

——そう、ゼヴィンのお出ましであった。

016：一発、殴らせろ！

ゼヴィンは唐突に車内の放送を通してこちらに話しかけて来たかと思えば、すぐに島田を煽るようなことを言い出した。

『で……島田くん。君、インカムのスイッチは入れなかったんだねえ。ボクみたいな男より、自分の大切な艦船を優先して良かったのに』

「良いんだよ、これで。好きな子の耳元で、自分のみつともない怒号なんて聞かせたくない。男として当然だ」

島田は左耳につけていたインカムを外して、左手で握り締めた。

「それで、どうやって鎮守府からここまでの通信環境を乗っ取った？」

『「この通信部屋、普段は使われてないからねえ……乗っ取るも何も、簡単に侵入できたよ。しかも今は朝だから、みーんな寝てるか、本格的に動いてないしね』

「なるほど。都合の良い条件が揃いすぎてたってことか」と、

「こんな形で僕たちにわざわざコンタクトを取って来た理由は？ まさか、なんとなく、なんて理由ではないだろうな」

『逆にそんな理由でボクが動くなんて、頭がお花畑にも程があると思うよ。半分は当たってるけど』

(半分はなんとなくなのか……)

島田は「当たってるじゃないか」と内心呆れ気味に脂汗を流しつつも、彼の言葉を聞き続けた。

『でも、もう半分は……シャーリーくんがこの場をどうやって切り抜けるつもりなのか、見学してみたくってさあ。ボクはね、切り抜けるはずないって思ってた。でも、結構あっさりやってくれるんだねえ』

「うん、デンバーが助けてくれたからね」

シャーリーは頷きながら、即答した。

この時のシャーリーの脳裏には自分と應瑞を逃すために、ジュツサーノと対峙してくれたデンバーの後ろ姿であった。本人は騎士を自称しているが、その名に恥じない姿を自分たちに見せてくれた。もし、彼女がいなければ、ジュツサーノに襲われた時点で、自分たちはここまで辿り着くことはなかったかもしれない。

一方、大原は高さがある電車の床に肘を乗せて、頬杖をつきながら、車内をジッと見つめた。そして、ゼヴィンに向かって言った。

「つーか、おめえ、これ以上襲うつもりはねーのかよ。お前にとつちや大事なデータが島

田の手に渡つてんだぞ」

『これ以上朝から暴れたら上に勘付かれそうだから、やりたくもやれないんだよねえ』
「ふーん、思つたより現実的な問題なんだな……」

大原はゼヴィンならその辺どうにかしそうだと思つていたが、結局難しいのかと頭を悩ませた。舞鶴は人が少ないため実感は湧かないものの、横須賀の人の多さだと、これ以上ゼヴィンがやらかしたら確実に勘付く者も出てくる可能性が高いだろう。

ゼヴィンは続ける。

『そういうこと。まあ……君たちには、まだまだこちらからいろいろ仕掛けるからさあ。ボクのデータなんてどうでもよくなるぐらいには』

「そうか」

島田は一言だけそう返した。

ゼヴィンは島田のその一言を聞いて、言葉を返す。

『島田くんには知られなくなつたのは事実だけど……他人の家庭事情知つたところで、どうすることもできないかねえ。ボクの弱みとしては、まだまだ足りないかな……つてところだ』

(家庭事情、か)

島田はその時点で、親に確執か何かがあるのかな、と察した。ゼヴィンがロシア人と

日本人のハーフであることは島田も知っているし、日本では、そう滅多に出会えるものでもない。そこで何かあったと思うのが妥当であろう。

島田は、そろそろゼヴィンの話に付き合う気はなくなってきたらしく、外していたインカムを再び左耳へと装着した。そして、声をゼヴィンに向ける。

「ゼヴィン。君のやり方や、横暴な考えには、僕としては賛同できないし、ここにいる面子も同じだ。君にどんな考えがあろうとも……僕はそれを断固として、受け入れるつもりはない」

『へえ』

ゼヴィンはクスクスと、島田を嘲笑う。

島田はそんなゼヴィンの声を聞きつつ、何一つ、心を煽られることなく、代わりに、強く握り締めた拳をスピーカーに向けた。

「今度、直接お前に会う時がきたら——一発殴らせろ」

その言葉が、車内へと響いた。

10秒ぐらい、しん、と静まり返ってから、ゼヴィンが口を開いた。

『ああ——島田くん。君はそうでなければね』

と、

『君が横須賀にいたら、ボクが面白かったのになあ。まあ、横須賀に所属できなくさせた

のはボクなただけどねえ』

ゼヴィンはゲラゲラと笑う。

『ま、来ることがない日を、せいぜい楽しみにしてるが良いさ。そんなわけで、じゃーねー、皆さん』

ゼヴィンは間延びした声でそう言うと、完全に通信を切った。

島田は彼からの通信が終わるなり、はあー、と深く息を吐いて、再び座席へと座り込んだ。

ここまで彼と話し込んだのは島田にとつては初めてのことであり、であれば、ゼヴィンにとつてもそうであろう。なのに、あそこまで人を小馬鹿にする態度を取れるなんて——根っからの子悪党だ、彼は。

(来ることがない日、か……こつちが横須賀に殴り込みに行かない限りは、そうなのかもしれない……それに)

島田は前のめりになり、額に手を当てた。

少なくとも、今のゼヴィンは横須賀鎮守府という頑丈なバリケードがある。少なくとも鎮守府系列の中では立場は弱い舞鶴所属の島田が、そこで何かをやらしてしまえば、自分やクラクストンどころか、倉竹の首さえも飛び跳ねかねない。現状、こちらも何か強力な後ろ盾がなければ、舞鶴鎮守府の存続自体が危うくなるのは確実であろう。彼と

真つ当にやり合うのなら。

シャーリーはそうやって考え込む島田の隣に座り、言う。

「あ、あの……島田くん。そろそろ、クラクストンさんとか應瑞ちゃんとか、呼ばない？」

ゼヴィン提督の横入りのせいで、忘れかけちゃったけど」

「あ、ああ、そうだな……」

と、島田が頷いたところで、シャーリーが続けた。

「それに……まだ、先に戦ってる戦艦少女がいるんだ」

「……横須賀のところのか？」

「うん」

シャーリーは頷く。

「クリーブランド級の娘……デンバーって言うんだけど、その娘がボクと應瑞ちゃんをここまで連れて来てくれたんだ。でも、アルベルト・デイ・ジュッサーノが現れて……」

「なるほど、お前に引導を渡したってことか。で、そのデンバーって娘を迎えに行きたいと」

「そういうこと。舞鶴に連れて行けば、入渠で傷も癒せるだろうし……身勝手なお願いだけど、應瑞ちゃんとボクの恩人なんだ。どうにか舞鶴まで彼女を——」

「何、そのぐらいの願いなら言われなくてもやるさ」

島田ははつきりとそう断言すると、シャーリーに笑みを浮かべ、頷いた。

「お前に手を貸してくれた戦艦少女だろ？　なら、僕も彼女を助けない道理は無いはずだ。お前をここまで導いてくれたんだ、それ相応の待遇は保証するさ」

「……………ありがとう！」

シャーリーは島田の言葉聞くと、パツと表情を変えて、お辞儀を2回ほど繰り返した。

島田はシャーリーに小さく頷いてから、気になっていたことを彼へと言った。

「ところで、アルベルト・デイ・ジュッサーノの件だが、そうなる彼女はまだこの線路内に……………」

「いると思う」

シャーリーは頷き、

「デンバーが引き留めるとは言ってたし、ジュッサーノとデンバーの性能差なら、大丈夫だって信じたんだけど」

と、

「ただ、ジュッサーノは砲撃戦だけじゃなくて、魚雷も使えるんだよね。あれって当たるとすごいダメージだし、デンバーも無事なら良いんだけど」

「ああ、そうか……………デンバーはアメリカの巡洋艦だから、魚雷は搭載されてなかったな。砲撃戦の火力はあるけど、攻撃手段がそれ以外ない以上、それで不利に立たされてなけ

れば——つと、クラクストンからだ」

途端、島田が付けていたインカムに連絡が入ったようで、勝手に電源が入った。島田はシャーリーとの話を一旦中断して、連絡を入れてくれたであろうクラクストンとの話に集中した。

「クラクストン。何かあつたか?」

『司令官様! そ、その……深海軍はなんとか殲滅したんですけど』

「けど?」

『……アルベルト・デイ・ジュツサーノが、来たんです!』

「アルベルト・デイ・ジュツサーノが!?!」

「ウソツ!?!」

「おっ、なんだなんだ!?!」

まさかのアルベルト・デイ・ジュツサーノが、クラクストンたちの所へと——そうなれば、デンバーの引き留めは失敗したと見るのが妥当であり、デンバーの処理に成功したジュツサーノが、改めてクラクストンたちへと狙いを定めた、と言つても過言ではない。

これにはさすがの大原も外から眺めるわけにも行かず、列車の中へと乗り込み、島田とクラクストンと会話を聞いた。

弾薬が万端なジェルジンスキーがいると言えども、クラクストンと應瑞は——島田は話を続けた。

「クラクストン、落ち着いて教えてくれ。まず、ジュツサーノ側にこちらと戦う意思はあるか？」

『あると思います。ジュツサーノさんが来る時に、こちらへ砲撃しましたから』

「應瑞と君の弾薬の状況は？」

『魚雷は2本ぐらいなら残ってますが……弾薬はあと一戦持つかどうか』

「一戦か……」

（だとしたら、魚雷や砲撃の威力に影響が出るな……）

戦艦少女たちに搭載されている弾薬や燃料は万端であればあるほど、彼女たちの実力が発揮できるのだが、一度の出撃で回数を重ねていけばいくほど、力が発揮できなくなる——これが戦艦少女たちが戦う上で背負うペナルティーである。これを防ぐには、戦艦少女たちの練度を高めた上で予備弾薬を覚えさせてくれる教官を、学院に配置せねばならず、その道のりも遠いものであった。

島田は続けて質問した。

「ジェルジンスキーはとつくにそちらへ？」

『はい。ジュツサーノさんが来るとほぼ同時に』

「分かった、少しの間、ジェルジンスキーにその場は任せてあげてほしい」
 『分かりました。司令官様はどうするのですか?』

島田はクラクストンに質問され、答えた。

「ああ。さつきチビ助と列車のたんさ……いや、点検してたら、弾薬や燃料がある小さな保管倉庫があつた。クラクストンたちの砲撃や魚雷の威力を強めるなら、それを届けた方がいいと僕は思つてる」

「島田ア……お前、まさか」

額に青筋を浮かべている大原の横で、島田は言つた。

「クラクストン。君たちにその弾薬を届けに行く。今の君には必要だろうか?」

『……し、司令官様! その……それって』

「……やるしかない」

そして、

「列車の運転は提督か、巡洋艦以上の中型艦や大型艦がするもの。だとすれば——運転するしかないだろ、僕たちが」

『し、司令官様!』

「島田ア——ツ!」

「島田くん、たまに正気じゃないこと言うよねえ……」

島田の話聞いていた一同は、本気かと言わんばかりの表情で叫んだり、呆れたりしていた。

クラクストンも例外ではなく、島田を本気で心配していた。

『ほ、本気で言ってるんですか?! いくら提督と言えども、車の免許証とか持ってる年齢ではないでしょう?! もし事故を起こしたら——』

「この世界に飛び込んだ以上、事故を起こすこと以上のことが起きるのは想定範囲内だよ」

島田はそう返した。

「それに、ここからそこまでは直線一本だ。曲がりくねった路地を進むわけでもないし、スピードを間違えなければスタートとストップの操作だけでいける。長時間走行なら問題はああるけど、数分の短時間走行だろう? 問題はないさ」

『……司令官様がそうおっしゃるのなら、私も受け入れますけど』

インカム越しのクラクストンは渋々、といった感じで、完全に賛同しているわけではないようだ。しかし、提督の決断には逆らえない以上、従うしかない。

クラクストンは続ける。

『その代わり……事故は起こささないでくださいね。帰る列車も無くなっちゃいますから』

「大丈夫だよ。ここには僕含め3人の提督がいるんだから、事故なんて起こさせやしない。それに」

島田は言った。

「クラクストン、君の姿を見れなくなるのは嫌だよ。ただでさえ今の時点でそわそわして、君の側にいたくて、仕方がないのに」

『し、司令官様……』

「だから、安心してくれ。なんとか無事に辿り着くから」

『……はい、分かりました。待ってます』

「ああ、ありがとう。じゃあ、大原、シャーリー。運転室まで——」

島田がクラクストンと話を終え、運転室へと向かおうと立ち上がり、大原のシャーリーへと話しかけようとふたりへ目を向けたところで、「ん？」と声を上げた。

「どうした、ふたりとも。顔真っ赤にして」

「いや、その……島田くん、クラクストンさんにいつもこんな調子なの？」

「こんな調子って、何が」

「お熱いのはいいけど、もうちよつと発言場所を考えて欲しいっていうか」

「この程度でお熱いって……チビ助らしくもないな、ちよつと会話しただけだろ」

「ねえ、シャーリーさん。この眼鏡どう思います？」

「いやあ……ちよつと天然にもほどがあると思いますよ、大原さん」
「ああ、もう、なんなんだよ！ ほら、行くぞ！」

島田はふたりの様子の意味が分からないまま、とにかく運転室までシャーリーと大原を引つ張った。

017：魚雷は二発

一方、クラクストン・應瑞・ジェルジンスキーのトリオは、唐突に來襲してきたジュツサーノの相手をしなければならぬ事態になっていた——のだが。

クラクストンはインカムから島田の声が途切れると、應瑞が話しかけるまで、一切声を発することがなかった。應瑞はクラクストンの顔覗き込むと、「？」と首を傾げていた。

「クラクストンさん……どうかしましたか？ 顔、真っ赤ですよ？」

「い、いえ。なんでもありません」

クラクストンは應瑞に問われて、首を横に振った。

（も、もう……司令官様つてば、私にTPOを強いておいて口説いてくるなんて）

クラクストンはこんな時にまで真っ赤になっっている顔を冷やすように、片手を頬へと充てがった。その手のひらは熱くなった頬よりも何倍も冷たく、今の島田の言葉で自分がどれだけ意識してしまったのかの指標になり、どことなく恥ずかしかった。

（『君の側にいたくて、仕方がないのに』……か）

クラクストンは島田の言葉を心の中で何度も何度も噛み締めつつ、その意味を深く考

えると、頬から熱が消えていつてしまった。

その時の彼女の脳裏に映っていたのは、幼き日の自分と——まだ海の職業への夢を見ていた幼い島田の姿だった。今のクラクストンからすれば、その記憶も結構遠い過去の話のため、脳内で再生される時は色合いが鮮やかに再現されず、ぼんやりとした色調であつた。けれども、彼の当時の表情やぬくもりだけは、はつきりと覚えている。

(あの時の司令官様は私のせいであ……)

——自分のせいだからこそ、彼を迎えに行こうとクラクストンはずっと決めていた。

彼がまた自分を好きになつてくれるか分からないけれども、当時、まだ新米の少年提督であつた倉竹と約束したのだ。提督になつた島田を絶対に迎えに行こうと。

(私も今すぐあなたの側に行きたい……けれども、今は)

「危ない、クラクストンッ！」

クラクストンが前を向いた途端、ジェルジンスキーがこちらへと抱き着いて、そのまま強く押し倒してきた。クラクストンは最初困惑していたが、その瞬間、ジェルジンスキーの上に砲撃が一直線に駆け抜けたのを見て、その意味をすぐに察した。

砲撃は壁へと当たり、そこだけ穴が開いて煙が上がっていた。

ジェルジンスキーは上半身を起こし、自分の下敷きになつたクラクストンへと声をかけた。

「クラクストーン、ごめん。大丈夫？」

「あ、いえ……ありがとうございます」

クラクストーンは首を横に振り、ジェルジンスキーがクラクストーンから離れた瞬間、

「ちっ、面白くない」

こちらの耳に、ジュツサーノの舌打ちが飛び込んできた。ジェルジンスキーはクラクストーンと共に、そちらへと顔を向けた。

ジュツサーノは、ジェルジンスキーに眼光を飛ばしていた。

「せっかく獲物がそこにいるのに。余計なのがふたりもいるなんて。まあ、片方は駆逐艦ぐらいの能力しかないみたいだから許すけど」

と、

「ジェルジンスキー、この場ではあなたが一番ウザい。さっきタイマンしたデンバーって子は、やられてくれたからいいけど……あなたは正義感が強い上に、無駄に硬そうなんだよね」

「あら、当然よ」

ジェルジンスキーはクスツと笑みを浮かべる。

「私はソ連最後の砲撃型軽巡洋艦・68—6 ИС型のひとつよ？　こう言っちゃあなんだけど、他の軽巡洋艦の娘よりは性能は安定してる自信ぐらいあるわ」

「ふーん……ま、それでも足の速さだけなら、私の勝ちなんだけどね！」

途端、ジュツサーノは猛スピードで駆け出し、ジェルジンスキーへと襲い掛かった。ジュツサーノの主砲はジェルジンスキーへと向けられ、その砲撃は彼女を狙い撃ちにしようとしていた。

しかし、ジェルジンスキーは瞬時にこちらの主砲も構え、ジュツサーノよりも素早く砲撃を向こうへと放った。

「やらせないわよー！」

「っー！」

ジェルジンスキーの砲撃はジュツサーノの主砲の銃口のひとつへと命中し、それをぶち壊した。

ジュツサーノはその勢いでバランスを崩し、軽くよろけた。

「ほら、もう一発！」

間髪入れず、ジェルジンスキーの主砲はジュツサーノに向けて砲撃を放った。

「さすがに——避けちゃいますよ、っとー！」

しかし、ジュツサーノは持ち前のスピードと回避力で、すぐに行動に移した。ジュツサーノはすぐに横へと引いて、ジェルジンスキーの攻撃をかわしたのである。

ジュツサーノはニヤリと笑みを浮かべながら、残りの主砲をジェルジンスキーへと向

ける。

「ひとつ潰された程度で、私が諦めると思わない方がいいよ！」

今度は、艀装に搭載されている主砲をすべて使った一斉射撃。幾多にもなる砲弾がこちらへと向けられ、ジェルジンスキーも構えた。

（ここで避けたら……クラクストンたちに当たっちゃう！）

ジェルジンスキーが避けようにも、後ろにはクラクストンと應瑞がいる。そして、應瑞はもちろん、クラクストンには絶対に無傷で帰らせるつもりで、ジェルジンスキーはここに来たつもりなのだ。

（私は多少傷付いてもいいから、あの娘たちだけは——！）

「私の歩む道はただひとつ——それは勝利への道だけよ！」

ジェルジンスキーの主砲から砲撃がジュツサーノへと放たれ——ジュツサーノとジェルジンスキーの中間位置で、それぞれの威力がぶつかり合つて爆発を起こした。

煙と爆風がここにいるメンバーを包み込み、クラクストンたちは目も開けていられなかった。目を開けてしまうと、砂埃や破片が目の中に入ってきてそうな勢いなのだ。

「つう！」

そして、クラクストンと應瑞は爆風から逃げるように背中を向け、その強い風に耐えた。砂やいろいろなものが混ざった風が、背中にピシピシと当たってくる。

背中に当たるものが少なくなってきた頃に、クラクストンと應瑞は顔を上げて、ジェルジンスキーの方へと振り向いた。

「クラクストン、應瑞、無事？」

「ジェルジンスキーさん……！」

ジェルジンスキーは、とりあえず無事ではあった。今の爆風を直に受けていたように、体は煤塗れであるものの、それ以外は特にダメージを受けている様子はない。

煙が晴れてくると、今度はジュツサーノの姿も見えてきた。ジュツサーノも持ち前の回避能力で、体に煤がかかる程度で抑えられたようだ。ジュツサーノは煙の向こう側にいるジェルジンスキーを見つめ、言う。

「……なるほど、なかなかやるじゃん」

と、

「これで私の攻撃が防げなかったらどうするつもりだったの？　もしかして、死なば諸共だった？」

「もちろん、そのつもりだったわよ」

と、ジェルジンスキーは頷いた。

「應瑞とクラクストンは、私が守らなきゃいけない娘たちだから。特にクラクストンは傷ひとつ付けたら、島田が大暴れよ？」

「ああ、あの冴えない眼鏡の……」

ジュツサーノは島田の姿を思い出し、

「あんな男の子のどこがいいかは分からないや。ただ諦めが悪いだけじゃん。特別見た目が良いわけじゃないし……どこが好きなのか、よく知れた——」

——ジュツサーノが水面で戦っているのが運の尽きと言わざるを得なかった。

ジェルジンスキーと應瑞が気付いた時には、すでに遅かった。彼女が駆逐艦だからこそそのスピード感だとか、そういった範疇に括れるようなものではない。

ジェルジンスキーたちが気付いた数秒後、

「っあああ!?! あっ!」

ジュツサーノの悲鳴が、響いた。同時に爆破音が、その場で反響した——二回ほど。

ジェルジンスキーは驚愕しながら、クラクストンを見た。

「ち、ちよつと……クラクストン!」

「……」

——クラクストーンは魚雷を放った後だった。彼女の腰近辺に飾られている魚雷の中心が空になっていたのだ。そして、クラクストーンは島田に、「魚雷は2本しかない」と言っていた。つまり、残っている魚雷をすべてジュツサーノに向けたのである。

ジェルジンスキーは大いに呆れ、應瑞も目を丸くしてクラクストーンを見つめていた。

ジェルジンスキーはクラクストンの顔を覗き込むように、腰を曲げた。

「何やってるのよ、あなた！　せつかく残ってる攻撃手段を今ので使い切るなんて！

島田が見てたら雷が落ちてるわよ！」

「——だって」

クラクストンは顔を上げ、苦い笑みを浮かべた。

「好きな人のことあんな風に言われたら、ありったけの魚雷ゼーんぶ使っちゃいますよ。あの人のこと知りもしないで、あんなこと……腹が立って当然です」

「だ、だからって……」

「ま、まあ、魚雷だけなら私もありますし……いざとなったら私がなんとかしますよ、ジェルジンスキーさん」

「應瑞……あなたがそう言ってくれるなら、良いんだけど」

ジェルジンスキーは不服そうな顔をしながら、再びジュツサーノへと目を向けた。

「うつわあ……最悪、服が破れちゃったじゃん。お金かかる……」

ジュツサーノは今の魚雷二連発で中破まで追い込まれたようで、服や艦装は見るも無残な様相に至っていた。魚雷一本の威力自体は弾薬のペナルティのおかげで、そう強くはなかったようだが——二連発でここまで行くのだから、もう一発があつたら、ジュツサーノは確実に落ちていただろう。

しかし、それがジュツサーノの戦闘意欲に関わってきたようで、彼女はクラクストンを強く睨み付けた。

「駆逐艦のくせに——生意気ッ！」

ジュツサーノは魚雷3本を取り出して、水面へと投げ置いた。

「この程度の攻撃で調子乗らないでよね！」

瞬間、ジュツサーノが放った魚雷は水面を勢いよく駆け出し始め、クラクストンたちへと向かい始めた。

ジェルジンスキーは真つ先にクラクストンと應瑞を線路の上へ上げようと誘導した。

「クラクストン、應瑞。上がって！」

途端、

「——こつちの弾薬も、余ってるよっ！」

魚雷がダメなら砲撃だと言わんばかりに、ジュツサーノの主砲の先がクラクストンへと向けられ、早速、砲弾が放たれた。

「クラクストン！ 早く！」

「で、でも……！」

ジェルジンスキーはクラクストンを真つ先に線路の上へ上げようとしたが、ジュツサーノの砲撃は計算されているようで、こちらが線路から上がったと同時にクラクスト

ンに当たってもおかしくないぐらいだった。しかし、水面には魚雷——どちらに動いても、クラクストン直撃は免れなかった。

砲撃に関しては、自分が庇えば良い——そう思って、ジェルジンスキーはクラクストンを無理やり引き上げようと、腕を強く引つ張った。その瞬間だった。

「前に走って頭を下げろ！」

——少年の声が響いた。

クラクストンは最初、自分の左耳のインカムから聞こえてきたのかと思ったが、その声は機械も何も通していない、肉声だった。

クラクストンが戸惑っている間にも、ジェルジンスキーと共に前方へと強く引つ張られる感覚がクラクストンへと襲いかかり、クラクストンはされるがままに線路内へと突っ伏した。

砲撃の爆破音が再び辺り一面に鳴り響き、その後は砲撃がぶつかった場所がパチパチと音を鳴らしながら燃えていた。

「いっつ……」

どうやら、今の勢いでスライディングしたらしく、少年の声は痛みを表現していた。クラクストンはそんな少年へと目を向けた。

「司令官、様……!?!」

癖のある黒髪に、黒縁の眼鏡——島田のご登場であつた。

クラクストンは目を丸くしながら自分の司令官の姿を見るなり、上半身を起こして彼の体を軽く揺さぶつた。

「司令官様、大丈夫ですか!？」

「う……クラクストン……。君が無事でよかつた」

「島田……いくらクラクストンがピンチだからって、なかなか無茶するわね」

島田が起きると同時に、一緒にクラクストンを引つ張り上げたジェルジンスキーも起き上がった。

クラクストンは島田の腕を支えながら、立ち上がった。

「司令官様、どうして直接私を……」

「……体が自然に動いてた」

島田はズレた眼鏡の位置を直した。

「ジェルジンスキー、クラクストンを守ってくれてありがとう。ちゃんと無傷だ」

「当然よ。あんな軽巡洋艦にやられるなんて、許さないんだからね」

と、一同の視線はジュツサーノへと向けられた。

ジュツサーノはボロボロの姿で、腕で胸元を抑えながら、ギユツと唇を噛み締めた。そして、島田に言う。

「せっかくいい感じだったのに……邪魔してくれちゃってさあ。本当なんなの」
「……アルベルト・デイ・ジュツサーノ。本当にここに来てたのか」

島田はジュツサーノの姿を見るなり、ボロボロなその様相に驚きつつ、警戒心を露わにして、クラクストンを自分の後ろへと回した。

そして、ジェルジンスキーも島田と同じくクラクストンの前に周り、ジュツサーノに対して警戒の意思を見せた。ボロボロになってもなお、何をしますか分からない戦艦少女——ふたりはジュツサーノを、そう認識していた。

018：本音が出るのは恥ずかしい

ジュツサーノは自分へと向けられた島田とジェルジンスキーの視線から敵意を感じ取り、ニヤリと小さく笑みを浮かべた。こちらを睨み付けてくるふたりの姿を交互に見つめながら、ジュツサーノは島田へと言い放った。

「へえ、そっちのロシア艦は分かるけど、君も私を睨み付けてくるんだねえ。私、君に何もしてないよ？」

「そうだ、『直接』何かはしてない。でも、クラクストンを一度大破に追い込んで、それ以上傷付けようとしたことだけは覚えてる」

——そう、あの初出撃の日は島田にとっては忘れられない出来事であった。

クラクストンを大破まで追い込んだにも関わらず、執拗に攻撃しようとしたあのジュツサーノの姿は、島田にとって憎むべき化け物の姿でしかない。しかも、クラクストンと島田にとって、その時は初出撃であるがゆえに、相当なインパクトを自分たちに与えた。

あの時、彼女がしでかしたことは内紛とか抜きにしても、島田にとっては許されないことであると——彼自身はそう思っている。例え彼女が心を入れ替えても、その事實は

塗り替えられるわけでない。自分がクラクストーンを想い続ける以上、この憎しみは消えることはないだろう。

ジュツサーノは島田の表情とクラクストンの姿を交互に見て、「なるほどね」と納得したように頷いた。

「君、クラクストンのことが好きなんだ？　そういうのガラじゃないなーって、その見た目だから思ってたけど、それは私の思い過ごしだったね」

「……だったら、なんなんだ。彼女と釣り合わないとも言いたいか？」

「それは考えすぎだよ。まあ、そう思っていないって言ったら嘘だけど」

と、ジュツサーノは続け、

「ああ、そうそう。私はこれ以上君たちとやり合う気はないよ。魚雷も使い果たしちゃったし、砲撃もそろそろ威力出なくなってきたからね。ただ」

ジュツサーノは島田へと目を向け、手を差し出した。

「君が持つてるUSBメモリ、こっちに寄越してくれないよね？」
「！」

島田は自分のズボンのポケットの中に入っているUSBメモリを思わず片手で覆った。そう、ジュツサーノの本来の目的はこのUSBメモリだ。自分たちへの攻撃はおまけ程度しかない。そして、今なら、まだその任務を果たせるのであろう。中身を

島田に見られていないからと。

しかし、島田は渡すことはできないと言わんばかりに、すぐ答えを出した。

「君にこれを渡すつもりはない。それに、さっきアイツはわざわざ車内放送流してまで言ったからな。『弱みとしては足りない』ってな」

「ふーん……そう。アンミラーリオがそう言ってるのなら、私もそれに従うしかないね」
そう言つて、ジュツサーノは島田に差し出していた手を引つ込め、

「でも、だからと言つて、アンミラーリオはそのデータをあなたが閲覧することを許したわけじゃない。それだけは覚えておいて」

「ああ、重々承知の上だ。こんなことまでしてるわけだからな」

島田は頷き、ジュツサーノは、「なら、いいんだよ」と、今度は應瑞へと目を向けた。
應瑞はクラクストンよりも後ろで、ジュツサーノのこゝろを見つめていた。

ジュツサーノは言う。

「應瑞、つて言つたつてあなた」

「は、はい」

「今回、あなたたちがしでかした事は、アンミラーリオも私も上に報告するつもりはないよ」

「えっ……ど、どうして？」

應瑞はジュツサーノのその言葉を聞いて、思わず耳を疑った。ここまでしているのなら、報告ぐらいはするだろうとつきり思っていたのだ。そして、話を聞く限りでのゼヴィンの性格からして、報告しない、というのも何となく考えづらかった。

ジュツサーノは続ける。

「アンミラーリオは、個人として島田以外虐めるつもりはないから。私もそれに従つて
るだけ。これが島田なら、私もアンミラーリオもノリノリで報告してるだろうけど、あ
の今回は赤毛の男の子でしょう？ 申し訳ないけど、アンミラーリオからすれば、有象
無象のひとりでしかないんだよね。それに」

と、

「横須賀の情報部署の子が退職願偽装して出してるはずだから、そんなことで手を煩わ
せたくないってのが本音かもね。手を煩わせるなら、自分の手で……って思ってるし、
アンミラーリオ」

「もしかして……」

(吉川さんが……！)

そんなことをやる人物としたら——彼以外、考えられなかった。

もし、彼がそこまでやってくれているとしたら、それは應瑞にとつてもシャーリーに
とつても、感謝でしかないだろう。本格的に首が飛ぶのを避けることが出来るかもしれ

ないのだから。

ジュツサーノは應瑞の表情を見てから、更にその先に目線へと向けると、何かに気が付いたように「あつ」と声を上げた。

「そろそろ、全員お出ましになっちゃうか……じゃ、私はこの辺で！」

「！ おい、逃げ——」

走って逃げていくジュツサーノの後ろ姿を追いかけようと、島田たちが駆け出したところで、少年ふたりの声が辿り着いた。

「島田ア！」

「島田くん！」

「大原！ シャーリー！」

島田たちは大原とシャーリーの声に反応して、足を止め、後ろへと振り向いた。大原とシャーリーは走ってきたらしく、はあはあと息を上げながら、キョロキョロと辺りを見渡した。

「あれ……アルベルト・デイ・ジュツサーノは」

「……今さつき、去っていったよ」

島田は大原の質問に答えてから、シャーリーへと声を向ける。

「それで、シャーリー。この先にはデンバーがいるんだろ？ ジェルジンスキーが運転

するから、具体的な場所を提示してやれ。詳しい話は、彼女を助けてからのの方が良いだろう」

「う、うん。分かった。ジェルジンスキーさん、よろしくお願いします」

「ふふ、了解。にしても」

と、ジェルジンスキーは頷いてから、

「あなたたちが無事で良かったわ。列車が途中で事故したらどうしようって、来るまで頭抱えてたのよ？」

安心したように笑みを浮かべると、その後ろから大原が肩を組んだ。

「ジェルジンスキー。おめーはすっかり煤だらけだなー。朝から入渠必須だぞ、これ」

「あら。ダメージは軽度だし、同志が背中流ししてくればあつという間に終わるわよ」
「背中流しねえ。思春期の俺には刺激強すぎて苦手なんだよなー」

ジェルジンスキーと大原はそうやって談笑を交わしながら、列車の方へと歩き始めた。

そして、シャーリーも應瑞を連れて、ふたりを追いかけるように歩き始めた。

島田とクラクストンは、そんな4人の後ろ姿を見守りつつ、ゆっくりと歩き始めた。クラクストンは島田の横を歩きながら、質問を投げた。

「司令官様。補給はここでやっちゃいますか？」

「うん、さすがに弾薬は補給しようか。ジュツサーノがいなくなった以上、何も起きないとは思いたいけど、深海軍が残ってたら怖いから」

「分かりました。……ところで、司令官様」

クラクストンは頷くと、今度は嬉しそうに笑みを浮かべながら続けた。

「先ほど、ジュツサーノさんに私のことを好きかどうか聞かれて、肯定してましたよね？」

「えっ……あ……あっ！」

島田は最初、なんのことだっけと頭を悩ませたが、すぐにクラクストンが指している事柄を思い出して、顔を真っ赤にした。

島田は視線をあっちこっちへと泳がせ、クラクストンから目を逸らした。それから少し時間を置いて、ポツリと呟いた。

「……わ、忘れてくれ。あんな形で、自分の気持ちを知られるのは不本意だ」

「それはちよつと難しいですけど、私の胸の中にしてしまっておくぐらいはしておきますね。司令官様が自分から言うまで、私は待つてますから」

「いや……その……。まあ、それでいいけど」

（僕が問題にしてるのは、そこじゃないんだよね……）

島田はクラクストンと共に列車の中へと入り、そのまま発車まで座席に座って待機し

ていた。應瑞と大原が運転室にいる自分の相方を遠目で見守っている中、島田はクラクストーンを見た。

(ジュツサーノに乗せられて、つい言ってしまったけど……クラクストーンがいるつのに、冷静を欠いてあんなこと)

島田としては、自分の気持ちがバレたのもそうではあるものの、ああいった形で彼女に自分の気持ちがバレてしまったこと、そして、クラクストーンを前に冷静な判断ができず正直に話してしまったことを、ひどく後悔していた。クラクストンの言う通り、こういうのは自分から言うべきことであって、島田としてもそのつもりであった。今回の件は他人の力を借りて告白してしまったようで、情けない気持ちでいっぱいだった。

クラクストーンはどこもなく気分が良さげなのが救いではあるが——島田は、できるだけ自らアクションを起こした方がいいな、と思っていた。

(にしても、クラクストーンと出会ってから1ヶ月近く経つけど、彼女にすっかり好意を抱くのは不思議とスピーディーだったな。こういうのって、結構時間が掛かるものだと思ってたけど)

と、島田は天井を見上げた。

(……やっぱり、彼女の言ってることは本当なのか？ 僕とクラクストーンはずっと昔に出会ってるって)

——この1ヶ月、島田はずっと思い出そうとして、そのことを思い出すことができなかった。

（兵学校に入学する前の記憶で、なんとなくぼつかり記憶が空いてる時期があるんだよね。昔のことは忘れてて当たり前なんだけど）

そして、彼女と出会った心当たりがあるとすれば、その時期だろうと島田は判断していた。幼い日の記憶なんてインパクトがなければ保つことはできないし、それこそ兵学校入学近辺の記憶なんて薄らとしか覚えてなくて当然だろう。

しかし——それにしたって、あまりにも彼女のことを覚えていなさすぎるのも事実だった。

島田からすれば、こんな美少女に出会っていればそれこそインパクトがあるし、その姿は覚えていてもおかしくはないはずだ。その上、確実に日本人のそれではない銀髪に青い瞳——第一印象だけでも十分強いはずだ。ただ、そんな彼女の姿をすっからかんに忘れているのは、島田としては何かが引つ掛かる。何か強い力で——その記憶をもぎ取られているような、そんな感じがするのだ。

（まあ、のんびり思い出すしかないか。このまま離れたつきりじゃあ、クラクストンに失礼だし）

と、島田が再びクラクストンへと目を向けると、列車の扉が閉じ、発射し始めた。

島田が見る限り、先ほどの戦闘では線路は傷は付かなかつた——というよりも、耐久性が普通の線路のそれではないと言った方が正しい。倉竹の言葉から察するに、戦艦レベルの砲撃威力を發揮されてしまうと崩れるのだと思うが、軽巡ぐらいの砲撃ならさして問題はないのであろう。つまり、戦闘ぐらいは計算して設置されているのがこの地下鉄というわけだ。さすが、鎮守府の管轄だけはある。

クラクストンは外を眺めている島田に向かって話しかけた。

「司令官様。どうかしました？ もうお疲れですか？」

「……いろいろありすぎて、そうかも」

「ふふ、今日は鎮守府に戻ったらゆっくり休みたいですな」

と、

「ところで司令官様。さつき、ジュツサーノさんがおっしゃってたUSBメモリーって……」

「ああ。これのことかい？」

島田はズボンのポケットに手を入れ、シャーリーから受け取ったUSBメモリーを取り出した。クラクストンにそれを見せながら、島田は言う。

「僕の敵であり、ジュツサーノの提督であるゼヴィンの重要なデータが入ってるらしいんだ。詳しいことは分からないんだけど……シャーリーのやつなら分かってんのかな」

と、島田は運転室にいるシャーリーへと目を向けた。

クラクストンはそんな島田を見ると、そのまま彼の腕をギュッと両腕で握り締めた。あまりにも唐突すぎる彼女の行動に、島田は「うえ!？」なんて変な声を出してから、自分の秘書艦の姿を見た。

「く、クラクストン!?! なんなんだ、いきなり!」

「いえ……なんだか、司令官様の横顔が遠く感じちゃって」

クラクストンは苦笑しながら、その頭を島田の肩へと寄せた。

「司令官様。ゼヴィンさんのことが解決しても、私の側にいてくださいね。……さつき、司令官様も言っていましたから。私の側にいたい、って」

「さつき? ……あつ」

島田は先ほど、クラクストンに連絡するときと言った言葉を思い出した。改めて思い返してみると——ジュッサーノの時の比ではないほどに、恥ずかしいことを言っていた。

島田は顔を真っ赤にしながら、片手で顔を覆った。

「ごめん……そんなつもりはなかった……」

「だとしたら、無意識のうちに口にしてしまった本音なんですわね! やっぱり司令官様は私のこと大好きなんですわね」

「ひっ……いい、いや、こっちは本当に忘れろ！ そんな『今日の夜は期待してます』って目で見ないで！ お願い！」

「おい、島田ア。そろそろデンバーのところに着くみたいだから、準備しとけよー」

大原はクラクストンとあれやこれやとやりとりしてる島田に向かって、呆れ気味に言い放った。

島田は覆っている手の指の隙間から、クラクストンの姿を見て、また、指で視線を閉じた。

（ああもう……なんだよ、今日は……）

019：帰還、舞鶴

午前9時を回った辺りで、吉川はどうとう行動に出た。

吉川は封筒を片手に自分の秘書艦であるホーエルと共に、横須賀鎮守府でシャーリーが所属していた部隊へと向かった。その封筒の表には、「退職届」の文字が書かれていた。

——ここを逃げ出したシャーリーの代わりに、退職届を出しに行くのである。

吉川はホーエルと、「シャーリーさんそろそろ着いた頃かな」なんて、時計を見ながら言ったりして、部隊の部屋へと辿り着いた。

廊下は薄暗く、まだ日差しだけが頼りにできる時間帯の中で、吉川はその扉をコンコン、と、手の甲で叩いた。

「し、失礼します……情報部署所属の吉川と申します。誰かいらつしやいますか？」

すると、扉の向こう側からガタガタと何かが動いた音がした。どうやら、部隊に所属している提督か戦艦少女がこの部屋の中にいるみたいだ。吉川は扉を開くことはせず、そのまま扉の前で待機した。

しばらくすると、向こう側からガチャリと扉が開いて、女子高生ぐらいの見た目の少

女が顔を覗かせた。白と赤の和装に、ふんわりとウエーブを描いている黒い髪の毛が特徴的な日本出身の戦艦少女——古鷹型重巡洋艦の加古の姿であった。

加古は白い花がよく似合っている髪の毛を軽く掻き上げると、吉川へと言う。

「おはようございます。今、私しかないんですけど、大丈夫ですか？」

「は、はい……大丈夫です」

「良かった。えーっと、吉川提督と……」

「フレッチャー級、タフィ3所属のホーエルです」

「ホーエルね。立ち話もなんですから、中に入ってください」

「じ、じゃあ……邪魔します」

吉川とホーエルは部屋に踏み入る前に軽くお辞儀をしてから、部隊の部屋の中へと入った。

部屋の中には真ん中に会議用らしきテーブルと、部屋の隅にはダンボールなどといった雑多物。そして、本棚の中には、ファイルにまとめられた大量の資料が置かれている。どことなく、学校の準備室や部室を想起させる雰囲気だ。

吉川とホーエルは加古が用意してくれた椅子へと腰掛け、加古も彼らと向かい合うように座った。

加古は笑みを浮かべながら、本題へと入る。

「さて、今日は情報部署の方がどのようなご用事で？　うちのリーダーがまた何かやらかしましたか？」

「また……つて。いや、その……シャーリー提督がここを辞めるので、代わりに退職届を……」

「なるほど、分かりました。こちらで預からせていただきますね。うちのリーダーは受理しないでしようから」

「あ、ありがとうございます」

吉川は退職届を加古へと差し出し、ふうと一息を吐いた。これで自分の仕事は一旦終了——吉川はそう思うと体から力が抜けそうだ。

ホーエルはそんな吉川の姿に対し、クスツと笑みを浮かべつつ、加古へと質問した。

「あの……加古さん。ところで、『また』つてどういうことでしょうか？　この部隊のリーダーって、結構やらかしが多い方なんですか？」

「やらかしつていうか……あまり表に出せないんですけど」

にこやかだった加古の表情が神妙なものと変わり、言葉が続く。

「新人いびりが酷いんですよ。前のリーダーも結構いびりが酷かったらしくて、部隊全体がそれが当たり前なんだろうって雰囲気染まって。それで、まともだったり、良識のある新人さんは、大体鎮守府を辞めたり他の部隊へと移動したりしてるんですけ

ど」

「そつちの部署って、全体的にいびりがあるって話は聞いてるんですけど、特に酷い感じなんですわね」

「そうなんですよ」

加古はホーエルの言葉に頷き、

「まあ、他の部隊については知らないですけど、良識ある人が残ってないのはこの部隊ぐらいいです。今いるのは、弱いものいじめに抵抗がない人ばかり」

加古は溜息を吐く。

「それで、この部隊だけゆっくりと提督の人数が減りつつあって、今じゃ5人ぐらいしか残ってないんですよ。シャーリー提督が辞めたので、これで4人になったはずですよ。以前は10人ぐらいはいたって聞くんですけどね」

と、

「それで、さすがに人数が減ってるのはそろそろまずいと感じてきたらしく、リーダーは退職届など出されても受理しない、という姿勢を取り出したんです。それで鎮守府から逃げ出す提督も多数現れて……」

「あ……なるほど。逃亡者リストで去年からやけに多くなったのって、そういうことだったんですね」

吉川はシャーリーを逃すため、参考程度に見てきたデータを思い出しながら、納得したように頷いた。確かに逃げ出した提督たちは、この部隊所属であった確率が非常に高かった。加古の話が本当だとすれば、このデータも合点がいく。

加古は続ける。

「と、まあ、うちの部隊の事情はこんな感じですけど……さつきホーエルが言った通り、部署の雰囲気も良くないのが拍車に掛ける感じですね。人が多いのに、逃げ場がないというか。シャーリー提督もリーダーに強くいびられつつ、その雰囲気を感じ取ったと思うと、逃げ出しても当然ですよね」

「あ……その」

吉川は加古へと質問した。

「シャーリー提督って……この部隊だと、どんな様子でしたか？ 本人が精神的に疲弊してたのは知ってるんですけど」

「うん？ まあ、よその部隊……いえ、よその鎮守府なら重宝されるぐらいには素質があつたと思います」

加古はうーんと思いつきながら、答える。

「ただ、だからこそ、リーダーからのいびりが厳しかったんですよ。あの人、留学生で年端もいかにないのに、頭良くて優秀でしょ？ 劣等感を感じるのもそんなんですけど、

一方で性格が素直で大人しかったし、リーダーが虐めるには格好の餌で……いろいろな要因が重なった結果だと思えます」

「そうなんです。オレもそっちの部署に行つてたら、危なかった……かも……」

「危ないっていうか、いびりの対象には確実に入ると思います。鎮守府系列に入れる男の子つて時点で相当優秀だし、劣等感煽られる提督も多いでしょうし」

「じ、情報部署で良かった……」

吉川が加古の話を聞き、涙目で怯えている横で、ホーエルがそんな吉川を宥めていた。

そろそろ情報部署の朝礼の時間も差し迫っているというところで、吉川とホーエルはもう少しだけ加古に部隊について聞き出してから、この部屋を後にした。

吉川はホーエルと共に人気のない場所へと向かうと、そこでスマートフォンを取り出し、シャーリーの携帯へと電話をかけた。10秒ぐらい呼び鈴を鳴らしてから、向こうが応答した音が聞こえ、声が聞こえた。

『もしもし？ 吉川くん？』

「あ……シャーリーさんですか。舞鶴には着きましたか？」

『うん、今、着いたよ。島田くんたちとも会えた』

「そっか……良かった」

吉川はホツとして、続ける。

「それと……その、デンバーはどう？ そっちにいる、よね？」

『いろいろなあつて大破してるけど、舞鶴で修復して、こっちで預かる方針になりそう。情報部署には、そっちで誤魔化しておいてくれるかな？』

「うん……分かった」

と、吉川は頷き、

「その、大破つてことはやっぱり襲撃が……？」

『あつたよ。ただ、例のUSBはなんとか島田くんには届けたから、安心して』

「……やっぱり」

吉川はそれだけではどうしても防げなかったことに、若干後悔の念を抱いていた。しかし、自分がどう足掻いたところで、ゼヴィンはシャーリーの動きを察知するであろう。

吉川は続ける。

「その、オレは遠くから見ることしかできないけど……何か助けになりそうなことがあつたら、またいつでも呼んで。力になるから」

『……ありがとう。ボクはそろそろ鎮守府に着くから、この辺で』

「うん、こっちこそ。じゃあ、また」

吉川は電話を切り、スマートフォンをポケットの中へとしまった。

ホーエルは吉川の電話が終わると、そのまま情報部署がある部屋の方角へと体を向けた。

「じゃあ、司令官。そろそろ」

「……うん、行こうか」

そして、島田たちは地下鉄で大破状態で取り残されていたデンバーを保護した後、舞鶴へと向かった。

デンバーは、そのままだと体が冷えるんじゃないかと心配した應瑞から借りた、青いケープを上から羽織った状態で、舞鶴の地へと足を着けた。デンバーは目の前に映し出された赤煉瓦造りの建物を見つめながら、ゆっくりと歩き始める。

(ここが舞鶴鎮守府……横須賀と雰囲気が違う)

パツと見だけでも、そのことだけは分かった。

舞鶴は横須賀よりも比較的大きくない上に人数としては圧倒的に小規模ではあるものの、だからこそ横須賀にあった威圧感がほとんど感じないのだろう。そして、そう思うと同時に、デンバーは横須賀がどれだけ窮屈になっているのか、ここで感じることになった。

デンバーがシャーリーと應瑞と共に島田とクラクストンに案内され、さあ建物の中へ

と入ろう——とした矢先に、倉竹がこちらを出迎えてくれた。

倉竹はいつものメンバーとデンバーやシャーリー、應瑞といった新しい顔を見るなり、思わず苦い笑みを浮かべた。

「島田くんたち、お帰りなさい。……さつき見送った時よりも大所帯になってるね」

「はい、ただいま帰還しました。いやあ、もう大変だったんですよ。またジュツサーノの奴が現れましたし」

「詳しい報告は中で聞かせてもらおうか。とりあえず、今はその娘の修復と、ジェルジンスキーのお風呂が先かな」

倉竹が島田の報告に苦笑しながら、一同を中へと入れた。

デンバーは舞鶴鎮守府の建物内へと入るなり、自分の目の前を歩いている倉竹に、言った。

「あの……あなたがこの司令代表？」

「ああ。俺が舞鶴鎮守府を統括してる倉竹って言います。他の鎮守府の代表に比べたら、若輩者だけど」

「あ……いえ、そんな」

（……横須賀にいる人たちとは全然違う）

デンバーは倉竹から漂う朗らかな雰囲気不思議そうに感じながら、続けた。

「あなた、どうしてここの代表に……？　他の鎮守府なら、まだ誰かの下についてそんな年代なのに」

「んー、ちよつとね……」

と、

「俺の前に舞鶴の代表だった提督が、辞めちゃつてさ。その時に代表やれそうだったのが俺だけだったんだよね」

「えつ、その言い分だと倉竹さんの他にも提督いたんですか？」

そこで島田が反応した。どうやら、倉竹の身の上話は島田も少し気になるところなようだ。

倉竹はその質問に頷いた。

「うん、いたよ。でも、島田くんが来る前にみんなよ所に引き抜かれちゃつた。わざわざ人の少ない鎮守府にいるよりも、人の多いところで経験積みたい……ってね」

「でも、倉竹司令はよ所には行かなかつたのね。代表を断ることもしなかつた、と」

「引き抜きの話自体はこつちにも来てるけど、人が多いのは嫌だから断つたよ。舞鶴に来たのも少人数制つてところに惹かれたからだし、それに、島田くんの年齢の頃からここで提督やつてるしね。愛着があるんだ」

「倉竹さん、そんな昔から提督やつてるんですか!?　てつきり着任して2〜3年ぐらい

の人かと」

「そんな昔からやってるんだよ、意外と」

島田のリアクションに対し、倉竹はそう頷いた。

「それに、俺からすれば、鎮守府の代表になった方が都合良いことが多くてね。島田くんの面倒を舞鶴で見ると決めたのも俺だし」

「……えっ、倉竹さん面接会場にいませんでしたよね？」

島田は面接試験のことを思い出し、きよとんと目を丸くした。倉竹は続ける。

「試験会場には録画カメラがあつて、それで各鎮守府・警備府・泊地代表の提督たちが見るんだよ。オレ以外の代表は島田くん採用したくなかつたみたいだね」

「ろ、録画されてるんですかアレ。『僕が提督になったら、少年提督周りの環境変えてやるー!』って啖呵切っちゃったの見られてたんだ……」

島田は頭を抱えて恥ずかしそうに顔を真っ赤にした。

倉竹はクスツと小さく笑った。

「だからこそ俺は採用したんだから、気にしないで。……本当、昔と変わってなくて良かったよ」

「……昔って？」

「ん、なんでもないよ」

倉竹の口から不意に漏れた言葉に、島田が反応した。が、倉竹は首を横に振って、なかつたことにした。

デンバーは倉竹と島田の会話を聞き、小さく口元を綻ばせた。

「倉竹司令の護りたいものは、ここにあるのね。あなたみたいな人が舞鶴の代表なのが少し羨ましい」

「そうかな。他の鎮守府に所属してる提督からは、頼りないって言われがちだけど」

「ええ」

デンバーは頷き、

「少なくとも、私はそう思う。島田司令も、クラクストンも、あなたのような人が上司で幸せだと思う」

「はは、それは買い被りすぎだよ。でも、君みたいな子がそう言ってくれるなら、俺も嬉しいよ。ありがとう」

「ううん、私は思ったことを言っただけよ」

と、デンバーは首を横に振った。そして、今の横須賀の惨状を脳裏に浮かべ、自分が慕い続けていた少年司令に想いを馳せた。

(……倉竹司令なような人がいたら、あなたの今も違ったかもしれないのに)

020：誓約への道のりは遠く

その日の夜、事がひと段落したところで、島田は自室のノートパソコンの電源を入れ、シャリーから受け取ったUSBをノートパソコンのUSBポートへと差し込んだ。島田はノートパソコンがUSBの中身を読み込むのを待ちながら、シークワーカーがジューズが入ったコップを口へとつけ、その中身を喉へと流し込んだ。

島田はジューズをある程度胃の中へと注ぎ込むと、ぷはつと息を吐いた。

（まったく、今日は朝から大変な1日だった。疲れが溜まってからか、シークワーカーがジューズが美味しいや）

なんて、沖縄県民らしいことを思いながら、島田は表示されたファイルをクリックして、その全貌を眺め始めた。

そこに映し出されているのは、自分が卒業時に所属していた兵学校の生徒たちのデータだった。自分が知っている顔から、一切クラスが合わずに終わってしまった生徒たちの分のデータまで、何もかもが網羅されている。

（こんなものがアイツの見られたくないデータ……だったのか？ いや、まあ、個人情報という観点では見られたくないけど……）

——本当に、ここに彼の家族に関する事が書かれているのだろうか？

島田はどうにもこうにも疑り深くなって、このファイルの存在意義を問いたくなくなった。島田本人も言った通り、個人情報という観点では、見られたくないデータはここに詰まっているはずだ。確かに家族構成や、実家の住所、成績の順位やその内訳など、そういうことがここには書いてある。しかし、この家族構成欄に書くことができるのは、ただ、父母その他兄弟の純粹な構成だけだ。あとは未成年者は保護者である父親の名前が書かれている程度で、ゼヴィンが島田に見られたくないものが書かれてるとは考えづらい。

とはいえ、島田はさまざまな生徒の情報を眺めながら、自分に悪口をふっかけてきた青年生徒の情報なども掴んだりすることもできるし、そう悪い話ではなかった。

そして、しばらくすると、ゼヴィンが所属していたクラスの欄へと突入した。島田はマウスのホイールでひたすらスクロールし、ゼヴィンのデータを探した。

と、

「あっ」

(これか……)

とうとう、見つけた。

島田はゴクリと唾を飲み込みながら、ゼヴィンのデータを見つめ、それを吟味し始め

た。

名前は相変わらずのロシアとのハーフが分かりやすい名前で、年齢もこちらと変わらない。成績の内訳も他人に出しても恥ずかしいものではないし、身長体重だつて、彼の見てくれ通りだ。これらのデータに不味いものが書かれているような雰囲気は、今のところ感じられない。

島田はこんなものかと、本題である彼の家族欄へと目を移したところで、すぐに目を丸くした。

「は……え？」

(ち、ちよつと待て……なんだ、これは！)

島田は何度も何度もそれを見返し、それが現実だと分かると、その場で絶句した。

(……嘘だろ、これが本当なら、兵学校どころか横須賀鎮守府がザルじゃないか！)

と、

(いくらなんでも、これは不味すぎる……でも、これなら、アイツが深海軍を呼んだ事実と辻褃が合う)

島田は思い掛けない事実、頭を悩ませながら、テーブルに肘をつけて項垂れた。

(つていうか、こんな事実を知って、僕には何ができるつてんだ……まさか、横須賀鎮守府丸ごと、この手で変えろつてか?)

あの鎮守府の状況を改善するのは、いつか誰かがやらねばいけないことだろう。しかし、ゼヴィンをどうにか止めるために、そして、少年提督たちを取り巻く環境をどうにかするために動いている自分に、これ以上何ができるといえるのだろうか。

けれども、

(……ただ、横須賀鎮守府がこんなにザルじゃ、いずれこつちの思惑にも関わりかねん。アイツは完全に横須賀鎮守府に守られてる状態だ。それを破るために、何か打開策を考えなきゃ)

と、島田が項垂れていた顔を上げたところで、

「司令官様。お届け物が——つて、あら？ どうかなさいました？」

「……クラクストーン」

クラクストーンが、手に小さな箱を持って部屋へと入ってきた。

クラクストーンは島田の様子を見るなり、すぐにそちらへと駆け寄って、その顔を覗き込んだ。

「何かあったんですか？ 私で良かったら、相談に乗りますよ？」

「つ……いや、大丈夫」

島田は首を横に振って、表示していたファイルをさっさと閉じた。

それから、クラクストーンの手の中にあるそれを指差した。

「ところでクラクストン。それはなんだい？」

「あつ、はい。司令官様宛に届いてたんですけど、私もよくわかつてなくて」「そつか。じゃ、中を確認しようか」

と、島田はその小さな箱を彼女から受け取り、その外装をまじまじと見つめた。見た目は黒くて、表面の材質も肌触りがよく、明らかに普通の箱ではなかった。

一体何が入っているのだろうか、と——島田はパカ、とその蓋を開いた。

「——あつ」

「あら」

そこに入っていたのは、白い布に包まれたスポンジと——その上から刺すように置かれ、キラリと光っている銀色の指輪だった。

島田はどうしてこんなものが届けられたのかと、一瞬首を傾げたが、戦艦少女たちに関わるものゆえにすぐに思い出すことができた。

——そう、これは誓約用の指輪なのである。

戦艦少女が一定の好感度を提督に寄せるようになると、とある一つの契りを提督と交わすことができる。それが、「誓約」というシステムである。誓約をすることで、戦艦少女たちの一部のステータスが向上し、さらなる力を発揮することができる。この誓約を交わすには書類と指輪が必須になり、この指輪は対象の戦艦少女へと捧げる用のものだ。

また、言葉から察する通り、これは普通の男女間で言う「婚姻制度」に相当するものであり、誓約済みの戦艦少女もそういった態度で接することが多くなる。

とはいえ、この誓約システム、国が制定している婚姻制度ほど厳しいものではなく、普通に複数人と契りを交わすことができるし、基礎ステータスの向上目当てで複数の戦艦少女と誓約している提督も多く存在する。特定のひとりと誓約を交わしている提督の方が少数であろう。

——そして、島田はその少数派だ。

島田はクラクストンへと視線を移し、言う。

「クラクストン。まずは……その、君の意思を確認させてくれ。分かってはいるけど、こういうのって、確認が大事だと思うから」

「……はい、司令官様」

クラクストンはニコツと小さく笑みを浮かべ、頷いた。

「私は……ずっと、あなたひとりだけを想い続けてきました。そして、これからも、あなただけしか見えていないと思います」

と、

「あなたと共にいた一日一日が、絵筆を使って描き残すにふさわしい大切な記憶です。これから先もずっと、あなたと一緒に、大切な記憶を描いて行きたい——約束ですよ

「？」

「……うん、ありがとう」

島田は小さく笑みを浮かべて頷いた。

（思ったよりも早くこの日が来ちゃったけど、彼女にとってはずっと待ち焦がれてた日なんだろうな）

島田は指輪を手にする、もう片方の手でクラクストンの左手を掴んだ。彼女の手の甲を表に向けると、その薬指の先に指輪を浮かせた。

「じ、じゃあ……行くよ？」

「はい」

島田が緊張しながらクラクストンの薬指に、指輪を嵌めようとした——その時だった。

「きゃっ!?!」

「ぐっ、う!?!」

——ふたりの間に、バチン、と、凄まじい勢いで電撃が走り、その拍子で指輪がふたりの手元から床へと落ちてしまった。

島田は落ちた指輪を見て、ただ、呆然としていた。

（……え？ これってもしかして、誓約、拒否……?）

思わず、クラクストンの方へと目を向けた。当のクラクストンも動揺しているようで、その顔には脂汗が浮かんでいた。指輪を見ている青い目にも、どこか険しい様子が浮かんでいた。

クラクストンの意思を無視した結果ではない——となると、考えられるのは、戦艦少女側の多重誓約か。しかし、あのクラクストンが島田以外の提督とそういう関係になっているとは到底思えないし、島田もそれだけは考えたくはなかった。

クラクストンはしばらくしてから、何か察したように悲しげな表情を浮かべて、膝を曲げ、床に落ちた指輪を右手で拾い上げた。

島田はそんなクラクストンに話しかける。

「あ、あの……クラクストン？」

「……司令官様は気にしないでくださいね」

と、

「私、なんとかしてこの指輪を身に付ける方法探してみますね。せつかく司令官様が行動で示してくれた証なんですもの、手放したりなんてしません」

「クラクストン……そんな、無理しなくても」

「だって」

クラクストンは顔を上げ、

「せっかく、司令官様が二度も私を好きになつてくれたんです。こんなことでそれを弾いちやうなんて、絶対に嫌です」

「……………え？」

(二度、も?)

島田はクラクストンのその言葉に、思わず目を丸くした。

島田がその言葉を真意を聞く前に、クラクストンはペコリとお辞儀して、黙つて部屋の外へと出て行つてしまった。パタン、と扉が小さく閉まる音が、部屋の中で響いた。

クラクストンは扉の外側に背中を預け、島田が渡してくれた指輪をギョツと右手で強く握り締めた。

(司令官様……………どうか、誤解なさらないでくださいね)

と、

(……………やはり、『あの時の』指輪じゃないとダメなんですネ)

——所変わつて、長崎県佐世保市にある佐世保鎮守府。

舞鶴鎮守府が少人数制の進学校、横須賀鎮守府がエリートが集う有名なマンモス校だとすれば、佐世保鎮守府はのどかに運営されている一流校である。そこまで切り詰めて提督になりたいわけでもない、かと言つて自由と言われても困るぐらいの人々がこの鎮

守府に合うと囁かれている。

そんな鎮守府の敷地内にある宿舎で、彼は提督として、衣食住を過ごしていた。彼は少年で、将来を期待されている人物のひとりであったが、その紫色の瞳はどこか人生に對して諦めが見えている。

電気を一切点けてない部屋の下、彼は目の下まで伸びきったグレー色の前髪を軽く手で払い除けながら、スマートフォンに映し出された異動願が受理された連絡を見て、ベッドの上で横になった。スマートフォンは近くへと放り投げ、スリープボタンを押した。

と、扉が開いた。

「司令、ただいま戻りましたよ。……って、また電気点けずに携帯見てましたね？」

「……スミス」

少年は彼女の姿——スミスを見るなり、再び上半身を起こして、彼女を見た。

スミスは部屋の中へと入ると、電気のスイッチをパチンと押して、天井に備え付けてある電球を点灯させた。すると、スミスの桃色の長い髪の毛と、ヘソが丸出しになっているタイプのグレーのセーラー服が露わになった。

スミスは手に持っていた旗を部屋の隅に置いて、少年のベッドの上へと腰掛けた。

「で、どうでしたか？ 舞鶴への異動は許可されましたか？」

「……なんとか」

「そうですか、なら良かったです」

と、スミスは部屋を見渡した。

「はい、この部屋とも、しばらくはお別れですね。一応佐世保には戻ってくるとは言えども、ここにはかなりお世話になってましたからねえ。ちよつと寂しいかもですね」

「……いや」

少年は首を横に振る。

「オレは早くここを離れたい……というか、提督やつてる理由もなくなつたし、舞鶴での件が済んだら、普通の中学生に戻ろうと思つてる。それに……今回は」

「……そうですね。上の人たちには隠してますけど、理由が理由ですもん。そりや司令も嫌になつても仕方ないです」

スミスはそう言うのと、少年の頬に自分の手を置いた。

「私は何があつても、司令について行きますよ。司令が提督を辞めるなら、私も戦艦少女を辞めますし、司令の家に嫁ぎに行きます。司令のお母さんよりもできることへ少ないかもしれないけど、料理とか洗濯とか頑張りますから」

「……」

「……なんて、司令は許しませんよね。私には私の未来があるからって、未だに誓約させ

てくれませんもん」

スミスは苦い笑みを浮かべて、少年から離れた。

「でも、私は何があっても司令の味方ですからね。だから、安心して一緒に舞鶴に行きましようね！」

「……」

少年は何も答えなかった。

スミスはそんな少年の隣から離れて立ち上がると、思い付いたように言い放った。

「そうだ、晩ご飯用意しましょうか。何かリクエストありますか？」

「……サンドイッチ」

「せっかくの晩ご飯なのに、そんな軽食でいいんですか？」

「……じゃ、ハンバーグ」

「はい、分かりました。冷凍してたものがあつたはずなので、温めますね。サンドイッチも作りますから！」

スミスは彼のリクエストに満足そうに笑みを浮かべて、そのまま部屋の台所へと向かった。

少年はそんなスミスの背中姿を見送り、再びベッドの上で横になった。

(舞鶴鎮守府での任務……早く終わらせてしまおう……)

021：岸尾とスミス

「本日から舞鶴に配属された岸尾、です……。佐世保からの不束者ですが、よろしくお願
いします……」

「私は岸尾司令の秘書艦DD—378こと、マハン級15番艦のスミスです！ 皆さん、
よろしくお願いますね〜」

——そう言つて、対照的な少年少女ふたりがぺこりとお辞儀をし、島田たちに向けて
挨拶をした。

あれから数週間経つて6月に入り、佐世保鎮守府から少年提督と駆逐艦の戦艦少女ひ
とりが、この舞鶴の地へと配属された。島田たちは、まさかこのタイミングで追加の提
督が来るとは思つておらず、倉竹から聞いた時にはびつくりしていた。しかし、せつか
く同年代の提督が増えるのだから、仲良くやつて行きたいと——そう思つていた、が。

島田は岸尾と握手しようと、彼に向けて手を差し出した。

「岸尾くん、初めまして。この春から舞鶴鎮守府に所属してる島田です。よろしくね」
「……」

しかし、岸尾はそれに応じることはなく、ただ、黙つて頷いて後ろへと引いた。

島田は思わず口元を引きつらせる。

(え……ええ……)。先が思いやられるぞ、これ)

そう、男子同士ならコミュニケーション能力がある島田ですら、どう接していいか分からないぐらいに、岸尾は暗かった。ここで比較的大人しめなシャーリーですら、根はそんなに暗い少年ではないし、島田も相応に対応できるわけだが——この岸尾だけは、どうにも簡単にはいかないようだ。

島田は手を引つ込めて、引き下がる。そして、自分の隣に立っているクラクストンに耳打ちした。

「なあ、クラクストン。ちょっとあれ、どう思うよ。もしかして、あの子……僕が怖いのか？」

「こ、怖いというより……人見知りするだけなんじゃないかと。そうだ、私はスミスさんに挨拶しますね」

クラクストンは苦い笑みを浮かべながら島田にそう言うと、スミスの方へと歩み寄った。

「スミスさん、初めまして。私はDD―571、フレッチャー級のクラクストンです。司令官さ……島田さんの秘書艦です。よろしくお願いしますね」

「クラクストン！ あなたが噂の！」

と、

「あなたの活躍は当時から耳にしておきましたよ。戦争を戦い抜いたアメリカ駆逐艦同士、仲良くしましょう！」

「はい、こちらこそ！」

（ああ、良かった……スミスさんとは仲良くやれそう）

クラクストンは明るく朗らかに接してくれるスミスに強い安心感を覚えた。彼女の相手である岸尾があつた様子だから、スミスもどうなのかと不安になってしまっていたのである。

一方で、島田は岸尾について、スミスに質問した。

「スミス。岸尾くんについてだけど、彼はいつもあんな調子なのかい？」

「ああ……はい、そうですよ。昔はもうちよつと明るかつたんですけど、今はちよつと」
「……」

（この様子、ワケありか？）

自分の質問に対し、顔を曇らせて答えたスミスを見る限りでは、そうとしか受け取れなかった。しかし、スミスはすぐに笑顔になる。

「でも、ここに来たからには、ちゃんと仕事しますよ！ それに、司令のサポートをするために、私はここにいますからね。何かあつたら、私経由で教えてくれると嬉しいです

！」

「ああ、ありがとうスミス。そうしてくれると助かる」

（現状、彼には話しかけづらいからなあ……）

と、島田は、チラツと岸尾へ目を向けた。

岸尾は島田と一度目が合うものの、そのままふいつと顔を明後日の方向へと向けて、島田のその視線から逃れた。島田は、「うーん」と首を傾げて、頭を抱える。そして、後ろで見守っていた倉竹にバトンを渡した。

「倉竹さん。あとの案内はそっちに頼みます」

「了解。こういう子の扱いは慣れてるから」

「すみません、ありがとうございます」

困った時の倉竹頼りだ。

倉竹は島田からバトンを受け取って、島田の代わりに前に出た。

「岸尾くん。ようこそ、舞鶴鎮守府へ。俺が鎮守府代表の倉竹です」

「……どうも」

「何かあったら遠慮なく俺に言ってください。俺もちゃんと言うから」

「……はい」

「倉竹司令、お気遣いありがとうございます！」

スミスは笑顔で頷いて、岸尾の腕を引っ張った。

「えっと、その様子だと、まずは鎮守府内の案内ですよな？　お願いしていいですか？」

「もちろん。じゃ、行こっか。島田くんたちはいつも通り、各々の仕事をお願いね」

「はい」

「了解しました」

「分かりました」

島田たちが倉竹にそう返事をする、倉竹はそのままスミスと岸尾と共に、鎮守府の中の案内をするために、部屋から出て行った。

3人が外に出ると、少年提督たちは「あー」と、体から魂が抜けたように、肩からガクツと力が抜けた。シャーリーは部屋の扉を見ながら、言う。

「岸尾くんだっけ。舞鶴の方向性には合ってそうだけど、接し方が分からないよ……」

「佐世保からの来訪者だろ？　んまあ、あそこでやっていけるんだったら、舞鶴でもそれなりにやっていけるだろうけど……ここ、ちよつと集落みたいところあるから、それに耐え切れるかどうかだな」

「おい、集落ってなんだ。そもそも集落って言うほど人もいないぞ、この鎮守府」

島田は、大原のその例え方に思わず突っ込みを入れた。

とはいえ、舞鶴鎮守府が集落気味になつてるのは、島田としても微妙に否定はできな

かった。そもそも舞鶴鎮守府自体、少人数制ということで他の鎮守府よりも採用条件は厳しいものになってるらしく、横須賀は合格できても舞鶴は面接で落とされる、なんてこともよくあるらしい。

「まあ」と、島田は続ける。

「彼がここに居るのは月単位ぐらいで、ずっとここにはいないらしいし、あまり深く関わる気にもなれないのかもしれないな。何かあつたら彼の秘書艦がやりとりしてくれるし、その面での心配はいらないとは思うんだけどさ」

「ふーん、島田としては、アイツに深入りしないって方針ってことか」

「それで良いと思うよ。スミスさんの様子を見る限り、何かあつたみたいだし」

シャーリーは島田の意見と、大原のそのまどめに、コク、と小さく頷いた。

「岸尾くんと一緒に出撃するのは明日なんだっけ？」

「うん。その時にちよつと話せれば良いと思うけど……」

島田は顎に手を当てて、首傾げた。

(うーん……やっぱり、さっきのスミスの言葉は引つかかるよなあ)

岸尾とスミスは倉竹の案内のままに、足を運んだ。

倉竹が次々と鎮守府内について案内してくれる中で、スミスは岸尾の左横を歩きなが

ら、彼に小声で話しかけた。

「ちよつとちよつと、司令く。さつき、島田さんが握手しようとしたのに、スルーしたでしよ〜」

「え……あ……だつて、そんなに親しくないし」

と、岸尾が小声で返すと、スミスは呆れたように言った。

「親しくなくても、ちゃんと握手には応えなきやダメですよ。司令だつて、握手しようとして無視されたら、嫌な気持ちになるでしよ〜？」

「別に……こつちから握手なんてしないし」

「んも〜、そういうことじゃないつてば〜！」

スミスは小声ながらも、強く続けた。

「あのね？ 良いですか、司令。私たちはちゃんと目的があつてこの鎮守府に来てるんですから、怪しまれないように振る舞わなきやダメです！ 握手拒否なんて怪しまれても仕方ないですよ！」

「そう……かな……。向こうはそういう奴だつて受け取つたみたいだけど」

「もー。まあ、やりとりのメインは私が引き受けますけど、司令もちゃんと最低限の受け答えぐらいはしてくださいね。なんでもかんでも私に任せつきりじや、提督としての名が廃りますよ」

「提督なんて、ここでの勤務が終わったら辞めるつもりだし……どうでもいい。そんなに気にするなら、スミスが全部やればいいだろ。オレはやるべきことをやるだけだから」

岸尾はそう言うと、隣にいるスミスよりも早歩きで倉竹の方へとついていった。スミスはいつも通り歩きながら、そんな彼の背中姿を見て、手に持っていた旗を両手でギュツと強く握り締めた。

（最初、司令に出会った時は本当にこんなんじゃないやなかったのになあ）

スミスと岸尾が出会ったのは、佐世保鎮守府に備え付けられている図書館だった。

少なくとも、根のインドアな性格は今とは変わってこそいないが、今よりは目が生きていたし、自分の目的に対しても希望を持って仕事に臨んでいた。こっちにもよく笑いかけてくれたし、こちらのサポートも全面的に喜んで受け入れてくれていた。そして、そんな彼となら将来永く付き合えそうだ、と思っていた。岸尾は恋愛に関しては奥手であり慎重すぎるため、こちらに手こそは出してこないものの、態度や言葉の節々から、自分と同じ気持ちでいてくれるんだろうな、ということは薄々察している。それだけは今でも変わっていない、彼の要素だ。この要素がなかったら、岸尾のことはとつくに見限っていただろう。

そんな彼の性格が崩壊するような出来事が起きたのは、今年の4月に入ってからこの

とだった。

その時、彼が提督になった目的へと到達したのだが——その事実はあまりにも残酷だったのだ。

岸尾はそれからすつかり心を閉じ、提督を辞める決断をし、宿舎に引きこもりがちになった。スミスはそんな彼を懸命に支えつつ、なんとか出撃に向かわせたりなど、とにかくやらせなければいけないことは何とかやらせてきたものの、彼が提督を辞める決断は一切変わることはなかった。

そうして、5月の大型連休が明けた頃、岸尾は「とある提督」に何か言われたようで、舞鶴鎮守府への異動を希望した。そして、それは受理されて、今に至るのである。

異動の切っ掛けがどうであれ、スミスの中では、この舞鶴勤務が彼の何かを取り戻してくれるかもしれない——という希望が微かにあった。舞鶴は人こそは少ないものの、岸尾と同年代ぐらいの少年たちが集っており、岸尾が自分を戻すとしたら、もうこのタイミングしかないと思っていた。ここで彼が戻ることができなかつたら、もうそれまでであると。

スミスとしては、それこそ彼が提督を辞めても、普通の少女として無理矢理つくいてくつもりだし、そもそも彼の状況では誰かが側にいなければ不摂生一直線だ。

(舞鶴の人たちも、戦艦少女の人たちも、優しそうだった。けど、司令がそれをどう受け

取るかは別問題なんだよね)

スミスは小走りをして、再び彼の隣へと辿り着く。そして、岸尾へとまた話しかけた。「ねえ、司令？ この鎮守府はどうですか？」

「……佐世保より人少ないわりに、うるさそうだなって思う」

「そりゃ、年頃の男の子が3人もいますからねえ」

スミスはその感想に、思わず苦笑いしてしまった。

「でも、同年代同士なんだし、任務云々は置いといても、ここにいる時ぐらいは交流持っておいた方がいいですよ。疑われないようにするのもありますけど」

「けど？」

「司令にだって、そういう相手がいたって良いわけじゃないですか。なんて言いますかね、馬鹿なこととして騒げる相手っていうか」

「……いらない」

と、岸尾は首を横に振った。

「というか、仲良くしてくれるだけならスミスがいるし、オレはそれで良い。スミスはそれじゃダメなの？」

「司令、恋人と友達は別ですよ、別。私は司令の恋人にはなれますけど、友達にはなれませんからね。だって、恋の相談とか乗れないし」

「……言いたいことがあったら直接言うから、恋の相談とかもよく分からない」

「ま、まあ……司令はなんだなんだで素直な人ですから、相談とか必要ないのかもしれないかもね」

（こういうところだけは変わらないんだから、この人……）

と、スミスが内心困惑していると、

「ふたりとも、そろそろお腹空かないかい？ この先に食堂があるんだけど、案内ついでに何か食べて行こうと思ってるんだけど」

倉竹が少し早めの昼飯を提案してくれた。

一応、朝食自体は食べてきたとはいえ、もう数時間前のことであり、そろそろ何か食べたいたいとスミス自身も思い始めてきた頃だった。

スミスは笑顔で頷く。

「はい、私もそろそろ何か食べたいなーって思ってた頃なんですよね。司令もお腹空いてません？」

「えっ、オレは……」

「司令」

「……」

——スミスからの圧力である。ここは会食をしておくべきであるというスミスの赤

い瞳からの訴えが、岸尾へとビシビシと襲いかかってくる。

岸尾はスミスのその圧力に負けたらしく、横に振りかけた首を無理やり縦へと動かした。

「……はい。オレも、そろそろ何か食べたいなと」

「良かった。じゃあ、一緒に何か食べよう。メニューについては偏りあるけど、気にしないでくれると嬉しいな」

「わーい！ 楽しみです！ ねえ、司令？」

「……うん」

——こうして、岸尾とスミスの舞鶴での生活は幕を開けたのであった。

022：誓約の意味

「フヒヒ……クラたん……」

島田のそんなねつとりとした粘着質な声が、部屋の中に響き渡った。彼の右手にはマウスが握られており、カチカチとクリックを繰り返しながら、ノートパソコンで何かを見ているのが分かる。

ボストン型の眼鏡のレンズを通して、島田の琥珀色の目の中に飛び込んでくるのは――彼が撮ったと思しき演習中のクラクストンの写真だった。その写真は10枚ぐらいあるようで、島田はそれらを吟味していたようだ。

演習中ということだけならばいいが、その写真は全体的に際どい。擬似中破した時の彼女の大きな胸元や、激しく動いている時に靡いているスカート――とにかく、見えそうで見えないラインを写真に撮っているのだ。無論、見えているものも写真に収まっているが、それはすべてスマートフォンの中へと保存済み。島田本人としては、そういったものは手元に置いておきたいようだ。

島田は傍目から見れば、変質者や不審者と直喩されてしまいかねない気色悪い声を口から漏らしながら、写真のあらぬ所を拡大した。

（あく、無防備なおっぱいでかい銀髪美少女やっぱり最高でしょ！　こんな娘と誓約できるなんてこの世界のシステム素晴らしすぎるし、提督になって良かった〜！）

指輪自体はお互いの指には嵌められなかったものの、ステータスとしては、誓約の時に上乘せされるものがしつかり反映されていた。システム上では、そういう関係としてふたりの仲は認められているようだ。

島田は次々と映し出されるクラクストンの写真に、下卑た笑みをひたすら浮かべ、悶え、しかし物足りないといった様子で、次の写真を表示しようとしたところだった。

「あの……すみません」

少年の声と同時に、ガチャリ、と、扉が開く音がした。

島田はそれらが自分の耳へと飛び込んでくると同時に、乱暴にパソコンの電源を切り、激しくノートパソコンを閉じた。そして、心臓が動悸を繰り返し、緊張で息切れしてヒイヒイ言いながら、島田はそちらへと目を向けた。

そこにいたのは——昨日、この鎮守府へと配属された少年・岸尾の姿だった。

島田はその姿を見るなり、腰掛けていた椅子から立ち上がり、いつものクールな調子で言う。

「や、やあ、岸尾くん。君から僕のところへ来るなんて、ちよつとびっくりしたよ。どうしたんだい？」

「いえ。そろそろ出撃の時間なので迎えに行ってくれと、倉竹さんからの命令で」

「ああ、もうそんな時間か」

と、島田は部屋に飾られている時計を見た。島田は襟元を正し直し、黒いネクタイを再びキュツと上げた。

「クラクストンとスミスはとづくに外へ？」

「ふたりはすでに外に……」

「OK。行こうか」

島田は戦艦少女ふたりの行方だけ確認して、岸尾と共に部屋を出た。

岸尾は廊下に出るなり、自分の隣で歩いている島田をチラチラと見た。

（「アイツ」から渡された資料によると、精神力が凄まじく強くて、我慢強い。その分、爆発力も尋常じゃないから、特別危惧している）

そして、

（ここに來てから判明したのは、DD-571のクラクストンと誓約済みなこと。……
そんなやり手には見えないのに）

岸尾はスマートフォンを取り出すと、メッセンジャーアプリに届いたスミスのメッ
セージを見た。

(誓約でひとりの戦艦少女の運命は大きく狂わされる。だから、オレはスミスと誓約には至ってない)

岸尾はスミスのチャットに適当に返信して、スマートフォンをポケットの中へと仕舞った。島田はそんな岸尾を見て、言う。

「その様子、スミスからなんか来てたのか？」

「ああ、まあ」

「彼女は結構君に熱を上げてるようだけど、そっちはそうでもないのかい？」

「オレは……そんなんじゃないので」

と、岸尾は首を横に振ってから顔を上げ、

「貴方は何故、DD-571と誓約を？ 貴方の性格なら、安易にそんなことしないと
思ってるんですけど」

「おいおい、僕だって安易に彼女と誓約を交わしたわけじゃないよ」

島田は思いもがけない彼の質問に、思わず苦笑した。

「僕は彼女のことは好きだよ。彼女のことをひと目見たときから、この娘と誓約したい
なあつて直感で思ったぐらいだし」

「……軽薄な」

「でも、誓約なんてそんなものじゃないのかな。人間だって、直感でこの人と結婚するん

だらうなあってことはあると思うよ」

そこまで言ったところで、島田は質問し返した。

「んで、君はスミスと誓約はしないのか？ 君がどう言おうとも、結構仲睦まじいよ
うだけど」

「オレにはオレなりの考えがあつて、誓約してないので」

岸尾は、強く、はつきりと、そう言い放った。

「そもそも、誓約したところで彼女の将来を保証できるのですか、貴方は」

「将来を保証……つて、この世界の誓約はそういう重いものじゃないだろう。それこそ
複数の娘と誓約できるんだから。僕は複数人と誓約なんてしたくないけどさ」

「……いえ。重いんですよ、彼女たちにとつて」
と、

「誓約したのに結局他の女とくつついて……それで残された戦艦少女たちは、どうなる
んですか。国で制定されてる結婚のように誓約を取り消すことはできないし、ずっと囚
われたままになる。複数人との誓約もそうだけど、ひとりでの誓約だつてリスクを背負
う可能性があることを、鑑みない提督が多すぎます」

「……なるほどね」

島田は呆れ混じりの溜息を吐いた。そして、自分たちの目の前まで来ていた外へと通

じる扉を引いた。

「僕は彼女以上の女性はいないと思ってるし、他の女とだなんて考えるだけでも吐き気するけどね。身近にいる奴でそんなことする奴もいないと思いたいし……君の身近に、そういう例でもあったのかい？」

「……無駄な詮索はよして下さい」

岸尾は島田よりも先に、開いた扉の外への足を踏み入れ、そのままズカズカと港へと向かった。

島田は「うーん」と首を傾げながら、自分も外に出て、鎮守府の扉を閉めた。と、そこへ、

「司令官様。お待ちしてました」

「クラクストン」

扉の脇に立ち、島田のことを待っていたらしいクラクストンが、姿を現した。

島田は彼女の姿を見るなり、少し驚いたように質問した。

「どうしてここに？ スミスと先に行ってたんじゃないかったのか」

「いえ……待つていられなくて」

クラクストンは苦笑しながら、島田と共に港へと向かい始めた。

その中で、クラクストンは先ほどの岸尾の様子を見ていたらしく、島田へと問いを投

げた。

「あの、司令官様。岸尾さんと何かありましたか？ さっき、イライラしながら向こうに行ってたみたいですけど……」

「ああ、ちよつと誓約のことだね。クラクストンと誓約するなんて、ちよつと軽薄じゃないのかって突かれたよ」

「あら」

困ったように眉を下げる島田の横で、クラクストンは目を丸くして、驚いた。

「軽薄だなんて、またどうして？」

「将来のことまで保証できるのかって、言われちゃったよ。国の法律で定められたものじゃないから、それと同列に語られても困るんだけどなあ」

「なるほど。でも、誓約って、そう考えると本来は重く考えるべきものかもしれないね」

と、

「提督側は複数人の娘と誓約できますけど、私たちは複数の提督と契りを交わすことはできません。あくまでも、提督側に有利なシステムです。ゆえに、安易に誓約をするな……ってことなんでしようね」

クラクストンは島田の左腕に自分の両腕を絡めた。

「でも、だからこそ、司令官様が私以外の娘と誓約しないって、忽然とした態度を取っていることが嬉しいんです」

「クラクストン」

「だから、岸尾さんの言うことは気にしなくて良いと思います。司令官様が司令官様のままであるのなら」

「……そうだけぞ」

と、島田は改めてクラクストンへと顔を向けた。

「少し引つかかることもあるんだ。僕じゃなくて、彼のことでね」

島田は港が近付いているのが見えると、そつと、クラクストンの両腕から自分の腕を引き抜いた。

「まあ、そのことは追々つてことで。クラクストン、今日の出撃も頼んだよ」

「……はい、分かりました」

クラクストンは自分から島田が離れてしまうことに寂しさを覚えつつも、出撃が差し迫っていることに気付くと顔色を変えて、島田の言葉に頷き返した。

島田とクラクストンは一足先に港入りしていたスミス・岸尾ペアと再び合流し、船内へと乗り込んだ。船内には、英国の戦艦であるデューク・オブ・ヨーク（以下D o Y）と、同じ国出身である巡洋戦艦・レナウンの姿があった。D o Yは長い金髪のポニーテール

を煌めかせながら、メイド服を着ているレナウンが入れてくれた紅茶を飲んでいた。

D o Y は少年ふたりが船内入りしていることに気が付くと、立ち上がり、白いワンピース型の軍服の下に伸びている、艶めかしい黒タイツをまとった綺麗な足を見せた。

「貴方たちが閣下の後輩ですね。話はよく存じております。私はデューク・オブ・ヨーク。今日はよろしくお願いします。えっと……貴方たちのことは、どう呼べば？」

「名前でもいいですけど、倉竹さんのことを閣下呼びだったら、その下の階級呼びでいいと思います。鎮守府の運営も倉竹さんがしてますからね」

島田はそう言うと、岸尾に確認した。

「岸尾くんは一年ぐらい佐世保で働いてたんだっけ？」

「ええ、まあ」

「じゃあ、彼のことは大尉、僕の場合は少尉とでもお呼びください。提督という名称と矛盾しますが、その方が分かりやすいでしょうから」

「佐官でなくともいいのですか？」

「僕が尉官の響きに憧れがあるので。岸尾くんも巻き込みましたけども」

「ふふ……分かりました」

D o Y はクスツと小さく笑みを浮かべ、頷いた。

その様子を遠目から見ていたレナウンも、D o Y の隣に立った。メイド服なのもそう

だが、彼女の特徴的な青と金色のオッドアイも人々の目を惹くだろう。レナウンは深くお辞儀をして、顔を上げた。

「ご主人様が言っていた、島田様と岸尾様ですね。わたくしはレナウン。本日はよろしくお願いたします」

と、

「確か今日は他にも重巡洋艦がもうひとり来る予定なのですが……」
「すみません。少し予定が狂ってしまい、遅れてしまいました」

冷静な女性の声が響いた。

女性はこちらへと足を踏み入れると、かけている眼鏡をかちやりと音を鳴らしながら上げ、銀色の三つ編みを靡かせながら、紫色の目で一同を見渡した。

「ボルモチア級重巡洋艦、ボストンです。本日は司令官が仕事で忙しいため、代わりに少年たちの指導をお願いをされて、ここに来ました」

ボストンは島田と岸尾へと目を向けた。

「島田司令官と岸尾司令官、でしたか。本日の予定を聞いても良いですか？」

「ああ、はい。母港南部水域に行く予定です。倉竹さんからは、高速艦隊を組めば首領に辿り着くことが容易だと聞いてます」

今、島田たちが守ろうとしているのは、大本営からは第3の海域に指定されているマ

ラツカ海峡周辺海域だ。マレー半島とスマトラ島の間が存在している海峡であり、太平洋とインド洋を結ぶ海上交通の重要な航路のひとつである。最近はこのマラツカ海峡にも、深海軍の魔の手が伸びているらしく、各鎮守府の提督や戦艦少女たちが手を取って、この航路を守っている。

また、この第3海域からは島田が引率して殲滅することが決まっております、そうなれば当然、倉竹のことは関係なく出撃することになる。また、倉竹としては、第2海域まではチュートリアルということらしく、これ以降のことはすべて島田に任せるつもりだろうだ。とはいえ、まだまだ未熟であるがゆえに、ボストンのようなしつかりした戦艦少女を付き添いに出すことも多くなるだろう。特に今回は岸尾もいる。付き添いがいて正解だろう。

島田は倉竹からもらった情報を手掛かりに、作戦を立て始める。

「今回はどう足掻いても4連戦になってしまふけど、ここにいるメンバーの練度なら、制圧に支障はないと思う。分岐に関しても、この編成なら首領のところまで一直線。特に考えることはない」

と、

「あと、今回は1戦目から巡洋戦艦が出る可能性があるから、そうなったらレナウンのスキルで殲滅を頼む。一体だけなら、君だけで不要な被弾を避けられるはずだ」

「はい、了解いたしました」

岸尾は、そうやって次々と作戦を立てる島田をじつと見つめながら、隣にいるスミスへと目を向けた。スミスは興味深そうにその光景を眺めていた。スミスは、こちらへと感じた視線に、言葉を返した。

「司令も混ざってきたらどうです？　一応経験はあるんですから、助言ぐらいしても良いと思いますよ」

「……オレはいい。遠慮しておく」

岸尾は首を横に振り、再び島田回りの光景を眺め始めた。

023：乗り越える

「倉竹司令。執務中でお忙しい中、お邪魔して申し訳ない」

「いや、少しなら大丈夫だよ。珍しいね、デンバーが出向いてくるなんて」

倉竹が執務室で自分の仕事をしている最中に、デンバーは訪れた。

倉竹は一応来客用のテーブルへと案内して、京都で調達した緑茶をデンバーに淹れた。デンバーはそれを受け取ると、緑茶がある程度冷めるまで目の前の白いテーブルの上へと置いた。それから、テーブルを挟む形で、倉竹はデンバーと向かい合うように座った。

「これを見てほしくて」

まず、デンバーは手の中に持っていた2、3枚のコピー用紙を、倉竹へと差し出した。倉竹はそれを手にして、眺めると、その内容に意外そうに声を上げた。

「これ、岸尾くんのこと？」

「そう、岸尾司令のデータ。少し気になったことがあって、吉川司令に情報を出しても良かったの」

デンバーは頷いて、倉竹の質問に答えた。

今、倉竹の中にあるものは、つい先日ここへと着任してきた岸尾についてのデータだった。彼についてののある程度の情報は、履歴書などはこちらで目を通してあるもの、それ以上に詳しい情報がそこに羅列されている。

倉竹は「ふむふむ」と興味深そうに頷きながら、それらを眺め始めた。本名や出身地、その他諸々、何にも怪しいところはない——はずだったのだが。倉竹は、その該当の部分へと目を通すと、思わず顔を上げてデンバーに聞いた。

「デンバー。これって、もしかして……」

「気付いたようね、倉竹司令」

デンバーは冷めてきた緑茶を口の中へと含み、飲み込んだ。

「少なくとも、こここの代表であるあなたには知っておいて欲しいと思つて。吉川司令とホーエルと連絡取つた時は、本当に驚いたものだけど」

と、

「さつき、それをコピーするために印刷室にいたけど、その時、廊下を通りがかつた島田司令と岸尾司令の会話が聞こえてきた。岸尾司令は誓約に対して強い偏見があつて、彼自身の秘書艦であるスミスと誓約していない。多分、このことが影響してるんじゃないかつて」

「だろうね。さすがの俺もこれは想定してなかつたな」

倉竹は、悩ましげに眉と眉の間を近付けた。

「島田くんたちには伝えるべきかい？」

「いえ」

デンバーはその質問に首を横に振って、NOを出した。

「島田司令なら、きつと、彼の心を開くことができるでしょう。だから、岸尾司令から話すのを待つしかない、私は思ってる」

「そうか。まあ、デリケートな問題だし、誰かが口を出すわけにもいかないか」

倉竹は納得したように頷くと、立ち上がった。

「デンバー、教えてくれてありがとう。もう持ち場に戻っていいよ」

「いえ、こちらこそ時間を割いてもらって感謝する。勿体無いから、お茶を全部飲んでからここを出ようと思ってるわ」

「そっか。じゃあ、俺は執務に戻るから、出る時に話しかけて」

「うん、分かった」

デンバーはコク、と、小さく頷いて、そのまま倉竹の執務室の中でお茶を飲む。

デンバーは、お茶のほんのりとした苦味の中にある、小さな甘味に舌を奪われていた。
(……このゆったりとした甘さ、この鎮守府の優しさを再現してみたい)

「——以上、こちらが考えている作戦だ。異議があつたら今のうちに頼む」
船内にて、島田の凜々しくはつきりと通つた声が響いた。ここにいる戦艦少女たちは、特に異議を唱えるつもりはないらしく、島田の立てた作戦に何も言うことはなかった。

島田は彼女たちのリアクションを目にして、確認すると、そのままクラクストンと共にそこから離れて、部屋の間にある椅子へと腰掛けた。

そして、その一連の流れを見ていた岸尾は、島田が座るのを見ると、目線を彼から逸らして、自分の隣で待機しているスミスへと目を向けた。

「スミス。彼の作戦はどうだった？」

「話を聞く限り、特に問題はないと思いますよ」

と、

「でも、あの年齢で、あそこまできびきと仕切れるのは凄いですよ。倉竹さんの教育の賜物でしょうけど」

「……そうだな」

岸尾はスミスの言葉に同意して、深く頷いた。そして、小声で言う。

『『アイツ』から話を聞く限り、兵学校でもそんな感じだったらしいからな。集団生活をする以上、誰かがリーダーになるのは必然だけど……提督になるなら、ある意味必要な

要素だ」

「司令、自信なくしちゃいました？」

「いや……そういうわけじゃない」

岸尾は首を横に振る。

「ただ、オレも初の単独出撃で、あそこまで堂々と提案できなかつた記憶はある。駆逐艦や一部の戦艦少女はともかく、大体の娘はオレよりも年上だったり、お姉さんだし」

「ああ、年上に対しても遠慮しない姿勢ですね。島田さん、ガンガン突っ込んでいくタイプですしねえ」

と、スミスは続けて、

「彼を敵に回す度胸、かなりのものが必要ですよ司令。彼の心を折らせる手段はひとつだけあるとは、あの人も言っていましたけど」

「……分かってるさ」

岸尾は頷く。

「オレはやるべきことをやるだけ。それに変わりはない」

「司令……」

スミスは手に持っていた旗を、ギョツと一層強く握り締めた。

(それはそう、だけど……本当にそれでいいのかな)

スミスはそう思うと、その目を、ここにいる戦艦少女たちと島田とクラクストンの方へと向けた。特に島田とクラクストンのコンビについては、長い時間見つめた。

(アメリカットよりもメリットの方が多そうだから、司令の舞鶴行きを引き留めようとは思わなかったけど……いざこうして目の前にすると、抵抗が出ちゃう)

と、

(全ては司令がやることだし、私はそれに従うまでなんだけど……うーん、ここにきて迷いが生じるとは)

スミス本人としては、岸尾がそれでいいなら自分もそれに従うまでの話なのだが、それでもスミスの本音としては抵抗がある、と言った方が良いだろう。そもそも戦艦少女同士や提督間で内部分裂すること自体、彼女にとっては好ましくはないし、向こうだつてそれを望んでいるわけではないだろう。

スミスがそうして岸尾の横で軽く縮こまっていると、

「！」

何かの気配を感じ、顔を上げた。

スミスは最初、島田が言っていた1戦目の深海軍が来たのかと思つたが——それにしでは、こちらに降りかかってくるプレッシャーが次々と強くなつていつているような気がするのだ。

この違和感はここにいた戦艦少女たち全員が感じているようで、互いに顔を合わせて確認していた。

(なに、これ……駆逐艦はもちろん、巡洋戦艦の気配じゃない!)

島田と岸尾がガラツと変わった戦艦少女たちの空気に困惑している中で、スミスは思わず、同じ駆逐艦であるクラクストンへと確認した。

「クラクストン! どうですか、そちらは」

「は、はい……明らかに首領の編成ですね、これは」

クラクストンは頷き、

「司令官様、どうします? 倉竹さんに連絡入れるべきだと思いますけど」

「……いや。倉竹さんも忙しいだろうし、そんな時にあまり頼りたくはないな」

クラクストンに話を振られた島田は、その言葉に首を横に振った。

「それに、せっかく英国の戦艦系の人たちを連れて来てるんだ。ここで簡単に引くわけにも行かない」

「だとしたら……このまま、突撃ですか?」

「ああ」

島田は首を縦に振り、岸尾とスミスへ目を向けた。

「岸尾くんとスミスは初出撃で申し訳ないけど、協力頼む」

「はい、分かっていますよ」

スミスは笑顔で頷き、

「司令だつて、このまま逃げようだなんて思つてないでしょうし！……ねえ、司令？」

「……うん」

（スミス……軽く圧力掛けてくるの止めてくれないかな）

岸尾はスミスの笑顔の圧力に、言葉を詰まらせ掛けながら頷いた。こちらも表面上は島田に従うだけ従うつもりだし、逃げようとは思つてないが——それゆえに、微妙に彼女から信頼されていない気がして、その辺は心にチクリと来てしまう。

今回はD o Yを旗艦に据え、それに加えて主力にレナウン、クラクストンとスミス、ボストンはその護衛として水上へと足を踏み入れた。そして、島田たちと戦艦少女の連絡手段は、相変わらず耳に付けられているインカムである。

今日の天気予報では快晴だったはずが、空はどんよりと暗い色に覆われており、海の波の動きはいつも以上に荒く、今にでも嵐がやってきそうな恐ろしさがそこにあつた。風もそろそろ夏が迫ってきているというのに、どことなくひんやりしていて、それだけでもクラクストンは強い不安を覚えた。自分の目の前で、水上を駆け抜けるD o Yとレナウンの背中姿を見て、大丈夫だと思いつつも——また島田に精神的負担を掛けてし

まったらどうしようだとか、そんなことが脳裏に過ぎる。

クラクストンのこの感情はしっかりと顔に出ていたらしく、その様子を見ていたボストンは、そんな彼女に声をかけた。

「クラクストン、何を考えているのですか？」

「あつ、ボストンさん……そ、そんな、他の人に言うほどのことではないですよ」

クラクストンは苦笑し、その場を取り繕った。

ボストンはクラクストンのそんな表情を、10秒ぐらいジッと見つめてから、「そうですか」と、再び前を向いた。

「私は感傷的になって、尻込みしている人は好きではありません。それが例え、一般人でも、戦艦少女でも。いろいろあったのは察しますが、私たちには次の戦場が待ってます。気を引き締めて、前を見るべきです」

「……そう、ですね」

クラクストンは首を縦に振って頷き、質問した。

「ボストンさんは、もし自分が傷つくことで、大事な人を悲しませたくないって思ったら、どうしますか？」

「戦場でのことですか？」

「はい」

ボストンの疑問に、頷く。

ボストンは、「ふむ」と、顎に手をあてて、クラクストンの質問に答えた。

「それでも、前に進むしかありません。戦場に赴く以上、傷付くことは避けられないこと。まだあの少年には年相応に負担が重いかもしれませんが、そのことに気付くのは遅くない未来でしょう」

「前に、進む……」

(……逆に言えば、私にはそれしか出来ないんだ)

クラクストンは自分が戦闘に赴くための兵器であること、そして、自分が「DD-571」という型番を背負っているうちは自分の使命があることを思い出した。島田はそれ以上に自分を一人の女性として扱ってくれるし、少女としてここに生まれたクラクストンも、そのことは受け入れていた。でも、それだけでは何も変わらない。お互い、戦場に赴く人間として進まなければいけない。

クラクストンはボストンへと顔を上げた。

「ボストンさん。私は彼を支える存在と、兵器である自分の両立ができるのでしょうか」「あなたならできますよ。戦艦少女は、兵器であると同時に、普通の人間と変わらない体を持った少女。個々の意思を持っているからこそできることは、たくさんあると思います」

「——はい、ありがとうございます。だったら、まずは目の前のことをやり遂げるだけですわね」

クラクストンは強く、深く、頷いた。

ボストンはそれを見て、小さく笑みを浮かべると、再び前へと顔を向けて、目的地へと目線を動かしした。

クラクストンたちがそのままひたすら前へと進んでいくうちに、列の前方を駆け抜けていたD o Yとレナウンの索敵がとうとう完了したらしく、お互い顔を見合わせて、確認していた。

確認が完了すると、レナウンが後方にいる3人へと声を向けた。

「D o Y様と索敵が完了致しました、が……この先にいるのは、戦艦一隻、正規空母一隻、軽空母一隻、他軽巡洋艦三隻の六隻編成だと思われます」

「戦艦と空母ですか。私たちはアメリカの軍艦です。対空には自信はありますけど、いないならいなくて越したことはないんですけどね」

スミスはうーん、と悩ましげに首を傾げてから、再びレナウンへと声を向けた。

「まあ、戦艦や空母の処理はレナウンさんたちの仕事ですし、そちらについては任せますね。私たちがどうこうできる訳でもないですから」

「ええ、分かっています。ただ、ひとつ気掛かりなのが」

と、

「戦艦の雰囲気が今までと違う気がするのが妙ですね。想定外のことが起こらなければ良いのですが」

「……大丈夫です」

クラクストンは首を横に振ってから、頷いた。

「レナウンさんやD○Yさん、それにボストンさんやスミスさんもいらつしやいます。ここで想定外のことが起こっても、協力すれば乗り越えられます」

「……ええ、クラクストンの言う通りですね」

レナウンの横にいたD○Yが頷いた。

「私も旗艦として、力を尽くします。お互い無事に鎮守府へと帰れるように、全力を出しましょう」

「……はいー」

D○Yのその言葉に、ここにいる一同が頷いた。

そうして、クラクストンたちはD○Yの引率の下、敵がいる本拠地へと足を向けた。

024：まさかの首領編成

戦艦少女たちの索敵能力は、敵に近付けば近付くほど、その能力を発揮していく。そして、この索敵能力、電探や水上機を装備すると、底上げすることが出来る。今回は英国組の練度が十分だった為、電探を積むことはないが——更なる第4海域や第5海域では、装備することを考えても良いだろう。

また、索敵能力が高い空母がいれば、艦載機を飛ばして予め索敵してくれたりする。けれども、今回は空母系は編成におらず、その辺は島田も少しばかり失敗したかもしれないと、個人的な反省点らしい。戦艦系がいると言えども、用心に越したことはない。クラクストンたちは今回はきつと大丈夫だと——そうたかを括って、水上を進んでいた。

途端、レナウンが頭上を見上げると、ハッと何かに気付いたように声を上げた。

「皆様方、対空射撃の準備を！」

「！」

レナウンに言われて一同は顔を上げた。

瞬間、味方では到底有り得ない形の鋭く黒い艦載機が、紫色の光を放ちながら、クラ

クラクストンたちの頭上で爆弾を投下し始めた。

スミスとクラクストンは、それぞれの主砲の銃口を艦載機へと向け、砲弾を放つ。

「いきなり手荒い歓迎ですねえ！ 感心しませんよ！」

「っ……………」

(この艦載機、なんだか私中心に爆弾投下してるような……)

クラクストンはこちらへとやってくる艦載機を撃ち落としながら、艦載機の動きに違和感を覚えた。

運が悪ければ、そういうことだつてあるであろう。上手くばらけて艦隊全域に爆撃なんて、そう簡単にはいかない。ただ、だとしても、こちらとやってくるつもりは艦載機が多い。自分たちよりも高い対空値を誇るポストンが、次々と艦載機を撃ち落としているが、その艦載機たちはポストンを狙ってるわけじゃなく、その後ろにいるクラクストンを狙って空を飛んでいる。

(き、気のせい……………よね。私、そんなに運が悪いわけじゃないし……………)

クラクストンが、その不安を払拭しようと再び対空射撃へと意識を向けた時だった。

「クラクストン！ 危ないッ！」

「えっ……………」

スミスがクラクストンを強く引つ張り、そちらの方へと一気に引き寄せた。

その瞬間、

「きやつー！」

「つうー！」

——海の上に落ちた爆弾が、炸裂した。

クラクストーンは自分より少し小柄なスミスへと抱き付きながら、その爆発による風を背中に受けた。

スミスとクラクストーンは海の上だというのに、しつかりと黒い煙を起こしている炎を見ながら、お互いの無事を確認した。

「ふう……クラクストーン。大丈夫ですか？」

「は、はい……スミスさん、ありがとうございます」

と、クラクストーンはスミスから離れた。もし、あのままあそこにいたら、この爆撃が自分の所まで直撃していたかもしれないと思うと、背筋がゾクツと震える。

どうやら、この爆撃が最後だったようで、こちらへと先制攻撃を仕掛けてくる艦載機の姿は、これ以降、確認することはなかった。スミスはそのことを空を見上げながら確認し、クラクストーンに話しかけた。

「クラクストーン、行きますか？」

「そうですね、行きましょう」

そうして、クラクストンは炎を避けながら、スミスと共にD O Yたちの元へと向かった。

スミスは警戒しながら、外に声が漏れないように口元を手で覆い、インカムの向こう側にいる岸尾に向けて話しかけた。

「あつ、司令。聞こえますか？」

『ああ。どうした、スミス？』

「良かった。実はですね」

岸尾の声が聞こえてくると、スミスは続けた。

「さっき、爆撃があつたのは把握してますよね。それに使われてた艦載機が、クラクストンさん目掛けて飛んできたんですけど……もしかして、これって」

『……大方、「アイツ」による命令だろう』

と、

『まあ、これがアイツからの命令だとしても、スミスは舞鶴の一員として胸を張ってくれ。向こうもスミスがいるのは想定内だと思う』

「まあ、私は元からそのつもりですけど……島田さんはどんな様子なんですか。さっきの様子、一緒に見えますよね？」

『島田司令のことなら、さっきクラクストンに直撃しかけた時に、変な声を上げて動揺し

てたよ。お前が助けたから、今は落ち着いてるけど』

「そ、そうですか……」

(変な声……)

堂々として真面目そうな彼の出で立ちからは想像できない報告に、スミスは引きつった笑みを浮かべて首を傾げていた。それだけクラクストンは、今の島田の支えという示ではあるのだろうが、取り乱し方ももう少し上品だと思っていた。

ヒソヒソとインカムで話しているスミスを不思議に思ったようで、クラクストンは声をかけた。

「あの……スミスさん、どうしましたか？ 何かありましたか？」

「あつ、ひゃあ!? クラクストン!? えーと、なんでもないですよー」

いきなり話しかけられたスミスは、甲高い奇声を上げて、ビクツと体を震わせ、笑みを取り繕ってそう答えた。そして、小声で岸尾に言う。

「じ、じゃあ、また何かあつたら言いますから!」

『ああ、了解』

——そして、岸尾はスミスとの連絡を中断したところで、隣で体育座りで縮こまつてる島田を見た。

今、岸尾と島田は戦闘の様子が見れるように船の艦首部分へと出て、外からクラクストンたちの対空射撃を眺めていたのだが——クラクストンに爆撃が向かったところで、島田が「んひいッ!」なんて変な声を上げ、ひどい動揺を見せていた。爆撃が終わつてからは、すり減つた精神を回復するように、こうして体育座りで待機している。

岸尾はスミスには「落ち着いている」と報告こそはしたものの、落ち着いてる感じではないな、と、改めて島田を見て思った。

岸尾は島田に向けて、声をかけた。

「あの……島田さん。爆撃終わったようですよ」

「……」

島田は岸尾のその報告を聞くと、目の色を変えてすぐに立ち上がり、その両手で強く岸尾の肩を掴み、揺さぶつた。

「ねえ、さつきスミスと連絡してたでしょ!? クラたんは平気なの!? ねえ!」

「く、クラたん……? いや、まあ……スミスの様子を見る限り大丈夫そうでした……けど」

岸尾が島田のその様子に圧倒されながら答えると、島田はふんにやりと口元を緩めた。

「ああ、そつかく、良かったあ。んまあ、僕の嫁がこんなところでやられるわけないも

んね。それにクラたんの柔らかくて白い肌に傷が付いたら、一生ものかもしれないし。んまあ、あとでちゃんとお風呂に入れて背中流しするんだけどね、フヒツ」

「……」

——ここまでのことは聞いてない、というか、多分向こうも絶対に把握していない情報だと、岸尾は思った。

岸尾は困惑しながらも、これだけはハッキリと言える。

「……キモい」

「えっ? ……あ……あっ」

島田が顔を緩めながら、連絡が来るまで妄想に更けていようとしたところで、やっと自分の表面にそれが出ていることに気が付いたらしく、いつもの気を引き締めた島田に戻った。

そして、岸尾に言う。

「岸尾くん。今のは全部忘れて」

「え……あの……」

「忘れるのが無理なら、誰にも言わないでくれよ。もし誰かに漏らしたら、こつちも相応の措置を取るよ」

「そ、相応の措置……? いや、まあ、い、言いませんから……」

(……普通、オレが脅す側じゃないのかコレ。なんでオレが脅されてるんだ)

岸尾が理不尽さを覚えつつも了承すると、島田は爽やかな笑みを浮かべた。

「うん、なら良いよ。こんなところで僕の築き上げてきたイメージを崩したくないからね」

「……自分で言うんだ」

岸尾は苦い顔をする一方で、島田は改めてクラクストンへと連絡を入れた。

「よし……クラクストン。爆撃は大丈夫だったかい？」

「司令官様！ はい、クラクストンは大丈夫です！」

クラクストンは島田から連絡が入るなり、声を明るくして答えた。

『で、今、どの辺にいる？ 敵の姿は見えてこない？』

「はい。さっきの爆撃を頼りに、D O Yさんとレナウンさんが私たちを引つ張ってくれますけど……」

と、クラクストンは前方を見た。

その視線の先には、D O Yとレナウンがいるものの、敵の姿はなんとなくでも見えてこないようで、少しもどかしさを感じた。あの爆撃の後に少し遠くへも退いたのかもしれない、と、レナウンたちは語った。ただ、こちらに伝わってくる敵陣のオーラは、先

ほどのようにはつきりしたものであり、その位置が遠くないのは確かであろう。

クラクストンは、それを自分なりに確認してから、島田へと言う。

「今はまだ敵の姿は見えませんが、このまま先に進めば、向こうと接触すると思います。その時になったら、またお知らせいたしますね」

『うん、ありがとう、クラクストン。今はみんなと前進してくれ』

「……はい」

クラクストンがそう頷いて、前を向いた時だった。

「ッ！」

「きやつ!?!」

——どこからともなく、砲弾がやってきて、それは戦艦系ふたりに向かって放たれていた。

今のは牽制なようで、レナウンとD O Yの被弾するには近くない位置へと、砲弾は着地して、海の中へと沈んでいった。

クラクストンはふたりの様子を見て、声を上げる。

「D O Yさん！ レナウンさん！ 大丈夫ですか!?!」

「クラクストン……ええ、私たちは大丈夫です」

「少なくとも、こんなことをしている以上は射程範囲内でしょうから、敵もすぐ間近。警

戒を怠らないように」

「……」

(もう、そこに……！)

クラクストンは再びメンバーと一緒に水上を駆け抜け始めた。互いに装備を確認しながら、主砲を構え始め、敵の遭遇に備えた。オーラから察するに、向こうもこちらへと近付いているようで、お互いの姿が見える距離まではあと数メートルもない。

あと10メートル、7メートル、5メートル、3メートル、2メートル、1メートル——クラクストンたちが心の中でカウントして、とうとうセンチメートル単位になったところで、その姿は見えた。

「……いたー！」

クラクストンたちのことを嘲笑うように現れたのは、深海軍の真つ黒な艦船たちだった。

旗艦である戦艦M級I型を囲うように、空母O級II型、軽母三級II型、軽巡H級II型、軽巡乙級II型、軽巡乙級II型が、クラクストンたちの前へと姿を現した。

クラクストンはすぐに島田へと連絡を入れた。

「司令官様！ 敵艦隊、発見しました！ 輪形陣です！」

『輪形陣か……空母は連れてこなくてある意味正解だったか。その陣形なら、砲撃の命

中率は低いし、被弾率もそのりなはずだ。砲撃の威力が保障されてる単縦陣をそのまま維持してくれ』

「ええ、分かりました」

と、クラクストンは顔を上げて、改めて敵陣へと目を向けた。

(にしても、なんなんだろう……この、不穏な空気は)

クラクストンに向けて、ただならぬ雰囲気の流れていた。それは他の艦船たちも一緒なのかもしれないが、クラクストンはそれより強く受け止めてしまった。先ほどの爆撃機の動きの影響か、それとも、自分の不安が表に出ているのか。

それに――。

(あの戦艦M級……今までのM級と何か違うような)

クラクストンは、あのM級に違和感を覚えた。

具体的なことは一切分からないものの、クラクストンの目からして、今まで遭遇してきたM級とは何かが違うのは、そのオーラから感じ取れた。何か――自分には良い手段があると言わんばかりの表情だった。

クラクストンはどうも胸騒ぎがして、仕方なかった。

(……ううん、……ここまでできてこんな不安になっても仕方ない。前を見なきゃ!)

クラクストンは前を向いて、敵接触後にすぐに射程範囲内へとなったD O Yとレナウ

ンの背中姿を見た。

D o Yは敵の方へと目を向けて、自分の身体に備え付けられている艤装の主砲から、すぐ目の前にいた軽巡Z級へと砲撃を放った。

「早いうちに敵を倒すのが、楽でしょう」

D o Yがそう言いながら砲弾の行方を見守ると、見事に軽巡Z級へと命中。D o Yの攻撃に当てられたZ級は、その一撃だけで、見事に海の中へと沈んでいった。

クラクストンは自分の火力とは比較にならないその威力に、思わず呆然としてしまった。

(すごい……やっぱり、戦艦は私たち駆逐艦とは違う……！)

——これが、駆逐艦と戦艦の徹底的な違いであった。

魚雷の威力が高く、夜戦でも活躍しやすい小回りの効く駆逐艦と、昼戦・夜戦共々その安定した砲撃威力で圧倒する戦艦。戦艦は小回りこそは効かない艦船が多いが、大きな主砲を構えられるのは大きなメリットだ。

ボストンは感心しているクラクストンに話しかけた。

「クラクストン、ポーツとしない。こちらも砲撃準備しますよ」

「は、はい！」

クラクストンは頷きながら、スミスと共に主砲を構える。

(頑張って、乗り切らないと……!)

025：想定外と想定外

D o Yやレナウンが一掃している様子を、島田と岸尾は船の中から眺めていた。

岸尾は双眼鏡を両手に持ち、それを目に当てていた。船から見える様子にも限界があるようで、双眼鏡を通して戦いの詳細を眺めているようだ。今のところ特に問題はないのを確認してから、双眼鏡を目元から離す。と、隣にいる島田へと視線を向けた。

島田は何か不審に思っていることがあるらしく、顎に手を当てて、遠目ながらも、その戦いの様子をジッと凝視していた。

首領周りの付き添いに関しては、その場にいる旗艦のD o Yやレナウンたちの指示に任せておくのが一番という彼女たちとの意見が合致しており、島田はあえて口出しはしていない。こういった処理は戦艦系の得意範囲だ、下手に口出しして彼女たちのペースを乱すわけにはいかないだろう。

しかし——なぜ海域に出ですぐの場所に、こちらへと首領編成を送り込んできたのか。

（こつちが何も消費していない中で送り込んでくるなんて、ちよつと妙だ。もし本格的にこつちを叩き潰すつもりなら、当初の予定通り4戦ルートを辿らせれば良いはずなん

だけど)

この海域はどこをどう行っても、4回の戦闘は避けられない海域である。そして、4戦もあれば、弾薬や燃料の不足から砲撃の威力の低下は避けられないし、どう考えても一戦目からこちらに襲いかかるよりは都合が良いことは多いはずだ。現にD O Yやレナウンたちに圧倒されているし、この様子ならばすぐに終わってしまうだろう。

——ただ、それだけで終わると思えない。

(二体何を考えているんだ、向こうは……)

島田はもう一度だけでも敵の様子を観察しようと、近くにあつた大きめの望遠鏡を手にした。

そうして、島田が考え込んでいる中で——岸尾も今回の向こうの振る舞いには微妙に不快感を抱いていた。望遠鏡を設置し、敵の様子を窺おうとしている島田を眺めながら、インカムのマイクへと手を当てた。

(多分……オレの考えていることは島田司令と一緒になんだろうな。アイツの考えることは、オレにもよくわからないし、無理もない)

と、岸尾は目を伏せる。

(ただ、油断しているところを潰しにかかる、というのは分からなくもない。攪乱目的なら十分その用途は果たしてる。まあ、この先へ進むなら、の話だけど……)

そうして、岸尾がスマスに様子でも窺おうかとインカムの連絡スイッチを入れかけたところで、

「おおっ！」

と、望遠鏡を眺めていた島田から、声が上がった。岸尾は、その声にびつくりして体を跳ね上げ、彼女たちに何かあったのかと、おそろおそろ島田へ声をかけた。

「あ、あの……何か……」

「フヘエ……激しく動き回ってるクラたんのパンツが見えたぞ。見てたのが僕で良かったねえ、クラたん……これが悪いおじさんだったら盗撮されて売られてたかもねえ……」

「……」

（アンタが一番気持ち悪いぞ、島田司令……）

さつき自分の本性を見られたから開き直っているのかは知らないが、見ていて気分の良いものではないな、と、岸尾は思う。正直、この島田の姿こそ盗撮して、クラクストンに送り付けたいほどだ。

とはいえ、島田にそういった余裕があるうちは特に口出しすることはないか、と、岸尾は放置を決めた。これで奇声を発し始めたら、駆け付ければいかと——再び双眼鏡で眺め始めた時だった。

「――！」
岸尾は信じられない光景を目にした。あまりにも動揺しすぎて、双眼鏡が手から滑りそうになったが、それを必死に抑えてなんとか、光景を眺める。

島田も島田で、同時に岸尾の見た光景を目にしたらしく、「うあっ!?」なんて変な声を出して、動揺していた。岸尾もそれに関しては無理もない、と、突っ込む様子もなかった。

——そのぐらい衝撃的な光景が、司令チームの目の中へと飛び込んでいたのである。

5人の戦艦少女たちは一回目の砲撃戦を終えて、二回目の砲撃戦へと突入していた。

駆逐艦たちの威力では倒せない敵艦船や、ボストンがあと少しのところまで倒しきれなかった敵艦船を、この二回目の砲撃でぶっ叩くわけのだが――問題は、この二回目の砲撃に起こった。

「攻めますッ！」

二回砲撃の初手は旗艦であるD O Yが務めた。D O Yの砲撃は空母O級へと向けられ、当然のようにその攻撃は直撃して、O級も轟沈まで追い込まれていた。

O級が沈めば、あと残っている敵大型艦は旗艦のM級のみとなる。二回砲撃に突入すれば、同じ敵艦隊にいる軽空母三級も敵ではないし、このままならすんなりとこの場合は

終わるだろうと——一同が思っていたところだった。

真つ先にその様子の違いに気付いたのは、クラクストーンだった。

「……………」

(あ、れ……………待って)

クラクストーンはO級が沈んでいく様子を眺めていたが、どうも様子がおかしい。

いつもなら、このまますんなりと海の中へと落ちていくはずが、今回はどうにもそのペースが遅い。いや、それどころか、そのまま沈んでいくようには見えない。クラクストーンが動揺している中で、O級の体が光り始めた。

「！」

「なっ……………」

「な、何ですか、アレーー！」

「……………」

「まさか……………」

ここまで来ると、クラクストーン以外のメンバーも気付いたようで、目線はそちらへと集まった。

途端、O級の体からは光が消え、そこに現れたのは——これまでの傷がすべて無効になっていた、いつものO級の姿であった。

この展開は想定すらしていなかった面々は、見事に動揺して騒ぎ立てていた。スミスはO級を指差して、近くにいたボストンへと質問を投げた。

「ボストンさん！ あれって、ダメコンってやつですか!？」

「ええ……ダメージ・コントロールですね。私も初めて見ました」

ボストンはスミスの質問に頷いて、その動揺を脂汗で表現していた。

ダメージ・コントロール——通称「ダメコン」。この世界では、特殊資材のひとつであり、長く提督を務めていると、何らかの形で入手する機会が多いアイテムだ。通常、このダメコンは戦艦少女のみ使えるものであり、耐久をすべて失った艦船に使うのが一般的とされる。

当然、こういった海域で敵艦船に使われている様子はこれまでで確認すらされておらず、今回の件が初めてであろう。

O級はいつも通り、邪悪ににこやかに笑みを浮かべたかと思えば——黒い艦載機をD OYたちへと向けて飛ばし始めた。

「！ 対空射撃、用意ッ！」

さらに想定を超えた二巡目での爆撃。ボストンはクラクストン、スミスに命令して、爆撃が直撃しないように対空主砲を構えた——のだが。

「あつ、いたあッ！」

間に合わなかつたらしいスミスへと爆撃が直撃し、炎上。スミスは一気に大破近くまで追い込まれてしまい、ボロボロになった服や旗をそこに晒した。スミスは水上で尻餅をついて、痛みがある部分を片手で押さえた。

クラクストンは、傷付いてしまったスミスに驚きから話しかけま。

「スミスさん！」

「いったたあ……死ぬわけじゃないので、安心して下さい」

スミスは旗を杖代わりにゆつくりと立ち上がりながら、O級をキツと睨み付ける。

(いや、まあ、確かに私は表面上舞鶴所属ですけど……カモフラージュのためとはいえ、ここまでやられると心痛みますよ、さすがに)

さすがに多少は遠慮してくるだろうとは思っていたので、スミスにとつても想定外であった。ただ、一方で、この遠慮のなさが、向こうが派遣した艦隊であることに納得しつつあった。思い返してみれば、向こうはこちらへと気を遣わなさそうである。

(司令に連絡入れるべきですよ、これは……いくらなんでもイラつきます！)

岸尾経由で文句を入れてやろう、と、スミスはインカムの連絡スイッチを入れた。

途端、

「ッ！」

「ボ、ボストンさん！」

「っはえ!？」

スマスはクラクストンの声と、その爆撃音に気付いて、思わず変な声を上げた。

——まさかのボストンが、ここで中破していた。

ボストンのいつも掛けている眼鏡は海の中へと落ち、ボストンの瞳は赤く光っており、中破させてはいけない艦船を中破させてしまったのではないかと動揺が走るが、その前に。

「ボストンさん、大丈夫ですか……? どうして私を!？」

「あ……」

(クラクストンを庇ったんですね、ボストンさん)

スマスはその言葉でしっくり来たようで、こくこくと首を縦に振って頷いた。彼女がクラクストンを庇った証拠として、傷付いたボストンの後ろにはクラクストンが立っていた。様子を見る限り、間一髪のところでもクラクストンに傷を負わせることは避けられたのだろう。

ボストンは手元を持っていた拳銃型の機銃を片手に持って、続ける。

「特に理由はありません。ただ」

と、

「貴方がやられてしまえば、こちらでも司令官的な意味で少々都合が悪いので。彼も少年

ながら経験を積んでるのですし、もう少し大人になってくれれば良いのですが」
「そ、そうでしたか……すみません、わざわざ」

確かにここで自分がやられてしまうと、指揮を務めるである島田の精神に多大なる影響が出る。ボストンの判断は賢明であろう。

ボストンとスミスが中破まで追い込まれている中で、レナウンは敵艦隊の首領・M級へと主砲の銃口を向けていた。M級は先ほどレナウンが一撃食らわせたが、運悪く耐久が残ってしまった。しかし、この一撃を食らわせられれば——M級は確実に落ちる。

「負けを——覚悟しなさい！」

レナウンがそう言い放ったと同時に、砲弾がM級へと直撃した。

ここまでは想定の範囲内。このまま素直に落ちてくれれば、こちらも余計な心配をせずに済むと——レナウンは主砲のハンドルを強く握り締めた。

——しかし、M級はそのまま素直にやられてはくれなかった。

M級はレナウンの砲弾にやられ、姿勢を崩して、海の中へと沈もうとした。しかし、M級は口元をニヤリと釣り上げると、蛇状になっている深海軍特有の主砲全てから、レナウンとD o yに向けて一斉に砲撃を放った。

これが二発だけなら、ふたりも当たり前のように避け切ることではきただろう。

しかし、M級にある主砲の銃口は、合計15本。主砲ひとつひとつに3つ銃口があり、

それが5個、彼女の体には装備されている。

これだけの砲撃だ、当然のように——戦艦系の回避力を凌駕していた。

「きやあつ!？」

「つあー!」

D o Y とレナウンは見事に砲弾が直撃。

1 発だけ当たるぐらいなら耐え切れただろうが、2 発3 発も当てられれば——大破一直線ではなかった。

「つう……」

「いくらなんでも……これは……」

戦艦・D o Y、及び、巡洋戦艦・レナウン、大破。

M 級は戦艦組に攻撃を仕掛けて、大破まで追い込むと、そのまま満足したように下卑た笑みを浮かべて、海の底へと沈んでいった。

D o Y はレナウンに話しかける。

「レナウン……この敵のスキルは一体……?」

「つ……全くもって不明です。あんなの、回避力のある駆逐艦でも対処できるかどうか……」

M 級の得体も知れない行動に、レナウンとD o Y は底知れぬ恐怖を覚えた。今まで

数々と敵と戦ってきたふたりだが、今回のM級のような動作をする敵戦艦は一度も見たことがない。いや、見たことはあっても、ここまで徹底的に潰しにかかるのは初めてである。

——これで無傷なのはクラクストンのみとなった。

クラクストンは、なんとかまだ戦えるポストン、スミスと共に残っている敵艦船へと目を向けた。

そして、クラクストンはインカムの連絡スイッチを入れ、島田へと繋げた。

「司令官様……聞こえますか？」

『……クラクストン、聞こえてるよ』

島田の落ち着いた声が、クラクストンの耳の中に響いた。

『一連の流れを見たけど、敵サイドのダメコンはもちろん、M級の轟沈時の所作は初めて見たよ。ダメコンはこちらと同じ仕様なら一度しか使えないはずだから、雷撃戦か夜戦でもう一度落とせばいける——けど』
と、

『ポストンもスミスも激しい損傷を食らっているし、ここで全力を出せるの君だけだ、クラクストン。負担は重いけど、雷撃戦、夜戦共々よろしく頼むよ』

「……ええ分かっています」

クラクストンは背中中の五連装魚雷に手をかけた。

「スミスさん。雷撃戦、できそうならよろしくお願いします」

「ええ、とりあえず飛ばせるだけ——飛ばしてみますか！」

「はい！」

そうして、ふたりは魚雷を一本取り出し、海の中へと放出。そのまま敵艦隊の空母と軽空母へと魚雷が駆け巡り始めた。

しかし、クラクストンとスミスの魚雷は当たってもダメージ自体が低かったらしく、空母に当たっても大したダメージになることはなかった。

「……そんな！」

「悔しいですね……魚の餌になれば良いのに」

——残すは夜戦か。

残されたクラクストン、スミス、ボストンは、これ以上想定外のことが起きないよう祈るしかなかった。

026：十三号巡洋戦艦

——とうとう時間は夕方を超え、空が暗くなる。

藍色とオレンジが混じっている空の色は、ここにいる艦船たちへと緊張感を覚えさせた。また、緊張感を覚えるのは戦艦少女たちを始めとした艦船たちだけではなく、島田と岸尾といった司令官サイドも同じだった。

静けさが辺り一面に響く中、その静寂を打ち破りたいと言わんばかりに、クラクストンの耳に島田の声が走った。

『クラクストン』

「司令官様」

『そろそろ時間だけど、大丈夫かい？』

「はい」

クラクストンは島田の確認の声に頷き返した。

「……私が無傷な以上、しっかりとしなきゃいけませんよね」

『そう気負わなくて良いよ。いつも通り、力を発揮してくれば僕としては問題ないからさ。ただ、ここまでやられると完全勝利は難しいだろうし、その辺は僕の責任だ。敵

の空母も何をしてくるか分からない以上、用心はしてくれ」

「はい……ありがとうございます」

と、クラクストンは暗闇の中に光っている星々や半月を一回見上げてから、再び敵艦隊へと目を向けた。

「そろそろ時間ですね。司令官様、行って参ります」

『ああ、気を付けて行っておいで』

クラクストンは島田と話し終えると、スミスとボストンと共に、残っている敵空母の方へと一歩、近付いた。

夜戦は通常、空母系の艦船は攻撃することができず、戦艦系、巡洋艦系、駆逐艦、その他ミサイル艦や砲艦、潜水艦など——最低限、砲撃ができるか、魚雷を持っている艦船が夜戦で攻撃することができる。島田があえて空母を引張ってこなかったのは、夜戦の性質を考えてのことだろう。そして、彼は、自分が空母を扱うにはまだ未熟であると思っているのかもしれない。

島田のことはさておき、空母が攻撃できない以上、この場はクラクストンたちが完全有利であるはずなのだが——わざわざ空母をダメコンで復活させた辺り、何かあるとは思えない。

クラクストンは警戒して、魚雷に手をかけた。スミスも先ほどの爆撃を受けて折れて

いない魚雷を取り出して、備える。

そして、ボストンは瞳を赤く光らせて、主砲を構え、敵空母を睨み付けながら、インカムから島田へと連絡した。

「司令官」

『……ああ。やってくれ』

島田の冷徹な声がボストンの耳の中で響くと同時に、ボストンの主砲から激しい音が放たれた。そうして闇夜の中で照らされる砲撃は、何もかも照り尽くして、うっとりするほど美しいものだった。

その砲撃はO級へと向けられた。O級は余裕そうに笑い浮かべて、水上に浮かんだまま何もしようとはしなかった。ボストンはこのままなら倒せると、そう思って、自分の砲撃がO級へと当たるのを待った——が。

「っ！」

——O級に、その攻撃は通じなかった。

O級は自分の体の周りにバリアを張り、ボストンからの攻撃を無効化したのである。ボストンはO級のその光景を見るなり、額に脂汗を流した。

「砲撃が……通じない!?!」

『攻撃無効化か……! このO級、ダメコンで復活した時にヴィットリオ・ヴェネトのス

キルデータが埋め込んだな!』

そう、島田にはこのO級の挙動に嫌というほど見覚えがあった。

イタリアの戦艦である、ヴィットリオ・ヴェネト改のスキルの挙動なのだ。

彼女のスキルは戦闘中に最初の一回のみ、受けた攻撃を無効化するという強力な効果があり、演習で彼女に当たった時はそれで苦労することも非常に多い。特に最近は大本営のお茶目でオールヴェネトという編成も見かけることも多く、その時の苦労は——思いついたくもない。

昼戦の時にO級に砲撃をくらわせた時には、このスキルは発動しなかったため、ダメコンで復活した際に埋め込んだ可能性が非常に高い。

ボストンたちが動揺している間にも、O級は自分の周りに黒い艦載機を浮かせた。

途端、艦載機たちはボストンたちに向けて、空を駆け巡り始めた。

『夜戦で爆撃!? クラクストン、対処できるか!』

「これだけ派手に光ってくれば! スミスさんとボストンさんも!」

「ええ!」

「分かっています!」

クラクストンたちは真つ先に対空主砲を艦載機へと向け、砲弾を撃ち放ち始めた。しかし、中破していることで命中率が非常に下がり、砲撃の威力にも影響が出ているシミ

ストボストーンではどうしようもなく、O級の近くにいたボストーンと、回避力が下がって
いたスミスが同時に爆撃をくらってしまった。

スミスとボストンの悲鳴がクラクストンの耳の中へと飛び込んだ。

「ひゃうっ！」

「あっ！」

「……！ スミスさん！ ボストーンさん！」

（ど、どうしよう……本当に攻撃できるの、私だけになっちゃった……！）

クラクストーンはふたりのことを交互に見ながら、不安に胸を靄つかせた。

スミスとボストーンはこれで大破まで追い込まれ、クラクストーンだけが夜戦に参加でき
る次第となった。軽空母E級はギリギリ中破であるがために、こちらに攻撃はしてこな
いだろうが——問題はO級だ。

こちらが魚雷を彼女に撃ち込むことができれば、あとは心配することないが、もし万
が一外してしまえば向こうからの反撃が来る可能性がある。クラクストーンはそう思う
と、緊張で手が震えて魚雷をうまく取り出せなかった。

「司令官、様……私……」

『……っ、……まできたら一騎打ちだ』

インカム越しで、震える島田の声がクラクストンの耳の中に飛び込んできた。

『いつも通りやってくれればいい。どのみち、この後、鎮守府に戻らなきゃいけないんだ。先のこととはあまり意識するな』

「……分かりました」

(そうよね……ここで立ち止まっても仕方ない)

クラクストンは震える手を必死に押さえて、右手で魚雷を一本、取り出した。

(いつも通りやって、当たれば……)

そして、彼女がO級に向けて魚雷を海へと放り投げた時だった。

同時にO級の元から放たれる艦載機の音が聞こえ、クラクストンはまさか、と、顔を上げた。

「……！」

(二回目!? でも——今は逃げるしかない!)

クラクストンは魚雷は放った、だとすればこれ以上自分ができることは、ただ、この艦載機から逃げることだけだ。

スミスとボストン、Doyとレナウンもクラクストンを見て、コク、と頷いて、逃げるように促した。

クラクストンはそれを見るなり、すぐに後ろを振り返って、敵艦載機から逃げ始めた。この後の戦いはない——けれども、これ以上島田に余計な心配をかけたくはない。ク

ラクストンはその一心で水上を駆け巡り始めた。

「——っ！」

自分の周りに爆弾が落ちては、海の中へ落ちる前に爆発する。激しい爆発音があつちこつちに鳴り響き、空気を切るような煙の巻き上げっぷりも、こちらまで届いてくる。

どこまで逃げてても、艦載機は幾度にわたつてこちらへと向けられて、キリがなかった。そろそろO級に魚雷が当たつてもおかしくない時間になつたが、クラクストンにはそれを確認できる余裕がない。その上、O級が轟沈しても、艦載機はしばらく残るのである。

「つきやー！」

そして、艦載機の勢いはこちらの速度を超え、クラクストンの目の前で爆弾を落とし、爆発した。自分の目の前でパチパチと燃え上がっていく炎に、酷く動揺しながら、頭上を見た。

——自分の上で、艦載機が旋回している。

気付けば彼女の周りには炎と艦載機に囲まれて、逃げ道がなかった。引き返そうにも、残っている艦載機が続々と後ろから襲ってくる。

これ以上自分に逃げ道はないのかと——クラクストンが覚悟を決めた時だった。

「！」

『えっ!?!』

——艦載機が空中で爆発したのだ。

この展開に島田もクラクストンと一緒に驚き、呆然としてみると、クラクストンを狙っていた艦載機は、次々と爆発して海の中へと残り滓が墜落していった。

(えっ……なに? どういうことなの!?)

クラクストンが一体何事かと、辺りをキョロキョロしていると、インカムから報告が入った。

『……この近くに、巡洋戦艦がいるようだ。レナウンじゃない、もっと——別の』

「……………」

(もうひとり、巡洋戦艦が……?)

クラクストンが島田のその報告に驚いている間にも、彼女は姿を現した。

「何か騒々しいと思っていたけど……『深海』が女の子を苛めていたのね」

——その声と共に姿を見せたのは、大きな主砲4つを艤装と共に纏っている、大正のモダンガール風の女性だった。

女性は市紅茶色を基調とした、袴を模した和風ワンピースを着て、緑がかった色素の薄い切りそろえたボブカットと黒いクローシェ帽が特徴的だった。

女性は、翡翠色の瞳をクラクストンに向けた。

「他の娘たちも傷付いているみたいね。夜なのに艦載機を飛ばせるってことは……私の想定も覆すようなことが、起こったのでしようけど」

そして、笑む。

「でも、その様子だと、やるべきことは全てやったのかしら？」

「は、はい……先ほど、魚雷を」

「……そうね。確かに、こちらを攻撃できるような深海の気配は消えているわね」

女性がそう言うと同時に、自分の魚雷は当たっていたのかと、クラクストンはホッと胸を撫で下ろした。

そして、女性はニコツと優しく笑みを浮かべて、言う。

「でも、これ以上ここにおいても仕方ないから、他の娘と共に戻るべきところに戻りましょうか。でも……まだ、一体残っているのは、私に処理させてね」

そうして、残っていた敵艦船は女性が処理して、こちらの勝利が決まった。

女性は敵艦隊の殲滅が完了したのを確認すると、大破している他の艦船たちへと声をかけて、クラクストンの案内のままに島田たちがいる船の中へと戻っていった。

突然現れて、手を貸してくれたこの女性——クラクストンたちの記憶の中では、当てはまる艦船がいなかった。見た目からして日本出身であることや、島田が巡洋戦艦と

言っていたので、その通りなのだろうが——ここにいるD O Yよりも大型なのに、どこが巡洋戦艦なのだろうか、この女性。

しかし、彼女は正体不明の艦船だと言うのに、不思議とクラクストンたちは安心感を覚えていた。まるで、昔から自分たちのことを見守ってくれていたかのような——そんな不思議な感覚が、彼女たちを襲った。

クラクストンは他のメンバーと共に島田の元へと戻ると、結果を改めて照らし合わせて彼に報告してから、女性の話題へと入った。

「ええと……それで、この方なのですが」

「ああ、自己紹介がまだでしたね」

と、女性はクラクストンの一歩前に出た。

「私は十三号巡洋戦艦。大日本帝国海軍が計画した八八艦隊計画のうち、最後の4隻のうちの一隻です」

「十三号巡洋戦艦!? 建造すらされずに終わったアレ!?!」

島田はその名前を聞くなり、思わず大声を出して驚きを見せた。隣でスマスに上着を貸していた岸尾も、その存在自体は知っているようで、若干目を丸くして女性を見ていた。

「私のことをご存知でしたのね……ええっと」

「ああ、島田です。いや、計画だけの船から戦艦少女にしていることは頻繁にあるけど……まさか十三号戦艦まで戦艦少女になってるとは思ってたなくて」

この世界の戦艦少女は実在した軍艦から、計画のみで終わってしまった軍艦と、かなり幅広く設計図を採用している。計画のみと言っても、設計の構想自体があることが大半であり、それに沿って戦艦少女を生み出しているのである。島田や岸尾もそういった系統の艦船はいくらでも見てきたつもりだが、大和型の前級にもなっていた級のひとりが現れたのだ。ちゃんと勉強している身として、驚く他ない。

女性はクスクスと小さく笑みを浮かべ、言う。

「なるほど……そのリアクション、まるで、『あの子』にそっくりですね」

と、女性は改めて、と、名乗る。

「私は、この世界では『有明』と名乗らせてもらってます。島田さんたちも、私のことそう呼んでもらっていいですか？」

「はい、もちろん。よろしくお願ひします、有明さん」

島田は笑みを浮かべて頷いた。

十三号巡洋戦艦改め、有明は島田へと質問した。

「ところで島田さん。あなたはどこの鎮守府に勤務なさってるのですか？ 多分日本だとは思いますが」

「ええ、僕は舞鶴に勤務してますよ。ここに居る人たちもみんな舞鶴から出向いてます」
「……舞鶴？」

有明はその地名を聞いた瞬間、一気に眉と眉の間を近づけて、訝しげに顎に手を当てつつ、質問する。

「その……舞鶴って誰がいらつしやるんですか？」

「えーつと、僕と同年代の提督があともうふたりと、鎮守府代表に倉竹さんって人がいますね」

「あ……あらー、そうなんです……分かりました」

有明は倉竹の名前を聞いた瞬間、ピシッと固まったあと、その後は何か悩ましげに俯いて静かになってしまった。

島田たちは、そんな有明の様子を不思議に思いつつも、船で舞鶴へと向かった。

027：「好き」に対する強い思い

舞鶴鎮守府へと戻った後、岸尾は大破まで追い込まれた艦船たちを浴場まで案内し、島田とクラクストンは有明を連れて倉竹の執務室まで向かった。有明は、執務室が近付けば近付くほどに、どこか落ち着かない様子でそわそわと辺りをキョロキョロと見ていた。

島田とクラクストンは、倉竹の名前を聞いてから様子がおかしい有明のことを、どうにも不審にしか思えなかったようで、互いに顔を見合わせて首を傾げていた。有明はどう考えても舞鶴に来たことがあるようだし、倉竹自身も島田ぐらいの年齢の頃から舞鶴にいる。と、なれば、その時に何かあったのかと考えるのが妥当か。

島田は倉竹がいる執務室の前まで辿り着くと、扉を叩いて、ドアノブをガチャリと押した。

「倉竹さん。ただいま戻りました」

「ああ、島田くん。岸尾くんからメッセンジャーで事情は聞いてるよ。大変だったね——
——って……ええ!」

倉竹は笑顔で島田とクラクストンを出迎えて、その視線を有明へと向けた瞬間、顔色

を変えて、腰掛けていた椅子から立ち上がった。それから、こちらの方へと駆け足気味で歩み寄り、有明へと直接話しかけた。

「ち、ちよつと……あなた、有明さんじゃないか！　なんで今更舞鶴に戻ってきてるんだ!？」

「えっ」

「あ、あら……はは。まさか、本当に倉竹さんがここにいてなんて思ってたんですけどよ、私。もう8年ここにいてるんでしょう？」

「えっ？」

「ああ。俺だってもう成人したし、そろそろ誓約の話を真剣に考えてもらっても——」

「は、はいはい、ストップストップ！　倉竹さん、ちよつと落ち着いて！」

「そ、そうですよ！　まずは私たちの話を聞いてください！」

これ以上ふたりを放置していたら深いところまで行くだろうと確信した島田とクラクストンが、話の止めに入った。

倉竹は島田たちの手前、これ以上話を続けようとはしなかったが、それでも有明のことがどうしても気になるようで、ジイツと半目になって彼女を見つめていた。有明は気まずそうに倉竹から視線を逸らして、汗を流していた。

島田はとりあえず、いつものように執務室の客間まで歩いて、いつもの席に座った。

有明は立ったままであるが、やはりどこか落ち着きがない様子だ。

島田は座るなり、早速本題へと入る。

「えーつとですね……まず、初っ端から首領の編成に当たつちやいましてですね」

「それは知ってる」

「あ……そうですねー、岸尾くんから聞いてますよね！」

島田は冗談めいたように笑いながら、クラクストンへと視線を投げた。

（ど、どうしよう、クラクストン……いつもならニコニコしながら聞いてくれるのに）

（さっき誓約って単語が聞こえてきましたし、昔、有明さんと一悶着があったのは確かでしょう。それを引きずってるようですし、正気を保てって言う方が無茶です。改めて出直した方が良いかもしれません）

（うん、そうだよねえ……でも、ふたりきりにさせておくのもアレだし、有明さん連れて行くかい？）

（そうですね……ジェルジンスキーさんのところに連れて行って、任せておきましょうか）

（それが一番だな。少し倉竹さんに話したら連れて行くか）

と、島田とクラクストンが予定を立てたところで、有明が口を開いた。

「倉竹さん。中学生ぐらいの子たちの前なのに、機嫌悪そうにするもんじゃありません

よ。島田さんたち気を使ってるじゃないですか。もうあの時のように、子供じゃないんですよ?」

「……ごめん」

倉竹は有明にピシヤリと言われて、反射的にそう返した。有明は「そうじゃなくと、返す。」

「謝るのは私ではなく、島田さんたちへ、でしょうか?」

「いい、いえ!」

島田とクラクストーンは首を横に振った。

「僕たちは大丈夫ですので、お気になさらず!」

「そうですね! 倉竹さんも気持ちが悪落ちてないのでしょうし、また出直そうと思っただけだから」

「あら、そうですね? なら良いのですが……そういうことなら、一先ずあなた達だけでも先に出てもらいましょうか」

「いえ」

島田は首を横に振る。

「ぜひ、有明さんも一緒に。このまま倉竹さんと一緒にいても、気まずいでしょう? 思い出話に花咲かせられるようには見えませんか」

「……そうですね、ではお言葉に甘えましょうか」

有明は島田の言葉に頷いて、再び倉竹へと目を向けた。有明は小さく笑みを浮かべる。

「倉竹さん。そういうことですので、また明日以降、お願いしますね。気持ちが落ち着いたら、お話聞かせて下さい」

「……分かった。少し早いけど、お休み」

「ええ」

有明は倉竹と挨拶を交わすと、島田とクラクストンに連れられて部屋を出た。

島田がパタン、と扉を閉め、3人はそのまま戦艦少女たちが衣食住を過ごしている宿舎がある方へと、歩み始める。

島田とクラクストンが緊張から解かれ、「はあー」と大きく溜息を吐いていると、有明がクスクス笑みを浮かべながら言った。

「クラクストンと島田さんは、相思相愛で、誓約までなさってるんですね」

「……えっ?」

クラクストンと島田の顔が若干赤くなる。

有明はそんなふたりの反応が面白くて、つい、続けた。

「指輪はしてなくても、顔つきを見れば分かります。ひとりとしか誓約していない提督

とその戦艦少女って、なんとなく他と顔つきが違うんですよ」

有明が悪戯っぽくそう言うのと、少し寂しげに視線を落とす。

「……私もね、8年前、倉竹さんから誓約を申し込まれたんですよ」

「ああ、さつき倉竹さんがおっしゃってましたね。誓約の話云々って」

「そう。彼がまだ少年提督として、舞鶴の少年団を引っ張ってた頃の話です」と、

「彼は当時から戦艦少女たちからの人気が高い方でした。真面目で、聡明で、年齢に反して優秀で。ただ、年齢が年齢でしたので、人気があったのは主に小型の駆逐艦からでしたけど……それでも、彼の人気っぷりは嫌と言うほど覚えてます。私はここにいる間は、そんな彼の秘書艦をずっと務めてまして、彼も私にはつきりと想いを寄せていたのですね」

続けて、

「そんな中、彼から誓約の申し込みをされました。『一眼見た時からずっと想いを寄せていた。まだ子供な自分かもしれないけど、大人になっても絶対そばに居る』と」

「あの倉竹さんがア!?!」

「信じられないでしょう?」

島田の反応に同意して、有明は笑う。

「でも、私はその申し出を断ってしまったんです。『そういうことはもつと大きくなってからにしてほしい。もつと自分の将来を考えてほしい』って、言っちゃったんですよ」

「あつ……」

「……当時、彼の友人だった提督たちからすごく泣いてたって報告受けた時は、やってしまったなあって思いました。しかも、彼を諦めさせるつもりが、余計に火を付けてしまった結果になってしまったのが、また」

「……もしかして、毎日申し込まれてたとか?」

「(名答です)」

有明はクラクストンの質問に頷くと、頬に手を当てて、当時のことを思い出して溜息を吐いた。

「1日1回は迫られてました。出撃後に待ち伏せされることも頻繁でしたし……でも、彼から申し出をされて半年後に、私は呉の方に転属することになったので、それつきり連絡は途絶えました。いえ、連絡はされてたんでしょうけど、事情を知ってる鎮守府側が遮断してくれてたのだと思います」

「お、思ったより壮絶っていうか……しつこいなあ、あの人!」

(秘書艦について質問した時、特定の誰かに任せるのは……って言ってたけど、あの人なりににはぐらかしてたつもりなのか)

島田は倉竹の返しを思い出しながら、うーん、と小さく唸った。

普段は真面目で聡明で、他人思いの倉竹ではあったが——こういう話を聞くと、その印象が一気に変わってしまう。いや、そんな倉竹も倉竹であるのだろうが、恋愛絡みになると途端に人格が変わってしまうというか。普段、外からは見えることがない、彼の恐ろしい部分が見えてしまった。

さすがのクラクストンも美談では片付けられない何かを感じてしまったようで、手額を押さえて悩ましげに視線を落としていた。

島田はそんなクラクストンを見て、だよなあ、と納得したように息を吐く。

(クラクストンだって押しは強いけど、こういう大事なことは僕に迫らないで待つてくれてたからなあ。と、考えると、倉竹さん、本当怖いな……)

性的に体の関係を迫ることがないだけかマシか、と思いつつも、これからは倉竹を見る目が変わってしまうのも事実だった。

一方で、このことはできるだけ外には漏らしてはならないと強く思った。特に岸尾だけは。

(岸尾くんがこれ聞いたら、何するか分からんぞ。有明さんもあまり思い出したくない様子だし、傷をほじくるような真似だけは避けなきゃなあ)

と、島田が思っていると、有明が気付いたように指を差した。

「……あら、あの子、岸尾さん、でしたっけ？」

「うえっ!？」

「あ、あらあ……」

島田とクラクストンは、このタイミングで岸尾がやってくるとは思っておらず、そちらの方へと視線を向けた。

いつも彼の傍らにいますであろうスミスは先の戦闘の傷を癒すために絶賛入渠中なようで、今は岸尾だけが歩いていました。岸尾は若干俯き加減だった顔を上げると、島田たちの存在に気付いたらしく、こちらへと足を歩めた。

岸尾は早速島田へと話しかける。

「……島田さん。出るのが早いようですけど……話は終わりましたか」

「あ、う、うん! 報告完了したよ!」

「そうですか……」

岸尾はそれだけ確認して頷くと、今度は有明へと目を向けた。有明は、「?」と、頭の上にクエスチョンマークを浮かべて、岸尾を見返した。

岸尾は有明に見つめ返されると、島田へ質問する。

「あの……この人……もしかして、これから宿舎へ?」

「ああ、ジェルジンスキー辺りに任せようかと思つて。昔は舞鶴に所属してたみたいで、

僕たちが手を煩わせることもないだろうな、と」

「そう、ですか……」

と、

「実は今、スミスから食堂でご飯食べててください、って言われまして……。あそこに一人で行くの嫌だから、島田さんでも誘おうかと思つて」

「えっ、僕?!」

島田は岸尾から飛び出してきた信じられない言葉に、思わず自分のことを指差して、岸尾に確認した。岸尾は彼のリアクションに、若干不安げに眉を下げた。

「……ダメでしたか。一緒に出撃しましたし、他にいい人思い付かないし」

「うーん、ダメつてわけじゃないけど、クラクストンと有明さんも一緒になっちゃうと思ふよ」

島田は苦笑しながら言う。岸尾は、「いえ」と首を横に振つた。

「別に……十三号巡洋戦艦については聞きたいことたくさんあるし……。それにDD-571に関しては、島田さんが『僕の嫁』って言つてる人のことまで拒否してたらキリがないっていうか」

「岸尾くん! ちょっと待つて!」

島田は即座に岸尾の首根っこを掴むと、廊下の隅まで引つ張り、無理矢理しやがみ込

ませて、小声で話し始めた。

「岸尾くん……何のつもりだい、君。ちよつと、調子に乗りすぎじゃないかい？」

「……言つてたのは事実だし……それに、その好意は丸出しの方が彼女も喜びますし、Win-Winじゃないんですか」

「いや、あのね？　このことについては黙つてろつて、僕言つたよね？　もし話したら相応の措置取るつつたよね？」

「話してはいないじゃないですか……。クラたん呼びしてることも、パンツ見えて喜んでることも、その他気持ち悪い素行については口にしたくないですけど」

「気持ち悪つ……。ま、まあ、それならいいけど」

と、

「僕はここだと、真面目でクールで、簡単なことでは落ちないキャラでクラたんに対応してるんだ。そんな奴が内心ではクラたん呼びして溺愛してるなんて知られたら、絶対に他の奴らが馬鹿にしてくる。特に大原な」

「……あつ、そつちの心配でしたか」

（オレはてつきりDD—571を失望させたくないんじゃないかと思つてたけど、心配の比重はそつち、なのか……友達付き合ひって大変だな）

逆に言えば、自分はバレても些か問題はない——というか、口が硬いゆえに、そつち

た面では島田から信頼はされてるのだろう。そう思うと、特に悪い気はしなかった。

岸尾は立ち上がる。

「……ま、別にあなたの恋愛姿勢についてはとやかく言うつもりはありません。気持ち悪いけど」

「とやかく言ってるじゃないか……」

島田も立ち上がり、クラクストンの元へと戻って行く。すると、クラクストンから何を話していたのかと問われたようで、その対応にあれこれと言いつつ訳しながら対応していた。

岸尾はそんな島田を見ながら、思う。

(……DD—571と誓約したくなるほど強い思いが、彼にはある……のか)

028：変わり始まる気持ち

演習は仮想空間内でのシミュレーションの下、行われることが非常に多い。艦船の能力やその他装備データに関しては、リアルタイムでその鎮守府のことが反映されるもの、相手が修復しないままダメージを負っていることについてはリセットされる。燃料と弾薬といった資材もまったく消費することもないし、演習時のダメージもすべてリセットされる。つまり、実戦経験がない艦船を鍛えるには、もってこいの環境なのである。

そして、舞鶴での演習は、通常、鎮守府の地下にあるバーチャル・リアリティ空間室で行われている。

6月で、外の天候が不安定な中、演習がそれに関係ないのは島田たちにとっては非常に好都合であった。

そうして、島田はいつも通りクラクストンたちを連れて、地下室へと向かい、演出へと臨んでいた。

そこにはクラクストンたち戦艦少女のみではなく、シャーリーと岸尾の姿も見えた。シャーリーはVR空間で出来上がった架空の海や晴天の空をキョロキョロと見渡し

ながら、演出の様子を眺めている島田へと質問を投げた。

「島田くん、大原くんたちって、大阪の方に戻っちゃった？」

「ああ、みたいだな。一週間ぐらい向こうでやることあるみたいだ」

島田はコクコクと首を縦に振って頷いた。

大原は当たり前のように舞鶴鎮守府の提督面をしているものの、本来の所属は大阪警備府だ。さすがに3ヶ月以上連続して舞鶴にいることはできないし、定期的に向こうに戻るのには不思議ではないだろう。流れで大原についてきたジェルジンスキーも、当然向こうに戻っている。

シャーリーは島田の言葉を聞いて、「そっかさっか」と残念そうに言う。

「大原くんもそうだけど、ジェルジンスキーさんがいないのは不安になるなあ。倉竹さんの次に頼りになるし、あの人」

「そーなんだよなあ。クラクストンもあの人に懐いてるし、今の舞鶴にや欠かせない人材になってるよ」

島田はシャーリーの意見に同意して、うーんと唸る。

ジェルジンスキーは名前の元が元であるため、冷たい人物だと思われがちである。しかし、彼女にはロシアの最新鋭軽巡から練習巡洋艦へと艦種変更されている歴史があり、それ故か駆逐艦や小さな子供に対しての面倒見が非常に良い。少年である島田たち

に対してもかなり気を遣ってくれるし、人材不足の舞鶴鎮守府では彼女の人格は相当助けになっていた。

島田はジェルジンスキーがいてくれれば、いろいろ楽になれるのになあ、なんてことを思いつつ、黒いデジタルカメラを上着の内ポケットから取り出した。電源を入れて起動し、演習している艦船たち——ではなく、クラクストンの下半身へとピントを合わせた。

島田はシャリーにバレないように、「フヒヒ」と小さく笑みを漏らした。

(演習は特に命に関わらないから、こういうことするのに抵抗ないのが嬉しいなあ。この絶対領域が本当堪らない……この少しはみ出てる肉で、彼女の体格が健康的なのが分かるのも良いんだよなあ。触ったらふわふわしてそうで妄想が捗るよ、フヒヒ……)

そんな島田の所業を一切知らないシャリーは、笑顔で岸尾に説明する。

「島田くんね、演習の時はこうやって演習風景を写真にして、あとで分析してるんだって！　すごいよね、ボクには真似できないや」

「あ……うん、そうなんです。すごいですね……」

(いや……あれ、絶対DD—571のこと盗撮してると思う……)

一方で岸尾は島田の所業を知っているため、そう確信していた。

そして、出撃の時はある程度こういう考えは抑えているのだなど、改めて実感する。

(島田司令つて真面目そうに見えて、裏では自分の欲求には素直なんだな。話を聞く限り、かなりお堅い家の出身らしいから、こういうのとは無縁だと思つてた)

岸尾はなんとなく気になって、シャーリーに話を聞く。

「あの……シャーリーさん。島田さんの実家つて、結構お堅いところですよ……よく提督になることを許してくれたなつて思うんですけど」

「お堅いところつて言つても島田くんの家自体はまあまあ普通だつて聞いたよ。血筋が血筋だから、島田くんにも素質は引き継がれてるつて話は聞いてるね」

「血筋……？」

首を傾げる岸尾を横に、シャーリーは頷く。

「そうそう、血筋。向こうの歴史はちよつと分からないんだけど」

「歴史……？」

岸尾はそれを聞き、ふと、嫌な予感がした。

シャーリーは続ける。

「んーとね……沖繩つて元々『琉球王国』つて日本とは別の国だつたんだよね？」

「はい、そうです、けど……」

「確か、その琉球王国のとある国王から派生した、分家の子孫が島田くんの実家らしいん

だよ」

「……えーつと、ちよつと待つてください」

岸尾はとんでもない語句が次々とシャーリーから飛び出てきたため、困惑しながら確認した。

「えつと……まずは琉球の国王？ つまり、尚泰の直系の先祖つてことですよね？」

「だったはず。なんだっけなあ……島田くんの家は3代目国王の直系の息子さんが元祖にあるつて聞いてたけど、詳しく分からないや」

「い、いや……そこまで知ってりや十分です。ありがとうございます」

岸尾はこれ以上聞いたら頭が爆発しそうな気がして、その先を聞く勇気がなかった。そして、頭の中で整理して、そのとんでもない事実には汗を流した。

（待て待て……あの島田司令が王族の血を引いてる!?!）

岸尾は額を抑える。

（まさかそんな……いや、待て。それなら、彼の堂々とした出で立ちにも納得する）と、

（見た目に反して、はつきりしている性格だと思っていたけど……なるほど……）

しばらくして、彼の性格から、どうしても納得してしまうことに気付いてしまった。

岸尾は、クラクストンを盗撮している島田の後ろ姿を見ながら思う。

（何があつてあんな風に気持ち悪いことになつていいのかは分からないけど、表面上であそこまでしつかりしてゐるんなら、相応の素質と教育は受けてゐるんだろうなつて感じだ……。大人相手にあれこれ意見できる奴つて、なかなかいないし）

ただ、人によつてはそれが脅威であると感じるのもまた事実だ、と思つた。

彼の地獄の底を這つてでも、上に登り詰めようとする姿勢は岸尾どころか他の人物では、到底真似できまい。努力家と言えば聞こえはいいが、粘り強く、諦めの悪いと言われると、彼がどれだけ恐ろしい精神力を持つてゐるのかとても分かる。

今はまだ少年である身ゆえに、評価はまだまだ相応のものであるが——このまま成長すれば、ひとつの鎮守府の柱に収まらない人物になつてゐるのは容易に想像できる。

（こんな奴を潰さなきゃいけないのか……オレは）

と、岸尾が溜息を吐いたところで、胸ポケットに入れていたスマートフォンに電話の着信が入つたようで、ブザーが鳴つた。

岸尾はそれを取り出して、電話に出た。

「……はい、もしもし」

『やあ、岸尾くんかい？ ボクだよ！』

「……お前は！」

岸尾はその少年の声を聞くなり、ハッと目を丸くして、そのまま部屋の隅へと向かつ

た。

「何用だ？ こつちは定期的に報告してるだろう？」

『んー、いやあ、ね？ 今度そつちに送り込もうと思つてき、ジュツサーノとか深海の人たちを』

「……日程が決まったのか」

岸尾はスマートフォンを持つ力を強くした。

相手の少年は笑いながら、続ける。

『決まつてなかつたら連絡しないよー。前はアイツの秘書艦仕留めることが出来なかつたからさあ、今度は……つて感じだよ』

「……」

——ドクン、と強く叩きつけられるように胸の音が響いた。

そんな岸尾の様子をよそに、少年は続ける。

『で、日程なんだけど、候補自体はいくつか上がつてき。今ちよつと忙しいから、また夜に連絡するけど……ご都合はどう？』

「……構わない。ただ、また連絡するときはメールを先に送つてくれ。今、演習中なんだ」

『ああ、そうなんだ。失礼。じゃあ、午後も頑張つてねー』

と、電話があっさりと切れた。

ツーツー、と電話の切断音が響く中、クラクストンたちの演習が終わったらしく、島田たちの元へと戻ってきた。

「司令官様、ただいま戻りました！」

「お帰り、クラクストン。今日も絶好調だったな」

「はい。大好きな司令官様が見てるんですもの、演習でも気は抜けません！」

笑顔で抱き着いて上目遣いで島田を見つめるクラクストンと、そんな彼女を拒否することなく受け止める島田。

岸尾はそんなふたりを見るなり、彼らの方へと出て、言った。

「お疲れ様です……島田さん」

「岸尾くん」

「……先にながらせてもらって良いですか。ちよつと気分が優れなくて」

「ああ、構わないけど……体調悪いなら医務室行った方が良くないかい？」

「いえ、少し休めば大丈夫です。午後の出撃までには何とかかなると思います」

「そっか。じゃあ、少し休んでおいで。出撃する時また呼ぶから」

「……ありがとうございます」

岸尾はペー、と小さく頭を下げて、そのまま演習室の外へと出て行った。

岸尾が演出室を出て真っ先に向かったのは、スミスが待っている自分の提督室だった。

岸尾は自分の部屋の扉を開き、スミスの姿を確認した。彼女は机の上でパソコンを開き、ネットで服や靴などを見ていた。

そんなスミスは岸尾が戻って来るなり、パソコンをすぐにスリープ状態にして彼の方へと向かった。

「司令〜！ お帰りなさい。演習はどうでした？」

「ただいま、スミス。演習はまあ……いつも通りだったぞ」

岸尾は自分のベッドまで向かうと、そこに腰掛けて、スミスのことも自分の隣まで誘導した。

スミスは岸尾に誘導されるがままに彼の隣に座って、話を聞く体制になった。岸尾は続ける。

「……さつき、アイツから連絡が来て、近いうちにこっちに襲って来るそうさ」

「あ、そうなんですか……その様子だと、その時にこっちに戻って感じなんですかね」

「どうなんだろう……なんとも言えないけど、DD―571を仕留めるつもりではいるみたいだ」

と、岸尾はそれから少し間を置き、続ける。

「……………スミス」

「はい？」

「オレ…………自分がやろうとしてることって、親父がオレにしてきた仕打ちと同じなんじゃないかって思えてきたんだ」

「…………司令」

スミスはハツとなって、岸尾を見た。

岸尾は目線を落とす。

「いや、親父じゃなくて…………今のオレたちの立場は親父を奪った女か」

と、

「仲睦まじい男女を無理やり引き剥がして、戦意を喪失させる。それだけでも大分ひどいことをしているのに、死別させようとしてるんだ。確かに島田司令が彼女を失えば、抜け殻のようにはなるだろう…………けど」

岸尾は顔を上げた。

「残された島田司令はどうなる？ オレのお母さんみたくずっと胸の中に記憶を残しているだけになるか、それともオレみたく無気力な状態になって、何もかも諦めるのか…………オレは、そんな島田司令、見たいとは思えない」

「……司令」

スミスは岸尾がはつきりと自分の考えを口にしたことには驚きを感じつつも、そのことに嬉しさを覚えたのか、笑みを浮かべた。

「良かったあ。私、司令がこのまま自分の考えを決めないまま、あの人の言いなりになるんじゃないかって思って、気が気がじゃなかったんですよ」

「スミス……」

「……舞鶴に来て、島田さんと交流した意味がありましたね」

スミスは自分の狙いがしつかりヒットしたのを感じ、うんうんと小さく頷いた。

「私も、クラクストンのそういう姿は見たくはないです。彼女、普通の個体でも自分の提督に尽くすために生まれてきたような存在ですけど、島田さんのところのクラクストンは本当に大切にされてるのが分かりますからね。いろんな個体のクラクストンは見えましたけど、あそこまで幸せそうなのは見たことないですよ」

「そ、そうなのか……」

「……まさか、あの気持ち悪い島田司令の部分が良い方向に繋がってるのか？」

涎を垂らしてクラたんクラたん言っている島田の姿は本当にインパクトが強かったが、彼女を大切にしているからこそだと思うと、そう強くは責められなかった。実際、彼がクラクストン以外にこんな対応をしている姿が全く思い付かない。

スミスは続ける。

「だから……その、妥協案とか考えてみませんか？ 協力するって言った以上、すぐ裏切られませんか、裏切るタイミングも見計らわなきゃですし」

「妥協案、か……」

岸尾は頷く。

「うん、今はそれが一番良いかもしれない。過激な方法だけは避けたいし。でも、決めるのは今日の夜までになるから時間はないけど……」

「分かりました。じゃあ、今のうちに話を進めておきましょうか」

——そうして、スミスと岸尾は小一時間、どうすればクラクストンと島田をできるだけ良い形で引き剥がせるのか、考え始めた。

ああでもない、こうでもない、話し合った末、出した結論は、ふたりがこれしかないと思った方法だった。

「……じゃあ、それでいくか。このぐらいの作戦変更なら、アイツも受け入れると思う」「ですなあ。これでダメならまた考え直しましょう！」

——そうして、ふたりは立ち上がり、時計を見てから出撃の準備をし始めた。

岸尾とスミスは緊張で気持ちを強張らせながら、それぞれしなきゃいけないことを、頭の中で整理した。

029：全ては母親のために

岸尾は自分の実の父親の行方を探るために、提督を志した。

岸尾の父親はかつては戦艦少女たちを率いる提督として横須賀鎮守府で活躍していたらしく、息子である岸尾自身も横須賀は選考落ちしてしまったものの、兵学校を通じて佐世保へと着任する次第となった。

また、岸尾の母親は、元・戦艦少女であり、引退して岸尾を産んでから、しばらくは横須賀の近くでひっそりと暮らしていた。しかし、その一方で岸尾の父親は、岸尾が生まれる半年前から姿を消しており、母親は彼の帰りを何年も何年も待ち続けているのである。

そして、岸尾にとって、自分の父親の姿というのは、自分が生まれる前に撮られたカラー写真しか情報がなく、実際にこの目で見たことはなかった。ただ、そのカラー写真から察するに父親は日本人ではなく、海の向こうの国の出身であることが伝わってくる。若い青年の姿であれど、銀色の髪の毛に、紫色の瞳——日本人離れしている容姿であった。岸尾にはその姿はあまり引き継がれなかった、というよりは、日本艦として活躍していた母親の遺伝子の方が彼に色濃く引き継がれているようで、父と母の共通点で

ある紫色の瞳以外は、父親の遺伝子は容姿では確認できなかったのだ。

岸尾は佐世保に着任してからは、横須賀に所属していた提督たちからいろいろなことを聞き出した。しかし、自分が生まれる前——10年以上前となると、なかなか良い情報が取れない上に、そもそもその時に所属していた提督たちは、高確率で引退しているという事実には直面した。

途中で秘書艦に任命したスミスも、横須賀にいる戦艦少女たちに連絡を取って、どうにか聞き出そうと努力はしてくれた。が、戦艦少女は提督以上に人員の入れ替わりも激しく、有力な手掛かりが取れなかった。

そんな中で、岸尾に飛び込んできたのが——当時、関東の兵学校に通っていた少年・ゼヴィンからの情報だった。

ゼヴィンは岸尾の存在をどこからか聞くと、兵学校から佐世保鎮守府を経由して、こちらに連絡をくれた。どうやら、ゼヴィンの父親はロシア人で、ゼヴィンもそのハーフということだった。また、彼の父親も提督だったらしく、もしかしたら有力な手掛かりを岸尾に与えられるのではないかと——そんな甘い言葉を、岸尾へと投げてきたのである。

岸尾は、そんなゼヴィンの甘い言葉を真に受け、彼に招待されるがままにスミスと共に彼が住んでいる寮へと向かった。

ゼヴィンは父親譲りなのであろう銀髪の髪の色と紫色の瞳を岸尾へとさらけ出すように姿を見せ、岸尾とスミスが自分の部屋に来たことを歓迎してくれた。

「君が佐世保鎮守府に勤務している岸尾くんとスミスさんだね。まあ、中に入ってよ」

「はい、ありがとうございます！」

「は、はい……失礼します」

(……オレと同じハーフなのに、全然違う)

母親の髪の色が引き継がれた岸尾と、父親の髪の色が引き継がれたゼヴィン。両者はまったくもって真逆の存在であった。

ゼヴィンは岸尾を中へと案内すると、テーブル近辺に用意した座布団に座らせて、スミスと岸尾へ緑茶を出した。

スミスは早速緑茶を飲み、ゼヴィンへと質問する。

「えーっと、ゼヴィンさんでしたっけ。ご招待ありがとうございます。早速なんですけど、司令のお父さんについて知ってることがあるんですよね？」

「うん、そうだよ。少なくともボクの情報が正しければ……の話なんだけどね」

瞬間、ゼヴィンの口元が卑しく釣り上がった気がした。岸尾はゼヴィンのその表情に違和感を覚えながら、質問した。

「あの……ゼヴィンさん。オレの父親について、どこまで知ってますか？ 当時の様子

とか……ですか」

「ああ、うん。まずは、率直に結論から言うかね」

ゼヴィンは笑顔のまま、信じられないことを口にした。

「ボクと君は異母兄弟なんだよ、岸尾くん」

——沈黙が、走った。

しん、と静まり返ってからしばらくして、岸尾は引きつった笑みを浮かべて続けた。

「……ち、ちよつと、冗談キツすぎるんじゃないですかね。それって、つまり、君の父親とオレの父親が一緒だって言ってるようなもんじゃないですか」

「ああ、言ったよ。ボクはこういう時だけは事実を言うよ」

ゼヴィンは途端、爽やかな笑みから、ニイツと怪しげな笑みへと表情を変えた。己の衝撃の言葉に呆然としている岸尾とスミスを目の前にして、続ける。

「いやー、ボクもまさかと思って調べたけど……ビックリだよねえ。お互い、父親を共にしている異母兄弟なんて。DNA検査すれば、きつと相応の結果出るんじゃないかなあ」

「……ちよつと待ってくださいい！」

スミスはテーブルを強く叩き、膝立ちになった。そのまま前のめりになって、テーブル越しにゼヴィンの姿へと近付いた。

「それ……司令のお父さんが産まれる前に司令のお母さん捨てて、他の女の元に行ったクス野郎って言ってるようなもんじゃないですか！」

「スミス……！」

「今ならまだ取り消せます！ 冗談だつて言つてくださいよ！ お願いだから！」

スミスの声は震えていた。

自分の母親のためにと提督を志し、父親の行方を追っていた岸尾の努力が、ここですべて無駄になるとは思いたくなかったのだ。彼の努力していた姿を隣で見っていたからこそその凄まじい憤りが、スミスの心を揺さぶったのである。

しかし、ゼヴィンには、そんな彼女の憤りは届くことはなかった。彼は面白げに彼女を見て、続けた。

「なーんか勘違いしてないかい、君」

「なっ……」

「戦艦少女の提督なんて、そんなもんだよ。色んな女に目移りして、好みの女囲つてハレム作つて、自分好みの理想の園を作る。そして、上もそれを推奨している。その証拠に、この世界の誓約システムは色んな戦艦少女と誓約できるシステムにしてるじゃないか」

「それは……そうですけど、だからって、生まれてすらいない司令を捨ててまで他の女の

元に行くなんて、無責任も良いところですよ！ 大体、あなたはこの事実を知って苛立たないんですか!？」

「苛立つ……?？」

ゼヴィンはとんでもない、と言わんばかりに、鼻で笑った。

「苛立つなんてありえないよ。だって、最終的にはボクたち家族の手元に君のお父さんがいるわけだね。まあ、君の立場ならあり得たかもしれないけど、現状はどうも思われないさ、ボクは」

「……なんて人なの」

スマスは体を戻して、座り直した。そして、隣にいる岸尾に話しかけた。

「司令。もうホテルに戻りましょう。この人の話を聞いてたら、頭痛くて仕方ないですよ。見た目は美少年のくせに、中身は普通の感覚じゃないです」

「……」

(……彼の手元にある……ってことは)

岸尾は質問する。

「……ゼヴィンさん、ひとつ、質問させてください」

「何だい?？」

「……父は今、どうしてですか」

——一番、知りたかったことだった。

まだ生きているのか、それとも、とつくに死んでいるのか——岸尾はそれを知るために、提督になり、ここまで来た。それを聞かないで帰るわけにもいくまい。逆に言えば、これさえ知ることができれば、他の事情についてはどうでも良かったとも思えていた。

ゼヴィンは「うーん」と、頬杖をついた。

「それを知って、君はどうするつもりなんだい？ お母さんに話すつもりかい？」

「いや……どうもしない。オレが知りたいだけです」

「そっか、なるほどね」

ゼヴィンは岸尾のその返答を聞いて、質問に答えた。

「お父さんはね、元気で生きてはいるよ。ただ、君に会わせたら、君が卒倒しちやいそうだから、会わせる気はないけど」

「……分かりました、ありがとうございます」

岸尾はそれ聞くなり、顔を俯けたままスツと立ち上がって、スミスへと声を掛けた。

「スミス、帰ろう。生きてるのが分かっただけでも、収穫ものだ」

「司令……」

「あー、待って待って。帰る前に約束して欲しいんだけど」

と、ゼヴィンが岸尾とスミスに声を掛けた。ゼヴィンは続ける。

「あのねえ、ボク、今、兵学校の同級生？ に、どうしても蹴落としたい相手がいてき。そいつ、あまりにも諦め悪すぎる上に、関西の鎮守府への勤務が確定してるみたいなんだよね」

「……それが、どうかしたんですか」

「うん、君にそいつを蹴落とすのを手伝って欲しいなって思ってます」

ゼヴィンのはつきりと、そして、あつきりと、笑顔でそう言い放った。

「僕は横須賀にいるし、新人のうちだと簡単に異動とかできないと思うんだよね。でも、君はそろそろ佐世保に来てから一年なんでしょう？ そうしたら、関西の方に異動もできんじゃないかなーって」

「……スパイ行為を働けど？」

「そうなるね！」

理解が早い岸尾に、うんうんと笑みを浮かべながらゼヴィンは頷いた。

岸尾はグツと歯を軋ませて、そろそろ我慢の限界だと言わんばかりに声を強く上げた。

「貴様……自分が何言ってるのか分かってるのかッ！ ただひとりを蹴落とすために労力使ってなんになるっていうんだ！ しかも、他人への協力を求めるなんて——やるな

ら、自分ひとりで勝手にやつてろ！」

「——ふうん」

ゼヴィンは二タ、と口元を歪ませると、不気味に笑みを浮かべた。そして、言い放つた。

「協力しないなら……君の母親に、旦那の行方と現状について教えても良いんだね？」

「——！」

「君とボクが異母兄弟であることも、君が産まれる前からよその女にうつつを抜かしていたことも……ゼーんぶ、君のお母さんに話しても良いんだよ？」

「……」

岸尾は母親のことを引き合いに出され、真つ当な判断ができなかった。

母親にこんなことを知られたら——きつと、自分以上に絶望して、自分の好きな人の帰りを待つたために使っていた精神を一気に消失させて、抜け殻になってしまいかもしいない。

岸尾はその場でしゃがみ込み、自分が履いているズボンの太もも近辺の布を掴んだ。そして、震えた声で、ゼヴィンに言い放った。

「……お前の言うことは何でも聞く。だから、それだけは、やめてくれ」

そうして、岸尾はゼヴィンの誘導のままに、島田が所属している舞鶴へと一時的ながら異動することができた。

そして、一方で父親に関する事實は、岸尾にとって相当な精神ダメージを残した。ゼヴィンに事實を教えられてからというもの、今までできていた出撃や演習を自分で行うことができなくなり、提督に必要な判断能力も鈍っていた。とはいえ、最低限の能力はあつたため、スミスが秘書艦として彼のサポートをし続けて、こうして今に至るわけである。

すべては母親に危害が行かないために、すべては自分が盾となるために、すべてを引き受けた。

そして、岸尾は提督という身でありながら、当時岸尾を身籠っていた母親を捨て、他の女性の元へと渡った父親を強く恨むようになった。先にこのことを知っていれば自分は提督になることはなかったし、母親だって辛い思いをせずに待つこともなかった。そして、岸尾の家は次へと進めたのかもしれない。

(少なくとも、オレはこれ以上先へ進むことはできない。父親の行方を知り、真実を知り、何もかも失った気がした。自分の頑張りが何もかも泡になった。だから、オレは舞鶴を去ると同時に、提督をやめる。それしかないから)

そう、もう、最悪な形で自分の目的は達成してしまったのだ。

母親にどう言えば良いのかはこれから考えるにしろ、これ以上提督を続けていても仕方ない。

岸尾が、そうしてベッドの上に寝つ転がりながら思い出していると、コンコン、と部屋の扉を叩く音が響いた。

岸尾はその音を聞いてベッドから降りると、扉へと向かい、ガチャリとドアノブを引いた。と、扉の向こう側には、島田が笑みを浮かべながら立っていた。

「岸尾くん。そろそろ時間だけど、大丈夫かい？」

「あ……はい、すみません。ご迷惑おかけします」

「うん、いいよ。体の方が大事だからね。スミスはとづくに外にいるから、早く来てね」
「……ありがとうございます」

ふたりはお互いペコリと頭を下げ、島田はそのまま外の方へと歩みを進めていった。

岸尾は扉を閉めると、その場で制服を整え直し、ずっとスリッパでいたものを革靴へと履き替えて、島田を追いかけるように部屋を後にした。

岸尾はスミスから何かメッセージが来ていないかと、スマートフォンを開いてみた。すると、丁度母親からメッセージが届いたようで、通知が鳴った。

「……」

（お母さん……）

メッセージの内容は提督を辞めることについての言及であった。岸尾はその場で、「辞める」とだけ返して、スマートフォンを胸ポケットへとしまった。

030：求めて欲しい

島田は出撃を終えた後、今日も岸尾を夕食に誘ってみたものの、彼は知り合いの提督と連絡を取る用事があると言って、結局この日は一緒に食事を取ることはなかった。

島田はクラクストンやシャーリーたちを誘って、食堂で夕食を済ませた後、そのまま風呂へと直行した。島田はシャワーの横に置いてある石鹸を手にすると、タオルで泡を立て、そのまま泡がついたタオルで体を洗い始めた。

（岸尾くんと距離はなんとなく縮まった気はする……んだけど、やっぱり微妙な感じがある）

あの日——有明と出会った日以降、岸尾との距離感はどことなく縮まったような気はしている。食事に誘っても断られることは少なくなってきたし、シャーリーや大原たちとも上手くやろうと、彼なりに自分たちと向き合う姿勢が目に見えてきた。けれども、それでも彼には何かあるようで、それさえどうにかしなければ、彼とはこれつきりで終わってしまいそうで、少し嫌だった。

岸尾にとつては、たった数ヶ月ぐらいしか在籍しない鎮守府なのだろうが、島田としては、その数ヶ月の間に距離を縮めるに値する存在だと思っていた。ただ、向こうがそ

う思つてない以上、こちらもどうしようもないのも確かだった。

(誓約のことだつて気になるし、どうしたもんかなあ)

島田がそうして、シャワーのお湯で体の泡を流そうとしたところで、扉がガラツと開いた。

最初は隣の部屋にいるシャーリー辺りが間違えてこつちの風呂場に来てしまったのかと、あえて言及することはなかった。しかし、その足音が遠慮なく中へと入つてきたため、さすがの島田も違和感を覚えて、そちらへと振り向く——と。

「く、クラた……クラクストン!？」

そこにいたのは——白い柔肌をタオル一枚で隠しているクラクストンの姿だった。

島田はそんなクラクストンの姿を見た途端、びつくりして思わず立ち上がった。タオルでデリケートな部分を隠し、クラクストンの姿を、つい、まじまじと見つめてしまう。(つう、タオルで隠し切れないのか……)

駆逐艦らしい小柄気味な体格に反して、彼女の胸は非常に豊満だった。そして、タオルでその胸の全貌こそは見えないものの、谷間やら横にはみ出ている乳房がしっかりと見えており、島田は思わず視線を逸らしてしまう。こんなの、目線のやり場に困るのも当然である。

クラクストンは島田がこちらへと気付くなり、ニコツと小さく笑みを浮かべて島田へ

と近付いた。

「司令官様……お風呂に入るなら、誘ってくれば良いのに」

「つふあ!? な、何言ってるんだよ。風呂なんて年頃の男女が一緒に入るもんじゃないぞー!」

こちらへと近付く彼女に対し、島田は思わず後ずさって逃げの体制になる。

クラクストンは「あら」と、小さく呟いて、島田にさらに近付く。

「司令官様……私とあなたは誓約してるんですよ? だったら、こういうことで遠慮する必要はないと、私は思ってるのですが」

「う……え、遠慮はしてくれ。年頃の男子からすれば、君の裸体は刺激が強すぎる。その辺もう少し自覚してくれないか」

「司令官様」

島田が壁に背中をつけると、これ以上彼の逃げ場がないと察したクラクストンが、そのまま島田に抱き着いた。

「……誓約した以上、ちゃんとお互い行動を取って示さなければなりません。司令官様は私のことが好きだから、誓約してくれたのでしょうか? だったら、我慢する必要ないんですよ?」

「でも、キスだってまだなのに、いきなりこんなことされても……」

「だったら、今のうちに済ませておけば良いんですよ。それに、司令官様だって……そういう想像、してますよね？」

「……！」

島田は自分の今の感情が見透かされた気分になって、ドキッと強く波打った。

島田だって年頃の男子だ。クラクストンでそういった想像をすることぐらいは普通にある。実際に演習中の彼女を盗撮していることは置いておいても、だ。

島田が動揺したのを見て、クラクストンは「凶星なんですね」と、小さく呟いて、島田がタオルで覆っている中身を見ようと、彼のタオルへと手をかけた。

「ッー」

しかし、島田はそれだけは譲らまいと、タオルを必死で引つ張り、自分の身から剥がれないように強く握り締めた。クラクストンは、困ったように眉を下げる。

「あら……司令官様、困ります。これから私と司令官様の甘くて濃厚な時間が始まるというのに、拒否されたらどうしようもないじゃないですか」

「ぐっ……見られても減るものはないんだろうけど、僕が困るから」

（さすがにこんな明るいところで、クラタんに醜いものを見せるわけにはいかない……！ 暗ければ良いってもんじゃないけど！）

とにかく、ここは抵抗しなければと——島田は必死にタオルでその醜い部分を隠し切

ろうと、彼女からの誘いを拒否した。

島田は彼女を大事にしているからこそ、誓約しても安易にクラクストンに手を出してないのだが、とにかくそれが通じていない。多分、クラクストンの恋愛観とこちらの恋愛観にズレが生じているのだろう。

無論、島田はクラクストンの恋愛観に合わせることもぐらいは可能だ。島田もやはり男であるし、何もなければ応じるのも一つの手だとは思っている。けれども――。

(……今の僕じゃ、彼女に手は出せない)

——そんな、根本的な問題が島田を襲っていた。

クラクストンにとって、そこは大した問題ではないし、島田は島田だ。クラクストンが大好きな島田であることに変わりはない。

しかし、島田はそうではなかった。

(クラクストンの知っている「昔の僕」がどういう奴だったのか思い出せなきや、彼女との関係は完成しない！)

島田にとって、そこが障壁だった。

島田からすればクラクストンとの関係は今年の4月から始まっていることであり、それだけ見れば彼女との今回はまだまだ浅く見える。しかし、クラクストンからすれば、島田との関係は幼い頃から始まっているものであり、この差さえ埋めることができなけ

れば、島田はクラクストンに対して手を出すことすらままならない感情なのだ。

クラクストンはずっと島田だけを見てきて、舞鶴へと赴任してきた。でも、島田は彼女のことを一方的に覚えていない。

(何にせよ、今の状況で彼女とそういうことをするわけには——)

島田がそう思った時だった。

風呂の扉を軽く叩く子音が聞こえてきたかと思えば、島田たちにとって聞き覚えのある声が、扉越しに聞こえてきた。

「島田くん。いるー?」

「……! シャーリー!」

思わぬ割り込みに、島田は思わず声を弾ませた。

クラクストンはシャーリーの声が聞こえてくるなり、渋々島田から離れて、島田に向こうへと行くように腕で軽く促した。

島田は扉の前に立つと、ガラス越しにシルエットだけ見えるシャーリーへと話しかけた。

「シャーリー、どうした? 急用でもできたか?」

「急用っていうか……」

シャーリーはガラス越しに苦笑しているのが分かる程度に、体を揺らした。

「さつき、大原くんから連絡があつてさ。レポート書かなきゃいけないらしいから、舞鶴の資料とか至急送つて欲しいって」

「ああ……だつたら風呂から上がったら、すぐに送るよ。艦船たちのリストは要らないのか？」

「多分、要らないんじゃないかなあ。僕たちもどんな娘がいるのか、把握できてるわけでもないしね」

「分かつた。他に何か用事は？」

「うーんと……ああ、そうだ」

シャーリーは島田に聞かれて、少し悩んだように唸ると、言葉を返した。

「さつき大原くと話してただけど」

「うん？」

「大阪警備府の方に呉鎮守府からお客様が来てて、その人が次は舞鶴に行きたいって言つてるらしいんだよ」

「……舞鶴に？」

島田は扉越しにシャーリーに対して首を傾げた。シャーリーは頷いて、「うん」と返す。

「だつたらつて、大原くと一緒に来る予定みたいなんだけど……倉竹さんには伝えて

おいたから、ついでに島田くんにも伝えておこうかなって」

「そっか、ありがとう。また詳しいことは後で聞き出すけど、一週間後に来るってことで良いのか？」

「良いと思う」

「ん、了解。特に話がないなら、帰ってもいいぞ」

「うん、お風呂の時にごめんね」

シャーリーは島田に伝えることは伝えたことを確認すると、その場を離れて、パタパタと足音を立てながら帰っていった。

島田はシャーリーが帰るなり、「はー」と長く息を吐いて、今度はずっとそこにいたクラクストンへと視線を向けた。クラクストンは笑みを浮かべたまま、「？」と、首を傾げて、島田の姿を見ている。

そして、クラクストンは提案した。

「そうだ、司令官様。背中お流ししましょうか。いつも私ばかり背中流されてますし、そのお返しに」

「いや……僕としては、君にここから出て行ってもらった方がとても助かるんだけど」

「あら、つれませんね。少しぐらい良いじゃないですか。私もせっかく準備してるんですし、今日だけでも……ね？ 良いでしょう？」

クラクストンは上目遣いで、島田を見つめてきた。

島田はそんな彼女の願いに、「うっ……」と軽く喉を詰まらせて、ガクツと項垂れた。「……分かった。その代わり、今日だけって約束なんだから、明日以降は勝手に入ってくるなよ」

「うふふ……ありがとうございます、司令官様」

クラクストンは島田から了承の言葉をもらうと、嬉しそうに微笑んだ。

島田は先ほどまで使っていたバスチェアを自分の元まで引つ張り、そこに腰掛けた。クラクストンは鼻歌を歌いながら、島田の後ろでジャブジャブと桶の中でタオルを洗い、島田の背中を流す準備をしていた。

しばらくすると準備が終わったらしく、クラクストンは石鹸で泡立ったタオルを島田の背中へと当てた。島田はそのくすぐったさにピクツと体を震わせるが、クラクストンはそんなお構いなしと言わんばかりに、ゴシゴシと彼の背中を擦り始めた。

クラクストンは次々と泡で埋まっていく島田の背中を見つめながら、聞く。

「司令官様、どうですか？ 気持ち良いですか？」

「う、うん……悪くはない、かな」

島田はその質問に頷いて答える。

クラクストンはしばらく島田の背中をタオルで擦っていると、何を思ったのか、その

まま彼の腹の前へと自分の腕を回し、背中に抱き着いた。

島田はクラクストンの想定外の行動に、顔を真っ赤にして動揺を表した。

「く、くく、くくく、クラクストン!? な、なにを!」

(しかも当たってるし……!)

——クラクストンの柔らかい弾力のある乳房は、見事に島田の背中へと当てられていた。むにゅむにゅとした感触のせいで妄想が掻き立てられ、島田は視線をあつちこつちへと泳がせた。その妄想に押し出されるように、先ほどシャーリーに言われたことが、頭の中から抜け落ちそうになる。

クラクストンは、腕に力を入れ、一層強く島田のことを抱き締めると、そのまま呟くように目先の彼に話しかけた。

「……司令官様」

「な、なんだよ……」

「……私、そんなに魅力ありませんか?」

「!」

島田はクラクストンのその言葉を聞くと、思わず目を丸くして驚いた。

「な、何言ってるんだ、クラクストン。魅力がなかったら誓約しないよ」

「いえ……その、こういったことを避けられると、不安になってしまうので」

クラクストンは続ける。

「最初にも言いましたけど、私はいつでも大丈夫なんですよ。司令官様が求めてくれるのなら、私は断りません。でも、どうして、司令官様は私を求めてくれないのですか？」
「……君は変わってるね」

島田は自分の腹の上にある彼女の手を、そつと撫でた。

「普通、女の子って好きな男相手でも、そういったものは守りたがるものだと思ってるからさ。それはモテない男の偏見かもしれないけど」

と、

「少なくとも、僕自身としては、今の自分を君に曝け出すのは早いと思ってる。ぼつかりと空いた記憶がある以上、君が求める僕じゃない気がするから。それが埋まれば君を求めようになる……訳じゃないけど、ただ、少なくとも安易に君を求めて、後悔したくない気持ちがある」

「……」

「君としては安易に求めてもらって結構なんだろうけど、結局、そういったことって君に負担がかかることばっかだ。今の中途半端な僕じゃ、君に余計な負担しか掛けない気がするんだ」

「……。分かりました」

クラクストンは島田を抱き締めながら、彼の背中に顔を埋めて頷く。

「それでも私は、待ってますから。今はこうしてお互い裸でくっついていてくれるだけでも、良
いから」

「ごめん……ありがとう」

(……度胸無しなりの言い訳でしかない、よな。ごめん、クラクストン)

島田は目を伏せて、背中から伝わる彼女の温度を感じ取っていた。

031：呉からの来訪者

一週間後、大原はジェルジンスキーを連れて舞鶴鎮守府へと戻ってきた。

ジェルジンスキーは一週間ぶりに会う駆逐艦たちと談笑を交わし、大原は大原でこちらを出迎えてくれた島田とシャーリーに、呉からの来訪者である「彼」を紹介した。彼は50代ぐらいの男性の風貌をしており、そこそこ白髪混じりなのを見ると、最低でも50半ばは越しているような雰囲気がある。皺の方もそれなりに見え始めている頃で、それなりに蓄えている髭が似合っていた。

男性は島田とシャーリーの姿を見ると、提督帽を被り直した。

「眼鏡の君が島田くん、赤毛の君がシャーリーくんだね。私は呉鎮守府に所属している岩国だ。大原くんから事情や話は聞いています」

「初めまして、岩国さん。よろしくお願ひします」

「よ、よろしくお願ひします……」

（これがベテラン提督か……）

シャーリーと島田は頭を下げながら、お互いチラツと見合わせる。

倉竹のような、近所にいる気軽に頼れるお兄さんという雰囲気とは違って、岩国から

はどつしりと構えた強いオーラが島田たちには感じ取れた。本来ならば自分たちが気軽に話しかけられるような人物でないこと、そして、自分たちが横に立つにはあまりにも鳥濱がましいこと——目上でも容赦なく意見する島田でさえも、岩国を前に萎縮してしまう。

岩国はふたりの顔を上げさせると、島田に言う。

「この鎮守府では、便宜上、君が副リーダーに相当するのかね、島田くん」

「は、はい……大將は倉竹さんです。僕以外の少年提督は正式な舞鶴鎮守府所属ではないので、そうなるかと」

「なるほど、やはり彼か」

岩国は倉竹の名前を出されると、想定内だと言わんばかりに頷いた。

「島田くん。倉竹くんのもとまで案内してもらっても構わないかね？ 案内した後は、

仕事に戻ってもらって構わんよ」

「は、はい。分かりました。じゃあ、シャーリー、大原。また出撃の時に」

島田は岩国に命令されて了承すると、シャーリーと大原へそう声をかけ、お互い軽く敬礼した。

そうして一旦ふたりと別れると、島田は岩国を倉竹がいる執務室へと案内した。島田は岩国に対して、どう話を振れば良いのか分からず、必要な事務的会話以外は黙り込ん

だままだった。

岩国は緊張しているのであろう島田を見ると、小さく笑みを浮かべ、島田へと話しかけた。

「島田くん」

「は、はい？」

「そんな私相手だからと無理に取り繕うな。自然なままでいい」

と、岩国は苦笑し、言葉が続ける。

「君の話は大原くんから本当によく聞いているよ。君の年頃の提督は控えめになりがちなんだがね」

「いえ、そんな大したことじゃないです」

島田は首を横に振る。

「昔から大人に対しての接し方や意見の仕方など、周りから教えられてきましたから。それに、提督になった以上、周りが大人ばかりだからといつておどおどしてたら、送り出してくれた親に申し訳ないですし」

「そうか。ただ、君がそういう性格ならば、親御さんも安心だろう」

岩国は島田の言葉に頷きながら、そう言った。

「普段は堂々としてても、戦場を目の前になると、どうしても萎縮してしまう少年提督は

非常に多くてね。大抵の場合は慣れていくが、それにも個人差がある。そして、その期間がほぼ無いのは、話を聞く限り君ぐらいだ」と、

「このまま続けていけば大物になるだろう、君は。普通の人にはない何か、君にはある」

「……」

(普通の人にはない何か、か)

島田は岩国にそんなことを言われると、顎に手を当てて、つい、考えてしまった。

(僕にとつてはそれが普通なわけだけど、他の人からすればそうではない……のかな。いや、まあ、この年齢で提督になってる時点で普通ではないんだけどさ)

島田がそう思いながら岩国と共に進んでいくと、そのうち執務室の扉の前まで辿り着いた。

島田は少し気になって扉の前で聞き耳を立てると、有明と倉竹が何やら言い合っている声が、こちらまで聞こえてきた。大方、誓約についての攻防戦が未だに続いているのだろう。

島田は呆れながら溜息を吐くと、先に岩国にペコリと頭を下げた。そうして、島田はコンコン、と、扉を叩いた。

「倉竹さん。呉から岩国さんって人が来てますよ」

それから、また、扉の前で聞き耳を立てた。

こちらが岩国の名前を出した途端、有明と倉竹の言い合いは恐ろしいほどにびつたりと止み、足音がこちらの方へと近づいて来るのが分かった。そんなに凄い人なのかと、島田が岩国の方へと視線を向けると、ガチャ、とドアノブが回った。

島田は扉から離れ扉が開かれると、そこには倉竹がいつも通りの提督を身にまとい、立っていた。

倉竹は島田を見てから、岩国の存在を確認すると、いそいそとその場で姿勢を正し、敬礼した。

「これはこれは岩国さん。お久しぶりです。来るとは聞いてましたが、てつきり夜に来るものかと」

「誰かと思えば……岩国さんではありませんか」

と、倉竹の背中から有明も顔を出した。

「お久しぶり……というほど前でもありませんが、呉でもそんなに顔を合わせていませんでしたね。ちゃんと話すのは数ヶ月ぶりでしょうか？」

「有明くんか。ここにいたとは聞いていたが、本当にいたとは」

岩国は有明の姿を見るなり苦笑した。と、今度は島田へ目を向ける。

「島田くん、ここまでで大丈夫だ。案内ありがとう」

「ええ……でも、お茶ぐらい煎れていきますよ?」

「いや」

岩国は島田のその申し出に対し、首を横に振って断った。

「君に必要以上に働かせるのは、少々申し訳ないからね。確かに他の鎮守府での少年提督は雑用もやらされるが、ここではそういう扱いをしていないのだろう? 倉竹くん」

「そうですね。提督として、やらせるべきことだけやらせれば問題はないと思ってます。自分の身の回りのことは、どのみち、自分で勝手にやらなきゃいけませんから」

「……だ、そうだ」

「ああ、ええ……雑用とかじゃなくて、部下として当たり前のことをやろうとしてるだけなんですけど……倉竹さんがそう言うなら仕方ないですね」

と、島田はぺこりと会釈するも、右手を上げて敬礼した。

「じゃあ、僕はこの辺で。出撃が終わったら、またここに来ますね」

「ああ、行ってらっしゃい」

そうして島田が自分の仕事へと戻ると、倉竹は岩国へと目を向け、彼を執務室の中へと招き入れた。

「岩国さん。じゃあ、中へ」

「うむ」

倉竹は岩国が中に入ると、パタン、と執務室の扉を閉めて、そのまま彼を仕事机の横にあるテーブルの方へと案内した。

そこに備え付けられているソファアールにお互い座り、テーブルを挟んで向かい合う形となった。

有明の方は倉竹に淹れていた緑茶を岩国にも出そうと、岩国がソファアールへと座るなり早速、給湯室の方で茶を出す準備していた。

岩国はそんな彼女の姿を見送りつつ、再び倉竹へと目を向けた。

「倉竹くん。有明くんには相変わらず求婚しているのかね？」

「岩国さん、早速その話題ですか……いや、その……絶賛全敗中ですが」

「だろうねえ」

岩国が笑いながら倉竹の不機嫌そうな表情を見ると、丁度緑茶を淹れ終えた有明が、ふたりの元へ緑茶が入った湯飲みを置きに来た。ふたりはそれを受け取り、有明はお盆を手にして、倉竹が座っているソファアールの後ろへと回った。

岩国は出されたお茶を一口、飲んでから、本題へと入った。

「さて、倉竹くん。今日、私がここに来たのは有明くんの様子を見に来たわけでは無いからだよ」

「あれ、そうなんですか。てつきり、有明さんのことでここに来たものかと」

「いや」

岩国は首を横に振った。

「私が話したいのは横須賀鎮守府についてだ。とある少年提督が探りを入れてくれるようですね、この間こんな資料が届いた」

横須賀の名前を聞いて、有明と倉竹が顔を合わせて若干驚いたのと同時に、岩国がA4サイズ程度の茶封筒を取り出した。岩国はすでに開かれた封から、その資料を取り出して、目の前のテーブルへと広げた。

そこに広がっていたのは、横須賀鎮守府内の案内地図や細かい見取り図だった。同時に、いろいろなことがボールペンで直接書き込まれており、どこの部屋にどんな提督がいるのか、どこの宿舎に戦艦少女たちが住んでいるか、など——調べればキリがないようなどころまで、しっかりと調べられ上げていた。

それらは黒のボールペンで描かれていたが、唯一、赤のボールペンで書かれている名前があった。

「……ゼヴィン？」

そう、ゼヴィンの名前だった。彼の名前だけ、赤いボールペンで書かれている。

そんな彼の名前の文字の下には、緑色のボールペンでアルベルト・デイ・ジュッサー

ノの文字。

「……アルベルト・デイ・ジュツサーノ……って、島田さんとクラクストンが初めて出撃した時に襲ってきた戦艦少女の名前じゃないか！」

「倉竹くん、知っているのかね」

「知ってるものにも、クラクストンを死に追いやるうとした戦艦少女ですよ。忘れるはずもない」

と、

「このジュツサーノは……もしかして、このゼヴィンという提督の秘書艦ということなのでしょいか？」

「他の書かれ方から見て察するに、そうだと思っている」

岩国は倉竹の疑問に頷いた。

「そして、私はゼヴィン提督について調べたが……彼は島田さんと同じ兵学校卒の少年提督なようだ」

「つてことは、関東の？」

「そうなる。横須賀鎮守府とも提携している兵学校の一つだ」

と、

「ゼヴィン提督や島田くんたちと一緒にの学校に通っていた提督は、こちらにも数人いて

ね。彼らに少し事情を聞いてみたのだが、どうやらゼヴィン提督は、兵学校で同じ学年だったとある少年を貶めるために、提督である親の権力を使って、教師たちに命令したそうだと

「命令?」

「そう。『この少年を落第させろ』……とね」

岩国は続ける。

「倉竹くんは聞いたことがないかな? シャーリーくんや大原くんから似たような話を」

「いえ……聞いたことがないです」

倉竹は首を横に振る。

「ただ、そこまで酷かったら、彼らよりも先に島田くんの口から聞いているでしょうし、少なくともこちらの耳には入ったことは無いです」

「……もし、その該当の少年がそういったことを話したからなら、と言ったら、どうする?」

「えっ?」

倉竹はその岩国の言葉で何かを察したようで、ハッと顔を上げた。そして、続ける。

「岩国さん……待ってください。それって」

「……しかし、そう考えた方が辻褃は合う」

岩国は緑茶を一口に飲む。

「クラクストンくんを襲ってきたアルベルト・デイ・ジュツサーノが本当にゼヴィン提督の秘書艦ならば」

「……島田くんもずっと狙われていた、という話になるんですね」

——倉竹はやはりか、と、悔しそうに眉間に皺を寄せた。

島田は鎮守府の筆記試験で上位に君臨し、人柄も相応に提督に向いていて、「らしい」と、倉竹は思っていた。そして、彼が提督になる夢を「忘れなかった」ことに非常に喜びを覚えていた。

そして、そんな彼のことを他の鎮守府や泊地は放っておくわけがないだろうと——すつかり思い込んでいたが。

「どうりで、他の鎮守府や泊地の面接官は僕以外、彼を取りたがらなかった訳ですよ。さすがにそれぞれの雰囲気もあるでしょうし、たまたま彼の人柄が合わないのかな、なんて呑気に思っていましたけど……それにしたって、彼はどう考えても優良物件ですよ。舞鶴以外取りたがらなかったなんて、普通は考えづらかったんですけど」

「……そういうことだ」

岩国は頷いた。

「優秀すぎるゆえに取りづらいのは大いにあるだろうが、すぐ戦力になりそうな人柄をした彼は、本来なら取り合いが発生していてもおかしくはない。どこの鎮守府も育成する素材には苦勞しているからね。それも少年と来ればだ」

と、

「倉竹くんがそういったことに無関心で良かったと、改めて思う。関心があつても島田くんを舞鶴へと引き込んだのだろうが」

「そうですね。少なくとも俺はどちらにせよ、彼を舞鶴へと誘うぐらいはすると思いません」

倉竹は頷いた。と、同時に資料を見て心配事が出てきたのか、岩国へと不安を漏らした。

「しかし、横須賀鎮守府のことをここまで知ってるということは、この提督は横須賀鎮守府にいますのしょう？　ここまでして大丈夫なのでしょうか」

「……彼も、相当な覚悟を持って送ってきたのだろう」

岩国は続ける。

「今の横須賀は同調圧力もひどく、まともな提督ならば裸足で逃げ出すぐらいの環境になりつつある。そんな中でこんなことをしているんだ。私も……いや、私たちもそれに答えねばならない」

「えっ……俺も何かするんですか？」

「ああ。と言っても、島田くんのサポートがせいぜいだろうがね」

岩国は苦笑し、

「彼らのことは彼らでしか解決できない。その中でも私たちにできることを、これから考えよう」

032 : ゼヴィンと吉川

「……数ヶ月、僕のことを嗅ぎ回っていたのは君だよね……吉川くん？」

ゼヴィンが暗がりな自分の提督室の中で視線を向けたのは、扉の前に立っている吉川とホーエルの姿だった。

吉川は横須賀鎮守府の見取り図を呉に送ったわけだが、そのこともゼヴィンもどういうわけか知っていたらしく、とうとう吉川が呼び出された——というわけだ。吉川自身、最後までこのことをゼヴィンに隠し通せるとは思っただけで——2ヶ月でこのことがバレるのは思った以上に早すぎた。バレていても、彼が行動に入るのはもう少し先だと読んでいたのだが、そこか吉川の読みが甘すぎたのだろう。

ゼヴィンはクスクスと小さく笑みを浮かべながら、吉川へと一歩、近付いた。

「君、情報部署の子だっけねえ……この情報を他鎮守府へ横流しするのは良くないと思うんだけど、どうかなあ？　ボク、間違ってる？」

「ツ……」

(美少年だとは知ってたけど、迫力が違うツ……)

ゼヴィンの整った可愛らしい甘い顔立ちに、こちらに圧力を与えるような不気味な笑

み。この組み合わせは非常にミスマッチだからこそ、吉川に後退りさせてしまうほどのインパクトを与えた。

しかし、吉川がここで引いてしまったら全てが無駄になってしまうと思い、なんとか喉から絞り出した。

「よ……良くないとは、自分でも思ってる。と、とんでもないことが流出したら、そ、それは、こっちにもダメージ行くし……」

「へえ、よく分かっているじゃない」

「でも」

吉川ははっきりと、ゼヴィンに言った。

「だからこそ、横流しされて困る情報を流したつもりもない。べ、別にネット上に晒したわけでもないし……別に、他鎮守府なら身内の範囲内。同じ軍隊のうちなんだから、別にある程度の情報共有は問題ない……はず」

「……別に別について、うるさいね。普段からいかに君が人前で話し慣れてないか、よく分かるよ」

ゼヴィンははっきり言おうとして、ボロが出てくる吉川に苦い笑みを浮かべつつも、一方でこちらにも黙ったままではいられないと、言葉を続ける。

「ま、それでも、ボクにとっては不都合なんだ。家庭環境まで他の鎮守府に伝わっちゃっ

たし、それで家族の個人情報まで晒されたらどうしようもないんだよね。吉川くんだった、そうなたら困るだろう？」

「ぎ……逆に、ゼヴィン提督は何か困ることあるんですか？」

吉川はゼヴィンをまっすぐ見据えると、その先を続けた。

「そういつた情報を流したところで、あなたの家族に突撃なんてしよう輩は……多分、いいはず。これがネットの匿名掲示板ならいるだろうけど、提督間でそういった行動をする馬鹿は……いないは……じゃなくて、晒し上げられて当然な風潮」

若干の焦りを見せ始めたゼヴィンの表情を見た吉川は、そのまま言い放った。

「ゼヴィン提督。あなたは、他の鎮守府に……しかも、ごくごく一部でもバレたらまずいことを隠しているんでしよう。それで、あなたが真つ先にオレを呼び出したのは、その隠していることに対して、都合が悪いから。違いますか？」

「……君のような、勘のいい子は嫌いなんだよねー」

ゼヴィンは吉川の言葉を聞くと、それを否定することはなく、受け入れた。

そして、パチンと指を鳴らした。

「ジュツサーノ、出てきて。『出撃』前に先に一仕事お願い」

「アンミラーリオつたら、相変わらず人遣い荒いね」

そうして、コツン、と、ヒールを鳴らしながら隣の寝室から出てきたのは、イタリア

の軽巡洋艦で、ゼヴィンの秘書艦であるアルベルト・デイ・ジュツサーノだった。

ジュツサーノはゼヴィンに対して不満の言葉を漏らしている反面、その表情は笑みを浮かべており、目の前の獲物に対する敵意を剥き出しにしていた。

吉川は自分たちの目の前に現れたジュツサーノに、更に後退りしながら、自分の背中の方ろにいるホーエルへと視線を送った。

「ほ、ホーエル……」

「……怖がらないでください、私がいまです」

ホーエルは吉川の肩を掴み、彼に後ろに引くように促した。吉川は「頼んだ」と言わんばかりに、彼女に促されるがまま、後ろへと引いた。

ジュツサーノは「へえ」と、悪戯っぽく笑みを浮かべた。

「ホーエルつて、確かフレッチャー級のホーエルだね？ つてことは、あのクラクストンの姉妹つてことかあ」

と、ジロジロとホーエルの姿を見た。

ホーエルが警戒して、ジュツサーノを軽く睨みつけている中、ジュツサーノはニツと笑みを浮かべ、つい前のめりになっていた姿勢を戻した。

「……うん、姉妹艦は沢山いるって聞いてたけど、銀髪でおっとりしてそうなのは、すごいあの子に似てる」

ジユツサーノはうんうんと頷きながら、ゼヴィンへと話を振る。

「で、アンミラーリオ、この子たちを殺ればいいの?」

「それでもいいけど、ここで戦うのは危険だし……まあ、そうだね。拘束して、地下にでも押し込めておけばいいんじゃないかな」

「ん、分かった。じゃあ、少しの間、身動きが取れなくなつてくれると嬉しいんだけど……」

ジユツサーノはどうしたものかと、キョロキョロと辺りを見渡している間にも、ホーエルと吉川はここからどうにか逃げ出そうと、視線で画策していた。

自分たちのすぐ後ろには扉があり、これさえ開くことができれば、今にでも廊下へ逃げ出すことができる。ここから情報部署の本部が少し遠いのが難点であるが、そこはなんとか切り抜けるしかないだろう。

吉川はじりじりと後ろに下がりながら、ドアノブへと手を掛けた。

そして、その瞬間をジユツサーノも見逃すことはなかった。

「ツッ! ホーエル!」

「司令官ツッ!」

吉川はホーエルの手を引いて、体をぶつけるように扉を開き、廊下へと出た。

廊下を走りながら、これでこのまま情報部署まで駆け抜けければ——と思っただが、

ジュツサーノも同時に駆け出しているようで、ホーエルが後ろを見ると、こちらのすぐ真後ろでジュツサーノが、こちらを追いかけていた。ジュツサーノは絶対に捕らえてやると言わんばかりの気迫で、こちらを睨みつけている。

ホーエルはその速さと気迫「動揺しながら、吉川へとそのことを伝えた。

「司令官、このままだと追い付かれます！」

「ッ、足はつや……！」

（イタリアが一時期建造してた足が早い軽巡だとは聞いてたけど……敵に回すと本当厄介だ！）

吉川は情報部署がある一階へと足を運ぶために、そのまま階段を降りようと足を踏み入れた。ホーエルと吉川は階段という不利な材料の中で、一段飛ばしたりなんだりしてなるべく早く早く降りようとした。

しかし、そこでジュツサーノが勢いよく駆け抜け、階段の踊り場まで一気に飛んだ。

「！」

階段の半ばで吉川たちの足が止まる。

ジュツサーノはニツと笑みを浮かべて、一步一步、足を歩め始めた。

「さあ、おいで。私は優しいから、何もしないよ」

「……ホーエル」

「後は上です、けど……」

「……だよな」

こことはまた別に階段があるが、そこを経由すると、ここから情報部署まで遠回りになつてしまう。

その上——。

その懸念材料をお互い想像したところで、少年の可愛らしくも残酷な声が聞こえてきた。

「あはは、やっぱりここで追い付かれてたかあ。ま、普通に追いかけてこしても、ジュッサーノから逃げるなんて無理な話なんだけどね」

「ゼヴィン提督……」

——そう、今度はゼヴィン提督が、一瞬でも上に向かおうとしたふたりの行手を阻んだのである。

ゼヴィンは片手にスプレーを持ち、それをふたりへと向けた。

「下がダメなら上から……つていのが見て取れるけど、残念だったね。上もとつくにボクが占領してるからさ」

「くっ……」

吉川が悔しさから歯を軋ませている前で、ゼヴィンは続ける。

「ジュツサーノ、時間稼ぎありがとう。少しの間顔を覆ってて。——それっ」
ジュツサーノがゼヴィンの言う通り顔を両手で覆ったと同時に、ゼヴィンはスプレーボタンを押した。

途端、白い霧のようなものが吉川とホーエルの元まで襲いかかった。

「つう!？」

「きやつ……………」

その霧を浴びた吉川とホーエルは途端に目が痛くなり、その痛さから目を開いていられず、喉も痛くなり、ゲホゲホと咳き込み始めた。あまりのことにふたりは立っていられず、その場でしゃがみ込んでしまった。

吉川は痛みで開かない目を、なんとか薄目で開き、目の前の光景を捉えようとした。そこにそびえ立っていたのは、ゼヴィンの姿だった。

吉川は喉の痛みで咳き込みながら、言った。

「ぐっ……………う……………催眠、スプレー……………か、あっ……………」

「(名答)」

ゼヴィンは弾んだ声で続ける。

「ジュツサーノが協力してくれたお陰で、これを用意する時間があったのは良かったよ」
ゼヴィンはスプレー缶を上げて、にっこりと笑みを浮かべた。

そうしてゼヴィンは催眠スプリーの効果がふたりに浸透しているのを確認すると、ジュツサーノへと声を向けた。

「ジュツサーノ。このふたりを地下室まで連行しようか。今なら身動きも取れないし」

「了解だよ。さあ、ふたりとも、大人しく私たちについてきてくれると嬉しいな」

ジュツサーノはにこやかにそう告げ、ホーエルと吉川の元まで歩くと、ふたりの襟元を引つ張り上げ、無理やり歩かせた。

「アンミラーリオ、この後は東南群島だっけ」

「うん、島田くんたちがその辺調査するみたいだから、そこを深海軍の人たちと突くんだよ。分かってるね？」

「……ッ！」

（島田提督が……!?!）

吉川はさらにふたりの会話を聞き続ける。

ジュツサーノは「うん」と頷いた。

「今度こそ、アイツらを……って思ったけど、作戦自体は変更されてたんだっけ」

「そう。岸尾くんから『ふたりを誘拐することで手を打ってくれ。その後は何してもいい』って言われたからね」

ゼヴィンはジュツサーノと地下へと歩き始めた。目を開けない吉川とホーエルは、ふ

たりの動きを頼りに、階段を下りる。

ゼヴィンは続ける。

「最初はとうしようかなあつて思ってたけど、普通にその場で甚ぶるよりも、攫った方が面白いことになりそうだし、それで計画変更したんだよね。ジュツサーノだって、そっちの方が面白いって思わない？」

「うーん、駆逐艦ハンターとしては、その場でぶつ潰す方が面白いんだけど……島田提督もつてなると、そっちの方が良いかもね」

「それに」、と、ジュツサーノは笑みを浮かべて続ける。

「アンミラーリオにとっては、その方が面白そうだもんね。憎き敵を、とうとうこの手で甚ぶることが出来る機会なんだもん」

「ジュツサーノにはお見通しなんだね。そうだよ、ボクとしてはそっちの方が重要なの
ゃ」

ゼヴィンはククツと笑う。

「ボクはね、それまで彼の心を折ることしか考えてなかったんだよ。それでクラクストンを潰せば、島田くんも潰れる。ボクはそう思った」

続けて、

「でも、この手で甚ぶったり……彼の目の前でクラクストンを潰すのも面白いかもね。

誘拐して好きにして良いって言うなら、そのぐらいのことはやっても良いでしょう?」「さすが、アンミラーリオ。提督とは思えないほど下衆な考えを持つてるんだね。見直したよ」

「褒めてるんだか、そうじゃないんだか、分かりづらいことを言うのは止めてくれよ」ゼヴィンは困ったような口でジュツサーノに言い、とうとう地下へと繋がる階段へと足を踏み入れ始めた。

横須賀鎮守府の地下は2階に分かれており、ゼヴィンが使いたがっているのは2階の方であろう。1階は演習用のVR施設やその他装備保管庫として活用されており、閉じ込めておくとなると、ほとんど使われていない2階となる。

2階は少し前まで機密会議などに使われていたようなのだが、他の鎮守府や泊地、警備府が発達するにつれて、使われなくなってしまう。今は施設だけが名前として残っている状態となっている。

ゼヴィンは地下の1階へと辿り着くと、胸ポケットから細長い鍵を取り出した。どうやら、これが地下1階から地下2階へと繋げる導線のようだ。

「じゃ、ジュツサーノ。こいつら閉じ込めたら、東南群島へと向かおうか」

「いいよ、そこは予定通りにいかないかね」

と、地下1階から2階を繋ぐ階段へと足を踏み入れた。

吉川はふたりの会話を聞き、これから島田たちに降り掛かる彼らの計画を、今すぐにも誰かに伝えたかった。しかし、囚われの身になった以上、それすら叶わない。

ふたりの足が進むと同時に、自分たちもそれに誘導される中で、吉川はなんとか薄目を開いて地面を見ようとした。

(ツ……ここ以上、彼らに手を出させたくはないのに……どうしたら……)

033：嵐前の静けさ

この日、7月の初旬だというのに、立派な快晴であつた。

正午の演習を終え、昼食を済ませた舞鶴にいる少年提督たち4人は、それぞれの秘書艦を連れ、港へと集まっていた。その傍らには出撃のための船が出されており、全員この船に乗るようである。

また、今回は、倉竹は岩国の対応で出撃することができないため、代わりに島田が今回の指揮を取ることになっている。鎮守府にいる少年提督全員を駆り出すゆえに、まとめ役の大人は必要であると倉竹は考えていたようなのだが、こうなってしまった以上は仕方ない。

島田は、今回向かう海域の地図をここにいる全員に渡し、優先的に調査しなければならぬ場所や、分岐条件、その他諸々を一通り説明していた。

「で、今回の出撃は首領の所まで行く必要はない。あくまでも調査だからな。調査が終わった後は倉竹さんに――」

そうして島田の説明を聞いている間にも、どこか落ち着かない様子の少年提督がひとり。

(今日……なんだよな、実行)

そう、岸尾だった。岸尾は渡された紙を見ながら、どこでゼヴィンたちが襲撃してくるか、確認していた。

岸尾はあれからスミスと共に確認を済ませて、作戦を確立し、ゼヴィンへと作戦変更を持ちかけた。

まず、ゼヴィンは今日、島田たちが出撃することを岸尾経由で知っており、天気都合やその他諸々を鑑みても今回が一番都合が良い、ということ、ジュツサーノや深海軍と取り決めた。そして、その内容というのが、「クラクストンの首を取る」ということだった。しかし、岸尾はそんなゼヴィンに、「本当にそれでいいのか」、「もつと具体的に面白い案があるだろう」と、ゼヴィンが好きそうな作戦をひたすら挙げていき、それが「クラクストンと島田を誘拐する」という作戦だった。

最初、スミスと岸尾はこの作戦が通るかどうか不安だったが、ゼヴィンが思ったよりノリに乗ってくれたため、結構すんなりと変更が通った。彼らを甚振るのは攫った後で、逆に言えば攫えば何をしても良いと——刺激を求めるゼヴィンにとっては好都合であった。

とはいえ、岸尾も岸尾でゼヴィンと競合するつもりはなく、スミスとどうにかしてゼヴィンたちへの突撃をしかける予定である。無論、そこには島田とクラクストンもいる

前提だ。

(これで作戦が成功に終われば、島田司令がアイツにけしかける機会ができることになる。誘拐したら、どこに收容するかは分からないけど、少なくとも横須賀のどこかな気はするし。でも……)

と、岸尾の視線は説明を続けている島田へと向けられた。島田は大原の頓珍漢な質問に突っ込みを入れたりなんざりしながら、話を進めていた。

(……それまで、彼らを騙さなきゃいけないのか)

そう、岸尾は島田たちを騙すことに対し、強い抵抗感を持ちつつあった。

最初は、長くても数ヶ月の仲だから、さつきと事を済ませて自宅に帰ってしまおうと決めていたものの、この1ヶ月近い期間の中で、こんな自分と向き合ってくれる島田に若干心を開きつつあった。

彼と関わって分かったことだが、島田は、ただ、本当に、真っ直ぐにこちらと向き合ってくれる。こちらが最初、何かあったらスマスに話してくれ、と伝えたのにも関わらずだ。

(今でも島田司令のことは少し怖いけど、最初ほどじゃない)

最初、島田とは初対面の時点でなんとなく怖かった。ゼヴィンから各種話を聞いていたのもそうなのであるが、彼を本気にさせたら、こちらは提督を辞める以前の問題にな

ると、怖気ついていたのである。あんな島田を敵に回そうとするなど、ゼヴィンもなかなか度胸があると思つたほどだ。

しかし、実際に島田と関わつてみると、彼はちゃんと年相応なところはあつたし、何よりもクラクストンへの裏での謎の対応で怖さが激減した。また、彼は自分のキャラクター性というものを意識しているらしく、クラクストンに対する自分のことは表に出さないうで欲しいとこちらも言われたし、その言いつけは岸尾自身も守っている。

そして、その一件が良くも悪くも彼なりにクラクストンのことを大事にし、彼らがお互い強く想い合つていることに岸尾は気付いたので。

「司令?」

「あつ……スミス」

岸尾が考え込んでいるところへ、スミスが彼に呼びかけた。スミスは先ほどから、ずっと難しい表情をしている岸尾に対して、少し不安を抱いたのであろう。そんな彼女の感情は下がり気味の眉に出ている。

岸尾はそのことを察しつつ、スミスへと言葉を返した。

「スミス、どうした?」

「あ、いえ……島田さんの説明も終わりましたし、そろそろ船に乗らないと」

「そ、そうか……」

岸尾はスミスに言われて顔を上げ、周りを見た。他の提督やその秘書艦たちは、続々と船の中へと乗り込んで出撃の準備をしていた。

シャーリーと大原といった面々が乗り込んでいく中で、島田は岸尾とスミスに話しかけた。

「何してるんだい、ふたりとも。早く中に入ろう」

「は、はい……」

「お邪魔しまーす！」

そうして岸尾とスミスは島田に誘導されるがままに、船の中へと乗り込んだ。

相変わらず、船の運転席にはジェルジンスキーが乗っていた。この間の電車と運転といい、彼女が乗り物を運転している姿は、どこことなく様になるのがなんとも言えない。当然のように、ジェルジンスキーの提督である大原もその横にいる。

シャーリーと島田は、そんな彼らの後ろ姿を見ながら、苦笑した。

「なんか、すっかり運転手イコールジェルジンスキーさんのイメージがついちゃったね」
「まあ、実際、こういう時に頼りになるの彼女だけだしな」

と、島田は、今度は岸尾へと目を向ける。

「ところで岸尾くん。僕が話してる間、少し難しい顔してたけど……今回の出撃、何か懸

念材料でもあるのかい？」

「い、いえ……そういうわけではないです」

岸尾はその質問に首を横に振った。

「ただ、なんでわざわざ首領に突撃しないで、調査なのかな……つて。島田さんの決定にケチ付ける気はないんですけど」

「ああ、別に首領にこのまま突撃しても良かったんだけど」

岸尾の質問に、島田は苦い笑みを浮かべながら答える。

「今回、應瑞さんも出撃するんだけど、彼女、横須賀にいた頃は一度も出撃したことないらしくってね」

「そ、そうなんですか？」

岸尾の視線がシャーリーの隣にいる小柄の少女へと向けられた。

應瑞は笑みを浮かべて、頷く。

「はい。應瑞は古い船で、かつ、足が遅くて、育成に関しては後回しにされちゃったんですよ」

と、

「同じ軽巡だと、ジェルジンスキーさんやデンバーさんみたいな、改造してないのに素で優秀な人が増えてきましたよね。駆逐艦と同じように扱おうにも、應瑞の性能だと回避

も低いですから」

「で、そんな彼女を今回実戦に……ってわけでもないけど、海域に連れ回してみようってことで、まずは調査から。演習で粗方練度は上げておいたし、ちよつとやそつとじゃ被弾しないとは思うんだけど」

「なるほど、島田さんにはそういう意図があつたんですね」

岸尾は島田の説明で、感心を漏らした。

「島田さんは、周りへと意識を向けることが出来る人なんですね」

「えっ……いいいや、そんな大したことでは無いよ」

唐突に岸尾の口から出てきたこちらに対する褒め言葉に、島田は困惑しつつ、続ける。

「ただ、友人の秘書艦である以上、こつちもいつまでも放っておくことは出来ないからさ。まあ、鼻唄つてやつかな？」

「ああ……そういうことですか」

（この後に、「でも一番はクラたんだけどね……フヒツ」って言ってもおかしくないな）

そして、そろそろ島田のそういう傾向にも慣れ始めてきた自分が気持ち悪い、と思つた岸尾であつた。とはいえ、表面上はどんなに爽やかに振る舞つても、内面はああなのだと思うと、そう思ってしまうのも致し方ないというか。

何にせよ、岸尾は、そこまで慣れた相手に対して自分が今からしようとしていること

に罪悪感を抱きつつあった。

「電波が届かないから、連絡もできない……か……」

吉川は暗闇の中、スマートフォンを手にして、画面上部の電波状況を見ていた。そこにはアンテナが4本立つことがなく、「圏外」の2文字が映し出されていた。吉川は頼りの綱である外部との連絡手段も絶たれ、ため息を吐いていた。

そこへ、出入り口を確認してきたホーエルが、スマートフォンの懐中電灯を頼りにして、吉川の元へと戻ってきた。

「し、司令官、どうしましょう……中からは扉が開かないみたいです」

「ああ……ここって、元々は極秘会議とかで使われてたから……外からは、二重とか三重とかの鍵が付けられてるはずなんだよ」

(やってくれたなあ、あの銀髪腹黒男……)

吉川は自分たちがとんでもないところに閉じ込められ、どうしようもないことに、苛立ちを感じていた。

ゼヴィンたちの手によって、横須賀鎮守府の地下2階へと閉じ込められた吉川とホーエル。

ふたりが閉じ込められた先の部屋は、昔、極秘会議のためだけに使われていた広い部

屋だった。今は倉庫室として機能しており、埃かぶった段ボールや、使われていない機装などがここに置かれているが。

当然、そんな風に使われていた施設であるがゆえに、遮断性も恐ろしいほどに強く、携帯の電波はすべて繋がらない状況になるのである。そして、出入り口の近くならば電波を拾ってくれるだろうか、という甘い考えさえも打ち砕く。どこに移動しても電波の反応はない——とにかく、隙のない状態だ。

吉川はあまりにも徹底された遮断性に、頭を抱える。

「こっただけ遮断されると、災害あった時に困りそうなんだけど……そもそも、ここに人が来ることを想定してないのかな」

「そうですね、雰囲気を見ても誰かが見に来てる様子もないですし……電球や蛍光灯も取り替えられてないようで、電気も点かないんですよね」

「そんなに人の手が入らないのか、ここ……どうやって助けを求めるかなあ」と、

「さすがに一晩でも行方不明になれば、誰かが探してくれると思ってたけど、情報部署って引きこもりが多いから、まず、探してくれるかどうか……」

「引きこもりというか、自室作業の方が非常に多いですもんね。司令官もここのところは部署本部で動いてましたけど、自室作業メインなんでしょう?」

「勿論。ゼヴィンのやつが何も企んでなきや、自室作業だったはずだよ、オレだって……。しかも、情報部署に提督情報の全てのデータあるなんて思わなかったし……」

吉川は「うーん」と小さく唸った。

情報部署は主に海域の調査や、出現する艦船の調査、その他細かい艦船に関するデータを整理する場所として存在している。提督たちのデータに関してはそれほどないと思っていたのだが——根本的にそういったデータの類は、全て情報部署のサーバー内で管理しているらしく、吉川はそれを利用して、データをコピーし、抜き取ったのである。

もう少し嚴重に管理しているものかと思っていたが、案外適当な管理がなされているようで、一応情報部署のトップには吉川からその報告は入れておいた。さすがにゼヴィンみたいなのが情報部署に入ったら、今のままだと確実にとんでもないことになる。吉川以上に悪用するに違いないだろう。

ホーエルは、「困りましたねえ」と、苦笑する。

「まだ昼間な上に、これからお腹も空いてくる時間帯も控えてるんですよね。何か食べられるものは無さそうですし、水もないし……こうなると生きて帰れる時間は限られるかと」

「同じ食糧・水がない状況だとして、災害で生き残ってる確率が高い目安は72時間以内

……つまり、丸3日間ぐらいならなんとか……」

「それまでに、ここを抜け出すために画策しなければならぬ……と、いうことですよね。ここには古い装備がありますし、その中に使える主砲があれば良いんですけど」

「どうだろう……中に入ってる弾薬が湿気ってる可能性の方が高いし、弾薬も抜かれてると思うけど……」

吉川は首を傾げた。

(なんで廃棄せず、ここで保管してるんだろう。廃棄すれば資材が返ってくるんだから、やらない他ないのに……)

いろいろな装備は廃棄するのが今の主流であり、こうして保管しているのは吉川にとってはある意味不気味な光景であった。まとめて廃棄しようとして、ここに置いている可能性もあるが——装備の劣化具合からして、それは無さそうだ。

とはいえ、ホーエルが使える主砲があれば、扉を破壊して脱出することができる。装備は山になっていて、探すのが厳しそうだが、頼みの綱は今のところこれのみ。やるしかなさそうだ。

「……探すだけ、探そう」

「はっ」

こんなところで野垂れ死ぬわけにはいかない——そんな思いが、ふたりを掻き立て

た。

034：裏切りのアンダンテ

『クラクストンのことは、私に任せてください。司令は島田さんをお願いしますね』

——スミスは船から海に出る時に、岸尾へとそう言い放った。

あれから時間は経ち、一同は目的地である東南群島へと辿り着いた。そして、一緒に乗っていた艦船たちは調査のために海へと出て出撃。そして、旗艦の方は安定感があり、そんなジェルジンスキーを据えている。

岸尾は他の少年提督3人と共に、海へと出ていく彼女たちを見送りつつ、チラツと島田へと視線を送った。

（奴らが出てくると同時に、島田司令を取り抑えて、DD-571もスミスが取り抑える。DD-571はともかく、オレはいつまで取り抑えてなきやいけないんだ）

一応ゼヴィンがそれ専用の船は出すとは言いつつ切っていたものの、それまでに島田を捕捉しなければならぬのが、骨が折れそうである。ここには大阪警備府に所属している大原と、喧嘩慣れこそはしていなさそうなもの、島田よりも背丈は高く大柄なシャリーがいる。このふたりが力を合わせれば、軟弱な自分を取り押さえて島田から離すことは容易であろう。

よりもよって他の提督がいるタイミングでの計画実行とは、なんという決断をしてくれたんだと、岸尾は恨んだ。ゼヴィンに関しては恨み節しか持っていないが、今回の件で、また、それが増えてしまった。

しかし、同時に島田も簡単に取り抑えられてくれる感じではないし——誘拐するなら、クラクストンだけでも良かった可能性がある。

(一応軍刀は持ってきたけど、どうしたものかな……)

一方、スミスはジェルジンスキー、クラクストン、應瑞と共に海に出てから、敵がいるかどうか、もしくは変なものが海の上に浮上していないか、いろいろと確認していた。

「調査」と言っても、確認することはたくさんある。敵の様子や居場所を探るのもそうだが、変わったことや、不審物、その他迷子になってしまった別鎮守府所属の戦艦少女の保護など——敵と戦うことがメインでないからこそできることを、ここでしてしまおう、というのが一番の狙いだ。敵と接触しても、索敵して編成を確認できるのなら、すぐに撤退しても問題はない。

これから起こることが分かっているスミスは、キョロキョロと周りを見渡しながら、ゼヴィンサイドに、まだまだ動きがないことを確認した。

(アイツら、一体いつ来るんでしょう……日が高いうちに来るとは言っていましたけど)

スミスは溜息を吐いて、ジェルジンスキーが率いるままに水上を駆け巡っていく。そんな彼女の様子を横から見ていたクラクストンは、優しく笑みを浮かべながら話しかける。

「スミスさん、どうかなさいましたか？ さつきから浮かない顔してますけど……」
「く、クラクストン」

スミスはクラクストンから話しかけられたためか、思わず肩を跳ね上げて、ビツクリしてしまった。スミスはなんとか笑みを作って、言葉が続ける。

「あはは……だ、大丈夫ですよ。最近、司令が素っ気ないかなーなんて思ったりしますけど、戦闘に支障はない程度ですから！」

（素っ気ないどころかベツタリですけどー！）

なんて、普段の日常生活とは正反対なことを言っている自分に突っ込みを入れた。

「……スミスさん」

そして、そんなスミスを見ていたクラクストンは、笑みから一転、心配そうに眉を下げて、こちらへと言った。

「言い辛いことではあるんですけど……岸尾さんの身に、何があつたんですか？」

「えっ？」

「あ、いえ……その、ちょっとあの人の言動で気になることがあります」

頭の上で疑問符を浮かべているスミスに対して、クラクストンは首を横に振り、「この間、司令官様が仰ってたんです。岸尾さんが、この世界の誓約システムを嫌っている」と

「あ、ああ……そ、そうなんですよ。あの人、誓約システムが嫌いなんです」

（ああ、もう……さすがにそれを表に出すのはダメですって、司令）

スミスは表面上は笑みを浮かべて、彼の理解者のように振る舞ってみるも、内心では「やらかしたな」という気持ちでいっぱいだった。余計な詮索をされたくなければ、いつも通り振る舞っていれば問題ないのに、と。

クラクストンはスミスの言葉聞いて、「そうなんですな」と、頷いた。

「司令官様、岸尾さんと距離が縮まったのはいいことだと思ってるようなんですけど、その一件だけが、どうも引つかかかってるみたいで……そっちの都合さえ良ければ、なんでそういう考え方になったのか、一度聞いてみたいと思ってます」

「そ、そう、です、か……」

スミスは思わず顔を俯けた。

（確かに軽い経緯は言っても良いとは思……でも、それでも司令がゼヴィンさんと腹違いの兄弟であることがバレちゃうし、言えないんだよね）

もつとも、そんなことは、これから起こることがある以上、気にしても無駄ではある

が——スミスとしては、それが島田にバレて欲しくない気持ちでいっぱいだった。

ただ、クラクストンならば、ある程度事情を受け入れてくれるだろうし、こちらが頼めば島田には話すことはないだろう。

(……いや、もうそんな心配しなくて良いんだ)

スミスは首を横に振り、余計な心配を振り払った。

(……そろそろ、来るかな)

スミスがそうして顔を上げた途端——艦載機の音が、2つほど重なって聞こえてきた。艦載機自体は戦闘機で、制空権確保のもののためか、こちらへと爆撃する気配はない。

それに真つ先に気付いたのは、スミス以外にジェルジンスキーであった。ジェルジンスキーは顔を上げた。

「！ みんな、敵艦隊が来てるみたいよ！」

「敵艦隊が!？」

「て、撤退するんですか？」

「島田たちに判断を委ねましょうか」

と、ジェルジンスキーが提督サイドへと連絡を入れようと、インカムのスイッチを入れた途端、

「その判断、必要ありませんよ」

と、スマスが言い放った。

ジェルジンスキーはその言葉に、首を傾げた。

途端、

「そ、それ、どういう……」

「Ciao、舞鶴鎮守府の皆さん。相変わらず元気そうで安心したよ」

——嫌でも聞き覚えのある声が、こちらの耳の中へと入ってきた。

そうして、海の上を歩いて、一堂の目の前に現れたのは——アルベルト・デイ・ジュツサーノだった。

ジェルジンスキーは彼女の姿を見るなり、自分の後ろにいる駆逐艦ふたりと應瑞を庇うように、横に腕を伸ばした。

「アルベルト・デイ・ジュツサーノ……！ またあなたなのね！」

「ジェルジンスキー。私も結構警戒されたもんだねー。ま、今回はN級ふたり連れてきたからね、仕方ないかあ」

ジュツサーノにそう言われて、ジェルジンスキーたちはジュツサーノの後ろにいる、黄金のオーラを纏った深海軍へと目を向けた。

——そこにはジュツサーノの言う通り、深海軍の航空母艦であるN級がふたり、水上

に立っていた。黄金のオーラを纏っている、ということとは、少なくともII型以上であることは確定であろう。

ジェルジンスキーは第3海域とは思えない敵の出現に、歯を強く噛み締めた。

「今度こそ、私たちを……いえ、クラクストンを潰そうって魂胆のつもり？」

「うん、潰そうとは思ったけどねー。スミス」

「……はい」

ジュツサーノに呼ばれたスミスは、顔を俯けて、コク、と首を縦に振って頷いた。すると、早速、クラクストンの背後へと回った。

ジュツサーノはそんなスミスを見て、クスクスと笑みを浮かべた。

「スミス、『作戦』通りをお願いね」

「……分かってます」

ジュツサーノとスミスのやりとりを見たジェルジンスキー、應瑞、クラクストンの3人は困惑を隠せないらしく、激しく動揺していた。

スミスの一番側にいるクラクストンが、自分の背後に立っている彼女へと言葉を向けた。

「あの……スミスさん。これは、なんの冗談で——!?!」

スミスはいつも持っている旗の旗棒を、クラクストンの首元まで持っていく、少しで

も間違えれば首を絞めかねない体制へと移った。スミスは長い旗棒を両手でしつかりと掴み、そこからクラクストーンが逃げないように、クラクストンの首に当たるか当たらないかの距離を保った。

スミスは続ける。

「……ごめんなさい、クラクストーン。私と司令は——あなたたちの仲間じゃないんです」
「お、おい……ちよつと待て。どういうことだ。ジュツサーノの命令をスミスが聞いてるって……」

——一連の流れを見て、インカム越しに聞いていた島田は、目を丸くして、ただ、ひたすらに、動揺していた。シャーリーと大原も同じく、その光景にとにかく呆然としている。

島田はいつも通り冷静に状況を判断しようにも、突然の裏切りに信じられない、と言った様子で、隣にいた岸尾に話しかけた。

「あ、あのさ、岸尾くん……君は……違う、よね？」

（1ヶ月だけとはいえ、彼とは親交を深めたつもりなんだ。違うって言って欲しいよ）
島田はドクンドクンと心臓を鳴らしながら、岸尾の返答を待った。

岸尾は島田と向き直り、何か言うのかと思いきや——左腰に帯刀していた軍刀を鞘ご

と手にして、そのまま島田の首元へと一直線に、突き出した。

「ッー」

島田は即座に両手で刀を受け止めて、こちらの首へと来ないように力を入れて侵入を抑えた。ふるふるとお互いに震えて、力が拮抗しているのが分かる。

岸尾は思った以上に俊敏である島田の動きに、感心した。

「……白刃取りするぐらいには慣れてるのか、島田司令」

「ッ……従弟が琉球古武術習っててね。遊びで練習に付き合ってたから、慣れてるんだッ……」

島田は白刃取りを続けながら、言う。

「岸尾くん……君は、なんで、こんなことを……!」

「……オレとスミスはゼヴィンに言われて、舞鶴に来た」

岸尾は軍刀を無理やり引っ張り、島田の白羽取りから解放させた。

島田は体勢を一瞬だけグラツと崩すも、すぐに立て直して、岸尾を見た。

「ゼヴィンに……って、本当にアイツの仲間……なのか?」

「ああ」

岸尾はその事実を否定せず、頷いた。

「アイツには、前から本当に色んな意味で世話になってたようだな。だから、オレはアイ

ツに従ってる」

「……そう、か」

島田はジリッ、と足を後ろに動かし、言う。

「だとしたら、僕が君と仲良くしようとしていたのは滑稽に見えていただろうなあ。敵相手に打ち解けようとしている姿、面白かったんじゃないかい？」

「……誰とも仲良くしようとしないうちに、仲良くしようとしてけしかけてくるのは凄いと
思っていた」

岸尾は軍刀を下ろし、両腕で刀の柄を握り直した。

「オレなら、絶対そんな奴に話しかけない。拒否されるのも嫌だし、関わりたくないから。でも、島田司令はそうじゃなかったんだな」

「その程度で怖気つくほど、こっちは甘くないんだよ」

島田は岸尾の言葉にそう答えると、たまたま近くにあつた釣竿を手にした。出撃中に暇な倉竹が釣りをしているのだろうなあ、なんて余計なことを思いつつ、それをギョツと握り締めた。

「まあ、君はそんな長居はしないと聞いていたから、適度な距離で接しようとは思って
たさ。スミスが代わりに話を聞いてくれるなら、それに甘えるべきだつてね」

と、

「でも、僕としては君と仲良くするメリットはあったと思う。提督として佐世保で一年働いてた君と仲良くすれば、相応の見返りがあると思つてたからな。結果的に、こういうオチがついてしまったわけだけど」

そう言うのと、島田は釣竿の先を岸尾に向けた。

「で、岸尾くんたちとしては、僕とクラクストンをどうするつもりだい。鞘から刀を抜いてないつてことは、殺しはしないんだろう？」

「オレとスミスは島田司令とDD—571を横須賀まで連れて行く。その後、あなたにはゼヴィンの玩具になってもらう」

「へえ、ここで降参すれば無料で横須賀まで連れて行ってもらえるのか。でも、アイツの玩具になるのは嫌だから、足掻こうかな」

「……」

岸尾は余計なことは言うべきではなかった、と、額に汗を流した。確かに経緯はどうあれ、今の島田にとって、横須賀行き自体はかなり魅力的だろう。敵の本拠地に忍び込めるのだから、その条件だけなら絶対に付いていく。島田はそんな男だ。

そして、島田はインカム越しにクラクストンへと言う。

「クラクストン、聞こえるかい」

『し、司令官様……』

「話は聞いてたと思うけど、こっちもかなりゴタゴタしそうだ。そっちどうだ？」
『ジェルジンスキーさんが守ってくれるって……』

「……分かった。僕はなんとか足掻いてみせるよ」

と、島田は微笑みながら顔を上げて、岸尾を見た。

岸尾は軍刀を構え直し、島田をジッと見据えていた。

035：ただでは引かない

「お話は終わりましたか、クラクストーン」

スミスのそんな声が、クラクストンの後ろから、静かにはつきりと響いた。クラクストーンは自分の首元を、スミスの旗棒で抑えられ頭の可動範囲が狭まっている中で、コク、と首を小さく縦に振って頷いた。向こうを刺激しないように、自分の口からは何も言わないままだった。

スミスは彼女のそんな頷きを見て、納得したようにこちらも頷き返した。そして、いつもの明るいスミスはどこか消え去ったと言わんばかりの低い声で、クラクストーンに言った。

「……裏切り者だって、言わないんですか？ あなたも、島田さんも」

「！」

クラクストーンはスミスの口から飛び出た言葉に、思わず目を丸くした。

スミスはギュツと旗棒を握る力を強めた。

「ずっと味方だと思って仲良くしてきたのに、シヨックじゃないんですか？ ここでたくさん糾弾されて、責められてもおかしくないですよ、私たち」

「糾弾なんてはしたくない真似——私も司令官様もする気はありません」

クラクストンはスミスの言葉に向かって首を横に振ると、はつきりと言葉にしてそう返した。

「無論、シヨックなのは私も司令官様も同じですよ。司令官様だつて岸尾さんが自分の敵であることを、受け入れられる体制は整つてないと思うんです」

「じ、じゃあ……」

「ただ、それは私たちが今すべきことではない。私たちが今すべきことは、目の前を乗り越えることだけなんです」

と、

「あなたたちへの追求は、事が終わった後でも問題ない。でも、目の前にあなたたちが立ちただかる以上、相手する以外の手はない。それに、スパイとはいえ、今までは仲良くやってきた『仲間』なんですから、私たちが、あなたたちの相手をする権利がある。司令官様もそう思つていらつしやるはずですよ」

「……そうですか」

(思った以上に……似たもの同士だ、この人たち)

スミスは、自分が思った以上に、クラクストンの迷いのない言葉に、思わず手の力が抜けそうになった。

凜々しくクールに振る舞う島田と違って、普段からふんわりとしていて、穏やかなクラクストン。物事をはつきりと言う島田によくついて行けるな、なんて、心の底で思っていたのだが——クラクストンのこの迷いの無い言葉で、すべて納得してしまった。

彼女がのんびりふわふわとしているのは、あくまでも態度だけであり、きつとその芯は恐ろしく強い。芯が強いからこそ、島田についていくのだろうし、島田もまた、自分の芯の強さで彼女の愛情に応える。故に、岸尾がこのふたりを死別させるようなことはしたくない、というのがとても分かってしまう。ミスもふたりのことは引き離したくないと思っていた。それは、島田からクラクストンへの愛情が他の提督よりも強いものだからこそ、と思っていたが——彼のクラクストンへの愛情は、クラクストンから島田への強い愛情に比べているだけに過ぎない。というより、今の島田にとって、それが一番彼女へと示しやすい愛情表現なのだ。

クラクストンという戦艦少女は個体差はあるものの、根本的に自分の提督への愛情が強く、提督のために生きているような——そんな錯覚をさせてくる個体が大半だ。ミスもそんなクラクストンの個体は嫌というほど見てきたし、そんなクラクストンたちがあしらわれていく様子もたくさん見てきた。大半の提督たちは、「重い」と拒否して、できるだけ距離を取って接しているのである。

でも、島田はクラクストンの愛情表現に対して照れは見せて拒否はすれど、愛情表現

そのものに文句を言ったことは一度もない。大体場を弁えるだの、人がいるからもう少し控えてくれだの、とりあえずそんな感じの拒否が大半だ。

そして、スミスはこんなに満たされているクラクストンの個体を、今まで一度も見たことはなかった。提督が愛情を注げば注ぐほど戦艦少女は強くなるとは言われているが、本当に彼女はそれが如実に分かりやすく見えている。

(そして、ゼヴィンさんは本当にこの人たちを潰すつもりでいる。クラクストンさん含めて島田さんが脅威になりかねないから、って理由だけど……少なくとも、このふたりを敵に回したくなかった)

スミスは顔を上げて、ジュツサーノとジェルジンスキーが対峙している場面へと目を向けた。

ジェルジンスキーは海上で仁王立ちしながら、ジュツサーノを睨み付けていた。ジュツサーノは相変わらずなジェルジンスキーに対し、嘲笑いを含んだ笑みを浮かべていた。

ジェルジンスキーは、そんな彼女の態度が相変わらず鼻につくと思いつつ、言い放った。

「アルベルト・デイ・ジュツサーノ。多分2ヶ月近くぶりだと思うけど、相変わらず下衆な提督に従っているのかしら？」

「他人の提督をそんな風に悪く言うなんて、あなたも口が過ぎるね、ジェルジンスキー。でもそうだね、相変わらずアンミラーリオには従ってるよ」と、

「で、騎士さん……いや、デンバーは元気にしてるのかな？ あなたたちのところで預かってるんでしょう、あの娘」

「ええ、デンバーは元気にしてるわよ。あの時ポロポロだったの、あなたがやったのよね？」

「むしろ、私以外、誰がやると思う？」

「……外道ね」

ジェルジンスキーはそうぼそつと呟くと、続けた。

「あなたねえ、そろそろ大概にしなさいよ。提督が下衆なのは仕方ないけど、肝心の戦艦少女まで根っから下衆とか救いようが無さすぎるわよ」

と、

「まあ、あなたの性格が悪いのは百歩譲っていいわよ。戦艦少女みんながみんな、聖人とは思ってないし。でも、下衆な提督に自ら望んで従うなんて、もう底いようがない。事が解決したら、あなたの首は物理的に飛ぶわよ、絶対」

「そうならないために、クラクストンと島田を潰すっていう計画なんだよねー。こい

つらささえいなくなれば、アンミラーリオも自分の思い通りに周りを扇動して、行動できる。そうしたら、次の提督の頂点はアンミラーリオ」

「島田とクラクストンがいなくなっても、私たちがいるのに、なんでふたりだけなのよ」
「だって、そつちの提督たち、島田がいなきや、アンミラーリオに齒向かうことすらできないでしょ？」

「！」

「……！」

ジェルジンスキーと、遠目で眺めていた應瑞が動揺した。

「大原は腕っ節は強いけど、兵学校時代はアンミラーリオに何もかも負けてばっかだったし、シャーリーはそもそも強く出れる性格じゃない。一見正義感が強そうに見えて、実際は行動に移すこともできず、遠くから指を唾えて見てるだけしかできないんだよね」

「つ……」

ジェルジンスキーは、ギユツと拳を握り締めた。自分の提督を貶められたという事実と同時に、心当たりがある己の提督の性格を否定する事ができず、悔しかった。

ジュツサーノは笑う。

「つ、ま、り。アンミラーリオは、そんな雑魚を相手になんてしないんだよ。そして、あ

なたたちは提督の命令がない以上、私たちに攻撃することはできない」

けれども、と、ジュツサーノはクラクストンを睨み付ける。

「……命令がなくても、私たちが攻撃するぐらいには意思がある戦艦少女もここにいます。まあ、今はスミスに拘束されてるけどね」

そして、クラクストンとジュツサーノの間に不穏な空気が流れる。

クラクストンはジュツサーノにそう言われても、特に口で乗る様子はない。ただ、黙って、ジュツサーノをキツと睨み付き返していた。ジュツサーノの性格上、こちらが何を言っても馬鹿にしてくるだけなのは、穏やかな彼女でも分かっているのだろう。

しかし、そんなクラクストンの態度が、ジュツサーノの中の何かを刺激しているようだ。ジュツサーノは、「チツ」と軽く舌打ちをすると、自分の後ろにいたN級2体へと視線を向けた。そして、インカムを用意しながら、その苛立ちを表にする。

(つ……こっちは煽ったつもりなのに、つまらない娘。本当、自分の提督のことにならないかと暴走しないんだね)

この間の地下鉄にてクラクストンから発射された魚雷2発——ジュツサーノにとつて、あれはかなりの衝撃的だった。

穏やかでおっとりしていそうに見えて、島田に対する感情が本物なことを、あの一件で周りに知らしめたのである。ジュツサーノとしては、あれだけの激しい熱情を持つて

いる駆逐艦には今まで出会ったことがなく、彼女の中に潜む激情にびつくりすると同時に、ワクワクしてしまおう自分がいた。

(あの時ぐらい歯向かってくれれば、こっちも楽しいんだけどな)

ジュツサーノはインカムを左耳に取り付け、ゼヴィンへと繋いだ。

「アンミラーリオ、スミスがクラクストンを捕捉したよ。アンミラーリオはいつこっちに来るの?」

『お疲れ様、ジュツサーノ。ああ、迎の船は深海軍の人たちがこっそり出してるから、そっちに乗って。ボクが行ったら島田くんとすぐ喧嘩になるだろうし、大変だからね。で、船の方はちよつと前に出たと思うけど……そっちに辿り着くまでには、もう少し時間かかるかな?』

「うん、そう……ありがとう。それまでに、他の奴らぶつ潰して良いよね?」

『もちろん』

ゼヴィンは淀みのない声で答える。

『作戦失敗のリスクは確実に減らすべきだからね。クラクストンはこれからあるから、できれば傷一つつけない方がいいかな』

「ありがとう、アンミラーリオ。じゃあ……とつとと、やっちゃうね」

ジュツサーノはゼヴィンのその返答に、ニヤツと笑みを浮かべると、N級ふたりへと

目を向ける。

航空戦艦——普通の戦艦や巡洋戦艦とは違い、甲板を持ち、艦載機が載せられるようになった艦種である。艦載機を乗せれば、開幕爆撃の時に参加しつつ、しっかりと主砲を積めば砲撃戦の時に強い火力を発揮してくれる。しかし、そうでなくても、深海軍の火力にはとてつもない可能性がある。

ジュツサーノはジェルジンスキーとその遠方にいる應瑞へと目線を据えた。

「軽巡おふたりさんには、ここで軽く散ってもらおうかな？ こっちの計画的にちよつと邪魔すぎるんだよね、あなたたち」

と、警戒しているジェルジンスキーと應瑞の前に、ジュツサーノは別に提案する。

「まあ、ここでクラクストンと島田を黙ってこっちに引き渡してくれるってなら、あなたたちに何もする気はないけど」

「……なにそれ、取引ってこと？」

ジェルジンスキーはジュツサーノを睨み付けた。

ジュツサーノはジェルジンスキーの質問に、「うん」と笑みを浮かべて頷いた。

「まあ、一方的にN級たちにやられる戦艦少女なんて、あなたたちの提督にとつちやシヨツキングだろうし、見たくないものじゃない？ だから、シヨツキングから遠ざけるために譲歩してあげようかなあつて思ってるわけ」

「何を……！」

ジェルジンスキーが言い返そうとした途端、

『おう、ジェルジンスキー！ 聞こえつかあ！』

「……ど、同士！」

大原の声が、インカムからジェルジンスキーの耳へと飛び込んできたのである。大原はジェルジンスキーに連絡が届いているのが分かると、言葉を続ける。

『今の話聞いてたけど、フレッチャー級のお嬢さんが了承しても、島田がダメだから乗ってやんなよ！ 岸尾とあれこれ言い合ってるけど、『ゼヴィンの玩具にはなりたくない』って言ってたからな！』

「……！」

（案の定ね……）

ジェルジンスキーは相変わらずの島田のその言葉に安心を覚えつつ、クラクストンへと目を向けた。

そのまま数秒ぐらいジツと見つめていると、クラクストンはこちらの視線に気付いたらしく、その青い垂れ目の瞳で見つめ返してきた。

そして——首を横に振る。

ジェルジンスキーは、クラクストンのその首の横振りを、彼女としても、黙って向こ

う側に連れ去られるつもりはないという意味として受け取った。

ジェルジンスキーは島田、クラクストンの両者とも黙っていられるわけでないことを確認すれば、ニツと笑みを浮かべて、ジュツサーノへと向き直した。

「って感じに、やっぱり本人たちもダメみたいね。申し訳ないけど、本人たちの同意なしに、取引を進めることはできないわ」

「……まあ、知ってたから良いよ。ただで諦めない性質なのは、いやってほど分かってたから。じゃあ、N級たち、思いつきりやつちやつて」

ジュツサーノはジェルジンスキーの言葉は想定内だと言わんばかりに流すと、今度はその人差し指をジェルジンスキーへと向けて、N級ふたりに攻撃指示をした。

N級たちが主砲の銃口が、こちらを睨み付けてくるジェルジンスキーと應瑞へ向けられると同時に、スミスの甲高い声も響いた。

「つうあ!?!」

036：声も出さず求める助け

スミスのその甲高い声がジェルジンズスキーたちの意識をそちらへと向けさせるのに、その時間は掛からなかった。ジェルジンズスキーたち軽巡洋艦組は、スミスのその声に反応して、即座にそちらへと視線を送った。

ジェルジンズスキーたちはスミスを見るなり、その光景に対して目を丸くした。

スミスがクラクストンを抑えるために使っていた旗棒が——ぼつきりと折れていたのである。

折れたところからはシユウ、と、白い煙が空へと昇り、外因的なものでこうなった、ということが一目で分かった。

しかし、ジェルジンズスキーたちが驚いているポイントはそこではないのである。

その折れた部分の下にあるのは、小型主砲の銃口。旗棒を突き上げる形で、クラクストンは縦に主砲を持っていたのだ。

つまり、主砲を手にしていたクラクストンが、スミスの旗棒を折るために、下から砲弾を放った——そういう風を受け取ることができる。その証拠に、その小型主砲の銃口からは、砲弾を放った後に見られる煙が細く出ていた。クラクストンがスミスの旗棒を

主砲で折ったのは、ほぼ間違いないと見て良いだろう。

スミスは折れた旗棒をクラクストンの首元から離して、額の上に脂汗を浮かべ、目の前の彼女を見た。

クラクストンは旗棒がこちらの首元から離れると、そのまま一步前へ出て、スミスから距離を置く。そして、向こうへと振り返り、自分の前にいる桃色の髪の毛の少女を見据えた。睨み付けてくるだとか、そういう敵意はその青い瞳からは見えてこない。ただ——どことなく、失望したような雰囲気は、彼女から伝わってくる全てだった。

クラクストンは背に風を受けながら、スミスへと言い放った。

「スミスさん。いえ、岸尾さんもですか。残念ですね。この一ヶ月近く、同じ鎮守府で私たちと一緒に動いていたのに、こんな結果になってしまふなんて」

「残念なら……どうするつもりですか」

スミスは折れた旗棒をギユツと握り締めた。

「このまま、こちらを『処分』するつもりですか？」

「さつきも言った通り、裏切り者だとか言って糾弾するつもりは微塵もありません」

と、クラクストンは遠回しにそんなことするつもりはないことだけを告げ、

「スミスさん。あなたが私を捕らえるつもりなら、捕らえれば良い。私も司令官様も——このまま黙って捕まるわけにはいきません」

「クラクス、トン……」

スミスは赤い瞳を丸くして、クラクストンを見た。

彼女をここまでさせるのは、フレッチャー級としての誇りや、リトル・ビービーズの一員としての誇りでもない。ただ、「島田と共にある」という強い感情だけだ。島田が戦っているのなら、自分も何もしないわけ行かない——その気持ちだが、彼女を突き動かしている。

スミスが動揺して気持ちを整理しきる前に、ジュツサーノがスミスへ強く言い放った。

「スミス、何とかしなよ！」

「……じ、ジュツサーノ、さん……」

強いジュツサーノの声に体を跳ね上げて、スミスは彼女へと視線を送った。ジュツサーノは役立たずとも言いたいばかりの視線を、スミスへと送った。

「あのさあ、元からクラクストンや島田を騙すつもりでここに来たんでしょ？ くだらない友情ごっこに心突き動かされる前にさあ……やること、あるでしょ？」

「……ッ、分かって、ます」

スミスは自分の艦装に三つ飾られている四連装魚雷のうち、ひとつを取り出した。

ジェルジンスキーは、それが何を意味するのか瞬時に悟り、口先で止めに入る。

「スミス！ あなた、本気!? 今ならまだ間に合う、岸尾と一緒に——」

「邪魔すんじゃないよ、ジェルジンスキー！」

ジュツサーノがそう言い放つと同時に、低い轟音と共にジェルジンスキーに向かって砲弾が放たれた。ジェルジンスキーは炎に包まれたその砲弾から素早く回避して、自分の身が炎に包まれるのを免れた。

その砲弾はジェルジンスキーに当たらなければ、海の中へと落ちていき、その威力を失っていく。

ジェルジンスキーはその砲弾がN級から放たれたものと分かると、その命令したジュツサーノへと睨み付けた。

「ジュツサーノ……あなた……！」

「……本当、ウザい」

ジュツサーノはジェルジンスキーにそう言い捨ててから、自分の後ろにいるN級ふたりへと目を向ける。

「ジェルジンスキーの相手はスミスじゃなくて……ふたりのN級だよ」

と、

「それに、説得したって無駄だよ。だって、スミスだけじゃ、アンミラーリオに逆らうことはできない。岸尾の意思がなければ、無理。まあ、あの根暗男に、アンミラーリオに

逆らう気概があるとは思えないんだけどね」

「……」

スミスはただ黙って、ジュツサーノの言うことを受け止めていた。

ゼヴィンが岸尾のあの事実を握り締めている以上、岸尾には何もできない。そして、岸尾が行動を起こすことができなければ、スミスも何もすることはできない。

ジュツサーノは続ける。

「スミス。クラクストンたちを傷付けるなどは言われたけど、魚雷ぶつ放すぐらいならやっちゃっていいよ。反抗するのは分かりきってたことだしね」

「ジュツサーノ……！　あなた、あのスミスを見て何も思わないの!?　今の彼女の状況でクラクストンに攻撃なんて無理よ！」

「ジェルジンスキー……あなたは、黙ってて！」

ジュツサーノは痺れを切らせて、ジェルジンスキーを指差すと、再びN級に向けて指示を出した。Nの主砲がすべてジェルジンスキーへと向けられて、逃げ道はないと言わんばかりに、ジェルジンスキーの周りに向かって砲弾へと放ち始めた。

「……っ！」

「ジェルジンスキーさん！」

應瑞が身動きが取れないジェルジンスキーを助けようとして、彼女の元へ近付こうと

しても、砲撃が邪魔をして、近寄ることができない。それどころか、應瑞の存在を察知したN級たちの主砲がそんな應瑞を巻き込もうと、砲撃の範囲を広め始めた。

「っ、きやつ!」

「應、瑞……!」

ジェルジンスキーは彼女だけでも守ろうと、砲撃が降り注ぐ中で應瑞へと手を差し伸べて、こちらへと来るように促した。

しかし、その矢先で、ジェルジンスキーの艦装にN級からの砲弾が、一個、当たった。

「っう!」

「じ、ジェルジンスキーさん!」

ジェルジンスキーの艦装には穴が空き、灰色の煙がもくもくとそこから立ち込めて、彼女の周りを覆った。

應瑞がやつとジェルジンスキーの元へと駆け寄れたところで、N級ふたりからの砲撃はさらに苛烈になる。

「っ!」

應瑞は艦装にダメージを受けてバランスを崩しているジェルジンスキーを片手で支えつつ、こちらの間近にやってくる砲弾をなんとか避けていく。

自分を支えて避け辛い中で、必死に水上を駆け巡る應瑞の顔を見て、申し訳なさそう

に呟いた。

「ごめんなさい、應瑞。そんな大した傷でもないのに」

「そんなこと言わないでください」

と、應瑞は首を横に振り、

「應瑞にできることはこのぐらいですから。とりあえず今は、なんとか逃げ切らないと」

「ええ、そうね」

ジェルジンスキーは應瑞のその言葉に、コク、と頷いてみせるものの、魚雷一本ぐらい、なんとか向こうのN級たちに当てられないかと画策していた。ジェルジンスキーの魚雷は艀装には装填されておらず、腰につけている白いバッグの中に2セット分、隠されている。他に比べて小型ではあるものの、戦後の軽巡洋艦に装填されている魚雷だ、基本性能自体は相応にある。

ジェルジンスキーは今自分が考えていることを、應瑞に振った。

「ねえ、應瑞。昼戦のうちにN級たちに魚雷ぶつ放したとして、どのぐらいダメージ与えられると思う？」

「魚雷、ですか」

應瑞はジェルジンスキーの質問に、うーんと首を傾げる。

「應瑞の魚雷では、そんなに大打撃を喰らわせることはできないでしょうけど……ジェ

ルジンスキーさんの魚雷なら、結構ダメージは与えられる気はします」

「そう、よね……」

ジェルジンスキーは頷き、

「私ね、奴らに魚雷をぶつ放してやろうと思ってるの。避け続けるよりも一度でも反撃したいと思ってる」

と、

「應瑞も一緒に魚雷ぶつ放してくれる？ 力不足とかじゃなくて、数が欲しいの」

「……ええ、分かりました」

應瑞は笑みを浮かべて、コク、と頷いた。

「ジェルジンスキーさんが應瑞を必要とするなら、断りません」

「……よしー」

ジェルジンスキーは應瑞の答えを聞いて、ニツと笑みを浮かべると、そのまま両腰につけている腰バッグを開き、五連装魚雷をふたつ、取り出した。應瑞も左太ももに装填していた三連装魚雷を取り出し、砲弾を避けながら、ジェルジンスキーと共にN級へと魚雷を放つタイミングを見計らっていた。

まだ、まだだ、砲撃で魚雷の道が塞がれている。もつと、もつと、大きな隙が見えなければ――。

應瑞とジェルジンスキーがそう思つて、一本足を踏み入れた瞬間、魚雷の道筋が見えた。

——ここからなら、確実に奴らへと届く！

「應瑞ッ！」

「はい！」

ジェルジンスキーの掛け声と共にふたりの手に持っていた魚雷がすべて水の上へと浮かび、N級へと向かつて走り始めた。

ジュツサーノはこちらへ魚雷が放たれたのを確認すると、N級へ命令した。

「N級！ ボサつとしてないで避けて！」

(とはいえ避けられなくてもN級の装甲なら、まだこの程度……！)

ジュツサーノが命令した通りに、N級が魚雷を避けようと動き始める。

しかし、それ以上に魚雷の動きが早く、N級たちはこのまま避けても当たると思つたらしく、すぐにジェルジンスキーたちを攻撃する体制へと入った。自分たちに魚雷を放つて油断しているところへ——砲弾を喰らわせる。

N級ふたりの主砲すべてが、再びジェルジンスキーたちへと向けられ、狙いを定めた。

そして、魚雷が自分たちへと当たる数秒前になつたところで、その主砲の銃口全てを使って、ジェルジンスキーと應瑞へ攻撃を仕掛けた。

「ッー」

「！」

應瑞とジェルジンスキーはそこから逃げようとしたが、どうしても数秒のところ間で合うことができず、そのまま直撃することになった。

また、それと同時に、N級たちにも魚雷が直撃して、激しく光を放ちながら勢いよく爆発した。

「！」

凄まじい爆発ふたつに、クラクストンとスミスが反応した。

クラクストンは深海軍の攻撃からならば大丈夫だろうと動揺を抑えつつ、一方でスミスはそれを見て、激しく動揺を見せていた。

スミスはジェルジンスキーと應瑞がN級の砲弾でやられてしまったこととよりも、ここに至るまでを自分と岸尾が導いてしまったことに対する動揺が強かった。何もかも、自分たちが、ここまで導いた結果——スミスは手にしていた魚雷を思わず水面へと落とすしてしまった。

(ジェルジンスキーさんと應瑞さんが……)

——分かっていたはずなのに、どうしてここまで動揺してしまうのか。

その様子を見ていたクラクストンは、スミスの方へと歩み寄り、彼女の両方を自分の手がかつしりと掴んだ。

「スミスさん。やっぱり、あなたはジュツサーノさんに、いえ、ゼヴィンさんに従えるような性格はしてません」

「クラクストン……」

「こうなったら、岸尾さんの意思はスルーしたって良いんですよ。あなたの意思で、道を決めても良いんですよ」

「……無理。無理ですよ」

スミスが首を横に振ると、その赤い瞳に水分が溜まり始めていた。クラクストンは首を傾げて、問う。

「無理……って、どういうことですか、スミスさん」

「し、司令には私がいなきやダメだし、それに……」

「それに？」

「司令のお母さんに……全部、バレちゃうんです……。ゼヴィンさんと司令が異母兄弟なこととか、全部ッ……」

「！」

（異母、兄弟……!?!）

クラクストンはその単語を聞いて、一瞬時間が止まった。

異母兄弟——つまり、ゼヴィンと岸尾が父親を共にしつつ、母親が違う兄弟ということだ。これが正式な手続きで異母兄弟であるならまだいいが、スミスの口振りからしてそうでないことはすぐ分かった。

(岸尾さんがこの間、司令官様に誓約について突っ掛かってたつて聞いていたけど……もしかして、そういうことなの!?)

——クラクストンの中で、点と点がすべて繋がった。

岸尾の母親がどういった人物なのかはこちらは知らないが、これが事実であれば、岸尾が誓約を重く受け止め、誓約にシステムを嫌っていることに納得がつく。

しかし、これを聞いただけではまだ分からないことも多い。

それに——スミスの説明からして、スミスと岸尾はゼヴィンに脅されていることも分かった。

このことを島田に伝えれば、彼もなんとか打開策を考えてくれるに違いないと、クラクストンは確信していた。しかし、こんな状況下で、それもできるわけがなかった。

(司令官様……！ 今すぐにでも、このことを伝えられればいいのに……！)

037 : too late

——横須賀鎮守府。

ゼヴィンはいつも通り自室にて、ひとりで執務に励んでいる——ように見せかけて、スマートフォンで外部と連絡を取っていた。その連絡先は、先程島田たちがいる海域へと出向させた、深海軍の船である。

ゼヴィンは深海軍同士でしか伝わらないであろう不可解な言語を聞き取りながら、どこまで船が到達しているのか確認していた。世界地図を地図を机の上で広げて、横須賀鎮守府から東南群島の間のどの辺りにいるのか、ボールペンでメモしていた。

「ああ……そこまで行っているんだね。じゃあ、あとは頃合いを見て、うん……次の連絡待ってるよ」

ゼヴィンは彼女らと連絡を取り終わると、ピツと電話を切つて、目の前に広がっている地図を眺めた。

丸い紫色の瞳で東南群島周辺を指すと、クスツと小さく笑みを浮かべた。

（島田くん……今、君は岸尾兄さんと言いついてそうだね）

ゼヴィンは、彼らがいるであろう海域を、右手の人差し指でなぞった。

（君みたいな奴がいるの、本当嫌なんだよねえ。本当、ボクの立場なくなっちゃうよ）

しかし、ゼヴィンはそこで口角を上げる。

（……まあ、この後で君のことは消すつもりだけどね。物理的に）

「くっそ、岸尾のヤツめ……オレの目の前で島田に手を出そうなんざ、100億年早いわ
！」

「あつ、お、大原くん……！」

岸尾が軍刀を鞘付きとはいえ、島田に向けた場面を目の絵にして、案の定、大原が黙つていられるはずもなく、すぐに島田のところまでズカズカと歩き出した。シャーリーはそんな大原を止めに入ろうとするものの、彼の覇気に圧されて、どうしても控えめな止めになつてしまう。

しかし、そんな大原の覇気に臆さず、コントロールできるのが島田だった。島田は釣竿を手にも、こちらまでやってきた大原に、すぐに言った。

「大原。気持ちはあるがたい……けど、お前の干渉は不要だ。僕だけでなんとかする」

「し、島田……でも、お前……」

「こういう経験だけなら岸尾くんより僕の方が上だ。懸念材料はあるけどさ」

と、島田は思わず手にしてしまった釣竿を苦い顔で見た。

（この釣竿でどう軍刀に挑めってんだ……そこにあつたから何となく手にしたけど、とんでもないぞ、これ）

武器を選ぶにしたって、もう少しまともなものがあつた気がする、と、パイプ椅子やらなんやらを見て島田は思った。

鞘付きでこちらを殺す気はないといえども、向こうは軍刀を手にしている。その時点で武器としての使い易さは明らかであるし、島田は変なところで下手をこいてしまったな、と思った。

（従弟で慣れてるとはいえ、釣竿だどどういう調子で行けば……）

島田がそうして悩んでいる間にも、大原は引き下がった。

「島田……お前がそう言うなら、オレはお前の代わりにジェルジンスキーたちを見守る。それで良いだろ？」

「ああ、頼んだ」

島田は大原のその提案に頷いて、賛同。大原は島田の言葉を聞くなり、ニツと笑みを浮かべて、シャーリーに声をかけた。

「つし、シャーリー。デッキに行くべ。あそこなら景観いいしー」

「あ、ま、待って、大原くん！」

そうして、大原はシャーリーを引き連れて、船のデッキへと向かって行った。

岸尾はふたりが去って行くのを見送りながら、それに対してホツと胸を撫で下ろしていた。大原とシャーリーがいなくなれば、自分は島田に集中することができると。

岸尾は釣竿を手にしている島田に対して、そのことに言及した。

「島田司令。その釣竿でどうやってここを切り抜けるつもりだ。何か勝ち筋でもあるのか?」

「勝ち筋なんかより、今は君の魔の手から逃れる方が先決だ。武器は重要じゃない」
 (そんなのあつたら、僕が知りたいんだよなあ〜! 肝心の琉球古武術だって、詳しくやってないし応用すらできないって!)

島田は口でははつきりと申しつつも、内心は非常に悩んでいた。

無論、島田が口で言った通り、この場を切り抜けてゼヴィン側から伸びてくる魔の手から逃げる方が先決だ。横須賀に行けるといふ条件こそは魅力的であるものの、出来ればもう少し探りを入れてから行きたいと思っていた。ゼヴィンの玩具にされるのも嫌だが、調査が足りないのも、島田にとつては嫌な要素でもある。

そして、ここを切り抜けるためには岸尾の軍刀に上手く対応しなければならぬ。そうなるも島田が勢いで手にした釣竿では力不足なのである。

(とりあえず、糸の部分の部分をどうにかして活用できればなあ……軍刀との一番差だし)

島田は釣り糸を見て、それをどう活用すべきか一考を示した。

(軍刀を釣り上げる——なんてのは、この場では無茶だからやらないとして、足引つ掛けるとかそんなぐらいいならでできるかなあ)

島田がそうして考えている間にも、岸尾が話を振ってきた。

「……島田司令、脳内会議は終わったか？」

「ぐ……」

(こくなつたら、当たって砕けろだ！)

島田は釣竿の先を改めて岸尾へと向けた。

「来るならさっさと来い！ 釣竿でもなんでも、僕は簡単には負けないぞー」

「——それでこそ、島田司令だな」

岸尾は島田が声を発すると、ポツリと呟き、島田の顔面目掛けて軍刀の先を水平に行き来させ始めた。

「ツー！」

島田はそれに合わせて横に逸れ、避け始める。

岸尾が狙っているのは、島田の顔というよりも首元であろう。代替肩から顔の下半分ぐらいに軍刀が来ているし、岸尾の軍刀を扱うコントロール能力が上手くいつていないのが、それで目に見えてわかる。

(でも、アイツ言ってたよなあ……一番怖いのは、『素人の剣』だとかなんとか)

素人と達人なら達人の方が上である。しかし、達人は剣筋のコントロールができるため、こういった場で想定外のことには起こさない。素人側が武器を持っていなければ、達人側の対処は確実に突いてくるであろう。

しかし、素人側に剣を握らせると、コントロールが上手くいかず、しかも上手くできないからこそ闇雲にやろうとするため、想定外のところに攻撃が来る。

島田の従弟曰く——『剣筋もそうだけど、コントロール能力を尖らせるために日々の鍛錬は欠かささない。狙った場所に攻撃するためには、コントロール能力を鍛えるのが第一優先』——とのことであり、実際岸尾の様子を見てみるとその通りだと、島田は思う。例え強い武器を手に入れても、本人に相応の能力がなければ豚に真珠。力がなければそれは強い武器ではなく、凶器でしかないのだ。

幸い、岸尾の軍刀は鞘が外されていないため、よほどのことがない限り致命傷沙汰にならないのが救いではあるが、それでも油断は禁物だ。何らかの拍子でそういったことが起きてもおかしくないのも現状なのだ。

(本当にアイツの剣の方が避けやすいなこれ……習ってるからこそ、素人の遊びに合わせられるのか——)

「っあ!?!」

途端、島田が掛けているポストン型の黒縁眼鏡が、船の床上へとカランカランと落ち

ていった。同時に、島田の体制が崩れて、彼の臀部が一気に床へと落とされる。島田は最初、何が起こったのか分からなかったが、岸尾の軍刀が眼鏡の縁へと直撃したただろうことは即座に察した。

岸尾は尻餅をついた島田を見て、声漏らす。

「惜しいな……もう少し下に行けば、首を叩けたのに」

「……………」

（き、気絶させる気満々だよこの子……………）

確かに自分は起きたままではきつとうるさいし、簡単には横須賀まで運ぶことはできないであろう。とはいえ、こうして気絶させる意欲を見せられると、気が気でない。

（くっそ、このままだと遠くのものが見えないし、眼鏡眼鏡……………）

島田はキョロキョロと周りを見渡して、自分の眼鏡を探し始める。こういう時に黒縁の目立つ眼鏡で良かったと思いつつも、島田は目を細め、ボヤけている視界を鮮明にしようとして試みた。

しかし、その島田の努力も一分もしないうち砕かれた、というよりも、本当に物理的に砕かれた。

（あつ……………あそこか！）

自分の右斜め後ろという、思ったより近くに眼鏡が落ちており、島田はそこに手を伸

ばそうとした。

が、そこに岸尾が現れた。

「! き、岸尾くん!」

「……」

岸尾は島田を黙って見下したと思えば、そのまま己の足を島田の眼鏡の上に乗せて――
 一気に踏み込んだ。

「うあッ!」

眼鏡に使われているプラスチックのレンズは、岸尾の体重により粉碎され、眼鏡の
 あつちこつちがビキバキと音を鳴らしながら折れていった。

岸尾は島田に視界を与えさせてやらないと言わんばかりに、ぐりぐりと眼鏡を踏み締
 める。そうして1分ぐらいして、彼の足が退かれた時には、島田の眼鏡は跡形もなくボ
 ロボロに崩れ落ち、砕けていた。

島田はまさかの試合に呆然としていた。

(う、嘘だろ……眼鏡に恨みでもあるのかな、この子)

一回踏みつけるだけでも使い物にならなくなるのに、ここまで徹底的に粉碎されるの
 は島田としても心配になる。岸尾の精神状態が。

岸尾は呆然としている島田の顔を見て、ふと、言葉を漏らした。

「……周りからは散々冴えなさそうだとかわかれてたけど、その大半は眼鏡のせいだったのか」

「えっ?」

「眼鏡外した方が、DD―571とまだお似合いなんじゃないか島田司令。ただ、その姿じゃ言われなきや島田司令って分からないけど」

「僕の視力は周りが思ってるよりは低くてね、その願いは引き受けられないよ。帰ればスペアはあるし」

と、島田が立ち上がろうとした瞬間、

「だったら、代わりに手でも踏みつけるべきだったな」

岸尾がその言葉と同時に、眼鏡に伸ばしたままだった島田の手の上に、眼鏡を踏みつけた足を置いた。

「つく!?!」

(重いし、痛い……!)

島田の手には岸尾の体重もかけられ、ただではそこから逃げ出せない状況が出来上がっていた。その重みに加わって痛みが走り、島田は顔を歪ませ、額に脂汗を浮かべた。

岸尾は島田に言葉を放った。

「島田司令。もし……出会い方が真つ当であれば、お互いまた違った関係になれたと思

う

「！」

島田が目を丸くして岸尾を見上げている間にも、岸尾は続ける。

「オレは……オレは、母親のために、提督になったから、それに基づいて仕事してきた。でも」

岸尾の声のトーンは変わらないまま、

「それは全部無駄になった。だから、最後に一仕事するために、ここに来た。アイツの言うことを聞いておけば、母親に余計な心配をかけずに済むから」

「アイツって……ゼヴィンのことか」

「……」

岸尾は黙って頷いた。島田は返す。

「でも……どういふことなんだ、それは。君の親と何か関係があるのか、あの銀髪ロシアンハーフと」

「それは言えない」

岸尾はすぐに首を横に振った。

「もつと島田司令と早く出会えていたら、何か違ったかもしれないな。せめて……アイツと出会う前に、会っていれば」

「……そうか」

島田は岸尾が何か事情を抱えていたのは察していた。ただ、それが直接ゼヴィンへと繋がるのが確定したのは、たった今であった。

確かに、島田と岸尾がもつと早く出会えていれば、そして、岸尾がゼヴィンと出会う前に、島田に何もかも打ち明けられることが出来ていたら、この話の結末も違っていただろう。しかし、そんなたればの話をしたところで、ふたりの関係性が覆ることはない。

島田は空いている方の手で釣竿を手にして、ベリーの部分を口で加えて歯で支えた。そのまま釣竿本体から手を離れたかと思えば、釣り糸を伸ばして、釣り針を摘んだ。

島田は釣り針を手中に収めると、加えていた釣竿本体を口から離し、岸尾を再び見た。「君にそう言ってもらえるなんて、光栄だよ、岸尾くん。でも……僕は他人の同情で心が揺らぐことは、ないッ！」

島田がそう言った途端、釣り針の針の部分を岸尾の右足の脹脛へと当てて、一気に力を込めて押し込んだ。

「ぐっ、ああッ!?!」

途端、岸尾の叫び声が部屋の中へと響き渡る。同時に、島田の手の上に乗っていた岸尾の足が退かれ、島田はその隙を見てすぐに立ち上がった。

代わりに痛みに耐え切れなかった岸尾が、その場で膝をついてしゃがみ込み、釣り針

が刺さっている箇所へと目を向ける。黒いズボンで目立たないものの、光の加減で血が滲んでいることはよく分かった。

岸尾は痛みにも悶えながら、自分の前で堂々と立っている島田を睨み付けた。

「つ、う……島田司令、アンタは……！」

「何とでも言えればいいよ。少なくとも僕は、同情はしない」

島田は釣り糸をピン、と伸ばして、岸尾の前にしやがみ込むと、彼の首元にそれを当てた。

「言っておくけど、経緯がどうあれ、この道を選んだのは君だ。まあゼヴィンに目を付けられたのは同情しよう。被害者であることには変わりはない」

と、

「でも、君のたられればの話なんざ、僕には関係ない。目の前にあるものが全てだ。そうだろう？ 岸尾」

038：悲しい忘却へ

「もしかして……結構怒ってるのか、島田司令」

自分の言葉に流されることなく、はつきりとした意志を貫いた島田に対し、岸尾は軽く畏怖の念のようなものを抱いていた。岸尾はただ、つらつらと自分の今の感情を吐き出しただけであるが、島田はそれに一切の同情を見せることなく、「自分が決めた道だろう」と、岸尾に今一度確認させたのである。

島田は伸ばした釣り糸を岸尾の首元に少し近付け、彼の質問に答えた。

「怒ってるも何も」

そして、島田はいつもの調子で続ける。

「仲間だと思わせといて、敵ですよなんて行為、許される訳がないだろう。裏切り者だーって言って、倉竹さんに突き出すのはあまりにも簡単だぞ？　実際、そうするつもりではあるし」

と、

「本当、君のことは残念だと思ってるよ。でも、さっきも言った通り、目の前の出来事の方が重要だ。君がゼヴィンの野郎に脅されているなんて、こっちからしたら知ったこつ

ちやないし、逆にそれを理由に僕が君を脅して利用することも可能だ。例え、僕がここで情けをかけたところで、君が裏切り者である事実は拭えない。必要ない友情ごっこに付き合わされるのが嫌いなんでね、僕は」

「……！」

「そして、君が僕を傷つけるつもりがないのもまた知っている。でもね、そんな生半可な優しさがあるんだしたら、まずゼヴィンの野郎を一発殴るか、自分の意思で反抗する意思見せて欲しかったんだよね」

島田は目を丸くしている岸尾を目の前にしてもなお、続ける。

「こちらを傷付ける覚悟がないのなら——裏切り行為なんて最初からやるな。母親を守るためにアイツに従っている口振りみたいだけど、提督である以上、君もひとりの男だ。大切な母親ぐらい自分で守れ。ゼヴィンの言葉に唆されて他人に迷惑かけるな。今回の件は僕への裏切りだけじゃなく、席を用意してくれた倉竹さんに対する冒涇行為だ」

「……っ」

岸尾はギリツと歯を軋ませる。島田の口から溢れ出る言葉の数々に、何も言い返せないのである。

島田は体を震わせて黙り込む岸尾に対し、さらに続ける。

「こんなスパイ行為、仕事を仕事と割り切れない奴がやることじゃない。倉竹さんに言

うのは怖いだらうけど、ずっと隠し続けるよりはマシだ。佐世保にも連絡は行くだらうけど、このまんまゼヴィンの野郎に従うよりは楽になる。疲れたのなら、大人しく——」

「……これが、琉球王族のやり方なのか」

「！」

島田は岸尾が知っているはずないだらう自分に関する事実が、その口から飛び出したことに激しく動揺し、岸尾の首前で伸ばしている釣り糸が、一瞬揺らいだ。

岸尾はゆっくりと顔を上げて、島田を軽く睨み付けた。島田は、やれやれと言わんばかりに、彼に聞く。

「その情報、どこから聞いた？」

「シャーリー司令が、この間話してくれた」

「アイツか……まったく、余計なことを」

島田は心の中で頭を抱えつつ、続ける。

「僕のやり方だと言われれば否定しないけど、それに家系なんて関係ないよ。例えば、これがさつき話した僕の従弟なら、君なんてとつくに傷だらけになつてると思う。自分で言うのもアレだけど、僕が相手に良かったと思うよ」

と、

「ゼヴィンの元を離れて、僕たちに協力しろなんて言わないよ。そんなことしたって、解

決しない。ただ、洗いざらい話してくればそれでいい。君にその気があれば、僕も倉竹さんや上の人たちに取り合つて、君に対する処分を軽くすることぐらいはしようと思ふ」

「……先に、それを言えばいいのに」

つくづく不器用で、やり方がどこか下手な男だ、と、岸尾は心の中で思いながら、そう口先で呟いた。

——しかし。

「ツぐ、う!？」

その瞬間、島田の腹に何かが重くのしかかるように当たり、島田はその鈍痛の重さからその場で蹲つた。島田の手の中にあつた釣り糸は彼の手元から離れ、床にはらりと落ちていった。

島田が蹲ろうとすると、目の前にいる少年の右腕へと寄りかかる形になるのが分かつた。島田はそれですべてを察したのか、岸尾に向けて視線を上げる。

「岸、尾……お前ツ……!」

「残念だけど、島田司令の誘いは断る。何もかも、洗いざらい話すつもりは毛頭もない」
「つ……そうか、琉球王族なりに情けはかけたつもりなんだがな」

「でも、島田提督が何を考えているのか……そして、敵だと分かっても、冷酷になりきれ

ない性格なのも、理解できたよ」

岸尾はそう言うのと、自分の右腕に寄りかかっている島田の首後ろに左手で手刀を入れ、強く当てた。

「っあ……」

島田は苦しそうに息を上げて、そのまま目を閉じて、気絶してしまった。

岸尾は最初はどうかと想っていたが、島田を気絶に至らせたことだけは、自分なりに褒めたいことだと思つた。あとは、大原とシャリーのことを切り抜け、迎えるの船を待つだけなのだが——岸尾が島田を持ち上げようと四苦八苦している間にも、岸尾のスマートフォンがバイブが鳴った。

「……電話か」

このタイミングでの電話——となれば、船がついたということか。

岸尾は応答ボタンを押して、そのまま左耳に当てた。

「はい、岸尾です」

『もしもし、岸尾くん？ 私だよ、ジュッサーノ』

「ああ、アンタか……」

さすがに言語が通じない深海軍から連絡はできないか、と、岸尾は息を吐く。そして、外にいるジュッサーノから連絡が来たということは、だ。

ジユツサーノは岸尾の声を確認すると、連絡を続ける。

『えーつとね、今、迎えの船が来てるんだ。来てるんだけど』
と、

『二つ船が来てるんだ。私の方だけ先にクラクストンたちと横須賀に行ってもいいかな？ 別行動の方が余計な詮索されなくて済むと思うし』

「ああ……アンタがそうしたいなら、そうしてくれ。オレはどうしたらいい？」

『船内にいるなら、そのまま待機して。私から君の方に迎えに行くように、指示出してあるから。他に舞鶴の提督がいるだろうけど、生の深海軍を前にしたら無力になるだろうし、その点でも安心していいよ』

「分かった。うん……じゃあ、また後で」

岸尾は電話を切る。そして、どう運ぶか悩み切ったところで、背負った方が楽に動けるだろうと思い、島田を自分の背中に回すと、彼の両腕を自分の肩に回し、その膝裏へ自分の手や腕を通した。

岸尾が島田を背負い、部屋の扉へと進もうと歩き出すと、先ほど島田に釣り針を刺された脹脛がジンジンと痛み出した。岸尾はその痛みに顔を歪ませながら、前へと歩き出す。

(手当てする暇もないし、このまま乗り切るしかない……スミスが別の船なのが嫌だけ

ど)

ジュツサーノの口振りからして、スミスは別の船になるのであろう。スミスにはクラクストンのことを任せてあるし、そう思った方が妥当である。

そうして岸尾が部屋の扉を足で開くと同時に、こちらへと飛び込んできた光景があった。

「あ……」

右目の黒い眼帯が特徴的な深海軍の艦船——重巡Ⅰ級、二体の姿であった。

「……………」

岸尾は相変わらず、どうやって深海軍と接していいのか分からないのか、とりあえずお辞儀と軽い挨拶だけして、敵意がないことだけ示した。

そうして、ふたりいるⅠ級のうちのひとり、岸尾が背負っている島田を運ぼうと、岸尾の背中から島田の体を持ち上げた。もうひとりのⅠ級は岸尾たちを自分たちが使っていた船に案内しようと、先導を切って外に向かつて歩き始める。

言語が通じない、というよりも、向こうの言語をこちらが一方的に分らないゆえに、こうして行動で示してくれるのが岸尾にとっては有り難かった。

(そういえば、ゼヴィンの奴はなんで深海軍の言語が分かるんだ……?)

普通の人間にとって、深海軍の使っている言語は、「ただの音」にしか例えることがで

きず、こちらには全く何も伝わってこないのである。たまに片言で人間の言葉を話して
くることはあるが、基本はただの音。何も伝わってこないのが常だ。

しかし、これが名前がある深海軍の一部——例えばA k a g iやK a g a、P a c h
i n aなどといった個体に関しては、普通に人間の言葉を扱う。その辺に関しては未だ
に研究中の分野であるものの、この個体たちに関しては、「人と縁があるものがモデルに
なっているがゆえに、言語を自在に操ることができる」、というのが共通の見解である。

そして、それらの個体と意思疎通しているのなら、ゼヴィンが話せるのも分からなく
もないだが、ここで案内してくれているI級や、その他木端の深海軍たちと意思疎通で
きるのは本当分からない。それこそゼヴィンが昔から深海軍との親交が深いか、彼に深
海軍の血が流れているぐらいしか理由が思いつかない。

(なんにせよ、深海軍が敵ではないのは心強い……ことではあるんだが、オレ個人だとど
うにもやりづらいな)

岸尾がそうして引け目を感じて歩き続けたところで、扉の向こう側から何か聞こえて
きた。

「！」

シャーリーと大原が深海軍に取り押さえられたのか、と、岸尾が察して、I級たちと
共にデツキへと出た。

「くっそ！ 何すんだよ！」

「お、お願いだから、離して……」

すると——案の定、軽巡E級ふたりに取り押さえられた大原とシャーリーがそこにいた。

大原とシャーリーはそれぞれ腕を背中へと回されており、身動きが取れない状態だった。大原に至っては床に押さえ付けられており、それだけ暴れてくるのであろうことが、岸尾でもはつきり分かるぐらいだった。

E級が抑えているうちに、デツキの向こうに見える船に乗り移ろうと岸尾はI級たちと共に前へと進んだ。

「おい」

そして、大原から声を掛けられた。

岸尾がこちらへと向いたと同時に、大原は言葉が続ける。

「岸尾さんよお、本当にこのまま舞鶴を去るつもりか？ 島田や倉竹さん……いや、舞鶴にいますべての人を裏切つてまで、することかよ」

「……元からそのつもりで、ここに来た」

と、岸尾は冷たく言い放った。

「申し訳ないけど、お前たちのことは元から眼中になかった。オレの狙いは島田司令と

DD―571の両者だけ。その両者に注視していると、命令されたから」

「……秘書艦の方はともかく、お前さんには人の心がないのか」

と、

「ジェルジンスキーや應瑞がN級と相討ちする形で大破したけど、それで思うことはねえのか？」

「……ない」

岸尾は続ける。

「そつちのことはそつちのこと。必要に干渉したつてお互い困惑するし、それに……この程度で気持ちを取り乱せるほど、舞鶴鎮守府という場所に入り込んでない」

「岸尾くん……」

シャーリーは岸尾からその言葉を聞いて、少しショックを受けているようだったが、それも無理はない。島田の次に岸尾のことを気にかけて、人見知りなりにいろいろと話しかけてきているのが彼なのだ。せめて岸尾が溶け込めるようにと頑張ってきたが、岸尾にはそれが伝わってないようだった。

シャーリーはそんな岸尾に、続ける。

「君がそう思うなら……それでいいと思う。島田くんとクラクストンさんを誘拐して満足であるなら、これ以上何も言うことはない、けど」

シャーリーは顔を上げる。

「二度裏切りやスパイ行為を働いた提督には、容赦なくしつぺ返しが来るつていうのは聞いている。いつそれが来るかは分からないけど、例え提督を辞めてもそれが無効になるわけではない。それを受け止められる覚悟があるのなら、ボクはそれでも良いと思うよ」

「……言いたいことはそれだけか、シャーリー司令」

「うん」

シャーリーは頷き、

「島田くんが起きてれば、もつとキツイ言葉投げ掛けられてると思うけど、それはもう済ませてるかな?」

「それは数分前に済ませてある」

(まあ……それでもオレの処罰は軽くしたい意志はあるみたいだけど)

と、岸尾はチラッとI級に運ばれている島田を見て、思い返していた。

1ヶ月ちよつとながら、お互いに芽生えた友情という感情は多分、嘘ではないのだろう。ただ、このタイミングでそれを自覚するのはあまりにも遅かった。今はもう、取り返しのつかないところまで来ているのだ。

そして、小舟がひとつ、ここから離れて行くのが見えた。どうやら、ジュツサーノや

スミス、クラクストンが乗っている船が横須賀鎮守府へと戻って行っているらしい。

「そうか、向こうはもう出発か……こつちも早く行かないと」

岸尾はそれだけ言うと、I級たちに言うと、そのままこちらの船のデッキから、横須賀行きの船のデッキへと飛び乗った。

そして、I級に担がれて運ばれている島田は、横須賀に着き、収容されるまで目覚めることはなかった。

同時に——脳の奥底に仕舞ってあった昔の記憶を、呼び覚ましていた。

039：ゆめの世界

それは、7、8年前ぐらいの出来事だった。

場所は沖縄県那覇市の最南端の地域。時期としては大体夏休みぐらいの頃で、夏真っ盛りも良いところなぐらいの暑さであった。

そして、建物に「邸」が付くほど大きめな一軒家。そこでは、とある未就学児の少年が、関東の兵学校へと入学するために、日々、猛勉強を重ねていた。蟬がミンミンとうるさい中、少年はソーダ味のアイスキャンディーを片手に鉛筆を動かして、分らないことがあれば暑い中、わざわざ近くの図書館に行つて本を借りるなどしている。お陰で少年の机の上やその周りは、貸し出し中の本が折り重なっていた。たまに夏休みで東京から来ている従弟が勉強の邪魔をしたりはするが、それもそれで良い暇つぶしでもある。そんな夏休みを過ごしていた彼の人生が大きく変わるような出来事が、8月に入つて起こった。

それはひとつの呼び鈴から始まった。

両親が何かに気付いたように少年を呼び、少年は呼ばれるがままに玄関へと向かった。そこには従弟の姿も。

矢先、少年の目の中に飛び込んできたのは——パステル調の青いワンピースを着た、銀髪のツインテールの可愛らしい、自分と同年ぐらいの女の子だった。前髪に飾られている青いクローバーの髪飾りもまた、特徴的だった。

そんな彼女の隣に立っているのは、白い半袖のワイシャツと黒いズボンを着ている中学生ぐらいの少年だった。彼は真面目そうな方の男児の姿を見ると、目線を合わせるようにしやがみ込み、そちらへと声をかけた。

「えーっと、君が小禄大千くん、かな？」

「はい、初めまして。僕が小禄大千です」

男児・大千はぺこりとお辞儀をして、目の前の少年へと挨拶した。少年はそんな大千を見て、クスツと笑った。

「話に聞いてた通り、すごくしつかりした子だね。俺のことは倉竹って呼んでもらっていいよ」

倉竹はそう言うと、女の子の肩に自分の両手を置いて、言う。

「突然で申し訳ないけど、この娘をしばらくここで預かって欲しくて、尋ねたんだ。大千くんは兵学校志望なんだろう？」

「はい。それとこの子に何の関連性が……？」

「ええっと……この子はこれからいろいろ体験して、立派なヒーローにならなきゃいけ

ないんだけど」

と、

「そのためには海があるところじやないの意味が無くて。で、海に関連する職業に興味ある子がいる家庭の方が、手取り早いと思つてね。ご両親には先に連絡してあるんだけど、君はどうかなつて思つてさ」

「いえ……僕は別に良いですけど」

大千はジツと女の子を見た。女の子はその目線にビクツと体を震わせて、一步後ずさつた。

「あ、あの……」

女の子が怯えている中で、大千は続ける。

「君、名前は？」

「えっ、あの……えっと、クラクストンです」

「クラクストン？　じゃあ、クラちゃんだね。どこに住んでたの？」

「あ、アメリカ生まれですけど、今は日本で……」

「そうなんだ。沖繩つてアメリカの名残が多いから、すぐ馴染めると思うよ」

大千は笑みを浮かべて、

「ところで君、すごく可愛いね！　今まで見てきた女の子の中で一番！」

「え、ええっ……あ、あの……」

「良かったら僕の部屋でお話ししない？ あ、でも、本ばつかでちよつと狭いかなあ」

「ちよつと、兄ちゃん！ あんまりまくし立てるなつて！」

そんな大千の背後にいた従弟の少年が止めに入る。少年は想定外の大千の反応にビックリしているのであろう、結構な困惑が表情から見えた。

大千は止めに入った自分の従弟に、怪訝そうに言い放った。

「利空……お前いつも僕に、『女の子ともつと話してあげて』つて言ってくるのに……なんで止めるんだ」

「いやいや、兄ちゃんと話したがる女の子はいるから、その子たちと話してあげてほしいだけだよ！ でも、この子そうでもないじゃん！」

「……そうなの？」

「『そうなの？』じゃなくつてさあ……えつと、クラクストンちゃんだつて？ ごめんね、急にコイツが話しまくつてて」

大千の従弟・本部利空もとべりくがクラクストンに頭を下げた。

クラクストンは「い、いえ……」と遠慮がちに首を横に振り、まじまじと大千を見た。

「あの……大千様は将来提督になりたいんですか？」

「うん。たくさん勉強してヒーローになれるつて、すごいことだと思つうし。あつ、お父さ

んお母さん、あとはよろしくね」

大千は倉竹のことを両親に任せ、自分は利空と共にクラクストンを部屋へと案内した。クラクストンは家の広さに少々驚いているようで、キョロキョロと辺りを見渡しながら歩いている。大千はそんなクラクストンを見るなり、微笑ましく感じたのか、小さく笑み浮かべていた。

フロアリング製の廊下を歩きながら、大千は言葉が続ける。

「でね、小学校の代わりに入れる兵学校があるって聞いて、せっかくだし挑戦してみようかなーって思うんだ。もしかして、クラちゃんも興味あるの?」

「あ、その……私も、将来は海に出て戦わなきゃいけないんです」

と、

「でも、いい司令官様に出会えるか少し不安なんです。私の思い描いている司令官様って、優しくてカッコよくて……でも、どこか親しみやすく、しっかりした人なんです」

「へえ、君には君の理想の提督像があるんだね」

「けど」

と、

「一番は、どんなに大変でも諦めない強い人。きつと、大変なことが多くて、挫けることもあると思うんです。でも、それすら跳ね返せる強い人って、素敵だと思うんです」

クラクストンははつきりと、ふたりにそう言い放った。その目があまりにも真っ直ぐすぎたもので、利空は思わず視線を逸らしてしまった。自分が彼女の目を見るには、あまりにも淀みがなすぎで、直視できないのだ。

けれども、大千はそんな彼女と10秒ぐらいいは見つめ合っていた。大千は彼女と見つめ合った後、何か考えてから、「そっか」と、返事をする、そのままクラクストンに向かつて笑みを浮かべて言った。

「じゃあ、僕が君が思い描いてる通りの司令官様つてやつになれば良いんだね」

クラクストンはそんな大千の言葉を聞いた途端、目を丸くして非常に驚いている様子だった。クラクストン、そして利空は大千の言葉を聞いて、10秒ぐらいい黙っていると、利空から先に口を開いた。

「ち、ちよつと……兄ちゃん、それ本気？　いくらなんでもその約束は厳しくない？」

「厳しいって、何が？」

大千は利空の言葉にきよとんと首を傾げる。

「だって、彼女がそういう司令官を求めるなら、それを聞いた僕が目指したって良いじゃない？　理想なんて人それぞれだけど、彼女のその理想は、とても納得できるものがある」

「そ、そうじゃなくつてさあ……」

と、利空は続け、

「まあ、仮に兄ちゃんが司令官つてか、提督になれたとしてさ。それでクラクストンちゃんに巡り合えるかどうか分からないのに、そういうこと言うのつて無責任つてやつだと思ふよ」

「うーん……僕はそう思わないけどね」

大千は利空のその意見に対して、首を軽く横に振った。

「似たような場所で働くなら、絶対どこかで巡り合えるつて僕は思ってるよ。それに、クラちゃんは可愛いから、それまでに理想的な司令官様つてやつに出会えるだろうけど、僕個人が目指す人物像としても、十分すぎる目標でもあるしね」

「ま、まあ……兄ちゃんがそう言うなら、俺もこれ以上何も言わないけど……。クラクストンちゃんとしてはどうなのさ、その辺」

「わ、私ですか？」

クラクストンは自分に話の矛先が向けられ、思わずビクツと体を跳ね上げつつ、答える。

「わ、私は……それで、大千様の背中を押せたのなら、それで良いかなつて……」

「あー、そう？　兄ちゃんもあくまでも目標にするんだから、それでクラクストンちゃんに会えなくても文句言うなよー」

「わ、分かっているって……あ、そうそう、ここが僕の部屋だよ」

利空に念を押されて、うつ、と言葉を詰まらせつつ、大千は目の前に来た扉のドアノブをギイツ、と開いて、クラクストーンと利空を部屋の中へと招き入れた。

「……わあ！ 本がたくさん！」

クラクストーンは大千の部屋の中を見るなり、部屋の中にある本の多さに、その丸い青い瞳をキラキラと輝かせた。クラクストーンはそうして彼の部屋の中へと足を踏み入れて、早速、本棚へと向かった。

クラクストーンはキョロキョロと本棚を見渡しながら、どれを取ろうか迷っているそぶりを見せた。大千は、そんな彼女の様子をクスクスと笑みを浮かべながら眺め、彼女のところまで歩み寄った。

「クラちゃん。その辺はちよつと難しい本ばかりで、利空もすぐ読まなくなった本が多いんだよ」

「そ、そうなんですか？ 絵本は無いですか？」

「絵本……？ んー、最近勉強に使えるものばつか引つ張り出してるから、すぐ出せそうなものはないかも。クラちゃん、絵本が好きなの？」

「はい！」

クラクストーンは快く頷き、

「絵本見るのすごく好きです。綺麗で可愛いものを見ると、こういう絵本を作ってみた
いなあつて思うんです！」

「そうなんだ。綺麗で可愛い絵本……多分、この家にはない気がするなあ」

「じゃあ！」

大千が頭を悩ませている横で、クラクストンが名乗り上げた。

「私が大千様に絵本作ってあげます！ そうしたら、大千様も読むでしょう？」

「ああ、君の作る絵本なら興味はあるかな」

「ふふ、決まりですね。そうだったら、お話はふたりで決めたいですね」

クラクストンは嬉しそうに笑みを浮かべて、大千にそう言うと、その場で思い出した
ように次の言葉を続けた。

「そうだ、大千様の家ってスケッチブックとか、クレヨンとかありますか？」

「うん、使っていないものならあるよ。絵本作るのに使うの？」

「そうです」

クラクストンはコクコクと頷き、

「普段なら、私が自前で持ち歩いているんですけど、大千様と作るなら専用のスケッチ
ブックが欲しいと思ったんです」

「へえ……いいね、それ」

大千はクラクストンの提案に賛同して、首を縦に振った。そして、そこにさらに自分の意見を追加した。

「でも、僕との専用のスケッチブックなら、親に頼んで新しく買ってもらうか？ 僕のスケッチブックもそんなに使ってないけど、君と共用するなら、新品の方が身が入ると思うんだ」

「わあ……いいと思います！」

と、

「今日の晩ご飯の時にでも、ふたりで頼んでみましょう。きっとOKしてくれると思います！」

クラクストンが笑みを浮かべて喜び、大千がそれを笑みを浮かべて眺めている間にも、利空が大千の肩をツンツン、と突いてきた。

大千は「？」と首を傾げて、何事かと自分の従弟の方へと顔を向けた。利空は、ジーツと半目になりながら、大千へと言葉を放った。

「兄ちゃんさあ、思ったよりあの子に熱入ってる感じ？」

「熱入ってる……っていうか、裏表もないし、それが可愛くて良いなって思ってるだけだよ」

大千が苦笑しつつそう答えると、利空は「そうじゃなくてさあ」と、続ける。

「あの子に『一目ボレ』……つてやつ、してるんじゃないの兄ちゃん。これまでの女の子たちと態度違うもん」

「……そう、なのかな。よく分からないや」

大千は利空に言われて、クラクストンへと改めて顔を向けた。クラクストンは本棚の下の方にある分厚い本を手にして、ページをめくっていた。その文字の多さに目を眩ませているようで、「おお……」と声を上げながら、難しい顔をしている。

利空はそんなクラクストンを見ている大千に、再び話しかけた。

「まあ、俺はジャマする気はないよ。だって、カタブツ兄ちゃんがこんなに可愛いって褒めてるのが面白すぎるし」 「利空……お前なあ」

「でもねえ」

と、

「彼女、裏表がない分、結構無意識に兄ちゃんに負担かけてくるようなこと言ってくるかもしれないから、その辺は注意した方がいいよ。なんだろうね、愛情表現が重そうな気がするんだ」

「初対面でそこまで分析できるお前の方が嫌だよ、僕は。でもまあ、そうか……」

大千は怪訝そうな表情で利空を見てから、再びクラクストンへと目を向ける。

クラクストンが本から顔を上げて、大千と目を合わせると、こちらに対して嬉しそう

にニコツと笑みを浮かべてきた。大千はそのクラクストンの笑みを見るなり、ドキッと心臓を鳴らして、つい、目線を逸らしてしまった。

利空はそんな大千をプツと笑う。

「真っ直ぐすぎるのも、なかなか恥ずかしいことではあるけどねー。兄ちゃん顔真っ赤でおかしいのー」

「う、うるさいなあ、もう」

大千は自分の顔が真っ赤なのを指摘され、不機嫌そうに振る舞うも、また、クラクストンへと目線を向けた。

(……もつと、彼女のことを知りたい)

040：お姫様と王子様

「クラクストンちゃんとか千と一緒に絵本を？　良いんじゃない？」

「大千も勉強ばっかで疲れるだろうし、そういった息抜きも必要だろう。明日、仕事の帰りにお父さんが買ってくるよ」

その日の夕食、早速両親にスケッチブックで絵本を作る件を話してみたら——かなりあっさりとした承を得られてしまった。

大千は両親のあっさりとした答えに拍子抜けしつつ、デミグラスソースがたくさんかかったハンバーグをナイフで切る。ハンバーグを切ったところから、ほかほかとした肉汁がじゅわりと湧き出て、それが大千の食欲をそそる。

一方でクラクストンに用意されているハンバーグは、髪飾りのクローバーと同じように型抜きされた人參が乗せられていた。クラクストンは瞳を輝かせながらそれを見ると、一口分のハンバーグと一緒にそれを頬張った。クラクストンは口の中に含んだものを飲み込んでから、大千の両親へと言う。

「えへへ、ありがとうございます。大千様は私の知らないことをたくさん知ってますし、きっと面白いお話ができると思いますよ」

「大千は調べごとが好きだからねえ。それを活かせるお話が作れたら、すごいものが出来上がりそうだ」

と、大千の父親が言う。

大千は同じ年代の男子たちよりも大人びて見える見た目をしており、普段の言動がより、それを加速されているが、それは大体父親譲りだったりする。癖つ毛のある黒い髪の毛に、鋭い目つきに見えて垂れ目で、言うほど厳しそうに見えない顔立ちなど、大体父親から。母親は全体的にふんわりとしており、大千が好きなものを見た時に見せるふんにやりとした態度は、多分母親譲りであろう。

母親は、自分の旦那の言うことに「うんうん」と頷く。

「まあ、お父さんも結構勉強は出来た方だけど、大千に関してはそれ以上なのよねえ。もつと外で遊びなさい、気を抜きなさい、つて言つても、言うこと聞かないだもん」

「兵学校に行かせるのだから、本当は嫌だけど、普通の小学校に行かせても持て余しそうでもあるからなあ。丁度いい塩梅だろう。もう少し年があれば、代わりに海外への留学も考えてたんだが」

と、父親が思い出したように、クラクストンへと矛先を向けた。

「そういえば、クラクストンちゃんはアメリカ生まれなんだっけな。英語話せるなら、大千にも教えてやってあげほしい。飲み込みも早いし、すぐに話せるようになると思う」

「はい、了解しました。お父様にそう言われたら、クラクストーンも頑張るしかないですね！」

「うん、いい心意気だ。大千、ちゃんと教わってやれよ?」

「分かってるって。ただ、僕よりも利空にも教えてやってほしいけど。周りとの差をつけたいとか言い出して」

大千がそうして、自分の右隣にいる従弟へと目を向けると、利空は「当然」と、言つて、頷く。

「本部家の人間としては、勉強も先に行かないと。琉球古武術も楽しいけどさ」

——この少年ふたりの家について、軽く説明をしておこう。

まず、沖縄は江戸末期に薩摩藩に統合されるまで、「琉球王国」という一つの国として成り立っていた。そのトップとして立っていたのが、尚氏という、王家であった。この尚氏、第一と第二に分かれているのだが、細かいことはここではあえて割愛しておこう。1469年に第一から第二に王朝が移っていることさえ抑えておけば、理解には困らない。

その王家を取り巻く「御殿」というものが複数存在しており、この御殿の者たちも、廃藩置県後に尚氏と共に華族になっている。そんな彼らのことは、尚氏も含めて、「琉球王族」と一纏めにすることが多い。

まず、説明は大千の家から。

第二尚氏の三代目国王に尚真王という人物がいる。この国王に尚維衡——もとい、浦添朝満という長男がいるのだが、大千が実家とする小禄家は、この朝満が元祖であり、当時は小禄御殿と呼ばれていた。この小禄御殿、国王の直系から派生しているだけあつて、数ある御殿の中でも屈指の名門である。国王一人を輩出しているという時点で、大千に流れている血筋はかなりのものであることが察せられるだろう。

そして、利空。

第二尚氏の十代目国王・尚質王の六男に尚弘信もとい、本部王子朝平という人物がいる。この人物が元祖なのが、本部御殿という存在である。

この本部御殿、廃藩置県後の方が分かりやすく特色が出ており、古くから伝わる琉球古武術の流派のひとつとして本部の系統が生まれている。もともと本部御殿手という家伝があるのだが、ここから琉球古武術として継承されているのである。利空は、幼いながらもその琉球古武術の使い手であり、運動能力だけならば大千どころか同年代の中でもかなり優れている方である。

簡単に言ってしまうと、このふたりは琉球王族の末裔であり、その受け継いだ能力を幼いながらも遺憾なく発揮している、ということなのである。

本部家と小禄家はそんなに関連性は濃くはないものの、利空の母親が元々小禄家で、

本部家の父親と偶然恋愛結婚して強い血縁関係を持つことになり、ふたりは従兄弟同士になったわけである。

クラクストンは話をしている利空と大千の姿を見つめ、ふと、言葉を漏らした。

「あの……大千様と利空さんのおうちって、お金持ちさんなんですか？」

「いやあ、今は金持ちというほど大きな家庭でもないよ」

と、大千の父親が苦い笑みを浮かべながら答える。

「んー、どう説明すれば良いんだろうね。御伽噺で言えば、元々王様と血の繋がりがあある家庭が点々とあつて、俺たちはその家庭の子孫。その人たちは『王族』という言葉で括られるけど、つまり、俺たちや利空くんはその王族の子孫なんだ」

「王族の子孫……ってことは、大千様は王子様なんですか？」

「琉球王国が現存してれば、そういう扱いにもなっただろうね。今は一般人のひとりではないけど」

「おおー！」

クラクストンはペアつと顔を輝かせて、大千を見た。

「じゃあ、大千様と私が結婚したら、私はお姫様になれるんですねー！」

「ブツ……！」

大千はクラクストンのその言葉を聞くなり、飲んでいた水を思わず吹き出して、気管

の中に入った水でゲホゲホと咳き込んで、噎せてしまった。それを隣で見ていた利空は、「汚いなー」なんて言いながら、汚れた机をナプキンで拭いた。

クラクストンは「？」と首を傾げながら、不思議そうにそんな大千を見た。

「だって、そうですね？　王子様と結婚してお姫様になれるなんて、本当に絵本の世界みたい」

「い、いやあ、まあ……その、間違いだらけだけど、間違いじゃないっていうか」

大千は説明に困ったように眉を下げ、ティッシュで口の周りの拭いた。

「でも、相手の方は利空とじゃなくてもいいのかい？　お姫様になれる条件だけなら、こいつも変わらんど。あと強いし」

「兄ちゃん、こつちに話を振らないで〜」

クラクストンにはさして興味がないらしい利空は、苦い顔で大千を見た。

クラクストンは大千の提案に、「うーん、そうですね……」と、首を傾げながら、利空と大千を交互に見た。それから数秒ぐらい考えていたようだが、クラクストンの答えは特に変わることはなかった。

「でも、私は大千の方が良いです。だって、一緒にいると、なんだかホツとしますから。大千様は私がお姫様だと嫌ですか？」

「い、嫌ってわけじゃないけど……」

大千は自信なさげに続ける。

「僕、王子様って器でもないから、君が思い描いてるような、絵本の中の白馬の王子様にはなれないんじゃないかって思うよ」

「でもさつき、理想の司令官様になるって言ったじゃないですか」

「あれは提督としての理想として掲げただけで、王子様ってのとはまた別だよ」

大千は苦い笑みを浮かべた。

「僕の中の王子様って、金髪で目が青くて……とにかくキラキラの男の人ってイメージなんだけど、僕はそれとは真逆だしね。そういうった意味では、僕は絵本の中のような王子様にはなれないよ？」

「で、でも」

クラクストンは首を横に振る。

「王子様って、そういう簡単なものじゃないと思うんです。確かに絵本の中の王子様には、そういう決まりがあるかもしれないですけど、もつとこう……別のものが大切な気がするんですよ」

「でも、カッコいいのは絶対条件でしょ？」

「はい！ それは当たり前です！」

クラクストンは利空のその言葉に力強く頷いた。

「もちろん、大千様は十分カッコいいですよ。じゃなかったら、お姫様になりたいなんて思いません！」

「あー……うん、うん、ありがとう、クラちゃん。君がそう思ってくれるなら、それで良いよ」

大千は困ったように笑みを浮かべつつ、内心困惑していた。

(な、なんか、押しが強いのかなあ……この子。可愛いけど)

そう思ったら一直線に突き進むクラクストンの姿に、大千は少しだけ怖いってしまった。今まで関わってきた女子の中で、クラクストンは一番可愛く、一番押しが強い。大千としてはそれは嫌なことではないものの、こちらが好意を抱いても、自分に対してここまで言ってくる彼女の強さが、なんとなく謎であった。

夕食を済ませて、お風呂も済ませ、余った時間で勉強し、いつもの時間に就寝する。それが大千の生活スタイルであった。

大千は時計の針が寝る時間を指しているの確認して、そろそろベッドの中へと入ろうとした時に、コンコン、と、この部屋の扉を叩く音が聞こえた。大千はこんな時間まで起きてるなんて、母親か父親だと思い、そのノックへと応答し、扉を開いた。

「はいはい、何かあったか——って、え？」

——扉の向こう側にいたのは、寝巻きを着ているクラクストンの姿だった。

クラクストンはビーバーと白猫の可愛らしいふたつのぬいぐるみを同時に両手で抱き、潤んだ目で大千を見ていた。大千はクラクストンがそこにいたのに驚き、つい、質問した。

「クラちゃん、どうしたの？ 何かあった？」

「大千様……」

クラクストンは、そのまま大千へと寄り掛かった。

大千はそれにドキッと心臓を鳴らして、顔を真っ赤にしつつ、彼女の肩を掴んだ。

「ち、ちよ、本当に何があったんだ？」

「あ、あの……私、とても怖い夢を見て……」

と、

「出会ったばかりで変だと思うんですけど、大千様が私のことを忘れてしまう夢を見て……それで、数年経って再会しても、私のこと覚えてないんですよ」

「……それで？」

大千は部屋の扉を締めて、彼女を自分のベッドへと案内した。

クラクストンはベッドに腰掛けながら、続きを話した。

「大千様は提督になってました。すっごく成長して、立派な男の人になってたんですよ。」

私も大きくなって、魅力的な女の人になつてゐるはずですよ、

「一方的に私ばかりあなたのこと覚えてて、大千様は私のこと見てくれなかつたんです。君なんて知らないって突っぱねられちゃつたんです」

「君の夢の中の僕は、相当酷いやつだな」

大千はクラクストンの隣へ腰掛けた。ベッドに体重がかかり、ギシツ、と、木の軋む音がした。

「その後は？」

「はい……私、ずっと大千様に話しかけてたんですけど、結局最後まで思い出せてもらえなくて……それが悲しくて悲しくてこの世から消えたいって思った時に、目が覚めたんです」

クラクストンは顔を上げ、

「大千様は私のこと、忘れませんか……？」

「……忘れないよ」

大千は彼女の言葉に頷いた。

「というか、君はインパクトが強いよ。人見知りでおどおどしてるのかと思いきや、急に押しが強くなつたりしてさ。忘れろつて言う方が無理だよ」

「大千様……」

「だから、安心して。僕は君のことを忘れないよ。絶対」

「大千様あ……」

クラクストンはそのまま彼のことを押し倒す形で、ベッドへと飛び込んだ。勢いに甘んじて彼女を受け入れた大千は、そのまま彼女をなんとか引つ張り、枕元まで背中であつた。こういう時、利空ならもう少し軽々しく引つ張るんだろうなあ、なんて思いつつ。

大千は夏用の薄手の掛け布団を自分たちの体へとかけて、自分の胸元に顔を埋めていくクラクストンの様子を伺つた。クラクストンからはグズグズと泣きじやくつてるような声が聞こえ、涙の水分がこちらの寝間着にも滲んでるのが分かつた。

クラクストンはしやくり上げながら、大千に言つた。

「絶対に……絶対に、忘れないでくださいね。それと、提督になつたら私のこと迎えにきてくださいね、絶対に」

「……うん、約束する。だから、安心して」

「ありがとうございませ……」

大千がクラクストンの頭を撫でると、クラクストンはただでは離してやらないと言わんばかりに、大千を抱きしめる力を一層強くした。

大千はそんなクラクストンを優しく受け止めながら、彼女と共に眠りについた。

041：ひとりの女の子として

それから8月の間、大千とクラクストンは一つの屋根の下で寝食を共にしていた。大千は勉強や絵本作りの息抜きついでに、クラクストンをあっちこっちへ連れ回したりしたが、特に反応が良かったのは、本屋や図書館だった。そして、そういったところで、クラクストンの好きそうな絵本を見せてみると、彼女は嬉しそうにその中を眺めるのである。

大千はそんなクラクストンを見るたび、「本当に絵本が好きなんだなあ」と思いながら、彼女が分からないと言った単語や、言葉の意味を説明した。クラクストンは彼の解説を聞くたび、「なるほど」なんて、感心した声を漏らすのである。

クラクストンは図書館でいつも通り、絵本を眺め、大千から言葉の意味を教わって、本を閉じた。

「大千様は本当に、こういったことにお詳しいんですね。私が知らないことを、たくさん知ってます」

「何事にも興味を持って、調べるのが大事だからね。でも、世の中難しい言葉がたくさんあるし、ちゃんと理解するのは大人になってからじゃないと駄目かも」

「そうしたら、今よりもっと、大千様から教わることができませんね。何事にも詳しくて
理知的な男の人って素敵だと思いますし」

「理知的な男の人、かあ……」

と、大千が顎に手を当てて脳裏に浮かべたのは、スーツをビシッと決めて、眼鏡がよく似合うオールバックの男性だった。清潔感があり、真面目そうだが、教え方が上手い、そんな男性像が、彼の中で浮かび上がったのである。

自分がそんな風に成長出来るとは思えなかったものの、クラクストンがそう思ってくれるなら、自分のなりたい男性像の一つとしてカウントしてもいいか、と、苦い笑みを浮かべた。

「僕がスタイリッシュに成長したら、そんな男の人になつてみたいかもね」

「すたいりっしゅ……？ はい、よく分かりませんが、大千様ならなれると思いますよ」
クラクストンはとにかく、大千の言葉を肯定する。大千は、彼女からの肯定を受け止めつつ、彼女の期待にはなんとか答えたい、と思った。

そうしてふたりが絵本を元にあつた場所に戻し、図書館を出ようとして、出入り口へ歩いたところへ、見覚えのある白いワイシャツを着た少年へと目が行った。

「あ……倉竹さん？」

そう、クラクストンを小祿家まで連れてきた少年・倉竹であつた。

倉竹は出入り口の近辺にある休憩所を借りて、海や船に関する資料を眺めていた。どうやら、ここには調べ物をしに来ているようだ。

大千は邪魔をしたら悪いかと、最初は倉竹に話しかけしないで帰ろうとした。しかし、クラクストンはそうでもなかったようで、倉竹の姿を見るなり、そちらの方へと駆け寄った。

「倉竹さん！」

「ち、ちよつ……クラちゃん、邪魔したらダメだよ」

大千はクラクストンを止めようと彼女を追いかけたが、倉竹とここからの距離はあまり遠くなく、多少でも早歩きにすれば、すぐに辿り着く距離だった。故に、大千はクラクストンを引き留めることが出来ず、クラクストンが倉竹の元へ行くことを許してしまったのだ。

倉竹はそれまでずっと資料を眺めていたが、ふたりの姿が、ふとした瞬間に目の中へと飛び込んでくると、顔を上げて、大千とクラクストンを見た。

「ああ、大千さんとクラクストンか。図書館に頻繁に来てるって聞いたけど、本当に会えるとはね」

「はい。来ない日はほとんどないと思いますよ」

「す、すみません。調べ物の邪魔をしまして」

笑顔で答えるクラクストンと、雑談をする前に謝ることはしつかり謝る大千。対照的なふたりの態度に、倉竹はフツ、と小さく笑みを漏らして、まずは謝罪してきた大千へと言葉を入れる。

「あはは、問題ないよ。別に急ぎのものでもないし、ここだけでしか調べられないって訳でもないし」

「ほ、本当にすみません……それで、何を調べてたんですか？」

「ああ、これかい？」

倉竹は大千に言われて、自分が読んでいた本を見せ付けるように持ち上げた。

「もうちよつと軍艦について詳しくなろうと思って、いろいろ眺めてるんだ。俺の仕事は、そういうことに関することだから」

と、

「ただ、日本の軍艦はともかく、アメリカの軍艦はなかなか資料が見つからないね。現代の船ならもう少し詳しいんだらうけど、第二次世界大戦真っ盛りの軍艦ってなると、それなりに有名な軍艦しか資料が見つからなくて」

「……軍艦といえば」

大千はふと、口にする。

「勉強してる間、クラクストンって名前のアメリカの駆逐艦の名前を見かけたんですけ

ど……クラちゃんとか何か関係あるんですか？」

「えっ……あー……うん、分かりやすく説明するのが難しいんだけど、聞いてくれる？」

「はい」

大千は頷き、クラクストンと共に倉竹の話へと耳を傾けた。

倉竹は続ける。

「まず、最初に、クラクストンは立派なヒーローにならなきゃいけない、って説明しただろっ？」

「はい。クラちゃんからも、海に出て戦わなきゃいけない、って聞かされました」

「うん、そこまで理解してれば話は早いかな」

と、

「クラクストンはね、軍艦の魂を引き継いだ女の子なんだ」

「……軍艦の、魂？」

大千はなんのこっちゃや、と、首を傾げてクラクストンと倉竹を交互に見た。クラクストンは自分の役割や正体は分かっていると云わんばかりに、倉竹をただ、見据えていた。

倉竹は、続ける。

「俺の職業は、クラクストンに限らず、軍艦の魂を引き継いだ女の子達を指揮する——つまり、提督ってわけなんだよ」

「提督って……倉竹さん、そんな立派な人だったんですか」

「とは言っても、昔と今じゃ状況は全然違うっていうか、この世界には、俺と同じような人が沢山いるんだ」

と、

「普通は建造とかで、完全体になって出てくるんだけど、たまーにここにいるクラクストンみたく、普通の人間のように生まれてくる女の子もいる。そして、後から軍艦としての記憶を有していることが発覚して、俺たちのところへやってくる。そう言った子達を保護するのも、俺たちの仕事でもあるんだ」

「へえ……じゃあ、クラちゃん、クラクストンっていう名前の軍艦の魂を引き継いだ女の子なんですね。それで、大きくなったら海に出て、戦わなきゃいけないと」

「うん、有り体に言うとなんかそうなるかな」

倉竹は大千の要約に頷き、

「兵学校に行ったら、その辺のことは詳しくやるとは思うけど、簡単に説明するとこんな感じかな」

そして、倉竹は神妙な顔になり、大千へ言う。

「……君はこれからそういった世界に飛び込んでいくけど、大きくなっても、クラクストンのこと、ちゃんとひとりの女の子として見てやれるかい？」

「えっ……」

「たまにいますからさ。兵器だから何をしても良いって輩がね」と、

「この話を聞いても、クラクストンのことを一人の女の子として見てくれるなら、俺たちの世界に飛び込むことを歓迎するよ。今の界限に必要なのは、人として最低限気遣える提督だからね」

「う……そんなこと言われると、なんか変に意識して、緊張してきたって言うか」

「君にプレッシャーをかけるつもりはないよ。でも、君には、人として、間違った道には行かないでほしいってだけだから」

倉竹はそう言うのと、自分の横に置いていた本を手にして、ベンチから腰を持ち上げて立ち上がった。

「じゃ、君たちのことを家まで送らないとね。俺もこれから帰って、やらなきやいけないことあるし、丁度いい」

「そ、それは悪いですよ。調べ物は良いんですか？」

「さつきも言った通り、急ぎのものではないから。とりあえず本を戻すから、ここに座って待ってて」

倉竹はクラクストンと大千を自分が座っていたベンチに座るように指示してから、そ

のまま本を腕の中に抱えて、それらを元あつた場所へと戻しに行つた。

そこで待つことになつた大千とクラクストンは、とりあえず倉竹が指示した通りにベンチへと腰掛けて、彼の帰りを待った。クラクストンはさっきの話のことがまだ脳裏に残っているようで、大千へと話した。

「大千様。倉竹さんから私の話を聞いて、どう思いましたか？」

「えつ……どうつて？」

「んーと、怖いとか、ヤバいとか……そこまで行かなくても、びつくりはしてると思ひますけど」

「ま、まあ……ちよつと、飲み込めないところはあるかな」

大千は苦笑しながら、頷くと、神妙な表情になつた。

「君が役割を持つて産まれてきたなんて思いもしなかつた。僕は君のことを、普通の子だと思つてたから」

「……普通の女の子じゃない私は、嫌ですか？」

「そういうわけじゃないよ」

と、

「僕が君のことを可愛いとか言つてる間にも、君には君の進むべき道を進んでるんだな、つて、気持ちが強いな。僕がずっと君の側にいられたら、いつでも支えになれる

のに」

「でも……それだと、私が甘えん坊さんになっちゃうから、ダメですよ」

クラクストンは首を横に振り、大千からのたらればの話拒否した。

「大千様のその気持ちはすごく嬉しいです。でも、私は私でちゃんと修行して、立派な女の人になりたいんです。周りにはすごい女の人がたくさんいるし、負けたくないんです」

と、

「えーっと……だから、そう。花嫁修行つてやつですよ！ 旦那様に迷惑かけないように、私はたくさんお勉強して、修行するんですよ」

「花嫁修行、ねえ……この場に於いては何か違う気がするけど、君からしたら、そういう例えの方がモチベーションが上がるんだろうね」

「ふふ、何事も好きなことに繋げるんですよ」

クラクストンはクスクスと笑みを浮かべ、

「それで、大千様。私、せめてあなただけには、ちゃんとした女の子として扱ってもらいたいと思ってます」

と、

「ずっとあなたと一緒にいて、分かったんです。私たちの存在は普通ではないけれど、側

に私を大事にしてくれる人がいるのなら、それに応えようと頑張れるんだって。……私は9月に入ったら、沖縄から去っちゃいますけど」

続けて、

「……私、大千様のこと大好きです」

「……！」

大千はクラクストンの言葉に思わず驚いて、目を丸くした。

クラクストンはそんな大千をよそに、続ける。

「お互いこれから、別々の道に進んじやいますけど……この気持ちだけは思い出したくないです」

「く、クラちゃん……」

「あなたが別の人を好きになっても、私はずっとあなたのことが好きです。それだけは、どうしても伝えなかった」

クラクストンがそこまで言い終えると、本を戻し終えたらしい倉竹から声が掛かった。

倉竹はふたりの方へと歩み寄ると、彼らの頭をポンポンと撫でた。

「クラクストン、大千くん。待たせたね、帰ろう」

「倉竹さん。ありがとうございます」

「は、はい……」

クラクストンはベンチから降り、大千もまた、ベンチから降りた。

大千は帰り道、クラクストンからの告白について、つい、考え込んでしまった。

クラクストンがこちらに想いを寄せているのは、大千も薄々と気付いていた。出会ってから今日になるまで、従弟の利空からも、クラクストンから自分に対する態度について何度か突っ込みを入れられていたし、それほどあからさまな態度に大千も気付けなかったわけじゃない。

ただ、こうしてちゃんと言葉にされてしまうと、どう受け入れて良いのか分からなかった。

大千はとりわけ女の子から人気がある男子であるわけでもなく、その辺はごくごく一般的な少年だ。だから女の子から、こういった告白されていることに慣れていないわけでもない。

しかし、そんな大千の中でも、確立している感情はあった。

（僕も……クラちゃんのこととは好きなんだろうな、やっぱり。恋としての好き、つて感情はよく分からないけど、きつと、そう）

そして、大千は自分の隣で歩いているクラクストンへと目を向けた。

クラクストンは鼻歌を歌いながら、大千の右手に自分の左手を重ね、ギュツと握り締

めている。

(……いつもなんとなく繋いでたけど、この子なりのアピール、なのかな)

そう考えると、クラクストンは普段から、彼女なりにこちらへ想いを伝えようとしていたのだろうと思う。ただ、それは子供同士ではよくあることであり、大千もそこまで深くは考えたことがない。

大千は彼女に握られている手で、なんとなく、彼女の手を握り返した。

「――」

クラクストンはそれに反応して、鼻歌を止めてしまった。が、数秒してから、再び鼻歌が鳴り始めた。

大千はそんな彼女を見つめてから、近付いてきた自分の家へ目を向けた。

(……僕からも、ちゃんと伝えなきゃ。クラちゃんのが好きだって)

こういったことは、言わなければ伝わらない。

大千はそれだけ心の中に抱えて、クラクストンと共に家へと向かった。

042：掘り起こされた記憶

8月31日。

とうとう、クラクストンと大千がふたりで過ごせる最後の1日を迎えてしまった。

大千はクラクストンに告白されてから、どうやって彼女に自分の気持ちを伝えようか、ずっと考えていた。もっとロマンチックな場所で伝えるべきか、とか、彼女が好きそうな場所で伝えるべきか、とか、年齢に似つかわしくないロマンチックな悩みを抱き、結局のところ、家で告白するのが一番であろう、という結論が出た。

大千はいつも通りクラクストンの絵本作りに口を出しつつも、その傍らで勉強して、そのタイミングを伺っていた。そして、そのことばかり気にしてしまつて、どうしても勉強に集中できない。

——今日言わなければ、二度と今の気持ちを伝えられなくなる。

大千は顔を上げて、ノートから目を離れた。そして、その視線をクラクストンへと向ける。クラクストンは床にスケッチブックを置いて、クレヨンで絵を描いていた。

大千は椅子から離れて、クラクストンの方へと歩み寄り、彼女の視線を合わせるようにしゃがみこんだ。

「……クラちゃん?」

そして、彼女に声を掛けた。

クラクストンは大千から話しかけられると、スケッチブックに向けていた顔をこちらへと向けて、笑みを浮かべて答えた。

「はいっ、大千様。なんででしょうか?」

「あの……その、ちよつと話が」

と、

「この前、君が僕に告白してくれた件についてなんだけど」

「は、はい……?」

「僕も、言われてばかりじゃなくて、ちゃんと口にしなきゃって思ってた」

大千は彼女の手の上に、自分の手をそつと置いた。冷房が効いてひんやりとした彼女の感覚が、大千の手のひらへと伝わった。

大千は恥ずかしさから、クラクストンから視線を逸らしたり、泳がしたりしつつ、かなりの緊張を見せた。そして、そんな時間が数秒ぐらい経つてからだろうか。クラクストンの不思議そうな表情に見つめられながら、大千は言った。

「その……君のこと、ひと目見たときから可愛いって思ってたし、口にもしてたけど」と、

「多分、それって君に一目ボレってやつをしてたからだと思うんだ」

「ヒトメ……ボレ？」

「初めて出会った時に、大好きだなあって思うことかな」

大千は続けて、

「僕は恋愛については本当知らないし、自分のこの気持ちはどう表現していいのか分からないんだ。僕が今言った一目ボレだって、君の想定している感情とは違うかもしれない」

そして、

「でも、君のことを好きなのは確かなんだよ。それだけは絶対」

——言い切った、と、大千は表面上冷静に取り繕いつつ、内心かなり緊張していた。

大千はそこからは黙って、クラクストンの返答を待った。彼女の様子なら否定的な言葉は言わないだろうと思いつつ、もし万が一のことがあったらどうしようとか、そんな不安ばかり脳裏を過ってしまう。

クラクストンは大千のことをジッと見つめて数秒程度してから、声を出した。

「大千様」

「う、うん」

大千はドキツとして、クラクストンを再び見る。

クラクストンは優しく笑みを浮かべ、続ける。

「恋愛について分からない、自分の感情についてもそうなの分からない、と仰ってましたけど……ひとつ、それが分かる方法があります?」

「方法?」

「はいっ」

クラクストンは笑みを浮かべて、頷いた。

「大千は、私と結婚したいと思いませんか?」

「……け、結婚?!」

大千は彼女の口から飛び出た言葉に、思わず変な声を出して反応してしまった。

クラクストンは改めて、と、言わんばかりに、こほん、と咳払いして、大千に言った。

「大千様……いえ、未来の私の司令官様。大きくなったら、あなたの『奥さん』になりましたです!」

「……!」

大千はその言葉で、ハツとしたように、目を丸くした。

クラクストンは続ける。

「大千様はどう思っていますか? 私のこと、奥さんにしたいですか?」

「う、うん……したくないって言ったなら、どう足掻いても嘘になる……と思う」

「……なら、良かったです」

クラクストンは嬉しそうに声を弾ませた。

「私の好きと大千様の好きは、きつと同じです。大きさの程度はあるけど、恋愛としての好きに変わりはないと思います」

「クラちゃん……」

「だから、私のこと堂々と『好き』って言っていていいんですよ、大千様。今の私から言えるのは、それだけです」

大千の言葉聞いて、ニコニコと嬉しそうに笑みを浮かべる彼女の顔が、幼い大千の目の中に、非常に強く焼き付いた。

大千はクラクストンの頭をポン、と、撫でて、そのまま照れ混じりに、慣れていない言葉を口にした。

「クラちゃん……その、好き、だよ」

「もつと言ってください！」

「す、好き……」

「もう一声！」

「だ、大好き……だよ」

と、大千が顔を真っ赤にしながら言い切ったところで、クラクストンは「はい」と頷

いた。

「うふふ、満足です。この後、kissもすれば完璧なんでしょうけど、それは大きくなってからです」

クラクストンは自分の口元に人差し指を当てて、悪戯に笑みを浮かべた。

「大千様。もし、将来また出会えたら、よろしくお願いしますね。これから私たちが歩いていく世界は、そう簡単に巡り合えるような世界ではないんです。狭く見えて、広いんです」

そのクラクストンの笑みは、大千から見ても、寂しそうに見えた。折角、「好き」を言い合える相手とこんなところで巡り合えたというのに、ここから別れて、それぞれお互いの道を歩んでいってしまう。その先で一緒になる確率はとても低く、クラクストンもそれを分かっているのだ。

しかし、大千は言う。

「……なら、絶対に見つけ出して、迎えに行く」

「え……？」

「時間はたくさんある。だから、君と巡り合えることを諦めたりしないよ」

と、大千は笑みを浮かべ、

「僕は……ずっと、君のことを好きでいる。再会するまで何かがあつたとしても、僕は君

をまた好きになる」

と、

「——また、一緒になろう、クラクストン」

——そして、そこまで描かれた思い出は、目の中に飛び込んできた暗い光景とともに、掻き消えた。

小禄大千——改め、島田は、背中から伝わるひんやりとした床の感触や、夏入りかけとは思えない冷たい空気を感じながら、ただ、ぼーっとしていた。寝起きで頭が混乱して、自分の置かれた状況が思い出せなかった。

(僕……あれ……あつ……そうか、結局誘拐された、のか?)

とりあえず、まずは気絶する前に起こった出来事を思い出し、状況整理をした。

岸尾とスミスコンビの裏切りや、ジュッサーノ率いる新海軍の襲撃など、衝撃なことはたくさんあったが——島田にとって一番気掛かりなのはクラクストンだった。

(クラクストンも誘拐されてるのかな……。ってか、眼鏡がないから視界がボヤけてて、気持ち悪い……)

と、島田は上半身を起こした。

(……それに)

自分が先ほどまで見ていた夢——自分の記憶の底に沈んでいたものが、夢となって放出されたのであろうか。

これでも夢になっているのは断片的な記憶であるため、完全に思い出したとは言えないが——島田はこれでクラクストンと自分が幼い頃に出会っていたことを、はつきりと思いつけたわけだ。

（僕が二度も彼女を好きになった、っていうのは、そういうことか。でも、なんで、こんな大事な記憶が抜け落ちていたんだらう。これだけ印象的なら、忘れるはずなのに）

島田は、これでもそれなりに記憶力には自信がある方だ。で、なければ、提督などやっていけないし、そもそも良成績も叩き出すことは出来ない。そんな彼が、幼い彼女との記憶全般を忘れていくというのだから、外からの圧力によつて忘れていく可能性が高い——のだが、さすがに、そこまで思い出すことはできなかったようだ。

ただ、彼女が自分を忘れていくことは把握してる以上、自分の記憶が外圧で消されたのはほぼ確実だろうし、倉竹もそれを了承した上で、自分を舞鶴へと招いたのだろう。彼女と自分を、どうにか引き合わせるために。

同時に、島田はクラクストンに対して申し訳ない気持ちで、胸の中が溢れ返った。（クラクストン……ごめん。忘れなくて言ったのに、忘れちゃったよ。当時の僕は、何があつても絶対忘れないって思ってたはず。僕だし）

と、

(こんな大事な思い出を君だけが抱えてたなんて、そりや出会った時に温度差があるに決まってる。ダブルベッド注文したって無理ないさ。当時は一緒に寝てたんだから)

島田は額に手を当てた。

(もし、僕が君のことを覚えていたら、僕たちの今の関係だつてもつと進んでたに違いない。君から求められても、全部受け入れることだつて出来た。でも——僕が忘れてたせいだ！)

島田は前髪をグシヤリと、右手で握り締めた。右手は自分の右目を覆っており、露出しているのは左目のみ。しかし、その左目だけでも島田の今の心情が分かるぐらい、彼の目の中には水分が溜まっていた。

今にでも決壊しそうな感情を抑え込みつつ、島田はなんとか立ち上がって、周りを見た。

(……っ、ここには、クラクストンはいないよな、さすがに)

島田は岸尾、クラクストンはスミスに拐われているはずなので、それぞれの場所に置かれていると思われる。岸尾は島田の収容は、このよく分からない、暗い部屋にしたようだ。

島田はそのまま、急ぎ足で出口を探し始めた。あの夢を見た後で、ここでのんびりな

んでできない。あっちこっちをひたすら周り、触り、扉を探し当てようと必死になった。(クラクストン……今すぐ君に会いたいよ。どうしてこんなタイムミングで思い出しちゃったんだよ。せめて、彼女が隣にいる時に思い出させてくれよ!)

——もし、彼女が隣にいれば、すぐに抱きしめて、自分の気持ちを有りのままに伝えることが出来るのに。現実とは、なんて無情なのだろうか。

そして数分ぐらいして、ドアノブらしきものに手が触れた。

(これか!)

島田はそのドアノブに手を伸ばし、握り締めて、ガチャガチャと荒々しく引つ張った。しかし、外から頑丈に鍵がかけられているらしく、扉の方がピクリとも動こうとしない。

(くそっ……!)

島田はそれから扉に対して、体をぶついたり、蹴ったり、殴ったりして扉の破壊を試みてみたが、12〜13歳の未発達な男子の体では、扉はびくともせず、島田の前に立ちほだかるのみだった。

とりあえず、何か主砲が使えることができたならそれが一番なのだが——そんな都合のいい話なんてあるわけもなく、島田はその場で項垂れた。

(どうやってこの扉を壊せば……)

と、島田が悩み始めたところで、ガコン、と、何か大きい鉄が落ちたような音が、島

田の耳の中へと飛び込んできた。

島田はハッと顔を上げ、その音がした方向へと目を向け、部屋全域に通る声を上げた。

「誰だー！」

さすがに自分以外誰もいないと思いたいが、深海軍がこちらの目が覚めるのを待ち伏せしていた、なんてことが有り得ない状況でもない。

島田は扉から離れて、ズカズカと音の下方向へと進むと、その島田の声を聞いた少年が返すように、弱々しく声を上げた。

「ひ、ヒイツ……す、すみません、怪しいものじゃない……です」

その声が島田の耳の中に入ってきた瞬間、懐中電灯のような光がこちらへと差し込んできて、辺りを照らした。その光はあっちこっちへと泳ぎ、気弱な持ち主の心情を表現しているようだった。

そうして、明かりに照らされて島田の目の前に現れたのは、こちらと似たような制服を着た少年と——もうひとり、少女の姿。少年は不健康的そうな隈がある目、少女は銀髪を細長く括っている髪型と、それぞれ特徴的な見た目を持ち合わせていた。

特に少年は島田を見てビクビクしているようで、島田は苦笑みを浮かべて、少年に言った。

「あつ……えーっと、ごめん。てっきり深海軍の誰かが待ち伏せしてるのかと思っ
ちやつて。とりあえず、そんな警戒しなくても良いから」

「……えっ……あ」

少年は、どこかそわそわと落ち着かない様子で目線をあちらこちらへと動かし、何か
気付いたような表情をして、島田に問いた。

「あ、あの……もしかして、舞鶴の島田さん……ですか？」

「う、うん、そうだけど。眼鏡もないのによく分かったね」

「……も、申し遅れました」

少年はその場で、ビシッと敬礼した。

「お、オレは横須賀鎮守府所属の吉川です。こっちは秘書艦のホーエル」

「フレッチャー級、タフィー3のホーエルです。よろしくお願ひします」

少年と少女改め、吉川とホーエルはぺこりと島田にお辞儀して、顔を上げた。

島田もそれに合わせて、「は、はあ……」とお辞儀をして、吉川とホーエルを見た。吉

川は、コホン、と咳払いした。

「じ、じゃあ……事情説明からしましょうか」

043：話せなかつたこと

吉川は自分とホーエルがどういった経緯でこんなところにいるのか、そして、ここがどんな場所であるかを島田に説明した。

島田はここが横須賀なのは薄々察してはいたものの、この部屋自体かなり隔離されているような場所にあるとは思っておらず、余計に頭を抱えた。ゼヴィンが指定した場所ならばそのぐらいは当然だろう、とは思えるのだが、やはりゼヴィンからすれば、自分以外の人間はモノでしかないのだな、と思った。

島田は会話の中で、吉川について何か察したらしく、質問した。

「吉川くん、君……もしかして、例のUSBをシャーリーに持たせたり、呉に横須賀の地図送ったりしてる？ アイツのことこそそこそ嗅ぎ回ってるってなると、そうだよな？」

「ふえっ?! あー……そ、その……」

吉川は島田のその質問に対して、凶星と言わんばかりのリアクションを見せ、視線をとにかく泳がせていた。吉川の隣で話を聞いていたホーエルは苦い笑みを浮かべながら、彼に言い放った。

「司令官、島田さん困ってますよ。聞かれたら、ちゃんと口にしなきゃ」

「う……そ、そうだね」

吉川はホーエルに言われて頷き、そのまま続ける。

「えっと……そう、です。それら、全部オレがやりました。USBのことは、シャリーさんには言つてませんけど……」

「なるほど。君のことはよく分かった」

それだけ聞いて、島田は頷いた。

「君たちはいつからここに？ 思つたより日は浅いように見えるけど」

「えーつと……12時間ぐらいは経ちます……かね？」

吉川はスマートフォンを開くと、時間を確認して、島田にそう言った。島田は彼のスマートフォン画面を覗き込むと、すでに深夜帯なことに驚き、目を丸くした。

「12時間……ってことは、昨日の昼頃からここにいるのか」

「は、はい……少なくとも、ジュッサーノたちが出発する前だったのは確かです」

「だとしたら、さっさとここから出たいところだよな。扉はなかなかびくともしないし、このままだと、ここで干からびてしまう」

島田は部屋の出入り口がある方へと目を向けた。

現状、このまま素手であの扉を破壊するのはまず無理で、そうなればホーエルが主砲を放つしか方法はない。しかし、ホーエルは今現在、艀装を装備をしておらず、ここに

ある古い装備の山にも全て弾薬がないと来た。少なくとも、今のままではここから出ることは出来ないのは確実だ。

かくなる上は――。

島田としてはあまり使いたくない手であったが、それしかないと、提案した。

「ここつて、古い装備の集積所でもあるんだよね?」

「は、はい……一応そういうことになってるはず、です」

「主に、改造済みの艦船から外した装備や、そうでなくてもとっておきたいものがあるって感じらしいけど」

と、

「もし、ここに頑丈な紐があつたら、持つてきて欲しい。僕も探すけど、僕が考えている方法には必要なんだ」

「紐……? いや、まあ、いいですけど……一体どんな方法を?」

「かなり強引だけど」

続けて、

「ミサイル弾があるなら、手で扉にぶつ放す! ……つて感じで、ぶち壊そうと思うんだ」

「……は?」

吉川はらしくない声を上げて、島田に続けた。

「あ、あの、本気で言ってます？　　っていうか、発射装置使いましようよ。危険すぎますよ、それ」

「そうしたいのは山々だけど、発射装置はミサイル艦にしか扱えないからね。ミサイル艦以外が使おうとすると、びくともしないんだよね、アレ」
と、

「僕が武闘を真剣にやってくれば、もう少しまともな方法思い付いたかもしれないけど……今回はそれしかないと思ってる。ね？」

「い、嫌ですよ……」

吉川は島田の提案に首を横に振り、

「た、ただでさえ、扱い危ないのに、間違っちゃって変なところに落ちたらどうするんですか……それに、それでこの中が火事になったら、それこそ脱出する前にオジャンですよ、オレたち」

「だったら、君がもっと良い案を出してくれ。僕もこの案は馬鹿げてると思ってるし、他に良い案があるなら、僕もそれに乗る。みんなが考えるようなことは、この場じゃ全て使えないんだ」

と、

「それに、君たちだって、ここから出たいんだろう？　なら、手段は選ばない他はないはずだ。僕だってここからとつと出たいし、そうなったら使える手段は全部使うつもりでいる。なりふり構ってられないよ」

「……島田さんがそう思うなら、勝手にしてくれば良いですけど」

吉川は続けて、

「どうして、あなたはそこまでやろうと思えるんですか。やっぱり王族の血がそうさせてるんですか？」

「うーん、みんなここぞとばかりに琉球王族をネタにしてくるよなあ。岸尾くんにも引き合いに出されたし」

島田は苦笑しながら首を横に振り、

「でも、血筋とかは関係ないよ。僕は僕なりにやれることをしたいだけさ。そうしなきゃ進めないからさ、前に」

「……」

吉川は島田のその言葉を聞くと、そのまま装備がある方へと黙って向かって行った。ホエールは島田にペこりとお辞儀しつつも、柔らかく笑みを浮かべて、何も言わない吉川の代わりに、その表情で島田に何かを伝えた。

察した島田は「やれやれ」と頭をぼりぼりと掻き、そのまま吉川を追いかけ、話しか

ける。

「まったく、そのぐらいちゃんと言にしなきゃ伝わらないよ。そんなところまで見た目通りの不器用さでどうするんだよ」

「お、オレと島田さんは違いますから……」

と、吉川はスマートフォンをライトを装備一体へと向け、島田とホエールと共に扉の破壊に使えそうなミサイルを探し始めた。

島田があれでもない、これでもない、と、装備の中を漁っている中で、吉川が話を振った。

「……島田さんは、なんで、こんな界限に来たんですか」

「こんな界限って？」

「いや、その……提督界限っていうか」

吉川は目を合わせていないのに、思わず視線を逸らしつつ、そのまま質問を続けた。

「島田さんは兵学校で冷遇されてても、この界限目指すの辞めようとか思わなかったんですか？ オレからすれば、それが一番不思議だなんて思ってた」

「……それは、僕も不思議なんだ」

島田は小さく笑みを浮かべ、

「確かに辛かったけど、僕の中で何か大きい感情が突き動かしてたんだよね。……その

大きい感情を作ったのは、きつとクラクストンなんだろうけど」

(彼女を忘れても、なお、約束だけが残った、か……)

島田はボソツと最後の一文を加えると、夢で見た約束の光景を脳裏に浮かべた。

自分でもここまで来れたのが本当に不思議で、意地でも提督になつてやる、という意思だけで鎮守府着任まで漕ぎ着けた。もちろん、ゼヴィンのことはあるが、それ以上に果たすべきことを果たしたいという気持ちが強かった。

それが、記憶の底で眠っていたクラクストンとの約束なのだろう。

クラクストンとの約束は表面上、すっかり綺麗に忘れて去られてしまったものの、島田の根本的なところにしつかりと根を張っていたため、本能がそれを忘れることができなかった。

島田がボソツと小さく言った言葉は、吉川にはあまり聞き取れなかったようで、吉川は、「？」と首を傾げながら、目の前に出てきた駆逐艦の小型主砲を、そつと退けた。

ホーエルも吉川の隣で、なかなかいいミサイルが見つからない状況に、「うーん」と厳しく唸っていた。吉川はそんなホーエルに、話しかけた。

「……ホーエル」

「は、はい？ 何か見つかりましたか？」

「あ……そうじゃなくて」

吉川は申し訳なきように首を横に振り、続ける。

「……島田さんって、なんか……その……オレと全然違う」

「あら」

ホーエルは吉川から漏れた言葉に、思わず小さく笑ってしまった。

「ふふ、島田さんと司令官が同じだなんてことはありませんよ。島田さんは島田さん、司令官は司令官でしよう?」

「あー……いや、そうじゃなくて」

と、

「その……シャーリー提督から聞く限りだと、オレと同じように教室の隅にいるような人なのかな、って思っ」

「っていうと……大人しくて、友達の数も絞ってる感じですか?」

「……そんなイメージ」

吉川はホーエルの的確なその例えに、コク、と、頷いた。

「めちやくちやインテリで、そういう感じの人かな……って思っただけど、全然違った」
続けて、

「その……教室の隅にいようとしても、居てもたつてもいらなくなる人だと思っただろう……漫画でよくある、とんでもない生徒会長とかいるけど、そんな感じ」

「漫画はよく分らないですけど、司令官からすれば、それだけ島田さんは凄い人つてことなんですね」

「有り体に言うと、そう」

と、

「あのゼヴィン提督が島田さんを敵視するのも、少し分かる……かも。自分が一番だと思っていたのに、それをすぐに追い抜く存在って、嫉妬しても仕方ないし……それに」

「それに？」

「……もし、何においても自分が一番だって強く思ってる人なら、ああいう人は邪魔ではない、かも」

「……そうですね」

ホーエルは深く頷いた。

「ゼヴィン提督の詳しい目的はよく分かりませんが、自分が一位になるつもりで取り組み、名声は全て自分のものだと思ってるのなら、島田さんに攻撃的なのも無理はないですね。でも、それは島田さんを貶めていい理由にもならない」

「うん」

吉川は頷く。

さすがにこの辺にミサイルは無いかと、吉川は息を吐き、己の位置を横へスライド

させた。

「そして、ゼヴィン提督のことは、そんな島田さんにしか解決できない。外野が何言っても、ゼヴィン提督は自分を悪い意味で突き進むだけ。ゼヴィン提督の心を折らせるには、島田さんの力がどうしても必要になる。何やっても諦めない人が、先陣を切るしかない」

「……そうですね」

ホーエルはクスツと小さく笑みを浮かべ、一瞬ミサイルと見間違えた魚雷を手にも、続ける。

「ただ、やつぱり、そのために必要なミサイルが見つからないですね」

「うん……似た形状のものがあると思ったら、大体魚雷だし、トールボーイとかだし……。っていうか、トールボーイなんて貴重な装備を、なんでこんな辺鄙なところに」
「使い道に困ってるのかもしれないね。でも、持ち出し可能なら、後で情報部の皆様に届けるのもアリなんじゃないですか？ みんな、こういうった空母用の強化部品のデータを欲しがってましたし」

「まあ……後で先輩に聞いてみるよ。多分、大丈夫そうだけど……」

吉川とホーエルはそのまま、島田と共にミサイルを探し続けた。

島田を地下まで運び込んだ岸尾は、ゼヴィンの案内のままに、横須賀鎮守府寮内の一室を借りて、そこで一夜を明かそうと、ベッドの上で横になっていた。スミスはクラクストンの面倒を見るため別行動だが、それが余計に虚しさを感じる。

岸尾はそんな感情を紛らわせようと、手に持っているスマートフォンで、母親とメッセージジャーで言葉を交わしていた。途中、自分の息子が横須賀にいると知った母親は、夜ではあるけれど、と、岸尾に電話して良いか尋ね、岸尾は上半身を起こして、母親からの電話を待った。

母親から電話がかかると、岸尾はすぐに応答した。

「……………お母さん？」

『ふふ、あなたの声を聞くのは久しぶりね。まさか横須賀にいるなんて、びっくり』

母親はクスクスと電話越しで笑ってから、神妙な雰囲気ですぐに岸尾へ質問した。

『それと、提督に辞めるって本当？ お父さんのこと、調べるって言ってたのに』

「提督界にいないのは分かったし、これ以上探しても意味ないかなって思っただけ」

『そう……………』

そして、母親は、突然、謝罪した。

『ごめんなさい。こんな無駄なことをさせて、あなたの貴重な時間を潰してしまった』

「いや、気にしてないよ。提督になって分かったことも沢山あるし」

『違うの……そうじゃ、ないの』

「お、お母さん?」

母親の様子がおかおかしい——岸尾は動揺し始めた。明らかに何かを知っているよ
うな、そんな様子であった。

母親は一瞬だけ間を置いてから、岸尾へと言い放った。

『ごめんなさい……本当に。私……実は、何もかも見ていたの』

「見てたって……なに、を……?」

『お父さんが……私の提督が、行方不明になった瞬間を』

「——えっ」

岸尾はその場で目を丸くした。

母親は続ける。

『ずっと、嘘をついていたけど……これ以上、あなたに嘘はつけない。ただ、その様子だ
と、お父さんが戻ってこないことは知っているけど、細かいことまでは知らないみたい
ね』

「細かいこと……って、もしかして、お父さんを連れ去った女も知ってるってこと!」

『……そう。ただ、この事実は、あなた自身で調べて知るべきだと思っ言わなかった。
私から口にするには、あまりにも衝撃的すぎるから』

と、

『でも、すべて話すわ。何があったのか、全部。今のあなたなら——「大丈夫」だと思うから』

044:Not Late!

舞鶴鎮守府内では、当然のように島田たちの件について持ちきりになっていた。いや、島田のこともそうであるが、島田とクラクストンを攫って行つた岸尾とスミスについても、だ。鎮守府内での裏切り行為すら許されないとこののに、鎮守府関係者を連れ去つたのは、あまりにも大きな話題過ぎた。深海軍とも縁を持つてゐるのならば、尚更であらう。

夜を回つてからも、シャーリーと大原は眠ることすらできず、それぞれの秘書艦を連れて、倉竹の執務室にずっと引きこもつていた。特にシャーリーは島田と岸尾の關係が良好になつていくのを見てきたため、このことに強いショックを抱き、下手をしたら当人たちよりも傷付いてるようにも見える。

そして、執務室内には倉竹だけではなく、岩国の姿もあつた。

倉竹は先ほどまでこちらに入つてきた情報を有明と共に整理しつつ、岩国の姿をチラツと見た。岩国はこちらと一緒に情報を精査しながら、手伝つてくれている。

岸尾とスミスが島田とクラクストンを攫つたと、シャーリーと大原から聞いた時に、「すでに遅かつたか——と、岩国が後悔していた様子を倉竹は見ている。岩国は島田周

りで何かが起こる可能性があるのを知っていたようで、それを防ぐ前に動けなかったことに悔しさを感じているのだろう。

——でも、それは倉竹も、シャーリーや大原といった面々も一緒だった。

話題も何も無い、沈黙が広がる執務室の中で、ジェルジンスキーは口を開いた。

「ねえ……みんな、どうするつもりなのよ」

ジェルジンスキーがそう静かに言い放った途端、部屋の中にいるメンバー全員が顔を上げて、ジェルジンスキーを見た。

ジェルジンスキーは辺りを見渡し、続ける。

「島田もクラクストンがいなくなつて、その上、岸尾とミスがふたりを攫つて行った。あまりにも情報量が多いけど、こんなところでじつとしていられる場合じゃないでしょ？」

「んなこたあ、分かつてらあよ」

ジェルジンスキーの言葉に対して、真つ先に大原の声が上がった。しかし、大原のその声音にはどこか覇気がない。

「……分かつてるからこそ、どうしていいか分からねえよ。横須賀に突撃するにしたつて、本当にそこにいるかどうかすら分からねえんだ。万が一間違つたら、それこそ俺たちの首がまとめて飛ぶぞ」

「そうだね。まずは横須賀にいる、っていう確実な情報が欲しい」

シャーリーの賛同の声が上がった。

「それに、元々あそこにいたから分かるけど……建物のことよく分かっていると侵入も脱出も、なかなか難しいよ。そこを含めて計画しないと」

「そうですね、私たちもデンバーさんの助けがあつてここまで来れましたから」

應瑞が顔を上げて、シャーリーに同意した。

「もちろん、行くなら今しかありません。あそこに侵入するのなら、深夜〜早朝が一番都合が良いんです。警備の人数も減つてますし、なんなら見回りの人の隙を突きやすい」

「うん、應瑞ちゃんの言う通り。なんなら倉竹さんたちには正面から入ってもらつて、僕たちは裏口からこつそりつてことで良い」

「あれ、俺たちも行つていいのかい？」

倉竹はシャーリーのその作戦の提案に、苦い笑みを浮かべながら反応した。

「俺たちが行くなら先に連絡しておかないと、先方もびつくりすると思うんだけど……岩国さん、どうします？」

「ふむ、私たちも行つていいのなら、作戦の幅が広がるな」

岩国は頷き、自分たちが横須賀に行くこと自体には賛成である意思を見せ、頷いた。

「まあ、なんだ。自分で言うのもなんだが、私は気まぐれ屋だからね。いきなり横須賀に

行つても、驚かれても受け入れてはくれるだろう」と

「うーん、そういう人は強いですね。俺は若造だし、門前払いくらいそうです」

倉竹は相変わらぬ岩国を目の前に、クスクスと笑みを浮かべつつ、今、ここに彼がいることが心強く思えた。

岩国は続ける。

「私と倉竹くんが正面から入るので、君たちにはどこかで待機してもらつても構わないかい？ 横須賀には周りに良い喫茶店やフードコートが沢山ある。こちらが連絡するまで、そこで食事やお茶でもして欲しい」

「あら、もしかして、岩国直々に横須賀を探りを入れるつもり？ あそこ規模もあるし、短時間で拾い切れるとは思えないんだけど」

ジェルジンスキーは首を傾げて、岩国に聞いた。自分たちが、近くの飲食店で待機、ということ、岩国と倉竹が横須賀にいられる時間もそう長くはない、という風に読み取れる。要は、ジェルジンスキーの心配は、その短時間でどう島田たちの居場所を確認するのか、ということなのである。

岩国は続ける。

「居場所と言つても、攫つた人物を收容する場所についてはほとんど相場が決まってるものだ。少なくとも、人の出入りが激しい場所には置いておくことはない……だろ

う、倉竹くん？」

「はい、俺もそう思ってます」

岩国に確認された倉竹は、コク、と頷いた。

「ただでさえ横須賀は大規模な鎮守府ですし、表から分かりやすい居場所に監禁なんて真似は向こうも出来るはずがない。でも、そうになると、今度はどうやって人の少ないところに探りを入れてみるかって話になります」

「簡単だよ、倉竹くん」

と、

「横須賀の地図をもらって、ここに行ってみたいと案内人に言えば良いだけさ。私もできれば横須賀の設備や施設については、もう少し把握したかったところだからね、丁度いい」

「でも、それだと怪しまれませんか？ もう少し大きいところから提案して、その上で人のいないところを提案した方が良くもありません」

「カモフラージュ、ということか。なら、倉竹くんが横須賀鎮守府で興味があるところを挙げて欲しい。それを先に提案して、私は素知らぬ顔で過疎地を選ぶよ」

「ああ、いいんですか？ じゃあ、それで行きましようか」

倉竹は岩国に提案されて、コクと頷いた。その声音は、どこか弾んでいるように聞こ

えた。

一方で、シャーリーと大原もそれぞれこの店で待機するかスマートフォン片手に調べ始めていた。——待機する店というより、横須賀鎮守府の周りで美味しい店を探しているようにも見えるが。

ジェルジンスキーと應瑞は職を優先したがる年頃の少年ふたりに、呆れ気味に溜息を吐きつつも、その選定に口を出し始めた。

それから数分ぐらいうると、執務室の扉がガチャリ、と開かれた。同時に聞こえてくる、凜とした声。

「夜分遅くに失礼するわ。倉竹司令……って、みんな、いるのね」

その声に反応して、メンバーが一斉にそちらへ振り向くと、そこにいたのは——クリーブランド級軽巡洋艦・デンバーの姿だった。

デンバーは部屋の扉をパタンと閉めると、コツコツとヒールを鳴らして、一同の方へと歩み寄った。

デンバーがある程度まで近付くと、ジェルジンスキーが彼女の対応をした。ジェルジンスキーはデンバーの元まで近付き、笑み浮かべた。

「デンバー、珍しいわね。あなたがこんな時間まで起きてるなんて。島田たちの件が気がかりなの？」

「ええ……それもあるけど、もつと気がかりなことが出来てしまって」

と、デンバーはスマートフォンを取り出した。

「島田司令たちのことを知らせようと、吉川司令とホーエルに電話しようとしてるんだけど……ずっと繋がらないの」

「……いつから？」

ジェルジンスキーは嫌な予感がして、デンバーに質問し返した。デンバーは続ける。

「少なくとも、夕方に島田司令たちが拐われたのを聞いてからずっと」

と、

「吉川司令はずつとゼヴィン司令のことを調べてたから、それで何かあったんじゃないかと思ってしまう……あまり考えたくはないけど、このタイミングだし、島田司令に手助けしている人間を処理しようと考えてるのかもしれない」

デンバーは伏せ目がちになってから、ここにいる全員を見て、

「横須賀鎮守府には、私も同行する。吉川司令のことが心配だし……それに、倉竹司令や島田司令、それにここみんなには恩義があるし、それのお返しだと思って」

「デンバー、ありがとう」

倉竹は、フツと笑みを浮かべた。

「そうだね、横須賀に所属してた君がいてくれるなら心強いよ。それに、君が同行してく

れるなら、ちよつと言ひ訳も出来るかな」

「そうね。私は所属はいまだに横須賀だし、急遽戻ることになった……つてことで、言ひ訳に使つて欲しい」

と、

「それから、ジェルジンスキー。横須賀鎮守府近辺にちよつと独特なお店があるから、そこを教える。そういうのを管理したり覚えたりするのは、あなたが得意だろうし」

「ふふ、分かつたわ。同士やシャーリーに頼むとぼっかり忘れてしまいそうだもの。任せて」

「ジェルジンスキーさんよお……」

「もうちよつと信頼してくれても良いのに」

シャーリーと大原も、思ったより頼りないイメージなんだなあ、自分たちは、と、我ながら呆れ返りつつ溜息を吐いた。

そうして、デンバーがメンバーに加わつたことにより、話し合いは更に進んでいくことになった。

岩国と倉竹が探りを入れることで横須賀への突撃は早朝から昼になり、横須賀鎮守府内に入つたら注視すべき点など、次々と作戦の内訳が整理にされていったのであつた。

——母親から全てを聞かされた岸尾は、ただ、その場で呆然と目を丸くしていた。

同時に、激しい動揺が彼の心の中で駆け巡った。

「じ、じゃあ……お父さんは、別にお母さんとオレを捨てたわけじゃないってこと？」

『ええ』

母親は岸尾のその意見を肯定した。

『彼女たち』は若く強い綺麗な提督を好むと聞くわ。綺麗と言うにはちよつと語弊はあるけれど……そうね、そのDNAに血を混ぜたくなる程度に何もかも優秀で……一定以上の提督を好むの』

「一定以上の提督……? そんな提督、わりと多い気がするけど……」

『好みの問題もあるとは思うけど、提督たちの半数は、あの人みたいになる可能性がある』
と思った方が良い』

と、

『少年提督に強い意志を持たせない、あくまでも上に従順な少年提督を……』と、いうのが横須賀周りの兵学校の掟だったけど、少年提督は若い故に特に狙われやすい。だから、出来るだけ横須賀鎮守府と癒着を激しくして、彼らを彼女たちから守る手段を取っている。それが良いことかは分からないけど、横須賀から少年提督が誘拐された情報は未だに出てこない』

「そして、その彼女たちの中にいる一人との間に生まれたのが、ゼヴィン提督……ということなのか、お母さん」

『ええ、そう。優秀な提督を拐い、優秀な子を産み、提督界限を侵食していく。それが彼女たちの狙いでもある』

（そんな……つまり、ゼヴィン提督だけをどうこうしたところで、その根本を叩き切ったわけにはならない……!?!）

岸尾は一気に絶望のどん底へと突き落とされた感覚に陥った。ゼヴィンさえ叩き斬れば、今回の件は片付くと思っていたが、その根本はまた別にある。だとすれば、彼だけをどうにかしたところで、それは終わらないのだ。

母親は続ける。

『……お母さんは、あなたに提督は辞めて欲しくないと思ってるの』
「！」

『このことは簡単に解決できることではない。でも、長い目で見れば、これを円満に導いてくれる人たちがいる。私はね、あなたにはそこにいて欲しいと思ってるの』

「円満に、導く……」

『確かに他の誰かが率先して動かなければならないけど、誰についていけばそうなるかは、あなたはとも知っているはずよ』

「あ……」

——いる、一人。

この業界の深淵と深く闘い、深く向き合うことができる——そんな少年提督を、岸尾は嫌でも知っていた。

けれども、岸尾はそんな彼を裏切り、ゼヴィンにずっと従っていた。そんな自分があんな立派な彼と隣り合って立って良いはずがない。

岸尾がずっと黙り込んでいる中、母親は続ける。

『あなたはあなたの出来ることをしなさい。その様子だと何かあったようだけど、今からでも遅くはない。だって、時間がないように見えて、まだあるもの。大丈夫よ、あなたなら。きつと、出来る』

「でも……オレ、その人と……」

『良いじゃない。喧嘩したって何したって、やれることはやればいい。そうでしょう?』
「……お母さん」

岸尾は耳に当ているスマートフォンをギョツと強く握り締めて、続けた。

「オレは気が弱い臆病者だから、また何かやらかすかもしれない」

『うん』

「それでも……自分が正しいと思ったことは、やり切りたい」

『うん、それでいいのよ』
と、

『あなたはまだ若いんだから、いくらでも間違えてもいい。だって、正しい道に戻れる時間はあるもの。取り返しのつかないことだったとしても——それが後に繋がるのなら、それ以上のことはないわ』

「ありがとう、お母さん」

岸尾はそのまましばらく母親と会話した後、通話を切った。

そして、揺らいでいた自分の心にやつと決着が付いたところで、再びベッドに背中を預けた。

（島田司令——待っていてくれ。今のオレにできることは絶対にするから）

045：邪悪に一矢を

「クラクストーン、よく聞いてくれ。島田くんは……君のことを忘れなければならない」
クラクストーンはそれを倉竹から聞いた当初、幼いながらに、その事実を受け入れることが出来なかった。

幼い自分が見つけた大好きな人が、自分を忘れなければならない運命であること。そして、自分の手の中に握られている指輪は、それを防ぐことはできないどころか、上の者たちが取り上げて、記憶喪失を加速させると言う。

クラクストーンはそんな酷い未来に、思わずその場で倒れそうになった。自分がいつか夢で見た自分を忘れている彼の姿が、現実になってしまったのだと——どうしてそんな非道なことが出来るのか、クラクストーンには全く理解が出来なかった。自分は彼の心の中にいてはいけない存在だと、強く言われた気がした。

倉竹は泣き出して止まらないクラクストーンに対して、言った。

「クラクストーン。彼のごことは君が迎えに行つてあげればいい」

「……私、が？」

「そう。彼は覚えてなくても、君が覚えているのなら、そうするのが道理だよ」

倉竹は微笑んだ。

「だから、それまで君も立派な駆逐艦として鍛錬を重ねて、誰もが羨むような女の子になるんだ。それが君に出来ること」

(誰もが、羨むような……)

クラクストンは泣きながら、倉竹のその言葉を脳裏で復唱した。

そして、何かを決意したように腕で涙を拭いて、言う。

「分かりました。私、絶対にそういう強い女の子になります。そうしたら、あの人も私のこと……また好きになりますよね？」

「うん。絶対、なってくれるよ」

「……はい」

クラクストンは顔を上げた。

「クラクストン、明日からまた、頑張ります！」

そうして、クラクストンの自分磨きの旅は始まった。

ただ、彼にまた、自分を見てもらいたい一心でクラクストンは必死に鍛錬した。誰よりも女の子らしく、そして、誰よりも強くあるうと、ひたすら自分を磨いて、磨き続けた。たまにそんな自分に言い寄ってくる提督はいたが、彼に比べるとあまりにも魅力がない上に、どこか舐められている気がして、そういつた提督には倉竹経由で部署移動を

させるなど、したたかに舞鶴を過ごした。舞鶴に提督がない数パーセントぐらいの原因は、これである。

そして、数年して、倉竹がなんとか彼を舞鶴へと着任させ、クラクストンは彼と——島田と再会することが出来た。

彼は当時に比べて地味な風貌になっていたが、ボストン型の眼鏡の奥に隠れている凛々しく大人びた顔立ちは、昔から相変わらずで、クラクストンが想像していた通りの少年へと成長を遂げていた。彼が当時よりも奥手になっていたのが少し寂しかったものの、それでもクラクストンは頑張る島田に寄り添った。

——僕は……ずっと、君のことを好きでいる。再会するまで何かがあつたとしても、僕は君をまた好きになる。

——また、一緒になろう、クラクストン。
そして、島田はこの約束を守ってくれた。

彼の頭からはクラクストンのことが抜け落ちているはずなのに、彼は、また、クラクストンのことを好きになってくれた。そのことが、クラクストンにとつてどれだけ嬉しかったことか——推し量るまでもない。

クラクストンはあの夢のように、記憶喪失になつた島田から無視されなくて良かった、と、思っている。あの夢のようになってしまったら、もう自分は生きていけない——

—そう思ってしまうほどに、彼女は彼だけをずっと見てきた。時には自分と彼以外が入れない世界が欲しい、そうしたら、探すことが楽になるし、ふたりでずっと一緒にいられる、なんて、思ったこともあった。

そのぐらい島田だけをずっと見据えてきたクラクストンであるが——内心、今の島田と引き離されている状況はかなり腹立たしかった。

スミスは戦艦少女用の宿舎の空き部屋を借りて、クラクストンと一夜を過ごした。

スミスはクラクストンを横須賀へと連れて来たあと、ジュツサーノから散々小言を言われるわ、岸尾とは別行動を取らざるを得ないわで、精神的な消耗が非常に激しかった。寝る前に岸尾に連絡を取ろうとは思ってみたものの、誰かと通話中で結局声は聞けないまま。

そういつたことが重なり、あまりにも疲弊しすぎて、寝る準備をほとんどしないまま、ベッドの上でぐったりと寝てしまった。

そうしてスミスが次に目を覚ましたのは——午前5〜6時ぐらいだった。

「……あ」

スミスはゆっくりと起き上がって、ボーツとしている目で周りを見た。

そして、肝心のクラクストンと言えば、特に抵抗している様子もなく、腕を後ろに回

されたまま、ソファの上で座って寝ていた。スミスはそれを見て、ホツとしていると同時に、彼女に対する罪悪感が湧き上がってきた。

スミスはベッドから降りると、クラクストンの方へと歩き、彼女の様子を確認した。

「……クラクストン？」

「んん……司令官様あ……そんなところ触っちゃダメですよ……」

(夢の中でも島田さんといちゃいちゃしてる……)

スミスは苦笑して、まだ起こす時間ではないな、と彼女の元から離れた。

一応岸尾と連絡でも取ってみようかと、テーブルの上に置きっぱなしだったスマートフォンを手にしたのは。が、どうしても彼に挨拶する気になれず、そのまま元あった場所へと戻してしまった。

スミスは自分たちの役割はこれで終わるのだと安堵すると同時に、近いうちにやってくる岸尾との別れに心が張り裂けそうになっていた。

(これが終わったら……司令は、私から離れちゃう……)

——元から、そういう約束だった。

岸尾は母親の一件のせいで、スミスの未来を縛りたくない、という自分なりの意見を持ち、誓約はずっと避けてきた。ただ、それは、同時に、岸尾はずっとこの業界に留まるつもりはない、という証明でもあった。

スミスは、どうかして岸尾と誓約したかった。そうすれば、彼は自分の側にいてくれるし、この業界にも留まってくれようと思っていた。自分と岸尾、二人三脚で遠い未来まで頑張っていけるほどに、自分たちの関係は深まっていたはずなのだ。

ただ、岸尾は、その関係に無理矢理にでも終止符を打とうとしている。

岸尾は普通の中学生男子に戻り、スミスは別の新しい提督を見つける——そんな自分たちの姿へ変化を遂げようとしている。確かに、その方がお互いの為であろう。特に岸尾は目的が目的な以上、この業界に留まる必要はないのだから。

ただ、スミスとしては岸尾以上に自分の提督を勤められる人物がいるとは思えないし、好きで自分を側に置いてくれる提督はいないと思っている。改造方法すら発掘されていない駆逐艦など、本当に好きでなければ秘書艦にだって採用されない世界なのだ。そんな中で岸尾がスミスを側に置いてくれることが、どれだけ有り難いことか——しかも、こんな状況でも、だ。

(彼のことを何とかして引き留めたい。業界からいなくなっても良いから、私も連れて行って欲しい。それは彼にとって許されないことだけど——私、どうしたら)

スミスは再びクラクストンの方へと視線を向け、体の横で拳を握り締めた。

(……クラクストンが羨ましい。島田さんのことだから、提督引退してもクラクストンを引き取るだろうし、その先でも大事にしてくれる)

と、拳を握る力を弱めて、彼女の隣に腰掛けた。

（地味だの冴えないだのなんだの言われたって、自分を大事にしてくれる人が良いのは当たり前前に決まってる。逆に……どんなに見てくれが綺麗でも、大事にしてくれない人はイヤ）

そんなことを思ったスミスの脳裏に浮かんだのは——ゼヴィンの姿だった。

ゼヴィンは少なくとも、ジュツサーノのことを大事にしている——というよりは、ただの駒のようにしか見ていないような気がするのだ。良いように利用され、良いように捨てられる。そのことにジュツサーノが気付くのは、一体いつになるのやら。

そうしてクラクストンを見ているうちに、クラクストンは、もぞ、と体を動かし始めた。

「う、ううん……ん……。司令官様……って、あら……う？」

そして、目を覚ました。

クラクストンはいいつも自分が寝ている島田の部屋ではない、知らない宿舎に自信が身を置いていることにびっくりして、キョロキョロと辺りを見渡した。

スミスは小さく笑みを浮かべて、言った。

「目が覚めましたか、クラクストン。ここは舞鶴じゃなくて、横須賀ですよ」

「……あ……そう、でした」

クラクストンはやっと、自分の身に何があったのか思い出したのと同時に、側に島田がいないことに落胆したようで、肩を落とした。

「私の朝は司令官様の健康チェックから始まるのですが……やむを得ませんね」

「け、健康チェックですか……そりやまた、しつかりと管理されてるんですね」

「そうですよ」

クラクストンは頷き、

「寝不足や風邪気味だと、まあ、元気ないですから。スミスさんは岸尾さんの健康チェック、やってないんですか？」

「ん、してないことはないですよ。1日のコンディションに関わることですし、軽くでもやってます。大体の提督は秘書艦と確認してると思いますが」

「ふふ、そうですよね。私だけじゃないですよ。安心しました」

「そうですよー」

と、クラクストンは安心したように笑みを浮かべた。

そして、スミスは彼女の言葉の真の意味について深く考えることなく、同じように笑みを浮かべた。

（んー、クラクストンの言ってる健康チェックと、こっちの健康チェックでなんか意味が違う気がするけど……まあ、いいや）

そうしてスミスが話し相手になつていると、クラクストンがスミスに鋭く切り込んだ。

「ところでスミスさん……さつきから、あまり元気がない気がするんですけど。仮にもあなたがそんな様子だと、こちらもちよつと気にしてしまふというか」

「……あつ」

スミスはクラクストンに指摘されて、慌てて取り繕った。

「そ、そんなことないですよ！ そんなことは……いえ」

が、ここまで来て彼女に嘘を付ける気にはならず、取り繕うのをすぐにやめた。そして、スミスは続ける。

「まだ時間はありますし、すべてお話ししましょうか。司令について」

「はい、お願いします」

クラクストンは自分がずっと聞きたかったことがやつと聞けると思い、すぐに頷いた。

そうして、スミスは話し始めた。

岸尾の母親は元・戦艦少女で、父親は提督であったこと。行方不明であった父親を探すために、提督を指して、佐世保に着任したこと。その先で自分と彼は出会い、今日まで二人三脚で頑張ってきたこと。しかし、その中で、ゼヴィンと出会い、彼の父と岸

尾の父が同一である異母兄弟であること。そして、自分たちはそれをネタにゼヴィンに脅され、彼のいうことを聞いていること。

——とにかく、話せることは全て話した。

クラクストンは一通りの話をスミスから聞いて、「分かりました」と小さく頷いた。

「どうして、早めに言ってくれなかつたんですか？　せめて私と司令官様に言ってくれば、こうなる前になんとか出来ましたよ」

「それが出来たら苦労しないんです」

スミスは首を横に振り、

「司令はお母さんをとても大事にしてらっしゃいます。だから、せめて、お母さんには余計な情報が行かないように調整したかったんですよ」

と、

「そして、私からは司令のプライベートについてはペラペラ話すことはできません。今は何もかもバレちゃったのと、司令もあなたたちに恩義はあるみたいですから、こうしてお話ししました」

スミスは苦い笑みを浮かべながら言った。

「舞鶴の皆さんもそうですけど、私たちに真摯に接してくれた島田さんには、感謝してもしきれません。司令だって、こんな風に恩を仇で返すような真似はしたくないと思いま

す」

スミスは続けて、

「今回の作戦だつて本当は誘拐じゃなくて、あなたの抹殺なんですよ、クラクストン」

「！」

クラクストンは目を丸くして、スミスを見た。

スミスはクラクストンから視線を浴びつつも、続ける。

「でも、司令と私でなんとか作戦変更提案して、変えたんです。こんな形であなたと島田さんを引き裂くのは、ゼヴィン提督の母親とやっていることと結局変わらないんじゃないか。司令はそう思ったんです」

そして、

「……クラクストン。これからあなたには、私と一緒にゼヴィン提督の所に行つてもらいます。そして、そこには司令が島田さんを連れてくる予定です」

と、

「多分、島田さんにとつても、あなたにとつてもこれが最後のチャンスです。これを機に、ゼヴィン提督はあなたたちを潰すことを決めてあるはず。潰される前に——」

「……ゼヴィンさんを潰さなければならぬ。そういうことですね？」

「はい」

スマミスはクラクストンの理解の速さに笑みを浮かべて、頷いた。

「あなたたちを一度裏切った身でありますか……どうか、私たちと一緒にゼヴィン提督に一矢報いてください」

046：初めて生まれる後悔

そして、時計の短針は午前8時を指し始め、横須賀鎮守府内の提督たちはそれぞれ動き始めていた。ある者は、戦艦少女たちのコンデイションをチェックし、とある部署は部署全域で朝礼をしたりと、鎮守府の営業時間に向けて忙しくなりつつある。

それはゼヴィンと岸尾たちにも当て嵌まる事であり、ゼヴィンはジュツサーノと共に準備を終えた後、執務室の中に岸尾を招き入れた。大方、地下二階の例の場所へと閉じ込められている島田について話すことがあるのだろうと岸尾は呼ばれて時点で察した。

ゼヴィンは岸尾の姿を見るなり、ニコツと笑みを浮かべて言った。

「やあ、おはよう岸尾兄さん。よく眠れたかい？」

「別に、いつも通りだ。さつさと要件を言ってくれ」

岸尾はゼヴィンの挨拶にそう返すと、すぐに本題へと入ろうと切り返した。ゼヴィンは、「おやあ」と苦い笑みを浮かべ、岸尾のその態度に困ったように眉を下げる。

「困るんだよねえ、そういう反抗的な態度。まあ、君がそう言うなら、お望み通り、指示を出すよ」

続けて、

「これから君には島田くんとプラスアルファで、もうふたり、連れて来てもらおうよ。場所は分かっているとと思うけど、地下二階の例の部屋だよ」

ゼヴィンはそう言つて、机の引き出しから何やら光るものを取り出して、それを岸尾に向けて差し出した。その形状は——ゼヴィンが指している、例の部屋の鍵のようだ。

岸尾がそれを受け取ると、ゼヴィンは説明を続けた。

「あそこからここまでルートの、昨日案内した通り。普段は閉ざされてる非常階段はこつちで解放してあるから、ここまで連れてきて。クラクストンについてはスミスに連絡入れてあるから、気にしなくていいよ」

「……分かった。今から行つてくる」

岸尾はそう言うと、ペコリと頭を下げて、外へと出て行つた。

ゼヴィンはそれを見送ると、隣で立つて見守つていたジュツサーノへと視線を向ける。ジュツサーノはそんな彼と視線が合うと、言葉を返した。

「……なに。どうしたの、アンミラーリオ」

「ジュツサーノ」

と、

「ここまで働いてくれたのは有り難いけど、君だところから先は力不足になりそうだね。今日で君との契約は解除させてもらおうよ」

「！」

ジュツサーノは突然の解雇宣言に、目を丸くしてゼヴィンを見た。動揺が収まらない中で、ジュツサーノは言葉が続ける。

「ち、ちよつと……それって、いくらなんでも急すぎるんじゃない？ アンミラーリオ、最初に言ったじゃない。私なら貴方の計画に乗ってくれそうだから、秘書艦にしたって」

「『マーマ』からさ、連絡が来たんだよ」

と、

「いつまでも弱い古い軽巡洋艦を秘書艦にするよりも、もつと強い力を持った艦船を秘書艦にすべきだとね。君、結構負けっ放しだったし、ボクもそろそろ君から戦艦少女としての価値を見出すことが出来なくなってたし、いい頃合いじゃない？」

「そ、そんな……」

ジュツサーノは愕然として、その場でガツクリ崩れた。

確かに自分は性能的には平均より低い能力ではあるが、ゼヴィンに合わせる能力だけは長けていると思っていた。性格の悪い提督には、性格の悪い戦艦少女と——実際、ゼヴィンもそのことは強く分かっているはずなのだ。戦艦少女は大体良心の塊で、良くも悪くも真つ直ぐで、ジュツサーノのような性格をしている少女はなかなかない。

「でもね」と、ゼヴィンは続けた。

「君の『魅力的な体』を捨てるのは、勿体無いとも思ってるんだ。ボクだって年頃だし、そういうことを考えなくもない」

「……それ、まさか」

ジュツサーノは目を丸くしたまま、目の前で椅子に深く腰掛けている銀髪の少年を見上げた。

ゼヴィンはニヤリと妖しく口角を上げた。

「無理にとは言わないよ？ 君の体に直接関わってくるからだからね」

ゼヴィンは椅子から立ち上がり、ジュツサーノの元まで歩み寄った。ジュツサーノはビクツと体を震わせて、彼がこちらに歩み寄ってくるのを見た。そして、必死に首を横に振る。

「そ、それだけは……報酬を貰えるとしても嫌。そんなことで、あなたとの関係を維持しても虚しくなるだけだもん」

「へえ、意外だなあ。貰えるものが貰えるなら、自分の体ぐらい差し出せるのが君だと思っていたけど」

ゼヴィンはそう言うと、しゃがみ込んでいるジュツサーノの視線に合わせるように、こちらも膝を下ろした。そして、ジュツサーノの姿を隅々まで舐め回すように見つめると、ゼヴィンの手がジュツサーノの胸をいきなり掴んだ。

ジュツサーノは途端、顔を真っ赤にして、彼の手を勢いよく振り払った。

「いい、嫌っ！」

「おっと」

ゼヴィンは振り払われてもなお、ジュツサーノに向ける目を改めることはせず、続けた。

「生娘なんだねえ、君は。分かってはいたけど、男の経験ないんだ」

ゼヴィンが笑うと、ジュツサーノはゼヴィンに触られた自分の胸を覆うように、体の前に腕を回した。彼女の顔は見事に赤らみ、ゼヴィンを睨みつける緑色の瞳には、涙が浮かんでいた。

ジュツサーノはゼヴィンに嘲笑われた気がして、同時に不快感を口に出した。

「私の純潔は、そうポンポン渡せるものじゃない！ アンミラーリオに対してだって簡単に渡せないよ！」

「ふーん……なるほど。男が好きそうな体をしている割には、そういうところは純粹なんだね、君は。服の露出度も変なところで高いし、そういう服装はわざとだと思ってただけど、そうじゃないんだ」

「私のこの服装は、抵抗力を少なくするため。そういうことも考えられてるの」

「抵抗力、かあ……男を喜ばせるためじゃないんだ」

と、

「ま、いいさ。そんなに嫌っていうなら、無理矢理にでも Yes を出させてあげる」

ゼヴィンはそう言うと、ジュッサーノの胸元のネクタイを無理矢理引つ張り、そのまま外し始めた。ジュッサーノは「!?」と、さらに動揺を示し、ゼヴィンの腕を掴んで必死に抵抗した。

「や、やめてよ！ 何するの！」

「ジュッサーノが生娘だから、そういうの怖がつてるんじゃないかと思って。ボクがそういう体に仕上げれば、君もOK出すでしょ？」

「な、なんで……どうして、そういう方向にばかり思いつきがいいのよ！ 信じられない！」

「んー……別に洗脳しても良いんだけど、君の意思ねじ曲げる方が楽しそうだからさー。まあ、その時には君は表に出られないことになってるだろうけど」

「そ、それに……まだ、朝だよ！ デリカシーも考えられないの!？」

「朝してはいけない、という決まりもないんだから良いんじゃないかい？ ……それに、そんな女の体を振り撒かれると、ボクも溜まるし」

ジュッサーノが必死に抵抗している中でも、ゼヴィンはそんなこと知ったことではないとジュッサーノの服のボタンへと手を掛けた。

途端、ゼヴィンは何かに気付いたように顔を上げて、チツ、と舌打ちした。

「……マーマも悪いタイミングで来るなあ。これじゃあ好き勝手出来ないじゃないか」

ゼヴィンはそう言いながらジュツサーノから離れ、部屋の窓を見た。

ジュツサーノはこの場で、かつ、朝っぱらから自分の裸体が曝される危機を脱しホツとしたものの、このままゼヴィンについていいいいのか、とうとう彼女の中で揺らぎ始めた。

(面白い任務も受けたけど……私の体に関することにとこれだと、今後が怖い。私、とんでもない邪悪を提督に選んじやったかもしれない……)

同じ軽巡洋艦でジェルジンスキーやデンバーから散々指摘された点ではあるが、ジュツサーノとしては、ゼヴィンの言動に今まで疑問を抱くことはなかった。提督として失格だと思うことはあれど、それはゼヴィンだから、で済ませていた。

しかし、ジュツサーノ自身をモノとしてしか扱っていなさそうな彼についていくのは、きつと、リスクが高い。彼は最悪自分を洗脳してでも、そういう戦艦少女として仕上げる準備も出来ている。その時点で女子としては耐え切れなかった。

(デンバー、ジェルジンスキー……あなたたちの言う通りだよ。私は……もつと慎重になるべきだったのかもしれないね)

島田たちのことを任された岸尾は、地下二階へと通じる階段を下っていた。

朝ですっかり明るい時間帯だというのに、光が差し込まない地下は真つ暗闇であった。地下一階は人がいるためこれから電気が点くであろうと思われるが、地下二階は誰が利用しない限り、廊下も何もかもずっと暗いままであろう。

岸尾は地下二階へと辿り着くと、鍵を片手に真つ暗闇の廊下を歩き始めた。そして、同時に、島田と再び顔を合わせなければならぬ事実、胃が痛くなりそうになっている。

（分かっているとはいえ、顔を合わせるのが怖いな……話さなきゃいけないこともまだ話していないのに）

岸尾は顔を上げ、この先にある島田たちが閉じ込められている部屋の扉を見た。

（とりあえず、行かなきゃ……）

と、岸尾が足を一步踏み出した途端、何か様子がおかしいことに気付いた。

「……………」

（なんだ、この音）

低い音がこちらまで聞こえてきた。まさか、自分が見つかったのか、と思つて辺りを見渡したものの、そんな気配もない。地下一階でやっている演習の砲撃音かとも思つたが、それにしても音が間近にあるような気もして、岸尾は、ただ、首を傾げるしかなかつ

た。

とりあえず、自分のやるべきことは果たさねばなるまいと岸尾がまた一歩、足を踏み出した途端、

「ツあ!？」

——島田たちが閉じ込められているであろう部屋の扉が、勢いよく吹っ飛び、向かい側の壁に衝突した。

岸尾はあまりの出来事に変な声を発して驚いている中で、その状況を掴もうと、扉へと視線を移した。

(……み、ミサイル?)

対艦か対空かは分からないものの、ミサイルが煙を発しながら、吹き飛ばされた扉に減り込んでいた。岸尾はまさかそんな無茶をするとは思えなかつたのか、半信半疑で部屋の出入り口を見た。

途端、

「いやー、助かりました。これで、他のみんなと連絡取れますね」

「うーん、思ったより爆発しないんだなあ。結構、大胆に吹き飛ばすと思ったんだけど」「そんなことになったら、島田さんも私たちもただじゃ済みませんよ」

少年ふたりの声と、少女ひとりの声が聞こえてきた。

岸尾はそのうち、少年ひとりの声に嫌というほど聞き覚えがあり、本当にやってしまったのかと、苦い笑みを浮かべて彼を見た。

「し、島田司令……ここ、これは一体？」

「……え!? 岸尾くんが迎えに来てくれたの!?! うつわー、ゼヴィンの奴からから逃げることしか考えてなかったや」

島田は岸尾の姿を見た途端、目を丸くして彼を見た。どうやら、言葉通り岸尾が迎えに来ると思っていなかったようで、驚きしかなかったようだ。

そんな中で、島田の横にいた少年提督は岸尾の姿を見るなり、思わず島田の後ろに隠れた。

「あ、あの……その……岸尾さん、ですよね？」

「は、はあ……そうですけど」

「その、オレ、吉川つて言うんですけど……すみません。実は、デンバー経由でああなたのデータ倉竹さんに渡したのオレなんです……」

「!? な、何やってんだお前!」

岸尾は吉川のその告白に、思わず上擦った声を出した。

そして——この吉川がゼヴィンの周りを嗅ぎ回っていた人物であることを、ここで思い出した。この吉川、見た目こそは眼鏡を掛けている時の島田よりは地味、というか、今

まで見てきた提督の中でも、かなり大人しい部類に入る。しかし、情報部署に所属し、こうして情報の横流しをしている。見た目に反して、やることがえげつない。

そして、その横で少女が言う。

「岸尾さん。私はフレッチャー級DD-533のホーエルと申します。この度は、情報の横流しをして申し訳ありません」

「いや……ごめんで済むなら憲兵さんもいらさないんだけど……」

さすがに個人情報を受け渡しに関しては、岸尾もなかなか頭を抱えているようだ。

一方で、「でも」と、ホーエルは続ける。

「舞鶴鎮守府……いや、この界限での裏切り行為は、それ以上の重罪なのは、そちらも了承の上のほうです。特に岸尾さんはとつくに14歳ですし、裁かれる年齢でもある。今のあなたの言葉、そっくりそのままお返ししますよ」

「……あ、はい」

——そうだ、今の自分は憲兵どころかその上に行くぐらいのことを犯している罪人でもある。本当、自分こそがごめんで済むなら憲兵もいらさない、の代表であろう。

しかし、そんな中でも、島田は笑みを浮かべながら岸尾に言う。

「まあ、なんにせよ、また顔を見ることができて良かったよ。あのまま話す機会も無いままじゃ、こちらとしてもやりきれないからね」

と、島田は再び顔を上げた。

「岸尾くん、話してくれないか。君とゼヴィンの間は何があったのか」

047：敵陣へ…かと思いきや

周りから悟られないために地下二階の電気が点けられることはなかった。しかし、暗さで何も見えないため、スマートフォンについているライト機能で道が照らされていた。そのスマートフォンを持ち主は、岸尾である。

岸尾は道をライティングさせ、自分の後ろに島田、吉川、ホーエルを引き連れながら、ゼヴィンと自分の身に何があったか話していた。ゼヴィンに脅されて協力していることや、父親は同じであることも、全て。

「それで——オレはゼヴィンの奴とは異母兄弟なんだ。父親が同じだけど、母親が違う。オレの方が兄で、向こうは弟。全然似ていないけど」と、

「それで、オレの母親は元々戦艦少女として、この横須賀鎮守府で働いていた。ふたりぐらいいなれば、日本初の空母の話は知ってると思うけど、それがオレのお母さん」

「もしかして、日本初どころか、空母の艦種として完成した世界初の空母のこと？」

「そう、オレのお母さんはその空母の記憶を引き継いだ人」

岸尾は島田のその解説を聞くなり、コク、と小さく首を縦に振って頷いた。

吉川はその話を聞いて、「ああ」と思い出したように言い放った。

「提督と戦艦少女のハーフについて、噂はよく聞いてますよ。両方からの血を引き継いだ子供は男女どちらであれ、優秀な子になるとは聞いてますね」

「だとしたら、岸尾くんはエリート中のエリートってことなのか？」

「……島田司令の方がその言葉は合っていると思う」

岸尾は溜息を吐く。

この中でもとんでもない家系に生まれている島田の方が、自分よりよっぽどエリート中のエリートだろう。島田本人はそれを前面に出さないため、言わなければ分からないが。

そして、岸尾は続ける。

「少なくともオレは提督界限には来れたけど、同年代の中では平均的な仕事しかしていないと思う。逆に言えば、その程度には渡り合えるけど、それは別に特別なことではない……と思う」

と、

「そして、アイツの……ゼヴィンの母親は、度々こちらに襲いかかってくる深海軍」

「……『Yamatō』だよね」

「ああ」

島田のその言葉に——岸尾は頷いた。

Yamoto——言わずもがな、日本の戦艦大和のデータを取り込んだ、深海軍に
いる戦艦のひとりである。

そして、ゼヴィンはそんなYamotoのお腹から生まれた少年。

島田が例のデータを見たときに驚いたのは、まずそこであった。本来ならば敵対するはずの深海軍と我々の軍であるが、それが交わり、そして、こちらの軍の提督になると言うのだから、普通は信じられないことである。そして、これを知った島田は、『兵学校と深海軍サイドに癒着があるのではないか』と、推測している。普通の兵学校ならば、こんなリスクのある生徒を取るはずがないと、島田は思っているのだ。

岸尾は続ける。

「深海軍と普通の人間の間に生まれた子は、本当の意味で優秀に生まれる。アイツらは優秀な人間を狙い、その遺伝子を取り込むことで、次代を強力にする——そんな話を、なんとなく聞いたことがある」

と、

「そして、女が生まれた場合はそのまま戦力として育て、男の場合は提督として使う。まあ、当たり前のことであるけど——ゼヴィンに関しては、普通の提督志望としてこちらに送り込み、この界限を深海で侵食する。この計画が前提としてある」

「だとしたら、少年提督排斥運動も……」

「そういうことだ。今後邪魔になるであろう因子を手っ取り早く排斥できそうな奴らを冷遇し、排斥することで、自分たちにとつて都合が悪いものを排除する。それが狙いだ」
岸尾は続け、

「ただ、ゼヴィンが……いや、向こうが慌てているのは、戦艦少女の血を引いていなければ、深海軍の血を引いてもいない。なのに、非常に優秀な因子が界限に紛れ込んでいるからだ」

「それが島田さん……つてわけですね」

吉川は島田を見て、島田は自分を指差して、少し困惑している様子で眉を下げた。

「ぼ、僕が？ 別に僕がいてもいなくても、どうにもなることじゃない？」

「いや」

岸尾は首を横に振った。

「もし、島田司令が普通の血筋で、普通の少年なら、向こうも焦らずに済んでる。ただ、そうじゃなかった」

と、

「向こうからしたら、自分たちよりも優秀な因子が若いうちから紛れ込むことは非常に忌避しなければならない。何故なら、そういう因子は自分たち側と合わせるつもりはな

いだろうし、何れは界限の閉ざされた世界へと触れてくるから。それを知った時に取る行動は——」

「……ぶつ潰す」

——島田の淡々とした低い声が、そこに響いた。

そこにいた一同は、思わず島田へと目を向ける。

島田は視線を浴びるなり、続ける。

「このまま過ごしていたら、こちらは確実に深海軍側に飲み込まれる。今は横須賀だけで済んでいるけど、何れは規模を拡大して、呉、佐世保、そして舞鶴にまで手を伸ばさずだ。……そうだろう、岸尾くん」

「……うん」

と、

「でも、それを何とかしようとする、それこそ非常に長く、気が遠くなる戦いになる。だから、誰も行動を起こせずにいる。それでも島田司令は……」

「……やるしかないさ」

島田は顔を上げる。

「その一步として、誰が敵で誰がそうじゃないのか、今回の件でしつかり見極める必要がある。少なくとも兵学校で僕を冷遇した教師たちは件が解決したら、首を飛ばすのは確

定かな。物理的にさ」

島田は自分の首元で、水平に右手の親指を走らせた。そして、次に吉川とホーエルへ目を向ける。

「吉川くんとホーエルはここを出たら、情報部署に戻ってゼヴィンのことを伝えてくれ。どこまで信用してくれるかは分からないけど、過剰に反応するのがいたら、後で連絡してくれるかい？」

「ああ……はい、大丈夫ですけど」

吉川は島田の指示に、コク、と首を縦に振って了解してから、続ける。

「今からで良いんですか？ もうちょっと日を空けて落ち着いた頃の方が」

「僕が今日——終わらせる」

「！」

岸尾と吉川、そしてホーエルは、島田のその言葉に動揺した。そして、島田は、改めて岸尾を見た。

「岸尾くんも、そのつもりで僕を横須賀まで連れて来てるんだろう？ すべては僕とゼヴィンを直接会わせるために」

「……なんだ、島田司令には最初からお見通しか」

岸尾はフウト、息を吐いて、続けた。

「今回はこつちから計画を曲げてほしいと願いに出て、島田司令とDD-571を横須賀に連れてきた。多分、これがゼヴィンを潰す最初で最後のチャンスになると思う」

「もし、これを逃したら、僕とクラクストンはどうなる？」

「逆にそちらの首が跳ねる」

と、

「提督界限内で裏切り者としての烙印を押される。その下地は兵学校時代に作られてきているから、後は証拠を『作るだけ』だ」

「なるほど、そのための冷遇ってことか」

島田は顎に手を当てた。

「アイツのシナリオとしては、『優秀で純朴な少年を虐げようとする劣等生』ってところか？ 僕としては向こうから接触しなければ、後はどうでも良かったんだけどなあ」

「そして、そのシナリオを作り上げるために加担している提督は横須賀に限って言えば少なくともないだろうし、賛成派も多いだろうな。よその鎮守府よりも、倍の権力を持っている横須賀鎮守府がそうならそうだろうという、最悪な状況にはなる」

岸尾は地下の二階から地上へと通じる非常階段の扉へと手を伸ばし、そのドアノブに手をかけた。ガチャリ、と開く音して、こちら側へと扉を引いた。ギイツという蝶番の音が辺り一面に響いた。

そして、岸尾は非常階段に足を踏み入れてから、吉川とホーエルに案内した。

「吉川司令とDD―533はここを出たら、地下一階に出て、正しいルートで地上階に出て欲しい。オレと島田司令はこのまま非常階段を登って、最短ルートでゼヴィンの居場所を目指す。……良いか？」

「はい、大丈夫です。情報部署に直進します。何かあったら連絡しますね」

「ありがとうございます」

ホーエルと吉川は頭を下げ、岸尾の案内に了承を出した。

そして、島田も賛同する。

「岸尾くん、ありがとう。君のくれたチャンス、無駄にはしないよ」

「いや……こつちこそ」

と、

「……事が終わったら相応の処罰はしっかり受ける。だから、今は」

「うん。目の前のすべきことに集中するさ」

——そうして、4人はこの地下二階を脱出する運びとなった。

そして、ミスはクラクストンを連れ、戦艦少女たちが集う宿舎を出て、鎮守府の建物の中で歩いていた。ふたりはこれからゼヴィンのいる部屋へと向かい、そこに同時に

着くであろう島田と共に、全てを終わらせるつもりで、気持ちに向けている。

クラクストンは腕を背中に回されたままであるものの、何があっても簡単に解けるように紐を縛っている。これはスミスが調べたらしく、本当に解けるかどうか岸尾と共に確認したらしい。スミスが解けるのであれば、クラクストンでも十分大丈夫であろう。

(うう……これが人に見つからない道とは聞いたけど、本当に閑散として……)

にしても、人が少ない道を選んでいるとはいえ、スミスはそれに不気味さを感じていた。

横須賀鎮守府は日本国内でも大規模な鎮守府であり、人の出入りも相当激しいところだ。他が賑わっているのに、ここは閑散としている、なんて、スミスにとっては非常に落ち着かない。しかし、人に見つからないようにかつ、最短でゼヴィンの部屋へと向かうとすると、この道しかない。

同時に、ここに人が来たらどうしようなんてことも思ってしまった、スミスは緊張していた。戦艦少女が縛られた同胞を縛って徘徊しているなんて、他に知られたら、スミスの身がどうなるかが分からない。

クラクストンはスミスの後ろを歩きながら、スミスへと言った。

「スミスさん。大丈夫ですか？ 背中丸まってますよ」

「あつ、いや……あははー、ちよつと緊張してるだけですよ」

自分はこういうことには向いていないなあ、なんてスミスはつくづく思う。だからこそ、今日の今日で終わらせてしまいたい、なんて感じてしまうのかもしれない。

このままゼヴィンの所へ行つて、島田たちが行動を起こしてくれれば、こちらもそれに合わせられる——あと一步で事は終わる、なんて思っているところへ、スミスとクラクストンの前に、黒い影が立ちはだかった。

「……じ、ジュッサーノさん？」

黒を基調とした軍服に、すらりと露出している長い足、そして、暗めのブロンド色のツインテール。これらの特徴を併せ持った戦艦少女と言えば——イタリア出身の軽巡洋艦、アルベルト・デイ・ジュッサーノぐらいだ。

——そんな彼女が、スミスたちの前に立ちはだかったのである。

敵・見方問わず駆逐艦には当たりが強い彼女がここに来たということは、スミスたちを狙っているのだろうか。スミスは思わずジュッサーノを警戒し、折れて上部だけになつている旗を体の前に構えた。

「い、一体何をしにここに来たのですか。クラクストンはこれからゼヴィンさんの所に行くんですよ。ジュッサーノさんだつてゼヴィンさんの所に——」

「アンミラーリオの所……？」

——ここでジュッサーノの様子がおかしいことに気付いたのは、ふたり同時だった。

ジュツサーノは俯いて、スミスの方までゆっくりと歩いてきた。スミスはクラクストンと共に後退り、同時に彼女を警戒した。

ジュツサーノは歩きながら、言い放つ。

「スミスとクラクストンは良いよね……自分が慕ってる提督に大事にされてもらつて」

「な、何を言ってるんですか、あなた。ゼヴィンさんと何か——きやつ!」

——途端、こちらへ砲撃が放たれた。

スミスは間一髪のところでの砲撃を避けたが、そのお陰で、手に持っていた旗の隅っこがじりじりと焼け焦げていた。

この砲撃の主であろうジュツサーノの主砲の銃口のひとつからは、煙が天へと立ち昇っており、演習以外に室内で主砲を放ったジュツサーノに対して、スミスは動揺を隠せずにいた。スミスは赤い無邪気な目を丸くして、彼女を見た。

「ジュツ、サーノ……:さん? ち、ちよつと、待つて下さいよ。室内で主砲ぶつ放すなんて——あなたらしくないですよ! 私たちが似たようなことしたら、修繕費がーとかうるさいじゃないですか!」

「……だつて」

と、ジュツサーノは顔を上げた。

「私、アンミラーリオから捨てられるし。捨てられなくても戦艦少女としてじゃないから、こんなところ壊したって、何しても良いかなって」

「はあっ!?!」

「……!」

ジュツサーノがゼヴィンに捨てられる——その言葉を聞いたスミスとクラクストンの間には、衝撃という名の電撃が走った。

048：理不尽な八つ当たり

（ゼヴィンさんに捨てられるの分かつたからつて、こつちに八つ当たりイ〜!?） どんだけ変な方向にブレ〜キ踏んでるの、この女！）

スミスはジュツサーノから一連の話を聞いて、思わず、気持ちさがサアツと下へと落ちていくような気分になった。確かに戦艦少女たちは、提督の指示を第一で動くように教育されているが——あのジュツサーノがヤケを起こしてしまうほどのだから、かなり酷い言い方をされたのだらう、というのが推測できる。何にしろ、あのゼヴィンのことだ。用済みとなったジュツサーノに何を言ったつて、不思議ではない。

スミスがジュツサーノの言動にドン引いている中で、クラクストンがスミスの後ろからジュツサーノへと声を掛けた。

「あの、ジュツサーノさん。何があつたか分かりませんが、それを私たちにぶつけるのは、普通におかしいと思うんですけど……とりあえず、何があつたのかだけ話してくださいませんか？」

「あんた達に話して何になるの？ それに、ここであんた達を潰せば、アンミラーリオも喜んでくれるでしょ。別に八つ当たりだろうがなんだろうが、そういう結果になるなら

良いじゃない」

「良くないから、話し合いましたよ……お話なんですけど……スミスさん」

クラクストンはジュツサーノの態度に対して、呆れ気味に溜息を吐いた。今更ではあるものの、やはり話し合っても無駄な人物であると、ジュツサーノのことを改めて解釈したのであろう。

スミスはクラクストンと視線を合わせると、艦装に装備されている主砲ふたつをジュツサーノへと向けた。

「し、仕方ありませんね。室内でのドンパチなんてやりたくないですけど……ジュツサーノさんに暴れられても困りますし、やりますよ！ クラクストンは下がっててくださいー！」

「あんた、クラクストンの敵でしょ！ なに庇っちゃってんの！」

ジュツサーノはスミスがやる気と見るなり、即座にスミスに向けて、弾丸を次々と連続で放った。

「っ、えいっ！」

スミスは持ち前の駆逐艦の回避力を使い、それらから逃げながら、ジュツサーノの艦装へ弾丸を的確に当てる。しかし、駆逐艦の主砲の威力では当たっても擦り傷程度にしかならず、ジュツサーノに大したダメージを与えられていない。

スミスは向こうからの攻撃が止むと、一旦主砲を引つ込めて、ジリツと後退した。

「うぬぬ、やっぱり駆逐艦の砲弾はへなちよこですね……せめて重巡ぐらいの威力があれば、ジュツサーノさんを黙らせられた気がするんですけど」

「黙るのはそつちだよ。駆逐艦如きが口答えしないで欲しいな」

ジュツサーノが冷たくそう言い放つた途端、再び轟音と共にスミスに向けて砲弾が走った。

「駆逐艦如き、じゃ、ないですッ!」

スミスは自分の主砲から砲弾をぶつ放したと思えば、こちらに向かって走ってくる火の弾にこちらの砲弾をぶつけた。

空中でぶつかり合った砲弾は威力に差はあれど、どちらの砲弾も見事に空中分解したらしく、小さな爆発を起こして、地面へと散り散りになった。

クラクストンは木製の床にチリチリと火が着き始めているのを見て、怯えたらしく、その体をブルツと震わせた。

「す、スミス、さん……火が」

「だーから、室内で主砲ドンパチはやりたくないですよねえ……」

スミスはハア、と溜息を吐いた。

「ここが潰れて困るのは私たち戦艦少女ですよ、ジュツサーノさん。細かいデータは

分散されてるとはいえ、基礎的システムは横須賀にすべて預けられていますし、ここが無いと、戦艦少女の研究も進まない。司令からそう聞いてますよ、私」

「……どうせ、深海軍に潰されるんだから、良いじゃない」

と、ジュツサーノは声を震わせた。

「アンミラーリオはね、深海軍の艦船とそれに連れ去られた提督とのハーフなの」

「なっ……」

クラクストンとスミスが、向こうの口から放たれたその事実には絶句してる中、ジュツサーノは続ける。

「だから、アンミラーリオは深海軍の人たちと関わりも深いし、言葉も通じ合える。そして、アンミラーリオはそれを利用して、この界限を潰そうと目論んでる」

「う、嘘でしょ!？」

スミスは彼女の口から放たれた言葉に対し、信じられない、と言いたげなのと同時に、強く思ったことをそのまま声にした。

「それを知っても、なお、ゼヴィンさんに従ってるのはどうしてなんですか！ 普通、戦艦少女ならば、そこは説得するところでしょう！

「私はね、戦艦少女だからとか、そういうのに縛られたくないの!」

ジュツサーノが叩き付けるように声を出した。

クラクストンとミスはその大声に驚きつつ、彼女の話へと耳を傾け続けた。ジュッサーノは続ける。

「戦艦少女はみんないい子だけど、私は違う。でも、それを表に出したらみんな怒るのが意味分からなかった。みんながみんな聖人だったら、面白くないじゃない！」

と、

「アンミラーリオはそんな私を肯定してくれた唯一の提督なの！ 猫被って他人をからかうのが趣味で、駆逐艦を虐めるのが趣味な私を！ 報酬寄越せって言ったら、他の提督と違ってちゃんとする！ 確かにアンミラーリオは性根腐ってるけど……あるべくして組み合わせられたんだよ、私たち」

(ジュッサーノさん……そんなことを)

ジュッサーノの心内を聞いたクラクストンは黙って彼女の話の聞き続けた。

「だから、何があってもアンミラーリオには付いていくって決めたんだよ。私たちなら上手くやっていける、何があっても耐えられるかもって思ってた。でも……アンミラーリオはそんな私は必要なくなっちゃって、さっき言われちゃった」

「言われて、どうしたんですか？ 拒否したんですよね？」

「……したよ」

クラクストンの質問に、ジュッサーノは頷きながら、自分の上半身に腕を回した。そ

の場で力なく膝を床に落として、続ける。

「でも、そのまま彼の側にいようとしたり、私は慰安目的で武装解除されるし、アルベルト・デイ・ジュツサーノとして何もかも終わる。戦艦少女としての軽巡洋艦として、彼の側にはいられない」

「う、うーん……慰安目的で武装解除って……かなーり生々しいこと聞いちゃいましたね、クラクストン」

「そうですね……」

ゼヴィンの実情を知っているスミスと、間接的にゼヴィンの悪行を知っているクラクストンがその話を聞くと、如何にもこうにもしっくりくる上に、生々しくて気分が悪くなる。

けれども、と、クラクストンは続ける。

「だからと言って、私たちにぶつけるのは違う……って、さつきも言いましたね、これ」と、

「ゼヴィンさんがどういう人なのかはよく分かりましたし、ジュツサーノさんに何を求めたのかもよく分かりました」

クラクストンは一歩前に進み、

「でも……あなたの今していることは、身勝手に他人を巻き込んで、八つ当たりしてるだ

け。違いますか？」

「——ッ！」

ジュツサーノはズカズカと大股でクラクストンの元へと歩み寄ると、彼女が着ているセーラー服の胸ぐらを掴んで、そのまま自分の元に引つ張り上げた。クラクストンとジュツサーノの顔の距離が数センチ程度まで近付いた。

「クラクストンッ！」

スマスはそれを見て、ジュツサーノからクラクストンを話そうと、2人の元へと駆け出した。

しかし、それはジュツサーノの低い声で遮られた。

「なに知ったような口を利くの？ どうせ、提督に真つ当に愛されてるあなたには、私の辛さは分からないのに」

クラクストンを見るジュツサーノの目は、自分の身に起こったことを信じたくないと思えているような目だった。ジュツサーノからすれば、提督から真つ直ぐに愛情を与えられ、それを受け止めているクラクストンはかなり異様で、そして、羨ましい存在に見えるのだらう。

胸ぐらを掴まれたことにより、クラクストンの体は宙に浮きつつあるが、それでもクラクストンは表情を怯ませることはなかった。自分の意思で解ける状態とはいえ、背中

に腕を回してゐる体制でこの状況なのだから、普通は怯えてもおかしくはないだろう。相手も駆逐艦虐めが好きなジュツサーノだ。何されるかたまったものではない。

そんな中で、クラクストンは口を開いた。

「私は、自分の好きな人が私をまた好きになつてくれるか分からないまま、数年時を過ごしてきました。でも、私はただあの人の隣にいたい、そして、あの人のために強くあり続けるために鍛えました。どっちが上だとか言うつもりはありませんが、その期間をあなたに見下されたくはないです」

「——ッ！　うるさい、黙れ！」

クラクストンの言葉はジュツサーノの怒りに触れたらしく、ジュツサーノは彼女を床へと押しつけるように押し倒し、そのままその上に覆い被さった。クラクストンは、そのジュツサーノの行動に対し軽く動揺を見せており、青い瞳を丸くして、目の前のジュツサーノを見つめていた。

ジュツサーノは続ける。

「やっぱり、駆逐艦つて大嫌い！　世間知らずだし、綺麗事ばかり言ってくる。武装外せばただのガキンちよのくせに、なんでそんな偉そうに出来るわけ？」

と、

「やっぱり、クラクストン……やっぱ、アンタは先に潰すべき存在。アンタがいなくなれ

ば、島田の生きる気力だつてなくなる」

ジュツサーノはそう言うのと、クラクストンの胸ぐらを手で押さえながら、もう片腕を天へと上げた。

「でも、その前に——ボコボコにしてあげる！」

「——ッ！」

「クラクストンッ！」

呆然としていたスミスはその光景を見てすぐに駆け寄ろうとしたが、その瞬間、自分の目の前に出てきた光景に、思わず足が止まった。

一方、クラクストンは目をギョツと瞑り、ジュツサーノからの拳に耐え切ろうと覚悟を決めた。どこかのタイミングで抜け出すか、スミスに頼って抜け出すか——その二択であるが、そのためだけにジュツサーノから自分への暴力は必要悪であるとも感じ取っていた。

しかし、ジュツサーノの拳は数秒経つても、自分の体は愚か、顔にも降り注いでくることはなかった。

「ぐっ……離してよ、ガキのくせにッ！」

「——！」

クラクストンはジュツサーノの言葉でハッと目を開いて、ジュツサーノを見た。

クラクストンに振り落とされるはずだったジュツサーノの腕は、誰かに掴まれており、ジュツサーノはそれに釣られて、覆いかぶさっていたクラクストンから離れていた。そして、ジュツサーノのその腕を掴んでいるのは——島田だった。

「し、司令官、様……？」

が、クラクストンは一瞬、島田である確証が持てなかつた。いつものポストン型の眼鏡がそこにはなく、素顔のままの彼で、一瞬、別人と認識する程度に見た目の印象が変わってしまった。

しかし——この風貌、見れば見るほど、昔の幼い彼と重なる。

島田がジュツサーノの腕を持ち上げて、彼女を睨み付けている間にも、援軍はやってきた。

「あ……えつと、向こうです向こう！」

「し、島田司令、話を聞くなり勢いよく飛ばしすぎじゃないか……」

「スミスさんもいますよ、司令官」

吉川にホーエル、そして岸尾と、見事に揃い踏みであった。

島田はジュツサーノを睨み付けながら、言う。

「とりあえず、君はクラクストンの上から退いてくれないか。立てないなら引つ張つてやるから」

「えっ……な、なにを……」

「退けつて言つてるのが、聞こえないのかい？」

「……っ、分かり、ました」

島田が本気で怒っているのがそこから伝わり、ジュツサーノは思わず敬語で彼に対応してしまった。ジュツサーノはこちらを掴んでくる島田の手を振り払うと、そのまま立ち上がった、クラクストンから離れた。

ジュツサーノは島田と入れ替わる形でそこから退くと、チラツと眼鏡がない島田の顔を見た。

(……眼鏡あると弱そうに見えるのに)

人の顔の印象なんて、小道具ひとつで変わる——ジュツサーノはそう思った。

そして、島田は床に倒れていたクラクストンの上体を起こし、彼女に声をかけた。

「クラクストン、大丈夫か？ 随分派手にやり合つてる雰囲気だけど」

島田は素晴らしいながら、焦げ目が付いている床や壁を見渡した。クラクストンとミスは苦い笑みを浮かべながら、返す。

「はい、私は大丈夫です。でも、司令官様……どうして」

「ああ、ここを見かけたらしい吉川くんが連絡くれたからさ。まったく、早速こんなことになってなんて、思いもしなかったよ」

島田は呆れ気味にジユツサーノをチラツと見てから、再びクラクストンへと目を向ける。そして、両腕を背中で縛られているクラクストンと一緒に立ち上がり、クラクストンの腕を解放した。

島田とクラクストンは見つめ合い、そのまま彼は——彼女を抱き締めた。

049：待ち焦がれていた再会と

「し、司令官、様……？」

普段の彼ならば絶対にしないであろう行動に、クラクストンは非常に困惑した。

1日ぶりに感じられる島田の体温を味わえばいいのか、それとも貴方らしくないと突き放すべきか——クラクストンがその二択で迷っていると、島田の口から、言葉が飛び出した。

「クラクストン……ごめん、ずっと君との思い出を忘れてて」

「えっ……？」

クラクストンは島田のその言葉を聞くなり、胸の中で、ドクン、と心臓が高鳴った。ずっとこのままであることを覚悟していた、また一からやり直せば良いと思っていた。そして、消えた記憶が呼び覚まされる奇跡なんて起きないと思っていた。

クラクストンが目を丸くしている中で、島田はクラクストンからゆつくりと離れ、彼女の頬に自分の片手を置いた。

「忘れないって約束は破ってしまったけど……君のこと、また好きになったよ」

「——大千、様？」

クラクストーンはずっと忘れることができなかった、名前を口にした。

「私のこと思い出した、のですか……？」

——声が震える。

ずっと来ないと覚悟していた日が、こんなタイミングで来るとは思いもしなかった。

クラクストーンが未だに信じられないと言った様相で島田を見てみると、島田は笑みを浮かべながら、「うん」と頷いた。

「遅くなってごめんね。迎えに行く約束は今でも有効かい？」

「……はい」

そう頷いているクラクストンの瞳からは、ボロボロと大粒の涙が止めどなく溢れ、頬に流れる。

「私……また、大千様と一緒にになれるんですよね。ずっとあなたの側にいて良いんです

よね」

「うん」

「あなたの心の中にずっといても良いんですよ」

「うん」

「私、今日まで、ずっとあなたの事を忘れる日はありませんでした。それはこれからでもです」

「……ありがとう」

島田とクラクストンはそのままお互いの顔を近付け——誓約してもずっと避けてきた、キスを交わした。

お互いの体温が唇から伝わり、クラクストンはその体温を更に求めて島田の体に腕を回した。島田はそれを拒否することなく、ただ、黙って受け入れ、彼女を抱き寄せる。

それが15秒ぐらい続いて、ふたりはそつとお互いから離れた。名残惜しいとお互いに思っているのが分かるぐらいに、寂しそうな表情だったが——状況が状況だ、これ以上はのんびりくつつくことは出来ない。

そうして島田とクラクストンが周りを見ると、ここにいた一同は気まずそうに2人から目を逸らしていた。

島田は「？」と首を傾げながら、目を逸らしているうちの一人である岸尾に話しかけた。

「お、おい……岸尾くん、なんでそんな目を逸らしてるんだよ。なんか、いけないものも見ちやつたような様子だな」

「いけないものっていうか……凝視するのもダメな気がして」

「いや、まあ……確かに見世物ではないけど……つて、吉川くんはなに体育座りになってるんだよ」

島田は、ふと、廊下の隅っこで体育座りになっている吉川へと視線を向けた。ホーエルはそんな吉川の背中を撫でて、宥めている様子だった。

島田は彼の話を聞こうとして、そちらへと歩み寄ったが、

「島田さん……冴えない見た目だと思つたら眼鏡取つたらそれなりだし、昔から女の子と両思いだし、活動的だしで……しかもキスして見せつけてくるしッ……」

「えっ……あー……いや、こつちも見せつけてしてるわけじゃなくってね？」

「そうですよ、司令官。島田さんやクラクストンにも事情があるはずですよ」

島田は吉川の言葉に、ビクツと反応しつつ、ホーエルお共になんとか言い返した。

しかし、吉川は、

「こいつらどうせ事が終わつたら交尾するんだ……それでオレたちに『子供が生まれたよー』って、ハガキを送ってくるんだ……」

「ち、ちよつと、何言ひ出すんだ、吉川くん！ そんな確定事項みたく言わないで欲しいんだけどー！」

「そ、そそ、そうですよ、司令官！ そんなこと言わないでくださいー！」

——唐突に出た吉川からの下ネタに、島田たちは顔を真っ赤にさせて反応した。それでも吉川からの言葉は止まらない。

「これの一体どこが冴えない男なんですか！ 彼女もいて顔も良くて性格も良くて、血

筋も完璧で、冴えないとかふざけてるんですかッ!？」

「あ……うん……その……ごめん、吉川くん」

「謝って済むなら憲兵さんはいらないんですよ……馬鹿ッ」

とうとう吉川は、そこでグスグスとすすり始めた。

島田は見た目が冴えない男だというのは、彼を知っている人物ならば共通認識ではあるものの、眼鏡を失い、凜々しい素顔が露わになり、その根本がすべて覆ったお陰で、本当に冴えない男・吉川はすっかり意気消沈しているのだろう。

クラクストンはそんな状況の中、言いづらそうに島田に話しかけた。

「あ、あの……司令官様。私、ちよつと気になったことがあって」

「ああ、どうした？」

「その……指輪のことは思い出しましたか？」

「指輪……？」

島田はその言葉を聞いた瞬間、首を傾げて、それから謝罪した。

「ごめん、実はそこまで辿り着けなかったんだよ。掘り起こされたのは夢の中だけど、クラクストンのこと好きでいるって約束した時に起きちゃって」

「そうでしたか……」

クラクストンはしよんぼりしながら続ける。

「私たち、別れる直前に一回指輪で誓いを交わしてるんですよ。ただ、後から司令官様の指輪は取り上げられちゃった上に、私との記憶が消されたって倉竹さんから聞いて……」

「……!」

島田は目を丸くした。

「ち、ちよつと待て……だとしたら、僕は本当に外因的な要因で君を忘れてしまったってことか?」

「はい、そうです。司令官様の賢さなら、私を忘れる訳がないと信じてましたから」
クラクストンは島田の質問に頷き、

「ただ、私たちが今になって誓約できないのは、幼い頃に一度誓いを交わしてしまったのが原因です。あの時の指輪さえ取り戻せば、私も本来の力を発揮できると思います」
「取り戻す……? つつたってなあ」

クラクストンの言葉に、島田は眉を下げて困ったように頭をポリポリと掻いた。

「どこにあるのか、とか、検討は付かないのか?」

「……あるよ、検討なら」

「!」

そう言い出したのは、ジュツサーノだった。

ジユツサーノが言い出したため、ここにいる一同は信用してなさそうな表情で彼女を見た。

「おいおい、本当か？ まさか、僕たちを罠にハマようってんじやなかるうな」

「駆逐艦虐めが好きとか言ってる人が言い出しても……」

「……今更味方面されてもな」

「まあ、別に信用されたくて言ってるわけじゃないし……それに、アンミラーリオから聞いた話だから、参考程度に、話半分でいいよ」

と、

「アンミラーリオが言うには、着任する前に、そして、幼い頃に誓約を交わしてしまった少年と艦船にはペナルティが課せられてる。そのうちのひとつが記憶喪失」

ジユツサーノは島田を見て、

「だから、本来なら誓約させないように監視役である提督がしっかり見ていなきゃならないんだけど……あなた達の監視役って倉竹って男でしょ？ 仕事はできるけど結構甘々だから、その辺まで見てなかったんだろぅね」

続けて、

「まあ、そのペナルティは少年が提督になって、指輪を取り戻せば大体チャラにはなる。ただ、普通はそこまで辿り着ける提督はいない。そもそも該当の艦船と出会えるとは限

らないし、島田とクラクストンのパターンのようなかなり少ないと見ていいよ」
それから、

「んで、その指輪の在り方に提督と該当の艦船が近付くと、記憶が蘇るようになってるの」

「つてことは……」

「そういうこと。アンミラーリオの伝聞が正しければ、指輪そのものは横須賀の中にあるよ。ま、半々ぐらいならその可能性に賭けてみても良いんじゃない？」

ジュツサーノがそこまで言い終えると、スミスが彼女に話しかけた。

「ジュツサーノさん……あなた、どういう風の吹き回しですか。敵にそんな有益な情報を教えるなんて」

「さつきも言ったじゃん、私はアンミラーリオに捨てられたつて」

ジュツサーノはスミスの質問に答え、

「だから、もう何もかも掻き回そうと思つてさ。別にあなた達の味方になるつもりはないけど、面白くなるならなんでもやるよ。そういう戦艦少女だから、私は」

「クラクストンと島田さんがイチャコラしてる間に吹っ切れたらしいですね」

スミスは苦笑しながら、この場で一番指輪探しに向いてそうな人材へと目を向けた。

「じゃあ、せっかくだし、吉川さんに探してもらいましょうか。情報部なら横須賀の中把

握してらでしようし」

「えっ……お、オレですか……」

こちらもちちらで立ち直つたらしく、普段通りの吉川の姿がそこにあった。吉川の隣に立っているホーエルは苦い笑みを浮かべて、ふう、と息を吐いていた。あのモードの吉川を宥めるのに相当苦勞している様子が目に見える。

吉川はスミスの指名に反応して、続ける。

「別に大丈夫ですよ、オレは。島田さんの他にもそういうパターンがあるってことは、どつかに指輪がまとめて保管されてる可能性が高い……ですよ。そこまでやつてると上司が何か知つてそうですし、お話聞いてみますね」

「ああ、頼んだよ吉川くん。僕は横須賀には詳しくないし……まず、ゼヴィンのところに行かなきゃ」

と、島田は顔を上げて言った。

確か、これからクラクストンと島田がゼヴィンの所へ向かい、彼らに一矢を報いるのが目的だったはずなのだが——ジュツサーノの件もあり、その予定が大いに崩れてしまった。

岸尾は溜息を吐いている島田に言う。

「島田司令。とりあえず今は捕まった身を演じよう。後ろに手を回して縛られておけ

ば、それで良い」

と、

「まあ、せつかくだ。その性悪軽巡洋艦もついてこい。いろいろあるようだが、途中で合流して監視されてた、つていう体裁は欲しい」

「えっ……で、でも」

ジュツサーノは岸尾に提案されるなり、額に脂汗を浮かべて、眉と眉の間を近づけて難しそうな顔をした。そして、自分の胸元に腕を回し、俯いた。

(また……アンミラーリオに何かされそうだし……あまり行きたくないな……)

部屋を出る前に起こった出来事——深海軍側から連絡があったお陰で、未遂には終わったものの、あのまま誰からも連絡が来なかつたら、ジュツサーノの痴態は島田達に全て曝け出す羽目になっていただろう。ゼヴィンは、ああいうことに関しては隠すぐらいなら見せつける、ぐらいの気前を持っていそうで、ジュツサーノは、またあの部屋に行こうとは思えなかつた。

ジュツサーノの様子を見て何かを察したらしいスミスは、いきなり岸尾のネクタイを引っ張って、顔を近づけた。

「司令」

「す、スミス……」

いきなりのことに驚いてスミスを凝視する岸尾だったが、スミスの表情を見て何か気付いたらしく、質問した。

「……普通に捨てられたわけじゃない、のか、あの女」

「まあ、そうですね。デリケートな話題になるので口にはしませんけど……連れて行くなら、その辺も加味して作戦立てないと、現場がややこしいことにはなりますね」

と、スミスは岸尾から離れて、ジュツサーノへ言う。

「すみませんね、うちの司令が無神経なこと言っちゃつて。行きたくなかつたら行きたくないで問題ないですよ。どちらにせよ、ゼヴィンさんから捨てられてるなら、いてもいなくても変わらないでしょうし」

「……ううん、やっぱり行ってみる」

ジュツサーノは顔を上げて、スミスを見た。

「軽く行つて出てくぐらいなら、私にも出来るだろうし……それに、私、足は速いから何かあつたらすぐ逃げられるよ。少なくとも、ここにいる戦艦少女たちよりは全然早いわけだし」

ジュツサーノはいつものように笑い、

「……それに、最後に彼の顔ぐらいは見ていくよ。数ヶ月とはいえお世話になつたし」「ジュツサーノさん……」

クラクストンはジュツサーノになんとなく質問した。

「あの、ジュツサーノさんはゼヴィンさんのことどう思ってたんですか？
あ、具体的なことではなく、抽象的な……好きとか嫌いとか」

「……そうだね」

ジュツサーノはクラクストンの質問に対し、クスツと笑みを浮かべながら答えた。

「アンミラーリオは確かに性格悪いけど、その分私も自由でいられるし、猫被らなくても済むのが有り難いよ。まあ……好きか嫌いかでいえば……好き、だったよ」

ジュツサーノはポツリとそう言っ、クラクストンに寂しそうに笑みを浮かべた。

「もう少し私の性格が良かったら、こういう話もつとしても良かったけど……私の性格悪くないとアンミラーリオのこと好きにならないから厄介だね」

「終わったら、いつでも聞きますよ」

「……それまで私も生きていられたら良いけど」

ジュツサーノとクラクストンはそんな会話を交わしながら、スミスから手首を縛る用のロープを受け取った。

050：生きてる世界が違う！

ガチャリ、と、ゼヴィンの部屋の扉が開かれた。それと同時に聞こえてきたのは、岸尾の低い声だ。

「……連れてきたぞ、ゼヴィン」

「お疲れ様だね……ん、おや、合流したんだね？」

ゼヴィンがチラリと紫色の瞳を扉の方へと見やると、そこには岸尾とスミスが、それぞれ島田とクラクストンを引き連れている姿だった。

そして、その背後には自分がよく見知っているイタリアの軽巡洋艦、アルベルト・デイ・ジュツサーノの姿もあった。ジュツサーノは自分が部屋を出ていく前の出来事が出た出来事だった為か、ゼヴィンの姿を見るなり、少し気まずそうに視線を逸らした。

しかし、ゼヴィンはそんなジュツサーノの感情など知ったことではないと、声を掛けた。

「へえ、ジュツサーノもいたんだあ。戦艦少女辞めて、ボクのところに来る気になった？」

「……ならないよ」

ジュツサーノははつきりそう言い放つと、視線を斜め下に落として続けた。

「アルベルト・デイ・ジュツサーノとして、アンミラーリオの側にいたいのに、武装解除なんて……それに、扱いにだって納得いかない」

「へー……その体を差し出す気はない、と？」

「そ、そうだよ！」

ジュツサーノは顔を上げた。

「確かにに私は報酬がもらえるならなんでもやるって言ったけど、どんな報酬だろうとアンミラーリオの提案は見合っていない！ だから私は断ってるの！」

ジュツサーノとゼヴィンの話を聞いて、ギョツとしたのは岸尾と島田であった。予め知っていたスミスとクラクストンは、若干気まづくなってるだけだったが、そうでない提督二人は困惑しているようだ。

ジュツサーノは続ける。

「別にアンミラーリオが深海軍の人でもなんでもいいよ。でも、私はそこまでされて深海軍側には行きたくない！」

「ボクと一緒にやなきや、猫被つて生きていかないといけないけど……いいの？ 他の提督とは相性悪いでしょ、ジュツサーノ」

「いいよ、別に」

ゼヴィンの指摘に、ジュツサーノははつきりと返した。

「元々、猫被って生きてたんだもん。むしろ、アンミラーリオみたいな人と一緒になれたのがイレギュラーなんだよ。だから、私は別にアンミラーリオがいなくてもやっていく」

「ふーん……あつそう」

ゼヴィンはジュツサーノのその言葉を聞くなり、一気に不機嫌になったようで、先ほどとは露骨に声音が変わった。そこから不穏な空気を感じ取ったクラクストンは思わず島田の方に寄り、島田も何かを察したようで、クラクストンを隠すように前に出た。ゼヴィンは手を出さずとくいっ、と自分の方へ動かした。

「おいでよ、ジュツサーノ。悪いようにはしないよ」

「ツ……」

ジュツサーノの言葉が詰まる。彼女の足は一瞬動いたものの、ゼヴィンの所へ行くことは出来ず、結局その場で止まってしまった。

それから数秒ぐらい経ち、ジュツサーノは首を横に振った。

「……行か、ない」

と、

「そつちには、行かない……私とあなたとの契約は……ここで終わり、だから」

——ジュツサーノは拒否した。

どんなに性格が悪かろうが、自分が戦艦少女である自覚はあったジュツサーノ。しかし、ゼヴィンにとってはジュツサーノは戦艦少女というより、自分の手先のひとりにかかわれておらず、挙げ句の果てに慰安目的で武装解除と来た。ジュツサーノとしては、もらえるものがもらえるのなら、手先扱いでも構わなかった。戦艦少女として戦いに赴くことが出来るのであれば、そして、ゼヴィンのためになるならば、些細な問題ではない。

ただ——ゼヴィンがそんなジュツサーノに意味を見出さず、道具として思っただけでなく、ジュツサーノとゼヴィンの間に溝を作った。

(戦闘道具として思われてないぐらいなら何とか受け入れるけど、慰めるための道具として利用されるのは嫌だ……誓約してて仲深めてるなら、普段と変わらない……って思うけど)

ゼヴィンとジュツサーノに関しては誓約の有無に関してはしていない方の分類であり、そろそろ頃合いだろうと思っていた時にこれである。ゼヴィンも誓約については一切考えていないわけでもないだろうが——それでも、彼の考えには納得はできない。こちらが断れば、そういう体に仕上げればいいよね、なんて言ってくるのだから、女として拒否が出るのは当然だろう。

島田とクラクストンは、ゼヴィンとジュツサーノの姿を交互に見つめながら、まだ終わらないのかなあ、なんて呑気に思っていた。自分たちがここに連れてこられたのは、ゼヴィンに虐められる為だったはずなのだ。

とはいえ、それだけゼヴィンにとってジュツサーノの存在は小さくはなかったのも、こちらに伝わってくる。彼女はわざわざゼヴィンが名指しにして秘書艦にしたわけなのだから、それは当然とも言えよう。

ゼヴィンはジュツサーノの拒否を聞くなり、溜め息を吐く。

「……報酬払えば、なんでも言うことを聞く、なんて嘘だったんだね」と、

「まあ、報酬払う案件でもろくな仕事して来なかったし、負けてばっかだしで、戦艦少女として使えるかどうかは別問題なのは目に見えて分かってたからねえ。基本スペックも軽巡洋艦のくせに、大半の駆逐艦に劣る部分が多いし、そりゃママも捨てろって言うってくるに決まってるさ」

(つ……否定、できない)

ジュツサーノは自分が古い船であり、そのスペックも数ある軽巡洋艦の中でも下から数えた方が早いことも知っている。そして、そんな自分をわざわざ指名してくれたゼヴィンについてきたのだ。

ジュツサーノが黙り込む中で、ゼヴィンは続ける。

「まあ、体の方は軽巡洋艦の中でもとびきりのご馳走してるし、そんなジュツサーノだから、ボクは取引しようとしたんだよ」

「私が一方的にやられるだけなのを取引……う？」

「君の体をボクなりに『改造』して、相応の体に仕上げれば、この後の衣食住を保証してやるって言ってるんだよ？ 守銭奴である君にとって、好都合だと思うけど？」

「……！」

ジュツサーノはそう言われると、もう何も言い返せなくなった。

ゼヴィンの側に居続けることが、自分の生活の安定の近道である。それは今もそうであり、ゼヴィンがいなくなったら、報酬もたくさん貰えなくなる。最低限の暮らしは保証されているものの、もっと贅沢に、自分なりに生きたいと思うなら——彼についていくしかない。

ジュツサーノが顔上げて、口を開こうとした途端、

「ち、ちよつと待て。そんなの、いちいち自分用にしなくたって、普通の恋仲になれば解決するだろ！」

「そ、そうです！ 体の繋がりなんて、一緒にいたいだけなら重要ではないはずです！」

「——！」

(な……………いつらー)

ジュツサーノは大いに驚いて、島田とクラクストンを見た。このふたりが自分を庇い、しかも、ゼヴィンに向かって正論を言い放ったのである。

ゼヴィンは割り込んだできた二人に対し、面白くない、と言わんばかりの顔をしている前で、島田は続ける。

「ゼヴィン。お前、どうしてそこまで体の繋がりを求めるんだ。あー……………えつと、あと、この取引……………そう、お前ぐらいの年齢の子供がしていい取引じゃないだろー!」

「し、司令官様……………」

島田としては後半の方を言いたかったのだろうな、というのがクラクストンにも伝わってきたようで、思わず苦い笑みを浮かべてしまった。恋仲の延長の体の関係ならば黙ってれば良いが、こういった取引に使うのは反社会勢力がすることだ。

しかし、ゼヴィンはそんな島田の言葉に対して、嘲笑した。

「はは、島田くんは純粋なんだねえ。ボクたちの世界じゃ、こういう取引は当たり前だよ?」

「だからって、そこに自分の秘書艦を巻き込むなんて……………」

「良いことを教えてあげるよ」

ゼヴィンはニヤリと笑みを浮かべ、続ける。

「ボクはね、確かにジュツサーノのことは弱い軽巡洋艦だとは思ってるよ。でもねえ、それでもここまで使ってきたのは、曲がりなりにも、彼女に対して好意はあるからだ。じゃなきゃ、こんな取引するつもりはないさ」

「アンミラーリオ……」

「それでね」

と、

「君の戦艦少女としての遺伝子とボクの遺伝子が合体すれば、君から生まれてくる子供はかなり優秀になると思うよ。ボクの母親は深海軍の戦艦・Yamatoだからね。そんな戦艦の血を引き継いだボクの子供が、劣等生な訳ないだろう？」

「その子供は……どうするの？」

「もちろん、我々深海軍が直々に育てるよ」

ゼヴィンは笑顔ではつきりと、そう言い放った。

「まさか、ボクが戦艦少女たちの世界に、その子供を引き取らせるとは思ってたないだろうね。まあ、男に生まれれば表舞台には出さだろうけど、立場的にはボクみたくなるんじゃないかな？」

「……分かった、もう良いよ」

ジュツサーノはゼヴィンの言葉を聞いて、無駄だと思ったのか、制止をかけた。

「アンミラーリオとしては私と普通の恋仲になるつもりはなくて、本当に身体だけを差し出してほしいってことなんだ……」

「うん。だから、そういう契約してねって話だよ。ジュツサーノはどうしても、嫌なんだね?」

「だって……それって、戦艦少女なら誰でも良いんじゃないの?」

ジュツサーノは顔を上げた。

「アンミラーリオの考えていることが本当にそうなら、私である必要はないよね? その差って、単純に見た目と性格の好みだけじゃないの?」

「うん! それ以外、何があるの?」

ゼヴィンのその笑みは、恐ろしく爽やかなものだ。本当にジュツサーノのことなんぞ微塵も思いやる気持ちもない、そんな彼の自分勝手な性格が窺い知れる。

「ボクはね、島田くんのお嫁さんみたいな素直で可愛い女の子よりも、ジュツサーノみたいな生意気で腹黒い娘を自分専用に使立て上げるのが大好きなんだ。そういう娘の方が潰れるのが遅いし、その分潰した時の快感も凄いと思うんだ」

島田はそんなゼヴィンの言葉を聞いて、吐き気がこみ上げてきた。

「(こ、こ)いつ……独特な世界に生きてるとかいうレベルじゃない。完全にこつちとは別離してる世界に生きてる。深海軍の息子ならそうだろうけど、ここまでのはつきり人間

じやない考えを述べられるなんて)

——やっぱり、この男は今すぐ潰さなければいけない。

考え方が個人的なだけで、こちらに危害を加えないのなら放っておくだけだが、ゼヴィンに関してはこちらに危害を加えようとした上に、この界限の提督として必要な、「戦艦少女を大事にする」という考えを微塵も持ち合わせていない。

このまま彼をこの界限に居続けさせれば、何れは界限そのものの均衡が崩れ去り、そうなつてしまえば、深海軍に支配されるのも時間の問題だ。

島田は自分の後ろにいる岸尾と、クラクストンの後ろにいるスミスへと視線を送つた。その視線の意味をふたりはすぐに察知して、お互いに頷き、島田とクラクストンを縛っているロープを解き始めた。

ゼヴィンはそうなつていることを気にも留めず、言葉が続けた。

「まあ、ボクの考えなんて君たちのような人間には理解できないだろうね。なんたつて、ボクは君たちとは違う。戦艦 Y a m a t o の血を引き継いでいるんだ。その意味を分かつて——」

「そんなの、理由にはならないさ」

そして、ロープをほごき終えた島田がゼヴィンの言葉へ口を出した。

ゼヴィンはその言葉に反応すると、島田とクラクストンを見て、後ろに回されている

手が横にあることを確認した。そして、ロープはスミスと岸尾の手中へと納められている。ゼヴィンはそれで何かを察したのか、岸尾に言った。

「兄さん、どういいう見だい？ 協力しないなら、君の母親に——」

「オレのお母さんは、全て知ってるよ」

岸尾はロープを床へと投げ捨てた。

「あと、オレのことは兄さんと呼ぶな。半分でもお前と同じ血が流れている現実が嫌すぎるからな」

「……ちえつ、島田くん側に着くなんて、岸尾くんもいけずだなあ。ま、でも、全て知ってるなら、ボクに従う必要もないか」

ゼヴィンは自分以外が敵に回っている状況でも、笑みを絶やすことはなく、座っていた椅子から離れて、立ち上がった。そんな彼が真っ先に向かったのは、ジユツサーノでも岸尾でもなく——島田のところだった。

島田もそんな彼に近付くように少し歩くと、立ち止まって、彼と対峙した。島田は体の横でギュツと拳を握り締めながら、目の前にいる銀髪の美少年を睨み付けた。

クラクストン、スミス、岸尾、ジユツサーノの4人は、部屋の中で沈黙が駆け抜けている間、そんなふたりの対峙をただ、黙って、見つめていた。

クラクストンは胸の前でギュツと両手を重ねて握りしめた。

（司令官様……！）

051：全てはこちらの差し金

「眼鏡は無い方が良いね。その方が表情が分かりやすく助かるよ」

「そりやどうも。こうして面と向き合って話すのは卒業式以降か」

ニヤニヤと笑みを浮かべているゼヴィンに対して、素っ気なく答える島田。このやりとりを見るだけでも、このふたりの間には不穏な空気が漂っており、そんなふたりがこうして面と向かって話している時点で、ただ事では無いのも誰から見ても明らかだ。

島田は彼が何を企んでいるのか分からない以上、内心で必要以上に警戒をしていた。深海軍の戦艦 *Yamato* が身内いるということとは、今すぐでも、彼の元に深海軍がやってきてもおかしくない。

ゼヴィンは警戒を強める島田に対して、言う。

「おーおー……そんなに怖い顔しなくなつて良いじゃないか島田くん。せつかく眼鏡を失つて、カッコいい顔が見えてるのに台無しだよ」

「お前の前だから、そうなってるんだよ」

と、

「ただでさえお前のせいで兵学校時代は地獄だったのに、着任してからも、お前から襲撃

を受けてるわけだからな。警戒するなつて方が無理な注文だ」

「ま、ボクは君を潰したいわけだから、そうなるのも当然だよ」

ゼヴィンは苦い笑みを浮かべながらそう言つて、その瞳で島田を凝視した。

「島田くん……ボクは君のことは個人的に嫌いだよ」

「何を今更」

「無論、深海軍の人間としても、ね」

ゼヴィンは低い声で続ける。

「島田くん……いや、ここでは敢えて、『小禄くん』と言わせてもらおうか」

「好きにしろ」

島田がそう言うと、ゼヴィンは「ありがとうね」なんてコロツと表情を変え、可愛らしく笑みを浮かべてから、再び元の顔に戻った。

「ボクの両親はね、深海軍の戦艦である母親に、ここで提督をしていた父親なんだ。正直、これ以上にならない人材のはずだと思つてたよ」

と、

「でも……君は海に関係ない血縁で、提督という人材としては平凡なずだ。別に家がそういう家系だったわけじゃないんだろう？」

続けて、

「なの……小禄くんは、何もかも優秀でこちらを追い抜こうとした。だから、兵学校の教師にあることないこと吹聴して、トツプの座に君臨しようとした君を叩き落とそうとしたわけだ。別に最初から君のことを敵視してた訳じゃないよ。だって、最初はボクがダントツでトツプだったんだもん」

ゼヴィンにはこやかに笑みを浮かべるが、その瞳は全く笑っていないかった。

「君は友達も沢山いて、少年提督志望者でグループ作っていたけど、それも学校側にとつても不都合だったらしくてね。まあ、これに関しては利害の一致ってやつ？ 君みたいな子がいたら、これまでの提督界限に支障をきたすつてことで、危険視されてたんだよ」

「そんな……酷い……」

クラクストンはゼヴィンの話を聞いて、思わず言ってしまった。兵学校に入る前の彼の努力ぶりは、1ヶ月間だけとはいえずつと見てきた彼女だ。そんな理由でそれらを蔑ろにされてしまうなど、彼女にとってはあまりにも残酷な事実だった。

ゼヴィンはそんなクラクストンをよそに、話を続ける。

「だから、ボクと教師で君を徹底的に潰そうとしたわけだ。学校側の方針は『少年と鎮守府の癒着を強めるために、素直で従順な少年を提督に』——ということだったけど、まさかそれがこんな所で生きるなんてね」

「その言い方……まさか、その方針自体、深海軍からの差し金じゃないだろうな」

岸尾の指摘が入る。

「癒着が目的だったとして、わざわざ人の性格を指定するような真似はいるか？ 島田司令のような生徒を界限から突き落とすための口実じゃないのか」

「……兄さんは鋭いね」

ゼヴィンは、ハッ、と嘲笑う。

「さすがに国内の兵学校全域にこの方針は無理だから、まずは影響力が大きい横須賀周辺に、深海軍関係者がこれを持ちかけたんだよ。そうしたら、おバカな人たちが信じて、通っちゃった」

（物理的に首を飛ばさなきゃいけない奴らが増えたな……）

ゼヴィン説明を黙って聞いていた島田は、まずはそこからか、と脳内で頭を抱えた。この様子だとまともな教員たちは島田のように蹴落とされて、そのままクビになっていそうだと。

ゼヴィンは続ける。

「でね、この方針の目的はね、少年提督という存在を無能にするためのだよ。だって、素直で従順だけじゃ大人になってから困るもんね？ そして、この方針は長い目で見たら、将来の平均が下がる一方でしょう？」

「そして、その平均が下がれば、深海軍の侵略もより進んでいくってわけか」

「さっすが、小緑くんだねー。ご名答。そう、これは長い目で見た侵略作戦だよ。その長い期間で横須賀に便乗する鎮守府があれば、こちらが動くのも楽になる」

ゼヴィンはそう言うと、ブレザーのジャケット裏に隠していたらしいナイフを取り出した。すると、そのナイフの表面を使つて、島田の顎へと当て、クイツと持ち上げる仕事をした。

島田は自分の首元に刃物が近いことに冷や汗をかきながらも、動揺を表に出さないように、ぐつと表情を引き締めた。

ゼヴィンは目の下を黒くさせて、笑みを浮かべていた表情から一転、真顔で言った。

「だから、君みたいなのが界限にいると、非常に都合が悪いんだよね。こつち側に来れば君の記憶も立場も保証できたのに、来なかったから」

「記憶って」

島田は目を丸くして、ゼヴィンを見た。

「まさか、僕とクラクストンとの記憶にもお前たちが関与してるってのか」

「……関与というか」

と、

「提督になる前の少年と艦船が誓約した際に、指輪を取り上げて記憶を失わせるって制度を提案したのも、深海軍関係者だよ。提督でもないのに誓約できるほど仲を深められ

る少年も、こちらとしてはかなり害悪でしかないからね」

「……………」

「……………」

島田は呆然とし、クラクストンの目元は見えなくなった。

ゼヴィンはそんなふたりをよそに、続ける。

「ただ、君の場合は今後見込みがありそうってことで、学校の入学式の時まで敢えて放置してたんだよ。こつちに引き込む事が出来たら、こちらもかなり有利になるんじゃないかとね」

（そう、か……………なんか、だんだんと思い出してきたぞ）

——確かに、自分とクラクストンは最後の日、将来を誓うための指輪を交わしていた。大きくなっても、お互い見つけられるように、といった願いも込めて。

しかし、島田はクラクストンに関する記憶をぼっかりと失ってしまった。

ただ、それは、すぐに失ったわけでもなく——兵学校の入学式の日には失ったのだ。

（入学式の日……………そうだ、その時にゼヴィンと顔を合わせていた。ただ、その後には何か質問されて、僕は拒否して——指輪を奪われて……………）

「ツ……………」

そこから先を思い出そうとすると、島田に頭痛が走る。島田は一瞬、若干顔を歪ませ

た。

(ダメだ……思い出そうとすると頭が痛い。完全に記憶が戻るのは指輪を手にしてから、つてことか)

少なくとも、ゼヴィンが今言ったことに関して、ほぼ確実であるのを思い出せたのは収穫だろう。

今まで出た情報をまとめると、自分の記憶喪失に關してもゼヴィンたち深海軍が囁んでおり、そして、すべては自分を鎮守府へ着任させないために計画され、蹴落とされそうになった。ただ、そんな自分がなんとか界限に入ることができたために、深海軍側で排除しようとしている——そこまでが、今までのシナリオだ。

そして、ゼヴィンは今、島田をここで排除しようと試みている。それを阻止して、前に進まなければならぬのが、今の島田が置かれている立場だ。

島田は体の横でズボンを握り締め、自分に言い聞かせた。

(ツ……今は抑えろ。向こうが行動に出るまで、こつちは何にもしない。こつちが武力行使に出たら、何かあった時に言い訳が出来なくなる！)

ここで自分から行ってしまえば、ゼヴィンが襲われたと宣言するだろうし、それは避けねばならない。ゼヴィンが先に手を出せば、こちらは正当防衛を主張できる。今の時点ではこちらに傷が付いていない以上、向こうに与える言い訳の隙が出来てしまう。

しかし、島田はそう思っている、その周りがどう思い、どう行動するかまで、コントロールは出来なかった。

ここまでずつと黙って話を聞いていたクラクストンが、とうとう動き始めた。

クラクストンは自分を解放してくれたスマイスに感謝の意味を込めて、ペコリ、と、お辞儀をすると、コツン、とヒールを鳴らし、島田とゼヴィンの方へと歩き始めた。

島田は彼女がこちらに近付いてくると、そちらへと目を向けた。

「く、クラクストン……」

「……ゼヴィンさん」

クラクストンは俯けていた顔を上げて、ゼヴィンを睨み付けた。今までに見たことがない彼女の表情に、島田はビクツと驚きつつも、彼女を見守った。

クラクストンはゼヴィンがこちらに視線を向けると、続けた。

「司令官様に突っ掛かっているだけならば、司令官様の言うことに従うだけで済んでいました。私に対する仕打ちだって許せるものではありませんが、作戦としては納得できるものだと思います」

と、

「でも——あなたが私と司令官様を意図的に引き離そうとした、というのが真実ならば、私は絶対にあなたを、いえ、あなた達を許すことは決してない」

クラクストンはそう言うのと、島田にナイフを向けているゼヴィンの腕を掴み、ギユツと握り締めた。

「このナイフ、司令官様から離してくれませんか？ 司令官様が何も武器を持ち合わせていない中、あなたは一方的に武器を持っている。あまりにも一方的すぎる」

「……はは、こりや参ったなあ。島田くんも怖い女を相方にしちゃったね」

クラクストンに若干気圧されらしいゼヴィンは、笑いながら、島田に向けていたナイフを下ろした。そして、クラクストンは島田からナイフが離れるなり、すぐに島田に抱き着いて、ゼヴィンの方を睨み付けた。

——この人が、自分と彼の仲を引き裂こうとした。

倉竹の協力が無ければ、島田と自分はまた出会うことなく、そのまま時を過ごしていただろうと思うと、クラクストンは気が気で無かった。

抱き着かれている島田は、呆然としながらクラクストンを見た。

「クラクストン……」

「……大丈夫です。私は何があっても、あなたから離れません」

クラクストンはギユツと彼を強く抱き締めて、言葉通り絶対に離れてやらないという意志を見せた。

島田は今までの経緯を考えると、そんな彼女を拒否することが出来ず、受け入れるし

か無かった。このことで一番辛さを感じていたのは、きつと彼女だ。

(やつと好きな人に再会出来たと思つたら、自分のこと覚えられていなかったんだから、当然だ。僕を抱き締めることで彼に對する怒りを抑えられるなら、それでいい)

島田はクラクストンの体を受け止めて、軽く抱き締めると、そのまま彼女の頭をそつと撫でた。

そうして、島田が彼女を抱き締めながら、顔を上げると——激しい轟音と共に、外から強い光がこちらへへと放たれた。

「ッ!？」

ここにいた一同は全員その明るさに目を瞑つて、一瞬の急激な光から逃げた。

(一体何が……!——)

島田が驚きながら目を開いて、外を見ると——先ほどまで太陽が照り付けていた空が見事に曇天へと移り変わり、ポツポツと雨が降り始めていた。

岸尾は窓越しにそんな外を見て、目を丸くしながら、言う。

「今日の天気は一日中晴れだったはずなのに……どうして」

「ふふ、くくつ……あははっ!」

ゼヴィンは声を上げて笑い、続けた。

「どうやら、『来た』みたいだねえ! こんなところで続けるのもシヤクだろうし、折角

だから海に出て話そうよ、みんな？」

「……………」

(つてことは、深海軍が来た合図——!?)

島田たちはゼヴィンの言葉を聞いて、すぐにそう察した。クラクストンも顔を上げて外を見るなり、驚いて脂汗を流していた。

「し、司令官、様……………」

「……………」

島田は何か決意して、顔を上げた。そして、ゼヴィンに言う。

「クラクストンの艦装の装着する時間と、僕たちが船を借りる時間をくれ。少なくとも、それらは必要だろう」

「ああ、良いよ。これから起こる事象が君には分かっているみたいだね？」

「……………ああ。そんなこと言われて、ただで済むとは思ってないさ」

島田はゼヴィンに言われるなり、コク、と頷いて、クラクストンを見た。

クラクストンは最初、動揺していたが、すぐに表情を切り替えて、「はい」と島田の視線に返した。

「私は大丈夫です。司令官様と一緒になら、何も怖くありません」

「……………ありがとう。じゃあ、行こう。みんなも」

島田はそう言うのとクラクストンの手を握り、ここにいるメンバーに外に行くように促した。

クラクストンは自分と彼を繋ぐ手を見ると、一層強く握り締めた。

052 : 7年越しの誓約

倉竹たち舞鶴に残っていたメンバーは、日が明けると共に短い就寝から起き出し、鎮守府と鎮守府を繋ぐ地下鉄へと乗り込んだ。

ジュツサーノと深海軍の襲撃から2ヶ月近く経とうとしているものの、その時に受けた地下鉄へのダメージはすっかり綺麗に直っており、肝心の列車の方も新しく新調されている。修復の早さに一同は驚きつつも、艤装を直す技術に長けてる以上当たり前か、なんて変なところで納得してしまった。

列車へと乗り込み、運転はいつものようにジェルジンスキー——ではなく、倉竹が担当。自分がいる時は艦船に頼りたくないというのが倉竹の意見であるものの、同乗している有明の存在もあるのではないかと言われると、押し黙ってしまった。岩国は、恋愛面では未だに青臭さが抜けない倉竹に、苦い笑みを浮かべていた。

いざ、列車が出発して走り出すと、シャーリーと大原は1時間もしないうちに、グースカとイビキをかきながら寝てしまった。イビキに関しては大原要素が大半だと思われるが。

ジェルジンスキーは、自分より少し離れて座っているそんな男子ふたりを呆れ混じり

に見つめた。

「はー……全く、このふたりは。これから敵の陣地へ向かうつてところなのに、緊張感がないわね」

「ふふ、仕方ないですよ。睡眠時間も短かったですし」

應瑞は口到手を当てて、クスクスと小さく笑みを浮かべて答えた。

「むしろ、お休みになられてない岩国さんと倉竹さんが心配です。一晩中、作戦を練っておられたのでしょうか？」

「はは、完徹なんて昔から慣れっこだ。子供たちには今後のためにも寝てもらいたいが、我々はもう成長しきっているからね。寝ようが寝まいが変わらないさ」

岩国は應瑞に言われて、笑って答える。

「有明くんも倉竹くんのアタックには辟易しつつも、ちゃんと付き合ってやるんだから、情が深いな」

「も、もう……からかわないでください、岩国さん」

岩国に話の矛先を向けられた有明は彼のその言い方が引つ掛かったのか、少しムツとしつつ、どこか気恥ずかしげに続けた。

「彼は昔から私をよく頼ってくれましたし……今でもそうだから、あんなことがあつても断れないだけです。頼ってくれる以上、無碍に出来ない。それ以上に深い意味はな

いです」

「それを情が深い、と言うのだよ、有明くん」

と、岩国は続けて、

「そろそろ君も、前に進んでも良い頃合いじゃないかね？ 今更受けるのも君からしたら微妙な気持ちだろうが……彼もとづくに成人している。ここまで気持ちが変わらなければ、十分その資格はあると思うぞ。君だって、彼に一切好意が無いわけでもなからうに……どうして、意地を張るのかね」

「私は……『戦艦少女』ですから」

有明は俯きながら、言葉が続ける。

「そう、普通の人間ではないんです。戦艦少女という女の形をした兵器。そして、今の姿で、彼が生きているよりも長い時間を過ごしています」

と、

「そんな私が、彼の隣に居続けて良いのか……悩んでるんです」

「どうして？ 別に居続けたいのなら居続ければ良いんじゃない？」

ジェルジンスキーはサラツと返したが、有明の表情はどこか浮かばない様子だった。

有明は続ける。

「数が多い駆逐艦や巡洋艦などは出入りが激しく、引退で区切りをつけることが出来ま

すが……私のような艦船は、そもいかない。私の艦装には、『深淵』を倒す力が宿っています。そんな艦装を使えるのも私だけなんです。そんな私の役割に、彼を付き合わせるわけには行きません」

「……倉竹さんを失うのが、怖い、つてこと？」

ジェルジンスキーは意外そうに有明を見つめ、質問した。有明は「そうですね」、なんて眉を下げながら笑った。

「月日は沢山のことを私から奪っていきます。そして、私は未だにそれに慣れないまま。きつと、倉竹さんは私を置いて先に空の彼方へ行ってしまうでしょう。でも、それでも、私はすぐに彼の元へと行くことが出来ない。……そう思うと、申し訳なくて」

「なるほどね、だから誓約を受け入れることが出来ないってわけか」

ジェルジンスキーは、「なんだ、そんなこと」と、言いたげな様子で有明を見た。ジェルジンスキーは足を組み直し、向かい側に座っている有明に向けて、言葉を続ける。

「まあ、確かに、気持ちとは分からなくもないわ。普通の人間でない以上、自分の提督との恋愛に慎重になつても仕方ないもの。でもね、私は熱い気持ちをその時に伝えられない方が、絶対に後悔すると思うわよ」

有明はジェルジンスキーのその言葉を聞いて、彼女に向けて顔を上げた。

「倉竹はあなたからすれば、まだまだ若造でしょうけど、だからって自分の立場を言い訳

にして、答えられないって言っちゃう方がダメだと思わよ。だって、倉竹からしたらあなたと一緒に居られることが幸せだって、昔でも今でも変わらなかつた、つてことですよ？」

「……幸、せ？」

「そう」

ジェルジンスキーは笑みを浮かべながら頷く。

「死ぬまであなたと一緒にいたい、幸せになりたい、つて気持ちが強いから、あなたに誓約を申し込んでるのよ。それに、倉竹はあなた以外の戦艦少女には、一切目もくれないわ。あそこにいる大体の戦艦少女から、好意を抱かれてるのにな」と、

「有明さん。あなたが倉竹を嫌っているなら、もうそれは仕方ないけど……一緒にいるってことは、少なからずそういう気持ちがあるってことでしょう？ 倉竹もそれがかつてて、誓約の話を持ち込んだんじゃない？」

「……！」

（そう、だった……確かに彼の猛烈な求愛には辟易していたけど）

有明はジェルジンスキーの言葉で、改めて、倉竹に対する自分の気持ちを見直し始めた。

有明はそのまま考え込み始め、ジェルジンスキーがそれを見守っていると、どこからかスマートフォンオブゾンのブザー音が鳴り始めた。誰のブザー音かとキョロキョロと辺りを見渡したが、それに勢いよく反応したのがシャーリーだった。

「っ、ああ!？」

——どうやら、シャーリーが該当のスマートフォンの持ち主らしい。

シャーリーはそのまま起きて、ついでに隣にいた大原もそれに釣られて目を擦って起き上がった。大原は突然のシャーリーの挙動に、ジーツと半目になり、言う。

「んだよ、シャーリー……せっかく寝てたのに」

「電話だよ電話……も、もしもし、シャーリーです」

シャーリーは欠伸をしつつ大原に答えてから、応答ボタンを押して電話に出た。相手はどうやら吉川らしく、最初に「ああ、吉川くん!」と、明るい声を出してから、彼らの用事を聞き始めた。

彼から話を聞いていくうちに、シャーリーの顔色は変わって、神妙なものになり、「早めに行くよ」とだけ言って、電話を切った。

シャーリーはスマートフォンをスリープ状態に落とすと、ここにいるメンバーに伝えた。

「今、吉川くんから聞いたけど、島田くんとクラクストンさんは無事だった」

「！　そう、良かった！」

それを聞いたジェルジンスキーはパアッと瞳を輝かせて笑顔を浮かべた。

「あのふたりが無事ならそれで良いんだけど……後は？」

「ああ……」

シャーリーは頷いて、

「今、向こう側の天気の挙動が、深海軍が来てる時のそれになってるらしくて、島田くんたちも確認に行くって」

「……倉竹〜！」

ジェルジンスキーはそれだけ聞くと、立ち上がって、すぐに運転席の方へと駆け出した。

そして、ガラスをゴンゴンと叩いて彼の注意を向けると、窓越しに倉竹に向かって大声で言い放つ。

「倉竹エ！　これ以上ペース上げられないの!?　向こうの大変なことになってるみたい

よー！」

「無茶を言わないでくれ。これ以上スピード上げたら、制御出来なくなるよー！」

倉竹は眉を下げて困った様子でジェルジンスキーにそう返した。

実際、列車のスピード関係は脱線にも繋がるため、下手にやりすぎると、今度は逆に

こちらがお陀仏なんてこともあり得なくもないのである。みんなを安全に横須賀まで届けるという使命がある以上、ジェルジンスキーの要求に応えかねるのだろう。

とはいえ、彼女の焦りがそれで消えるわけもなく、さらにまくし立てた。

「どうせこの後曲がり道もない直線一本道なんだから、スピード上げたって問題ないでしょ！ 早く横須賀行かないと、アイツらの身に何が起こってもおかしくないわよ!」
「ま、まあまあ、落ち着かないか、ジェルジンスキーくん。倉竹くんを急がせたってしょうがないだろう」

と、ここで岩国からジェルジンスキーに対する宥めが入る。

岩国からの制止が入ると、ジェルジンスキーもさすがにそれに従うしかなく、運転席から離れた。

(島田……クラクストン、どうか、無事でいて……!)

島田は、岸尾と艀装をすでに背負っていたスミスを先に行かせ、ふたりには船の確保を任せた。クラクストンは艀装が外されているものの、スミスの部屋に行けばクラクストンの艀装が保管されていると言うことで、そちらに行かない他はなかった。スミスの部屋に関してはスマートフォンで彼女が居場所を共有してくれたため、それに従って小走りしていた。

行く途中で横須賀鎮守府の中をキョロキョロと見渡していたが、この天気で反応して
いない提督はほとんどと言っているほどおらず、急激な天候の変化に予定が潰れたり、
変更したりなど、影響は底知れないほどだった。

島田はそんな鎮守府内を見ながら、クラクストンに話しかけた。

「これ、ゼヴィンが関連してるって言ったら、みんな驚くだろうなあ……」

「驚くどころか受け入れられるかどうか、ですよ。あの人、ここだと相当なやり手として
通ってるみたいですよ」

「あんなのがやり手だったら、僕は鎮守府のトップになってるぞ」

島田はそう言いながら、戦艦少女たちの宿舎と鎮守府を繋ぐ通路へとクラクストンと
共に差し掛かった。

島田はスマートフォンで地図を見ながら、道順を確認した。

「えーっと、ここが通路だから……向こうの棟に着いたら、まず一階分上に行こう」

「はい、かしこまりました」

と、クラクストンが頷いていると、

「おーい、島田さんじゃないですかー！」

「！」

聞き覚えのある声が宿舎棟から聞こえてきたため、島田たちが顔を上げると——そこ

にいたのは、吉川とホーエルだった。島田は彼らの姿を見るなり、すぐにそちらへと駆け寄った。

「吉川くん、ホーエル！ 指輪、見つかったのか？」

「はい。情報部署に質問したら、宿舎の地下に置いてあるって言われたので、探してきました。データの照合もその場で確認したので、多分これじゃないかと」

吉川は島田に指輪が入った箱を差し出すと、島田はそれを受け取った。

「ああ、ありがとう」

島田は手のひらにそれを置いて、パカツと蓋を開いた。

その中をクラクストンと覗き込むと——小さいダイヤのような飾りが真ん中に付いている銀色の指輪が二つ、そこに飾られていた。

島田はそのうちの片方を手にして、箱から抜き取ると、脳裏で当時の記憶が一気に駆け巡った。

「——！」

——どうやら、この指輪で合っていたらしい。

そんな彼の様子を見ていたクラクストンは、ギョツとして島田の顔を覗き込んだ。

「……司令官様？ 大丈夫ですか？ どこか痛いですか？」

「え……あ……あ……」

島田の目からはツウツと涙が走っていた。一気に当時の記憶が思い出された故に、その始まりから顛末まで鮮明に蘇ったため、島田の脳内のキャパシティが耐え切れず、湧き上がってきた感情、何もかも全てひっくりくるめて、涙となって溢れ出てきたのである。

クラクストンは、島田の涙を指で拭う。

「司令官様。私たちは……すごく幸せなのかもしれませんね」

「クラクストン」

「ジュツサーノさんの言葉が正しければ、私たちみたく、また巡り合って、また好き合える確率すら低いはずですから」

「……そうだね」

島田は苦い笑みを浮かべながら頷き、自分の分の指輪を左手の薬指へと嵌めると、もうひとつの指輪もクラクストンの左手の薬指へと嵌めた。誓いの言葉はここでは言っていない、この場では何も言わなかった。ただ、二人の間にはお互いを見てくれるこの目があれば十分だったのだ。

島田はしばらくクラクストンと見つめ合い、自分たちを見守ってくれたホーエルと吉川にお礼を言った。

「ふたりとも、本当にありがとう。行ってくるよ」

「はい、健闘を祈りますよ！」

「情報部署の炙り出しも頑張りますね」

「うん」

島田はふたりの言葉聞くなり、後のことは任せる、と、頷いた。

そうして、そのままクラクストンと共にスミスの部屋へと向かい、戦いへの準備を刻々と進めていた。

053：イタリアからの協力者

クラクストンが自分の艤装を確保して、島田にセットしてもらった後、ふたりはそのまま外へ出た。外は案の定、雷と大雨の嵐であり、普通ならば出撃は控えねばならない天候状況だった。島田とクラクストンは外に出た途端、あまりの天候の悪化具合に、ただ、呆然とするしかなかった。

(予想はしてたけど、悪化が早すぎる……船の進行に影響出なきやいいけど)

島田は「うーん」と、唸り、心の中で頭を抱えた。敵と接触するには海に出なければならぬが、この天気だと海の方もかなり大荒れであろう。このレベルの大雨で、船を安定して運転できる者はそうそういない。

そして、島田はチラリと隣にいるクラクストンへと目を向けた。

(……さすがに、クラクストンをずぶ濡れにしたくはないな)

と、島田は、徐ろに自分が着ている白いジャケットを脱いで、そのままクラクストンの頭の上に被せた。

クラクストンは自分の頭が彼のジャケットに覆われると、目を丸くして島田を見た。そして、純粋に心配から来る言葉を彼へと投げた。

「し、司令官様!? 風邪引いちゃいますよ!? 私ならどっちにしろ雨に濡れますし、大丈夫ですから」

「それは分かかってるんだけど」

島田は苦笑しながら、腕の袖をまくった。

「僕の横で女の子が雨に濡れてるのは、ちよつと落ち着かないからね。気持ちの問題」

「……もう、司令官様つたら」

クラクストンは、彼のその言葉を聞いた途端、少し顔を赤らめて、被っているジャケットの端をギョツと摘んだ。

（本当、無自覚な人……そういうところがあるから、私はずっと貴方を忘れることが出来なかった）

島田のこういうところは昔から相変わらずだなあ、と、クラクストンは思った。

ただ「優しくて格好良い」だけなら、別にその辺の提督だつて構わない。それだけの提督ならば、島田以外にも溢れ返るほど存在はしているし、彼に拘る必要も無いだろう。

しかし、島田はそれだけで留まるような人物でないことを昔から知っているクラクストンは、どうしても他の男性を見る気にはなれなかった。何かと地味だのなんだの言われがちな島田ではあるし、傍目から見たら、ある意味真逆同士なのはクラクストンも知っている。ただ、だからこそ、島田が周りから地味だの何だの言われるのは納得いか

ないし、彼のことを何にも知らない第三者から言われたら、余計に怒りが湧いてくるのだ。

出来れば、彼にちゃんと関わってから、そういうことは言つて欲しいものだな、と思う。

(でも……こういう司令官様を知つてるのは私だけで良い。みんな知つたら、独り占めできなくなつちゃう)

と、同時にそう思つたクラクストンは、その本音をスツと胸の中へ仕舞つた。

ふたりが走つて港へと向かうと、海の方もかなり大荒れであり、船で現地に向かおうにも限界がありそうな様相を示していた。波も激しく動き、波打ち、本当に嵐が来てしまつていようだ。この状況で本当に船を出してくれるのか——島田は不安になりつつも、大雨の中、クラクストンと共に船乗り場へと向かつた。

先に岸尾とスマスが船乗り場に周り込み、船を確保するという計画ではあるが、天候的に少年提督相手だと門前払いになつてしまいそうだ。吉川にもう信頼できる大人を紹介して貰えば良かったかな、なんて考えてしまう。肝心なところで抜けているのは相変わらずだ、自分。

しかし、そんな島田の不安もすぐに打ち破られた。

ふたりが船乗り場へと着くと、近くのカーポートの下で、岸尾とスマイスが誰かと会話しているのが見えた。

島田は岸尾たちが誰かと交渉中なのかな、なんて思いながら、そちらへと歩み寄った。そして、覗き込んで様子を伺いながら、彼らに声をかけた。

「岸尾くん、待たせたね。船の方は——」

「おお、君が島田くんとクラクストンか！」

「！」

「えっ?」

と、声変わりが済む前の少年の言葉にびっくりして、島田とクラクストンはそちらへ目を向けた。

「船の方はワシに任せられえ。こんぐらいの嵐、根性で乗り越えちやる」

「……えつと?」

「まあ」

島田とクラクストンは彼の姿を見るなり、思わず呆然としてしまった。

彼は——言葉の力強さに反して、その見た目は女子と見紛う程の顔立ちであったのだ。

紅色の丸い垂れ目の赤い瞳に、濃い目の茶褐色のポニーテール。少し癖つ毛があるの

か、毛先はストレートには降りていない。若干カールが混じっているか。

そして、何よりも目を引くのが、日本の鎮守府内にある提督服のどれでもない、ブレザー形式の黒い制服だった。白ズボンに黒いジャケットと、島田が普段着ているブレザー型の制服とは真逆の色合いだ。そんな中で彼の胸元で引き締まっている真っ赤な赤いネクタイは、非常に目を引く。

少年はそんな島田とクラクストンの視線に、むっ、と反応して、続ける。

「その顔、信頼しとらんなあ？ まあ、この国じゃ滅多に見ない制服じゃけえ、仕方ないと言えは仕方ないが」

少年は溜息を吐きながらそう言うと、制服の裏ポケットから、黒い提督手帳を取り出した。そこには少年の顔写真と名前、所属先の鎮守府の情報について書かれていた。そこにあるのは——「ナポリ軍港」の文字だ。

少年は笑みを浮かべながら、続ける。

「ワシはイタリア支部ナポリ軍港所属の長束。ま、一応お前たちの敵ではないから、安心せえ」

「い、イタリア支部!?!」

島田は目を丸くして声を上げた。そして、少年・長束が取り出した手帳を見て、それが本物であることを確認すると、動揺しながら彼の顔を見た。

「な、なんでイタリア所属の人がこんなところに？ 何の用があつて来たんですか？」
「んー、所属というか……まあ、その辺はゴチャゴチャしとるけえ、船の中に入って話
ちやる」

長束は4人を船の中へと案内して、操舵室の中に用意してある座席へと座らせた。

こんな雨の中で本当に運転できるのか、と、島田たちは不安になりながらも、船はと
うとう横須賀の港から離れ始めた。船は波に釣られてグラグラと揺れるものの、ひたす
ら目的の場所へと向かいつつあった。

島田は、大雨で濡れになった体をタオルで拭いながら、クラクストンから自分の
ジャケットを預かった。水分をかなり含んでしまったようで、いつも以上にジャケット
が重い。そんなジャケットでクラクストンを雨から守れたので、そのぐらいどうとい
うことはないが、乾くのには時間が要りそうだ。

島田は、ジャケットを近くの椅子の背もたれに掛けて、ある程度乾くのを待つことに
した。幸い、今は夏場で船内も冷房のクーラーと扇風機で風が巡回している。事が終わ
る頃には水気も多少は抜けているだろう。

長束は舵を手にして探知機から繰り出される映像を見ながら、島田たちへと話した。

「ワシは、もともと横須賀所属の提督でなあ。君たちよりも一年前に……んまあ、ここに

いる岸尾くんと同時期に界限に乗り込んだんじゃ」

「つてことは、僕よりも先輩つてことになるんですね。なんでナポリに？」

「あー、ちいとなあ〜」

と、長束は苦い笑みを浮かべて、続けた。

「どーも、ワシがやった覚えがない案件が、何故かワシのせいになつておつてなあ。多分上の馬鹿共にハメられた……気がするんじやが、こつちのアリバイはスルーされるし、何よりも記録やタイムラインを捏造されておつた。かなり用意周到じやつたけえ、元からワシをハメるつもりだったんじやないかと考えておるよ」

「……内容は？」

「んー、戦艦少女に暴力を振るつたり、宿舎を荒らした……とかだったかのう。まあ、確かにワシは頭を使うよりも武闘派ではあるが、だからこそ、昔からそういうことには気を付けておるけえ、そんなことはせんと断言できる」

と、

「それでワシは、着任半年ぐらいで横須賀鎮守府からとうとう追放されたのじやが、その後にはナポリ軍港にいる親戚の兄ちゃんから、こつちに来ないかと誘われてのお。んで、このまま界限から逃げるのも嫌ということで、その誘いに乗つたんじや」

「……あつ」

岸尾は思い出したように、声を上げた。

「ナポリ軍港って、今は復興中………というか、少年提督を積極的に募集してると聞いているけど、その条件がちよつと特殊だったような？」

「条件が特殊？　なんだ、訳あり物件か？」

「訳あり物件って………そんなもんじゃないわい。いや、こつちを変な目で見るな！」

島田たちは今の岸尾の話を聞いて、ジトーツと半目で長束を見た。

長束は、彼らのその視線に釘を刺すと、続けた。

「条件が特殊と言ってもなあ、その辺は兄ちゃんの趣味なだけじゃ」

と、長束はコホン、と咳払いして、

「ナポリ軍港に着任するためには、とにかく武闘派であることが条件なんじゃよ。大阪警備府とかも体力派であることが第一条件になつてゐるが、ナポリ軍港はそこに技術力も求められる」

「つてことは、そつちを習っていたり、ちゃんとした実績を残している人たちが行くつてことなんですか？」

「有り体に言つて、そうなるな。ワシもその条件は果たしておるし、兄ちゃんから誘われたワケじゃ」

「なるほど………」

島田は長束からその話を聞いて、何を考え込んでいるのか、そのまま黙り込んでしまった。クラクストンは、その島田の様子を見て何か察したらしく、特に彼に話しかけることはなかった。

長束は続ける。

「そして、最近、横須賀が少々キナ臭いってことで、ちよつと調べてくれーって話になって、こつちに来てゐるわけじゃ。ただ、その様子だと、キナ臭いで留まらなかったようじゃな……島田くん？」

「えっ……あつ、は、はい」

考え込んでいた島田だったが、長束の声ですぐにこちらの世界へと戻ってきた。そして、彼の質問には頷いて答えた。

「僕も本当ならキナ臭いで留まって欲しかったんですけど、どうにもこうにも、そういうわけにはいかないそうで」

と、

「横須賀鎮守府には、深海軍サイドの人間が入り込んでゐるようで、その影響が僕の世代で露骨に出始めてゐる状態なんですよ。僕が今追つてゐるゼヴィンという少年提督も、深海軍側の人間です」

「……！」

長束はピクツと肩を震わせて、島田へと振り返った。

「もしかして、上層部……いや、中層部の人間もそれで腐ってるのか？」

「……多分」

と、

「長束さんも見る限り、僕みたく意志が強い人間みたいですし、染まらないと思われたんでしょね。だから、追い出されてる」

「……上が腐ると、下にも影響が行くのは分かっておるが」

長束は目線を落とし、拳を握り締めた。

「まさか、そこまで腐っておるとは思わなかったぞ、横須賀鎮守府。たかが深海軍如きに、簡単に染まってしまおうとは……情けない」

「長束さん」

「……ワシがどうかしたかったのは山々じゃが、生憎、海外所属な以上、必要な接触以外は出来なくてな」

と、長束は溜息を吐きながら顔を上げた。

「島田くん。君がそのゼヴィンとやらを追う以上、これから色々なものを背負ってもらおう覚悟が必要じゃろう」

長束は、再び視線を窓ガラスの向こう側の海へと戻し、舵を取り始めた。

波が激しく打ち、これから大荒れのゾーンに入るだろうという中で、長束は続ける。

「ワシは横須賀を追い出された身じや。きつと、その資格は無かったと見てもいい」

「けど」と、長束は言葉を紡いだ。

「でも、島田くんにはその資格があるのじやろう。横須賀の奥深くを巣食うておる闇を討ち払うだけの資格が」

「……」

島田が長束の背中姿を見つめていると、長束は笑みを浮かべながら、島田へと振り向いた。

「多分、君なら今回の戦いに勝てるけえ。ワシはなんとなーくそう思うよ」

「……ありがとうございます」

島田はキョトンと目を丸くしてから、長束からの言葉をもらって、小さく笑みを浮かべて頷いた。

（僕が今していることは、そんなぐらゐ大きなことなんだろう。ゼヴィンをどうにかしたい、という気持ちだけでここまで来たけど、こうなるなんて思わなかった）

思えば、ゼヴィンにはかなり蹴落とされているし、それに便乗する兵学校の教師たちも何とかしたいと思っていたが——思った以上に闇は深く入り込んでいて、それだけでは済まなさそうだ。

普段の島田ならば一人でどうこうしがちであるが、今は岸尾やスミス、長東がいるし、何よりも、クラクストンがずっと側にいてくれる。一人でどうにかするしかなかつた兵学校時代とは違って、今は周りの協力を仰ぐことができる。当時よりも恵まれた条件でゼヴィンに挑めるのだから、島田は絶対に勝つてやると心に決めた。

長東は舵を取りながら、島田たちに言った。

「これから大荒れの波に突っ込むけえ。覚悟して構えられえ！」

054：迎えた決戦の火蓋

そして、大荒れの波に突っ込み始めた途端、島田たちの絶叫大会が船内で行われた。船内は大きく揺れ、とてもではないが場所を維持できない。

彼らの声は、うわーだの、ぎゃーだの、そんなちやちな絶叫ではなく、濁点付きの「あ」が大量に連呼されたり、岸尾に関しては船酔いモードに突入して顔色に影響がはじめている。スミスもそんな岸尾を宥めようとしたものの、こちらもこちらで船の大揺れに耐えきれないのか、気絶寸前にまで陥っていた。

波が安定している場所へと辿り着く頃には、戦場前にして岸尾とスミスが精神的満身創痍、一方で島田とクラクストンは割と平気な顔という両極端な結果になった。

スミスは机の上に突っ伏しながら、自分たちの向かい側に座っている島田とクラクストンへ質問を投げた。

「クラクストンと島田さんは、何で平気そうな顔してるんですか……ちよつと強すぎじゃないですかねえ」

「なんで……って言われてもねえ。困るよね、クラクストン」

「はい、司令官様。私たちも、なんとか乗り切った、としか言いようがないです」

スミスに質問された島田とクラクストンは苦笑しながら、そう答えた。長束は呆れながら、スミスに返した。

「こいつら、さつきからずーっと抱きしめ合ってイチャイチャしとったし、それで平気なんじゃろ。なーにが『クラクストン、大丈夫かい？ 君に怪我はさせないよ』じゃ！」

「長束さん、再生はやめてくれませんかね……恥ずかしいんですけど」

「聞いているこっちの方が恥ずかしかつたわい！ 終わったら存分にイチャイチャしていいから、少しは場を弁えろ」

「は、はい……」

島田は長束の言葉に萎縮するしかなかった。

短時間ながらも長束と関わってみて分かったのは、可憐な見た目に反して物事はハッキリと言うことと、多分彼にも周りを引張るだけの力はあるだろうということ。実際、自分たちをこうして船に乗せてくれてるわけで、彼の力は提督界限の中で必要であるはずだ。

ただ、今の提督界限——いや、横須賀鎮守府は、そういう人物ほど排除したがる傾向がある。自分たちの計画を邪魔しそうな意思の強い人物が邪魔なのだ。

（横須賀鎮守府は思ったより真っ黒というか、暗黒に染まりつつあるんだな。分かったやいたけど、特定の人物をハメて辞めさせるなんて相当だぞ）

そして、今の横須賀鎮守府で悪評が付いて辞めたということは、実質提督界限からも追放されたという意味にも繋がり、特殊な事例がない限りは追放された提督は二度と鎮守府の敷地を跨ぐことはできない。つまり、「そいつをハメて追い出した」、というのも、外に漏れることはないのである。

もし、島田も横須賀鎮守府に行っていたら、ここにいる長束のようにハメられて追い出され、実質的な再起不能に陥っても、おかしくは無かったのだろう。ただ、横須賀側は島田を採用する気もなく、舞鶴に着任できたのが幸いだ。

島田の横に座っていたクラクストンは、心配そうに眉を下げて、島田の顔を覗き込んだ。

「司令官様……大丈夫ですか？ 昨日から大変なことばかりでしたし、いろいろお疲れなのでは？」

「あ……いや、ごめん。大丈夫だよ、クラクストン」

島田は彼女に心配させてしまったかと、苦い笑みを浮かべて続ける。

「ただ、ここに来てから怒涛の情報量で、さすがの僕でも頭の中で処理が追いつかないかな……なんてね」

「司令官様……」

クラクストンが心配している横で、島田は優しく笑みを浮かべた。

「でも、これからやらなきやいけないこと、僕がすべきことはつきりと見えてきたし、今日は何があつても絶対に乗り越える」

島田は自分の左手薬指に嵌められている銀色の指輪を見た。

「それに……君と指輪を一緒にすることが出来たんだ。もう覚悟は固まつてる」

そして、その顔はクラクストンへと改めて向けられた。

「だから大丈夫さ。今の僕なら、いや、僕たちならきつと」

「司令官様……。ふふ、そうですね」

クラクストンは目をパチクリと開閉させてから、島田の言葉に安心感を覚えたのか笑みを浮かべて頷いた。

「私と司令官様の愛は、きつとこの世で一番強い絆です。それは、これからの戦いで証明できます。……そうですよね？」

「うん」

島田はクラクストンの言葉に、コク、と首を縦に振って頷いた。

——戦艦少女は誓約をすることにより、更なる力を発揮することができ、艦船としての基礎ステータスも上昇する。それは、提督に対する信頼が強ければ強いほど奇跡的な効果を発揮し、また、提督から戦艦少女に対する愛情も深ければ深いほど、彼女たちもそれに応えようとする。この界限で強い戦艦少女は根本的な艦種によるものや、古い新

しいとかではない。

提督と戦艦少女の間にある強い絆が、彼女たちの強さに左右するのである。

誓約は愛情重視と基礎ステータスの上昇重視派で意見がかなり分かれるものの、島田とクラクストンの今の話を聞くとそういった意見も野暮に聞こえる。愛情が前提にあつてこそその誓約であるのは、どんな艦船でもきつと変わらない。艦船をもつと高みに、というのもまた、愛情の一種だ。

スミスは今のクラクストンと島田の話を聞いて、何を思ったのか、チラチラと自分の右隣に座っている岸尾へと視線を向けたり外したりを繰り返して、何か言いたげにしていた。

当の岸尾はスマートフォンで現在地を確認していたらしく、マップアプリを見ていたが、スミスの視線に気付くと、頭の上に「？」マークを浮かべながら、そちらへと振り向いた。その表情はどこか訝し気であった。

「……スミス？ どうした、何か気になることでもあるのか？」

「あつ、し、しし、司令！ え、えーっとですね……」

（私から言っても断られるだろうけど、でも、やっぱりこの流れだからこそ言いたい……誓約のこと）

岸尾からはずつとはぐらかされて来たものの、女の子としては、これ以上の我慢は出

来ないとスミスは悟りつつあった。そして、目の前で繰り広げられる島田とクラクストンのやりとりにも、スミスは岸尾にけしかけようと決心だけはしてみた。そう、決心だけは。ただ、早速何か言ってみようとする、喉の奥がどうにも突つかかり、何も口に出せない状況だった。やはり、断られたらどうしよう、という強い不安がスミスの心の奥底にあるのだろう。

岸尾は、いつまで経つてもしどろもどろなスミスを余計に不審がつて、半目で彼女を見た。

「……何だ、言いたいことがあるなら早く言え」

「う……わ、分かりました。じゃあ、聞いてもはぐらかさないで下さいよ?」

スミスが岸尾にそう釘を刺してから、思い切つて言つてやると、息を吸つた瞬間だった。

「……ん!? なんじゃこれ!」

長束の驚愕の聲が、船内に響いたのである。

スミスと岸尾は話を中断し、クラクストンと島田も席から立ち上がつて、長束の方へと駆け寄つた。

島田はクラクストンと共に長塚の両脇へとつき、状況確認した。

「どうしましたか、長束さん。敵が襲来しましたか?」

「いや、多分影響はしておるとは思うが……この探知機を見てくれ」

長束は自分の前に出されている探知機へと指差して、島田とクラクストンにそちらを見るように促した。

少し遅れて長束に駆け寄ったスミスと岸尾も、島田たちと同じく探知機へと目を向けると——普通ではあり得ない表示が、そこになされていた。島田たちはそれを見るなり、目を丸くした。

島田はまず、画面を指差しながら長束へと質問した。

「こ、この表示……エラーか何かですか？」

画面上に映し出されていたのは、404——つまり、「Not Found」を意味する数字であった。

しかし、敵がいなければ居ないで、探知機が何にも反応しない結果になるわけで、これはあまりにも想定外すぎる表記だった。

長束は何も分らないのか、「う、うーん……」と少し歯切れの悪い様子で首を傾げた。「ワシも全く分からんから困っておるのじゃよく。向こうでも横須賀でも出撃はしておったが、こんな表記、向こうでも一切見たことがないわい」

「だとすると、敵のデータがないってわけでもないよなあ。正体不明でも、深海軍と戦艦少女の区別ぐらいはつくように設計されてるはずだし」

島田も一緒に長束と悩む横で、岸尾はスミスとクラクストンに話を振った。

「スミスとDD―571は何か感じ取れないのか？ 深海軍が近付いたら、察知できるだろう？」

「とは言いたいんですけど……残念ながら、私たちもなーんも感じ取れないですよね」
「少なくとも大きな敵の気配は感じ取れません」

「……そうか」

頼みの綱であるスミスとクラクストンも何も感じないとしたら、敵襲の可能性はほぼ無いと見た方が良いのか。

しかし、それでもこの表記は非常に引っかかるのは、誰の目から見ても確かだ。

ひとつあり得る可能性としては——長束はハツとなって、両脇にいる少年提督ふたりに言った。

「……ワシらは今、どこにいる？」

「えっ？」

「この探知機は、この世の海を殆ど登録してあるはずじゃが——たまに、例外がある」

そして、長束は、近くにあった地図を取り出して、その場で広げた。

「本来にたまーにな、あるんじや。この世はとても広いゆえ、漏れがある。どっかマップアプリを開いてくれんか」

「あ……じゃあ、オレが。丁度開いてたんで」

そう言うのと、岸尾はマップアプリが開きっぱなしであったスマートフォンを取り出して、それを長束へと差し出した。

長束は、「ありがとう」と、それを受け取って、マップとスマートフォンを並べるように近くのテーブルへと置いて、全員で検証・比較し始めた。横須賀から出て、ここは通っている、だの、ここは通っていない、だの、岸尾はマップアプリの進路を思い出しながら、メンバーに案内していた。

そして、長束が広げた地図との照らし合わせが終わり、長束は、今、自分たちがいる場所を、人差し指を地図の上に置いて示した。

「……と、なると、ワシらが今いるのはここということか」

長束はそう言うのと、自分のスマートフォンをポケットから取り出して、自分が示した場所と岸尾のスマートフォンの画面を並べて、パシャリと写真を撮った。

「少し兄ちゃんに聞いてみるけえ。今、向こうは深夜だけど、すぐに反応くれるかのお……」

「そうか、こつちと向こうで時差があるのか……マップアプリ見ながら、進路確認しましょうか」

「うん、その方が良いな」

島田の意見に長束は賛同した。

長束は写真を自分の親戚の提督に送った後、再び船の運転へ戻った。連絡が来たらブザーが鳴るように設定されているゆえ、来たら教えて欲しいと島田たちに言葉を添えたが、向こうが深夜ならば返信は来ないような気もするが——果たして。

船の探知機は404から表示が揺らぐことはなく続き、5分ほど経過した。

——途端、長束のスマートフォンのブザーが鳴った。

島田は長束のそんなスマートフォンを見るなり、彼へと教えた。

「！ 来ましたよ、長束さん！」

「おお、来たか！ スマートフォンの画面を開いても良いけえ、返信を読み上げてくれ！」

「はいはい！」

島田は指示通り長束のスマートフォンの画面を開いて、メッセージアプリまで飛んだ。長束がメッセージを送ったのは、この、「安梅」という名前の人物だろうか。

島田はその名前をタップして、来たメッセージを読み上げた。

「えーと……『長束、向こうは朝か。深夜に来たからビックリしたが、時差があることを思い出した』」

と、

『肝心の海域についてじゃが、件の海域はほとんどマークされていない場所であり、表向き、深海軍の生息が確認されていない地域じゃ』

「だとしたら、心配しなくても良いってこと……なのか?」

「いや」

メツセージには続きがある、と、岸尾の安堵しかけた気持ちで島田が振り払った。

『ただ、そういった海域は、深海軍が本拠地にしてる可能性が非常に高く、こつちの調査でも例外なく深海軍の誰かが棲んでいるのが確認できている。その海域に入り込んだということは、向こうに誘導された通り、ということじゃろう』

と、

『その海域に入っても慌てるな、いつも通り対処すれば、何も問題はない』——って、わっ!?!」

途端、船がガコン、と、一回、大きく揺れた。一回だけだったため、島田たちはすぐに体制を取り戻したが——今回は荒波に揉まれて船が揺れているわけでないのは、すぐに想像できた。

スミスとクラクストンも何かを感じ取っているようで、覚悟を決めた顔でそれぞれの提督を見た。

島田と岸尾は秘書艦の顔を見て、頷いた。

——こうなったら、後は一気に畳み掛けるしかない。
4人はそれぞれ準備に入った。

055：深海より産まれし戦艦

ジェルジンスキーたちが横須賀に辿り着いたのは、予定通り午前9時前後だった。

倉竹と岩国が少年少女たちを引き連れて、地下鉄から地上波と出た。外へと出るなり一同の目の中に飛び込んできたのは、横須賀鎮守府周辺が酷い暗雲に覆われ、雷と大雨を背に受けている場面であった。地下鉄でずつと列車に乗っていたが故に、一同は連絡が来るまでこの異変に気付くことは出来なかったが——本当にここまで天候に異常が起こっているとは思ってもみなかったようだ。

岩国は外に出るなり、真つ先に横須賀鎮守府内へと連絡を繋ぐために携帯電話を取り出して、その先から応答を待った。しかし、横須賀鎮守府内も今回の天候異変で大騒ぎになっているようで、回線を繋いでいる音から一向に変化しようとしなない。

岩国は携帯を鎮守府に繋ぐのをやめて、溜息を吐きながらポケットの中へと仕舞った。

「参ったね、鎮守府内もなかなか忙しいようだ。連絡を入れることが出来ない」「どうしましょうか。中に入るなら連絡は入れておきたいところですし……」

倉竹は岩国と共に、今後の段取りについて悩んだ。倉竹たち自身、こうなると思っ

てもみなかった故、計画が丸潰れともなれば、鎮守府内を探ることも出来ないだろう。しかし、ここで挙手したのはジェルジンスキーだった。

「ちよつと良いかしら、2人とも?」

「なんだね、ジェルジンスキーくん」

岩国はジェルジンスキーの言葉に反応して、一同も彼女へとを目線を向けた。

ジェルジンスキーは注目が自分に向けられれば、提案する。

「島田たちの無事が確認出来たつてことは、アイツらとつくに脱出して、次のターンに移ってるんじゃない?」

「と、言うつと?」

「出撃よ」

ジェルジンスキーがはっきりとそう言えば、一同はハッと気付いたように、各々反応を示した。

「この様子だと、深海軍側が正体を現しているつて感じなのでしょう? ちよつと気になつてたのよね、この間の地下鉄で深海軍がアルベルト・デイ・ジュツサーノと乗り込んで来てたこととか。地下鉄の件で、そのことに真つ先に気付いたのがデンバーだったわよね?」

ジェルジンスキーはそう言うと、自分の斜め前にいるデンバーへと目を向けた。デン

バーは、「ええ」と首を縦に振って頷いた。

「正確には、先に深海軍を列車の電探で把握出来たけど……こちらまでお迎えに上がったのは、アルベルト・デイ・ジュツサーノ。彼女が……いえ、ゼヴィンが深海軍と繋がっているのは、話を聞く限りではほぼ確実だと思う。あの時、彼女はあそこにいた深海軍について、『アンミラーリオのツテ』と言っていたから」

「やつぱりね」

想定通り、と、ジェルジンスキーは今までのことを思い出して、そりやそうだろう、と、納得しながら頷いた。

昨日のN級とジュツサーノのことと言い、さすがに彼女だけではどうこう出来るわけでもないゆえに、ゼヴィンと深海軍との繋がりは誰もが想定できる範囲だった。だから、デンバーの話を聞いても誰も驚きはしなかった。まさにゼヴィンならやりかねない、というのが完全に把握されている。

「このまま鎮守府内に行っても、島田たちがいる可能性は低いと思うわ。そもそも吉川……だっけ？ 彼と連絡出来たつてことは、つまりそういうことだと思ってるのよね。

デンバー、連絡出来ないつて言ってたし」

「でも……まだ鎮守府の中にいたとしたら」

「……だったら、倉竹か岩国に行ってもらいましょうか」

そう言うと、ジェルジンスキーは、ここにいる成人男性2人へと目を向けた。

「私たちはこのまま海に突っ込んでいくわ。ただ、全員行くつてなると何かあった時に問題あるだろうから、岩国か倉竹、どちらかに残つてもらいたいのに」

「なら、私が残ろう」

「岩国さん！」

——岩国が手を挙げた。

倉竹はジェルジンスキーの話を聞いて、自分が残ろうとしたようだが、岩国の方が挙手は早かった。

岩国は続ける。

「倉竹くんの方が島田くんたちや、この子たちについてよく知っているのだろうか？」

「だったら、君が行くべきだと思うがね。そういったところも、艦隊の士気に深く関わってくる。それに、島田くんたちも君の顔を見た方が、安心すると思うのだが……違うかね？」

「……分かりました。岩国さんが言ってくれるのなら、俺も従います」

倉竹はペコリとお辞儀をして、岩国に敬意を表した。自分より上の立場の人間に推薦された以上、失敗して帰ってくるわけにはいかないという倉竹の決意が、そのお辞儀から見られた。

倉竹はジェルジンスキーたち戦艦少女と少年提督一同へと目を向けて、言う。

「じゃあ、行こう。横須賀の船の貸出口は向こうだったけど……貸してくれるのかな」

「なに。私が許可を出した、と言えば、黙って貸してくれるだろう。緊急事態だ、使える手は使っておきなさい」

「ありがとうございます」

倉竹は軽く頭を下げて岩国にお礼を言うと、一同を引き連れて岩国と別々の道へと向かった。岩国は鎮守府へ、倉竹たちは横須賀の海へ。

岩国は海へと向かう艦船たちと少年提督たちを見送りながら、その場を後にした。

「本拠地の詳しい位置が分からんが、この周辺を彷徨くのが今のところはベストなんかのお……」

相変わらず404が表示される探知機を凝視すると、長束は首を傾げて、窓の向こうに広がる荒波の光景をチラチラと見ていた。

ミスとクラクストンの反応を見る限り、場所自体は近いのだろうが、どうにもこうにも決め手に欠ける、といった様子も見て取れる。ふたりの索敵に関しては普通の駆逐相応であるものの、深海軍が明白に近くにいるのが分かれば、それも関係無くなる程度に意味を成す。特に本拠地があるのならば、そこに船をギリギリまで近付けるのも作戦

なのである。とはいえ、決定打が無ければここから迂闊に動くことを控えたかった。この船だって燃料が延々にあるわけでもないし、また、ここにずっと停泊しつばなしというわけにもいかないであろう。

クラクストンとスミスの駆逐艦2人は、うーんと頭を悩ませながら周辺に索敵を巡らせていた。強い敵のオーラは感じられるが、それ以上に辿り着くことが出来ない。2人はそろそろ限界だと言わんばかりに、その場で項垂れた。

「うーん、ダメです……敵が近いのは分かるんですけど、どこにいるかまでハッキリと把握が出来ません」

「右に同じくです。まあ、ここまで簡単に索敵されないってことは、少なくとも強い敵だとは思いますが」

「ありがとう。うーん、そうだよなあ……簡単に索敵されたら本拠地ではないよね」

島田は2人の言葉を聞いて頷くと、そんなものかあ、と、溜息を吐いた。ここに空母がいれば索敵もし易くなるのだろうが、その程度で見つかるような場所にいるとも思えず、島田は頭を抱えた。

岸尾は悩む3人を眺めながら、ふと、思い付いた可能性のひとつを口にした。

「深海軍って、深い海と書いて深海、なんだよな」

「ああ、そうだね」

と、島田はそこで目の色を変えた。

「……もしかして、海の奥底にいますか?」

「可能性としては」

岸尾は島田の意見に頷き、答える。

「少なくとも、島だとか、そういう分かりやすい場所にいるとは思えない。アイツらが隠れるとしたら、圧倒的に海の奥底だと思ってる」

「だとしたら、そこに辿り着くまでの手段がなあ。潜水艦じゃないと潜るなんてまず無理だし、クラクストンたちだつて、そういう訓練は一切受けてない。僕たちに来ることといえば、やっぱり待ち伏せしか……」

島田がそこまで言いかけたところで、船内の電気がフツと消えた。

島田たちは暗くなった船内にビックリして、思わず立ち上がった。

「ツッ! 停電!」

「だとしたらまずい、操縦が出来なくなる……長束ツッ!」

「……いや、大丈夫じゃ。操縦自体は効いておる」

動揺している島田と岸尾を落ち着かせるように、長束は今のこちらの状況を話した。

「こちらのランプも点灯しておるし、船内の電源が消えたわけではない。もし、停電なら、これらの光も消えておるはずじゃ」

「じゃあ、これは一体——」

一同が動揺している中で、聴き知った少年の声が船内へと響いた。

『……あーあー、マイクテス。島田くんたち、聞こえているかい?』

「!…この声……」

島田は部屋の中にあるスピーカーへと目を向けた。

少年の声は続く。

『あつ、えーつとね……ボクと話したかったら、船内にあるトランシーバーとかに話しかけてね』

「トランシーバー……」

いろいろな親切だなあ、なんて、若干呑気なことを思いつつ、島田は長東の方へと歩み寄った。

「長東さん、あります?」

「あ、ああ……多分コレじゃろ。他の船と連絡する時に使うやつじゃ」

長東は島田に問われると、自分の間近にあった黒いトランシーバーを取り出した。ここにあるトランシーバーは受話器だけのタイプではなく、いろんな機器に繋がっているタイプのものだった。他の船の者と、連絡を正確に取り易くするためだ。

島田は、「ありがとうございます」と言うと、長東からトランシーバーを受け取って、

そこに声を吹き込んだ。

「ほら、出たぞ。島田だ。要件を言え、ゼヴィン」

——そう、スピーカーから聞こえてくる声の主はゼヴィンである。というよりも、状況や雰囲気的にも、ゼヴィン以外の声であるとは考え辛かった。

ゼヴィンはスピーカー越しでも、クスクスと笑みを浮かべているのがわかる程度に声を出し、島田の声に応答した。

『やあ、島田くん。随分と切羽詰ってる状況みたいだね……。まあ、場所も分からない以上、仕方がないかあ』

「こうして通信が繋がる以上、この周辺にいるのは分かるよ。それだけだけどね」と、

「この周辺は深海軍……お前たちの本拠地があるらしいな。ただ、駆逐艦たちの索敵では辿り着くことが出来ない」

『ああ。空母6人積んでも辿り着くことは出来ないよ』

ゼヴィンは嘲笑うように、

『だって、簡単に見つかつたら本拠地じゃなくなるもの。君の実家の豪邸じゃないんだから、地上に置くわけじゃないじゃない』

「豪邸ねえ……よくある沖縄風の建物だと思うけど」

自分の実家についてこのタイミングで言及され、言葉が漏らしつつ、島田は続ける。「だったら、お前たちの本拠地が、海の中にあるって僕たちの推測は正しいってことになるな。地上にないんなら、それしか思い付かないし」

『うん、合ってるよ。深海軍は沈んだ艦船の魂が憎悪に染まって、海の奥底から産まれるようなものだし』

と、

『まあ、本拠地って言っても、普通の人間には辿り着けないから、こつちから出て来ようと思ったけど……それもそれで面白くないから、ちよつと仕掛けたんだよねえ』

「つてことは、この停電、そつちがやったことなのか？」

と、島田は辺りを見渡して、真つ暗になった船内の天井を見た。

ゼヴィンは、「ああ」と続ける。

『驚かせようと思つて、ちよつと弄つたよ。まあ、暫くしたら戻るんじゃない？』

「……悪ふざけも大概にして、さつさと姿を現してくれ。そろそろ飽きて来てるんだが」

『言われなくても、そつちに行つてあげるよ。ちよつと大変なことになるけどね』

ゼヴィンがそう言った途端、波が再び激しくうねり始めた。

「うわあつ!？」

「きゃつ!？」

同時にそれに合わせるように、船も大きく揺れ始め、船内に置かれていたものが床に落ちたり、テーブルが横にズレたりし、中にいる人間も必死に物にしがみ付いた。

島田は当たり前のようにクラクストンを抱きしめて、部屋の中にあるスチール棒を掴み、目を閉じて必死に揺れに耐えた。クラクストンは必死に島田にしがみ付き、落ち着かない気持ち在必死に落ち着かようとした。

そのまましばらくすると、今度は海が一気に盛り上がり、天高くまで隆起したかと思えば——弾かれた。

「な、なんじゃ!?!」

その光景を近くで見えていた長束は、そこに出て来たものに驚愕して、目を丸くした。

島田たちは揺れが小さくなった船内で小走りに長束の元へと向かい、長束が見ている光景へと目を向けた。

「……あ」

島田とクラクストンは紫色に輝いているそれへと目を向けて、その姿にドクン、と胸を強く打った。スミスと岸尾もそれが見えるところにいたようで、額に脂汗を浮かべていた。

銀色のポニーテールに、片目を隠せる程度の長い前髪——いや、この右目は見えないのではなく、黒い角が「生えて」いる。左目の上にも角は生えており、まさに鬼を想起

させる容姿だ。

そんな女性が紫と黒をまとい、海の上に立っていた。この界限では、彼女の名前を、こ
う言う。

『Y a m a t o ……!』

056：絶対に戻ってくる！

戦艦少女になつてゐる大和型といへば、信濃しかいない。肝心の大和や武蔵は、まだ発見されていないのだ。しかし、とある日本艦の話聞く限り、大和本人はこの世界のどこかでひっそりと待機しているらしく、提督たちの前に出る日を待ち焦がれている。

そんな日が来る前に、世界に平穩が訪れて欲しいというのも、彼女の意思かもしれないが——今の情勢を見る限り、その願いにも限界はあるのかもしれない。

そして、我らが宿敵である深海軍は、大和型のデータを用いて、深海軍なりに「Yamatō」という戦艦を仕立て上げていた。彼らの船は基本は使い捨てである一面が強く、向こうにはYamatōがたくさんいる。なんなら、同時に二体や三体だつて出てくるぐらいだ。

そんなYamatōのうちの1人から、ゼヴィンは生まれた。

戦艦少女であつた岸尾の母親から提督を無理矢理奪い、彼の遺伝子を奪つて子孫を作り上げた。

しかし——少なくとも、それは、真つ当な手段ではないだろう。

島田たちの目の前に現れた戦艦・Yamato。

クラクストンは彼女の姿を見るなり、顔から血の気が引いたらしく、真っ青になっていた。

「あ……し、司令官様」

「どうした、クラクストン？」

島田は隣にいるクラクストンの肩に自分の手を回して、彼女の顔を覗き込んだ。クラクストンは非常に怯えているようで、顔に汗が浮かんでいた。

クラクストンは動揺を何とか言葉にした。

「このYamatoさん……他の深海軍の方と違って、こちらに向かってくるプレッシャーが尋常じゃないです。立ってるだけなのに、足元がすぐわれそうで……」

「クラクストン、しっかりしてくれ」

そう言うと、島田はクラクストンの左手を持ち上げた。

「この左手薬指にあるものを思い出せ。僕のことをずっと強く思ってくれた君が、こんなところで負けるタマじゃないのは知ってるよ」

「……ありがとうございます、司令官様」

島田からの叱咤激励に、クラクストンは何とか気を取り戻し、心を落ち着かせた。そして、クラクストンは改めて、Yamatoの方へと顔を向けた。

Yamatotoはクラクストンと目が合うなり、クスツと小さく笑みを浮かべて、彼女を見た。そのYamatotoの笑みは、どこかゼヴィンを彷彿とさせ、彼女が母親なんだろうということが嫌でもこちらまで伝わってくる。

クラクストンがYamatotoを睨み付ける中、向こうは余裕そうな笑みを浮かべて言い放った。

「これがあの子の言っていた、提督と戦艦少女ね。思ったより平凡そうで、面白みはないけれど」

「そう言うお前はゼヴィンの母親か」

島田はYamatotoを見つめ、言葉を投げた。

Yamatotoは笑い、「ああ」と頷いた。

「他の誰でもない。あの子の母親は、この私だ」と、

「かなり手塩を掛けてきたつもりだし、優秀になろうとお互い努力したけど……それを横からぶん取るなんて、意地汚い人の子」

「横からぶん取る？ それはこっちの台詞だ」

島田は咄嗟に言い返した。

「まあ、あなたの息子が優秀なのは認めるさ。それは紛れもない事実だ。けど」

と、

「優秀なくせに、裏で繋がりを持って、僕を蹴落とそうなんて曲がりくねった性根を持つてるんだぞ。お陰で僕は必要のない努力もしなければならなかったし、その時間を勉強に注ぎ込めるはずが、大分酷いタイムロスだった。と、なれば、横から人の成績ぶん取ったのはどつちだ、つて話だな」

島田は続けて、

「そんなに海に関係ない家系の子孫に、トップを取られるのが怖いかな？ ほつといてもハメて潰せるんだから、それで良かったんじゃないか？ ここにいる長束さんのようにね」

島田の目がチラリと長束へと向けられた。

長束は船の揺れが収まっても床に座りっぱなしだったのを、近くのテーブルを使って立ち上がった。

「島田くん……このYamatōが件の母親というか、黒幕つてところかのお？」

「ええ、こいつがゼヴィンを界限に送り込んできた張本人ですよ」

と、そこに岸尾が続いた。

「そして、オレから父親をぶん取った張本人だ」

「岸尾くん」

岸尾は島田の横まで歩き、父親を奪った張本人へと厳しい目線を向けた。

彼の秘書艦であるスミスは、岸尾の後ろからついてきていた。Yamatōから溢れ出るプレッシャーに押し潰されそうなのか、不安そうに眉を八の字に下げて、岸尾の腕の袖をギュッと掴んだ。

岸尾は続ける。

「Yamatō。鳳翔と言う軽空母の名前に聞き覚えはないか？」

「鳳翔……？ ああ」

Yamatōは岸尾から飛び出してきたその単語に、ククツと笑った。

「古い旧式の軽空母の名前なら、よく知っている。あの人の秘書艦であり、最も妻に近かった立ち位置だったらしいけど……もしかして、アンタはあの人とその軽空母の子供？」

「……そうだ。オレの母親は日本軽空母・鳳翔。アンタの息子と異母兄弟だ、Yamatō」

「へえ……あの時お腹にいた赤子がここまで大きくなったわけね。まさか提督にまでなっていると、思いもしなかったけど」

「お前がお父さん拐ったせいだぞ」

と、

「オレはお父さんの行方を探すために、提督になった。でも、その矢先にゼヴィンに事実を聞かされて、何もかも無駄になったと思った。すぐ提督をやめようかと思っただけ……こういう日が訪れてくれるなら、やめなくてよかつたって思える」

「司令……！」

スミスは目を丸くして岸尾を見た。

——そうだ、こうやって敵が自分から出てきてくれたんだ。これまでの岸尾の道のは決して無駄では無かつたはず。

Yamotoは「おやおや」と笑うだけ笑い、続けた。

「君の父親を拐ったことは本当に申し訳ないと思うけど……我々の計画のためには、彼の遺伝子はとても重要だった。優秀な提督の遺伝子は、こちらにとっても非常にプラスになる」

「だから拐ったと？」

「まあ、優秀だからと言って、誰でもいいと言うわけでもなかつたけど……君の父親はそれに値する人物だったというだけの話」

Yamotoは島田へと目を向けて、

「例えば、ここにいる少年の遺伝子だけは、どんなに優秀でも深海軍の誰もが拒否する。性格の問題なら、こちらで支配すれば良いだけだが」

と、

「この少年の血流から溢れ出ているんだよ。深海という存在の侵入を許さない、非常に強いバリアーをね。この血が提督界限に入り込めば、我々の活動に影響が出る」

「……………」

(琉球王族の血筋か……………！)

島田は血流から溢れるバリアーと聞いて、自分の血筋がそうさせているとしか思えなかった。

琉球王族自体、かなり前に解体されてしまっており、第二次世界大戦終了後はほとんど一般人と同等である。表に出て活躍している王族の子孫もいることにはいるものの、数はそこまで多くはないだろう。島田ですら、他の王族についてはなかなか把握は出来てない。そもそも言わなければ、王族の子孫だと分からないこともある。島田も完全にそれだ。

自分がゼヴィンから妨げられている要因はいろいろあれど、Yamatoが今言ったことも深く関係しているのであろう。血筋から拒否しているのであれば、ゼヴィンが自分を徹底的に貶めようとする狡賢さを発揮しているのも、非常に納得がいく話だ。

Yamatoは続ける。

「あの子が徹底的に叩き潰しているというから、どうせ提督にはなれないだろうと思っ

ていたけど……じわじわと上り詰めて、ここまで来ている。その我慢強さは、どこから来ている？」

「……どこからでもないさ」

島田は Y a m a t o に問われれば、はつきりと返す。

「そもそも、我慢強いつて言われても、これが当たり前だからよく分からないな。むしろ、君の息子の方が我慢弱いだけじゃないのかい？　僕なんて勝手に泳がせておけば良いものを、下手に触るからこうなってるんだぞ」
と、

「んで、肝心の息子はどこにいるんだ。さつき、君の息子から通信が入ったけど、居場所は依然はつきりしないままだぞ」

「ふふ、知りたいか？　まあ、知らなくてもすぐにやって来る……ああ、噂をすれば」

Y a m a t o はそう言う顔と顔を上げて、島田たちが乗っている船の向こう側を見つめた。島田たちは、その Y a m a t o の視線に合わせて、船の窓から見える範囲で、ゼヴィンの姿を確認しようとしたが——その途端。

「ッ！」

「またですかッ!？」

「ああっ！」

「うにゃあつー!」

「うあー!」

再び、船が勢いよく揺れた。

しかし、今度は船の後ろから大きな衝撃音も聞こえており、島田たちはその音を聞いた途端、顔を真つ青にして、「まさか」と額に脂汗を流していた。

一方で、Y a m a t o は「あらあら」と笑い、言った。

「……少しヤンチャが過ぎるんじゃない? 船に船をぶつけるなんて」

『ごめんね、マーマ。でも、こんぐらいはしても良いだろう? 憎き島田が中にいるんだから』

「……!」

(やっぱり!)

島田たちは自分たちが思っていた通りのことが起こってしまったことに頭を抱えた。ゼヴィンならばやりかねないとは思いつつ、こうやってやられてしまうと動揺が走る。

とはいえ、このままやられっぱなしというわけにもいかない。島田は首を横に振って、動揺を無理振り払った。

「みんな、船尾に行くぞ。どうなってるか確認しなきゃ。クラクストンとスミスも、ついでに船尾から海に出てくれ」

「はい！」

「了解です！」

一同の賛同が得られると、島田は一同を引き連れて船尾へと向かった。

部屋を出ると、長束が船尾の方向を指差してくれるので、島田たちはそれに従った。

「つ、はあ！」

提督・戦艦少女一同は扉を叩くように開き、船尾へと出て、そこに映し出された状況を確認した。

雨が激しく船尾の床を打ちつける中で、こちらにぶつかっている黒と紫色に輝く船。ところどころ形状も鋭さが目立ち、向こう側の世界の船であることが分かるデザインだ。

島田は勢いよく走ってここまで来た故に、切れ気味の息をハアハアと上げながら、ゆっくりと黒い船の方へと歩き始めた。

同時に、黒い船の中から出てきた少年の姿があった。少年は艦首へと出て、島田たちの元へと向かっていく。

島田はその姿を見た途端、思わず少年の名前を言い放った。

「——ゼヴィンツ！」

銀髪の髪の毛に、紫色の瞳——普通なら綺麗だと思えるだろう。しかし、今では、こ

の色が深海軍の親戚である証にしか見えなくなつた今、島田には今まで以上に醜く見えていた。提督界限自体に深海軍の関係者が紛れ込むこと自体、非常に恥すべきことだ。彼の侵入を許した上層部への信頼も今は何処にもない。

ゼヴィンは島田の近くに来ると、その周りにいる戦艦少女と提督たちを見て、「へえ」と、声を漏らした。

「舞鶴鎮守府に来てから、すっかり周りに恵まれちゃつたね、島田くん。横須賀鎮守府に来てくれれば、徹底的に潰してあげたのに」

「その道さえも潰したお前が言うことか？　今回はたまたま倉竹さんが僕のことを絶対に着任させたいって思ってくれたから良かったけど、そうじゃなかったら、こうやって対峙すら出来てないぞ」

「はは、そうだね。僕は君を着任させないためにいろいろ根回ししたけど……倉竹って人だけは染まらなかつたみたいだね」

と、ゼヴィンは笑い、クラクストンとスミスへ言葉を向ける。

「さて、戦艦少女である君たちはこれからマーマに挑みに行くだろうけど、遺言はないかい？　駆逐艦では、きっとマーマの砲撃には耐えられないだろうね」

「……ありません」

クラクストンは間髪入れず、すぐに首を横に振つた。

ゼヴィンは、クラクストンのその言葉にピクツと体を震わせた。

「……なに？ 言い残したいことはないの？」

「いえ」

クラクストンは笑みを浮かべた。

「私たちは絶対に帰ってきますから、何にも言うことはありませんよ。ここには司令官様がいるんですもの、戻らなきゃ損です」

「クラクストン……！」

「……チツ」

ゼヴィンは舌打ちをして、島田はクラクストンのその言葉に心を打たれた。

島田はクラクストンの左手首を右手で持ち、自分の左手を彼女の左手の上に重ねた。

「クラクストン……そこまで言うからには、絶対に帰ってきてくれ。信じてるからな」

「……ありがとうございます、司令官様。私、絶対にあなたの元まで帰ってきますから」

「頼むよ」

「はい、行ってきます」

そして、2人の手が離れて、クラクストンはスミスと共に海へと飛び出た。

スミスとクラクストンが Y a m a t o の元へと向かっている中、ゼヴィンは島田たちの船へと乗り込み、島田たちと共に艦首へと向かい始めた。

クラクストンはそんな島田の様子を名残惜しく見つめるが、すぐに振り払って、目の前のことに集中した。

057：あなたはあなただけ

大雨が地面や海を強く打ち、雷も光る横須賀の港の中で、アルベルト・デイ・ジュツサーノは立ち尽くしていた。彼女は自分の服や体、髪の毛諸々が濡れになるなど構わない、と言った様子で、島田たちが向かったであろう方向をぼーっと呆けて眺めていた。

（私、あの子たちについて行くべきだったのかな）

ジュツサーノは、ハア、と溜息を吐いた。

島田たちが外へ出る、となった時に、ジュツサーノはそれに素直について行こうと提案することが出来なかった。島田たちの味方に回ることに抵抗があるのはそうではあるが、ゼヴィンの前に顔を出せる気がしない、というのも、また大きかった。

あんなことを言ってしまった手前、やはり気まずくて仕方ない。ゼヴィンからすれば、ジュツサーノは駒でしかなく、あんなことを言われても気にならない性ではあるだろうが。

（……そろそろ、戻ろうかな）

ジュツサーノは鎮守府の方へと振り返った。

現状、ゼヴィンに捨てられた自分が出来ることと言えば、事の顛末を待つだけだ。島田が勝てば横須賀鎮守府の革命が約束され、ゼヴィンが勝てば、横須賀鎮守府内で本格的に深海軍の侵食が始まる。ジュツサーノはどっちに転んでも自分なりに立ち振る舞うだけだ。

——きつと、島田側から訴えなどがあるかもしれないが。

ジュツサーノは、ピチャ、と足を一歩前に進めた時だった。

「——あなた、こんなところで何してるのよ」

「えっ？」

ジュツサーノはその聞き覚えのある声に驚いて、そちらへと振り向いた。

そこにいたのは、舞鶴鎮守府に所属している戦艦少女たちと、提督3人の姿だった。

そのうち、雨に打ちひしがれているジュツサーノに話しかけたのはジェルジンスキー。彼女はジュツサーノの姿を見るなり、呆れ気味に言う。

「すっごいズブ濡れじゃない。いつからここにいたのよ」

「……別に良いでしょ、アンタには関係ない」

「関係ないのは確かだけど、アンタがゼヴィンと関係がある以上、そういう訳にもいかないのよ」

つつけんどんに振る舞うジュツサーノに対し、ジェルジンスキーはキョロキョロと辺

りを見回しながら、質問を重ねた。

「んで、肝心のゼヴィンはどこに行つたのよ？ まさか、あなた一人だけつて訳でないでしょうね」

「……そのまさかだよ」

ジュツサーノはそう返し、ジェルジンスキーたちを軽く驚かせた。

ジュツサーノは雨でビシャビシャになった髪の毛をかき上げて、続ける。

「私はアンミラーリオに捨てられた。弱い旧式の船をこのまま置いておくわけにもいかない、って」

「……遅かれ早かれそうなるとは思ってたけど、やっぱりね」

ジェルジンスキーは案の定、と、息を吐いた。

デンバーはジェルジンスキーとジュツサーノのやりとりを見て、何か思うことがあつたのか、ジュツサーノに話しかけた。

「アルベルト・デイ・ジュツサーノ」

「なに」

「私はあなたに言つたはずよ。司令の人選は慎重にした方が良くって」

と、

「今更泣き言を言つたところで、全てはあなた自身の選択のはず。それが正しいと思つ

て進んだのでしょうか？ 彼の性格を把握していれば、このぐらい容易に想像出来たのに……どうして、こうなるまで自分から彼を切ろうとしなかったの？」

「……私のことを捨てない選択肢もあつたんだよ。一応ね」

ジュツサーノはデンバーの言葉に対して、顔を上げて返した。

「私は傭兵としても一人の人間としても、自分を発揮できそうだったから、彼についていった。でも……彼が私を捨てないための提案は、それを全て否定するようなものだったから」

ジュツサーノはそう言うと、倉竹たちを見た。

「ところで、あなたたちは島田たちを追いかけに来たんでしよう？ こんなところで無

駄話してるよりも、さっさと船に乗り込んだ方がいいと思うけど」

「じゃあ、ジュツサーノもついて行くかい？」

そう提案したのは倉竹だった。

ジュツサーノは倉竹の提案に少々驚いたようで、朱色の目を丸くして彼を見た。

「な、何言ってるの？ あなた、私が敵なの忘れてない？」

「いやあ、ゼヴィンくんについて行けてない時点で、俺たちの敵からは外れてるだろ。自分から捨てられた、って言ったの、もう忘れたかい？」

「あ……」

——そうだ。

ゼヴィンに捨てられてしまえば、自分はゼヴィン側の人間でもなんでもない。ただのアルベルト・デイ・ジュツサーノという戦艦少女の1人だ。そこにゼヴィンの思惑は関わってこない。

倉竹はジュツサーノがハツとなつたのを見て、クスツと小さく笑みを浮かべた。

「まあ、君がそう言っちゃうのも無理はないと思ってるよ。昨日まで敵だったわけだし、気持ちを切り替えろと言われて、切り替えられるようなものじゃない」

「だったら……どうして」

「うーん、人として放って置けないから……かな？」

倉竹は首を傾げて続ける。

「それに、俺も君の戦艦少女としての権利は守られるべきだと思ってるし、尊重したいと思ってる。それはここにいるみんな、思ってることなんじゃないかな」

「まあ、確かに敵味方置いといて気に喰わない性格はしてるけど、戦艦少女としての尊厳は守られるべきよね」

ジェルジンスキーは倉竹の意見に賛同し、頷いた。そして他の軽巡2人へと話しかける。

「デンバーも應瑞もそう思ってるでしょ？」

「ああ。ジェルジンスキーや倉竹司令の言う通りだと思ってる。人間的に合わなくても、彼女の存在意義まで脅かすことはないだろうことぐらいはね」

「やってきた事は許されないことかもしれませんが、戦艦少女として生まれた以上、艦船としての権利はありますから。ゼヴィンさんと何があつたのかは分かりませんが……」

「……つてことだ」

倉竹は頷きながら、ジユツサーノへと続ける。

「まあ、行きたい気持ちが一ミリも無ければそれでもいいさ。ただ、少しでもアイツらのことが気になるなら、俺たちについて来てほしいかな。気になつてるけど行かない、つてのは、君としては後悔するんじゃないかなつて思うし」

「行きたいか行きたくないかで言えば……そりや、行けるなら行きたいよ」

ジユツサーノは倉竹の言葉に、そう返した。

「ただ、連れて行ったところで、私は大したこと出来ないよ。今の私は、あくまでもイタリアの旧式軽巡洋艦の1人でしかない。それでも良いの？」

「うん、良いよ。君がついて行きたいと思うなら、それで。船の中で、詳しい話も聞かせてもらった方が良いと思うしね」

倉竹はそう言つてジェルジンスキーたちを見た。ジェルジンスキーたちは倉竹の意見に反対することなく、その場で頷いて、彼の意見に賛同した。

ジュッサーノはそんな一同を見て、「じゃあ……」と少しの躊躇いを見せつつも、倉竹たちに言った。

「ついで行つても良いなら、行く。やっぱり、気になるから……」

その後、ジュッサーノは舞鶴のメンバーと共に船の中へと乗り込んだ。

しかし、その中でも有明だけは船内へ乗り込むのを拒否した。自分は海の上であつちこつち行くことに慣れており、むしろ今の状況なら船に乗り込むのが危険であることや、そして、何かがあればすぐに察知できるかもしれない、という理由であつた。倉竹としては、有明だけ海の中へと放り込むのは拒否したいところであつたが、当の本人が大丈夫だと言つてる以上、強く出ることも出来なかつた。

「……本当に大丈夫？ やっぱり船の中にいた方が良いんじゃない」

「ふふ。倉竹さんだったら、私を誰だと思つてるんですか？ 私はずっとあつちこつち行つたり来たり、海の上で旅をして来た有明ですよ。嵐での航海なんて慣れてます。大丈夫ですよ、このぐらいで私は死んだりしませんから」

不安そうな倉竹を目の前に、有明はクスクスと笑みを浮かべてみせた。

倉竹はあなたがそう言うならば、と、そのまま大人しく身を引いて、有明のことは彼女自身に任せることにした。有明も確かに可憐な女性ではあれど、実態は非常に強い主

砲を持っている日本艦のひとりだ。このぐらゐの嵐であれば、本当になんてことないの
だろう。

そうして有明は一人で海に出て、倉竹は一同が船の中へと乗り込んだのを確認する
と、そのまま横須賀から出航した。

船が借りられるかどうかの問題に関しては、天候が天候ゆえにスタツフが無人状態で
あり、借りたいならば代表者が署名をしてくれ、という説明だけがあった。この際だか
らかと倉竹は自分の提督名を使ったが、後から横須賀のスタツフに何か言われなにか少
し不安である。

ジェルジンスキーは船が出航してからしばらくすると、操縦席付近であれこれ雑談し
ているシャーリーと大原を横目に、自分の向かいに座っているジュツサーノへと話を
振った。

「ねえ、ジュツサーノ。ゼヴィンから何されたの？ 大分酷いこと言われた感じだった
けど」

「……まあ、ちよつとね」

ジュツサーノは周りをキョロキョロと見てから、小声で言えればいいか、と、少し身を
乗り出して、ヒソヒソ声で言った。

「アンミラーリオはね、私にその……体の関係を持ちかけてきたのよ」

「えっ?」

ジェルジンスキーは意外そうに目をパチクリとさせた。

「あの提督のことだし、とつくに肉体関係持つてそうだと思っただけ」

「ううん」

ジュッサーノは首を横に振った。確かに言われてみれば、今の今まで肉体関係を持ち合わせていなかったのが不思議ではあるが——ジュッサーノはそれに対して、自分なりの見解を示した。

「アンミラーリオとしては、この取引は最終手段として残したんだと思う。女子の純潔は他の何にも変えられないもので、金でどうこうできる問題じゃないもん」

「言われてみればそうよね……アンタの性格で言えば、それに相応するものがあれば、純潔を明け渡しても良いぐらいは言い出しそうだし。でも、そうじゃなかったんでしょ?」

「そりやそうだよ」

と、

「私は戦艦少女として戦わせてくれるなら、パフォーマンス維持の一種としての行為はアリだと思ってるんだ。提督と繋がることで、戦艦少女は強くなっていく。まあ、相応に働かせて欲しいなら……っってことになるけど」

「向こうが提案してきたのは、その逆ってことね」

「うん。戦艦少女としての私はいらないけど、体だけは寄越せ……ってね。それを拒否したら、朝っぱらから襲われそうになったし、今でも頭の中こんがらがってるよ」

ジュツサーノは自分の前髪をくしやりと握り締めながら、あはは、と、困ったように苦笑みを浮かべた。ゼヴィンの強行、いや、狂行とも言うべき行動を受け入れるには、彼女でも時間は掛かるであろうことが、この笑みから分かる。

ジュツサーノは続ける。

「私ね、実は、彼のことを支え続けられたらって思ってたの。それがどんなに悪いことでも、私ならついて行けるんじゃないかって思ってた。でも、私は脱落しちゃった。なんかダメだね、私」

「ジュツサーノ……」

ジェルジンスキーは悲しげなジュツサーノの横顔を見て、思わず眉を下げた。

ジュツサーノなりにゼヴィンに好意を寄せていたが、その好意は向こうに殆ど伝わっておらず、それどころかゼヴィンは自分の欲のためだけにジュツサーノを使おうとした。ジュツサーノとしてはそれでも良かったのだろう。彼と一緒に戦えるのであれば、それに越したことはない、と。ただ、そうでなければ、話は別なのだ。

ジュツサーノの隣に座り、話を聞いていたデンバーは言う。

「彼についていけない、という判断がとても遅い。さつきも言ったけど、これは避けられたことよ」

「で、デンバー……あまりに厳しく言わないであげて」

「でも」

ジェルジンスキーが行きすぎないようにと、デンバーに釘刺している矢先に、言葉が続ける。

「今回が彼から逃げるための最後の機会だと思うと、あなたがここにいるのも間違いではないと思う。今まであなたがしてきたことは許されるべきではないし、相応の裁きは戦艦少女として受けるべきだと思うけど」

と、

「ただ、彼の人格から目を逸らして、気付いたら手遅れになっていた事態よりは相当マシ。あなたは自分の心が壊れないうちに自分で気付いて、逃げてきた。今はそれで十分なのかもしれない」

「……」

ジュツサーノは自分の両手の掌を見つめて、そのままギュツと両拳を握り締めた。そして、顔を上げた。

「私があのまま彼についていくって選択をしていたら、私はこうしていられなかった。

それだけは確かだよね」

「ええ」

デンバーは頷く。

「アルベルト・デイ・ジュツサーノという船はいくらでも量産できるけど、ここにいるあなたはあなただけ。それだけは忘れないで」

「……ありがとう、デンバー」

ジュツサーノはデンバーのその言葉に頷き、何かを堪えるように顔を俯けさせた。

船は時間が経てば経つほどに島田たちの元へと近付いていく。それは倉竹たちも、戦いに挑むことを意味していた。

058：そして、託される

雷雨の音が激しく打ち付けている中、クラクストンとスミスは水上を走るように、Yamatōの元へと駆け抜けていた。クラクストンとスミスの体は外に出た途端、一気に雨に濡れ、服がベタベタと貼りついた。とてもではないが、コンディションは完璧とは言えない状況だった。

そんな中で、Yamatōに挑み、勝たなければならぬ——そんな状況に、駆逐艦2人は途轍もない緊張感を覚えていた。

ここでYamatōを倒すことが出来なければ、今後の提督界限に影響を来たし、島田も提督を無理矢理辞めなければならぬかもしれない。クラクストンにとって、今回の戦いは非常に重いものであった。また、スミスも、ここでゼヴィンをどうにかしなければ岸尾の今後に影響が出ることは知っているし、その影響の大きさを考えると頭が痛くなる。

双方にとって、今回の戦いは非常に譲れない大きなもの。これを乗り越えなければ先へ進めないのだ。

クラクストンはプレッシャーを背負いながら、ひたすらYamatōの元へと進んで

いった。

(絶対に勝たなきや。じゃないと、司令官様は——)

そうしてクラクストンが不安に押し潰されながら、ギョツと目を瞑った瞬間だった。

『——クラクストン、聞こえるかい?』

「! 司令官様っ!」

インカムから彼女の耳元へ、島田の声が入ってきた。

クラクストンは彼の声が聞こえてくると、思わず声を返した。彼の呼び掛けを聞いた途端、心の中になった不安が一気に散っていった気がした。

島田はクラクストンの声を聞くなり、クラクストンへと言葉を続けた。

『……雨、すごいね。インカム越しでも雨音、かなり聞こえてくるよ』

「はい。たまに雷も鳴ってますし、ちよつと怖いですね」

『こんな天候じゃ、普通は出撃打ち止めだもんね。僕もこの状況じゃなきや、君を出撃させたくないかな……なんてね』

などと言つて、島田は笑った。

そして、その後の島田の声のトーンは下がる。

『……本当はさ、僕も不安なんだよね』

「司令官様?」

唐突に彼の口から漏れた言葉に、クラクストンは目を丸くさせて驚いた。島田は続ける。

『普段から皆が轟沈しないように気を遣ってるつもりだし、最善の作戦や指示は立ててるつもりだけど、それでも万が一のことがあつたら対応出来るのかとか、色々考えちゃうんだよ』

「そんな……あなたの指示や作戦はいつだつて的確なのに」
(普段からそんなこと思ってたなんて……)

クラクストンは思いも掛けない彼の弱音に、つい、吃驚して、すぐにフオーローへと回った。

同時に、そんな彼の心境に気付くことが出来なかった自分の不甲斐なさに、胸の中が重くなった。

自分が最初に大破した時はそれこそ慌てていた彼だし、そのことは後々、他の艦船からも、しよつちゆう揶揄されていた。ただ、島田は、それ以外のことでは一切、不安な感情を漏らすことはなかった。ずっと前を向いて、戦いに挑んでいた。普通の同年代の提督ならば、周りからの威圧感や不安で押し潰されると言われていたのに、そんなこと微塵も感じさせなかった。

島田はクラクストンの驚愕をよそに、続ける。

『確かに、戦いに勝つことは大事だ。名誉のため、誇りのため、評価のため——それらはこれからに全て繋がるし、それこそ負け続きの提督なんて、要らないだろうね』
と、

『でも、それ以上に君と離されたくない。また、君と離されたらつて思うと、すごく怖い』
「……………」

クラクストンは島田のその言葉を聞いた途端、唾を飲み込んだ。

戦いは、死と隣合わせである。

それは島田にとつても、クラクストンにとつても変わらないことであり、そうならない為に常に鍛錬は欠かさない。

そして、島田はそれに伴う不安を、今、こうして漏らした。

戦いに於いて、彼は一切の不安を口にすることはなかった。いや、もしかしたら、今までは自分に見せようとはしてこなかったのだろう。女の子に愚痴を溢すなんて真似、あの島田からすれば恥ずべき行為の一つに数えられても違和感はない。

島田はしばらくしてから、小さく笑う。

『……………あはは……………こんなこと、君に言つたつて困惑するだけなのにね。ごめんね、変なこと言つちやつて』

「いえ……………むしろ、嬉しかったです」

クラクストンは首を横に振り、続ける。

「さつきも言った通り、私は絶対にあなたの元に帰ります。あなたの側から離れるなんてことは、二度とあつてはなりませんから」

『クラクストン……』

「だから、私がおし帰つてこれたら、たくさん褒めて——それで、抱き締めてください。司令官様が待つてくれるのなら、それだけで沢山頑張れます」

クラクストンは顔を上げて、曇天の空を眺めた。灰色に染まっている雲の合間からからは、ゴロゴロと雷が随所に輝きを放ち、普通ならばこんな天候で外に出ようとは思わないだろう——ましてや、海になんて。

だから、クラクストンはこの天候でも、どんなに辛い戦いでも、絶対に帰る為に彼の存在が必要だった。

島田はクラクストンのその言葉を聞いて、何かを飲み込むような音を鳴らした後、続けた。

『ありがとう、クラクストン。ちゃんと僕の腕の中に帰ってきてくれよ』

「……はいっ」

クラクストンは笑みを浮かべ、明るい声音で返した。

そうしてクラクストンは一旦島田との連絡を終えると、ふうー、と小さく息を吐いて、

スミスの方を見た。スミスはクラクストンと島田が連絡を取っている様子をずっと見ていたらしく、小さく笑みを浮かべて続けた。

「島田さん、どうでしたか？ 泣き言言ったりしませんでしたか？」

「んもう、司令官様はそこまで弱虫では無いですよ」

と、クラクストンは苦い笑みを浮かべ、

「……でも、ここまで来て不安なのは、皆一緒なんだなって思いました。もし勝てなかったらどうしよう、という不安は誰にでもあるんだと」

クラクストンとスミスは水上を駆け抜けて、Yamotoの下へと近付いていく。彼女との距離を縮めれば縮める程、こちらに対する向こうからの圧迫感は強くなっていく。

それによって体が押し潰されそうな感覚に襲われながらも、スミスは続ける。

「うちの司令も……私がここで負けたらどうしよう、やられたらどうしよう、って、思ってくれてるんでしょうかね。普段の司令見ているとその辺の気持ち、読めない所もあつて」

「岸尾さんなら、きつと思ってくれますよ」

と、クラクストンは微笑みを浮かべる。

「スミスさんは、ずーっと岸尾さんの側にいたんでしょう？ だったら、岸尾さんもスミ

スさんのこと、大事に思ってくれてるはずですよ」

「そうかな……だったら良いんですけど」

スミスは苦笑し、クラクストンと共に進み続けた。

2人は進んでいる間は何かを話そうとするのではなく、ただ黙って前へと進んでいた。

そろそろ2人がYamatōの元へと辿り着こうとした瞬間、

「ッー」

「きゃっー」

2人に、いや、その傍らにもある提督たちが乗った船体に向けて、暴風が吹き荒れた。スミスとクラクストンは互いに抱き締め合い、その暴風に釣られて体が後退しないように、必死で堪える。

船体も大きく揺れ、中にいる少年提督たちの様子も気になるところであるが——Yamatō側の牽制であるのはわかりきった事だ、こんなところでいちいち怖気ついては居られない。

風の勢いが弱くなったところで、スミスとクラクストンは頷き合い、再び進み始めた。進めば進めるほど、クラクストンの脳内へと伝わってくるYamatōの声がハッキリとしてくる。

『負けると分かっている戦いで、どうして勝つと思える？』

『私に挑まなければ、貴方のずっと提督は貴方と共に過ごしてくれる』

『私に挑んで負けることもなければ、バラバラにはならない』

『自分たちの事を優先するなら、やらない方が良いんじゃない？』

「——っ」

(卑怯よ、こんなやつ……！)

クラクストンはYamatōのこれらの話を一方的に聞きながら、そろそろ苛立ちが沸き始めていた。

スミスにこのYamatōの声が届いているかどうかは聞いていないので分からないが、少なくともクラクストンはこのYamatōの声は目に余る(耳に余る?)と言えぬぐらいに気持ちが悪ハッキリと決まっている。

(確かにあなたの言う通りかもしれないわ、Yamatō。戦いが無いのなら、その方がいい。だって、司令官様と落ち着いて過ごせるのは、私にとつても大事なもの)

そして、クラクストンは黒いオーラを目の前にして、プレッシャーに負ける事なく、顔を上げた。

(——でも、その落ち着きを得るためには、あなたたちをどうにかしなければならぬよ、Yamatō)

——今、クラクストンとスマスの目の前には、Yamotoの姿がある。

Yamotoは戦いをやめるように唆した自分の言葉に負けなかつたクラクストンを睨み付けるように見つめ、口端を不気味に吊り上げて見せた。

「ところで、島田くんは全ての事を思い出したようだけど、ボクに言いたい事——沢山あるんじゃないかい？」

少年提督たちがYamoto陣営とクラクストン陣営の姿を見守っている中で、島田の隣に立っていたゼヴィンが彼にそんなことを言い放った。ゼヴィンは島田の左手の薬指に嵌められているものを見て察したのだろう。

島田はこのタイミングで何を言ってくるんだ、なんて思いつつも、逆にこのタイミングだからこそか、と、透明な窓の向こう側に映る光景を見た。

「言いたい事は沢山あるさ」

と言った島田の脳裏には、兵学校入学初日に学校の地下に連行され、記憶を奪われるほどの電気ショックを与えられた時の光景が浮かんでいた。

知らない大人に知らない場所に連行されて、そこにいたのは——謎の粉薬を持っているゼヴィンの姿だった。記憶が戻ってきたとはいえ、幼少期にほぼ近い時期の記憶故か、ところどころ臆げではつきりしてないとこがある。ただ、ゼヴィンがその粉薬を

無理矢理自分に飲ませ、大人たちが電気ショックを与えたのは、脳裏にはつきり浮かぶ程度に思い出せていた。

島田は窓ガラスに手を当てて、その上で拳をギョツと握り締めた。

「……僕の事、いや、僕たちの事はいつから目を付けていた？ クラクストンに真つ先に目を付けるなんて、普通じゃあり得ないぞ」

島田が舞鶴着任した時のクラクストンはあくまでもただの秘書艦であり、こちらに対して何かとアピールが激しい少女という立ち位置なだけだ。確実に潰しに来るのであれば、誓約したという事実を手にしてからでも特に問題はないはずだし、ゼヴィン側も確信を得られる状態で潰すことが出来る。

しかし、着任して間もないうちにクラクストンを潰そうとしたので、島田はそこに違和感を覚えているのだ。側から今後島田の見て支えになる艦船などパツ見でわかるはずもないし、それこそ将来どうなっているかも分からないだろう。

ゼヴィンは島田の質問を聞くなり、ニヤツと笑みを浮かべて答える。

「逆に、僕が予め目を付けていない・君の過去を知らないとも思ってたかい？ 着任前の少年が特定の艦船と指輪の共有なんて、深海軍の中でも普通に噂は届くよ。逆に言えば、それぐらい珍しいんだよ、君とあの娘の関係はね」

と、

「ああ、そうそう。着任前の少年が誓約した事に関するペナルティも、こういう事のために課したことなんだよ？ 深海軍が侵食していることも知らないで、上は呑気に採用してくれるから助かるよねえ」

「……やっぱりか」

島田は案の定、と言わんばかりに、ゼヴィンを睨み付けた。

「そのぐらいの規定を提案出来る立場って事は、かなり上の方にまで侵食が行ってるってことなんだろうな。表に出てないだけで」

「うーん、まあ、ボクたちが通ってた兵学校の講師たちは殆どこっち側だしねー。長束さんの追い出しも、鎮守府内部にいる深海軍サイドがやった事だよ。ボクは関わってないけど」

「思ったより腐つとるんじやお、この界限……」

長束が呆れ気味にため息を吐く。長束からすれば、この界限の話は従兄弟から頻繁に聞いていることであつたが、まさかここまで腐つているとは夢にも思ふまい。はつきりと兆候が出ていないだけで、他の鎮守府も少なからず侵食が始まつてる可能性も高いかもしれない。

そして、長束は染まらないと判断された為、排除された。この辺は島田の推測通りであらう。

島田は自分の推測が当たっていいようなことに頭を抱えながら、自分の目の前に映るクラクストンとYamotoが対峙している光景に、思いを馳せた。

(クラクストン……君頼みになってしまふのは嫌だけど、今は頼れるのは君たち戦艦少女だけなんだ。頼むよ)

059：地獄の時間へ

雷は眩しいし、雨もとても冷たい温度でこちらへと当たってくる。時期的にはとつくに7月で、気温も高くなってくる頃なのに、今日だけは体温が奪われるほどの寒さをその身を持って感じていた。

クラクストンはスミスと共に一步前に出て、目の前の邪悪——深海軍の戦艦 Yamato と対峙した。

Yamato はその紫色に光放つ不気味な瞳でクラクストンとスミスを睨み付け、敵意を剥き出しにしている。

「私に歯向かう以上……覚悟は出来ているのだろうか、戦艦少女」

「……ええ、当たり前です」

クラクストンは、コクンと首を縦に振って頷いて、顔を上げて Yamato を見た。

「私たちの関係を全て壊そうとした、そして、岸尾さんのお父さんを奪った張本人ですもの。相打ちでもなんでも、あなたにはここで沈んで貰います」

クラクストンはそう言って、右手に装着している小型主砲の先を Yamato へと向けた。

Yamatotoは「ほう」と、嘲笑うようにクラクストンたちを見つめるだけ見つめて、その後大声で笑いを上げた。

「ふっ……はははははは！ その小さな主砲で私を討とうなんて、一生かけても出来まい！」

と、

「だが、やれると言うならばやってみるが良い。どうせ何も通用しないし、吠え面をかくだけになるだろうがな！」

(煽ってくれるわね、この人……流石、ゼヴィンさんの母親だけある)

この煽り方、どこかで似たようなものを見た記憶があるが、息子とゼヴィンのことであると思うとストンと腑に落ちた。彼のあの意地汚い性格は、この母親の遺伝子によるものだと思うと非常に合点がいく。そのぐらい、今のYamatotoの振る舞いが息子である彼に似ているのである。

そして、彼女の煽りに乗ろうが乗らまいが、クラクストンとスミスはどのみち攻撃を仕掛ける以外無い。

クラクストンは早速主砲の引き金に自分の指を当て、狙いをYamatotoへと定めた。

スミスはその後ろからその様子を見つめつつ、自分の艤装に設置されている主砲の先

を意識的にYamatōへと向けた。そして、Yamatōに向けて声高らかに言う。

「Yamatō——これ以上はあなたの好きにさせませんよ！」

「砲撃用意ッ！」

クラクストンとスミスは自分達の視線をYamatōへ定め、主砲の引き金を引いた。

「つてえええええ——いッ！」

声を張り上げた瞬間、2人の主砲から弾丸が放たれる。

それらはYamatōへと勢い良く駆け抜けていき、Yamatōの腹部や腕へとそれは激突していく。最初はこれでダメージが通るか？と2人は思った。あの装甲と言えども、2つ同時に砲撃をくらわせることが出来たのなら、ダメージを与えることは出来る、と。

しかし、それらはYamatōの「表面」で爆発して終わり、彼女のダメージへなる事はなかった。

「……！ 通用してない!?!」

「擦り傷すら付いてないなんて……!?!」

「言っただろう?」

と、Yamatōは驚く駆逐艦2人を前にして、嘲笑う。

「その小さな主砲で、私を討つ事は出来ない。そう……一生を掛けてもだ」

Yamatotoはそう言った途端、己の艦装に備え付けられている巨大な黒く紫に光る主砲の先をクラクストンとスミスへと向けた。駆逐艦のそれとは違う、ガチャン、ガチャン、という音が辺り一面に鳴り響いた。

「お前らの全て、この主砲で焼き尽くしてやろう！」

Yamatotoがそう言い放った瞬間、彼女の主砲の銃口全てから炎を纏った弾がクラクストン達に向けて放たれた。

「クラクストン！」

「——ッ！」

2人は持ち前の俊敏性を活かして砲弾の動きを追い、当たらないように必死に海上を駆け抜けた。駆逐艦は小型で火力に限界はあるが、その俊敏性で数々の艦船と渡り合う事が出来る。

スミスとクラクストンもそれに賭けて、どこかのタイミングで魚雷をYamatotoへ当てるしか無い。作戦とかではなく、彼女に勝てる手段がそれしかないのだ。だから島田や岸尾と言った少年提督たちも、ただ彼女の無事を祈るしか出来なかった。どう攻撃しても魚雷でしかYamatotoに勝てないのであれば、下手に指示を出しても被害が多くなるだけだと。

(ここでやられる訳にはいかない！)

2人はそう思いながら、ひたすら砲撃から避け続け、Yamatōの猛攻から逃れていく。

しかし当然ながら、Yamatōはそんな2人の回避力を快く思う事なく、それに対する苛立ちを心の中で溜めていくだけだった。

(この2人、思ったよりもちよこまかと動いてくれる……生意気にも程があるというものの)

長い間深海軍として戦ってきたYamatōの中では、駆逐艦はどの戦闘向け艦種よりも性能に劣り、装甲も耐久性も無く、すぐやられる——という意識がある。特に深海軍の中であれば特に特殊な能力を持ってない限り、駆逐艦という艦種は「使い捨ての駒」でしか無いだろう。実際そうやって沢山の深海駆逐艦は沈んでいるのだから。

また、普通に戦艦少女側の駆逐艦と戦っても、このYamatōからその意識を拭い取る事は出来なかった。少しでも砲弾を当てれば直ぐに大破するし、そうすれば彼女たちの強みである雷装を活かせる雷撃戦や夜戦も見るだけだ。

(役立たずの駆逐艦の癖に、どうしてそこまで張り合おうとする?)

Yamatōは放った弾丸が全て避けられ、それらが海の中へと沈んで行くのを見た。スミスとクラクストンは無事に全て避け切ったようで、無傷のままでこちらを見て

いた。しかし、その息は上がっており、今のを避け切ったお陰で疲れが出てきたのが見える。

Yamatotoは「なるほど」と、ニヤリと笑みを浮かべた。

(……消耗戦ならば、圧倒的にこちらの方が有利なだけ。でも、それが見えたのであれば、やる事はただ一つか)

そして、Yamatotoは声を上げた。

「ねえ、あなた達」

「!」

「なんですか」

「……案の定、怖い顔なこと。まあ、その顔も私からすれば可愛く見えるけどな」

こちららを警戒して睨み付けて来る米駆逐艦2人に対し、Yamatotoはクスクスと笑みを浮かべて、また、見下した。そんな顔でこちらを睨み付けても何も効果はない、と言わんばかりだ。

Yamatotoはそんな笑みを浮かべ続けながら、2人に言った。

「このままではこちらは避け続けるだけになるし、折角だから、少しはルールを決めて遊びましょう」

と、

「そうだな……私がこれから20発ほど砲撃を放つ。で、あなた達がそれを避け切つたら、魚雷をこちらに撃つ権利を与えよう」

「避け切れなかつたら、その場でゲームオーバー……ですか」

「そう、簡単だろう?」

Yamatotoはクラクストンの声に反応して、答える。

「一発でもやられたら、その場で戦闘権を剥奪。この世界のシステム上、命だけは助けてあげられるけど、あなた達は私に二度と勝負を挑む事が出来なくなる」

「……事実上の負けを認める、ということですね」

「その方がお互い都合が良いはずだ。この戦いが長引いても、良い事は何も無いし、お前達の弱さを見せつけてしまうだけだからな。お前達に機会を与えようとするだけ、私は優しいぞ?」

と、

「乗るか乗らないかはそちらに任せるが、そうなつたらただの消耗戦になるだけで、こちらも面白く無い。ダラダラと避け続けるだけならば、私の方が有利になつてしまうからな」

「……分かりました。その勝負乗ります」

「クラクストン!」

Yamatotoの勝負に真つ先に乗ったのは、クラクストンであった。クラクストンはペコと小さく頭を下げて、Yamatotoの提案に賛成し、続ける。

「私もこのままではキリがないだろうと思つてたので、回数制限を付けるのは賛成します。20回……避ければ良いんですね？」

「ああ、20回だ」

Yamatotoは頷く。

「で、そちらのピンクはどうする？　ここまで来たら乗らないつて訳にも行かないだろう？」

「うっ……分かりました、私も乗りますよ」

スミスは若干否定的なところはあれど、かと言つて大きなデメリットも特に思い付かず、Yamatotoの提案を受け入れた。

「でも、20回つていうのはちゃんと守つて下さいよ！　ルールを守る事において信頼性が無いんですから、あなたたち」

「ああ、あくまでも『私から』20回というのは守るつもりだ。私から……はね」

(……『私から』?)

Yamatotoのその表現に、クラクストンは違和感を覚え、その場で首を傾げた。

この20回のうちに何かを仕込むつもりなのか、それとも何か他にこちらを攻撃する

手段を持ち合わせているというのか——クラクストンはYamotoに対してかなり懐疑的になっていた。

スミスがYamotoに対して威勢良くギャーギャーと騒いでいる横で、クラクストンに島田からインカムで連絡がかかる。

『クラクストン、聞こえるかい?』

「司令官様」

クラクストンは小声で島田の声に反応した。

「あの……すみません、勝手にこんな事約束しちゃって」

『今は君たちの判断に任せるしかない状態だし、僕も彼女の提案に乗るのは妥当だと思ってる』

と、

『ただ……Yamotoの言い方、どうにも引つ掛かってね。私からは20発って、他に誰かいるみたいなの……』

「……ですよ。警戒して臨むべきでしょうか」

クラクストンが質問した途端、

『あ……島田司令、DD-571には繋がってるのか? スミスはさつきからYama

toばっか構ってて、気付いてくれないんだが』

「き、岸尾さん……」

と、若干寂しそうな岸尾の声、インカムから聞こえてきた。クラクストンがスミスを見ると、彼女は未だに Yamato に突っ掛かっているようで、思わず苦い笑みを浮かべてしまった。とは言え、自分の提督である岸尾の父親を奪った張本人だ。スミスからしたら、ある意味この場で討つべき敵であるのは確実であろう。

岸尾は「ハア」と、溜息を吐き、続ける。

『まあ、スミスは気付いてないみたいだし、DD-571と話した方が早いかな』と、

『深海軍は外道な方法でこちらに勝とうとすることもあるが、今回の Yamato に関してもそれが当て嵌まるだろうし、それには注意して欲しい』

『そこそ大群引き連れて隙を見て一斉に、なんてこともあるだろうしね。Yamato の自身は手を下さないだろうけど、その代わり引き連れている部下で手を下すことは多いだろうから』

島田は岸尾の意見に賛同し、

『深海軍からの攻撃で戦艦少女が轟沈する事はないけど、その辺は留意してね。無傷で帰ってこいとは言わないけど……半分ぐらいこの時のために鍛錬を重ねてきてるようなものだからね、その結果をこっちに見せつけてほしい』

「司令官様……!」

クラクストンが目を丸くしている間にも、島田は続ける。

『大丈夫だよ、今の君なら出来る。左手の薬指の意味を忘れてる訳じゃないだろう?』

「……はい」

クラクストンは頷いて、自分の左手薬指に嵌められている銀色の指輪へと目を向けた。

指輪はこの薄暗い中でも、光をどこからか吸収してキラキラと光っており、それはクラクストンと島田の諦めない気持ちを反映しているようにも見えた。

クラクストンはギョツと左手で拳を握り締め、続ける。

「司令官様。私、貴方が私の司令官で良かったと思います。だって、貴方の為なら何でも出来るって思えるんですもの」
と、

「じゃあ、私はそろそろミスさんと呼んできますね。それで、Yamotoさんと決着付けます」

『……うん、気を付けて』

クラクストンと島田は連絡を切り、クラクストンはYamotoを睨み付けているミスへと声を掛けた。

「スミスさん。そろそろ、定位置へとつきましょう？ いがみ合っても、事態は解決しませんよ」

「く、クラクストン……でも、この人は」

「分かっていますけど、口先だけではどうする事も出来ませんよ？」

「……う……分かりました。行きます」

スミスはクラクストンに言われて、そのまま Yamato 定位置へとついた。Yamato は特に場所について何も言わなかったが、開始がある以上、一定の距離は取らなければならぬ。

クラクストンとスミスはある程度 Yamato から離れると、クラクストンの方から Yamato へと声を向けた。

「それでは Yamato さん——そろそろ始めて下さい」

「ほう、もう良いのか？」

「……はい、私は大丈夫です。スミスさんも」

クラクストンはコクンと頷いて、Yamato の質問に答えた。

Yamato は真つ直ぐとこちらを見てくるクラクストンの視線を煩わしく思いながら、主砲の銃口をクラクストンとスミスへと向けた。

「なら、始めるとしよう。地獄の時間をな」

060：四面楚歌

島田たちに見守られている中で、米駆逐艦2人とYamatooのゲームは始まった。

20発の砲撃から避けるぐらいならば、と、クラクストンは向こうの提案に乗ったが——確実に20発で済まない事は推測出来る為、内心かなり警戒していた。あくまでもYamatooの砲撃が20発であり、それ以外については特に言及していないのだ。

そうして警戒を強めているクラクストンを見て、何も気付いていないスマスは「深海軍が相手だもんなあ」なんて呑気に思いつつも、彼女の警戒具合にはスマスも釣られそうになっていた。Yamatooの事だ、何を仕掛けてきてもおかしくない事はスマスも薄々勘付いているところであろう。

Yamatooはこちらを警戒して厳しい目線を向けてくるクラクストンに向けて、ニヤリと笑みを浮かべた。

「——まずは一発」

途端、2人に向けて一発目の砲弾が放たれた。

クラクストンとスマスの間を引き裂くようにその砲弾が放たれた為、2人は左右それぞれに散り、お互いから離れた。

「どンドン行くぞー！」

「ッー！」

「ぎゃつ!?」

そして、2発目、3発目、と、2人に向けて次々と砲弾が襲い掛かった。

スミスとクラクストーンはこちらへと次々と襲い掛かる砲弾を必死に避け、スミスはあまりの砲弾の勢いに岸尾へと連絡を繋いでしまった。

「し、司令ー！ 思ったよりバンバン撃ってくるんですけどアイツー！」

『スミス、やっとオレに話しかけてきたかと思えばそれか…… Yamatoの事だし、このぐらい想定範囲内だろう』

スミスの強い困惑に対して、岸尾の落胆のような声が返ってきた。この程度、戦艦少女ならば戸惑わないで欲しい、というスミスに対する呆れが岸尾の中では溢れ返っているのが、彼の声から分かる。

スミスは岸尾の正論に、「うつ」と言葉を詰まらせつつ、言う。

「でもここまでバンバン撃てるなんて思いませんよ。小型ならともかく大型主砲ですよ？ 持つてる主砲順番に撃つてるにしたらって、このスピードは……」

『まあ、向こうは何でもアリだから、と言ったところだろうな。それで、他に変わったところはないか？』

「他……？ 分からないですよ……っあ！」

瞬間、スミスは間一髪で Yamato からの砲撃を避けた。その弾丸は次第に冷たい海の中へと沈んでいき、その姿を失っていく。

スミスは体勢を整え直しながら、続ける。

「何か変な事でもありませんか？ 確かに Yamato さんのことですし、何も仕掛けてないとは思えないですけど」

『ああ、いや……まだ何も無いなら良い。まだ何も無いなら……』

「……ふーん？」

（これから何か起こるかもしれない、みたいな言い方だなー）

スミスはそう思いながら、Yamato へと目を向けた。

途端、

「ツ！」

（ちよ、何ツ!?!）

自分の背筋がブルつと小刻みに揺れ、まさかと思い、スミスは後ろへと振り向いた。

「——ツ！」

すでに時遅しと言わんばかりに、スミスの視線の先には——深海軍の重巡洋艦・I級がいた。

I級は腕の艤装部分に装着している主砲をスミスへと向けた。そして、紫色の瞳を光らせながら、彼女の方へと砲撃を放った。

「ツ、きやあつ!」

(ど、どうしてI級が……!?)

スミスは突然の出来事に動揺してしまった。

スミスはなんとかそれから避け切るものの、心臓の動悸が治る事はなく、あまりの驚きにドクドクと血流が激しく動いているのが分かる。

彼女の様子がおかしい事に気付いた岸尾は、インカムで声を掛ける。

『スミス、どうした? 何があつた?』

「し、司令……い、今、私の目の前に重巡I級が……にやつ!」

スミスは再びやってきたI級の砲撃に、また避けた。

スミスはもしかして、と、周りをキョロキョロと見渡すと、Yamatōの援軍らしき深海軍側の艦船が続々こちらを訪れ始めているのを見て、額に青筋を浮かべながら体を震わせた。

(う、嘘でしょ〜ツ!?)

船の中からスミスの様子を見て、彼女から話を聞いていた岸尾は、彼女の言葉を聞いて

て島田達と共に窓の向こう側に映る戦闘風景——から、少し離れたところへと目を向けた。彼らが目を向けたのは、戦闘している場所から少し後方へと離れた場所だ。

岸尾と島田はまさかと思ひ、目を凝らしてその場所をジツと見つめた。島田は眼鏡が無く、遠くのものは見えない状態ではあつたが、そのぼんやりとした視界の中でも、その姿を確認することは出来た。

そして、驚愕した。

「あ、それは……！」

——この状況ゆえに、分かる。

Yamatoが予め呼んでおいておいたであろう深海軍側の援軍が、続々とクラクストン達の元へと近付いてきているのである。艦種はそれぞれ様々であり、戦艦から重巡洋艦、それこそ駆逐艦といった小型艦までこちらへと訪れていた。

岸尾は自分たちの後ろでニヤニヤと光景を見つめているゼヴィンへと目を向けた。彼のそんな表情を見るや否や、岸尾は彼を睨み付けながら駆け寄り、ゼヴィンの胸倉を掴んだ。そして、顔を近付けて詰め寄る。

「おい、『アレ』はどういうことだ！ 本当に呼んでくるなんて……！」

「さつき貴方が言ったじゃないか、岸尾兄さん？」

と、ゼヴィンは煽るように彼を「兄さん」と呼び、

「深海軍は勝つ為ならば、どんな方法でも使つてやる。だから、このぐらいは想定してたでしょう?」

「……ッ!」

岸尾は何も言い返せなかった。

母親から話に聞いていて、彼女達の外道っぷりがどれだけのものかは覚悟出来ていたつもりだった。島田も Y a m a t o の言葉から想定していたからこそ、読みが当たったことに対して驚愕しているし、動揺を見せている。

ゼヴィンはクスクスと母親によく似た表情で嘲笑いながら続ける。

「ボクとマーマだって、深海軍の今後を守るためにも必死ではあるのさ。戦艦少女潰しこそがボクたちの生きる近道だからね。君たち如きに潰されるわけには行かないのさ」
「だからって……!」

「岸尾くん、やめなせえ」

岸尾をこれ以上ヒートアップさせまいと、彼の肩を掴んだのは長束だった。

岸尾は彼の方へと振り向いて、長束の顔を見る。長束は横へと首を振り、「それ以上はいけない」と、岸尾がこれ以上出過ぎないように言葉を向けた。

「ここでゼヴィンくんを責めたって仕方ないじゃろう。あまり冷静さを欠いてしまうと、戦艦少女たちの戦況にも影響が出てしまうけえ」

「でも……！」

「でももだつても無い。ワシらが見るべきなのはゼヴィンくんじゃなくて、ワシらの為に戦つてくれてる戦艦少女たちじゃ。気持ちには分かるが、ここでは抑えてくれ」

「……っ、分かった」

岸尾は長束に言われて、ゼヴィンの胸倉を離した。

ゼヴィンは襟元を正しながら、長束へと目を向ける。

「長束さんもボクを助けるなんて、思い切ったことするねー。暴力沙汰になったら、困るのはそっちだからかな？」

「それもあるが」

長束は首を横に振り、

「こんなことで拳を汚すようなことはしてほしくないからのお。言いたいことはたくさんあるが、彼の仇は Y a m a t o じや。君はあくまでもついでののを忘れるな」

「……チツ、分かったよ。オマケ扱いかあ」

ゼヴィンは溜息を吐きながら、岸尾をジトリと睨み付けた。岸尾もゼヴィンへと睨み返し、2人の間にはバチバチと火花が走った。前々からお互い思っていたが、異母兄弟でありながら、どうにもこうにも気が合いそうに無い。

長束はそんな異母兄弟2人を呆れ気味に見つめつつ、島田の元へと向かった。島田は

窓から光景を見て、難しそうな顔をして何か考えているようだった。

「島田くん、どうじゃ。何か見えてきたか？」

「長束さん」

島田は長束に話しかけられるなり顔を上げて、彼の方を見た。

長束は優しく笑みを浮かべて、続ける。

「その様子じゃと、クラクストンにどう指示を出すべきか悩んでいるようじゃの」

「……はい」

島田はそれを否定せず、頷いた。

「想定はしていたけど、まさか本当にやってくるなんて思ってた……彼女たちを信じるしかないのは分かってるんですけど、僕たちに出来ることってなんだろうって思ってますって」

と、

「こういう場面見ると、あくまでも僕たちは指示出す存在に過ぎないのが、凄くもどかしいんです。漫画やアニメなら僕たちでも戦えるのになあって」

「……そうじゃのお」

長束はクスツと笑みを浮かべて、続ける。

「確かに、ワシらがここにいないだけしか出来ないのは凄くもどかしいことじゃ。それは

とてもよく分かる」

と、

「でも、彼女たちはこちらが見てくれるだけでも頑張れるんじゃないよ。君だって、クラクストーンが見てくれるならカッコつけたくなるじやろう？ それと同じようなもんじや」

「僕が……見るだけでも」

島田は何か決めたように、外していたインカムをセットし直した。

長束はそんな島田を見つめて、うんうん、と頷いた。

（今の彼女に必要なのは、君の声じや。深く考えなくても良いんじゃないよ）

「クラクストーン！ ど、どうしましょう……沢山来てますよ！」

「うっ……」

（司令官様とも予測はしていたけど、まさかこんなに来てたなんて……！）

クラクストーンはスマスと背中を合わせて、今の状況に対して困惑を浮かべていた。

クラクストーンはあの後、スマスの様子がおかしいことに気が付いて、様子を伺おうとした。しかし、時は既に遅く、気付いた時には深海軍の艦船たちが自分たちを囲った後だった。

自分からは20回だけ発砲する——しかし、自分の軍としては制限をつけない。

Yamatōの「私からは20回」というのは、クラクストンや島田の予想通り、そういう意味だったのだ。彼女たちは自分が勝つためならば目的や手段を問わない、と、岸尾は語っていたが、これは確実に自分たちを再起不能にするつもりで来ているであろうことは分かる。

クラクストンは顔を上げて、その青い目をYamatōへと向けた。Yamatōは紫色の瞳で、クラクストンの姿をジッと睨み付け、嘲笑う。

「何かこちらに言いたい事が沢山ありそうな目をしているな」

「沢山つてレベルじゃないですよ」

クラクストンははつきりとそう言うと、Yamatōに向けて続ける。

「あなたは最初からこのつもりで、あのルールを提案したんですね？ たった20回ぼっちの砲撃では、私たちは避けることが出来るけど……数があればそんな事知った事でもなく、隙があれば簡単に突くことができる」

と、

「これだけ数が多ければ、いくら回避力が高い駆逐艦と云えども、それだけで耐え切ることは不可能に近い。20回だけという提案で私たちを油断させて、動揺を突く。そんなところだったのでしょうか？」

「ふふ……はははははー」

Yamatotoはクラクストンのその推理に高笑いし、

「残念ながら、私からは何も言つてないし、私だけでお前たちに挑むなんて事も言つてないはずだ。つまり、これはこここの敵は私だけと思ひ込んでいた、お前たちの注意不足なだけ。私に落ち度なんて無い」

「——なにが、落ち度なんて無い、ですか!」

そして、こちらを小馬鹿にするようなYamatotoの態度はスミスの怒りへと触れる。スミスは声を張り上げて、Yamatotoを指差した。

「つていうか、落ち度とかそういうの通り越して、邪悪ですよアナタ! 深海軍に人の心が無いのは分かつてましたけど——本当に良心とかそういうの持ち合わせて無いんですか!」

「私たちはあくまでも貴方達を潰して、海を支配することが目的なの」

Yamatotoはスミスに言われるなり、深海軍にしては淀みのない瞳を向けながらそう答えた。

「その為にはどんな手段も厭わない。その事は貴方もよく分かつている事でしょう?」

「……人の形はしてるから、何かしらの感情は持ち合わせていると思つてましたよ」

スミスはギュッと体の横で拳を握り締めた。

「うちの司令のお父さんを奪つた事についても何も思つてないんですか……? 申し訳

ないとか思つた事ないんですか!？」

「無い」

——即答だつた。

あまりにも迷いがなすぎで、スミスはこちら側が聞き間違えてしまつたかと、思わず困惑してしまつた。けれども、それは聞き間違いではなく、Yamatoのはつきりとした否定であつた。

「寧ろ、雑魚は雑魚らしく雑魚と繋がつていれば良い。私たちは優秀な因子を求め、こちらの世界に引き寄せているだけだからな。そんな当たり前前の事の何処に申し訳なさを感ずる必要がある?」

「——ッ!」

「スミスさん……」

色々な言葉を吐いてしまいそうで堪えているスミスを、クラクストンはただ黙つて見つめていた。

スミスの中でYamatoは、「好きな人の父親を奪つた張本人」という認識であり、それは彼女に対する憎悪を膨らませるだけでも十分すぎるものだつた。

(「こんな女のせいだ司令と司令のお母さんは……!」)

061：砲撃は大きく響く

スミスがYamatoを前にして冷静さを欠いてしまうのは非常に不味いことであると、クラクストンは薄々感じ取っていた。

戦場に於いて、冷静さというのは何処にいても大事なものであり、戦況を正しく把握するためにも必須なものである。もし、それが欠いてしまえば、致命的なミスへと繋がる事になる。ここで言えば大破に繋がる事——なのだろうが、もし、冷静さを失ったことが原因で大破になってしまったら、雷撃で逆転出来るであろう未来も失われる。中破に抑えられても雷撃の威力にペナルティが掛かり、倒し損ねる可能性が高い。

つまり、ここで2人が彼女たちに勝つためには、中破以上のダメージを追わない、というのが最大条件になる。

クラクストンは前に出ようとしているスミスの体を両腕で抑える。

「ス、スミスさん……落ち着いて！ 気持ちには分かりますが、ここは抑えないと相手の思うツボです！」

「落ち着いてられないですよ！」

スミスは真っ先に返し、

「小馬鹿にされたような態度取られて、クラクストンは悔しくないんですか!」

「そ、そういうわけでないですけど……でも、避けられる砲撃も避けられなくなっちゃいますよ! だから、まずは抑えて、ね?」

クラクストンはなかなか抑えられないスミスの激情にどうしたものかと、頭の中で首を傾げてしまう。彼女を止めるには岸尾の一声が必要になるのは確実なのだが、岸尾も岸尾でゼヴィンにいろいろ突っかかって居そうな気もして、逆に今のスミスを煽つてしまいたいような気もした。

ただでさえ、彼女の怒りの正体は岸尾が深く関わっているのだ。一歩間違えたら、その激情に火を注ぐに違いないだろう。

クラクストンがそうしてスミスに必死に制止を掛けていると、インカムから島田の声
が聞こえてきた。

『クラクストン? 聞こえてる?』

「し、司令官様ツ!」

島田の声を聞くなり、クラクストンは即座にそれに反応して、続ける。

「い、今、スミスさんの頭に血が上って……このままだと、今後の戦況に影響が出ちゃいます!」

『ああ、さつきから君がスミスを抑えているのはそういうことか……岸尾くんも岸尾く

んで、ゼヴィンの奴と睨み合ってたなあ』

「やはり……この件で」

『生まれた時からの敵がここに来て潰せるってんだから、そりや気分も高揚するよ。ただ、それが良いとは僕も思わないけどね』

と、

『で、長束さんと周りの様子を確認したけど、今のところ深海軍はここにいる分だけらしい。逆に言えば、こいつら全員潰せば良い話なんだが』

『ざっと数えたところ、50隻ぐらいはおるんじゃないけえ？ この数を未改造の駆逐艦2人で一掃出来るとは思えん』

そこへ長束も話へと入ってきた。

『まあ、ワシが考えられるのは、ここから逃げ切ることでぐらいなんじゃが……島田くんは他にも考えがあるんじゃない？』

『はい』

島田は長束の意見を肯定し、クラクストンに言う。

『こんだけ艦船が多ければ、近いうちに混乱も生じるだろう。そこでだ』
と、

『それを狙って、君たちには動いてもらいたいと思ってる』

「え…………？」

クラクストンはキョトンと目を丸くして、島田の話聞き続けた。

『深海軍は君たちを狙って来るだろうが、君たちの瞬発力を活かして、相打ちするように誘導するんだ。数が少なくなったら難しくなるだろうけど…………今の状況ならそれを狙って数を減らした方が圧倒的に有利だ』

「…………分かりました。スミスさんと共にやってみます」

『うん、頼むよ…………つと』

島田は何か気が付いたように反応を見せた。

『ごめん、連絡が入ってきた。電話が終わったらまた声掛けるよ』

「はい、分かりました。じゃあ、行ってきますね」

クラクストンは島田との連絡を一旦切り、スミスへと話の矛先を変える。

「と、というわけでスミスさん。まず、Yamatōからの攻撃を避けつつ、ここにいる深海軍たちの混乱を狙いましょう」

「…………え？」

ずっとYamatōといがみ合っていたスミスは、クラクストンのその言葉を聞くなり、キョトンと目を丸くして首を傾げていた。

クラクストンは苦い笑みを一瞬浮かべつつ、深海軍側も準備万端にこちらを囲い終え

た事に気付いた。そうして彼らが Yamato と共に銃口をこちらへと向け始めたところで、急ぎ足でスミスから離れた。

「彼らに相打ちするように誘導してください！ 私から説明できるのはそれだけです！」

「ゆ、誘導?! まあ、私たちの足の速さを利用してことなんでしょうけど……」

当然のことに困惑しているスミスと、詳しく説明してられないクラクストン。お互いそれぞれの行動に出て、四方八方からやってくる砲撃から避け始めた。

50体同時にこそではないが、少なくともその三文の一からの一斉射撃は、クラクストンたち駆逐艦でも避けづらい砲撃量である。クラクストンたちはその一斉射撃から避けるだけでも精一杯であり、島田の言う通りの誘導がなかなか出来ない。

(きつと向こうは弾薬もすっかり補充してここまで来てる……弾薬尽きるのを狙うにしたって、それこそ艦種がバラバラでタイミングが掴めない。司令官様の言う通り、相打ち狙いで良いんだらうけど)

と、クラクストンは Yamato と深海軍の艦船数体からの砲撃を再び避けた。

(これなら、射程が長い戦艦同士から狙った方が早いわね。戦艦さえ潰すことが出来れば怖いものはない！)

そうして、クラクストンは戦艦と戦艦が対極上にいる戦艦同士を探し始めた。そし

て、戦艦の次に砲撃火力がある重巡と戦艦の対極もついでに把握し始めていた。軽巡ぐらいなら駆逐2人の砲撃さえあれば潰せる程度の耐久性であることが多いが、重巡は程よく耐久性もあり、火力もそれなりで、敵に回すと何かと厄介な艦種なのはこの界限の常識だ。つまり、クラクストンはその辺りから潰してやろうと画策しているのである。

クラクストンが砲撃を避けながら、そうして状況を対策していると、

（——来た！）

クラクストンの狙いである戦艦同士の対極が見えてきた。

クラクストンはそこまで勢いよく駆け抜け、そのスピードを強めていく。そんなクラクストンの勢いには砲撃も追い付くことができず、深海軍の弾薬は次々と海の中へと姿を消して行く。

クラクストンは戦艦同士の対極上に立つと、次の砲撃のタイミングを見計らい始めた。

（かなり連続で砲撃してきたし、あと数秒ぐらいは待機出来る……はず。ここでタイミングを間違えたら、私丸ごと海の藻屑になってしまう……！）

クラクストンは周りの砲撃を見た。こちらへと狙いを定めている艦船たちは銃口をこちらに向けて待機しており、更に向こう側に関してはスマスが上手くやりくりしているようだった。スマスはこちらの言った通り、次々と艦船たちを相討ちにさせ、なんと

か潰す事が出来ているようだ。

(スミスさんは私よりも古い駆逐艦ではあるけど、だからこそ立ち回りが上手い……戦争を生き残ってるだけあって流石よね)

クラクストンは自分に無いスミスの能力を羨ましがりつつ、そろそろこちらでも動く時が来たことを察知していた。

戦艦たちの主砲の銃口にはじわじわと力が溜まっているのが分かり、クラクストンは腰を下げて姿勢を低くする。戦艦たちが主砲を引き金を引き、これ以上動くことができないと察した瞬間、クラクストンはその場から離れた。

「ツッ」

そのスピードは目にも止まらぬ速さだった。

戦艦たちが驚いている間にもその主砲はクラクストンでは無く、お互いへと発射される。

「——きゃっ！」

クラクストンの背中から勢いがある爆風が襲いかかり、彼女はそれに流されそうになった。さすがに戦艦同士の砲撃ともなれば威力が強いのは明白ではあるが、こうやって間近にするとうどうにもこうにも圧迫されてしまうというか。

クラクストンは振り返ることなく、その爆風から逃げるように駆け抜けた。

しかし、その先でも深海軍はこちらへと主砲の先を向け、襲い掛かろうとする。

「――！」

クラクストンは彼らが対峙するようにそれぞれの間を割って入ると、同時に砲撃が発射されると同時にそこから再び離れた。そこまでもまた、爆発。

クラクストンとスマスはそのような事を何度も繰り返した。

「にやっ！」

「っ！」

しかし、何度も何度も似たような事を繰り返していると、その精度も低くなっていく。体力があり、新鮮なうちである最初はいいが、後の方になると一気に作業感が強くなり、飽きも生じてくるし、何よりも考えることに疲れも出てくる。

スマスとクラクストンは再び背中を合わせて、数が少なくなってきた深海軍たちへと目を向けた。クラクストンが戦艦をメインに、スマスは数の多いところでひたすら相討ちさせ続けたお陰で、ここにいるのは小型く中型ぐらいの艦船に止まっていた。

ただ、だからと言って油断はできない。

駆逐艦の耐久性と装甲を鑑みても、駆逐艦や軽巡の砲撃でも普通に中・大破まで追い込まれるの確率は非常に高い。

それに――あくまでも、ここにいるのはそれらがメインというだけで、取りこぼして

いる大型の戦艦や巡洋戦艦は疎らになりながらも存在しているのだ。彼らについても処理して、こちらが一発大破するリスクを減らさなければならぬのだ。

スミスは息を上げながら、自分と背中を合わせているクラクストンへ話しかけた。

「クラクストン……まだ行けますか？」

「はい、もちろん。むしろもつと来いって感じですよ」

と言いつつ、クラクストンの息もそれなりに上がっており、とてもではないが余裕とは言える状況ではなかった。残党を狩らなければいけないというのに、この先には Y a m a t o という深海軍の大型戦艦も待ち構えている。

（体力には自信ある方だと思ってたけど、想像してたよりもずつと削れる……やっぱり大雨なのも影響してるのかしら）

深海軍たちにとって悪天候はコンディションが上がるのだろうか、クラクストンやスミスにとってこの天候はコンディションがなかなか下がるものである。

クラクストンたちの様子を眺めていた Y a m a t o は、彼女たちを嘲笑った。

「ククツ……ははっ！ このままでは私に魚雷を撃つ前にお陀仏になりそうだな、駆逐艦」

「こちらまだ傷一つ付いてません！ このまま乗り切ります！」

「そんなに息が上がっている状況なの？」

Yamatotoはクスクスと笑い、クラクストンの言葉と状況が釣り合っていないことを指摘した。

「まあ、いい。そこまで言うのならば——お前たち、やってしまえ」

Yamatotoのその一声で、2人の駆逐艦を囲っている深海軍の艦船たちが一気に彼女たちへと銃口を向ける。

クラクストンとスミスはお互いに背中を合わせて、抜け出すことが難しい状況に激しく動悸していた。緊張が重なり、2人の手にも汗が出始めてくる。

(こっぴなつたら、気合いで逃げ出すしかない……！)

そうしてクラクストンが足に力を入れた時だった。

「ー」

ドオン、という大きな爆発音が向こう側で鳴り響いた。

クラクストンとスミス、それにその場にいた深海軍たちもそちらへと目を向けた。

途端、また、爆発音。

しかもこの音——深海軍たちを主砲で一掃しているようだ。自分たちが処理できなかった深海軍の艦船たちがこの爆発音と共に次々と轟沈していく。

突然の出来事にクラクストンとスミスは困惑していた。

「(、)、これは……！」

(い、一体誰が……?)

クラクストンがハツとなって顔を上げてみると——煙の中からこちらへ出てきたのは、若草色の和服を模した洋服に、色素の薄い髪の毛を持つ女性だった。

女性は巨大な主砲4つを艤装と共にその背に携え、吹き飛びそうな黒い帽子を手で押さえていた。

「クラクストン、スミス。もう大丈夫。みんな来てくれるから心配しなくても良いんですよ」

「……」

クラクストンとスミスはそんな彼女の姿をよく見知っていた。

思いもがけぬ援軍に言葉を失いつつも、ふたりは彼女の名前を口にした。

「有明さん……」

——十三号巡洋戦艦、もとい、有明の登場であった。

有明はスミスとクラクストンに優しく小さく笑みを浮かべるも、彼女たちの目先にいたYamatōへと厳しい視線を向けた。

「Yamatō……あなたが一連の事象の根源、ですか」

「十三号戦艦。まさか本当にお目にかかるとはね。いや、他のYamatōは出会って居るかもしれないのか」

「そんなことはどうでも良いわ」

有明は Y a m a t o の話を戯言だと言わんばかりに、ぶった斬った。

「あなたの所業を聞いて、私はここまで来たの。遠慮はしないわ」

062：仲間とならば

「有明さん……それって、どういう……」

クラクストンは有明の今の言葉を聞いて、目を丸くしながら質問した。有明の今の言い分だと、Yamatōが諸悪の根源であることは特定しており、彼女を滅するためやって来たと言わんばかりの様子だ。

有明はクラクストンに対してクスツと笑みを浮かべ、人差し指を自分の口元に当てる
と、「後でね?」なんて口パクして、クラクストンにウインクした。

そうすると、再びYamatōに目を向けた。

「こちら側に深海側の人間を送り込み侵食を狙うなんて、なんて卑劣なやり方なんでしょう。挙げ句の果てに他人の恋人を横取りするなんて……深海にしたって、少々おいたが過ぎるんじゃないかしら?」

「……全てを知っているようだな、十三号戦艦」

Yamatōは有明の上げたことを否定する事なく、続ける。

「だが、それがお前に何の関係がある? お前が関わったところで、どうにもならないだろう」

「……『お嬢様』が、お怒りであらせられるわ」

有明はスツとYamatotoを見据え、

「そして、非常に悲しんでもいらつしやるのよ。どう足掻いても戦艦少女たちではどうしようもない問題に打ち当たり、改革の為には提督たちに頼るしかない。そんな彼女の辛さ、苦しめる側であるあなたには一生分らないでしょうけど」

「分らないも何も、彼女が苦しむのであれば本望というものと、

「私と彼女は呼び名が一緒なだけの赤の他人ではあるが——だからこそ、彼女にはもつと苦しんでもらわねばならない。私は……いや、『Yamatoto』は彼女が嫌いだからな」

Yamatotoは己の主砲をとうとう有明に向けた。

有明はそれを見て、呆れ混じりに溜息を吐くと、自分たちの後ろで困惑しながらこちらを見ている米駆逐艦2人に対し、言う。

「スマス、クラクストン。あなた達が止めを刺すつもりで動いていたんですね？」

「は、はい」

「彼女は他のYamatotoに比べて、非常に頑丈で、非常に強力です。攻撃を無効化するシールドも持っています。あなた達2人では到底勝ち目はない……ですが」

有明は2人に笑みを向ける。

「『仲間』とならば、きつとそれを突破出来るでしょう。大丈夫です。みんな今日まで乗り越えて来たんですから、倒せませす」

「えっ……それって」

クラクストンとスミスが困惑しているところへ、また、別の声がこちらまで届いて来た。

「クラクストン！ スミス！ 無事だったのね！」

「ジェルジンズスキーさん！ それにみんな！」

そう、ジェルジンズスキーと、舞鶴で世話になっていた應瑞、デンバーがおり、そして——もう1人。

「来てもいいよって言われたから、付いてきただけ……なんだから」

我らが宿敵である、アルベルト・デイ・ジュツサーノが少し恥ずかしげに、ジェルジンズスキーの後ろから姿を現した。

クラクストンは彼女の姿を見て、「まあ」と驚いた様子で目を丸くした。

「ジュツサーノさん……もう大丈夫なんですか？」

「……まあ、デンバー達と話してて落ち着いては来たよ」

と、ジュツサーノはクラクストンに近寄られるなり、若干のけ反りながらそんなこと

を言った。ジュツサーノ自身は普段よりは大人しいものの、先ほどより顔色は悪くはないのと精神状態は見るからに落ち着いてる為、話してるうちに落ち着いたのは本当なのだろう。

それよりも、と、ジュツサーノはYamatōへと目を向けた。

「アイツがアンミラーリオの母親……なの?」

「みたいね。13年以上も生きてるだけあるわ。迫力が他のYamatōと段違いね」

ジェルジンスキーはジュツサーノの隣で苦い笑みを浮かべながら、Yamatōから醸し出される迫力に若干慄いていた。

そして、米駆逐艦2人に声を掛けた。

「クラクストン、スミス。雑魚に関しては私たちに任せておいて」

「ジェルジンスキーさん……本当に良いんですか?」

「應瑞にデンバー、ジュツサーノだって来てくれてるんだし、何よりもこの私がいるのよ。安心しなさい、ここでやられるようなタマはしてないわ」

と、

「これはあの子悪党が島田に喧嘩吹っかけたのが切欠の戦いよ。そして、その子悪党は岸尾の父親が奪われたことで生まれた。だから、あなた達はあなた達の提督の為に、あの大型戦艦擬きに集中しなさい!」

「——はい！」

クラクストンとスミスはジェルジンスキーの指示を聞いて、元気よく頷いた。

「ありがとうございます、倉竹さん……間に合いましたよ」

島田はスマートフォンを耳に当て、電話の向こうにいる倉竹に感謝の言葉を述べていた。

船内からその光景を眺めていた提督たちは、ジェルジンスキーや有明たちと言った味方が来てくれたことにより、緊張が一気に解れたようだった。

ただ一人——ゼヴィンを除いては、その限りではなかった。

ゼヴィンは通話をしている島田を見るなり、その肩をガシツと掴んだ。島田がそれにも動じず、ジツと彼を見つめている中で、ゼヴィンは言う。

「島田くん……コレはどういうことだい？ 救援が来るなんて言っただけじゃないか」

「そこはお互い様だ」

島田はスマートフォンを一旦下ろすと、こちらを掴んでいるゼヴィンの腕を握り締め、無理矢理自分の肩から剥がした。

「まあ、僕に関しては本当に把握してなかった事だし、最初聞いたときはびっくりした

よ。思わぬ援護が来てくれた……ってね」

そう、島田が連絡が来た、と言ったのは、倉竹たちからの連絡のことだった。

彼らのことだからこちらを助けに来るのは想定内の範囲内であったが、近くにまで来ているという連絡を受けた時は言葉通り驚いた。てつきり自分たちはこのままやり過ごすものだと思っていたし、救援も来ないままだと思っていたからだ。

ただ、彼らなら自分たちの行動のルートについては把握していそうだし、こうなるのも当然と言えば当然かもしれない。

我ながら、頼もしい仲間を持ったものだ、と——島田は改めて思う。

だが、目の前の少年は、と、島田はゼヴィンを睨み付けた。

「君は分かっていたのにも関わらず、こちらには何も教えなかっただろう。なのに、こちらに救援が来たら怒るのかい？　あまりにも身勝手過ぎやしないか」

「ぐっ……そりやそうさ。こちらの身にも掛かっていることだからね。不利になりそうなことは徹底的に避けたいと思うのが常だろう？」

「だからこそ、僕は不利になつたぐらいで君みたいな振る舞いはしないよ」と、

「不利になつたら、どう状況を切り抜けるか考えるのが第一だろう？　他人に八つ当たりしたって、状況が改善されるわけじゃない」

続けて、

「んで、君たちが勝つつもりなら、そんな怪訝な表情にはならないとは思うけど……こちら側の陣営が増えたところで、何か都合が悪いことがあるのかい？ どっちにしろの君の母親の方が実力としては優勢なんだし、青筋浮かべてヒイヒイすることの程でもないだろう？」

「……十三号戦艦が居なかったら、ボクは余裕な顔をしていただろうね」

ゼヴィンは島田に言われて、そう返した。島田は今のゼヴィンの言葉に何か引つかかったようで、「？」と首を傾げながら、聞き返した。

「十三号戦艦って……有明さんのことか。彼女、君の母親の所業を知っていたと言っていたが」

「……まあ、君には関係の無いことさ」

ゼヴィンは島田にそう言い捨てて、自分の母親である Y a m a t o へと通じるインカムのスイッチを入れた。

「マーマ？ 砲撃目標に関しては……うん、分かっているようだね。大丈夫だよ……うん」

「……」

（クラクストンや有明さんに連絡入れておいた方が良い、だろうな……）

島田から見て、ゼヴィンと Y a m a t o の動きがあまりにも不穏だった。有明という

大型巡洋戦艦を目の前にして、何か作戦を企ているようにしか見えなかった。

「そうして、島田が一旦外の様子の確認を入れようと、長束へと顔を向けた時だった。ん？」

長束は——こちらの救援に駆け付けてくれた戦艦少女たちを見て、動揺しているようだった。

島田はそんな彼の様子を不思議そうに見つめながら、話しかけた。

「長束さん。どうしましたか？」

「あ……ああ……島田くんか」

長束は島田に話しかけられて我に帰ったようで、そちらへと顔を向けた。

島田は笑みを浮かべて、続ける。

「大丈夫ですよ、彼女たちは僕たちの味方ですから。そんな不安にならなくても」

「あーいや……そうではなくのお」

長束は首を横に振って、とある艦船へと目を向けた。

「えつと……彼女、デンバー、じゃろ？」

「はい、デンバー……？ 彼女のこと気になるんですか？」

島田は長束が目を向けた先にいた軽巡洋艦・デンバーへと目を向けた。デンバーはジェルジンスキーや應瑞、ジュツサーノと共に雑魚の深海軍散らしに尽力していた。

長東は非常に言いづらい様子で、「実は」と、小声で島田に言い放った。

「ワシ、元々横須賀にいたじやろう?」

「はい。さつき聞きましたね」

「……その、ワシが横須賀にいた頃の秘書艦……なんじやよ、彼女」

「えっ」

島田は目を丸くして長東とデンバーを交互に見つめた後、事態が読み込めたようで、その驚きから絶叫した。

「ええええええ——ッ!?!」

「……今、司令官様が大声を上げたような?」

「何言ってるんですか、クラクストン! ほら、いきますよ!」

そんな島田の驚愕の声を耳にしたクラクストンではあったものの、周りにはそんなものは聞こえるはずもなく、スミスに引つ張られて Y a m a t o の元へと近付くように前へと進み始めた。

クラクストンは有明とスミスと共に前へと進みながら、有明へと質問した。

「あの、有明さん……良いですか?」

「ええ、どうぞ」

「その、有明さん、いつからYamatoga……いえ、深海軍が幕の裏にいたことを知っていたのですか？」

と、

「司令官様は今回の件についてはゼヴィンさんが怪しいと見ていて、舞鶴へと着任して来ました。ただ、深海軍そのものが内部に侵食しているのは知らなかったみたいですが」

「……私は、ずーつと前から知ってましたよ」

有明はニコリと小さく笑みを浮かべながら、クラクストンへと続ける。

「昔からずつと囁かれてたんですよ。深海軍側の人間がどこかに入り込んでいて、こちら側を侵食しようとして試みているのではないかって。提督たちにとっての『深淵』は、ずつと昔から存在していると」

と、

「ただ、それが表に出るようになったのは、倉竹さんが着任した後の事です。横須賀所属の提督たちが無理矢理辞めさせられたり、過剰な虐めを受けて辞職したり。みんな、最初は横須賀の治安が悪くなっただけで、数年すれば良くなると思っていたのですが……今に至るまで、それが改善されることはなかったんです」

有明は島田たちがいる船の方向を見て、

「島田さんのように違和感を覚え、それを改善しようとして立ち上がった提督たちは何人もいました。でも、その提督たちは意地汚い人たちに嵌められて、鎮守府を追い出され続けてきました。そして、他の鎮守府の人間はそんな横須賀の内情を知る由もなく、口出しも出来ない」

と、

「そして、大人たちですら耐えられなかったことが、まだ小さな島田さんに降りかかったんです。兵学校で」

「ゼヴィンさんと先生が手を組んで陥れようとしたこと……ですか？」

「はい」

有明はクラクストンの質問に頷き、

「向こう側としては、彼はそこで陥落するはずだった。だって、大人ですら諦めてしまったんですよ？　小さな子供にそれが耐えられるとは思えませんよね。でも……島田さんはそれに耐えてしまったんですよ」

「あー、そこで予定が狂って、深海軍の人たちは今滅茶苦茶焦ってるってことですか。着任に関しては最後の悪足掻きでしたが、染まってなかった倉竹さんが島田さんを採用してしまっただけという」

「そう、その通り」

有明はスミスの解説に頷き、

「向こうも愚かだわ。長くやっていけば、こうやって手段が通用しない人間も出てくるというのに。こちら側の人間だって一筋縄ではないんですよ?」

そして、有明は自分の射程距離圏内に入るなり、自分の前へと目を向けた。

「ねえ、Yamatō。あなただって、本当はこんなこととしてまで、鎮守府を侵食するつもりはなかったのでしょうか?」

「当たり前だ。もっと楽に侵食するつもりだったが、想定外のノイズに妨げられてしまった」

Yamatōは有明の質問にそう返し、こちらに目を向けてくる巡洋戦艦一人と、駆逐艦二人の姿を睨み付けた。

紫色の瞳を輝かせ、彼女は有明に向けて言い放った。

「まず、駆逐艦2人よりもお前を潰すぞ、十三号戦艦」

063：四作戦

「私たちが先に喧嘩売られてたのに、有明さん優先だなんて……よっぽど怖いんでしようか」

なんて言いながら、スミスは有明の後ろでクラクストンと共に待機していた。

巡洋艦といえ大型戦艦である有明と、10年以上の積み重ねがあるYamatooが対峙したことにより、スミスとクラクストンはすっかり蚊帳の外になりかけていた。とはいえ、有明がここに来た以上、これから先彼女に好き勝手させないという意思が見える。そして、有明がこちらと接触を図ったのも、それが目的だと言わざる得ない状況なのだ。

有明はYamatooから言葉を聞き、「そう」と、頷いた。

「なら、私もそれに対応するしかありませんね。本当は、私もこんな事はしたくはないんだけど……この娘たちを守る為。引き受けます」

「クク、それで良い。ここでお前を潰してやる!」

Yamatooは笑いながらそう言うと、自分の主砲の先を有明達の方へと向けた。

「さあ、始めようじゃないか!」

瞬間、Yamatooがその身に装備している全主砲から炎の弾が放たれ、有明に向

かつてそれらが勢いよく駆け抜けた。

有明は間髪入れずにクラクストンとスミスをその腕で引つ張つて水上を走ると、無理矢理その砲撃から避けさせた。

「こつちよー！」

「は、はいっー！」

米駆逐艦二人は黙つてそれについていき、有明に引つ張られるがままに動いていく。三人がどれだけ避けようとも、Yamatōからの砲撃は一切止む事はなく、回避だけが続いて行つた。

一方、有明はタイミングを伺うかのように、チラチラとYamatōへと目を向けていた。そして、その主砲の挙動を見て、彼女なりに分析した。

（あの主砲……かなり無茶苦茶な改造を施しているようね。大型主砲であそこまで連続して撃てる事自体、例外的ではあるんだけど）

有明は自分が装備している主砲と、向こうの主砲を見比べた。

（逆に言えば、彼女の主砲さえどうにかしてしまえば、あとは駆逐艦達に任せても問題ない。相打ち覚悟で私が彼女に攻撃することが出来るのなら……）

有明がそうやって作戦を考えているところで、

「きつー！」

「つあー！」

クラクストンとスミスがギリギリのところ、こちらに向かつてやってくる主砲から避け切った。

有明はそれを見るなり、彼女の中で動揺が走る。

「だ、大丈夫!？」

「へ、平気です！」

「はい、このぐらい大丈夫です！」

スミスとクラクストンは笑顔でそう答える。しかし、彼女達を被弾させたくない有明の額には、冷や汗と言う名の脂汗が浮かんでいた。

(いろいろ考える前に、まずはこの娘たちを本気で守り切らなきゃ……！)

有明は方向性が決まっているのなら、と、そこでタイミングだけ考え始めた。

Yamatōはメインの的に有明を据えつつ、ついでに駆逐艦二人を処理出来れば御の字ぐらいに考えているだろうが——そのYamatōの考えこそが、有明を必死にさせる理由にもなった。

そして、

「2人とも、そつちは危ないわ！」

「えっ、あつ！」

「うおつと!？」

なんてやりとりをしながら、有明は彼女達を上手く砲撃から逃れさせていた。

(私が主砲を撃つためのタイミングは、彼女の砲撃が一度でも止んだ瞬間なんでしょうけど……本当に止むタイミングがない、この雨……!)

あの主砲をここまでの無茶をさせる為にどれだけの改造を施しているのか、有明にとつては非常に興味深くもあり、少し苛立たしい事でもあった。

戦艦にとつて主砲は掛け替えの無い武器の一つであり、大切にしなければならぬのだ。そこに無茶苦茶な改造を加えるのは、主砲の寿命を縮めかねないのである。有明は昔から様々なものを見てきたからこそ知っているが、雑に扱えば扱うほど、主砲の寿命は短くなり、使えなくなる。——ただ、これは主砲に限らない話でもあるが。

スマスは自分たちを必死で守ろうとする有明の後ろ姿をジツと見つめて、何かを決意したらしく、そのまま彼女へと近付いた。

有明はスマスと自分の距離が物理的に縮まったのを感じ取ると、きよとんと首を傾げながらスマスの様子を伺った。

「スマスさん……? どうしましたか?」

「いえ、さつきから見てて思ったんですけど」

と、

「有明さん、多分 Y a m a t o へ攻撃するタイミング伺ってらっしゃいますよね？」

「え、ええ……それがどうしたの？」

「はい、それでちよつとご相談しようと思ひまして」

スミスはニコツと小さく笑みを浮かべて、続ける。

「私が魚雷を放つて隙を作るので、その間に有明さんが向こうを攻撃してくれないかなー、と」

「……それって、あなたを囮にするってことですか？」

「そうとも言いますね」

疑問を隠せない有明の横で、スミスはいつものように無邪気な笑みを浮かべて肯定した。

有明はそれを見て聞いた瞬間、首を横に振った。

「ダメです。そんな危険なこと、あなたにはやらせられません。もし、それでスミスさんに何かあつたら、私、岸尾さんと合わせる顔が無いですよ？」

「別に良いじゃないですか。深海軍からの攻撃なら、私たちは轟沈しないんですから。それに、司令だつてこのぐらい覚悟の上で私を送り出してははずです」

と、

「Y a m a t o を前にして無傷で、なんて、そんな都合の良いこと考えていないでしょ

う。むしろ、ここまでのらりくらりとかわせてたのが奇跡です」

「あの、スミスさん……私は何もしなくても良いんですか？」

そこへ、2人の話を聞いていたクラクストンが、間に割って入るように声をかけた。

「2人ばかり頑張つて、私だけ何もしいなんてそんな……」

「……あなたは最後の最後までとつておく。つまり、Yamatōへのトドメをクラクストンに任せたいんですよ、私」

自分も何かしたい、と言い出したクラクストンに対し、スミスは首を横に振つた。

「島田さんがいなかったら、私たちはゼヴィン提督に何も出来なかったと思いますよ。司令だつて提督業をあのまま辞めていただろうし、私たちだけではここまで来れることはなかった。そんな島田さんの秘書艦……いえ、奥さんに敬意を払うのは当然ですよ」

「でも、それを言い出したら私と司令官様だつて、岸尾さんとスミスさんがいなかったら、ここまで来れなかったのに……」

「うーん、そういうことじゃなくて」

スミスは続け、

「司令、島田さんに関わつて気付けたことが沢山あると思うんです。あの、佐世保じゃロクに友人作らないで独りで頑張つてきてましたから。もし、島田さんが関わつて来なかつたら、こんな風になることはなかったと思います」

「スミスさん……」

「確かにあの Yamato に対して恨み辛みはありますが、それだけじゃどうにもなりませんね。それに、今後私たちを先導するのはあなたたち2人でしようから」
「本当に……良いんでしょうか」

クラクストンは遠慮がちに有明へと目を向けた。

有明は「やれやれ」と苦笑しながら溜息を吐いてから、小さく笑みを浮かべた。

「スミスさんがそこまで言うのなら、仕方ありませんね。確かにここでトドメを刺すならば、クラクストンさんが一番向いてると思います。私はトドメを刺せなくても、彼女の主砲を破壊さえ出来れば良いと思ってるので」

「そうですね。あの連続砲撃できる主砲は先になんとかしないと」

スミスは有明の言葉に頷き、

「じゃあ、私はオトリやってきますね。アイツに魚雷かましてきます！」

「はい……お願いします」

有明はスミスのことがどうしても心配だったようで、最後まで気が浮かない様子ではあったが、早く終わらせるにはそれしかない、彼女と繋いでいた手を離れた。

スミスはそこへと居残り、有明とクラクストンがこちらから離れるのを見送った。そして、改めて Yamato へと視線を向ける。

途端、Yamotoはスミスが有明たちと別行動を取り始めたことに気が付いたらしく、こちらへと注意を向けてきた。

「駆逐艦。十三号戦艦について行かなくても良いのか。それとも、彼女の代わりに私の相手になろうもども？」

「まあ、それはそれで間違つてはいいですねー。私があなたに勝つ為には……『コレ』しかありませんが」

そう言うのと、スミスは艀装の下の方つけられている四連装魚雷を手にして、それをYamotoへと見せつけた。

「あなたもなんだかんだで、コレが一番怖いですよ。潜水艦の魚雷で簡単に沈む敵もとても多いですよ」

「ほう……本当にそれを私に放つとでも？」

「さつきからそう言ってるじゃないですかー。まあ、その装甲だと一回ぶつ放した程度じゃ倒れないのもお察ししますが」

「魚雷一本で沈むようなら、今日まで深海軍の戦艦としてやっていないからな。当然だろっ。」

「そこまで言ってくれるなら、やりますよー！」

(……なんて、本当は魚雷でのダメージなんてどうでもいい)

スミスは少し離れた場所にいる有明へと、チラリと視線を向けた。

有明は準備万端だと言わんばかりに、主砲の先をYamatohへと向けて、スミスに向けて頷いた。スミスはその有明の返事を確認し、魚雷を一本一本外し、手にした。

(有明さん——お願いします！)

「じゃっ、ぶっ放してあげますよ——！ 魚の餌になっちゃえ——！」

スミスは魚雷を手から離して、海へと放出。魚雷は真つ直ぐにYamatohの元へと向かう。

Yamatohはニヤツと笑みを浮かべて、スミスの魚雷を避けようと動き出し——目標をスミスへと定めた。

「この程度の魚雷、避けられるぞ。よっぼど沈みたいようだな！」

(——来た！)

スミスは狙い通りにYamatohが動いてくれたことに笑みを浮かべて、有明に大声を放った。

「今ですつ、有明さん！ 砲撃用意——ッ！」

「なっ!?!」

Yamatohはスミスの声に驚いて、思わず有明を見た。有明はすでに照準をYamatohに定めて攻撃態勢に入っていた。

Yamatōは有明もミスもどちらも攻撃してやろうと、艤装につけている主砲の先をそれぞれ2人へと向けて、こちらも反撃の準備へと入った。

「くっ、戦艦少女如きが舐めた真似を——ッ！」

「つてえええええ——ッ！」

そして、辺りは砲撃による爆発と煙で包まれた。

少し離れたところにいたクラクストンは、その光景を動揺しながら見つめていた。ミスも有明が同時にYamatōの主砲に巻き込まれ、自分だけこうして巻き込まれずに残っている——深海軍からの攻撃では沈まないように調整されていると分かっていても、クラクストンは気がでなかった。いや、ここまで大きな攻撃を見て、冷静でいろうという方がおかしいだろう。

クラクストンは2人に致命傷が無いのを祈りながら、煙が晴れるのを待っていた。

そして、この光景に動揺が走ったのはクラクストンだけではなく、船内にいる提督チームもそうだった。

島田、長束は自分の秘書艦が被害に遭っていない以上、ただ見守ることしか出来ないことが分かっており、動揺自体は然程のものではなかったが——島田の隣にいた岸尾と、彼らから離れたところから眺めていたゼヴィンに関しては、ただ事では無いと言っ

た様子で、その顔から動揺が垣間見えていた。

提督だの深海軍側の人間だの言われても、彼らもまだ15にも満たない少年だ。今回のことは、本来ならトラウマと同等のレベルであろう。

島田は自分の左隣で動揺している岸尾の右肩に、ポン、と自分の左手を置いた。岸尾はそれに反応し、島田へと顔を向けた。

「島田司令……」

「……大丈夫だよ。どんな強い砲撃を浴びても、一回だけじゃ轟沈しない」

「でも……オレは……」

「気持ちに分かるよ」

島田は岸尾の不安を否定することなく、同意した。

「僕も初出撃の時にクラクストンが大破した時は、冷静でいられなかったからさ。でも、だからこそ、落ち着いて見守らなきゃいけないって思った」

と、

「確かに僕たちは直接戦えないけど、大破して帰ってきた彼女たちの居場所は僕たちには用意出来ないんだよ。そこで君が動揺したら、スミスだって困っちゃうよ」

「……ごめん、島田司令。オレ、ここまで動揺するのが初めてで」

「うん。でも、今まではそれだけ気持ち的に余裕が無かったってことだね。良いんだよ、

好きな娘が大破して動揺するのは普通のことなんだし、そんな自分の気持ちは否定しないであげて」

「……ありがとう」

岸尾としても、ミスが大破に追い込まれてしまう場面に直面し、ここまで心が揺さぶられるのは今回が初めてだった。それほどまでに、今回の敵は岸尾にとつても大きいということだろう。

島田たちはただ、彼女たちの無事を船内から祈るしかなかった。

064：魚雷に全てを託して

——しばらくして、煙が晴れてきた。

雷が鳴り響き、雨が吹き荒れるようにこちらに打ち付ける中で、クラクストンたちは目を凝らして彼女たちの無事を確認した。

「いったた……やっぱり戦艦の砲撃は当たるとダメですね」

まず、先に姿が見えたのはスミスだった。スミスは煤だらけになり服はボロボロではあるものの、ステータス上ではなんとか中破に止まっているようだ。

クラクストンは彼女の姿を見るなり、真つ先にそちらへと向かった。

「スミスさん！ 大丈夫ですか!？」

「ク、クラクストン……とりあえず、役目は果たすだけ果たしましたよ。でも、一番心配なのは有明さんです」

スミスはそう言うとかラクストンと共に有明がいるであろう方向を見た。

そうして、有明の姿が見えてきたのはそう遠くないタイミングだった。その姿を見た米駆逐艦2人は、思わず驚いて声を上げた。

「あ、有明さん!」

「う……慣れてないことはするもんじゃないですね……」

流石の有明も Yamato からの激しい砲撃の威力を抑えられなかったようで、巨大な艦装共々しつかりと被弾し、中破へと陥っていた。有明はなんとか立ち上がりつつも、どこか痛みが走るようで、表情が思わしくなかった。

スミスと有明がこうしてしつかり被弾した以上、彼女たちに対して砲撃戦・雷撃戦の威力は望めない状態になってしまった。

——そして、肝心の Yamato といえば、

「くく……ハハ……これで十三号戦艦の砲撃も使えなくなつたな！」

そんな風に声を上げながら、晴れた煙の中から出てきた。

そこでは肝心の艦装にダメージが入っている様子もなく、スミスは驚愕の声を上げた。

「そんなあ！ 有明さんのあのデツカイ砲撃受けても無事とかおかしいでしょ！」

「す、すみません……私が至らないばかりに」

「おかしいのは向こうなんだから、有明さんに非はないです！ でも……」

（アレ受けて無事なんて、本当に倒す術ないんじゃないの……!?!）

スミスは目の前に映し出されている光景とその事実、酷く動揺していた。

有明の主砲は他の戦艦に比べても非常に巨大で、そこから発せられる威力も普通の艦

船なら一溜りがないものになるのは、その大きさから察させられるほどだ。それこそ、スミスみたいな駆逐艦たちは避けることでしか無事でいられる術はない。

だが、目の前にいるこのYamatōは、その砲撃を受けても尚、中破どころか小破している様子も見えない。こんな、驚くなどという方が無理だ。

そして、Yamatōの次の狙いは——この場において、1人残されたクラクストンだった。

Yamatōは無傷のままそこに立っているクラクストンへと視線を向け、その主砲を輝かせた。

クラクストンは自分が狙いに定められたことにより、彼女への警戒を更に強めた。

「駆逐艦——覚悟しろ！」

「——ッ！」

Yamatōの砲撃は即発射され、尋常では無いスピードでクラクストンへと駆け抜けてくる。クラクストンはそれを避けようと、足についているプロペラを最大全力で回し、そのまま水上を駆け抜けた。

しかし、Yamatōの放った砲弾はクラクストンを追尾していると言わんばかりに軌道を変え、クラクストンは目を丸くしてそれを見た。

「嘘ッ……！」

(このままじゃ……!)

岩陰も無ければ、盾になるものもない戦場で、クラクストンは額に青筋を浮かべて動揺していた。

この数秒間、クラクストンは何もかもゆっくり見えた。

轟沈しないと言えども、自分が役に立てなくなるまであと数秒。運が悪ければ、一髪で大破することがある自分の耐久値。

(……)まで来て、逃げることにすら出来ないなんて——!)

だが、そんなクラクストンを引つ張り、身を挺してYamatōの砲弾から彼女を守った軽巡洋艦が一人、いた。

クラクストンは最初その姿を見た時、非常に驚いた。

彼女は駆逐艦なんて嫌い、なんて言っていた。そして、駆逐艦を狩ることが好きだと
言っていた。

そんな彼女が——ジュツサーノが、クラクストンを庇って、中破まで追い込まれたのだ。

「ッ……!」

「じ、ジュツサーノさんっ!」

ジュツサーノはYamatōを睨み付けて、そこから視線を外す事はなかった。

ジュツサーノは呆然としているクラクストンに向けて、言い放った。

「勘違いしないでよ！ コイツを倒すことが出来れば、私がアンミラーリオに協力して
た事についてチャラになるかもしれないってだけだよ！ ほら、早く！」

「……ありがとうございます！」

クラクストンはジュツサーノに背中を押されて、射程距離圏内へと向かい始めた。ミスが射程距離圏外だというのにさつき魚雷を撃つたのは、あくまでも Y a m a t o に当てるつもりなく、単純に向こうの注意を引くためでしかない。魚雷を確実な威力で当てたければ、自分の射程距離圏内に向かうしかないのだ。

しかし、Y a m a t o はそれを阻止せんとばかりに、クラクストンに向かって砲撃を撃ち続けた。

「十三号戦艦も使えない状態で、無謀な真似を！」

「ッ！」

（また！）

今度は真正面から砲撃が降ってきた。

クラクストンの足ではその砲撃を避けることが間に合わず、今度こそ——と思ったが。

「こっち、よ！」

非常に聴き慣れた声が聞こえてきたと同時に、クラクストンの体が横へと押され、飛ばされた。クラクストンはその勢いのままに転んでしまうものの、その声にまさか、と、視線を向けた。

「いったた……あ、クラクストン……。私は大丈夫よ」

「……ジェルジンスキーさん！」

金髪の髪の毛を靡かせながら、次にクラクストンの身を挺して庇ったのは、ジェルジンスキーだった。

ジェルジンスキーは中破してボロボロになった自分の身を抱えるようにしやがみつ、クラクストンに言う。

「ほら、行つて！ 本当なら私がトドメを刺してやりたいけど、何もかも引き受けてきた『アンタたち』でやらなきゃ！」

「……すみません！ 礼は必ずッ！」

クラクストンはジェルジンスキーに礼をして、再び前へと進み始めた。

Yamatoは色んな戦艦少女に庇われているクラクストンを見て、ギリツと歯を軋ませた。

「一体……一体、お前の何が、アイツらをそこまでにさせると言うのだッ！」

そして、クラクストンに向けて乱れ撃ち。

クラクストンはそれで道を失いそうになったが、なんとか瞬時に頭の中で道筋を立てて、その通りに足を進めた。

——その瞬間。

デンバーがこちらへと駆け抜けてきた。

「——デンバーさん!?!」

「安心しろ、君を守るっ!」

デンバーは彼女の近くまで近寄れば、クラクストンの背中と太腿を持ち、その場でお姫様抱っこしたかと思えば——自分への被弾を省みる事なく、前へと進み続けた。

「ど、どうして!?!」

「騎士ならば目的を果たせと——司令からの教えがあるッ!」

そして、デンバーに大きな一撃が向かい、

「ッ、う!」

——彼女は、そのまま大破した。

彼女の耐久値ならば中破で留まるはずだったが、被弾を省みなかつたせいで、非常に脆くなっていたようだ。

「デンバーさん!」

「す、すまない……私はここまでのようだ」

デンバーはその場でしゃがみ込み、クラクストンを水上へと下ろした。

「行つて、クラクストン。あなたなら……アイツに一矢報いる事が出来る」

「……はい！」

クラクストンは頷いて、その場を後にした。

デンバーが必死で自分を運んでくれたお陰で、射程距離圏内へと刻々と近付いていた。Yamatōからの砲撃もなんとか避けきり、ここまで来たらあとは魚雷を放つだけだと——クラクストンは五連装魚雷を海に放出する準備をしていた。

しかし、Yamatōはクラクストンを射程圏内へと近付けないように、必死に悪足掻きをしていた。クラクストンがあと一步のところまで、海へと次々と砲撃を放ち、弾幕を張つたのである。

「ッー」

その勢いで海水が勢いよく飛び跳ね、クラクストンの方まで大きく飛び散つた。

クラクストンが姿勢がよろけて、上手く動けなくなった瞬間、

「——あつー！」

クラクストンに向けてYamatōの砲撃が降り注いできた。クラクストンはそこからなんとか抜け出そうと前に進むが、行手行手を塞がれてしまい、そこから前進する事が出来なかつた。

(なんとか隙を見つけて……)

クラクストンがそうしてなんとか抜け道を模索した瞬間、

「終われ、駆逐艦ッ！」

Yamatōはそう叫び、クラクストンに向けて複数の砲弾を集中砲火した。

その砲撃はクラクストンの行手を遮るだけではなく、彼女の身を潰すために降り注いできた。クラクストンはこうなったら意地でも前に進んでやろうと、その集中砲火から逃げるように足を早めたが、

「——ッ！」

(っ、間に合わない……！)

全てを避け切る事が出来ない。ここで一撃でも当たったら大破はほぼ確実だ。

——そして、爆発が起こった。

Yamatōは、大方、クラクストンに直撃したのであろうと笑いを浮かべていた。

「……クク、随分とあっさりした終わり方だったな」

(我々の勝利はほぼ確実だ……我が息子も、これで横須賀に居ることが——)

しかし、Yamatōはその煙が晴れた瞬間、目を丸くして彼女を、いや、「彼女たち」を見ていた。

煙が消え、Yamatōの目に映ったのは、清時代の民族衣装を模した浅黄色の服を

着た小柄な少女と、その後ろについているクラクストンであった。

クラクストンは目の前で自分を庇った少女、いや、應瑞を見つめ、声を上げた。

「お、應瑞さん！　なんで!？」

「ふふ、間に合つてよかつた……」

應瑞はすっかり大破しきつた姿ではあつたが、クラクストンの無事を確認して小さく笑みを浮かべた。

「應瑞は足が遅くて駆逐艦ぐらいの性能しかありませんが、あなたの盾になり、引導を渡すことぐらい出来ます」

「そ、そんな……どうして、みんなそんな無茶を！」

「決まつてるじゃないですか」

應瑞はニコツと笑み浮かべ、

「みんな、クラクストンさんに期待してるんです。島田さんと共に足掻き続けてきたのは、みんなそうですけど……島田さんをずっと間近で支えてきたのはあなたですから」

「應瑞、さん……」

「だから、進んで。私たちは見守ることしか出来ません。でも、あなたを信じてます」

「……ありがとうございます。行きます！」

クラクストンは應瑞の言葉をバネにして、そのまま射程圏内距離へと入っていった。

クラクストンは、自分の艤装に装着されている魚雷五つ全てを手にして、海への投下のタイミングを見ていた。ここまで来たら魚雷全て放つて、Yamotoを轟沈させる——クラクストンの狙いはそれしかない。

しかし、Yamotoはそれでもクラクストンへ主砲を向けることはやめなかった。

「駆逐艦め……雑魚のくせに！　そこまで来たのなら、再起不能にしてやる！」

「……！」

（間近に来ると本当に気圧される……！）

クラクストンは額に汗を流しながら、向こうから放たれるプレツシャーに心臓の鼓動が速くなる。彼女を敵に回して、どれだけの戦艦少女がやられていったのか——考えたくはなかった。

そんなクラクストンの緊張を裂くように、インカムから島田の声が響いた。

『クラクストン、大丈夫だ！　アイツのプレツシャーなんかハツタリでしかない！』

「……司令官様！」

彼の声を聞いた瞬間、不思議と鼓動の動きが一気に落ち着いた。

『いけ、クラクストン！　今の君に不可能はないッ！』

「——！」

（そうよ……今の私は司令官様と誓約が完了した戦艦少女）

クラクストンは一旦目を閉じたかと思えば、ゆっくりと開き、魚雷を手にしている腕を下から振りかぶった。

「私は——この一撃で、全てを終わらせるッ！」

「終わるのは貴様だ、駆逐艦ッ！」

そして、クラクストンの魚雷とYamatōの砲撃がクラクストンへ向かったのは同時だった。

魚雷はクラクストンたちの気持ちを載せていると言わんばかりに、これまででない尋常な速さで海の中を駆け抜け、Yamatō一直線へと真っ直ぐに向かう。

島田とクラクストンは、その場で同時に叫ぶ。

『いっけええええええ——ッ！』

「当たってええええええ——ッ！」

——そして、クラクストンの魚雷とYamatōの砲撃はそれぞれの身に大きく当たり、その場で大きな爆発を起こしてみせた。

その周りにいた戦艦少女たちは、その煙を体内に取り込まないように口を塞いで咳き込み、目を閉じて角膜への侵入も防いだ。

船内にいたゼヴィン以外の提督たちも、その光景を手に汗を握る心境で見守り、クラクストンの勝利とYamatōの轟沈を祈った。

特に島田はこれで全てが終わって欲しいと——そう強く願い、その戦況を見守っていた。インカムから聞こえてくるのは砂煙の音のみ。決着が付くこの数秒間、非常に緊張していた。

065：終焉の日差し

先に聞こえてきたのは、Yamatōの断末魔だった。

「ぐっ、あ……ああ……ああ……あああッ！」

その声が聞こえてきた瞬間、彼女のいる方向から何度も何度も爆発が繰り返され、尋常でない勢いで燃え上がっているのが肉眼でも確認出来た。

それを距離を取ったところから眺めていたスミスはそれを見て呆然としつつ、隣にいる有明に話しかけた。

「あの爆発……クラクストンだけがやったんですよね？」

「んー、ちよつと待つてね」

有明は常時携帯しているオペラグラスを目に当てて、Yamatōが轟沈していく様子を確認した。オペラグラスで確認しても煙に包まれて見え辛いけど、それでも有明の目ならば分かることが多いのだろう。

有明はYamatōを観察しながら、語る。

「そうね。クラクストンさんはあくまでも、彼女にトドメを刺しただけ。私の砲撃は彼女の装備にしっかり通ってたみたいですよ」

「えっ、でも……あんなにガンガンかつ飛ばしてたじゃないですか」

「別に攻撃が通つても多少のヒビぐらいなら、稼働は可能なんですよ」

有明はオペラグラスを自分の目元から外して、続ける。

「見たところ、私の攻撃で主砲に亀裂が走ったところにクラクストンさんの魚雷が当たって誘爆。そのまま弱つてるところから次々と……つて感じでしょうか」

「つてことは……」

スミスが改めて Y a m a t o へと目を向けた瞬間、Y a m a t o が有明に向けて低く言い放った。

「貴、様……まさか、これを分かっている……!」

「最初、あなたが私の砲撃を浴びても尚、平気だったことにはビックリしましたよ。でも」

有明は顔を上げ、笑顔で言う。

「ちゃんと私の作戦は成功し、あなたはここで滅びることになった。もう少し幼い Y a m a t o だったら手加減しましたが——『深淵』に近くなっているあなたに、遠慮する必要は無いと判断した結果これです。これで、提督である彼らも、その秘書艦であるこの娘たちも、溜飲が下がるでしょう」

有明は辺りにいる戦艦少女をぐるりと見渡し、最後にクラクストンがいるであろう方

向を見た。

そうして、煙の中から出てきたクラクストンは、見事に大破に追い込まれて、太腿や下着、その他諸々が露わになっており、傷だらけではあるが、なんとかYamotoの一撃を耐え切っていた。

Yamotoは轟沈していく様子を戦艦少女に見守られながら、最後に言葉を吐いた。

「ぐつ、う……よく、覚えておきなさい。お前たちを侵食しているのは私だけではない。私を倒した程度で、ぬか喜び……しないことだな！」

「……重々承知の上です」

島田たちの話を聞いていたクラクストンは、コク、と頷くだけ頷き、それ以上反応はしなかった。

クラクストンは自分の目の前でYamotoが海の中へと沈んでいく様子を見つめながら、インカムの向こう側にいる島田へと話しかけた。

「司令官様……終わりましたよ」

クラクストンは小降りになった雨を手で感じながら、青い空が見えている空を見上げた。

「ふふ、そろそろ晴れそうですね」

「……ああ、日差しが見えてきたね」

島田はクラクストンの言葉に、窓越しに空を見ながらそう答えた。黒い雲がゆつくりと消えていき、そこから眩しい光が差し込み始めていた。

Yamatōが轟沈していくのを見ながら、長束、岸尾、そして島田の3人は笑みを浮かべ、勝利を確信していた。岸尾が生まれる前から始まっていたものが、14年後にやっと終わったのだ。

特に岸尾の喜びに関しては溜飲が下がるどころではないだろう。父を奪った張本人が、今、ここで、生の幕を閉じていくのだから。

島田は自分の横で目の前の光景を眺めている岸尾を見て、小さく笑みを浮かべた。

（良かった。一件落着とまでは行かないだろうけど、岸尾くんの気持ちもこれで落ち着くかな）

彼にはまだまだやるべきことや受けるべき罰はあるが、Yamatō轟沈に加担したことである程度は軽くなるだろうと島田は見ていた。

そして——問題は最大の子悪党・ゼヴィンである。

ゼヴィンは少し離れたところで戦闘光景を眺めていたが、自分の母親が沈んでいく様子を見て、酷く動揺していた。体が震えて全身に力が入らないのか、その場でしゃがみ

込んでいた。

島田はここから先はクラクストンには聞かせられないとインカムを外し、一旦長束へと預けた。そうして、ゼヴィンの元へと向かう。

ゼヴィンは島田が自分の所へやって来るなり、そちらへと顔を向けた。

「島田、くん……そうだ、島田くん！」

ゼヴィンはすぐに立ち上がって、動揺を隠せないまま彼へと詰め寄った。

「君なら、ボクの処分を軽くする事も出来るだろう?! 簡単だよ、ボクに虐められてなかった、つて言えば良いんだから! ねえ、そうでしょう!」

「——甘えるな」

島田はそう言うのと、こちらに詰め寄る彼の頬に自分の拳を当てて——彼を勢いよく殴った。

長束と岸尾は、島田が他人を殴るといふ行為をした事自体に酷く驚いたようで、目を丸くし、ただ呆然と、その様子を見ていた。

一方、ゼヴィンは殴られた瞬間に姿勢を崩し、尻餅をついていた。殴られた方の手を片手で冷やすように抑え、島田を睨み付けた。

「島田くん……君はあくまでも、ボクには情けは掛けないつもりか」

「当たり前だ。お前のせいだ、どれだけの人に迷惑掛かっているんだ」

と、

「まあ、僕は約束通り君を殴ったんで、これ以上そちらに追及するつもりは無いさ。証言に立つ時の手を明かしたくないからね」

「まさか……ボクを軍法会議まで持つていくつもりなのか。日本の憲法じゃまだボクを裁けないのに」

「例え裁けなくても、君の悪事がどれだけのものかで罰の裁量は決まる。戦いの最後まで深海軍側についていた目撃者たちがここにいる以上、君の勝ち目は無いよ」

そう言つて、島田は長束と岸尾へと視線を配つた。そうすると、長束と岸尾はそれぞれ島田の両隣にザツと立ち、ゼヴィンを睨み付けるように見る。

ゼヴィンは島田たちの表情、今の自分に味方がいない状況を鑑みて、そのまま体から力抜けて、その場で崩れた。

島田はゼヴィンがやつと今の立場を把握したことに、軽く溜息を吐きながら、クラクストンたちの帰りを待った。

クラクストンたちが船内へと帰つてきたのはそれから10分後ぐらいの事だろうか。ジェルジンスキーやデンバーといった面々が、クラクストンとスミスをこちらまで送つてきてくれたのである。

クラクストンは島田の姿を見るなり、すぐにそちらへと駆け込んだ。

「司令官様っ！」

そして、島田を抱き締める。

ボロボロになりながらもここに帰ってきてくれたクラクストンを、島田はそつと抱き締めた。

「……ありがとう、帰ってきてくれて」

「司令官様……」

クラクストンはずつと心細かったことや、緊張の糸が解けたのもあって、島田の胸元でわんわんと泣き始めた。

(クラクストン……本当にありがとう)

これで終わりじゃないのは、島田もクラクストンもよく分かっていた。ゼヴィンのこととは内部の侵食具合が表沙汰になる切欠でしかない。でも、今は目の前の大きな役割を終えて、気持ちを休ませて欲しいと、島田はそう思えた。

ふと、島田は、他のメンバーはどんなものかと、岸尾や長束を見た。

岸尾は普段と変わらない様子でミスとやりとりしている。仇は打てたとはいえ、今後処分が確定している二人であり、素直に喜ぶのはまだ早い、といった様子だ。根っからの深海軍側ではないことだし、処分も軽く済めばいい、お父さんの行方も判明すれば

いいね、なんて思いながら——島田は問題のデンバーと長束へと目を向けた。

デンバーは長束に近寄ると、元々目つきが良くない赤い瞳で、彼を睨み付けた。長束はそれに圧迫されているようで、少し仰け反っている。

デンバーは彼の顔を覗き込みながら、言い放った。

「司令。連絡繋がらないと思つたら……なんなの、その制服。イタリアの軍港に所属変えてたなんて、私、聞いてない」

「いや、だって……兄ちゃんが他には教えるな言うとなつたけえ。ただでさえ提督認可証剥奪されてクビになったのに、イタリアで認可証また与えられて着任なんて……こんな外部に漏らしたらとんでもないことになるじやろ」

「……そうじゃなくて」

デンバーは首を横に振り、

「せめて……普通に連絡だけでもして欲しかった。連絡手段すら一切断つなんて、あんまりだ。確かに、今の横須賀がそれだけ信頼出来ないのはとてもよく分かるけど」

「まあ、それは本当に申し訳なく思ってるが、トップである兄ちゃんの意向には逆らえんよ。兄ちゃん、前に何があつたらしくて、横須賀をめちゃくちゃ嫌つとるようじやしのお。ワシ以上じゃないかのお、あの人の嫌悪感は」

と、長束は説明し、

「ま、ワシも暫く横須賀におるけえ。その間に兄ちゃんにいろいろ説明して、デンバーをナポリの軍港に連れて行つたる。今回の Yamato 潰しに加勢したつて説明すれば、兄ちゃんだつて信頼してくれるじやろう」

「そ、そういうこととかよりも……」

デンバーは首を横に振り、続ける。

「司令は私のことどう思ってるのか、気になつてた。ここ数ヶ月、ずっとあなたから連絡来なくてそれが不安だったの」

「デンバー……」

「今すぐに答えは聞かないけど、私をナポリに連れていくんだつたら、そつちの気持ちぐらい聞かせて。じゃなきや、私の心が納得しないから」

「……分かつたよ。まあ、今は再会したばかりで気持ちが落ち着かないんじやろう。ゆっくり休んだ方が良い」

長束は今すぐ答えは出せないようで、デンバーの背中をポンと叩いてそう促した。デューンバーは長束にいろいろ問ひ質したい・聞きたい様子で見えていたが、長束の言葉には逆らえず、そこから先は黙っていた。

それから、ジェルジンスキーは倉竹たちがいる船の方へと帰って行き、デンバーも少し考えたいからと、ジェルジンスキーについて行った。

そうして船内が落ち着いた後、長束は船の運転へと戻り、島田たちもその場でリラックスした。

島田は溜息を吐きつつ、緊張の糸がやつと解けたのか、自分の左隣にいるクラクストンへと寄り掛かった。

クラクストンはそれにびっくりしたらしく、目を丸くして彼を見た。

「し、司令官様……？」

「別に良いだろう？　僕だって君の肩借りたい時あるよ」

「あ、いえ……えっと、はい……そ、そうですね」

クラクストンは今までの彼からは見当も付かない行動に、顔を真っ赤にしながら頷いた。

今まではこちらと誓約しても、適度に距離を取ってきた彼ではあったが——記憶が戻ってきたことにより、その距離が一気に縮まったように思える。

クラクストンがそうやって顔を真っ赤にしている間にも、島田から規則正しい寝息が聞こえてきた。

「あ……」

（寝ちゃった……？）

クラクストンが彼の顔を覗き込むと、島田はしっかりと目を閉じて、夢の中へと入っ

ていつているようだった。

クラクストンはクスクスと小さく苦い笑みを浮かべつつも、今日の事を思い返したら、ここで寝てしまうのも無理はない、と、彼の癖つ毛の髪の毛をそつと撫でた。

(司令官様の髪、相変わらずボサボサ……でも、嫌いじゃない)

島田がこうして甘えてきているのだから、ここは敢えて起こさないでおこうと、クラクストンは彼を自分の肩から離すことはなかった。

—— 思えば、ここまで長かった。

クラクストンはあの日からずっと、彼だけを想い、ここまでやってきた。7年近いその歳月は、まだ完全な大人ではないクラクストンにとって非常に長いと感じたし、今でも長かったなあ、と感じている。

もし、あの時、倉竹が自分を連れて来なければ。

もし、あの時、自分が島田と約束していなければ。

きつと、こうやってお互い隣にいられることはなかったであろう。

クラクストンは島田の長い前髪をそつと指で掻き上げて、彼の寝顔をジツと見つめた。

(凜々しくて、ソツがない、綺麗な顔……もし、私以外の誰かが秘書艦になったら、司令官様を奪われてたのかしら)

しかし、それでも島田はクラクストンを選ぶだろう。

7年前のことはどんなに記憶を消されても、彼の奥底にずっと住み込み、島田のことを奮い立たせていた。そのことが本能的に分かっている彼であれば、他の戦艦少女にはきつと目もくれない。

……これは今だからこそ、そうやって思えるわけだが。

寝ている彼に届くかどうかは分からないが、クラクストンはそつと呟いた。

「大好きですよ、司令官様」

クラクストンはそれだけ言うと、そのまま彼の方へと寄りかかって目を閉じた。

まだ——これから自分たちに困難は待ち受けているが、きつと彼となら乗り越えていく。

そう信じて、クラクストンも夢の中へと落ちて行つた。

066：僕たちのこれから

あの日、島田とクラクストンは自分たちの指のサイズに合わない指輪を左手の薬指に嵌め、「また会った時には、一緒に」と、約束を交わした。

島田はその約束を胸にし、その冬に控えていた兵学校の試験になんとか受かり、入学式を迎えた。

けれども、島田はその時にゼヴィンとその取り巻きである講師たちの手により、指輪を奪われ、記憶喪失へと陥った。島田自身、その時のことは今でもほんのりと思い出すことが出来ず、深く思い出そうとすると脳が拒否してしまう。指輪を奪われる際、自分が酷く抵抗し、そんな様子をゼヴィンが嘲笑いながら見ていたのは思い出せている。ただ、当時の講師の顔については全く思い出せなかった。これで思い出すことが出来れば、ゼヴィンたち深海軍に手を貸したとして、制裁を受けてもらうことが出来たのだが——でも、調べれば分かることだろうから、無理に思い出す必要はない。

一方で、ずっと記憶の奥深くに潜んでいるクラクストンは、島田を支えていた。

彼女のことを一切思い出せなくとも、その影響は島田の本能へと深く深く残っている。彼女と過ごした1ヶ月間はそれほど濃密で、とつても甘かった。この1ヶ月間が無

ければ、島田はここまで奮い立つ事が出来なかつただろう。

たまにふとした瞬間にぼんやりと思ひ出される可愛らしい少女の声は、クラクストンだった。不安な時には彼女の声が脳裏に巡り、島田を奮い立たせていた。

そして、これからは——そんな彼女が島田の隣にいてくれる。

Yamatō 撃破から一週間後、島田とクラクストンは横須賀鎮守府の借りていた宿舎の一室にて、岩国と話していた。部屋の中には必要な生活用品以外は何も残っており、余計なものは処分済み。これは2人がこれから横須賀を本格的に去ってしまうことを示していた。

岩国はそんなすつきりとした部屋をキョロキョロと見渡し、少し寂しげに言う。

「島田くん、もう舞鶴に戻ってしまうのかね。もう少し残ってくれば調査も楽になるのだが」

「それについては心配ご無用です。吉川さんとホーエルに全て託しましたから」

島田は鎮守府近辺の眼鏡店で調達した真新しい眼鏡を、クイツと持ち上げて、笑みを浮かべ言った。

この一週間、島田とクラクストンはゼヴィンたちのことについて調査と追及に追われていた。

Yamatoを撃破した後、島田たちは横須賀鎮守府へと戻り、大原やシャーリー、それに倉竹達とも合流。ついでに鎮守府の中にいた岩国とも合流し、フルメンバーが揃った……のまでは良かったのだが、今までの横須賀にとつて将来の希望株であったゼヴィンを島田が打ちのめした噂も短時間で急速に広まり、それに伴いゼヴィンの正体についてもしつかりと認知されていた。島田は噂の広がり具合にかなり驚いたものの、これで深海軍サイドの仲間である人間が探しやすくなったのは悪くないと思っていた。

この一週間で暫定的に決まっているのは、ジュツサーノの処分、スミスと岸尾の処分、ゼヴィンは投獄であった。

ジュツサーノはゼヴィンの悪事を知りながらそれに加担してしまったこと、クラクストンたちに多大な被害を与えてしまったことが大きく、横須賀鎮守府から所属を外れ、監視付きで別の小さな泊地へと回されることになった。本来なら戦艦少女としての権利を剥奪し、普通の少女として更生させることになる筈だったが、彼女の直接の被害者であるクラクストンやデンバーの采配により、泊地への左遷へと済んだ。監視者については横須賀で大丈夫そうな提督を一人、選定する予定だが——その候補がどこまで減るのか考えると、島田は頭が痛くなった。

スミスと岸尾はゼヴィンに脅されていた証拠がゼヴィンの部屋から出てきた為、その時点で処分は非常に軽いものになった。岸尾に関しては今までの実績を取り上げ、佐世

保で一からやり直すこと。ミスはそんな彼のサポートを引き続き引き受ける。そんな感じの条件であった。岸尾は提督を辞めるかどうか悩んでいたものの、この様子では当分辞められそうにないと、暫定処分を聞いた時に苦笑しながら言っていた。

そして、この一週間でかなり変わったのは岸尾だった。ゼヴィンの件がひと段落つき、父親の居場所についても捜査が進むということ、かなり心に余裕が出来たのだろう。前には見せなかったような表情を見せてくれるようになったし、瞳にも光が差し込み始めていた。ミスも「今の司令ならすぐ実績を戻せます」と断言出来るほどだ。この処分、今の彼にとっては丁度いい機会になるであろう。

肝心な当のゼヴィンのだが——島田は彼のことを思い出すなり、「ハア」と息を吐きながら、岩国に質問した。

「ゼヴィンの奴はどうしてます?」

「ああ、相変わらず島田くんが悪いの一点張りだよ。証拠が次々と出てきてるし、吉川くんの調査も大体ゼヴィンくんに非があるから、言い逃れ出来ないのだがね」

「やっぱりそうですか」

（思ったより馬鹿なんだろうな、アイツ……）

我ながら酷いことを思ってしまうが、と、島田は額に手を当てた。

ゼヴィンは今まで不正で得た味方しかいなかったのと、Yamatō中心に深海軍に

よる強い護りがあつた為、今まで笑つてこられた。しかし、今になってその化けの皮が剥がれ、正体が鎮守府全土に明らかになつた途端、彼を取り巻く環境は一変した。

事情を知らずに彼を持ち上げていた提督たちが石を投げてくるようになり、艦船たちからも冷ややかな目で見られ、味方は完全にいなくなつた。今でもゼヴィンを信じ切つている提督たちも炙り出されている分だけ投獄され、とてもじゃ無いが勝ち目はどこにもない。

彼と彼を取り巻く提督たちの処分はこれから決まつていくが、彼らを処分してもまだ出てくるだろうし、本当に果てしない道のりになりそうだ。

岩国は言葉が続ける。

「島田くん。君にはちゃんと少年提督らしい日常を過ごして欲しかったが、そういうわけにもいなくなつてしまった。……私の言っている意味が分かるかね？」

「はい」

その質問に、島田は頷いた。

「でも、元から少年らしく過ごすつもりもありませんでした。ゼヴィンに目を付けられた時点で、それは厳しいものだと思つてます」

「島田くん……何度も確認するが、本当に良いのかい？」
と、

「これから君が踏み入れようとしているのは、提督たちにとつての深い深い闇だ。これまで隠されていたものが出てくるし、もしかしたら、舞鶴からもそれが出てくるかもしれない。私は少年である君に、それらを背負って欲しくないと思う。いや、私だけじゃなく、倉竹くんたちも思っていることだろう。それでも君は……」

「元より覚悟の上です」

島田ははつきりと、言い放った。

「これらを放置してしまつたら、絶対後悔する直面に会はずだらうし、僕はそうなりたくない。それに、二度と僕や長束さんみたく、周りの勝手な理由で迫害される少年提督が増えて欲しくない。向こうがこちらの芽を潰し、弱体化を図るのであれば、こちらは意地でもその芽を護り、強化を目指したいです」

「……考えは固まっているようだね」

岩国は笑みを浮かべ、

「私もこれまで踏み入れることができなかったが、今回の件でやつと踏み込むことが出来るようになった。今すぐには行かないが、せめて君たちが大人になるまでには、横須賀の性質を正したいと思っている」

と、

「今まで君はずつと誰にも頼らず一人で解決しようとしてみていただろう。だが、今は

我々が解決を試みる番。君の番はその後だ」

「で、でも……」

「まず、君には、近くの大人に相談することから始めてくれないとだな。……倉竹くんたちもそう思うだろう？」

「えっ?」

「あら?」

今まで黙って話を聞いていたクラクストンも、岩国のその発言に違和感を覚え、岩国が目を向けた方向へと顔を向けた。

途端、部屋の扉が開いて、

「あはは、気付かれましたか。こちらも一通り準備を終えたので、島田くんを訪ねようかと思ったのですが、取り込み中だったようなので」

「岩国さん勤が良いなあ。この人が味方なの不幸中の幸じゃね?」

「ぬ、盗み聞きするつもりは無かったです」

——倉竹、大原、シャーリーが部屋の中へと訪れてきた。

島田は3人の姿を見るなりクラクストンと共に立ち上がり、歩み寄った。

「いつものメンツ……って思ったけど、岸尾くんは? まだ横須賀に?」

「処分が確定するまで横須賀決定だよ。今も監視付きでミスと勾留されてっから、

こつちと顔を合わせる事が出来るのは処分確定した後だろ」

「そつか。最後に何か一言交わせればって思ったけど、駄目かあ。クラクストンもミスと仲良くやってたし、お礼ぐらい言いたかったんだけど」

「そうですね……それに、2人の今後についても心配があります」

と、クラクストンは眉を下げ、

「スミスさん、岸尾さんと誓約できないことずつと気にしてましたから。岸尾さんが過去の件で遠慮してるのは分かってるんですけど、それでもスミスさんは誓約したい気持ちがあるらしくて」

「それについては大丈夫じゃないかな」

倉竹がスミスの心配をしているクラクストンに対し、笑みを浮かべた。

「岸尾くんも Y a m a t o が無理矢理父親を奪って、自分のお父さんに非が無い・被害者なの知ったし、ある程度柔軟に対応出来るようになってる筈だよ。それでも、島田くんみたく単婚者でいることは固く決意するだろうけどね」

「ぼ、僕のこととは良いんですよ、僕のこととは」

倉竹がこちらを見てクスクスと笑みを浮かべているのを感じた島田は、顔を真っ赤にしながらか倉竹にそう言った。シャーリーからも大原からも笑われ、島田は不機嫌になりつつ、クラクストンへと視線を移した。

「でも、本当にそうならスミスが浮かばれるし、それが一番だね。誓約システムは戦艦少女を縛るものじゃなくて、自分と相手の絆を深めるものだって、伝わってれば良いな」

「はい、私もそう思います」

クラクストンは笑顔を浮かべ、島田の言葉に強く同意した。

クラクストンや島田にとつての誓約は、お互いの絆を強固にするためのものであると考えており、それはスミスと岸尾のコンビにも適応されると思っていた。流石に自分とクラクストンの例は特殊ではあるものの、彼らも1年以上一緒に過ごしてきた男女だ。何があつても、誓約はプラスになると思われる。

そして、島田はシャーリーと大原に目を向けた。

「で、お前らはこれから舞鶴に一旦戻るのか？ 大原は直ぐ大阪に戻るの確定だったよな？」

「ゼヴィンの坊ちゃんが付いた以上、ジェルジンスキーと俺が舞鶴にいる理由はねえからな。ここからは倉竹さんと頑張ってくれや」

「ああ、ありがとう。でもシャーリーはどうするんだ？ 表面上とは言い、横須賀辞めたんだろ？」

そう、シャーリーは吉川經由で横須賀に退職届を出しており、受理されたと聞いている。となれば、彼に関しては舞鶴に残るのが賢明だろうし、横須賀に戻る理由もないの

だが——シャーリーは続ける。

「えつとさ、これから新設の小さい鎮守府作られることが決まったじゃない？」

「ああ、来年度に3つぐらい増えるんだっけ」

ゼヴィンの件が片付いたことにより、内部からそういう動きが出てきたのである。大きな箇所集中させるよりも、上手く分散して日本の各地を見回れるようにしようということで、確保できそうな場所が3箇所ほど。減る可能性や増える可能性もあるが。

「でね」と、シャーリーは言い、

「ボク、そのうちの一つに着任しようと思つてさ。舞鶴に居続けるのも良いんだけど、それはボクの望みじゃないし」

「ほ、本当か……お前がそこまで言うなんてよく決断したな」

「シャーリー……本気なのかあ……」

シャーリーのこの決断には、島田も大原も吃驚。普段おとなしい彼がここまではっきり言うことに、各々戦慄を覚えているようだ。

シャーリーは大原と島田のリアクションに笑った。

「あはは、ボクだつて決断する時は決断するよ。だから、着任が決まるまでは舞鶴で勉強しようかなつて思つて。應瑞ちゃんも一緒に来てくれるしね」

「そつか。まあ、お前ならきつと大丈夫だよ。勉強で分らないところは倉竹さんか僕

に聞いてくれ。すぐ解決すると思うからさ」

「うん、ありがとう。2人がいてくれるの、凄く心強いよ」

シャーリーはクスクスと笑い領いた。

倉竹はそろそろかな、と、腕時計を見つめて、岩国に言った。

「じゃあ、俺たちはこれで失礼します。何かあったら連絡してください」

「ああ、ありがとう。島田くんたちも元気で」

「はい！ ありがとうございました！」

——そうして、倉竹率いる少年提督達は舞鶴へと戻る次第となった。

067：雲となり、雨となる

——その日の夜、島田たちは一週間ぶりに舞鶴鎮守府へと足を運んだ。

島田はクラクストンと部屋に入るなり、久々に目にする事になった自分達の部屋に感激しながら、部屋のベッドへと勢いよく飛び込んだ。そして枕に顔を埋めて、顔を輝かせた。

「あー……懐かしいなあ、この部屋。横須賀のベッドも悪くなかったけど、いつものベッドが一番だよ」

「もう、司令官様だったら、一週間ぶりだからってはおちやけ過ぎですよ？　気持ちはずかしくすけど」

クラクストンはクスクスと笑みを浮かべながら、ベッドの上に寝転んでいる島田を見た。

普段は見る事がない彼の幼い一面に、クラクストンは思わず微笑ましく戻ってしまふ。多分、彼の記憶が戻ってきたことで、島田の内面も年相応のものへと戻ったのだろう。しかし、物事考え方については据え置きである点から、クラクストンに対して素を出せるようになったと言った方が正しいのかもしれない。

「ああ、でも」と、島田は思い出したように起き上がって、クラクストンが使っていたダブルベッドへと目を向けた。

「今日から向こうで寝なきやいけないから、このベッドともおさらばしなきやいけないのか」

「……向こうで?」

クラクストンはキョトンとしながら、島田を見た。

島田は続ける。

「だって、僕の記憶戻ったってことは、君からの誘いとか拒否する理由無くなったじゃないか。君もそのつもりでダブルベッド用意してたわけだし」

「あ……あつ、ああつ!」

クラクストンは何故この部屋にダブルベッドがあるのか思い出して、激しく赤面した。

そうだ、すっかり忘れていた。あのダブルベッドは自分で用意した上に、島田と一緒に寝るためのものだった。とはいえ、今の島田と一緒に寝たらこちらが誘うどころか、そのまま食べられてもおかしくない状況な気がしてならない。本当に彼にとつての障害物が記憶喪失であることなら、これからの日常がクラクストンにとつて濃密なものになるのは間違いないだろう。島田にとつては空白の7年間を埋めるためのものかもし

れないが。

クラクストーンが恥ずかしがっている中、島田はベッドから降りると、そんな彼女の頭を撫でた。

「嫌なら嫌で良いけど、ここまで包囲網張ったのはクラクストーンだからね。相応の覚悟はしてるよね？」

「あ、う……は、はい……」

クラクストーンは顔を真っ赤にして頷きつつ、自分のしてきたことがここにきて裏目に出てしまったような気がした。彼にもう一度振り向いてもらいたい一心で、クラクストーンなりにアタックしてきたつもりだったが、記憶が戻り本当の彼が戻ってきた途端、すぐこれだ。この日を待ち兼ねていたはずなのに、クラクストーンは恥ずかしくて仕方ない。

島田はクラクストンの頭から自分の手を離した。

「先にお風呂入ってくると良いよ。僕はもう少しここで休んでるからさ」
「……一緒に入ったりしないんですか？」

「風呂を一緒につてことかい？」

「あ、はい……その、雰囲気を大切にしたいというか……」

（前は司令官様が入っているとところに突撃したのに……今は逆に緊張する）

クラクストンは島田の服の袖を掴み、頷いた。自分の変わりように我ながら吃驚して、どうにもこうにも脳内で処理が追いつかない。

島田は彼女のそんな様子を見て、「うん」と頷いた。

「分かったよ。そんな風にお願ひされたら断れないね」

「司令官様……」

「でも一週間誰もいなかったし、シャワーだけになっちゃいそうだなあ。お湯、張る？」

「……いえ、シャワーだけで良いです」

「そうかい？　じゃあ、準備して入ろうか。僕も下着とかいろいろ持って行くよ」

「分かりました。私もタオルとか用意しますね」

そうしてそれぞれ風呂への準備に入り、衣服やタオルをいつもの筆筒や場所から引っぱり出している中で、島田はクラクストンに悟られないように、「ふひひ」と笑ってみせた。

（記憶が戻ってもクラたんハスハス教は辞めないどころか加速するんだよな！　あゝ、クラたん超可愛い！）

——記憶が戻り、彼のそうだった一面も落ち着いたかと思えばそんなことは無く、むしろ悪化の一途を辿っていた。

島田は自分の下着を筆筒から取り出しながら、これから自分がクラクストンとしよう

としている事に妄想を巡らせた。

(今日の夜はクラたんの全身堪能して今までの分しっかり愛してあげなきゃね……フヒツ……)

そして、何より、

(一週間頑張ったご褒美がこれだもんなく！　いつもは写真や妄想で済ませてるけど、今日はクラたん本体丸ごと！)

一週間横須賀にいたせいで遠慮しがちになってしまったり、そもそもイチヤつく余裕すらなかったせいで、島田はすっかり溜め込んでいた。しかし、今日でそれともおさらばである。

島田はタオルその他諸々を腕の中に抱え、立ち上がった。

(さあ、クラたんとレッツお風呂！　シャワーだけでもこういうのはとても大事！)

と——まあ、そんな島田を風呂で待ち構えていたのは、タオルを体で覆っていない、生まれたままの姿を晒しているクラクストンだった。

クラクストンは島田が来るなり豊満な胸元や股間など大事なところは腕で隠しつつ、風呂の扉を開いた島田の方を見た。

「司令官様、来たんですね。こっち来て下さい、早くシャワー浴びましょう？」

「あ、ああ……うん……」

（相変わらず目のやり場に困る体型だな……僕じゃなかったらとつくに手を出されてるよな、彼女……）

あくまでもそれは駆逐艦にしては、の話であるが、駆逐艦は小柄で体型も相応に発育していない戦艦少女も多い。ドイツ艦であるZ系駆逐艦みたく、改造したら成長するパターンも多く見られるが、大半は発見時や建造時は幼い少女の姿だ。しかし、クラクストンたち一部の駆逐艦は発育もよく、そういった戦艦少女たちは良くない提督にも狙われやすい。

島田はクラクストンの側に来るなり、自分がこれから彼女にしようとしている一連の事について、若干冷静になってしまった。

（すっかり浮かれてたけど、クラクストンにとっちゃ大事な事なんだよな。そこで僕が変なことしちゃったら、被害が行くのは彼女だ。冷静……になったらダメだけど、理性だけは飛ばしちゃうダメだ）

それに理性が飛んでしまったら、島田の気持ち悪いところが全面に出てしまうわけで、それだけは避けなければならぬ事態だった。

——まあ、それはこの先、しっかりと暴露してしまうわけなのだが、それはまた別の機会に。

そして、

「司令官様」

クラクストンは島田の胸元に手を置いたかと思うと、そのまま彼へ抱き着いた。クラクストンの柔らかな胸元や全身が島田の前面に当てられて、島田は思わず唾を飲み込んでしまった。

クラクストンは島田に抱き着きながら、いつもの甘い声で漏らした。

「私、本当に嬉しいんです。司令官様の記憶が戻って、指輪も戻って……私たち、結ばれて良いんだって思ってたんです」

「クラクストン」

「だから、今日は私の全部……司令官様に見てもらいたいです」

クラクストンは島田から一旦離れて、包み隠さない自分の裸体を彼の目の前に晒した。

「司令官様……今日は私の体にあなたの事を教えて下さい。あなたとまた出会った時から、覚悟は出てます」

「……本当に大丈夫なのかい？ 聞くまでもないんだろうけど」

「はい」

クラクストンは小さく笑みを浮かべ、頷く。

「司令官様も我慢しなくて大丈夫ですから。満足するまで、私のことを感じて下さい」
「……君がそう言うのなら、そうするよ」

そして、ふたりは再び抱き合った。

シャワーを浴びて、ベッドに戻って、暗がりの部屋でふたりの姿が重なり合う。

この部屋を灯しているのは、ベッドの近くに置かれているスタンドライトのみ。少しオレンジがかかって光り、薄ぼんやりとした部屋の雰囲気をも更に強調していた。

二人が重なり合っている時は、時間がいつも以上に早く駆け抜ける。

でも、お互いはお互いに夢中で、すっかり夜が更けているのにも気が付かない。

そして、7年分の蓄積が吐き出され、受け入れられていく。

クラクストンは泣きながら島田に必死にしがみ付き、島田もまた、そんな彼女を優しく抱き締めた。クラクストンが今泣いているのは、行為から伴う痛みからだとか、そういう理由じゃない。

——自分を離さないで欲しい。

ただ、それだけ。

クラクストンが一番怖かったのは、島田が自分の元から離れてしまうことだった。ここで島田を感じられなくなったら、自分はまたひとりになってしまふんじゃないかと、

不安で胸がいつぱいだった。

無論、島田は彼女を離す気は微塵もなかった。ただ、7年間の蓄積が彼女をそうさせてしまったのかと思うと、自分が何を言っても彼女の不安は拭えないだろうと——彼女を抱くことしか出来なかった。

島田はクラクストンを抱きながら、どうすれば彼女が安心出来るのか、どうしたら彼女が泣かなくなるかとか、そんなことばかり気にしていた。同時に過ぎてしまったことを悔やみ、昔の自分の不甲斐なさを責めていた。

時間は過ぎ、時計の針はとうとう午前0時を差した。

(クラクストンにとつて、7年間の空白は僕の想像を絶するものなんだろう。ずっと当時のことを覚えていて、忘れられなくて……時間が解決するしか無いのか、結局)

島田は洗面所で歯を磨き、暗がりな部屋の中で鏡の中に映し出される自分の顔を見ると、折角彼女と繋がれたというのに、どこか浮かない表情をしていた。

クラクストンの方は行為が終わった瞬間、緊張の糸が解けたようにぐつすり眠りにつき、島田は当分起きそうにないと判断し、ゆつくりと抜け出して洗面所に来た。そして、彼は歯を磨くだけじゃなくて、一人で考える時間が欲しかった。

(始める前は「クラたんとかスケベするぞー!」とか考えてたのになあ。これが俗にいう賢

者タイム……いや、僕の場合、ずっと纏わりついて来るんだらうな)

島田は鏡に自分の額を当てて、視線を落とした。

妄想の中でなら幾らでも彼女を可愛がってやれるが、現実には可愛がってほしいなんて甘いものじゃなかった。彼女が島田に求めているのは、空白の7年間を埋められるだけの濃いものだ。しかも、それを埋められるのは島田自身にしか出来ないことであり、クラクストン一人で埋めるのは不可能だ。そして、行為を始めたことで普段出ないものが出てきて、クラクストンの中の何かが崩壊したのだろう。表では気丈に振る舞い、島田の秘書艦らしく強かに構えている彼女の辛い気持ちが見えた気がした。

島田は使っていた歯ブラシを洗い終えて、コップと共に元あつた場所に戻すと、部屋のダブルベッドへと向かった。

クラクストンは島田がベッドに戻って来ると同時に、半目で起きた。彼女は島田の腕に触れながら、ボウツとした表情で彼を見ていた。

「んん……司令官様？ どうしたんですか？」

「ごめん、起こしちゃった？ 歯を磨きに行ってたただけだよ」

「そうですか……なら良いです」

クラクストンは島田に頭を撫でられながら、コクンと頷く。一方で島田は布団の中へと潜り込み、クラクストンの方へと視線を向けた。

クラクストンはぼんやりとした中で、彼が自分のように横になつたのを確認すると、そのまま島田へと抱き着いた。クラクストンの柔らかな胸や四肢が次々と島田の体に纏わり付く。

島田はその感触に反応しないように目線をあちらこちらへと動かしつつ、彼女をギュツと抱き締めた。

クラクストンは彼の温もりに安心感を覚えながら、すりすりとして彼の首元に頬を擦り付けてきた。そして、クスツと笑みを浮かべた。

「司令官様だったら、また反応してますよ。さっきまでやってたのに」

「ぐっ……」

島田はどうにもこうにも誤魔化せない彼女への劣情に、言葉を詰まらせた。

「いや、まあ……そんな風に押し付けられたらそうなるさ……。僕だつてこれから寝ようとしてたし、続ける気は微塵も起きないけど」

「ふふ、私も続けろとは言いませんよ。司令官様がそうしたいなら付き合いますけど」と、

「司令官様、明日はお休みですけどどうしますか？ 色々片付けなきやいけない中、無理やり分取つて来たんですよね」

「うん。横須賀からこつちに帰つて来たのも、かなり無理矢理だったしね。来週からま

た向こうに行こうかなって思ってるけど……明日か」

島田はそう言うと、徐ろに彼女の頭を撫でた。

「折角クラクストンと二人になれそうだし、適当に近くに買い出しに行くのもありなんじゃないかな。それか鎮守府の書庫室で何か漁るとか」

「書庫室ですか……何か面白いもの出てくれば良いんですけどね」

「ま、面白い蔵書の大半は横須賀に持ってかれてるしなあ。掘り出し物があれば万々歳って感じだ」

島田はクスツと笑みを浮かべて、欠伸をした。

「ふあ……じゃ、お休みクラクストン。また明日からもよろしくね」

「はい。お休みなさい、司令官様……」

そうしてお互い挨拶すると、二人は同時に眠りについた。

068：何度でも、立ち上がる

時は流れ、秋になった。ほんのりと涼しい風が、各鎮守府へと流れる。

島田とクラクストンは朝8時台の横須賀鎮守府の港で、イタリアの軍港へ向かった船を見送っていた。その横にはイタリアの軍港に所属している証の制服を着ている長束と、そんな彼の秘書艦であるデンバーの姿があった。

島田は長束へと質問した。

「長束さんも行かなくて良かったんですか？ 本拠地向こうなんでしょ？」

「いや、ワシはもう少し調べなきゃいけないことが横須賀……いや、日本にあるんじゃない。なんで、明後日には飛行機で向こうに戻るかのう」

「深海軍の件とはまた別になるけど、これが解決したら、世界は平和に一步近付くと司令と共に思ってる。島田司令もそれを分かかって、『手伝いに向かわせた』……んでしょ？」

「……まあね」

島田はデンバーの言葉に頷いて、姿が見えなくなりつつある船へと目を向けた。

島田にとって少し想定外の件ではあったものの、「彼」ならば、きつとイタリアでやり

遂げてくれるだろうと——そう信じて、向こうへと送り込んだのである。

「アイツ、僕のことには悪く言うけど、根はいい奴なんでお願ひしますよ長束さん。単純ではあるけどよく動いてくれますしね」

「うん、向こうに戻ったらよろしくやるけえなあ。話した感じ、向こうで馴染む性格と見た。ま、大丈夫じゃろ」

長束がクスクスと笑いながら島田の言葉に了承していると、島田に向けて女性の声が掛かった。

「島田さん。ここに居ましたか」

「有明さん、おはようございます」

女性・有明は島田のその返事に「おはようございます」と笑みを浮かべて返すと、彼へと言葉を続けた。

「島田さん、そろそろ準備の方お願いしますね。本日の朝礼、島田さんから発表しなきゃいけないんですから」

「あー、そろそろ時間か……行くか、クラクストン」

「はい、司令官様っ」

そうして島田は有明の方へとついていき、長束とデンバーのペアとはその場で離れた。

有明は横須賀の朝礼会場までふたりを引き連れている間に、倉竹についてポロツと漏らした。

「その……私、しばらくこつちに居て舞鶴に来てないんですけど、倉竹さん元気になりますか？」

「はい、いつも普通に仕事してますよ。それがどうかしたんですか？」

「い、いえ、少し気になっただけです」

と、

「実は、私が呉に移動したあと、倉竹さん側の上から接触禁止命令出てたのが発覚してまして……私からも解除してほしいとお願いしたんですけど、なかなか……」

「接触禁止命令……いや、うん、当時の倉竹さんの話を聞いていると納得だな……」

島田は有明からその話を聞いて、思わず納得してしまった。

特定の戦艦少女に付き纏う提督は意外と珍しくないようで、倉竹以外にも接触禁止命令が出ているのは吉川からも聞いたことがある。その内容は、提督側から特定の戦艦少女に対する詮索や手紙等の連絡の一切を禁ずるというものであり、それ以上何かあれば今度は警察の力が必要になる。ただ、禁止されているのは提督側からの接触のみなため、理論上有明から倉竹に連絡も出来なくない。しかし、それは命令に対して背くことでもあり、本気で連絡を取るならば命令の解除を求めなければならぬ。

島田は溜息を吐きながら、続ける。

「舞鶴に来ちやったのも本当に事故みたいなもんですからね。そこは何もお咎め無しですか？」

「そうですね、特には。でも、このままだと彼と誓約も出来ないし、根気強く上を説得するしか……」

「被害者側から懇願するのは、加害者側の脅しがあるので上も下手に許可できないんですよ。でも、有明さんがそう思っているなら、上だつてそのうち理解してくれますよ」

「はい……だと良いんですけど」

有明は「ふう」と息を吐いて、頷く。

島田とクラクストン自身、最初はこの二人についてどうなるかと思っていたが、思ったより丸く収まりそうで若干ホツとしていた。とはいえ、乗り越えなきやいけない壁はあるようで、倉竹も過去のことはどうにか清算しつつ、実績を重ねていくしかないようなのだ。けれども、今の倉竹なら近いうちに有明を迎えに来れるかもしれない——島田とクラクストンはそう思っていた。

有明は横須賀の朝礼会場へと着くと、その中への入っていく、島田たちを待機場に案内した。

「それじゃあ、私はこれで。番が来たら呼ばれるので、それまで大人しくしてて下さいね？」

「はい、ありがとうございます」

有明がそこから離れると、周りは横須賀の制服を着ている青年たちが集まっており、一人だけ幼い少年である島田は少し肩身が狭かった。

そして、朝礼というからには席には横須賀鎮守府内の提督も集まってるわけなのだが——本当に人数が多い。舞台袖から見える人数だけでも、島田は緊張して頭を抱えた。

「うー、本当に大丈夫かなあ……こんなところで失敗したら、そのイメージが付き纏うぞ」

「うふふ、司令官様なら大丈夫ですよ。それとも緊張しないおまじない、掛けましょうか？」

「おまじない？」

「はい。えーつとですね……こうして、こう……ですね」

クラクストンは笑みを浮かべると、島田の顔を自分のところへと引き寄せて、彼の頬に自分の唇を重ねた。

クラクストンは顔を真っ赤にして嬉しそうに笑みを浮かべながら、彼から離れた。

「えへへ、緊張解れましたか？」

「あ、ああ……それなりに」

島田も顔を真っ赤にして、キスされた方の頬を手で押さえた。あまりにもいきなりすぎた為、島田は不意を突かれたような気分になってしまった。

ふたりがそうこうしているうちに、朝礼は始まり、時間が流れていく。

島田の番になり呼ばれると、彼は舞台へと向かっていった。

本日彼が横須賀の提督たちに表明することは、自分が少年提督たちを引っ張るために体制を整え直すこと、そして、少年たちの着任の基準や、彼らを守るための規則の改訂など——言うべきことが非常に多い。

というのも、これらの提案、全て島田の口から出てきたものであり、彼はその責任者として、今、提督たちの前に立っている。

島田は壇上に踏み入れて、前を見据えた。

滅多にこの場に立つことがない少年提督の存在に、ここにいる提督たちが全員注目を向けている。

島田は原稿をチラッと見たが、原稿をそのままなぞるだけでは緊張したままであると、その原稿は敢えて閉じた。

そして、マイクのスイッチを入れて、彼は口を開いた。

『皆さん初めまして。舞鶴鎮守府所属の島田です』

(ここまで短かったようで長かったなあ)

島田は原稿に書いてあることは念頭に置きつつ、提督たちに向けて挨拶し始めた。

(ここまで来た以上、絶対に負けない。今回のことだって、妙な妨害もあつたし、今後もきつとそういうことがある)

でも、

(クラクストーンが……みんながいてくれるんだ。何度でも立ち上がって、全力で立ち向かうさ)

島田は壇上から自分を見守っているクラクストーンへと視線を向けた。クラクストーンはクスツと小さく笑みを浮かべて頷き、島田もそれに微笑み返した。

島田は改めて前を向き、続けた。

『これより、我々少年提督たちに関する規則や待遇の改善・改訂について、説明させていただきます』

— F i n e .